

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

BL 1411 T8J3 1927 v.16
Tripitaka. Japanese. 1927
Kokuyaku daizokyo

East Asia

國譯大藏經

論部

第二巻

BL
1411
T8J3
1927
v.16

LIBRARY
DEC 16 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

目次

卷の第二十三

卷の第二十四

巻の第三十一

卷の第三十二

卷の第三十六……………………………………四八九—五二四

卷の第三十七

以　上

國譯大智度論

卷の第二十二

初品の中の八念の下を釋す。

(一)念法とは佛の演説したまへるが如し。行者應に念ずべし、「是の法は巧出なり、今世の果を得て熱惱なく、時を待たずして能く善處に到り、通達無礙なり」と。

(二)巧出とは二諦に相違せざるが故なり、所謂世諦と第一義諦となり。是れ智者も壞すると能はず、愚者も諍を起さず。故に是の法も亦二邊を離る。所謂若くは五欲の樂を受け、若くは苦行を受くるも、復二邊を離る。若くは常、若くは斷、若くは我、若くは無我、若くは有、若くは無、是の如き等の二邊に著せざる、是を巧出と名く。諸の外道の輩は自ら其法を貴んで、他の法を毀賤するが故に巧出なること能はず。今世の果を得とは、愛の因緣、世間の種種の苦を離れ、邪見の因緣、種種の論議闘諍を離れて、身心安樂なることを得るなり。佛の説きたまへるが如し。

『持戒の者は安樂にして、身心熱惱せず、臥するも安く、覺むるも亦安く、名聲も亦遠く聞ゆ。』

【一】法を念ずる者は今世の報を得て熱惱なし。

【二】巧出の意義。

復次に、(三)此佛法の中にては、因縁展轉して果を生ず、所謂持戒清淨なるが故に、心に悔いず、心に悔いざるが故に、法歡喜を生じ、法歡喜の故に身心快樂なり。身心快樂なるが故に、能く心を攝し、心を攝するが故に如實に知り、如實に知るが故に厭ふことを得。厭ふことを得るが故に欲を離れ、欲を離るるが故に解脱を得、解脱の果報を得るが故に涅槃を得。是を今世の果を得と名く。外道の法は空しく苦を行じて所得なし。(四)閻浮阿羅漢の道を得る時、自ら說けるが如し。

『我昔外道と作り、五十有五年、但乾牛屎を食し、裸形にして棘上に臥せり。』

「我は是の如きの辛苦を受けたれども竟に所得なし、今佛を見たてまつり法を聞くことを得て、出家して(五)三日にして所作の事を辦じ、阿羅漢を得るには如かず」と。是を以ての故に佛法は今世の果を得ることを知る。

問うて曰く、(六)若し佛法は今世の果を得ば、何を以ての故に佛の諸の弟子に所得なき者あるや。答へて曰く、行者能く佛の所說の如く、次第に修行せば報を得ざること無し。病人の良醫の敎に隨つて、和治の法を將ゆれば病の差えざること無きが如し。若し佛の敎に隨はず次第に行せず、破戒亂心の故に所得なきは、法の不良なるには非ざるなり。復次に、諸の未だ道を得ざる者は、今世に涅槃を得ずと雖も、後世に福樂を受くることを得、漸次に當に涅槃を得べく、終に虛しからざるなり。佛の說きたまふ所の如し、「其

【三】「今世の果を得」の意義。
【四】閻浮阿羅漢(Jambu-Arhat)。道を得る時の偈。
【五】元本、明本倶に三月に作れり。
【六】第一問、若し佛法は今世の果を得ば、佛弟子中に所得なき者あり、理由如何。

れ出家ありて涅槃の爲にする者は、若くは遲く若くは疾く、皆當に涅槃を得べし」と。是の如き等は能く今世の果を得るなり。(七)熱惱無しとは、(八)熱惱に二種あり、身惱と心惱となり。身惱とは繫縛・牢獄・拷掠・刑戮等にして、心惱とは婬欲・瞋恚・慳貪・嫉妬の因緣の故に憂愁、怖畏等を生ずるなり。此佛法の中には持戒淸淨なるが故に、身に是の繫縛・牢獄・拷掠・刑戮等の惱なく、心は五欲を離れ五蓋を除き實道を得るが故に、是の婬欲・瞋恚・慳貪・嫉妬・邪疑等の惱なし、惱なきが故に熱なし。復次に無漏の禪定は喜樂を生じ、遍身に受くるが故に諸熱則ち除く。譬へば人の大に熱悶するも、淸涼池の中に入ることを得れば、冷然淸了として復熱惱なきが如し。復次に、諸の煩惱の、若くは見に屬し、若くは愛に屬する、是を熱と名く。佛法の中には此無きが故に熱惱無しと名く。(九)時を待たずとは、佛法は時を待たずして行じ、亦時を待たずして果を與ふ。外道の法は日未だ出でざる時は法を受け、日出づる時は法を受けず、或は日出づる時は受け、日未だ出でざれば受けざる有り。晝受けて夜受けざる有り、夜受けて晝受けざる有り。佛法の中には受くるに時を待つと無し、八聖道を修するに隨つて時に便ち涅槃を得。譬へば火の薪を得れば便ち燃ゆるが如く、無漏の智慧の生ずる時は、便ち能く諸の煩惱を燒いて時を待たざるなり。

問うて曰く、(一〇)佛の說きたまふが如くんば、時藥・時衣・時食あり。若し人善根未熟なれば、時を待

【七】無熱惱の意義。
【八】二種の熱惱――身惱と心惱。
【九】外道の法は時を待ち、佛法は時を待たず。
【一〇】第二問、佛說によれば時藥・時衣・時食あり。人もし善根未熟なれば、時を待つて得べきにあらずや。

つて當に得べし、何を以て時なしと言ふや。答へて曰く、此時は世俗の法に隨ふ、佛法の久しく住するが爲の故に時歲を結す。若し道を修するとを爲し、涅槃及び諸の禪定、智慧微妙の法を得れば時を待たざるなり。諸の外道の法は特時節を待ち、佛法は但因緣の具足を待つ。若し持戒禪定すと雖も、而も智慧未だ成就せざれば道を成ずると能はず。若し持戒・禪定・智慧皆成就すれば便ち果を得、復時を待たず。復次に、久久くして果を得るを名けて時と爲し、卽時に得るは時と名けず。譬へば（一）好染には一び入るれば便ち成ずるが如く、心淨き人も亦是の如し。法を聞いて卽ち染れば法眼淨きとを得、是を時を待たずと名く。（二）能く善處に到るとは、是の三十七の無漏の道法は能く人を將ゐて涅槃に到る。譬へば恒河に入れば必ず大海に至るを得るが如し。諸餘の外道の法は一切智人の所說に非ず、邪見を雜ふるが故に將ゐて惡處に至り、或は將ゐて天上に至り、還墮ちて苦を受く。皆無常なるが故に善處と名けず。

問うて曰く、（三）將ゐ去る者あること無し、云何ぞ將ゐて善處に至ることを得るや。答へて曰く、（四）將ゐ去る者なしと雖も、但諸法は能く諸法を將ゐ去る。無漏善は五衆を斷ず。五衆の中に强ひて衆生と名け、將ゐ去つて涅槃に入る。風の塵を吹くが如く、水の草を漂はすが如し。將ゐ去る者なしと雖

【一】心淨き人は法を聞いて卽ち法眼淨きことを得、好染には一たび入るれば、便ち成ずるが如し。

【二】佛法は能く善處に到り、外道の法は惡處に到る。

【三】第三問、將ゐて善處に到るといふ意義如何。

【四】佛法には將ゐ去る者なしと雖も、風の塵を吹き、水の草を漂はすが如く、自ら去ることあり。

も而も去ること有る可し。復次に、因緣の和合にして、作「者」あると無く、亦將ゐ去る者あること無し。而も果報は因緣に屬して自在を得ず、是を卽ち名けて去ると爲す。

（二五）通達無礙とは、佛の法印を得るが故に、通達無礙なり、王の印を得れば、則ち留難する所無きが如し。

問うて曰く、（二六）何等か是れ佛法の印なるや。答へて曰く、（二七）佛法の印に三種あり、一には一切有爲の法は念念に生滅して皆無常なり。二には一切法は無我なり、三には寂滅涅槃なり、行者は三界は皆これ有爲にして生滅することを知る。（二八）作法は先に有して、今は無、今は有にして後は無、念念生滅相續して相似に生ずるが故に、見知するとを得べし。流水・燈炎・長風の如く、相似て相續するが故に人なり。一衆生は無常法の中に於て（二九）常顚倒を爲すを以ての故に、去る者を常住と謂ふ。是を一切作法の無常印と名く。一切法無我とは、諸法は內に主なく作者なく、知なく見なく、生者なく、造業の者なし。一切の法は因緣に屬す。因緣に屬するが故に自在ならず、自在ならざるが故に無我なり、「そは」我相を得べからざるが故なり、破我品の中に說くが如し。是を無我印と名く。

問うて曰く、（三〇）何を以ての故に但作法は無常にして、一切法は無我なりと云ふや。答へて曰く、不

【二五】通達無礙の義解。
【二六】第四問、佛法の印とは何ぞや。
【二七】三法印の義解。
【二八】作法とは、因緣によりて作られたるものの義。
【二九】常顚倒とは、無常なるものを常住なりと思惟するを云ふ。
【三〇】第五問、作法は無常にして、一切法は無我なる理由如何。

作法は因なく緣なきが故に不生不滅なり。不生不滅なるが故に名けて無常と爲さず。復次に、不作法の中には、心著顚倒を生ぜず。是を以ての故に是を無常と說かず。說いて無我と言ふ可し。有人の說に、「神は是れ常にして遍知の相なり。是を以ての故に一切法の中、無我なりと說く」と。

〔三〕寂滅とは是れ涅槃なり。三毒、三衰の火滅するが故に、名けて寂滅の印と爲す。

問うて曰く、〔三〕寂滅印の中には何を以てか但一法のみにして多く說かざるや。答へて曰く、初印の中に五衆を說き、二印の中に一切法の皆無我なることを說き、第三印の中に二印の果を說く。是を寂滅印と名く。一切の作法無常なれば則ち我所の外の五欲等を破し、若し無我を說けば内の我法を破す。我と我所とを破するが故に、是を寂滅涅槃と名く。行者は作法の無常なることを觀じて便ち厭心を生じ、世苦を厭ふ。既に苦を厭ふことを知つて、著を存し、主と觀じて、「能く是の觀を作す」と謂ふ。是を以ての故に第二の法印ありて一切は無我なりと知り、五衆、十二入、十八界、十二因緣の中に於て、内外を分別し推求して、主の不可得なることを觀ず。不可得なるが故に、是の一切法は我作なし。是の如く知り已つて戯論を作さず、依止する所なく、但滅に歸す、是を以ての故に寂滅涅槃印を說く。

問うて曰く、〔三〕摩訶衍の中には、諸法は不生不滅にして、一相に所謂無相なりと說く、此の中には

【三】寂滅印の義如何。
【三】第六問、寂滅印中但一法のみにして、多くを說かざる理由如何。
【三】第七問、大乘にては諸法は不生不滅と說く、然るに今一切有爲の法は無常なりと說かば、此の兩說の矛盾は如何にして調和すべきか。

云何が一切有爲の作法は無常にして、名けて法印と爲すと說くや。二法は云何が相違せざるや。答へて曰く。(二四)無常を觀ずるは卽ち是れ空を觀ずるの因緣なり。色は念念に無常なりと觀ずるが如きは卽ち空と爲すことを知る。過去の色は壞滅して見る可らざるが故に色相なく、未來の色は生せず作なく用なく、見る可らざるが故に色相なく、現在の色も亦住すること無く、見る可らず、分別して知る可らざるが故に色相なし。色相なければ卽ち是れ空なり。空なれば卽ち是れ無生無滅なり。無生無滅及び生滅は、其の實是れ一說にして廣略あるのみ。

問うて曰く、(二五)過去未來の色は見る可らざるが故に色相なきも、現在の色は住する時は見る可し、云何ぞ色相なしと言ふや。答へて曰く、(二六)現在の色も亦住する時なし。四念處の中に說くが如し。若し法の後に壞相を見ば、當に初め生ずる時より壞相あることを知るべし。隨逐の微細なるを以ての故に識らざるのみ。人の屐を著くるが如きは、若し初日に新にして、故きこと有ること無ければ、後應に常に新なるべく、故きこと有るべからず。若し故きと無くんば是れ常なるべく、常なるが故に罪なく福なく。罪なく福なければ。則ち道俗の法亂る。復次に、生滅の相は常に作法に隨つて住する時あること無し、若し住する時あれば則ち生滅なし。是を以ての故に現在の色は住すること有ること無く、住の中にも亦生滅あり。「そは」是の一念の中の住も亦是れ有爲法なるが故なり。是を通達

【二四】觀無常は觀空の因緣なり。

【二五】第八問、現在の色に色相なしといふ理由如何。

【二六】現在の色も、亦住する時なし。

經藏と名く。是の如く應に法を念ずべし。復次に、法に二種あり。一には佛の演說したまふ所の三藏十二部・八萬四千の法聚なり。二には佛の說きたまふ所の法義、所謂持戒・禪定・智慧・八聖道及び解脫果・涅槃等なり。行者は先ず常に佛の演說したまふ所を念ずべく、次に常に法義を念ずべし。佛の演說したまふ所を念ずとは、佛語は美妙にして皆眞實なり、大饒益あり、佛の演說したまふ所は亦は深く亦は淺し。實相を觀ずるが故に深く、巧に說くが故に淺し。重語して失なく、各各義あるが故に佛の演說したまふ所は四處に住し、四種の功德莊嚴あり。一には慧處、二には諦處、三には捨處、四には滅處なり。【三七】四種の答あるが故に壞す可らず。一には定答、二には解答、三には反問答、四には置答なり。佛の演說したまふ所は、或時は聽いて遮し、或時は遮して聽き、或は聽いて遮せず、或は遮して聽かず。此の四は皆隨從して違ふこと無し。佛說は諸の法相を得んが故に戲論なく、義理あつて說くが故に有無の論を破る。佛の演說は第一義に隨順して世間の法を說くと雖も、亦著なし。二諦と相違せざるが故に利益に隨順して說き、清淨の人の中に於ては美妙と爲し、不淨人の中に於ては苦惡と爲すと。美語苦語の中に於ても亦過罪なし。佛法は皆善法に隨ふも、亦善法に著せず、是斯法は佛家なりと雖も、亦以て高ぶるとを爲さず、種種に訶する所ありと雖も、亦訶の罪あると無く、種種に法を讃ずと雖も亦依止する所なし。佛の言說の中には亦增なく減なく、或は略、或は廣なり。佛語は初め善にして久久に研求するも亦善なり。佛語は

【三七】四種の答。

多しと雖も義味薄からず、種種に雜語すと雖も義も亦亂れず。能く人心を引くと雖も亦人をして愛著を生ぜしめず、殊長高顯なりと雖も亦人をして畏難せしめず。遍ねく到る所ありと雖も、凡小の人は亦解する能はず。佛語は是の如く種種希有の事あつて、能く人の衣毛をして竪つことを爲し、流汗し、氣は身體に滿ちて戰懼せしめ、亦よく諸天をして心厭ひ、聲は十方に滿ち、六種に地を振はしめ、亦よく人をして、無始より世界に堅著する所の者をしては能く捨てしめ、堅著ならざる所の者には能く樂しましむ。佛語は罪惡の人、之を聞けば自ら罪あるが故に憂怖熱惱し、善く一心に精進して道に入る。人聞けば甘露味を服するが如く、初も亦好く中も亦好く、後も亦好し。

復次に、(二八)多くの會衆の中、各各聞く所あらんと欲するに、佛は一音を以て答へたまふに、各各解を得、各各自ら佛は獨り我が爲に說たまふと見る。(二九)大衆の中に於て遠近ありと雖も、聞く者には聲に增減なく、三千大千世界乃至十方無量の世界に滿ち、度すべき者は聞き、度すべからざる者は聞かず。譬へば雷霆地に震へども聾者は聽かず、聰者は悟り得るが如し。是の如く種種に佛の言語を念ず。何等か是れ法義なる。「謂く」信戒捨聞定慧等を道と爲す。諸の善法及び三法印は通達の中に說くが如し。一切有爲法は無常なり、一切法は無我なり、寂滅涅槃なり、是を佛法の義と名く。(三〇)是三印は一切の論議師も壞する能はざる所なり。種種に

【二八】佛は一音を以て答へたまふに、各各解を得ること異あり。
【二九】衆中には遠近あるも、佛音には增減なし。
【三〇】三法印は壞す可らず。

諍ふ所說ありと雖も、亦能く諸法の性を轉ずる者なし。冷相は能く轉じて熱からしむること無きが如し。諸法の性は壞す可らず。假使人をして能く虛空を傷けしむるも、是諸法印は如法にして壞す可らず。（三二）聖人は是三種の法相を知り、一切の諸見に依止して各關諍する處に於て離るることを得たまふ。譬へば有目の人の、群盲の種種に色相を諍ふを見て、愍んで之を笑ひ、與共に諍はざるが如し。

問うて曰く、（三三）佛は聲聞法には四種の實あり、摩訶衍の中には一實ありと說きたまふ。今何を以て三實を說くや。答へて曰く、（三四）佛は三種の實法印を說きたまふ。廣く說けば則ち四種、略して說けば則ち一種なり。無常は即ち是れ苦諦、集諦、道諦の說、無我は則ち一切法の說、寂滅涅槃は即ち是れ盡諦なり。復次に、有爲の法は無常にして、念念に生滅するが故に皆因緣に屬して、自在あること無し、自在あること無きが故に無我なり、無常・無我・無相なるが故に心著せず、無相にして著せざるが故に、即ち是れ寂滅涅槃なり。是を以ての故に摩訶衍の法の中に、一切の法は不生不滅にして、一相は所謂無相なりと說くと雖も、無相は即ち寂滅涅槃なり。是の念法三昧、緣智緣盡は、諸菩薩及び辟支佛の功德なり。

問うて曰く、（三五）何を以ての故に念佛には、但佛身中の無學の諸の功德を緣じ、念僧三昧には佛弟子

【三二】佛には諍ふ處なし、目ある者の諍はざるが如し。
【三三】第九問、小乘には四實ありと說き、大乘には一實と說く。今それ三實ありと說くは何故なるか。
【三四】四諦と三法印との關係。
【三五】第一〇問、念佛・念法・念僧の三種の三昧を區別する理由如何。

の身中の諸の學無學の法を緣じ、餘殘の善無漏の法を皆念法三昧の所緣と「爲すや」。答へて曰く、迦旃延尼子は是の如く說けり。「摩訶衍の人は說く、三世十方の諸佛及び諸佛の初發意より、乃至法盡まで、其中間の所作の功德神力に於て、皆是れ念佛三昧の所緣なり」と。佛の所說及び所說の法義の如くんば、「一句一偈より乃至八萬四千の法衆、信・戒・捨・聞・定・智慧等の、諸の善法乃至無餘涅槃は、皆是れ念法三昧の所緣なり。諸の菩薩辟支佛及び聲聞衆、佛を除いて餘殘の一切の聖衆及び諸の功德は、「是れ念僧三昧の所緣なり」。念僧とは是れ佛弟子衆の戒衆具足、禪定衆、智慧衆、解脫衆、解脫知見衆の具足なり。四雙八輩は應に供養、恭敬、禮事を受くべし、是れ世間無上の福田なり。行者は應に念ずべし、佛の讃じたまふ所の僧の如くんば、若くは聲聞僧、若くは辟支佛僧、若くは菩薩僧の功德、是れ聖僧なり。五衆の具足は上に說くが如し。

問うて曰く、(三五)先に已に五衆を以て佛を讃せり、云何が復た五衆を以て僧を讃するや。答へて曰はく、弟子の得る所の五衆に隨つて具足を讃す、(三六)具足に二種あり、一には實の具足、二には名の具足なり。弟子の應に得べき所の者を盡く得て讃ずるが如きは是れ名の具足なり、佛の得たまふ所を讃ずるが如きは、是れ實の具足なり。復次に、外道の出家衆、在家衆に異なることを爲さんと欲するが故に是の如きの讃を作す。外道の在家の衆は其の富貴・豪尊・勢力を讃じ、出家衆は其の邪見・苦行・染著・

【三五】第一一問、先に佛を讃するに五衆を以てし、今復た僧を讃するに五衆を以てする理由如何。

【三六】二種の具足——一には實の具足、二には名の具足。

智慧・討論・評讃を讃す。念佛の衆中に或は持戒・禪定・智慧等少くして稱するに足らざる有り。此を以ての故に佛は自ら弟子衆の一切功德の根本の住處たる戒衆の具足、乃至解脫知見衆の具足を讃したまふ。是の戒衆の中に住して傾動せず。禪定の弓を引いて智慧の箭を放ち、諸の煩惱の賊を破つて解脫を得。是の解脫の中に於て知見を生ず。譬へば健人の先づ足を安じて弓を挽き、箭を放つて能く怨敵を破し、二怖を出すことを得、罪を王に免れ、難を障に拔き、決了して知見し、賊は已に破滅して心に歡喜を生ずるが如し。是の故に五衆を以て讃す。供養すべしとは、（三七）五衆の功德を具足せるが故なり。富貴豪勢の人は人の宗敬する所なるが如く、佛弟子衆も亦是の如く、淨戒、禪定、智慧の財富み、解脫解脫知見の勢力を有するが故に供養・恭敬・合掌・禮事に應ず。世間無上の福田とは、（三八）施主に二種あり、「曰く」貧者と富者となり。貧者は禮事・恭敬・迎送して而も果報を得、富者も亦よく恭敬・禮事・迎送し、又財物を以て供養して而も果報を得。是の故に名けて世間無上の福田と爲す。（三九）譬へば良田は耕治し調柔し、時を以て種を下し、灌漑豐渥すれば獲る所必ず多きが如し。衆僧の福田も亦復た是の如く、智慧の犂を以て結使の根を耕出し、四無量心を以て磨治調柔し、諸の檀越、信施の種子を下し、灑ぐに念施、恭敬の清淨の心水を以てすれば、若くは今世、若くは後世に無量の世間の樂を得、及び三乘の果を得。（四〇）薄拘羅比丘の如きは、（四一）鞞婆尸佛の

【三七】五衆具足の故に、供養に應ず。
【三八】二種の施主。
【三九】衆僧を良田に譬ふ。
【四〇】薄拘羅（Vakkula）比丘の無病の因緣。
【四一】鞞婆尸（Vipassi）

時、一の(四一)阿梨勒果を以て衆僧に供養し、九十一劫〔の間〕、天上、人中に福樂の果を得、常に疾病なく、今釋迦牟尼佛に値ひたてまつり、出家し、漏を盡くして阿羅漢を得。沙門の(四二)二十億耳の如きは鞞婆尸佛の時、一の房舍を作り、物を以て地を覆ひて衆僧を供養し、九十一劫〔の間〕、福樂の果を得、足は地を蹈まず、生ずる時足の下の毛の長さ二寸、柔軟淨好なり。父、見て歡喜し二十億兩の金を與ふ。佛を見たてまつり法を聞いて阿羅漢を得、諸の弟子の中に於て精進第一なりき。是の如く少施は大果報を得。是の故に世間無上の福田と名く。僧中に四雙八輩ありとは、佛の世間無上の福田を說きたまふ所以は、此の八輩の聖人あるを以ての故に無上の福田と名くるなり。

問うて曰く、(四三)佛の給孤獨居士に告げたまふ如くんば、「世間の福田にして供養に應ずる者に二種あり。若くは學人、若くは無學人なり。學人に十八、無學人に九あり」と。今此の中に何を以ての故に但八を說くや。答へて曰く、彼は廣く說くが故に十八及び九なり、今此は略して說くが故に八なり。彼の二十七聖人は皆此の八に攝す。信行法行は或は向須陀洹に攝し、或は向斯陀含に攝し、或は向阿那含に攝す。(四四)家家は向斯陀含に攝し、一種は向阿那含に攝し、五阿

【四一】阿梨勒果(Haritaki.)

【四二】二十億耳(Śroṇakoṭiviṃśa)、衆僧供養の因緣。

【四三】第一二問、學人に十八、無學人に九あり、今但八聖のみを說く理由如何。

【四四】家家とは十八有學の一。一來向中にて極果を證する聖者なり。此に二種あり。一は三生家家、欲惑三品を斷じて既に四生を滅し、餘の六品卽ち三生を餘すもの。二は二生家家、欲惑四品を斷じて既に五生を滅し、餘の五品卽ち二生を餘すもの。此の聖者は三生又は二生の間、家より家に轉生して極果を證し、涅槃に入るが故に家家と云ふなり。

那含は向阿羅漢に攝し、信行法行の思惟道に入るを信解脫見得と名く。是の信解脫見得に十五の學人を攝し、九種の福田に阿羅漢を攝す。

復次に、行者は應に僧を念ずべし、僧は是れ我が涅槃に趣く眞の伴なり。一戒一見も是の如し、應に歡喜して一心に恭敬・順從して逆ふこと無かるべし。我は先に種種の衆惡・妻子・奴婢・人民等を伴とす。是れ三惡道に入るの伴なり。今聖人の伴を得、安隱にして涅槃に至る。異佛は醫王の如く、法は良藥の如く、僧は病を瞻る人の如し。我は當に清淨の持戒、正憶念を得べし。佛の說きたまふ所の法藥の如きは、我常に順從すべし。僧は是れ我が諸の結病を斷ずる中の一因緣なり。所謂病を瞻るの人なり、是の故に當に僧を念ずべし。復次に、僧には無量の戒・禪・定・智慧等ありて具足し、其の德は測量すべからず。一の富貴の長者の如きは僧を信樂し、僧の執事の人に白す、「我は次第に僧を請し、舍に於て食せしめん」と。日日に次請して、乃ち沙彌に至るに、執事は沙彌の請を受くることを聽さず。諸の沙彌の言く、「何の意を以ての故に沙彌を聽さざるや」と。答へて言く、「檀越は年少を請することを喜ばざるを以ての故なり」と。便ち偈を說いて言く、

『鬚髮白きこと雪の如く、齒は落ち、皮肉は皺み、僂步して形體羸せたる、是の如きの輩を請することを樂む。』

【異】佛は醫王、法は良藥、僧は看病人の如し。

諸の沙彌等は皆是れ大阿羅漢なり。師子の頭を打つが如く、欻然として坐より起ち、偈を說いて言く、

『檀越の無智の人は、形を見て德を取らず、是の少年の相を捨て但老い瘦せ黑みたるを取る。』

上尊の耆年の相は、佛の偈に說きたまへるが如し。

〔四七〕『所謂の長老の相は、必ずしも年耆に、形瘦せ、鬚髮白く、空しく老いて、內に德なきを以てせず。能く罪福の果を捨て、精進に梵行を行じ、已に一切の法を離れたる、是を名けて長老と爲す。』

【四七】長老の義解。

是の時、諸の沙彌は復た是の念を作さく、「我等は此の檀越の、僧の好惡を品量するを坐觀すべからず」と。卽ち復た偈を說く、

『讃歎呵罵の中に、我等の心は一なりと雖も、「いま」是の人は佛法を毀る。「我等」應に敎誨せざるべからず、當に疾く其の舍に到り、法を以て之に敎へ語るべし。我等「彼を」度せずんば、是れ則ち物を棄つると爲す。』

卽時に諸の沙彌は、自ら其身を變じて、皆老年と成り、鬚髮白きこと雪の如く、秀眉は垂れて眼を覆ひ、皮の皺は波浪の如く、其の脊は曲ること弓の如く、兩手杖に負はれて行き、次第に請を受け、身を擧げて皆振掉し、行止自ら安からざること、譬へば白楊樹の風に隨つて動搖するが如し。檀越は此

の僧を見て歡喜し、迎へ入れて坐せしむ。坐し已つて須臾の頃に、還た年少の形に復す。檀越は驚怖して言く、

『是の如きの耆老の相、還た變じて少身と成る、還年の藥を服するが如し、是の事は何に由つてか然るや。』

諸の耆舊は言く、汝輕賤を生ずること莫れ、我等は非人に非ず。汝は僧を平量せんと欲す、是の事は甚だ傷むべし。我等相憐愍するが故に是の如きの化を現す。汝は當に深く之を識るべし、聖衆を量るべからず。說くが如くんば、

『譬へば蚊の觜を以て、滄海底を測るべきが如く、一切の天と、人と、能く僧を量る者なし。僧の功德の貴きを以てすら、何有分別せず、而るに汝は年歲を以て、諸大德を稱量す。

大小は智に生じ、老少に在らず、智ありて勤めて精進すれば、少なりと雖も而も是れ老なり。懈怠し智慧なくんば、老なりと雖も、而も是れ少なり。』

汝今僧を平量す、是れ則ち大なる失たり。一指を以て大海の底を測り知らんと欲するが如く、智者の爲めに笑はる。汝は佛の四事を說きたまふことを聞かずや。小なりと雖も輕んず可らず。太子は小なりと雖も當に國王と爲るべし、是れ輕んず可らず。蛇の子は小なりと雖も毒よく人を殺す、亦輕んず可らず。小火は微なりと雖も能く山野を燒く、又輕んず可らざるなり。沙彌は小なりと雖も聖賢

通を得、最も輕んず可らず。(四八)又四種の人あり、菴羅菓の、生にして熟に似、熟にして生に似、生にして生に似、熟にして熟に似たるが如し。佛弟子も亦是の如く、聖の功德成就する有つて、而も威儀語言善人に似ず、威儀語言の善人に似たる有つて、而も聖の功德成就せず。威儀語言善人に似ず、聖の功德未だ成就せざる有り。威儀語言善人に似如し、而も聖の功德成就せる有り。汝云何が是の言を念せずして僧を稱量せんと欲するや。汝若し僧を毀らんと欲せば、則ち是れ自ら毀ると爲す、汝は大なる失を爲せり。過ぎたる事は追ふ可らず、方に善心を來して、諸の疑悔を除去し、我が說く所の偈を聽くべし。

(四九)『聖衆は量る可らず、威儀を以て知ること難し、族姓を以てす可らず、亦多聞を以てせず、亦威德を以てせず、又耆年を以てせず、亦嚴容を以てせず、復辯舌を以てせず、聖衆の大海水は、功德の故に甚だ深し。

佛は百事を以て是の僧を讃したまふ、之に施せば少なりと雖も、果を得ること多く、是の第三の寶聲は遠く聞ゆ、是を以ての故に應に僧を供養すべし。

是の老少・多知・少聞及び明闇を分別すべからず、人の林を觀るに(五〇)伊蘭・(五一)瞻蔔・及び(五二)薩羅を分別せざるが如し。汝僧を念せんと欲せば當に是の如くすべし。

【四八】菴羅菓の生熟等の四種を以て、聖不善等の僧衆に譬ふ。
【四九】聖僧不可量の偈
【五〇】伊蘭(Erāvaṇi.)
【五一】瞻蔔(Campaka.)
【五二】薩羅(Śirva ?)。

愚を以て聖を分別すべからず。摩訶迦葉の出家せし時、納衣の價直十萬金なりき。乞人下賤の服を作らんと欲して、更に麁弊なるを求むるに得る能はず。聖衆の僧の中も亦是の如く、最下小の福田を求索するに、能く施す者をして十萬倍ならしむ。更に如かざらんと求むるも得べからず。衆僧の大海の中には結戒を畔際と爲す、若し戒を破る者あれば、終に僧數に在らず、譬へば大海水の死屍と共に宿らざるが如し。」

檀越は是の事を聞き、是の神通力を見て、自ら驚き毛は竪ち、手を合せて諸の沙彌に白して言さく、「諸の聖人よ、我今懺悔す。我は是れ凡夫の人なり。心に常に罪を懷く、我に少疑あり、今請問せんと欲す」と。偈を說いて言く、

『大德、已に疑を過ぐ、我、今遭遇することを得たり、若し復た請問せずんば、則ち是れ愚中の愚ならん。』

諸の沙彌の言く、「汝問はんと欲せば便ち問へ、我當に聞く所を以て答ふべし」と。檀越問うて曰く、「佛寶の中に於て信心清淨なると、僧寶の中に於て信心清淨なると、何者か福勝るや」と。答へて言く、「(一)我等は初より僧寶、佛寶に增減あることを見ず。何となれば佛、一時、舍婆提に乞食したまふ。婆羅門あり、姓は(二)婆羅埵逝なるものあり。佛數數其家に到つて食を乞ひたまふに、心に是念を作さく、「是の沙門は何を以てか來ること數數にして、其の債を負ふが如くなるや」と。佛時

【一】信佛信僧に福に增減なし。
【二】佛、婆羅埵逝の家に立ちて、食を乞ひ給ひし因緣。

に偈を說きたまはく、

『時雨數數墮つれば、五穀數數成り、數數福業を修すれば、數數果報を受く。數數生法を受くるが故に、數數死を受く、數數聖法成ぜば、誰か數數生死せん。』

婆羅門は是の偈を聞き已つて是の念を作さく、「佛大聖人は具に我が心を知りたまふ」と。慚愧して鉢を取り、舍に入つて美食を成滿し、以て佛に奉上するに、佛は受けずして、是の言を作したまはく、「我、偈を說くが爲の故に得たる此食は、我、食せず」と。婆羅門の言く、「是の食は當に誰にか與ふべき」と。佛の言はく、「我天及び人の能く是の食を消せん者を見ず、汝持ち去つて、少草の地に置き、蟲なき水中に著け」と。卽ち佛の敎の如く食を持して、蟲なき水中に著くるに、水卽ち大に沸き、烟火俱に出でて、大熱鐵を投ずるが如し。婆羅門は見已つて、驚怖して言く、「未曾有なり、乃至食中の神力是の如し」と。還た佛所に到り、頭面に佛足を禮し、懺悔して出家し、戒を受けんことを乞へり。〔五五〕佛、「善來」と言へば、卽時に鬚髮自ら墮ちて便ち沙門と成り、漸漸に結を斷じて阿羅漢道を得たり。復〔五六〕摩訶憍曇彌あり、金色の上下の寶衣を以て佛に奉れり。佛は衆僧の受用の堪能なることを知ろしめし、憍曇彌に告げたまはく、「此の上下の衣を以て衆僧に與へよ」と。是の故に佛寶と僧寶とは、福に多少なきことを知る。檀越の言く、「若し佛の爲に布施す

【五五】佛「善來」と言へば、鬚髮自ら墮ちたる因緣。

【五六】摩訶憍曇彌（Mahāgautamī）。金色の寶衣を佛に獻じたるに、佛は受けずして僧に與へしめ給ひし因緣。

ろを僧能く消し、能く受けば、何を以ての故に、婆羅埵逝婆羅門の食を、佛は僧をして食せしめたまはざるや」と。諸の沙彌答ふらく、「僧の大力を顯はさん爲の故なり。若し食の水中に在つて大神力あるとを見ずんば、以て僧力の大なることを知ること無けん。若し佛の爲に物を施すら僧受くるとを得、便ち僧力の大なることを知る。【毛】譬へば藥師の毒藥を試みんと欲し、先づ以て鷄に與ふるに、鷄即時に死す、然る後に自ら服して、乃ち藥の威力の大なることを知るが如し。是の故に檀越、當に知るべし、

「若し人佛を愛敬せば、亦當に僧を愛敬すべし、當に分別あるべからず、「共に」同じく皆寶なるが故なり。」

爾の時に檀越は是の事を說くを聞いて、歡喜して言く、「我某甲、今日より若し僧數の中に入る有らば、若くは小なるも、若くは大なるも、一心に信敬して敢へて分別せざらん」と。諸の沙彌の言はく、「汝心に無上の福田を信敬す、久しからずして當に道を得べし。何を以ての故に、

「多聞及び持戒、智慧禪定は、皆僧數の中に入ること、萬川の海に歸するが如し。譬へば衆の藥草は、雪山に依止し、百穀、諸の草木は、皆地に依止するが如く、一切の諸の善人は、皆僧數の中に在り。」

【毛】僧力の大なるを知るは、猶は藥師の毒藥を鷄に試みて、其の威力の大なるを知るが如し。

復次に、汝等曾つて佛の長鬼神將軍の爲に、三善男子の阿泥盧陀、難提、迦翅彌羅を讃したまへるを聞くや不や。佛の言はく、(五八)「若し一切世間の天及び人、一心に三善男子を念せば、長夜に無量の利益を得ん」と。是事を以ての故に倍僧を信敬すべし。是三人は僧と名けず。佛說き給はく、「三人を念ずるすら、是の如きの果報あり、何に況んや、一心清淨に僧を念ずるをや」と。是故に檀越、當に力に任せて僧の名を念ずべし、偈に說くが如し。

『是の諸の聖人衆は、則ち雄猛の軍を爲して、魔王の賊を摧滅す、是
を伴とすれば涅槃に至る。』

諸の沙彌は檀越の爲に種種に僧寶の功德を說き、檀越は聞き已り、家を擧げて大小〔の者〕、皆四諦を見、須陀洹道を得たり。是の因緣を以ての故に、應當に一心に僧を念ずべし。念戒とは、(五九)戒に二種あり、有漏戒と無漏戒となり。(六〇)有漏に復た二種あり、一には律儀戒、二には定共戒なり。

行者の初學は、是の(六一)三種の戒を念じて、三種を學し已れば、但無漏戒を念ず、是の律儀戒は能く諸惡をして自在なることを得ざらしめ、枯朽し折滅す。禪定戒は能く諸の煩惱を遮す、何となれば內樂を得るが故に、世間の樂を求めざればなり。無漏戒は能く諸の惡煩惱の根本を拔く。

問うて曰く、(六二)云何が戒を念ずるや。答へて曰く、先に念佛の中に說くが如く、佛は醫王の如く、

【五八】三善男子を念ずるすら、倘ほ福を得、況んや僧福を念ずるをや。

【五九】二種の戒――有漏戒と無漏戒。

【六〇】二種の有漏戒――律儀戒と定共戒。

【六一】三種の戒 (一)律儀戒 (二)定共戒 ｝有漏戒 (三)無漏戒

【六二】第一三問。念戒とは何ぞや。

法は良藥の如く、僧は病を瞻る人の如く、(六三)戒は服藥の禁忌の如し。行者は自ら念ずらく、「我若し禁忌に隨はずんば、三寶は我に於て所益なしと爲す。又導師の好道を指示するが如し、行者の用ゐざるも導師に咎なし、是を以ての故に我應に戒を念ずべし」と。

復次に、(六四)是の戒は一切善法の所住の處なり。譬へば百穀藥木の地に依つて生ずるが如し。持戒清淨なれば能く諸の深禪定、實相の智慧を生長す。亦是れ出家人の初門、一切の出家人の依伏する所、涅槃に到るの初因緣なり。説くが如くんば戒を持つが故に心悔いず、乃至解脱涅槃を得。行者は(六五)清淨戒を念ず、不缺戒、不破戒、不穿戒、不雜戒、自在戒、不著戒なり。智者の讃する所の戒は諸の瑕隙なきを名けて清淨戒と爲す。(六六)云何が不缺戒と名くるや。五衆戒の中、四重戒を除いて諸餘の重を犯す者は是を缺犯と名け、餘の罪は是を破と爲す。復次に、身罪を缺と名け、口罪を破と名く。復次に、大罪を缺と名け、小罪を破と名く。(六七)善心にして涅槃に迴向し、結使種種の惡覺の觀をして、入ることを得せしめざる、是を不穿と名く。(六八)涅槃の爲め世間の爲に二處に向ふ、是を名けて雜隨戒と爲す。(六九)外緣に隨はず、自在にして人に繫屬せらるること無きが如く、是の淨戒を持つて愛等の爲に拘はれざる、是を自在戒と爲す。戒に於て愛慢等の諸の結使を生ぜず、戒の實相を知り、亦是の戒を取らず。若し是の戒を取らば譬へば人の

【六三】念戒は服藥の禁忌の如し。
【六四】戒は一切善法の住處なり。
【六五】清淨戒の種類。
【六六】不缺戒不破戒の義解。
【六七】不穿戒の義解。
【六八】雜隨戒の義解。
【六九】自在戒の義解。

囹圄に在つて桎梏に拘はれ、赦を蒙ることを得と雖も、復た金鏁の爲に繫がるるが如く、人、恩愛の煩惱の爲に繫がれて牢獄に在るが如く、家を出づることを得と雖も、禁戒に愛著すると金鏁を著くるが如し。(七〇)行者若し戒は是れ無漏の因緣なりと知つて而も著を生せず、是は則ち解脫して繫縛せらるること無し、是を不著戒と名く。(七一)諸佛・菩薩・辟支佛及び聲聞の讃する所の戒、若し是の戒を行じ、是の戒を用ふるは、是を智所讃戒と名く。

(七二)外道の戒とは、牛戒、鹿戒、狗戒、羅刹鬼戒、啞戒、聾戒、是の如き等の戒は智の讃せざる所なり、虛しく苦んで善報なし。

復次に、(七三)智所讃とは三種の戒の中に於て無漏戒なり。(七四)無漏戒に三種あり。佛の說きたまふが如くんば、正語・正業・正命は是れ三業なり。義は八聖道の中に說くが如し。是の中に應に廣く說くべし。

問うて曰く、(七五)若し持戒は是れ禪定の因緣、禪定は是れ智慧の因緣ならば、八聖道の中に何を以てか慧は前に在り、戒は中に在り、定は後に在るや。答へて曰く、行路の法は應に先づ眼を以て道を見て、而して後行くべし、行く時は當に精勤すべし、精勤して行く時は、常に念じて導師の敎ふる所の如くし、念じ已つて一心に路を進めば非道に順せざるなり。正見も亦是の如く、先づ正智慧を以て、五受衆は皆苦なりと觀ず、是を苦と名く。(七六)苦

【七〇】不著戒の義解。
【七一】智所讃戒の義解。
【七二】外道戒の種類。
【七三】智所讃戒は無漏戒なり。
【七四】三種の無漏戒。
【七五】第一四問、若し持戒は禪定の因緣にして、禪定は智慧の因緣ならば、八聖道の中に於て何故に慧・戒・定と次第するか。
【七六】八正道の義解、並に相互の關係。

は愛等の諸の結使の和合より生ず、是を集と名く。愛等の結使滅するは是を涅槃と名く。是の如き等の八分を觀ずるを名けて道と爲し、是を正見と名く。行者は、是の時、心定まつて世間の虚妄の棄つべく、涅槃の實法の取る可きことを知つて、是の事を決定す。是を正見と名く。是の事を知見するの心力、未だ大ならず、未だ發行すること能はず、思惟籌量して、正見を發動して力を得せしむ、是を正思惟と名く。智慧倍に發し、言を以て宣べんと欲するが故に正語を次にし。正業・正命は戒を行ふ時、精進して懈らず。色・無色定の中に任せしめず、是を正方便と名く。是の正見を用ゐて四諦を觀じ、常に念じて忘念せず。一切の煩惱は是れ賊なり、應當に捨つべし。正見等は是れ我が眞の伴なり、應當に隨ふべしと。是を正念と名く。四諦の中に於て心を攝して散せず、色無色定の中に向はしめず、一心に涅槃に向ふ、是を正定と名く。是に初めて善の有漏を得るを名けて煖法、頂法、忍法の中の義と爲す。次第に增進して初中後心、無漏心の中に入り、狭く一心の中に具し、前後分別次第あること無く、正見は正思惟・正方便・正念・正定と相應し、三種の戒は是の五分行に隨ふ。正見は好醜を分別して利益を事とし、正思惟は正見を發動するを事とし、正語等は是の智慧、諸の功德を持つて散失せしめず、正方便は驅策して速に進んで息まざらしめ、正念は七事所應の行者憶して忘れず、正定は心を淸淨にして濁らず亂れざらしめ、正見をして七分を成ずることを得せしめざること、風なき房中に燈すれば則ち照明了了なるが如し。是の如き無漏戒は八聖道の中に在り、亦智者の爲に讃せらる。

問うて曰く。(七七)無漏戒は應に智者の爲に讃せらるべし、有漏戒は何を以て讃するや。答へて曰く、有漏戒は無漏に似。無漏に隨つて同じく因縁を行ず。是の故に智者は合せ讃ず。賊中に人あつて叛き來つて我に歸するが如し。彼も是れ賊なりと雖も、今來つて我に向へり。我當に之に由つて以て賊を破すべし、何ぞ念ぜざる可けんや。諸の煩惱の賊は、三界の城中に在つて住す、有漏戒の善根なる若くは煗法、頂法、忍法、世間第一法は、餘の有漏法と異なるが故に、行者は受用す。是の因縁を以ての故に諸の結使の賊を破して、苦法忍なる無漏の法財を得。是を以ての故に智者の讃ずる所なり。是を念戒と名く。

念捨とは、(七八)二種の捨あり、一には施捨、二には諸の煩惱を捨するなり。(七九)施捨に二種あり。一には財施、二には法施なり。三種の捨の和合するを名けて捨と爲す。財施は是れ一切善法の根本なるが故に、行者は是の念を作さく、「上の四念の因縁の故に煩惱の病を差すことを得、今何の因縁を以ての故に是の四念を得る」と。則ち是れ先世今世に三寶の中に於て少しく布施の因縁あるが故なり。何となれば衆生は無始の世界の中に於て三寶の中の布施を知らざるが故に、福皆盡滅す、是の三寶に無量の法あり、是の故に施も亦盡きず必ず涅槃を得。復次に、過去の諸佛は初發心の時、皆少多の布施を以て因縁と爲したまふ。佛の說きたまふが如くんば、「是布施は是れ初め助道の因縁なり」と。復次に、人命は無常なり、

【七七】第一五問、有漏を讃する理由如何。
【七八】二種の捨――(一)施捨、(二)煩惱捨。
【七九】二種施捨――(一)財施、(二)法施。

財物は電の如し、人乞はざるも猶尙與ふべし。何に況んや、乞はんに而も施さざらんや。是を以て應に施作は助道の因緣なるべし。復次に、〔八〇〕財物は是れ種種の煩惱、罪業の因緣なり。若し持戒、禪定、智慧は種種の善法にして是れ涅槃の因緣なり、是を以ての故に財物は常に應に自ら棄つべし。何に況んや。好福田の中にして而も布施せざらんや。〔八一〕譬へば兄弟二人あつて、各十斤の金を擔つて道中を行くに、更に餘伴なきが如し。兄は是念を作さく、「我は何を以てか、弟を殺して金を取らざる、此曠路の中には人の知る者なし」と。弟も復念を生じて、兄を殺して金を取らんと欲す、兄弟各惡心あつて語言し視占するに皆異なる。兄弟卽ち自ら悟り、還つて悔心を生ず、「我等は人に非ず、禽獸と何ぞ異ならん。同じく兄弟と生れて、少金の爲の故に而も惡心を生ず」と。兄弟共に深水の邊に至るに、兄は金を以て水中に投著す。弟の言く、「善哉、善哉」と。弟も次いで復金を水中に棄つ。兄の復言く、「善哉、善哉」と。兄弟更互に相問ふ、「何を以てか善哉と言ふや」と。各答へて言く、「我此の金を以ての故に、不善心を生じ、相危害せんと欲す。今之を棄つるとを得るが故に、善哉と言ふ」と。二辭各爾なり。是を以ての故に財は惡心の因緣なりといふとを知り、常に應に自ら捨つべし、何に況んや施は大福を得るに、而も布施せざらんや。偈に說くが如し。

〔八二〕施を行寶藏と爲し、亦善親の友と爲す。始終相利益し、能く壞する者あること無し。

〔八〇〕財物は諸の罪業の因緣。
〔八一〕兄弟黃金を水中に投ずるの譬。
〔八二〕布施功德の偈。

施を好密蓋と爲す、能く飢渴の雨を遮す、施を堅牢の船と爲す、能く貧窮の海を渡る。
慳を困衰の相と爲す、之が爲に憂畏を生ず、之を洗ふに施水を以てすれば、則ち爲めに福利を生ぜん。
慳惜して衣食せずんば、身を終るまで歡樂なく、財物ありと云ふと雖も、貧困と異なること無し。
慳人の室宅は、譬へば丘冢墓の如く、求者は遠く之を避け、終に向ふ者あること無し。
是の如き慳貪の人は、智者に擯棄せられ、命氣未だ盡きずと雖も、死と等しうて異なること無し。
慳人は福慧なく、施に於て堅要なく、當に死坑に墮すべきに臨んで、戀惜して懊恨を生ず。
涕泣して當に獨り去るべく、憂悔の火身を燒く。
好施の者は安樂にして、終に是の苦あること無く、人の布施を修する者は、名聞十方に滿つ。
智者に愛敬せられ、衆に入つて畏るる所なく、命終して天上に生じ、久しくして後必ず涅槃を得。』

是の如き等、種種に慳貪を訶し、布施を讃ず。是を財施を念ずと名く。云何が法施を念ずるや。行者は是の念を作さく、「法施は利益甚大なり、法施の因緣の故に、一切の佛弟子等は道を得たり」と。復次に、佛は二種の施を說きたまふ中に法施を第一と爲したまふ。何となれば財施は果報有量にし

て、法施は果報無量なり。財施は欲界の報にして、法施は三界の報、亦出三界の報なり。若し名聞、財利、力勢を求めず、但佛道を學ぶことを爲し、弘大の慈悲心、衆生の生老病死の苦を度するは是を清淨の法施と名く。若し爾らずんば市易の法の如しと爲す。復次に、財施は施多ければ財物減少し、法施は施多ければ法更に增益す。財施は是れ無量施中の舊法なり。法施は聖法にして初めて來つて得難く、名けて新法と爲す。財施は但よく諸の飢渇寒熱等の病を救ふ。法施は能く九十八の諸の煩惱等の病を除く。是の如く種種の因緣によりて財施と法施とを分別す。行者は應に法施を念ずべし。

問うて曰く。〔八三〕何等か是れ法施なるや。答へて曰く、佛の說きたまふ所の十二部經を、清淨の心を以て、福德の爲に他と與に說く。是を法施と名く。復た神通力を以て、人をして道を得せしむるあるも亦法施と名く。綱明菩薩經の中に說くが如し。人あり、佛の光明を見て得道する者、生天する者あり。是の如き等は口に說かずと雖も、他をして法を得せしむるが故に亦法施と名く。是の法施は應に衆生の心性、煩惱の多少、智慧の利鈍を觀ずべく、應に利益する所に隨つて爲に說法すべし。譬へば病に隨つて藥を服すれば則ち益あるが如し。婬欲重きあり、瞋恚重きあり、愚癡重きあり、兩兩雜り、三三雜るあり。婬重き者には爲に不淨觀を說き、瞋重き者には爲に慈心を說き、癡重き者には爲に深因緣を說き、兩ながら雜る者には兩觀を說き、三つ雜る者には三觀を說く。若し人病相を知らず、錯つて藥を投せば、病は則ち爲に

【八三】第一六問、法施とは何ぞや。

增す、若し衆生の相に著する者には、爲に但五衆あつて此の中には我なしと説く。若し衆生相なしと言はば、卽ち爲に五衆相續して有なることを説く、斷滅に墮せしめざるが故なり。富樂を求むる者には爲に布施を説き、生天を欲する者には爲に持戒を説き、人中の多くの貧乏する所の者には爲に天上の事を説き、惱患の居家の者には爲に出家の法を説き、錢財に著する居家の者には爲に在家の五戒の法を説き、若し世間を樂まざるには爲に三法印を説く。無常、無我、涅槃にして經法に依隨して自ら義理を演作す、莊嚴法施に譬喩して衆生の爲に説く、是の如き等の種種の利益あるが故に當に法施を念ずべし。

(八四)捨煩惱とは、三結乃至九十八使等を皆斷じて除却す、是を名けて捨と爲す。是の法を捨てんと念ずることは、毒蛇を捨つるが如く、桎梏を捨つるが如く、安隱歡喜を得。復次に、煩惱を捨つることを念ずるも亦念法の中に入る。

問うて曰く、(八五)若し念法の中に入らば今何を以てか更に説くや。答へて曰く、諸の煩惱を捨する、是の法は微妙にして得難く無上無量なり、是の故に更に別に説く。復次に、念法と念捨とは異なり。念法は佛法を念ずること微妙にして諸法の中の第一なり、念捨は諸の煩惱の罪惡は之を捨てて快に爲すことを念じ、行相別なり、是を異なりと爲す。是の如き等の種種の因緣により行者は當に捨を念ずべし。念捨とは是れ初めて禪智を學ぶ中に、增上慢を生ずることを畏る。

【八四】捨煩惱の解。
【八五】第一七問、念法の外に更に捨煩惱を説く理由如何。

念天とは、四天王天、乃至他化自在天あり。

問うて曰く、〔八六〕佛弟子は應に一心に、佛及び佛法を念ずべし、何を以てか天を念ずるや。答へて曰く、布施の業因緣、果報の故に天上の富樂を受くることを知る、是の因緣を以ての故に天を念ず。復次に、是の八念に、佛自ら因緣を說きたまふ。「念天とは應に是の念を作すべし、四天王天あり、是の天は五の善法の因緣の故に彼の中に生ず、罪福を信じ、戒を受持し、善法を聞き、布施を修し、智慧を學するなり。我も亦是の五法あり」と。是を以ての故に歡喜して言く、「天は是の五法を以ての故に富樂の處に生ず、我も亦是あり、我、彼に生ぜんと欲せば、亦生ずることを得べし。我は天の福の無常なるを以ての故に受けず、乃至他化自在天も亦是の如し」と。

問うて曰く、〔八七〕三界の中に清淨なる天多し、何を以ての故に但欲天のみを念ずるや。答へて曰く、聲聞法の中には欲界天を念ずと說き、摩訶衍の中には一切三界の天を念ずと說く。行者未だ道を得ざる時は、或は心人間の五欲に著す、是を以ての故に佛は念天を說きたまへり。若し能く婬欲を斷ずれば、則ち上二界の天の中に生ず。若し婬欲を斷ずる能はざれば、六欲天の中に生ず、是中には妙細清淨の五欲あり。佛は人をして更に生じて、五欲を受けしむることを欲したまはずと雖も、衆生の涅槃に入るに任へざるあり、是衆生の爲の故に天を念ずと說きたまふ。國王の

〔八六〕第一八問、佛子にして天を念ずる理由如何。
〔八七〕第一九問、欲天のみを念ずる理由如何。

子、高危の處に在つて立ち、救護すべからず、自ら地に投ぜんと欲するに、王は人をして厚き綿蓐を敷かしむれば、墮つるも則ち死せず、差して地に墮つるが如きが故なり。

復次に、(八八)四種の天あり、名天、生天、淨天、生淨天なり。名天とは今の國王を天子と名くるが如し。生天とは四天王より乃ち非有想非無想天に至る。淨天とは人中に生れし諸の聖人なり。生淨天とは三界の天中に生ずる諸の聖人なり。所謂須陀洹家家、斯陀含一種、或は天上に於て阿那含、阿羅漢道を得。生淨天は、色界の中には五種の阿那含あり、是の間に還らずして即ち彼に於て阿羅漢を得。無色界の中には一種の阿那含あり、色界を離れて無色界に生じ、是の中に無漏道を修し、阿羅漢を得て涅槃に入る。是の二種の天の生天、生淨天を念ず、是の如き等の天は是を念天と名く。

念安那般那とは禪經の中に說くが如し。(八九)念死とは二種の死あり、一には自死、二には他因緣死なり。是の二種の死を行者は常に念ずらく、「是の身は若し他の殺さざるも、必ず當に自ら死すべし、是の如き有爲法の中は、彈指頃の生なれば、不死の心を信ずべからず、是の身は一切時の中に、皆死あつて老を待たず、是の種種の憂惱凶衰の身を恃むべからず。生心は安隱不死を望む。是の心は癡人の生ずる所なり、身中の四大は各各相害すると、人の毒蛇の篋を持するが如し、云何ぞ智人は以て安隱なりと爲ん。若し出氣は當に還り入るべきを保ち、入息は出づるを保ち、睡眠して復た還つて覺す

【八八】四種の天——名天、生天、淨天、生淨天。
【八九】念死の義解。

ることを得るとは、是れ皆必し難し、何となれば是の身の内外には、多くの怨あるが故なり。「偈に」說くが如し。

（九〇）『或は胎中の死あり、或は生ずる時死するあり、或は年壯の時死し、或は老の至る時死す。
亦果の熟する時、種種の因緣にして墮つるが如し。當に此の死惡の怨賊を免離することを求むべし。是の賊は信ずべきこと難し、捨つる時は則ち安隱なり。
假使大智人にして威德力無上なりとも、前なく亦後なし、今に於て脫する者なし。
亦巧辭を以て謝すること無く、請求するも脫を得ること無く、亦捍格する處にして以て、免るることを得べき者なし。
亦淨戒を持ち、精進して以て脫すべきに非ず。死賊は憐愍なく、來る時は遁くる處なし。』

是の故に行者は無常危脆の命の中に於て、而も信じて活を望むべからず。佛の比丘の爲に死相の義を說きたまひしが如し。（九一）一比丘あり偏袒して佛に白さく、「我能く是の死相を修せん」と。佛の言はく、「汝云何が修せん」と。比丘の言く、「我七歲を過ぎて活きんことを望まず」と。佛の言はく、「汝は放逸に死相を修することを爲す」と。比丘あり言く、「我は七月を過ぎて活することを望まず」と。比丘あり言く、「七日」と。有が言く、「六五四三二一日活す」と。佛の言はく、「汝等は皆是れ放逸に

〔九〇〕死賊の偈。
〔九一〕諸の比丘死相を修するの因緣。

死想を修す」と。有が言く、「旦より食事に至る」と。有が言く、「一食の頃」と。佛の言はく、「汝等も亦是れ放逸に死想を修す」と。一比丘偏袒して佛に白さく、「我は出氣に於て入を望まず、入氣に於て出を望まず」と。佛の言はく、「眞に是れ死想を修して不放逸たり。比丘よ、一切有爲の法は、念念生滅して住する時は甚だ少く、其れ猶ほ幻の如し、無智の行者を欺誑す」と。是の如き等の種種の因緣は念死想なり。

問うて曰く、(九二)法は是れ三世諸佛の師なり、何を以ての故に念佛は前に在り、是の八念は云何が次第あるや。答へて曰く、是の法は是れ十方三世諸佛の師なりと雖も、佛は能く是の法を演出し、其功大なるが故なり。譬へば雪山の中に寶山あり、寶山の頂に如意寶珠あり、種種の寶物多し。人あり上らんと欲し、或は半道より還る者あり、近づきて而も還る者あり、一の大德の國王あつて衆生を憐愍して爲に大梯を作らんに、人民は大小乃至七歲の小兒まで皆山に上ることを得、意に隨つて如意珠等の種種の寶物を取るが如く、佛も亦是の如し。世間の諸法實相の寶山を、九十六種の異道は皆得ること能はず、乃至梵天王も諸法實相を求むるも亦得ること能はず、何に況んや餘人をや。佛は大慈悲を以て衆生を憐愍したまふが故に、六波羅蜜を具足し、一切智慧方便を得、十二部經、八萬四千法聚の梯を說きたまふに、阿若憍陳如、舍利弗、目揵連、摩訶迦葉、乃至七歲の沙彌(九三)蘇摩等皆諸の

【九二】第二〇問、八念の中、念法を後にし、念佛を以て前と爲す理由如何。

【九三】蘇摩(Sumana ?)

無漏法、根力覺道を得き。實相は妙なりと雖も、一切衆生は皆佛恩を蒙るが故に得。是を以ての故に念佛は前に在り。次第に法を念じ、次第に僧を念ず。僧は佛語に隨つて能く法を解するが故に第三なり。餘人は解する能はず、僧は能く解することを得、是を以ての故に稱して寶と爲す。人中の寶は是れ佛なり、【九四】九十六種の道法の中の寶は是れ佛法なり、一切衆の中の寶は是れ僧なり。復次に、佛の因緣を以ての故に法は世間に出で、法の因緣を以ての故に僧あり。行者は念ずらく、「我は云何が當に法寶を得べき」と。得るには僧數の中に在つて當に一切の麤細の身口の惡業を除却すべし、是の故に次第に持戒を說く。

復次に、云何が分別して七衆あるや。戒を有つを以ての故に、心惡を除かんと欲し、慳貪を破するが故に捨を念じ、受者をして樂を得せしめんと欲するが故に瞋恚を破し、福の果報を得ることを信ずるが故に邪見を破し、持戒、布施の法の中に住すれば、則ち爲に十善道の中に住して、十不善道を離る。十善道に二種の果あり、若し上行は淨天の中に生ずることを得、中行は天に生ずることを得。是を以ての故に戒施より次第に天を念ず。禪定を行ずるが故に、二種の天を得て諸の惡覺を滅し、但善法を集め、心を一處に攝す。是故に天を念じ、次第に安那般那を念ず。【九五】安那般那を念じて能く諸の惡覺を滅するとは、雨の塵を淹すが如し。息の出入を見て身の危脆を知り、息の入出に由つて身存立するを得、是故に入出

【九四】九十六種の道法中に佛法を數ふる例。

【九五】數息觀は諸の惡覺を滅し、身の危脆を知るの功あり。

の息を念じ、次第に死を念ず。復次に、行者或時は七念を有することを恃み、此の功德に著し、懈怠の心生ず。是の時、當に死を念ずべし。死事は常に前に在り、云何が懈怠して此の法愛に著すべけんや。阿那律、佛の滅度したまふ時、說けるが如し。

（九六）『有爲の法は雲の如し、智者は信ずべからず、無常の金剛は來つて、聖主山王を破す。』

是を八念の次第と名く。

問うて曰く、（九七）是は聲聞の八念を說く、菩薩の八念と何の差別ありや。

答へて曰く、聲聞は身の爲の故にし、菩薩は一切衆生の爲の故なり。聲聞は但老病死を脫せんが爲の故にして、菩薩は遍ねく一切の功德を具足せんが爲の故なり。是を差別と爲す。復次に、佛は是の中に亦說いて舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は不住法を以て般若波羅蜜「多」の中に住し、應に檀波羅蜜「多」を具足すべく、乃至八念を具足すべし」と。不可得の故に初に不住あつて後に不可得あり。此二印あるを以て、是を以ての故に異なる。不住、不可得の義は先に說くが如し。

【九六】 佛滅度の時、阿那律の作れる無常の偈。

【九七】 第二一問、聲聞の八念と菩薩のそれとの異同如何。

卷の第二十三

初品の中の十想を釋す。

【經】十想とは無常想、苦想、無我想、食不淨想、一切世間不可樂想、死想、不淨想、斷想、離欲想、盡想なり。

【論】問うて曰く、〔一〕是の一切の行法は何を以ての故に、或時は名けて智と爲し、或時は名けて念と爲し、或時は名けて想と爲すや。答へて曰く、初めて善法を習つて、失せざるが爲の故に、但念と名け、能く相を轉じ、心を轉ずるが故に、名けて想と爲し、決定して知り、疑ふ所なきが故に、名けて智と爲す。〔二〕一切有爲の法の無常を觀ずる智慧に相應するの相、是を無常想と名く。一切有爲の法は無常なりとは、新新に生滅するが故に、因緣に屬するが故に、增積せざるが故なり。復次に、生ずる時來處なく、滅するも亦去處なし。是の故に無常と名く。復次に、二種の世間は、常なきが故に、無常と說く。〔三〕一には衆生無常、二には世界無常なり。偈に說くが如し。

『大地草木は皆磨滅し、須彌巨海も亦崩れ竭き、諸天の住處も皆燒け盡く、爾の時世界に何物か常なる。

【一】第一問、一切の行法を或は智と爲し、或は念となし、或は想となす、理由如何。
【二】無常想の義解。
【三】二種の無常。

十力の世尊は身光を具したまひ、智慧の明照も亦無量に、一切諸の衆生を度脫し、名聞普徧にして十方に滿ち、今日廓然として悉く安在す。何ぞ智者は感傷せざることあらんや。』

是の如く、舍利弗・目犍連・須菩提等の諸の聖人・轉輪聖王・諸の國王・常樂天王・及び諸天の聖德尊貴も皆亦盡き、大火焰明も忽然として滅し、世間は轉壞して、風中の燈の如く、險岸の樹の如く、漏器に水を盛れば、久しからずして空竭するが如し。是の如く一切衆生、及び衆生の住處は、皆常なきが故に、名けて無常と爲す。

問うて曰く、〔四〕菩薩は何を以ての故に、是の無常想を行ずるや。答へて曰く、衆生は常顚倒に著して、衆苦を受くるが故に、生死を免るることを得ず。行者は是の無常想を得て、衆生を教化して言く、「諸法は皆無常なり、汝常顚倒に著して、行道の時を失すること莫れ」と。諸佛の上妙の法は所謂四眞諦なり。四諦の中には苦諦を初とし、〔五〕苦の四行の中には無常行を初と爲す、是の故に菩薩は無常想を行ず。

問うて曰く、〔六〕有人は無常の事の至れるを見て、轉た更に堅著す。國王の夫人寶女が、地中より生ぜる十頭の羅刹の爲に將ゐられて大海を度らんとするに、王大に憂愁し、智臣諫めて言るが如し。「王は智力具足せり、夫人は還た在ること久しからず、何を以て憂を懷くや」と。〔王〕答へて言く、

【四】第二問、菩薩の無常想を行ずる理由如何。

【五】四諦の下に各四行あり、之を十六行といふ。行とは、諦觀又は觀法の義なり。

【六】第三問、人あり、無常の到るを見て、轉た更に堅著す。云何ぞ觀無常の心は能く諸の結使を破すと言ふべけんや。

「我が憂ふる所以の者は、我が婦を得難きを慮るにあらず、但壯時の過ぎ易きことを恐るるのみ」と。亦人の好華好菓を見る時、過ぎんと欲して、便ち大に著を生ずるが如し。是の如く無常を知れば、乃ち更に諸の結使を生ず。云何が無常は能く心に厭ひ、諸の結使を破らしむと言ふや。答へて曰く、是の如く無常を見るは、是れ無常の少分を知つて、具足せざるが爲にして、禽獸の無常を見ると異なること無し。是の故に佛、舍利弗に告げたまはく、「當に具足して、無常想を修すべし」と。

問うて曰く、〔七〕何等か是れ無常想を具足するや。答へて曰く、〔八〕有爲の法の、念念に生滅するを觀ずること、風の塵を吹くが如く、山上より水の流るるが如く、火炎の隨つて滅するが如し。一切有爲の法は、牢なく、強なく、取す可らず、著す可らず、幻化の如くにして、凡夫を誑惑するとを爲す。是の無常に因つて、空門に入ることを得。是の空の中には、一切の法は不可得なるが故に、無常も亦不可得なり。何となれば一念の中には、生住滅の相は不可得なればなり。生の時は住滅あることを得ず、住の時は生滅あることを得ず、滅の時には生滅あることを得ず、生住滅は相性相違せるが故に無なり。是の言の故に無常も亦無なり。

問うて曰く、〔九〕若し無常なくんば、佛は何を以てか、苦諦の中に無常を說きたまひしや。答へて曰

【七】第四問、無常想を具足すといふ意義如何。

【八】無常に對する龍樹菩薩の空觀。

【九】第五問、若し無常なくんば、佛は何故に苦諦の中に無常を說き給ひしか。

く、凡夫人は邪見を生ずるが故に、世間は是れ常なりと謂へり。是の常見を滅除せんが爲の故に無常と說く。無常は是れ實なるが爲の故に說くにあらず。復次に、佛未だ出世したまはず、凡夫の人は但世俗の道を用ゐて諸の煩惱を遮す。今は諸の煩惱の根本を拔かんと欲するが故に、是の無常を說く。復次に、諸の外道の法は、但形に五欲を離るるを以て、是を解脫と謂ふ。佛說きたまはく、「邪相の因緣の故に縛せられ、無常の正相を觀ずるが故に解脫す」と。復〔一〇〕二種の無常を觀ずるの相あり。一には有餘、二には無餘なり。佛の說きたまふが如くんば、一切の人と物と滅盡して唯名のみ在るあり、是を有餘と名け、若し人と物と滅盡し、名も亦滅する、是を無餘と名く。復二種の無常を觀ずるの相あり。一には身死して盡滅すると。二には新新に生滅するとなり。

【一〇】 二種の無常觀。(一)有餘、(二)無餘。又は(一)身死して滅盡する、(二)新新の生滅。

復次に、有が言く、「持戒を重しと爲す。何となれば戒の因緣に依るが故に、次第に漏盡くることを得ればなり」と。有が言く、「多聞を重しと爲す。何となれば智慧に依るが故に、能く所得あればなり」と。有が言く、「禪定を重しと爲す。佛の所說の如くんば、定は能く道を得ればなり」と。有が言く。「十二頭陀を以て重しと爲す、何となれば能く戒行を淨むればなり」と。是の如く各各所行を以て貴しと爲し、更に復た涅槃を懃求せず。佛の言はく、「是の諸の功德は皆是れ涅槃の分に趣く。若し諸法の無常を觀ずれば、是を眞の涅槃道と爲す」と。是の如き等の種種の因緣の故に、諸法は空なり

と雖も、而も是の無常想を說くなり。

復次に、無常想は即ち是れ聖道の別名なり。佛は種種の異名を以て道を說き、或は四念處と言ひ、或は四諦と言ひ、或は無常想と言へり。經の中に說くが如し、「善く無常想を修して、能く一切の欲愛と、色愛と、無色愛と、掉慢とを斷じて、無明盡き、能く三界の結使を除く、是故に即ち名けて道と爲す」と。（一）是の無常想は或は有漏、或は無漏なり。正しく無常を得るは是れ無漏、初めて無常を學するは是れ有漏なり。摩訶衍の中の諸の菩薩は、心廣大にして、種種に一切衆生を敎化するが故に、是の無常想も、亦有漏にして亦無漏なり。若くは無漏にして九地に在り、若くは有漏にして十一地に在り、三界の（二）五受衆を緣じ、四根相應して苦根を除く。凡夫と聖人とは、是の如き等の種種の因緣を得て、無常の功德を說く。苦想とは（三）行者、是の念を作さく、「一切有爲の法は無常なるが故に苦なり」と。

問うて曰く、（四）若し有爲法は無常なるが故に苦ならば、諸の賢聖の人の有爲無漏法も亦應當に苦な

【一】　無常想の有漏無漏。

【二】　五受＝心識作用が其の對象を領納するを受といふ。之に五種あり、一種には憂受、自ら意に入らぬものを領納して憂惱すること、二には喜受、自ら意に入るものを領納して喜悅すること。三には苦受、眼耳等五識の領納する違情の境、即ち意に入らぬものに對して、無分別に苦痛を感ずること。四には樂受、眼覺等五識の領納する順情の境、即ち意に入れるものに對して、無分別に快樂を感ずること、五には捨受、六識通じて領納する不違不順の境に對して、苦もなく樂もなきものを云ふ。

【三】　苦想の義解。

【四】　第六問、若し有爲法は無常なるが故に苦ならば、諸の聖賢の人の有爲法無爲法も亦應に苦なるべきにあらずや。

るべし。答へて曰く、諸法は無常なりと雖も、愛著すれば苦を生じ、著する所なき者は苦なし。

問うて曰く、(一五)諸の聖人あり、著する所なしと雖も亦皆苦あり。舍利弗に風熱の病苦あり。畢陵伽婆蹉は眼痛の苦あり、羅婆那跋提に痔病の苦あるが如し。云何が苦なしと言ふや。答へて曰く、(一六)二種の苦あり。一には身苦、二には心苦なり。是の(一七)諸の聖人は、智慧力を以ての故に、復憂愁・嫉妬・瞋恚等の心苦なきも、已に先世の業因緣により、四大造の身を受け、老病・飢渇・寒熱等の身苦あり、身苦の中に於ても亦復薄少なり。人の了了に他に債を負ふとを知れば、之を償ひ以て苦と爲さず、若し人債を負ふことを憶はざれば、債主に彊奪せられ、瞋り惱んで、苦を生ずるが如し。

問うて曰く、(一八)苦受は是れ心心數の法なり。身は草木の如く、心を離るれば則ち覺する所なし、云何が、聖人は但身苦のみを受くと言ふや。答へて曰く、凡夫の人は苦を受くる時、心に愁惱を生じ、瞋使の爲に使はれ、心但五欲に向ふ。佛の所說の如くんば、凡夫の人は五欲を除き、更に苦を出づるの法あることを知らず、樂受の中に「於いて」貪欲使に使はれ、不苦不樂受の中に「於いて」無明使に使はる。凡夫の人は苦を受くる時、内に三毒の苦を受け、外に寒熱鞭杖等を受く。人の内熱盛な

【一五】第七問、聖人は著心なしと雖も苦あり、舍利弗の風熱病、畢陵伽婆蹉(Pilinda Vatsa)の眼痛、羅婆那跋提(Lāvana Bhadrika)の痔疾等は、其の例證にあらずや。

【一六】二種の苦―(一)身苦、(二)心苦。

【一七】國譯大藏經中の彌蘭陀王問經三六一頁乃至三六四頁を參照せよ。

【一八】第八問、聖人の心苦なく、身苦のみある理由如何。

れば外熱も亦盛なるが如し。經に說くが如くんば、凡夫の人は、愛する所の物を失へば、身心倶に苦を受くること、二箭を雙べ射るが如し。諸の賢聖の人は、憂愁の苦なく、但身苦のみあつて、更に餘の苦なきなり。

復次に、(一九)五識相應の苦、及び外の因緣なる杖楚寒熱等の苦、是を身苦と名け、餘殘を心苦と名く。復次に、我は有爲無漏の法に、著せざるが故に、苦に非ずと言ふ。聖人の身は是れ有漏なり。有漏の法は則ち苦なること、何の咎か有らん。是の末後の身は、受くる所の苦も亦微少なり。

問うて曰く。(二〇)若し無常卽ち是れ苦ならば、道も亦是れ苦なり。云何ぞ苦を以て苦を離れんや。答へて曰く、無常は卽ち是れ苦なりとは、(二一)五受衆の爲の故に說く。道は作法の故に無常なりと雖も、名けて苦と爲さず。何となれば是は能く苦を滅して、諸の著を生せず、空無我等の諸智と和合するを以てなり。但是れ無常にして苦に非ず。諸の阿羅漢の得道の時、偈を說いて言へるが如し。

『我等は生を貪らず、亦復死を樂はず、一心及び智慧もて、時の至るを待つて去るのみ。』

佛の涅槃を取りたまひし時、(二二)阿難等の諸の未離欲の人は、未だ善く八聖道を修せざるが故に皆涕泣憂愁し、諸の欲を離れたる阿那含は皆驚愕し、諸の漏盡の阿羅漢は其の心を變せず、但世間の眼の

【一九】身苦と心苦の義解。
【二〇】第九問、若し無常は卽ち苦ならば、道も亦苦なり。云何ぞ苦を以て苦を離るることを得ん。
【二一】五受蘊は無常にして苦なり、道は無常なりと雖も苦にあらず。
【二二】佛入滅の時、漏盡の人は憂愁せざりし事例。

滅することを疾しと言へるのみ。得道の力を以ての故に、佛に從つて大利益を得、佛の無量の功德を重んずることを知ると雖も、而も苦を生ぜず。是の故に知りぬ、道は無常なりと雖も、苦の因緣に非ざることを。故に名けて苦と爲さず。但五受衆は是れ苦なり。何となれば愛著するを以てなり。無常敗壞するを以てなり。受念處の中の如く、苦の義に此の中に應に廣く說くべし。

復次に、苦とは、身に已に常に是の苦あるも、癡に覆はるるが故に覺せざるのみ。〔偈に〕說くが如し。

「(三三)騎乘して疲れ極るが故に、住立の處を求索し、住立して疲れ極るが故に、坐息する處を求索し、坐久しければ、疲れ極るが故に、安臥の處を求索す。

衆極は作に由つて生ず、初め樂なれば後則ち苦なり。視眴・息の出入・屈伸・坐臥・起・行・立・及び去來、此の事は苦ならざる無し。」

問うて曰く、(三四)是の五受衆は一切皆苦と爲す、苦聖諦の爲の故に苦なり。若し一切皆苦ならば、佛は云何が、「三種の受〔卽ち〕苦受・樂受・不苦不樂受あり」と說きたまひしや。若し苦想を以ての故に苦ならば、云何が苦諦を實苦と爲すと說きたまひしや。答へて曰く、五受衆は一切皆苦なり。凡夫の人は、(三五)四顚倒の因緣を以て、欲の爲に逼られ、五欲を以て樂と爲す。人の患

【三三】 身苦譬喩偈。

【三四】 第一〇問、若し一切皆苦ならば、佛は何故に三受を說き給ひしや。又もし苦想を以ての故に苦ならば、何故に苦諦を實苦と爲すや。

【三五】 四顚倒とは、不淨を淨とし、苦を樂とし、無我を我とし、無常を常なりと爲するをいふ。

に喩れば、大痛息むが故に、以て樂と爲すも、痛は樂に非ざるが如し。佛三種の受を說き給ひしは、世間の爲の故にして、實法の中に於ては是れ樂に非ず。若し五受衆の中に實に樂あらば、佛は何ぞ「五受衆を滅するを名けて、樂と爲す」と說きたまはんや。復次に、其の嗜む所に隨つて、樂心則ち生ずるも、樂には定なきなり。樂若し實に定まらば心の著を待たず、火は實に熱するに、著を待たずして熱するが如し。樂は定なきを以ての故に名けて苦と爲す。復次に、世間顚倒の樂は、能く今世後世の無量の苦の果報を得。故に名けて苦と爲す。譬へば大河の水の中に少毒を著くるも、水をして異ならしむること能はざるが如く、世間顚倒の毒藥は、一切大苦の中に於いて則ち現れず。偈に說くが如し。

『(二六)天より下つて地獄に生ずる時は、本の天上の歡樂の事を憶ひ、宮觀婇女目前に滿ち、園苑浴池以て志を娛ましむ。
又獄火來つて身を燒くこと、大火の竹林を焚くが如きに似たるを見る。是の時、天上の樂を見ると雖も、徒に自ら感結して益する所なし。』

是の苦想に攝する緣は、無常想の如し。是の如く種種に、苦を分別するを名けて、苦想と爲す。

無我想とは、(二七)苦なれば則ち是れ無我なり。何となれば五受衆の中は、盡く皆是れ苦なり、苦想は自在あると無く、若し自在なければ、是れ則ち無我なるを以てなり。若し我に自在あらば、身をして

【二六】樂顚倒觀の偈。
【二七】無我想の義解。

苦あらしむべからず。〔偈に〕說くが如し。

〔二八〕「諸の無智の人あり、身心は是れ我なりと計し、漸やく堅著に近づくが故に、無常の法なることを知らず。

是の身は作者なく、亦受者あること無し。是の身は無生たり。而も種種の事を作すは、六情と〔六〕塵の因緣もて、六種の識生ずることを得ればなり。

〔二九〕三事和合の因緣に從つて觸法生じ、觸法の因緣に從つて、受念の業法生ず。

珠と日と草薪と和合するが故に、火生ずるが如く、情と塵と識と和合して所作の事業成る。相續の相似の有は、種に芽莖あるが如し。」

復次に、〔三〇〕我相は不可得なるが故に無我なり。一切法は相あるが故に、則ち有なることを知る。煙を見て熱を覺るが故に、火ありと知るが如し。

〔三一〕五塵の中に於いては、各各別異なり。故に知んぬ、有情は種種に諸法を思惟し、籌量するが故に、有なりと知り、心心數法〔を檢する〕に、此の我は無相なり、かるが故に無我なりと知ることを。

【二八】無我觀の偈。

【二九】情即ち感官と、塵即ち對象と、識即ち認識とを三事といふ。新譯家は、情を根と譯し、塵を境と譯す。

【三〇】五蘊假和合の個體に於いて、常住自在の實我あり、我の所有ありと執するを我相といふ。換言せば個人の中に、永久不變の特性あるが如く妄想するを我相といふなり。

【三一】五塵とは、眼の對象たる色と、耳の對象たる聲と、鼻の對象たる香と、舌の對象たる味と、身の對象たる觸とをいふ。

問うて曰く、(三二)出入の氣あるは則ち是れ我相なり。視眴と、壽命と、心の苦樂愛憎と、精勤等とは是れ我相なり。若し無我ならば、誰か是の出入の息と、視眴と壽命と、心の苦樂愛憎と、精勤等あらんや。當に我が內に在つて、動發すること有るが故に、壽命も心も亦是れ(三三)我法なり。若し無我ならば牛の御〔者〕なきが如し。我あるが故に能く心を制して法に入り、放逸を爲さず。若し無我ならば、誰か心を制御せん。苦樂を受くる者は是れ我なり。若し無我ならば、樹木の如くにして、則ち苦樂を別つべからずと爲す。愛憎精勤も亦是の如し。我は微細にして、五情を以て知るべからずと雖も、是の相に因るが故に、有と爲すことを知るべし。答へて曰く、是の諸相は皆これ(三四)識相なり。識あれば則ち入出の息、視眴、壽命等あり。若し身を離るれば則ち識無し。汝等の我は常〔住普〕遍なるが故に、死人も亦應に視眴・入出の息・壽命等あるべし。復次に、出入の息等は、是れ色法にして、心の風力に隨ふが故に動發す。此は是れ識相にして、我相に非ず、壽命は是れ心不相應行にして、亦是れ識相なり。

問うて曰く、(三五)若くは無心定の中に入り、或は睡つて夢なき時も、息亦出入して壽命あり、何を以ての故に、皆是を識相と言ふや。答へて曰く、無心定等には、識暫く無しと雖も、久しからずして

【三二】第一一問、若し無我ならば、出入の息、視眴、壽命、愛憎等あるものは誰ぞ。又もし無我ならば心を制するものは誰ぞ。

【三三】我法とは、我といふものと言ふほどの意。

【三四】識相とは、認識の屬性といふ程の意。

【三五】第一二問、無心定中に入りても、熟睡の時も則ち出入の息あり壽命あり、如何ぞ皆是を識相といふべけんや。

必ず還た識を生ず。身を捨てざるが故に、識ある時は多く、識なき時は少し。是の故に識相と名く。人の出で行くに、其の家に主なしと言ふことを得ざるが如し。苦樂憎愛、精勤等は、是れ心相應の共縁にして、心行に隨ふ。心有なるが故に便ち有なり、心無なるが故に便ち無なり。是の故に是は識相にして我相に非ず。復次に、【三】若し我あらば、我に二種あり。若くは常、若くは無常なり。「偈に」說くが如し。

「若し我は是れ常ならば、則ち後身なく、常ならば不生なるが故に亦解脫なし。亦妄なく作なし。
是を以ての故に當に知るべし、罪福を作る者なく、亦受くる者もあること無きを。
我及び我所を捨てて、然して後に涅槃を得、若し實に我あらば、應に我心を捨つべからず。
若し我は無常ならば、則ち應に身に隨って滅すべし、大岸の水に墮るが如く、亦罪福あること無けん。」

是の如く、我及び知者・不知者、作者・不作者は、般若波羅蜜多の中に說くが如し。是の我相を得ざるが故に、一切法中、我なきことを知る。若し一切法中に我なきことを知れば、則ち我心を生ずべからず。若し我なくんば亦我所の心なく、我と我所とを離るるが故に、則ち縛あること無し。若し縛なければ、則ち是れ涅槃なり。是の故に行者は應に無我想を行ずべし。

【三】二種の我——(一)常、(二)無常。

問うて曰く、〔三七〕是の無常・苦・無我は、一事とせんや、三事とせんや。若し是れ一事ならば、三と說くべからず。若し三事ならば、佛は何を以ての故に、無常なれば即ち是れ苦、苦なれば即ち是れ無我なりと說きたまひしや。答へて曰く、是は一事なり。所謂有漏の法を受く。觀門の分別の故に三種の異あり。無常の行相は應に是れ無常相なるべく、苦の行相は應に是れ苦想なるべく、無我の行相は應に是れ無我相なるべし。無常は三界に入らしめず、苦は三界の罪過を知らしめ、無我は則ち世間を捨てしむ。復次に、無常は厭心を生じ、苦は畏怖を生じ、無我は拔出して解脫せしむ。無常とは、佛は、「五受衆は是れ無常なり」と說き、苦とは、佛は、「無常は則ち是れ苦なり」と說き、無我とは、佛は、「苦は即ち是れ無我なり」と說きたまへり。無常とは、佛は、「五受衆の盡滅する相なり」と示したまひ、苦とは、佛は「箭の心に入るが如し」と示したまひ、無我とは、佛は「捨離の相なり」と示したまへり。無常は愛を斷ずるを示し、苦は我習慢を斷ずるを示し、無我は邪見を斷ずるを示す。無常は〔三八〕常見を遮し、苦は今世の涅槃の樂見を遮し、無我は著處を遮す。無常とは世間の著す可き所の常法是なり。苦とは世間の樂處と計する是なり。無我とは世間の我と計す可き所の牢固なる者是なり。是を三相分別の想と爲す。無我想の緣は種種に攝す、苦想の中に說くが如し。

〔三七〕第一三問、此の無常・苦・無我は一事なるか、或は三事なるか。若し一事ならば三を說くべからず。若し三事ならば、佛は何故に無常は即ち苦、苦は即ち無我と說きしか。

〔三八〕常見とは、常住不變の我ありとする見解の義にて、梵語に Sāsvata Vāda と言へるは、常見を執する論者のことなり。

〔三九〕食厭想とは、是の食は不淨の因緣より生ずと觀ずるなり。肉の如きは精血水道より生ず、是を膿蟲の住處と爲す。酥乳酪の如きは血の變じて成る所、爛膿と異なること無し。厨人の汗垢、種種の不淨あり。若し口中に著くれば、腦に爛涎あり。二道より流れ下つて唾と和合し、然して後味を成ず。其の狀吐くが如し。腹門より入つて、地持ち、水爛れ、風動き、火煮ること、釜の糜を熟するに、滓濁は下に沈み、清き者は上に在るが如し。譬へば酒を釀すに滓濁は屎と爲り、清き者は尿と爲るが如し。腰に三孔あり、風吹き、膩汁百脈に散入して、先づ血と和合し、凝り變じて肉と爲り、新肉より脂骨髓を生じ、是の中より身根を生ず。新舊の肉の和合より五情根を生じ、此の五根より五識を生じ、五識は次第に意識を生じ、分別して相を取り、好醜を籌量し、然る後に我我所の心を生じ、等しく諸の煩惱及び諸の罪業を生ず。食を觀ずること是の如し。本末の因緣、種種に不淨なり。內の四大と、外の四大と異なることなし。但我見を以ての故に強ひて我ありと爲すことを知る。

〔三九〕 食厭想の義解。

復次に、思惟すらく、「此の食は墾植し、耘除し、收穫し、蹂治し、舂磨し、淘汰し、炊煮して卽ち成ず、功を用ふると甚だ重し。一鉢の飯を計るに、夫の流汗の集合を作す、之を量るに食は少く汗は多し。此の食は之を作るに功重く、辛苦あること是の如し。口に入れて之を食すれば、卽ち不淨と成り、所として一も直きことなく、宿昔の間に變じて屎尿と爲る。本是れ美味、人の嗜む所なるも、變

じて不淨と成れば、惡んで見ることを欲せず」と。行者自ら思へらく、「此の如きの弊食に、我若し貪著せば、當に地獄に墮して、燒けたる鐵丸を噉ふべく、地獄より出でては、當に畜生の牛羊駱駝となりて、其の宿債を償ふべく。或は豬狗と作つて常に糞除を噉はん」と。是の如く食を觀ずれば、則ち厭想を生ず。食を厭ふに因るが故に、五欲に於いて皆厭ふ。〔四〇〕譬へば一婆羅門の、淨潔の法を修し、事の緣あるが故に不淨國に到り、自ら思ふが如し。「我當に云何が此の不淨を免るることを得べき、唯當に乾食すべくんば、淸淨なることを得べし」と。一老婆の白髓餅を賣るを見て、之に語つて言く、「我は因緣あつて此に住すること百日なり、常に此の餅を作つて送り來れ、當に多く價を與ふべし」と。老母は日日に餅を作つて之に送る。

【四〇】一人の婆羅門、老母の白餅を食へる因緣。

婆羅門は貪著して飽食し歡喜す。老母は餅を作るに、初の時は白淨なり、後轉た色なく味なし、即ち老母に問ふ、「何に緣つて爾るや」と。〔老〕母言く、「癰瘡差ゆるが故に」と。婆羅門問ふ、「此の言は何の謂ぞ」と。〔老〕母言く、「我が大家の夫人、隱處に癰を生ず。麪酥甘草を以て之に捫くれば、癰熟し膿出づ、蘇餅を和合すること、日日是の如し。此を以て餅を作り汝に與ふ、是を以て餅好し。今や夫人の癰は差えたり、我當に何處にか更に得べき」と。婆羅門は之を聞きて、兩拳を以て頭を打ち胸を搥いて呼嗟し、「我當に云何がすべき、此の淨法を破せり、我、了らんとす」と。緣事を棄捨して本國に馳せ還る。行者も亦是の如く、〔是〕の飲食に著して歡喜し樂噉し、其の好色細滑、香美の口に可な

るを見て不淨を觀ぜず、後に悔ゆとも將た何ぞ及ばん。若し能く食の本末を觀ずる、是の如くして、惡厭の心を生ずれば、食欲を離るるとに因つて、四欲皆捨て、欲界の中の樂に於て悉く皆捨離し、此の五欲を斷じ、(四一)五下分結に於て亦斷ず。是の如き等の種種の因緣惡罪に復た染著せざる、是を食厭想と名く。

問うて曰く (四二)無常・苦・無我想は、無漏の智慧と相應し、食厭等の四想は有漏の智慧と相應す、次第の法として應に前に在るべし、今何を以てか後に說くや。答へて曰く、(四三)佛法に二種の道あり。(四四)見道と(四五)修道なり。見道の中に是の三想を用ゐて諸の邪見等を破して聖果を得れども、猶ほ未だ欲を離れず、欲を離れんが爲の故に三想の次第に是の食厭等の四想を說き、婬欲等の諸の煩惱を離るることを得。初の三想は(四六)見諦道の中に示し、四想は修道を學するを示さんが爲にし、後の三想は(四七)無學道に示す。初め身念處を習ふ中に、食厭想ありと雖も、功用少きが故に

【四一】五下分結とは、有情を欲界に繫縛する五種の煩惱を言ふ。一に貪結、貪欲の煩惱。二に瞋結、瞋恚の煩惱。三に身見結、我見の煩惱。四に戒取見結、非理無道の戒を執する煩惱。五に疑結、眞理を疑惑する煩惱。

【四二】第一四問、無漏の智慧に相應する無常想等と、有漏の智慧に相應する食厭想等と前後を顚倒して說く理由如何。

【四三】佛法に二種の道あり―(一)見道、(二)修道。

【四四】見道とは、初めて無漏の智慧を生じて、眞理を照見する位なり。道とは道路の義にして、學人進取の道路なり。

【四五】修道とは、既に上の見道に於いて、一旦、眞理を照見し、更に眞觀を修習する位をいふ。

【四六】見諦道とは、眞理を審悟する道をいふ。

【四七】無學道とは、三界の煩惱を斷じ已り、眞理を證り盡して、更に學修を要せざる圓滿の智慧、卽ち阿羅漢の無漏智なり。換言せば最早學すべき道なきの謂なり。

佛は說きたまはず。今、須陀洹、斯陀含の欲を度するが爲の故に、無我想の次第に、食厭等の四想を說けり。

【四八】一切世間不可樂想とは、若し世間の色欲、滋味、車乘、服飾、廬觀、園宅の種種の樂事を念ずれば、則ち樂想を生じ、若し世間の衆の惡罪の事を念ずれば、則ち心に厭想を生ず。何等か惡事なる。【四九】惡事に二種あり、一には衆生、二には土地なり。衆生に八の苦患あり、生と老と病と死と、恩愛別離と、怨憎同處と、所求不得となり。略して之を言へば、五受衆の苦なり。衆生の罪に、婬欲多きが故に、好醜を別たず、父母師長の敎誨に隨はず、慚愧あること無く、禽獸と異なること無し。瞋恚多きが故に輕重を別たず、瞋毒狂發し、乃至佛語を受けず、法を聞くことを欲せず、惡道を畏れず、横ままに杖楚を加へて、他の苦を知らず、大闇中に入つて都て見る所なし。愚癡多きが故に、求むる所に道を以てせず、事緣を識らず、角を搆つて乳を求むるが如く。無明覆ふが故に、日照を蒙ると雖も、永く見る所なし。慳貪多きが故に其の舍は冢の如く、人之に向はず。憍慢多きが故に賢聖を敬はず、父母に孝ならず、憍逆にして自ら壞し、永く直き所なし。邪見多きが故に今世後世を信ぜず、罪福を信ぜず、共に處す可らず。是の如き等の諸の煩惱多きが故に、弊敗して爲に直き所なし。惡業多きが故に、無間の罪を造り、或は父母を殺し、或は賢聖を傷害し、或は時の榮貴を要し、忠貞を讒賊し、親戚を殘

【四八】一切世間不可樂想の義

【四九】二種の惡事

害するなり。
復次に、世間の衆生は、善好の者は少く、弊惡の者は多し。或時は善行ありと雖も、貧賤鄙陋なり。或は富貴端正なりと雖も、而も所行は不善なり。或は布施を好むと雖も、而も貧乏にして財なく、或は富んで財寶ありと雖も、而も慳惜貪著して布施を肯せず、或は人の思ふ所あり、默して所說なきを見ては、便ち矯高自ら蓄へ、下つて物に接せずと謂ひ、或は好く下つて物に接し、恩惠普く潤ふを見ては、便ち欺誑諂飾すと謂ひ、或は能く語り、善く論ずるを見ては、便ち是れ小智を恃んで、以て憍慢を爲すと謂ひ、或は質直なる好人を見ては、便ち共に欺誑し調捉し、引挽し凌易す。或は善心柔輭なるを見ては、便ち共に輕陵し蹋蹴し、理を以て遇せず。若くは持戒清淨なる者を見ては、便ち所行矯異なりと謂つて、輕賤すること數ならず。是の如く衆生は弊惡にして、一も樂しむべき無し。土地の惡とは、一切の土地は多衰にして吉なく、寒熱飢渴、疾病惡疫、毒氣侵害、老病死の畏、處として有らざるなく、身の所去の處には衆苦之に隨ひ、處として免るることを得ると無し。好國あり、豐樂安隱なりと雖も、多く諸の煩惱の爲に惱まさる、則ち樂土と名けず。一切は皆二種の苦あり、身苦と心苦とにして、國として有らざる無し。「偈に」說くが如し。

【五〇】 天下無樂土の偈。

(五〇)「有る國土は多寒なり。或は有る國は多熱なり。有る國は救護なく、或は有る國は多惡なり。

有る國は常に飢餓し、或は有る國は多病なり、有る國は福を修せず、是の如く樂處なし。』衆生の土地には是の如きの惡あり、世間を思惟するに、一として樂しむ可き無く、欲界の惡き事是の如し。〔五一〕上二界は、死する時と〔五二〕退する時とに、大に懊惱を生ずること、下界よりも甚だし。譬へば極めて高き處より墮つれば、摧碎し爛壞するが如し。

問うて曰く、〔五三〕無常想、苦想、無我想、一切世間不可樂想は、何等の異あれば別に説くや。答へて曰く、二種の觀あり、總觀と別觀となり。前は總觀にして、此の中は別觀なり。復た二種の觀あり、法觀と衆生觀となり。前は一切法を呵するの觀にして、此の中は衆生の罪惡の不同を觀ずるなり。復次に、前者は無漏道にして、此の中には有漏道なり。前は見諦道にして、今は〔五四〕思惟道なり。是の如き等の種種の差別は、一切地中の攝にして、三界の法を緣ず。是を一切世間不可樂想と名く。死想とは、死念の中に説くが如し。不淨想とは、身念處の中に説くが如し。

斷想と離想と盡想とは、〔五五〕涅槃の相を緣じて諸の結使を斷ずるが故に斷想と名け、〔五六〕結使を離るるが故に離想と名け、〔五七〕諸の結使を盡くすが故に盡想と名く。

〔五一〕上二界、即ち色界と無色界との苦。
〔五二〕退する時とは、果報盡きて上界より下界に墮つる時をいふ。
〔五三〕第一五問、無常想・苦想・乃至一切世間不可樂想の差異如何。
〔五四〕思惟道とは、前に註釋せる修道と同じ。
〔五五〕斷想の義解。
〔五六〕離想の義解。
〔五七〕盡想の義解。

問うて曰く、（五八）若し爾らば一想にして便ち足れり、何を以てか三を說くや。答へて曰く、前の一法を三種に說く。無常は卽ち是れ苦、苦は卽ち是れ無我なるが如し。此も亦是の如く、一切世間の罪惡は、深重なるが故に、三種の呵あり。大樹を伐るに、一下を以て斷ず可らざるが如く、涅槃微妙の法は、昔未だ得ざる所、是の故に種種に讚し、名けて斷想・離想・盡想と爲す。復次に、三毒を斷ずるが故に、名けて斷と爲し、愛を離るるが故に、名けて離と爲し、一切の苦を滅して、更に生ぜざるが故に、名けて盡と爲す。復次に、行者の煖法と頂法と忍法と世間第一法との、正智慧の觀に於て、諸の煩惱を遠ざくる、是を離想と名け、無漏道を得て、諸の結使を斷ずる、是を斷想と名け、涅槃に入る時、五受衆を滅して、復た相續せざる、是を盡想と名く。斷想は有餘涅槃、盡想は無餘涅槃、離想は二涅槃の方便門なり。是の三想は、有漏と無漏との故に、一切地の中に攝す。

【五八】第一六問、斷想・離想・盡想を別說する理由如何。

【五九】法智（Dharma jñāna）は、欲界の、苦集滅道を證する智なり。

初品の中の十一智を釋す。

【經】十一智とは、法智、比智、他心智、世智、苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智、如實智なり。

【論】（五九）法智とは、欲界繫の法の中の無漏智なり。欲界繫の因の中の無漏智は、欲界繫の法の滅の中の無漏智にして、欲界繫の法を斷ずと爲し、道の中の無漏智、及び法智品の中の無漏智なり。

(六〇)比智とは、色無色界の中に於ける無漏智なること、亦是の如し。(六一)他心智とは、欲界色界の繫の現在の、他の心・心數の法・及び無漏の心・心數法の少分を知るなり。(六二)世智とは、諸の有漏の智慧なり。(六三)苦智とは、五受衆の無常、苦、空、無我を觀ずる時に得る無漏智なり。(六四)集智とは、有漏法の因因集まつて緣を生ずるを觀ずる時の無漏智なり。(六五)滅智とは、(六六)滅止妙出を觀ずる時の無漏智なり。(六七)道智とは、(六八)道正行達を觀ずる時の無漏智なり。(六九)盡智とは、我苦を見已り、集を斷じ已り、證を盡し已り、道を修し已れりと。是の如く念ずる時、無漏の智慧の見明かに覺するなり。(七〇)無生智とは、我は苦を見已つて復た更に見ず、集を斷じ已つて復た更に斷ぜず、證を盡くし已つて復た更に證せず、道を修し已つて復た更に修せずと、

【六〇】比智(Anvayajñāna)は、上二界の、苦集滅道を證する智なり。
【六一】他心智(Paracittajñāna)とは、他人の心を知る智なり。
【六二】世智(Saṃvṛtijñāna)とは、一般世俗の凡夫の智なり、煩惱と相應するが故に有漏智と稱す。
【六三】苦智(Duḥkhajñāna)とは、三果の苦諦を證する智なり。
【六四】集智(Samudayajñāna)とは、三界の集諦を證する智なり。
【六五】滅智(Nirodhajñāna)とは、三界の滅諦を證する智なり。
【六六】滅止妙出は、滅靜妙離に同じ。
【六七】道智(Mārgajñāna)とは、三界の道諦を證する智なり。
【六八】道正行達は道如行出に同じ。
【六九】盡智(Kṣayajñāna)とは、煩惱を斷じ了りたる時に生ずる自信の智なり。
【七〇】無生智(Anutpādajñāna)とは、利根の阿羅漢にかぎりて有する智なり。既に煩惱を斷盡し了れば、更に煩惱を斷盡する事なきを無生といふ。此の無生を自覺して、我再び煩惱を斷することなしと知るを無生智といふ。

是の如く念ずる時、無漏の智慧の見明かに覺するなり。(七二)如實智とは、一切法の總相と別相とを如實に正しく知つて、罣礙あること無きなり。是の法智は、欲界繫の法、及び欲界繫の法の因、欲界繫の法の滅を緣じて、欲界繫の法を斷ずと爲す。道比智も亦是の如し。世智は一切法を緣じ、他心智は他心の有漏無漏の心・心數の法を緣じ、苦智と集智とは、五受衆を緣じ、滅智は智を緣じ、盡を緣じ、道智は無漏の五衆を緣じ。盡智と無生智とは俱に四諦を緣ず。十智のうち、一は有漏、八は無漏、一は當に分別すべし。他心智は有漏の心を緣じ、是の有漏は無漏の心を緣ず。是の無漏の法智に、法智及び他心智と、苦智と集智と滅智と道智と、盡智と無生智の少分とを攝す。比智も亦是の如し。世智には、世智と及び他心智の少分を攝し、他心智には、他心智と及び法智と、比智を世智と道智と、盡智と無生智の少分とを攝し、苦智には、苦智と及び法智と、比智と盡智と、無生智の少分とを攝す。集智と滅智とも亦是の如し。道智には、道智と及び法智と、比智と他心智と、盡智と無生智の少分とを攝し、盡智には、盡智と及び法智と、比智と他心智と、苦智と集智と、滅智と道智の少分を攝す。無生智も亦是の如し。九智は八根と相應して、慧根・憂根・苦根を除き、世智と十根と相應して慧根を除く。法智・比智・苦智は、空三昧と相應し、法智・比智・滅智・盡智・無生智は、無相三昧と相應し、法智・比智・他心智・苦智・集智・道智・盡智・無生智は、無作三昧と相應し、法智・比智・世智・苦智・盡智・無生智

【七二】如實智(Yathābhūtajñāna ヤターブータチニャーナ)とは、物心兩界の一切事物を、凡て如實に正知して、罣礙なきをいふ。

は、無常想・苦想・無我想と相應し、世智は、中の四想と相應し、法智・比智・滅智・盡智・無生智は、後の三想と相應す。有る人の言く、「世智は或は離想と相應し。一法智は九智を緣じて比智を除く。比智も亦是の如し」と。世智・他心智・盡智・無生智は十智を緣じ、苦智・集智は世智及び有漏の他心智を緣じ、滅智・無生智は道智を緣じ。九智を緣じて世智を除く。法智・比智は十六相、他心智は四相、苦集滅道は各各四相、盡智・無生智は倶に十四相にして、空相・無我相を除き、煖法・頂法・忍法の中の世智は十六相、世間第一法の中の世智は、四想にして無相を除く。初に無漏心に入つて一の世智を成就し、第二心に苦智・法智を增し、第四心に比智を增し、第六心に集智を增し、第十心に滅智を增し、第十四心に道智を增す。若し欲を離るる者は他心智を增し、無學道に盡智を增して不壞解脫を得、無生智を增す。初め無漏心の中に智を修せざれば、第二心の中に現在未來の二智を修し、第四心の中に現在の二智を修し、未來の三智を修し。第六心の中に現在未來の二智を修し。第八心の中に現在の二智を修し、未來の三智を修し、第十心の中に現在未來の二智を修し、第十二心の中に現在の二智を修し、未來の三智を修し、第十四心の中に現在未來の二智を修し。第十六心の中に現在の二智を修し、未來の六智を修し、若し欲を離るれば七智を修す。須陀洹に欲界の結使を離れんと欲し、十七心の中に七智を修す、他心智・盡智・無生智を除く。第九の解脫心の中に八智を修す、盡智・無生智を除く。信解の人は見得と作し、雙道の中に六智を修して、他心智・世智・盡智・無生智を除く。七地の欲を離るる時、無

礙道の中に七智を修して、他心智・盡智・無生智を除く。解脫道の中に八智を修して盡智・無生智を除く。有頂の欲を離るる時、無礙道の中に六智を修して他心智・世智・盡智・無生智を除く。八解脫道の中に七智を修して世智・盡智・無生智を除く。無學の初心、第九の解脫、〔七二〕不時解脫の人は、十智及び一切の有漏、無漏の善根を修す。若し時解脫の人は、九智及び一切の有漏、無漏の善根を修す。是の如き等の種種は、阿毘曇門に廣く分別するが如し。如實智の分別の相は、此を般若波羅蜜〔多〕の後品に廣く說けり。

復次に、有る人の言く、「法智とは欲界の五衆の、無常・苦・空・無我なるを知り、諸法は因緣の和合より生ずるを知る。所謂る無明は諸行に因緣たり、乃至生は老死に因緣たるなり。佛、須尸摩梵志の爲に說きたまへるが如し。「先づ法智を用ゐて諸法を分別し、後に涅槃智を用ふ」と。比智とは現在の五受衆の無常苦空無我を知るなり。過去未來、及び色無色〔二〕界の中の、五受衆の無常苦空無我も亦是の如し。譬へば現在の火の熱して能く燒くを見、此を以て過去未來、及び餘國の火も亦是の如きを比知するが如し。他心智とは他の衆生の心心數法を知るなり。

問うて曰く、〔七三〕若し他の心心數法を知らば、何を以ての故に、但他心を知ると名くるや。答へて曰く、心は是れ主なるが故に、但他心を知ると名く。若し心を說けば、當に已に心數法を說けるを知る

【七二】不時解脫の人。阿羅漢の根性鈍敏にして、好時節好因緣を待つの要なく、隨意に定に入り、煩惱を解脫するを不時解脫といふ。

【七三】第一七問、他の心心所を知るに、今但他心と名くる理由如何。

べし。世智とは、名けて假智と爲す。聖人は實法の中に於いて知り、凡夫の人は但假名の中にのみ知る。是の故に假智と名く。棟梁椽壁を名けて、屋と爲すが如く、但是の事のみを知つて、實義を知らざるなり。是を世智と名く。苦智とは、苦慧を用ゐて五受衆を呵するなり。

問うて曰く、（七四）五受衆は、亦無常、亦苦、亦空、亦無我なり、何を以ての故に但苦智を說いて、無常空無我智を說かざるや。答へて曰く、苦諦の爲の故に苦智と說き、集諦の故に集智と說き、滅諦の故に滅智と說き、道諦の故に道智と說くなり。

問うて曰く、（七五）五受衆には種種の惡あり、何を以てか但苦諦のみを說いて、無常諦と空「諦」と無我諦とを說かざるや。答へて曰く、若し無常「諦」と空「諦」と無我諦と說くも、亦法相を壞せず、衆生は多く樂に著して、苦を畏るるを以ての故に、佛は、「世間は一切皆是れ苦なり」と呵し、捨離せしめんと欲したまふが故なり。無常・空・無我の中には、衆生は大に畏れざるが故に說かず。復次に、佛法の中に五受衆の異名あり、名けて苦と爲す。是の故に但苦智を說く。是の苦智は或は有漏、或は無漏なり。若し煖法と頂法と忍法と、世間第一法とに在つては、是れ有漏なるも、若し見諦道に入れば、是れ無漏なり。何となれば煖法より、世間第一法の中に至るまで、四種に苦を觀ずるが故なり。集智・滅智・道智も亦是の如し。

【七四】第一八問、五受蘊は苦・空・無常・無我なり、今それ單に苦智を說いて、集智乃至無我智を說かざる理由如何。

【七五】第一九問、五受蘊中、但苦諦のみを說いて、無常諦・空諦・無我諦を說かざる理由如何。

復次に、苦智は、苦相の實に生ぜざるを知るに名け、集智は、一切法の離れて和合すること有るなきを知るに名け、滅智は、諸法の常に寂滅にして、涅槃の如きを知るに名け、道智は、一切法の常に清淨にして、正も無く邪も無きことを知るに名け、盡智は、一切法の所有なきことを知るに名け、無生智は、一切の生法は、不實不定の故に、不生なることを知るに名く。如實智は、十種の智の知る能はざる所を、如實智を以ての故に、能く十智の各各の相、各各の緣、各各の別異、各各の有する觀法を知る「に名く」。是の如實智の中には、相なく、緣なく、別なく、諸の觀法を滅し、亦觀ずること有らず。(七六)十智の中には法眼と慧眼とあり。如實智の中には唯佛眼のみ有り。十智は阿羅漢・辟支佛・菩薩も共に有すれども、如實智は唯獨り佛のみ有す。何となれば獨り佛のみ不誑法を有したまふを以てなり。是の故に如實智は、獨り佛のみに有ることを知る。復次に、(七七)是の十智は、如實智の中に入れば、本の名字を失して、唯一實智のみあり。譬へば十方の諸流水は、皆大海に入れば、本の名字を捨てて、但大海と名くることを知るが如し。是の如く種種に、十一智の義を分別することは、此の中に略說せり。

【七六】十智は三乘に通じ、如實智は唯佛のみ之を有す。

【七七】十智は如實智に入れば、本名を失すること、恰も百川の大海に朝宗して、其の本名を失ふが如し。

【經】三三昧とは、有覺有觀三昧と、無覺有觀三昧と、無覺無觀三昧となり。

［論］一切の禪定の（七八）攝心は、皆名けて（七九）三摩提と爲す。是の心は、無始世界より來、常に曲つて端ならず、是の正心行處を得れば、心則ち端直なり。譬へば蛇行の常に曲なるを、竹筒の中に入るれば則ち直なるが如し。是の三昧の三種のうち、（八〇）欲界と（八一）未到地と、初禪とは覺と觀とに相應するが故に、有覺有觀禪と名け、中間は但觀と相應するが故に、無覺有觀と名け、第二禪より乃至有頂地は、覺と觀とに相應せざるが故に、無覺無觀と名く。

問うて曰く、（八二）三昧と相應する心數法は乃ち二十に至る、何を以てか但覺と觀とを說くや。

答へて曰く、是の覺觀は三昧を嬈亂す、是を以ての故に是の一事を說くなり。［こは］善なりと雖も、而も是れ三昧の賊にして、捨離すべきこと難し。有る人の言く、「心に覺觀あれば三昧なし。是の故に佛、有覺有觀三昧と說きたまふは、但牢固ならず。覺觀の力小微なれば、是の時三昧あることを得べし」と。是の覺觀は能く三昧を生じ、亦

【七八】有覺有觀等の三種の三昧の義解。
【七九】秦に正心行處と言ふ。
【八〇】欲界（Kāma-dhātu）とは、婬欲と食欲と、二欲の强き有情の住する處をいふ。
【八一】未到地は、新譯に未至定といふ。上界の八地（初禪・二禪・三禪・四禪・及び空處・識處・無所有處・非想非非想處）に各各根本定と近分定とあり。欲界の思惑を斷じて修する禪定を初禪の根本定とし、乃至無所有處の思惑を斷じて修する禪定を非想非非想處の根本定とす。又、欲界の煩惱を伏して、初禪の根本定に近似せる禪定を發するを初禪の近分定とし、乃至無所有處の煩惱を伏して、非想非非想處の根本定に近似せる禪定を發するを、非想非非想處の近分定とす。此の如く八根本定と八近分定とある中にて、初禪の近分定は、他の近分定に異なる點あれば、別名を立てて未至定といふなり。未だ根本に至らずといふ義にして、近分といふに同じ。
【八二】第二〇問、三昧相應の心心所は二十あり、今何故に但覺と觀とを說くや。

能く三昧を壞す。譬へば風の能く雨を生じ、亦能く雨を壞するが如し。三種の善の覺觀は能く初禪を生じ、初禪を得る時、大歡喜の覺觀を發するが故に、心散じて還つて失す、是を以ての故に、但覺觀を說く。

問うて曰く、〔六一〕覺と觀とは何の差別あるや。答へて曰く、麁なる心相を覺と名け、細なる心相を觀と名く。初め緣中に心發する時の相を覺と名け、後好醜を分別し籌量するを觀と名く。三種の麁覺あり、欲覺と瞋覺と惱覺となり。三種の善覺あり、〔六二〕出要覺と無瞋覺と無惱覺となり。三種の細覺あり、親里覺と國土覺と不死覺となり。六種の覺は三昧を妨げ、三種の善覺は能く三昧の門を開く。若し覺觀過多なれば、還つて三昧を失す。風は能く船を使ふも、風過〔多〕なれば則ち船を壞るが如し。是の如く種種に覺觀を分別す。

問うて曰く、〔六五〕經に三種の法を說けり、有覺有觀法・無覺有觀法・無覺無觀法と、有覺有觀地・無覺有觀地・無覺無觀地となり。今何を以てか但三種の三昧を說くや。答へて曰く、妙にして用ふべき者を取るなり。有覺有觀法とは、欲界・未到地・初禪の中の覺觀と相應する法にして、若くは善、若くは不善、若くは無記なり。無覺有觀法とは、禪の中間の觀と相應する法にして、若くは善、若くは無記なり。無覺無觀法とは、覺觀の法を離れたる一切の色、心不相應行及び無

【六一】第二十一問、覺と觀との差別を問ふ。
【六二】出要覺とは、生死を出離する要道の覺[illegible]といふ義なり。
【六五】第二十三問、經に三種の三昧を說けるに、今但三種の三昧を說くは何故なるか。

爲法なり。有覺有觀地とは、欲界・未到地・梵世なり。無覺有觀地とは、禪の中間にして、善く是の地を修すれば大梵王と作る。無覺無觀地とは、一切の光音と、一切の遍淨と、一切の廣果と、一切の無色地となり。中に於いて上妙なる者は、是れ三昧なり。何等か是れ三昧なる。空等の三三昧、乃至金剛及び阿羅漢・辟支佛の諸の三昧、觀十方佛三昧、乃至首楞嚴三昧、斷一切疑三昧、乃至三昧王等の諸佛の三昧。是の如く種種に分別して、略して三三昧の義を說き竟んぬ。

經 三根とは未知欲知根と、知根と、知已根となり。

論 (八六)未知欲知根とは、無漏の九根の和合せる(八七)信行(八八)法行の人の、見諦道の中に於けるを(八九)未知欲知根と名く。所謂信等の五根と(九〇)喜〔根〕(九一)樂〔根〕(九二)捨根と(九三)意根となり。信解見得の人の思惟道の中にて、是の九根轉ずるを(九四)知根と名け、無學道の中の是の九根を(九五)知已根と名く。

問うて曰く、(九六)何を以ての故に二十二根の中に於て但是の三根を取るや。答へて曰く、(九七)利

【八六】三根の義解。
【八七】信行とは、他の教を信じて行ずるをいふ。卽ち鈍根にして、聞慧を成ずるなり。
【八八】法行とは、自ら聖法に依て行ずるをいふ。卽ち利根にして、思慧を成ずるなり。
【八九】Anājñātamājñāsyāmīndriya
【九〇】Saumanasyendriya
【九一】Sukhendriya
【九二】Upekṣendriya
【九三】Manaindriya
【九四】Ajñendriya
【九五】Ajñātavīndriya
【九六】第二三問、二十二根中、但是の三根のみを取る理由如何。
【九七】根(Indriya)の義解。
【九八】餘の十九根の中、簡出の

解了了自在なる相、是を名けて根と爲す、餘の〔九八〕十九根は根相を具足せざるが故に取らず。是の三根は利し、能く直入して涅槃に至り、能く諸の有爲法の中の主なるが故に自在を得、能く諸根に勝れたり。復次に、十根は但有漏自得にして利益する所なきが故に、〔又〕九根は不定にして、或は有漏、或は無漏なるが故に、菩薩は應に具足すべしと說かず。

問うて曰く、〔九九〕十想は亦有漏亦無漏なり、何を以ての故に應に具足すべしと說くや。答へて曰く、十想は皆是れ助道にして、涅槃を求むる法なり。信等の五根は是れ善法なりと雖も、盡く涅槃を求めず、阿毗曇の中に說くが如し。「誰か信等の根を成就して善根を斷せざる者ある」と。復次に、若し五根清淨なれば、變じて無漏と爲し、三根の中に、已に攝す。是三根の中には必ず意根あり、三受の中には必ず一受あり、是の故に但三根を說く。

復次に、二十二根には、善あり、不善あり、無記ありて〔混〕雜す、是の故に應に具足すべしと說かず。是の三根は〔一〇〇〕受衆〔一〇一〕行衆〔一〇二〕識衆に攝す。未知欲知根は六地に在り。知根と知已根とは九地に

喜、樂、捨、三根を除ける十五根の名義は左の如し。
(一)Cakṣurindriya 眼根
(二)Śrotrendriya 耳根
(三)Ghrāṇendriya 鼻根
(四)Jihvendriya 舌根
(五)Kāyendriya 身根
(六)Strīndriya 女根
(七)Puruṣendriya 男根
(八)Jīvitendriya 命根
(九)Duḥkhendriya 苦根
(一〇)Daurmanasyendriya 憂根
(一一)Śraddhendriya 信根
(一二)Vīryendriya 精進根
(一三)Smṛtīndriya 念根
(一四)Samādhīndriya 定根
(一五)Prajñendriya 慧根

【九九】 第二四問、十想も亦有漏無漏に通ず、今それ之を具足すべしと說く理由如何。

【一〇〇】 Vedanāskandha は、新譯に受蘊といふ。

【一〇一】 Saṃskāraskandha は、新譯に行蘊といふといふ。

【一〇二】 Vijñānaskandha は、新譯に識蘊といふ。

在り。三根は四諦を緣じ六想と相應す。未知欲知根は三根の因、知根は二根の因、知已根は但知已根の因なり。未知欲知根は次第に二根を生じ、知根は次第に或は有漏根を生じ、或は知根を生じ、或は知已根を生ず。知已根は或は有漏根を生じ。或は知已根を生ず。是の如き等は阿毘曇門を以て廣く分別して說けり。復次に、【一四】未知欲知根を諸法實相と名く。未知欲知の故に信等の五根を生じ、是の五根の力の故に能く諸法實相を得。人の初めて胎中に入りて二根[卽ち]身根と命根とを得るが如し。爾の時に段肉未だ具せず、諸根未だ別知する所あること能はず。五根を成就すれば能く五塵を知るが如し。菩薩も亦是の如く、初發心より作佛を欲すれども、未だ是の五根を具足せず、願ありて諸法實相を知らんと欲すと雖も、知ることを得ること能はず。菩薩はこの信等の五根を生ずれば、則ち能く諸法實相を知る、眼の如きは四大及び四大造色の和合するを名けて眼と爲す。先づ四大と四大造色ありと雖も、未だ清淨ならざるが故に眼根と名けず、善根を斷ぜざるの人は信ありと雖も、未だ清淨ならざるが故に名けて根と爲さず。若し菩薩、是の信等の五根を得れば、是の時能く諸法の相は不生不滅、不垢不淨、非有非無、非取非捨、常寂滅、眞淨なること、虛空の如く、示す可らず、說く可らず、一切語言の道過ぎ、一切の心心數法の所行を出づると、涅槃の如し。是れ則ち佛法なりと信ず。菩薩は能く信根の力を以ての故に、能く精進根の力を受くるが故に、懃行して不退不轉なり。念根の力の故に、不善法をして入らしめず、諸の善法を攝

【一四】未知欲知根を諸法實相と名く。

す。定根の力の故に、心の五欲の中に散ずるを能く實相の中に攝し、慧根の力の故に、佛智慧の中に於いて、少多の義味を得て壞す可らず。五根所依の意根は必ず受と倶にして、若くは喜、若くは樂、若くは捨なり。是の根に依つて菩薩の位に入り、乃至未だ無生法忍の果を得ず。是を未知欲知根と名く。此の中に諸法實相を知ること、了了なるが故に知と名く。是より無生法忍の果を得、阿鞞跋致地に住し、受記を得、乃至十地を滿てて、道場に坐して金剛三昧を得。其の中間に於て名けて知根と爲す。一切の煩惱の習を斷じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切の法を知る可く、智慧遍滿するが故に、名けて知已相と爲す。

卷の第二十四

初品の中の十力を釋す。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩、遍ねく、佛の十力と四無所畏と四無礙智と十八不共法と大慈大悲を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を習行すべし。

【論】問うて曰く、(一)是十力と四無所畏等は是れ佛の無上法なり。應當に前に說くべし、何を以ての故に先づ九想八念等を說くや。答へて曰く、六波羅蜜〔多〕は是れ菩薩の用ふべき所なれば先に已に說けり。(二)三十七品乃至(三)三無漏根は、是れ聲聞法なり。菩薩は是の六波羅蜜〔多〕を行じて力を得るが故に、聲聞辟支佛地を過ぎんと欲し、亦聲聞辟支佛に向へる人を敎化して、佛道に入らしめんと欲す、是故に是の小乘の法の、一切衆生を捨てて利益する所なきを呵す。若し諸の聲聞人は言く、「汝は是れ凡夫の人なり、未だ結使を斷ぜず、是の法を行ずると能はず」と。是の故に空しく呵す。是の故に佛の言はく、「菩薩は應に三十七品等を具足すべし」と。(四)諸の聲聞法は不可得なるが故に、是の諸法を行ずと雖も不可得なるを以ての故に、

【一】第一問、十力、四無所畏等を措て、先づ九想八念等を說く理由如何。

【二】三十七品とは、前出の四念處と四正勤と、四如意足と五根と、五力と、七覺支と、八正道となり。

【三】三無漏根とは、未知當知根と、已知根と、具知根とをいふ。

【四】菩薩の疾く涅槃を取らざる理由。

衆生の爲に邪行を行ずるが爲の故に、此の正行を行じて、是の諸法の不可得空を捨てず、亦疾く涅槃の證を取らず。若し菩薩、是の小乘を解せず行せずして、而も但訶せば、誰か當に肯へて信ずべき。譬へば釋迦牟尼佛の如きは、若し先づ六年の苦行を行せずして、訶して非道と言はば、人の信受すること無けん。是の故に自ら苦行を行ずること餘人に過ぎたり。佛道を成ずる時、是の苦行道を訶するに、人皆信受す。是の故に六波羅蜜の後に次第に聲聞法を行ず。復次に、此れ但是の聲聞法のみに非ず、是の法の中には和合して、衆生の意を捨てず、一切の佛法を具足し、不可得空智を以ての故に、菩薩法と名く。

問うて曰く、(五)若し菩薩は三十七品の諸法を具足せば、云何が聲聞法の位に入らざるや。答へて曰く、具足とは具足して觀知し、而も證を取らず、了了に觀知するが故に、具足と名く。佛の說きたまふが如し。

『一切のものは杖痛を畏れ、壽命を惜まざるはなし。己を恕して喩と爲すべく、杖を群生に加へざれ。』

(六)一切は杖痛を畏ると言ふと雖も、(七)無色界の衆生は身なく、(八)色界には身ありと雖も、而も鞭杖なし。欲界の中の諸佛、轉輪聖王、夜摩天已上は皆杖楚を畏れず、杖處を得るとを畏るる者の爲の

【五】第二問、菩薩の聲聞法に入らざる理由如何。

【六】一切といふ語に總別の異あり。

【七】無色界(Arūpa-dhātu)とは、色、即ち物質的のものは一もなく、身體もなければ、宮殿國土もなし、唯心識を以て、深妙なる禪定に位するものをいふ。

【八】色界(Rūpa-dhātu)とは、婬食の二欲を離れたる有情の住所にして、身體といひ、宮殿といひ、總て物質的のもの、皆精妙なりといふ。

故に、一切と言ふ。具足も亦是の如く。證を求め、法に著するとを爲さざるが故に、具足と言ふ。復次に、我先に衆生を捨てず、不可得空智を以て和合するが故に、聲聞地に墮せずと說けり。

問うて曰く、(九)六波羅蜜より三無漏根に至るまで、但具足すべしと言へり。此より以後、何を以ての故に皆是の事を得んと欲し、知らんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべしと言ふや。答へて曰く、(一〇)聲聞法は量あり限あるが故に、應に具足すべしと言ふ。此より已下は、是れ諸佛の法にして、甚深無量なり。菩薩は未だ得ざるが故に、是の事を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべしと言ふなり。復次に、聲聞の法は解し易く知り易きが故に具足と言ひ、菩薩の法と佛の法とは、解し難く知り難きが故に、當に學すべしと言ふ。復次に、(一一)聲聞の法は總相にして、但苦を知り、苦の因を知り、苦の盡くるを知り、苦を盡すの道を知るなり。譬へば二種の醫の如し。一は但病を知り、病の因を知り、病を差すことを知り、病を差す藥を知る。而も、一切の病を知らず、一切の病の因を知らず、一切の病を差すことを知らず、一切の病を差す藥を知らず。或は復た但人の病を治するを知つて、畜生を治することを知らず。或は能く一國土を治するも、餘の國土を治すること能はず。能く數十種の病を治する有るも、悉く四百四種の病と病の因と、病を差すことと、病を差す藥を知らざることも、亦是の如し。二には四種の中に於て、

【九】第三問、六波羅蜜多乃至三無漏根以後は何故に般若波羅蜜多を習行すべきか。

【一〇】聲聞の法は量あり解し易く、菩薩の法は無量にして解し難し。

【一一】二種の醫——(一)聲聞醫、(二)菩薩醫。

悉く皆遍ねく知り、遍ねく藥を知り、遍ねく病を知る。(二二)聲聞の人は、小醫の遍ねく知ること能はざるが如く、菩薩摩訶薩は、大醫の病として知らざる無く、藥として識らざる無きが如し。是を以ての故に、聲聞法は應に具足すべく、菩薩法は當に學すべし。

(二三)佛の十力とは、(二四)是處と不是處の如實の知は一の力なり。衆生の過去未來現在の諸業(二五)諸受を知り、造業の處を知り、因緣を知り、果報を知るは二の力なり。諸禪と解脫と三昧と定との、垢淨の分別の相を知る如實の知は三の力なり。他の衆生の諸根の上下の相を知る如實の知は四の力なり。他の衆生の種種の欲を知るは五の力なり。世間の種種の無數の性を知るは六の力なり。一切の道の至る處の相を知るは七の力なり。種種の宿命、共相共因緣、一世二世乃至百千世、劫初、劫盡に〔於いて〕、我彼の衆生の中に在つては、是の如きの姓名、飮食、苦樂、壽命の長短なりき、彼の中に死して是の間に生じ、此の間に死して還た是の間に生じ、此の間の生の名、姓、飮食、苦樂、壽命の長短も、亦是の如しと知るは、八の力なり。佛の天眼の淨きことは諸の天人の眼に過ぎたり。衆生の死時生時、端正醜陋、若くは大、若くは小、若くは惡道に墮ち、若くは善道に墮つるを見たまひ、是の如きの業因緣にして報を受く。是の諸の衆生は、惡の身業を成就し、惡の口業を成就し、惡の意業を成就し、聖人を謗毀する邪見もて、邪見の業

【二二】聲聞は小醫の如く、菩薩は大醫の如し。
【二三】佛の十力の義解。
【二四】是處、不是處の解釋は、本書第一卷六頁の脚註を參照せよ。
【二五】諸受とは、前に擧げたる五受のことなり。

を成就し、是の因緣の故に身壞死する時、惡道に入り地獄の中に生ず。是の諸の衆生は善の身業を成就し、善の口業を成就し、善の意業を成就し、聖人を謗らざる正見もて、正見の業を成就し、是の因緣の故に身壞死する時、善道に入り、天上に生ずるを知りたまふは、九の力なり。佛は諸の漏盡くるが故に、無漏心解脫と、無漏智慧解脫とをもて、現在の法の中に自ら「我が生は已に盡き、持戒已に作し、後有盡きたり」と識知する如實の知は、十の力なり。

問うて曰く、(一六)是の十力は菩薩も未だ得ず、聲聞辟支佛も得る能はざる所なり。今何を以てか說くや。答へて曰く、聲聞の人は得ること能はずと雖も、若し是の十力の功德を聞かば、是の念を作さん、「佛は是の如きの大功德あり」と。自ら慶して言く、「我等は善利にして、益を蒙ると少からず」と。信心淸淨なるを得て、盡苦の道に入らん。菩薩之を聞かば、菩薩の道を勤修し、當に是の如き十力等の大功德の果を得べし。復次に、聲聞の人及び菩薩ありて、念佛三昧を修す。但佛身を念ずるのみに非ず、當に佛の種種の功德、法身を念ずべく、應に是の念佛を作すべし。(一七)一切の種と、一切の法とを能く解するが故に、一切智人と名け、(一八)一切法を如實に善く分別して說くが故に、一切見人と名け、(一九)一切法を現前に知るが故に、一切知見無礙人と名け、(二〇)心一切衆生に等しきが故に、大慈悲人と名け、(二一)大慈悲あるが故に、名

【一六】第四問。十力は菩薩・聲聞・辟支佛の皆得る能はざる所、然るに今之を說くは何故なるか。
【一七】一切智人と名くる所以。
【一八】一切見人と名くる所以。
【一九】一切智見無礙人と名くる所以。
【二〇】大慈悲人と名くる所以。
【二一】世救と名くる所以。

けて世教と爲し。（二二）如實の道より來たまふが故に、名けて如來と爲し、（二三）一切世間の供養に應受したまふべきが故に、名けて應供人と爲し。（二四）不顚倒の智慧を成就したまふが故に、正遍知と名け。（二五）實定智慧を成就したまふが故に、明行と名け、（二六）去じて復た還りたまはざるが故に、善逝と名け、（二七）世間の總相別相を知りたまふが故に、世間解と名け。（二八）善く出世間安隱の道を說きたまふが故に、無上調御師と名け、（二九）三種の教法を以て、衆生を度したまふが故に、天人師と名け。（三〇）一切世間の煩惱の睡を能く自ら覺し、亦よく人を覺したまふが故に、名けて覺人と爲し、（三一）一切の所願を具足したまふが故に、有德と名け、（三二）十力を成就したまふが故に、堅實と名け、（三三）四無畏を得たまふが故に、人師子と名け、（三四）無量甚深の智を得たまふが故に、大功德海と名け、（三五）一切を記說したまふこと無礙なるが故に、如風と名け、（三六）一切の好醜、憎愛なきが故に、如地と名け、（三七）一切結使の薪を燒きたまふが故に、如火と言ひ、（三八）善く一切煩惱の習を斷じたまふが故に、具足解脫と名け、（三九）最上の處に住したまふが故に、名けて世尊と爲す。佛は是の如き等の諸の功德を有したまふ。故に應に佛を念ずべし。是の故に菩薩摩訶薩は、佛の十力・四無所畏・

【二二】如來と名くる所以。
【二三】應供人と名くる所以。
【二四】正遍知と名くる所以。
【二五】明行と名くる所以
【二六】善逝と名くる所以。
【二七】世間解と名くる所以。
【二八】無上調御師と名くる所以。
【二九】天人師と名くる所以。
【三〇】覺人と名くる所以
【三一】有德と名くる所以。
【三二】堅實と名くる所以。
【三三】人師子と名くる所以。
【三四】大功德と名くる所以。
【三五】如風と名くる所以。
【三六】如地と名くる所以。
【三七】如火と名くる所以。
【三八】具足解脫と名くる所以。
【三九】世尊と名くる所以。

十八不共法を得んと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべし。

復次に、佛、王舍城の耆闍崛山の中に在して、是の般若波羅蜜［多］を說きたまふ時、佛［法］の四部の衆、及び諸の外道の在家出家、諸の天龍鬼神等の種種の大衆集會せり。佛、三昧王三昧に入り、大光明を放ち、遍ねく恒河沙等の世界を照したまふに、地、六種に震動す。［時に］是の般若波羅蜜［多］、六波羅蜜［多］、乃至三無漏根を說きたまへり。是の中に衆生あつて疑ふらく、「何等の力あり、幾種の力あるが故に、能く是の如き不可思議の感動を作して利益したまふや」と。佛は、衆生の心に、是の如きの疑あることを知りたまふが故に言はく、「我に諸法實相の智力あり。是の力に十種の用あり。是の十種の智の故に、能く是の如きの感動變化を作す。亦能く是の所作に過ぎたり」と。是の故に十力を得んと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべしと言ふ。復次に、佛弟子は、世世に善根を植うるも、少罪の緣を以ての故に、外道に墮つ。諸の外道は常に言く、「佛は實に功德力を有するに非ず、是れ幻術の力を以て、人心を誑惑するなり」と。佛弟子の外道に墮せる者は、心に疑ふらく、「若し爾れば佛は大人に非ず」と。是の誹謗を滅せんと欲したまふが故に言はく、「我は實に十力、四無所畏を有するが故に、衆生を度す、是れ幻術に非ざるなり」と。復次に、諸の菩薩は菩薩の道を修するに、苦行の事は辦じ難く、成じ難きが故に懈怠せんと欲す。是故に佛の言はく、「是の十力を行へば當に無量の果報を得べし」と。譬へば估客の主の商人を誘喩して言ふが如し。「汝等倦んで退悔すること勿

れ、精勤し努力せば、寶山に至ることを得て、當に七寶の如意寶珠を得べし」と。佛も亦是の如く、諸の菩薩を安慰して言はく、「疲厭することを得ること無く、當に勤めて精進して、菩薩の道を修すべし。是の十力を行せば、當に無量の果報を得べし」と。是の如き等の種種の利益、因縁の故に十力等を説きたまへり。

問うて曰く、(四〇)佛は無量の力あり、何を以ての故に但十力を説くや。答へて曰く、諸佛は無量の力ありと雖も、人を度する因縁の故に、十力を説けば其の事を成辨するに足る。(四一)是處不是處の智力を以て、衆生の是は度すべく、是は度すべからずと分別籌量し、(四二)業報智力を以て、是の人の業障、是の人の報障、是の人の無障を分別籌量し、(四三)禪定解脱三昧智力を以て、是の人は味に著せり、是の人は味に著せずと分別籌量し、(四四)上下根智力を以て、衆生の智力の多少を分別籌量し、(四五)種種欲智力を以て、衆生の樂とする所を分別籌量し、(四六)種種性智力を以て、衆生の深心の趣く所を分別籌量し、(四七)一切至處道智力を以て、衆生の解脱門を分別籌量し、(四八)宿命智力を以て、衆生の先に從來する所を分別し、(四九)生死智力を以て、衆生の生處、好醜を分別し、(五〇)漏盡智力を以て、衆生の涅槃を得ることを分別籌量したまふ。佛は是の十種の力を用ゐて、衆生を度脱したまふこと、審諦にして

【四〇】第五問、佛に無量の力あり、然るに今何故に但十力のみを説くか。
【四一】是處不是處智力の功能。
【四二】業報智力の功能。
【四三】禪定解脱三昧智力の功能。
【四四】上下根智力の功能。
【四五】種種欲智力の功能。
【四六】種種性智力の功能。
【四七】一切至處道智力の功能。
【四八】宿命智力の功能。
【四九】生死智力の功能。
【五〇】漏盡智力の功能。

錯らず、皆具足するとを得。是を以ての故に佛は無量の力ありと雖も、但此の十力を說くなり。復次に、[三]是處不是處力は定んで是の因緣より、是の果報を出すことを知る。是の中に總べて九力を攝す。衆生を度せんと欲するが爲の故に、初力の中に於て分別するに九種あり。何となれば是の世間の衆生は、現前に種種の事より出づるを見れども、而も知ること能はず、何に況んや心心數法の因緣をや。佛は內外の因緣果報に於て、了了に遍ねく知りたまふが故に、名けて力と爲す。佛は是の衆生の業煩惱の因緣の故に縛せられ、淨き禪定・三昧・解脫の因緣の故に解かることを知りたまふ。佛は是の一切衆生の三世の三種の諸業、諸の煩惱の輕重・深淺・麤細を、悉く遍知したまふが故に力と名け、佛は一切衆生の諸の禪定・解脫・三昧の大小深淺、解脫の因緣を、悉く遍ねく知りたまふが故に力と名く。衆生の鈍根なるは、後身の爲の故に、罪福業の因緣を作り、利根の人は、生せざるが爲の故に。諸業を集む。佛は悉く此の上下根の好醜の相を知りたまふが故に力と名く。佛は一切衆生の二種の欲は、上下根の因緣と作り、二種の欲、善惡の種種の別異を知り、悉く遍知したまふが故に力と名く。二種の欲は二種性の因緣に由るが故に、遍ねく衆生の深心の所趣を知りたまふが故に力と名く。一切衆生は種種の性の因緣の故に二種の道を行ず、所謂善道と惡道となり。佛は種種の門と所至の處を、悉く遍知したまふが故に力と名く。過去未來世の中の、因緣果報の智慧の無礙なる、是を宿命生死智力と名け、過去未來の因果を知り、已に

【三】力の意義。

悉く知り、方便して因縁果報の相續を壞する、是を漏盡力と名く。佛は三世の中の二種の因緣を知り、衆生の根、欲性を分別籌量して、漏を盡くすが爲の故に、法を說きたまふ、是れ漏盡の力なり。

問うて曰く、(五二)何等をか是處不是處力と爲すや。答へて曰く、佛は一切諸法の因緣果報の定相、[即ち]是の因緣よりは、是の如きの果報を生じ、是の因緣よりは、是の如きの果報を生ぜざることを知りたまふ。何となれば、(五三)多性經の中に說くが如くんば、是處不是處の相とは、女身にして轉輪聖王と作ることは是の處なし。何となれば一切の女人は、皆男子に屬して自在を得ざればなり。女人は、尙ほ轉輪聖王たるを得ず、何に況んや佛と作ることをや。女人の解脫涅槃を得ることも亦男子に因つて得、自然に得道すること有ること無し。二の轉輪聖王の一時に出世することは是の處なし。何となれば惡業を成就することなければなり。二の轉輪聖王すら尙ほ同世せず、何に況んや二佛をや。(五四)惡業の樂報を受くることを得るとは是の處なし、惡業は尙ほ世間の樂すら得ること能はず、何に況んや出世の樂をや。若し惡行して天に生ずることは是の處なし、惡行は尙ほ生天をすら得ること能はず、何に況んや涅槃をや。五蓋は心を覆うて散亂し、(五五)七覺を修することを離れて、而も涅槃を得と云ふは是の處なし、五蓋、心を覆ひ、七覺を修することを離れては、尙ほ聲聞の道すら得ること能はず。何に況んや佛道を

【五二】第六問、是處不是處力とは何ぞや。

【五三】多性經の文を引いて、女人は轉輪王及び佛と作らざる所以を論ず。

【五四】惡業は世間の樂すら受くる能はず、何に況んや出世間の樂をや。

【五五】七覺を修せずんば涅槃を得ず。

や。心に覆蓋なければ佛道を得べし、何に況んや聲聞道をや。是の如き等の是處不是處は多性經の中に、佛口づから自ら說きたまひ、諸の論議師の輩は是の佛語に依つて、更に廣く是處不是處を說けり。若し佛に闕失、罪過あり、若くは諸の賢聖は外道の師を求め、若くは諸の賢聖は自ら我は是れ佛なりと言ひ、若くは諸の賢聖は惡道に墮し、若くは諦を見るも更に斷ずる所の結更に生じ、若くは諸の賢聖は罪を覆藏し、若くは須陀洹は二十五有なりと言ふは皆是の處なし。賢聖の分別して、中に廣く說くが如し。五逆の人、五種の黃門、四惡道に墮するの衆生、欝多羅越の人、魔の眷屬は三障に遮へらるゝも、若し道を得と言はば皆是の處なし。說法を輕んずる者、法を輕んじ自を輕んじ、戒を破り愚癡にして、若し具足の善法を得と言はば是の處なし。自ら我は是れ佛なりと言ひ、此の身口の惡を悔いずして佛を見たてまつらんと欲し、若くは破僧罪を悔いずして、佛を見たてまつらんと欲し、邪定より正定に入り、正定より邪定に入り、正定より不定に入り、佛法を除いて別に眞の得道あり、人は應に得道すれば、身若し死すべしと「言はば」皆是の處なし。因緣生を除いて識は名色を出して更に法ありと「言はば」是の處なし。佛は使を遣はしたまふに、事未だ訖らざるに遮礙せられたまふと言はば是の處なし。意三昧に入り、若くは他の因緣にして死して滅盡定に入り、見諦道の中に在つて、若くは死すと「言はば」是の處なし。若し佛及び佛母を害することは是の處なし。轉輪聖王の女寶、象馬、主藏の臣、主兵の臣は若くは胎中に在つて死し、母子夭喪することは是の處なし。欝多羅

越の人・女寶・佛母は命終して、次の身に惡道に入ることは皆この處なし。有爲は常にして涅槃は無常なり、凡夫の人能く非有想非無想の結使を斷じ、一切の相を取り、禪定の中に聖道を修む。無漏道は有漏の因なり、若し地は濕相、水は堅相、火は冷相、風は住相と言はば皆是の處なし。無明は諸行を生ずること能はず、乃至生は老死を生ずること能はず「と言はば」是の處なし。二心は一時に五識衆を生じ、能く分別して相を取り、若くは著し、若くは離れ、能く身業口業を起し、若くは眠り、若くを禪定に入る「と言はば」是の處あること無し。但五識のみ相續して生じ、意識を生ぜず。但五識衆の中に著すれば相續あり、但五識衆の能く緣ずるを能緣の相と名け、能く無色法を緣じ、能く過去未來を緣じ、能く離三世法を緣じ、但五識衆の中に增觸、明觸あり、禪定を修し、若くは善律儀不善律儀を受け、若くは憂喜、鼻識舌識には隱沒の無記あり、若くは有覺無觀あり、若くは諸根を增益す「と言はば」皆是の處なし。凡夫人の第六識は、我を離れ、心行を受く「と言はば」是の處なし。是の如き等の無量は是の處なし。是處も亦是の如し。佛は是處不是處を知つて分別籌量し、度すべき者には爲に法を說き、度すべからざる者には爲に因緣を作したまふ。譬へば良醫の病の治すべく、治すべからざることを知るが如し。聲聞、辟支佛は知る所少少なるが故に、或は度すべからざる者を度せんと欲す、首羅の度すべきを度せざるが如く、舍利弗の「度すべくして」度せざる所の者あるが如し。是の佛は是の事なし、能く壞する「者」なく、能く勝る「者」なし、悉く遍知したまへばなり。是れ初力なり。

〔五六〕業報智力とは、身口所作の業と、及び此の生の無作の業、受くる所の戒の業、亦は惡業にして日夜に隨つて業用を生じ罪福の業を生ず。是の業を佛は略して三種の攝なりと説きたまふ、是を一切業用と名く。佛は一切衆生を知りたまふに、〔五七〕業は過去にして、報も亦過去なる有り、業は過去にして、報は現在に在る有り。業は過去にして、報は未來に在る有り、業は過去にして、報は過去現在に在る有り。業は過去にして、報は過去未來に在る有り、業は過去にして、報は現在未來に在る有り、業は過去にして。報は過去未來現在に在る有り、現在の業も亦是の如しと。復次に、善心の中に善・不善・無記の業報を受く不善心・無記心も亦是の如し。復次に、樂業の因縁の故に樂報を受け、苦業の因縁の故に苦報を受け、不苦不樂業の因縁の故に不苦不樂の報を受け。現報業の因縁の故に現報を受け、生報業の因縁の故に生報を受け、後報業の因縁の故に後報を受け、不淨業の因縁の故に惱報を受け、淨業の因縁の故に無惱報を受け、雜業の因縁の故に雜報を受く。復次に、〔五八〕二種の業あり、必受報業と不必受報業なり。必受報業は離るることを得べからず、或は時を待ち、人を待ち、處を待つて報を受く。福人の如きは應に轉輪聖王と共に福を受くべし、轉輪聖王の好世を待ち、是の時に出でて乃ち受くるは是を時を待つと爲す。人を待つとは、人は即ち是れ轉輪聖王なり、處を待つとは、轉輪聖王所出の處なり。

【五六】業報智力の義解。
【五七】業報を受くるに三世不同なり。
【五八】二種の業――(一)必受報業(二)不必受報業。

復次に、是の必受報の業は伎能功勳を待たず、若くは醜、若くは好、求めずして自ら來る。天上に生るるの人には福樂自ら至り、地獄の中の人には罪苦自ら追ふが如く、因緣を待たず。此の業は深重なればなり。復次に、必受報の業は、如し毘瑠璃軍の、七萬二千の諸の得道の人、及び無量の五戒の優婆塞を殺さんに、目連等の大神通人も救ふこと能はざる所なるが如く、薄拘羅の後母に、火中湯中水中に投著せらるれども死せざるが如し。佛の諸國に遊び給ふに、出家して行乞し、膳供を須ゐ給はずと雖も、而も五百乘の車に王の所食を載せ、業中に粳米を生じ、飯に隨つて百味の羹あるが如し。是の如き等の善惡の業は必ず受け、餘は必ず受けず。

【五九】三界の受くべき業報に就て。

【五九】欲界は三種の業報を受くる處、〔所謂〕樂受業、苦受業、不苦不樂受業なり。色界は二種の業報を受くる處、〔所謂〕樂受業、不苦不樂受業なり。無色界は一種の業報を受くる處、〔所謂〕不苦不樂受業なり。或は事を待つとは、是の事に依つて業報を受くることを得るなり。弗迦羅婆王の池中に生ぜる千葉の金色の蓮華の如きは、大きさ車輪の如く、是に因つて大會は快樂にして、多くの人出家得道せり。佛は一切衆生の諸業を造る處は、或は欲界・色界・無色界にして、欲界は何の道中に在り、若くは天道は何の天中に在り、若くは人中は何の天下に在り、若くは閻浮提は何の國に在り、若くは是の國には何の城、何の聚落あり、若くは是の城は何の里、何の巷に在り、何の舍は何の處に在りと知りたまふ。〔又〕是の業は何の時作れる、過去一世二世乃至百千萬世なり。是の業の果報は、幾か已に受

け、幾か未だ受けず、幾か必ず受け、幾か必ず受けずと知りたまふ。〔又〕善不善の用ふる所の事物を知りたまふ。所謂る刀杖か、敎勅して殺せる等か、自殺か、人をして殺さしめたるかなり。諸餘の惡業も亦是の如く、善業も亦是の如し。是の如く、布施・持戒・修善は、施中の施す所は、何等の土地・房舍、衣服、飮食、醫藥、臥具、七寶、財物なるか、戒中の受戒は自然戒か、心生戒か、口言戒か、一行戒か、少分戒か、多分戒か、滿分戒か、一日戒か、七善道戒か、十戒か、具足戒か、定共戒か、善福の中の修は、初禪二三四禪なるか、慈心か、悲喜捨心なるかを知りたまふ。是の如き等の業の善因緣、若くは慳貪、若くは瞋恚、若くは怖畏、若くは邪見、若くは惡智識等の種種の惡業の因緣、福業の因緣、若くは信、若くは憐愍、若くは恭敬、若くは禪定、若くは智慧、若くは善知識等の種種の善業の因緣、是の諸業は、自在なる一切の天、及び人にして、是の諸の業相を能く轉ずる者なし。億千萬世に於て常に衆生を隨逐して捨てず、債主の人に隨ふが如し。因緣具足することを得れば、便ち果報を與ふ。地中の種子の因緣時節の和合を得れば、便ち生ずるが如く、是の業は能く衆生をして、六道の中に生を受けしむること、箭よりも駛疾なり。一切衆生は皆諸の業報の分あり、父母の財を遺せば、諸子皆分を得べきが如し。是の業の果報は、時到れば遮止すべからず。劫盡の火の衆生の生ずべき處に隨つて、處處に安置するが如く、大國王の其の所應に隨つて官職を與ふるが如し。人の命終の時、是の業來つて、其の心を蔭覆すると、大山の物を映ずるが如し。是の業は能く種種の身を與ふ

ること、工畫師の種種の像を作るが如し。若し人正行を以て業を御し、善法を將つて養へば、則ち好報を與へ、若し邪行を以て業を御し、不善を將つて養へば、則ち惡法を與ふること、人の王に事ふるに、事に隨つて報を得るが如し。是の如く、諸の業相果報を分別す。

復次に、(六〇)分別業經の中に、佛、阿難に告げたまへるが如し。惡を行ずるの人好處に生じ、善を行ずるの人惡處に生ず。阿難の言く、「是の事は云何」。佛の言はく、「惡人は今世の罪業未だ熟せず、宿世の善業已に熟す、是の因緣を以ての故に今惡を爲すと雖も、而も好處に生ず。或は死に臨む時、善の心心數法生じ、是の因緣の故に亦好處に生ず。善を行ずるの人惡處に生ずとは、今世の善未だ熟せざるに、過去の惡已に熟す、是の因緣を以ての故に、今善を爲すと雖も而も惡處に生ず、或は死に臨むの時、不善の心心數法生じ、是の因緣の故に亦惡處に生ず。

【六〇】分別業經に於ける業の說明。

【六一】第七問、臨終時の暫時の心、終身の行力に勝る理由如何。

問うて曰く、(六一)熟不熟の義は爾るべし、死に臨むの時の、少許の時の心、云何が能く終身の行力に勝るや。答へて曰く、是の心は時頃少なしと雖も心力猛利なり、火の如く毒の如し、少なしと雖も能く大事を爲す。是の死に垂んとする時の心は、決定して猛健なるが故に、百歲の行力に勝る。是の後心を名けて大心と爲す。身及び諸根、事急なるが故なり。人の陣に入つて、身命を惜まざるを、名けて健と爲すが如し。阿羅漢の如きを捨つるを以て是の身の著を捨つるが故に阿羅漢道を得。是

の如き等は種種の罪福の業報なり。報を轉ずるとも、亦是の如くなるべし。聲聞の人の如きは、但惡業の罪報、善業の福報のみを知つて、是の如く細に分別すること能はず。佛は悉く遍ねく是の業及び業報・智慧・勢力の無礙無盡にして、能く壞することなきを知りたまふが故に、是を第二の力と名く。

〔六二〕禪定解脫三昧淨垢分別智力とは、佛は是の禪の佐助の道法、名相・義分・次第・熏習・有漏・無漏・學・無學・淨垢・味・不味・深淺・分別等を知りたまふ。八解脫は禪の中に相を分別して說くが如し。禪に一切の色界定を攝し、解脫を說いて一切の定、禪波羅蜜「多」を攝す。即ち是の諸の解脫禪定、解脫三昧を皆名けて定と爲し、定を名けて心の不散亂と爲す。垢を愛・見・慢等の諸の煩惱に名け、淨を眞の禪定に名け、愛・見・慢等の煩惱を雜へざること眞金の如し。分別は諸定の中に一心行・不一心行・常行・不常行・難入・易入・難出・易出・別取相・總取相・轉治・不轉治あるに名く。〔六三〕治とは、婬欲の中の慈心、瞋人の不淨觀、愚癡の人の邊無邊を思惟し、掉戲の心の中に、智慧を用ゐて諸法を分別する、沒心の中に心を攝せんと欲するが如し。若し爾らざる者をば不轉治と名く。是の定中に應に時及び住處を分別すべし。若し身瘦羸せば、是れ定を行ずる時に非ず。菩薩は苦行の時の如きは、是の念を作さく、「我今禪定を生ずること能はず」と。若し多人の處は、亦定を行ずる處に非ず。

復次に、佛は是の禪定の失と、是の禪の住と、是の禪の增益と、是の禪の涅槃に到ることを知りた

【六二】禪定解脫三昧淨垢分別智力の義解。
【六三】轉治・不轉治の義解。

まふ。復次に、佛は是の人の入定し難く、出定し難きこと、入り易く、出で易きこと、入り易く、出で難きこと、入り難く、出で易きことを知りたまふ。佛は是の人の、是の如きの禪を得べきことを知り、是の人の禪を失して五欲を受けんことを知り、是の人の五欲を受け已つて、還た禪を得、是の禪に依つて阿羅漢を得ることを知りたまふ。是の如き等の一切の諸の禪定解脱は、即ち是れ三昧なり。是れ禪定なり、佛は甚深の智慧を以て盡く知りたまひ、能く壞するものなく、能く勝るものなし。是を第三の力と名く。

【六四】根力の義解

(六四)衆生の上下根を知る智力とは、佛は衆生の是の利根・鈍根・中根を知りたまふ。利智を名けて上と爲し、鈍智を名けて下と爲す。佛は是の上下根の智力を用ゐて、一切の衆生を分別すらく、「是は利根、是は中根、是は鈍根、是の人に是の如きの根にして、今世に但能く初果を得、更に餘を得ること能はず。是の人は但能く第二第三第四の果を得。是の人は但能く初禪を得、是の人は但能く第二第三第四の禪を得、乃至滅盡定も亦是の如し。是の人は當に時解脱の證を得べし。是の人は當に不時解脱の證を作すべし。是の人は能く聲聞の中に於て第二を得、是の人は能く辟支佛の中に於て第一を得、是の人は六波羅蜜[多]を具足して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得」と。是の如く知り已つて、或は略說を爲して度を得せしめ、或は廣說を爲して度を得せしめ、或は略廣の說を爲して度を得せしめ、或は軟語を以て敎へ、或は苦語を以て敎へ、或は

種種語を以て教へたまふ。佛は亦分別したまはく、「是の人は餘根あり、應に信根を增生せしむべし。是の人は應に精進・念・定・慧根を生せしむべし。是の人は信根を用ゐて正位に入り、是の人は慧根を用ゐて正位に入り、是の人は利根なれども結使の爲めに遮へらる。(六五)鴦群梨摩羅等の如し。是の人は利根にして結使の爲に遮へられず。舍利弗・目連等の如きは根鈍なりと雖も、遮ゆる無きを知る。(六六)周利般陀伽の如きは、根鈍にして遮ゆる者あり。是の人は見諦所斷には根鈍なるも、思惟所斷には根利なり。思惟所斷には鈍なるも、見諦所斷には利なり。是の人は一切の根同じく鈍なり、同じく利なり。是の人は一切の根同じく鈍ならず、同じく利ならず。是の人は先因の力大なり、是の人は今緣の力大なり。是の人は縛を欲して解を得、是の人は解を欲して縛を得と知りたまふ。譬へば鴦群梨摩羅が、母を殺し、佛を害せんと欲して、解脫を得るが如く、一比丘の四禪を得、增上慢の故に還つて地獄に入るが如し。是の人は必ず惡道に墮し、是の人は出づると難く、是の人は出づると易く、是の人は疾く出て、是の人は久久しくして乃ち出づと知りたまふ。是の如き等の一切の衆生の上下根の相を皆悉く遍ねく知り、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第四の力と名く。

(六七)衆生の種種の欲を知るの智力とは、欲は信と喜と好と樂とに名く。五欲を好むは(六八)孫陀羅難陀

【六五】Aṅgulimālya は譯して指鬘といふ。
【六六】Suddhipanthaka, or Kṣudrapanthaka は繼道又は小路と譯す。
【六七】知衆生種種欲智力の義解。
【六八】Sundara-nanda

等の如く、名聞を好むことは提婆達〔多〕等の如く、世間の財利を好むことは（六九）須彌利多羅等の如く、出家を好むことは（七〇）耶舍等の如く、信を好むことは（七一）跋迦梨等の如く、持戒を好むとは羅睺羅等の如く、施を好むことは（七二）跋陀羅の如く、（七三）頭陀、遠離を好むとは摩訶迦葉の如く、坐禪を好むことは（七四）隷跋多等の如く、慧慧を好むとは舍利弗等の如く、多聞を好むことは阿難等の如く、毘尼を知ることを好むとは優婆離等の如し。是の如く佛弟子は、各各好む所あり、凡夫の人も亦各各喜ぶ所あり。或は婬欲を喜ぶあり、或は瞋恚を喜ぶあり。復次に、佛は多欲・多瞋・多癡なることを知りまたふ。

問うて曰く、（七五）何等か是れ多婬・多瞋・多癡の相なるや。答へて曰く、禪經の中に說くが如く、三毒の相は是の中に應に廣く說くべし。是の如きの相を知り已つて、婬欲多き人は（七六）不淨法門を以て治し、瞋多き人は（七七）慈心法門を以て治し、愚癡多き人は（七八）因緣法門を以て治す。是の如く欲する所に隨つて法を說く。所謂善欲には、心に隨つて爲めに說くこと、船の流に順ずるが如し。惡欲には苦切の語を以て敎ふること、楔を以て楔を出すが如し。是の欲智の中を、佛は悉く遍知し、能く壞するものなく、能る勝るものなし。是を第五の力と名く。

【六九】須彌利多羅 Sumeruksetra

【七〇】耶舍(Yaśas)

【七一】跋迦梨は跋梨迦(Bhallika)の誤？

【七二】跋陀羅(Bhadra)

【七三】頭陀(Dhūta)とは、衣服飲食臥具の三種の貪著を抖擻ふ行法をいふ。

【七四】隷跋多(Revata)

【七五】第八問、多婬・多瞋・多癡の相とは何ぞや。

【七六】不淨法門とは不淨觀のこと。

【七七】慈心法門とは慈悲觀のこと。

【七八】因緣法門とは因緣觀のこと。

〔七九〕性智力とは、佛は世間の種種なる別異の性を知りたまふ。性は積習に名け、相は性より生じ、欲は性に隨つて行を作す。或時は欲に從つて性を爲し、欲を習うて性を成すなり。性とは〔八〇〕深心の事を爲すに名け、欲とは縁に隨つて起るに名く。是を欲と性との分別と爲す。世間の種種の別異とは、各各の性多く、性は無量にして數ふ可らず。是を世間の別異と名く。〔八一〕二種の世間あり、世界世間と衆生世間となり。此の中には但衆生世間のみを說く。佛は、衆生は是の如きの性なり、是の如きの欲あり、是の處より來つて成就し、善根なり、不善根なり、度すべし、度すべからず、定なり、不定なり、必なり、不必なり、何の行を行じ、何の處に生じ、何の地に在るかを知りたまふ。

復次に、佛は是の衆生の種種の性相、所謂る趣向する所に隨つて、是の如く偏ねく多く、是の如きの貴あり、是の如きの深心の事あり、是の如きの欲あり、是の如きの業あり、是の如きの行あり、是の如きの煩惱あり、是の如きの禮法あり、是の如きの定あり、是の如きの威儀あり、是の如きの知あり、是の如きの見あり、是の如きの憶想分別あり、爾所の結使は生じ、爾所の結使は未だ生せず、著する所に隨つて欲を生じ、欲に隨つて染心あり、染心に隨つて趣向し、趣向に隨つて貴重し、貴重に隨つて常に覺觀し、覺觀に隨つて戲論を爲し、戲論に隨つて常に念じ、念に隨つて行を發し、行を發するに隨つて業を作

〔七九〕性智力の義解。

〔八〇〕他本には、深を染に作れり。

〔八一〕二種の世間——(一)世界世間、(二)衆生世間。(一)は山川草木國土等の無生物界をいひ、(二)は生物界をいふ。

し、業し作すに隨つて果報あることを知りたまふ。

復次に、佛は是の種種の性智力を用ゐて、是の衆生は度すべく、是は度すべからず、是は今世に度すべく、是は後世に度すべく、是は即時に度すべく、是は異時に度すべく、是は現前に度すべく是は眼に見ずして度すべく、是の人は佛能く度せん、是の人は聲聞能く度せん、是の人は共に度すべく、是の人は必ず度すべく、是の人は必ず度す可らず、是の人は略說して度すべく、是の人は廣說して度すべく、是の人は略廣說して度すべく、是の人は讃歎して度すべく、是の人は折伏して度すべく、是の人は將に迎へて度すべく、是の人は棄捨して度すべく、是の人は細法もて度すべく、是の人は麤法もて度すべく、是の人は苦切して度すべく、是の人は輭語もて度すべく、是の人は苦歎もて度すべく、是は邪見、是は正見、是は過去に著し、是は未來に著し、是は斷滅に著し、是は常に著し、是は有の見に著し、是は無の見に著し、是は生を欲し、是は生を厭ひ、是は富貴の樂を求め、是は厚く邪見に著し、是は因なく緣なしと說き、是は邪なる因緣を說き、是は正しき因緣を說き、是は無作業と說き、是は邪なる作業を說き、是は正しき作業を說き、是は不求を說き、是は邪求を說き、是は正求を說き、是は我を貴び、是は五欲を貴び、是は利を得るを貴び、是は飲食を貴び、是は戲樂の事を說くを貴び、是は衆を樂しみ、是は慣鬧を樂しみ、是は遠離を樂しみ、是は多く愛を行じ、是は多く見を行し、是は信を好み、是は慧を好み、是は應に守護すべく、是は應に捨つべく、是は持戒を貴び、

是は禪定を貴び、是は智慧を貴び、是は悟り易く、是は講說せば乃ち悟らん、是は引導すべく、是は句句を解せん、是は利根なり、是は鈍根なり、是は中根なり、是は出で易く、是は出で難く拔き難く、是は罪を畏れ、是は重罪なり、是は生死を畏れ、是は生死を畏れず、是は多欲、是は多瞋、是は多癡、是は多欲にして瞋、是は多欲にして癡、是は多瞋にして癡、是は多欲にして瞋あり癡あり、是は煩惱薄く、是は煩惱厚く、是は垢少く、是は垢多く、是は慧を覆ひ、是は慧を略し、是は廣慧なり、是の人は善く五陰の相、十二入、十八界、十二因緣、是處、非是處、苦集滅道を知り、善く入定、出定、住定を知ると知りたまふ。

復次に、佛は、是は欲界の衆生、是は色界「の衆生」、是は無色界の衆生、是は地獄、畜生、餓鬼、人天、是は卵生、胎生、濕生、化生、是は有色、是は無色、是は有想、是は無想、是は短命、是は長命、是は但凡夫の人にして未だ欲を離れず、是は凡夫の人にして下地の欲を離るるも、未だ〔八三〕禪欲を離れず、是の如くにして乃ち非有想非無想に至り、是は道に向ひ、是は果を得、是は辟支佛、是は諸佛なりと知りたまふ。是の如く種種に、五道、四生、三乘の假名、障樂、入界、善根、不善根、諸の結使、地の業果を分別し、是は度すべく、是は度すべからざることを滅言もて分別したまふ。是の如き等の分別を以て、世間の種種なる別異の性を知り、無礙解脫を得、是の如き等の種種の別異で、佛は悉

【八三】禪欲。禪定に入れば、輕安寂靜の妙味ありて、身心を適悅す、之を禪味と名く。此の禪味に貪著するを禪欲といふ。

く遍ねく知り、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第六の力と名く。

〔八三〕一切至處道智力とは、有る人の言く、「業は卽ち是れ道なり、何となれば業因緣の故に、遍ねく五道に行く、業あり、能く業を斷じて、能く至る所あり。所謂る三聖道分及び無漏の思なり。是の故に諸業は是れ一切至る處の道なり」と。復次に、有る人の言く、「五分〔八四〕五智三昧は一切處に住して利益の事を辦ず」と。復次に、有る人の言く、「第四禪卽ち是なり。何となれば第四禪は一切諸定の至る處なればなり。諸經の中に說くが如し。是の善心、定心、不亂心は、心を攝して皆第四禪の中に入る」と、復次に、有人の言く、「身念處の如きは卽ち是れ至處の道なり、是れ諸道の利益の本なり」と。復有る人の言く、「一切の聖道是れなり。是の聖道を用ゐて、意に隨つて利益を得」と。〔八五〕復有る論者の言く、「一切の善道、一切の惡道、一切の聖道、各各諸道の至る處を知るなり。〔八六〕毛堅經の中に說くが如くんば、佛は悉く遍ねく知りたまひ、能く壞するものなく、能く勝るものなしと。是を第七の力と名く。

【八三】一切至處道智力の義解。
【八四】五智。顯敎には八識を轉じて四智を成就し、以て究竟の報身如來と立て、密敎は之に第九識所轉の法界體性智の一を加へて五智となし、以て金剛界の大日如來とす。
(一)法界體性智。菴摩羅識を轉じて得る所。
(二)大圓鏡智。阿賴耶識を轉じて得る所。
(三)平等性智。末那識を轉じて得る所。
(四)妙觀察智。意識を轉じて得る所。
(五)成所作智。前五識を轉じて得る所。
【八五】佛は一切の至る處の道を知り給ふ。
【八六】毛堅經の說。

〔八七〕宿命智力とは、〔八八〕宿命に三種あり、有通、有明、有力なり。凡夫の人は但通のみ有り。聲聞の人は亦通あり亦明あり、佛は亦通あり、亦明あり、亦力あり。何となれば凡夫の人は、但宿命の經る所を知つて、業因緣の相續を知らず、是を以ての故に凡夫の人は、但通のみ有つて明あること無し。聲聞の人は集諦を知るが故に、了了に業因緣の相續して生ずるを知る。是の故に聲聞の人は亦通あり亦明あり。若し佛弟子は、先づ凡夫人の時に宿命智を得、見諦道の中に入つて集の因緣を知り、第八の無漏心に〔八九〕見を斷ずることを得るが故に、通、變じて明と爲る。何となれば明は見の根本に名くるを以てなり。若し佛弟子は先づ聖道を得て、後に宿命智を生じ、亦集の因緣力を知るが故に、通、變じて明と爲るなり。

問うて曰く、〔九〇〕若し佛にして、本、菩薩たりし時、先づ宿命智を得たまひ、諸の菩薩は、無處有處の煩惱を離れて、後に聖道に入りたまはば、云何ぞ佛は、「我初夜に初て明を得たり」と說きたまひしや。答へて曰く、是の時は明に非ず、若し佛は衆中に在つて、「我れ彼の時是の明を得たり」と說きたまひ、衆人に示して言はく、「是の明は初夜に得たり」と。譬へば國王の未だ王とならざる時、子を生み、後に王と作りし時、人あり、王子は何の時に生れしや」と。問へば、答へて、「王子は某時に生せり」と言ふが如

【八七】宿命智力の義解。

【八八】三種の宿命——(一)有通、(二)有明、(三)有力。(一)は凡夫、(二)は聲聞、(三)は佛なり。

【八九】見とは、見惑のことにて、智見、見解の上の惑、即ち智的煩惱なり。

【九〇】第九問、佛は菩薩たりし時、已に宿命智を得たまひし道理なり。然るを「我初夜に初めて明を得たり」と宣へる理由如何。

し。是れ生ぜし時は未だ王と作らず、今は是れ王なるを以ての故に、彼を以て王子と爲し、王子は彼の時に生ぜりと言ふなり。佛も亦是の如く、〔九一〕宿命智生ぜしも、爾の時は未だ是れ明にあらず、但通と名く。後夜の時に集因縁を知りたまふが故に、通、變じて明と爲る。後、衆中に在つて說いて言はく、「我れは初夜の時に是の明を得たり」と。

問うて曰く、〔九二〕通明の義は是の如し、云何が力と爲すや。答へて曰く、佛は是の明を用ゐて、己身及び衆生を知りたまふこと、無量無邊なり、世中の宿命因縁の所は、更に種種に悉く遍ねく知りたまふ、是を力と爲す。是を第八の力と名く。

〔九三〕生死智力とは。佛は天眼を用ゐて、衆生の生死の處を見たまふ。凡夫の人は是の天眼を用ゐて、極多にして四天下を見、聲聞の人は極多にして、傍に小千界を見、上下亦遍ねく見る。

問うて曰く、〔九四〕大梵王も亦能く千世界を見る、何等の異ありや。答へて曰く、大梵王は自ら千世界に於て、立てば則ち遍ねく見れども、若し邊に在つて立てば、則ち餘處を見ず。聲聞の人は則ち爾らず、所住の處に在つて、常に千世界を見、辟支佛は百千世界を見、諸佛は無量無邊の諸の世界を見る。凡夫の人の天眼智は、是れ通にして明に非ず。亦是の如く但所有の事を見て、業因縁に隨つて生を受くることを見ること能はず、宿命の中に說けるが如し。

〔九一〕通と明との區別。
〔九二〕第一〇問、力とは何ぞや。
〔九三〕生死智力の義解。
〔九四〕第一一問、梵王の天眼と佛の天眼との相異如何。

復次に、天眼を得たる人の中、最も第一なる者は(九七)阿泥盧豆なり。[而して]彼が天眼は是れ色界の四大の造色にして、半頭清淨なれども、佛の天眼は、四大の造色にして、遍頭清淨なり。是を差別と爲す。復次に、聲聞の人は、所住の三昧の中に於いて天眼を得、即ち所住の三昧の中に能く見る。[而して其の三昧は]、若くは有覺有觀三昧、若くは無覺有觀三昧、若くは無覺無觀三昧なり。佛は隨所に三昧の中に入りて住し、見んと欲せば盡く見たまふ。若し無覺無觀三昧の中に依つて天眼を得、有覺有觀三昧、若くは無覺有觀三昧の中に入りて亦能く見たまふ。

復次に、聲聞の人は、是の天眼を用ゐて見る時、所住の三昧の中の心、[若し]餘の三昧に入れば、天眼は則ち滅す。佛は則ち爾らず、心は餘の三昧に入ると雖も、天眼は滅せず。是の智慧もて遍ねく一切衆生の生死の趣く處を知りたまひ、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第九の力と名く。

漏盡智力とは、問うて曰く、(九八)九力は智慧分別の差別あり、漏盡は則ち同じ、一切の聲聞辟支[佛]と佛と何等の異あるや。答へて曰く、漏盡は是れ同じしと雖も、智慧分別は大に差別あり。聲聞は、極大力の思惟所斷の結は生分・住分・滅分の三時に斷ずれども、佛は則ち爾らず。一の生分の時に盡く斷ず。聲聞の人は、見諦所斷の結使は生ずる時に斷じ、[及び]思惟所斷を三時に滅すれども、佛は則ち見諦所斷と思惟所斷と異なること無し。聲聞の人は初めて聖道に入る時、入る時と達する時とは異

【九七】アニルッダ Aniruddha
【九八】第一二問、二乘と佛との漏盡の相異如何。

なれども、佛は則ち一心中にして亦入り亦達し、〔九七〕一心中に一切智を得、一心中に一切の障を壞し、一心中に一切の佛法を得たまふ。

復次に、〔九八〕諸々の聲聞の人に二種の解脫あり、〔九九〕煩惱解脫と〔一〇〇〕法障解脫となり。佛には一切煩惱解脫あり、亦一切法障解脫あり。佛は自然に智慧を得たまひ、諸の聲聞の人は敎道に隨つて行じて〔之を〕得。復た有る人の言く、「若し佛は智慧を以て一切衆生の煩惱を斷じたまふに、其の智も亦耗せず滅せず、譬へば熱鐵丸を少しの綿の上に著けて此の綿を燒くと雖も、而も火熱の〔一〇一〕勢滅せざるが如し。佛の智慧も亦是の如く、一切の煩惱を燒くに、智力亦滅せず」と。復次に、聲聞は但自ら漏を盡くすことのみを知り、諸佛は自ら漏を盡くすことを知り、亦他人の漏を盡くすことを知りたまふ。淨經の中に說くが如し。復次に、佛のみ獨り衆生の心中の分別に九十八使、一百九十六纒あることを知りたまひ、佛を除いては〔之を〕知る者あること無し。佛のみ亦獨り苦法智、苦比智に斷ずる、斷所の結使の性を知りたまふ。乃至道比智も亦是の如く、思惟所斷の九解脫道の中も亦備なり。佛は悉く遍ねく一切衆生の是の如き事を知りたまふ。聲聞の若くは少しく知り、少しく說くは皆佛語に隨ふ。

【九七】一心中得——此の句は天台宗の興起と大關係ある有名なる句なり。

【九八】聲聞の二種の解脫。

【九九】煩惱とは、謂く、懊煩の法、心神を惱亂して、妙明の眞性を顯發すること能はざるなり。之を脫するを煩惱解脫といふ。

【一〇〇】法障とは、所知障のことなり。所知障は亦知障とも名く。謂く、所證の法を執して、智慧の性を障礙するなり。これを脫するを法障解脫といふなり。

【一〇一】宋本には滅に作れり。

是の如き漏盡の智慧力勢は、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第十の力と名く。

問うて曰く、〔一〇二〕是の十力は何れか最勝なるや。答へて曰く、各各自事の中に於て大なると、水の能く漬し、火の能く燒くが如く、各各自ら力あり。有る人の言く、「初力を大と爲す。能く十力を攝すればなり」と。或は言く、「漏盡力大事なり。涅槃を辨得すればなり」と。論者は言ふ、「是の十力は皆無礙解脫を以て根本と爲し、無礙解脫を以て增上と爲す」と。

問うて曰く、〔一〇三〕若し是の十力は獨り是れ佛事ならば、弟子は今世に人として能く得ること無けん。佛は何を以ての故に說き給ひしや。答へて曰く、人の十力の中の疑を斷ずるが故に、無智の人の心をして、決定して堅牢ならしむるが故に、四衆をして歡喜せしむ。言く、「我等の大師のみ獨り是の如きの力あり。一切の衆生と共せず」と。又諸の外道の輩の言く、「憍曇氏沙門は常に寂靜處に住して智慧縮沒せり」と。是を以ての故に至誠の言を發したまはく、「我は十種の智力、四無所畏に安立し具足す」と。大衆の中に在つて〔一〇四〕眞智慧を說き衆生を敎化したまふと、師子の吼ゆるが如し。梵輪を轉ずるに、一切の外道及び天、世人の能く轉ずる者なし、是の謗を止めんが爲の故に是十力を說きたまふなり。

問うて曰く、〔一〇五〕人法の一事を好むすら、智慧尙ほ自ら讚すべからず、何に況んや無我無所著の人

【一〇二】第一三問、十力の中、その何れが最勝なるか。

【一〇三】第一四問、十力は若し是の如く獨り佛に屬する事ならば、弟子は人として之を得る者なかるべし。されば之を說くも無要にあらずや。

【一〇四】縮刷は具足智慧に作れり。

【一〇五】第一五問、無我無所著の人にして、自ら讚歎するに相應はしからざる所作にあらずや。

にして、而も自ら十力を讃せんや、說くが如くんば、

『自ら讃し、自ら毀り、他を讃じ、他を毀る、智者は、是の如きの四種を行せず。』

と。答へて曰く、佛は無我無所著なりと雖も、無量の力、大悲あつて衆生を度せんが爲の故に但十力を說きたまふのみ。[決して]自讃を爲したまふにあらざるなり。一〇六 譬へば好き賈客の導師の如し。[即ち]諸の惡賊の諸の賈客を誑はし、示すに非道を以てするを見るや、導師は、愍念するが故に諸の賈客に語るに、「我は是れ實語の人なり、汝誑惑の者に隨ふと莫れ」と。又諸の弊醫等の諸の病人を誑はすが如し。良醫は之を愍んで衆の病者に語るに、「我に良藥あり、能く汝が病を除く。欺誑を信じて以て自ら苦困すること莫れ」と。

復次に、佛の功德は深遠なり。若し佛自ら說きたまはずんば、知る者あると無けん。衆生の爲に說きたまふ所は益する所甚だ多し。是の故に佛は自ら是の十力を說きたまへり。復次に。度すべき者あれば必ず應に爲に說くべく、說くべき所の中に次第に應に十力を說くべし。若し說かずんば彼を度することを得ず。是の故に自ら說きたまへり。一〇七 譬へば日月の出づる時、是の念を作さざるが如し、「我、天下を照して當に名稱あるべし」と、日月は既に出づれば、必ず自ら名あり。佛も亦是の如く、自ら念じて名稱ありと爲し給はざるが故に、自ら功德を說きたまふ。佛の淸淨の語言、說法の光明は、衆生の愚闇を破つて、自然に大名稱あり。是の故に佛は自ら十力等

【一〇六】佛を道案内者及び良醫に譬ふ。
【一〇七】佛を日月に譬ふ。

の諸の功德を說きたまふも失有ること無し。力とは能く辨ずる所あるに名く。是の十種の力を用ゐて、智慧を增益するが故に。能く論議師を破り、是の十種の力を用ゐて、智慧を增益するが故に、能く好く說法し。是の十種の力を用ゐて、智慧を增益するが故に、能く不順を摧伏し、是の十種の力を用ゐて、智慧を增益するが故に。諸法の中に於て自在を得ること、大國王の臣民大衆の中に於て自在を得るが如し。是れを聲聞法を以て略して十力の義を說くと爲す。

卷の第二十五

初品の中の四無畏の義を釋す。

(一) 四無所畏とは、佛は誠言を作したまはく、「我は是れ、一切正智の人なるに、若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆ありて、如實に此の法を知らずと言はんも、乃至是に微の畏相を見はさず。是の故に我は安隱なることを得、畏るる所なきことを得、聖主の處に安住すること、牛王の如く、大衆の中に在つて、師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆は實に轉ずること能はず」と。「これ」一の無畏なり。佛は誠言を作したまはく、「我は一切の漏を盡すに、若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆あり、如實に是の漏を盡くさずと言はんも、乃至是に微の畏相を見はさず。是の故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住することと牛王の如く、大衆の中に在つて師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆は、實に轉ずると能はず」と。「これ」二の無畏なり。佛は誠言を作したまはく、「我は障法を説くに、若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復

【一】四無所畏の義解。

た餘衆ありて、如實に是の障法を受けて、道を障へずと言はんも、乃至是に微の畏相を見はさず、是の故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すると、牛王の如く、大衆の中に在つて、師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復餘衆は實に轉ずること能はず」と。［これ］三の無畏なり。佛は誠言を作したまはく、「我が說く所の聖道は、能く世間を出で、是の行に隨つて能く諸の苦を盡す。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復餘衆ありて、如實に是の道を行じて、世間を出づること能はず、苦を盡すこと能はずと言はんも、乃至是に微の畏相を見はさず。是の故に我れは安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すると牛王の如く、大衆の中に在つて、師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復餘衆は、實に轉ずること能はず」と。［これ］四の無畏なり。

【三】第一問、四無所畏を說く理由如何。

問うて曰く、何事を以ての故に四無所畏を說きたまひしや。答へて曰く、有人は言ふ、「佛は自ら一切智、一切見と稱したまふも、世間の一切の經書・技術・智巧・方便は甚だ多くして無量なり、若し一切衆生共にあるも、猶尚一切事を知ると難し、況んや佛一人にて一切智あらんや」と。或は「是の事あり、「或は是の事あること難し」と。［此を以ての故に］佛は將に畏あると無く、是の疑妄を斷せんと欲し、是の難を斷せんとしたまふが故に、佛は四無所畏を說きたまへり。復次に、若し佛未だ出世し

たまはざれば、㈢外道等は種種の因緣を以て、求道求福の人を欺誑し、或は種種の菓を食し、或は種種の菜を食し、或は種種の草根を食し、或は牛屎を食し、或は稊稗を食し、或は日に一たび食し、或は二日、或は十日、一月、二月に一たび食し、或は風を噏り、水を飲む、㈣是の如き等の種種に食を食し、或は樹皮・樹葉・草衣・鹿皮を衣、或は板木を衣、或は地に在つて臥し、或は杵上、杖上、灰上、棘上に臥し、或は寒時に水に入り、或は熱時に㈤五熱して自ら炙し、或は水に入つて死し、火に入つて死し、巖より投じて死し、食を斷じて死す。是の如き等の種種の苦行法の中に、天上を求め、涅槃を求め、亦弟子に敎へて是の法を捨てざらしむ。是の如く少智の衆生を引致して、以て供養を得。譬へば螢火蟲の如し。日未だ出でざる時は、少多能く照せども、若し日出づる時は、千の光明、照る月及び衆星も皆明あることなし、豈に況んや螢火をや。若し佛未だ出世したまはざれば、諸の外道の輩の小明、世を照して供養を得れども、佛出世したまふ時は、大智の光明を以て、諸の外道及び其弟子を滅し、皆復供養を得ず。供養の利を失ふが故に、便ち妄語して、佛及び佛弟子を謗る。孫陀利經の中に說くが如し。自ら殺して㈥孫陀利は而も佛を謗り、衆人に語つて言く「世間の弊人すら尙是を爲さず、是の人は世間の禮法すら尙知ると能はず、何に況んや涅槃をや」と。佛は是の

【三】外道の種種なる苦行。
【四】各原本皆この間に『或食木衣』の句あれども、意義通ぜざれば省けり、恐らくは衍文ならんか。
【五】五熱とは、五體（左右の膝と兩手と頭首）を火に熱するをいふ。
【六】孫陀利（Sundari）。婬女の名、詳に孫陀利宿緣經に說く。

如き等の誹謗を滅せんと欲したまふが故に、自ら實の功德、四無所畏を說いて言はく「我のみ獨り是れ一切智人なり。〔人あり、我に〕能ある無し、如實に佛は能く知らずと言はんも、我は是の事を畏れず。我のみ獨り一切諸の漏及び習を盡くせり。〔人あり、我に〕能ある無し、如實に佛は漏未だ盡くさずと言はんも、我は是の事を畏れず。我は涅槃道を遮するの法を說けり。〔人あり、我に〕能ある無し。如實に是の法は涅槃を遮すること能はずと言はんも、佛は是の事を畏れず。佛は苦盡の道は涅槃に到達すと說けり。〔人あり、佛は〕能ある無し。如實に是の道は涅槃に到ること能はずと言はんも、佛は是の事を畏れず」と。〔以下、略して是の四無所畏の體を說かん。一には正しく一切法を知り、二には一切の漏及び習を盡し、三には一切の障道の法を說き、四には盡苦の道を說く。是の四法の中、若し〔佛は〕如實に盡く遍ねく知ること能はずと言ふものあらんも、佛は是の事を畏れたまはず。何となれば正しく遍ねく知りて了了なるが故なり。初の二無畏は自らの功德を具足するが爲の故にして、後の二無畏は具足して衆生を利益するが爲の故なり。

復次に、初の第一、第三の無畏の中には智を說き、第二、第四の無畏の中には斷を說き、智と斷とを具足するが故に所爲の事畢る。

問うて曰く、(七)十力は皆智と名く、四無所畏も亦是れ智なり、何等の異あるや。答へて曰く、廣く佛

【七】第二問、十力も四無畏も智なり、其の間何等の相異ありや如何。

の諸の功德を說くは是れ力にして、略して說くは是れ無畏なり。復次に、能く所作あるは是れ力にして、疑難する所なきは是れ無畏なり。智慧を集むるが故に力と名け、諸の無明を散ずるが故に是れ無畏なり。諸の善法を集むるが故に力と名け、諸の不善法を滅するが故に無畏と名く。自ら智慧あるが故に力と名け、能く壞する者無きが故に無畏と名く。智慧猛健なるは是れ力にして、問難を堪受するは是れ無畏なり、諸の智慧を集むるは是を力と名け、智慧を外に用ふるは是れ無畏なり。譬へば轉輪聖王の七寶を成就するが如きは是れ力にして、是の七寶を得已つて四天下を周り、降伏せざると無きは是を無畏と名く。又良醫の善く藥方を知るが如きは是を力と名け、諸藥を合和して人に與ふるは是を無畏と名く、自ら利益するは是を力と名け、他を利益するは是れ無畏なり。自ら煩惱を除くは是を力と名け、他の煩惱を除くは是れ無畏なり。能く沮壞なきは是を力と名け、難からず退かざるは是れ無畏なり。自ら己が善を成ずるは是を力と名け、能く他の善を成ずるは是れ無畏なり。巧便智は是を力と名け、巧智を用ふるは是れ無畏なり。一切智一切種智は是を力と名け、一切智一切種智を顯發するは是れ無畏なり。十八不共法は是を力と名け、十八不共法を外に顯發するは是れ無畏なり。遍ねく法性に通達するは是を力と名け、若し種種の問難あるも、復思惟せずして、卽時に能く答ふるは是れ無畏なり、佛眼を得るは力と名け、佛眼を以て已に度すべき者を見、爲に法を說くは是れ無畏なり。三無礙智を得るは是を力と名け、辯に應じて無礙を得るは是れ無畏なり。義無礙智は是を力と名け、

樂んで無礙智を說くは是れ無畏なり。一切智あり、自在なるは是を力と名け、種種の譬喩、種種の因緣、莊嚴の語言を以て、說法するは是れ無畏なり。魔衆を破るは是を力と名け、諸の外道の論議師を破するは是れ無畏なり。是の如き等の種種の因緣を以て、力と無畏とを分別せり。

問うて曰く、(八)何等か無所畏と名くるや。答へて曰く、疑ふ所なく、忌難する所なきことを得て、智慧都かず沒せず、衣毛(九)豎す、法中に在つて說くが如くに卽ち作す、是れ無畏なり。

問うて曰く、(一〇)云何にしてか當に佛の無所畏を知るべきや。答へて曰く、若し畏るる所あれば、大衆を將ゐ御して、能く攝し、能く捨し、能く苦切もて治し、或は輭語もて教ふると能はず、佛の如きは一時に能く舍利弗、目連等を驅遣し、還つて復憐愍の心を以て受けたまふ。若し忌難する所あれば、諸の論議師の輩、憍慢の山の頂に住し、外の智慧を以て心狂醉し、皆天下に唯我一人あつて更に餘人なしと言ひ、自ら經書に於て決定して知るが故に他の經書を破し、論議して以て惡口呰毀すると、狂象の護惜する所なきが如し。是の如きの狂人たる(一一)菴跋咤、長爪(一二)薩遮祇(一三)尼犍毱盧祇等の諸の大論議師皆降伏せり。若し畏るる所あれば則ち爾ると能はず。及び、憍陳如等の五出家人、漚樓頻螺迦葉等の千の結髪の仙人、舍利弗、目犍

【八】第三問、何なか無所畏と名くるや。
【九】豎の字下のに在の字あるも、恐くは衍字ならん。
【一〇】第四問、佛の無所畏は如何にして知り得らるるや。
【一一】〔巴〕Ambaṭṭha
【一二】薩遮祇(Satya?)『増一阿含經』卷三〇參照。
【一三】尼犍毱盧提(原音不詳)

連、摩訶迦葉等は、佛法の中に於いて出家し、及び百千の釋子、並に諸の閻浮提の大王なる波斯尼示王、頻婆娑羅王、(二四)旃陀波俳提王、(二五)優塡王、(二六)弗迦羅婆利王、(二七)梵摩達王等皆弟子と爲り、諸の在家の婆羅門を皆度し、一切世間の智慧ある、大國王の爲に師として仰がれたまひ、(二八)梵摩喩、弗迦羅婆利、(二九)鳩羅檀陀等皆弟子と爲り、初道を得るあり。第二第三第四道を得るあり、諸の大鬼神、(三〇)阿羅婆迦、(三一)鞞沙迦等、諸の大龍王、(三二)阿波羅羅、(三三)伊羅鉢多羅等、鴦群梨摩羅の諸の惡人等皆降化歸伏す。若し畏るる所あらば、獨り樹下師子座處に在つて坐すること能はず、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲する時、魔王の軍衆は化して、師子・虎・狼・熊・羆の首と作り、或は一眼、或は多眼、或は一耳、或は多耳にして、山を擔ひ、火を吐き、[以て]四邊を圍遶するに、佛、手指を以て地を按じたまへば、險息頓に卽ち皆消滅し、諸天、阿修羅、鞞摩質帝隸、釋提婆那民、梵天王等その心を引導して皆弟子と爲る。若し畏るる所あらば、此の大衆の中に在つて說法すること能はず。無所畏を以ての故に能く是の如く、諸天、鬼神、大衆の中にて法を說くことを爲したまふ、故に無所畏と名く。復次に、佛は一切衆生に於て最尊最上にして、盡く一切法の彼岸に到り、大名聞を得たまふが故に、自ら無所畏と說きたまふ。復次に、且く是の佛の功德を置くも、佛の一切世間の功德は亦能く及ぶ者な

【二四】旃陀波珠提王(原音不詳)
【二五】Udyāna
【二六】弗迦羅婆利王(原音不詳)
【二七】Brahmadatta
【二八】梵摩喩(Brahmāyu?)
【二九】Kuladanta
【三〇】Ālavaka?
【三一】鞞沙迦(Vaiśākha?)
【三二】Apalāla
【三三】Elāpattra

し、所畏の法の一切を已に根本を拔くを以てなり。所畏の法とは、弊家生と弊生處と惡色と無威儀と麁惡語等なり。弊家生とは首陀羅の如きは所謂死人を擔ひ、糞を除き、鷄猪を養ひ、捕獵、屠殺、酤酒、兵伍等の、卑賤の小家なり。若しは大衆の中に在つても、則ち怖畏多し。佛は本より已來、常に轉輪聖王の種の中に生じたまふ。所謂る、(二四)頂生王、(二五)快見王、(二六)婆竭王、(二七)摩訶提婆王、是の如き等を日種と名く。王家の中に生ずるも亦「然なり」。是を以ての故に畏れたまふ所なし。(二八)弊生處とは、(二九)安陀羅、(三〇)舍婆羅、(三一)兜呿羅、(三二)脩利、(三三)安息、大秦國等の此の邊國の中に在つて生ず。若し大衆の中に在つては、則ち怖畏多し。佛は迦毘羅婆の中國に在つて生れたまふが故に畏れたまふ所なし。惡色とは、人あり、身色枯乾羸瘦なれば、人見ることを喜ばず、若し大衆に在つては、則ち亦畏あり。佛は金色の光潤ふと、火の照赤金山を照すが如く、是の如きの好色あるが故に畏れたまふ所なし。(三四)無威儀とは、進止・行歩・坐起に人の儀あること無ければ則ち怖畏あり、佛には是の事なし。(三五)麁惡語とは、人あり、惡音聲、蹇吃、重語して、次第あること無きは、人の喜ばざる所にして則ち怖畏多し、佛には是の畏なし。何となれば佛語は眞實柔輭にして次第に了じ易く、捷からず、遲からず、少からず、多からず、沒せず、垢ならず、調戲せ

【二四】頂生王(Mūrdhaja)
【二五】快見王(Sudarśana?)
【二六】婆竭王(不詳)
【二七】摩訶提婆(Mahādeva)
【二八】弊生處の義解。
【二九】安陀羅(Andhara?)
【三〇】舍婆羅(不詳)
【三一】兜呿羅(Tukhāra?)
【三二】脩利(不詳)
【三三】安息(Arsaka)
【三四】無威儀の義解。
【三五】麁惡語の義解。

ず、(三六)迦陵毘伽鳥の音に勝り、辭義分明にして、物を中傷せず、欲を離れたまふが故に染なく、瞋を滅したまふが故に、礙なく、愚を除きたまふが故に、解し易く、法喜を增長するが故に、愛す可く、罪を遮したまふが故に安隱なり、他心に隨つて(三七)解說したまふに、義は深く語は妙なり。因緣あるが故に言に理あり、譬喩あるが故に善く顯示したまひ、事訖るが故に善く事を會し、種種に衆生の心を觀じたまふが故に雜說し、久久しくして皆涅槃に入るが故に一味なり。是の如き等の種種無量の莊嚴なる語あるが故に、佛は語中に於て畏れたまふ所なし。佛は但是の如き等の世間の法を以てすら、尙畏れたまふ所なし、何に況んや出世間の法をや。是の故に佛には四無所畏ありと說くなり。

問うて曰く、(三八)佛の十力の中に無所畏ありや不や。若し無所畏あらば應に但四とのみ言ふべからず、若し所畏あらば云何が無畏成就と言ふや。答へて曰く、一智の十處に在るを名けて佛と爲す。十力を成就するは、一人にして十事を知り、事に隨つて名を受くるが如し。是の十力の四處に出用する、是れ無所畏なり。是處不是處力、漏盡力は卽ち是れ初の二無畏なり。八力は廣しと雖も、是れ第三第四の無畏を說くなり。是故に十力の中に無畏ありと雖も、別說するも亦失なし。正偏智とは一切の法を知つて顚倒せず、正にして邪ならず、餘の過去の諸佛の如し。是を三藐三佛陀と名く。佛、阿難に告げたまふが如し、「一切の世間、天及び人の

【三六】Kalaviṅka(鳥の名)
【三七】此の間に隨の字あるも恐くは衍字ならん。
【三八】第五問、十力中に無所畏ありや如何。

知ること能はざる所を、佛は遍ねく知りたまふが故に、三藐三佛陀と名く」と。若し有人は、「是の法を知らず」と、言ふ。

問うて曰く、【三九】是は何人ぞや。答へて曰く、是の中に佛の說きたまはく、「若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、乃至佛と與に論ぜんと欲する者なり」と。何等の法を論ずるや。有人の言く、「佛の說きたまはざる所の外の諸の經書にして、【四〇】鞞伽蘭那、【四一】僧佉、韋陀等の十八種の大經書なり」と。有人の言く「須彌山の斤兩、大地の深淺、一切の草木の頭數なり」と。有人の言く、「是常無常、有邊無邊の十四の難〔問〕は佛答ふると能はず」と。有人の言く、「是れ法の色法無色法、可見不可見、有對無對、有漏無漏、有爲無爲等なり。佛は但一種の道事因緣を知りたまひ、是の異法の種種の因緣は、佛或は悉く知りたまはず」と。沙門とは、出家の人を說き、婆羅門とは在家の、有智の人を說き、天とは地天、虛空天を說き、魔とは六欲天を說き、梵とは梵天王を首と爲し、及び一切の色界を說き、餘とは此を除いて更に餘人あり。如實とは若くは現事を以てし、若くは因緣を以て難ずるなり。乃至是に微の異相だも見さずとは、相は因緣に名く。我は小小の因緣にして、如法に能く來つて我を破する者を見ず。見ざるを以ての故に至誠に、【四二】阿㝹沙の住處に安立すと言ふ、佛は至誠に言はく、「我は一切の漏を盡くせり」と。若し有人の言く、「是の漏を盡

【三九】第六問、有人とは何人なりや。
【四〇】Vyākaraṇa
【四一】Sāṃkhya
【四二】Arṣa は譯して聖主といふ。

さざる者は畏るると有ると無し」と。何等か是れ漏なる。漏とは三漏に名く。欲漏と有漏と無明漏となり。復次に、漏は六情の中より出で、垢心に相應する心數法に名く。復次に、〔四三〕一切漏障經の中には分別して七漏を說けり。〔四四〕障道の法とは諸の有漏業及び一切の煩惱、惡道の報障、世間の爲の故に、布施持戒し、十善道を修して、諸の味禪を受くるに名く。略說すれば若し能く涅槃を障ゆる、若くは善、若くは不善、若くは無記なる、是を障道の法と名く。〔四五〕有人の言く「道とは二法に名く。聖定と聖慧にして、是の二事は等しく涅槃に達到す」と。有人の言く「三聖道〔卽ち〕無漏の戒定慧なり。」有人の言く「四法あり、所謂四聖諦なり。」有人の言く「出世間の五根なり。」有が言く「六出性なり。」有が言く「七覺意なり。」有が言く「八聖道にして涅槃に達到す。」論議師等の言く「一切の無漏道にして涅槃に達到す」と。是中に若し沙門婆羅門等の來るありて、如實には、斯の事は爾らず、乃至微の畏相だも見さずと言はん。見さざるを以ての故に、至誠に阿黎沙の住處に安立すと言ふ。

問うて曰く、〔四六〕何を以ての故に佛は至誠に阿黎沙の住處に安立すと言ふや。答へて曰く、自ら功德を具足し、亦衆生をして安樂利益を得せしめたまふ。若し佛自ら安樂の住處を得て〔而も〕衆生を利益すること能はずんば、阿黎沙の住處と名けず。若し但衆生を利益し、自ら功德を具足せずんば、亦阿黎沙の住處と名けず。若し自ら功德あり、亦衆生を利益せば〔之を阿黎沙の住處と名く〕。是の故

【四三】一切漏障經の所說。
【四四】障道法の義解。
【四五】道に對する種種の義解。
【四六】第七問、何故に佛は阿黎沙の住處に安住すと言ふや。

に〔佛は〕至誠に「我は阿黎沙の住處に安住す」と言ふ。復次に、佛は自ら惡を滅し、亦た衆生の惡を滅す。二惡を滅するが故に、第一清淨にして妙に法を說き給ふ。故に阿黎沙の住處に安立す。復次に、四聖諦、〔四七〕三轉、〔四八〕十二行を能く轉じ、能く分別して顯示し敷演したまふが故に、至誠に「我は阿黎沙の住處に安立す」と言ふ。復次に、一切の疑悔邪見を能く除却するが故に一切の甚深の問難を悉く能く解釋するが故に「阿黎沙の住處に安立す」と名く。阿黎沙は第一最上極高にして、不退・不却・不沒なり。功德を具足して、減少する所なし、是れを阿黎沙の住處と名く。是の如き等の因緣功德力の故に至誠に「我は阿黎沙の住處に安立す」と言ふ。衆中に師子吼し給ふとは、衆は、〔四九〕八衆に名く、〔五〇〕沙門衆、〔五一〕婆羅門衆、〔五二〕剎利衆、〔五三〕天衆、〔五四〕四天王衆、〔五五〕三十三天衆、〔五六〕魔衆、〔五七〕梵衆なり。衆生は此の八衆に於いて智慧を希望す、是故に經中に但是の八衆を說く。此の中に佛師子吼したまふも、亦一切の衆

【四七】三轉とは三轉法輪のこと。佛、印度ベナレスの鹿野苑に於て、聲聞乘の人に對して、苦集滅道の四諦を說き給ふに示・勸・證の三轉あるをいふ。一に示轉とは、此は是れ、苦なり、乃至此は是れ道なりと示すを。二に勸轉とは苦は當に知るべし、乃至道は當に修むべしと四諦の修行を勸むること。三に證轉とは、苦は我已に知り、乃至道は我已に修せりと、佛自ら己を擧げて證となすこと。

【四八】十二行とは、三轉の一一に、眼・智・明・覺の四種の智を生じ、合して十二を數ふるをいふ。而して眼は觀見の義、智は決斷の義、明は照了の義、覺は警察の義なり。

【四九】衆に八衆あり。

【五〇】Śramaṇakāyikā（シュラマナカーイカー）

【五一】Brahmaṇakāyikā（ブラフマナカーイカー）

【五二】Kṣatriyakāyikā（クシャツトリヤカーイカー）

【五三】Devakāyikā（デーワカーイカー）

【五四】Caturmahārājakāyikā（チャツルマハーラージャカーイカー）

【五五】Trāyastriṃśakāyikā（トラーヤストリンサーカーイカー）

【五六】Mārakāyikā（マーラカーイカー）

【五七】Brahmakāyikā（ブラフマカーイカー）

中に在り。是の故に此の經の中に、「若くは復餘衆」と言ふ。何となれば、佛の音聲を聞く者は、盡く皆是れ衆なればなり。

復次に、有人の言く、「佛は獨り屏處に法を說きたまふ。是の故に衆中に在つて說くに、是の至誠の言を作さく「我に十力、四無所畏あり」と。是れを「衆中に師子吼すと名く」と。復次に、佛は「我は是に至誠に言ふ。我は一切世間の師にして、一切智人たり。諸の疑あつて信ぜざる者は悉く來れ、我當に解釋すべし」と示したまふ。是の故に衆中に師子吼すと言ふ。(五八)師子吼とは、師子王の如きは、清淨種の中に生れ、深山大谷の中に住し、方頰大骨にして身肉肥滿し、頭大にして眼長く、光澤明淨にして眉高く、廣牙は利にして白淨に、口鼻は方大厚實堅滿に、齒は密にして齊しく、赤白の舌を吐き、雙耳は高上に、髦髮は光潤に、上身は廣大、膚肉は堅著、脩背細腰にして其の腹現れず、長尾利爪にして其の足安立し、巨身大力にして、住處より偃脊を出して嚬呻し、口を以て地を扣いて大威勢を現はし、食は時を過ぎず、晨朝に相を顯はし、師子王の力を表はし、以て麞鹿・熊羆・虎豹・野猪の屬を威し、諸の久睡を覺し、高强にして力勢ある者を降伏し、自ら行路を開いて大に哮吼す。是の如く吼ゆる時、其を聞く者あれば、或は喜び、或は怖れ、穴に處る者は隱れ縮み、水に居る者は深く入り、山に藏るる者は潛伏し、廐象は鎖を振り狂逸して去り、鳥は空中を飛んで高く翔り遠く逝る。佛師子も亦是の如く、六波羅蜜、古の四聖種の大姓の中に

【五八】師子吼の義解。

生れ、寂滅の大山に深く潜し、禪定の谷の中に住し、一切種智を得て頭とし、諸の善根を集めて頬とし、無漏の正見の脩目には光澤あり、定慧等しく行じて、眉は廣高に、四無所畏の牙は白く利く、無礙解脱具足の口、四正勤滿の頤、三十七品の齒は、密齊にして利く、不淨觀を修して赤白の舌を吐き、念慧の耳は高上に、十八不共法の髦髮は光潤鮮白に、三解脱門の上身の肉は堅く著き、三示現の脩脊あり、明行具足の腹は現はれず、忍辱の腰は纖細に、遠離行の尾は長く、四如意足は安立し、無學五根の爪利く、十種の力勢は無量に、無漏法衆具足の身、諸佛三昧王等の住處より出でて、四無礙智の頻申を作し、諸法の地中に無礙解脱の口を著け、是の十力の廣大の力に依つて、衆生を度するに時を過たず。一切の世間、天及び人に示す晨朝の相は、諸の法王の德を顯し、諸の外道、論議の黨の邪見の屬を威し、諸の衆生の四諦の中に睡れるを覺し、吾我に著する五衆の者の憍慢力を降伏し、異學の論議、諸の邪見の道を開き、邪を行ずる者を怖畏せしめ、正を信ずる者を歡喜せしめ、鈍者を利ならしめ、弟子を安慰し、外道を破壞し、長壽の諸天久しく天の樂を受くるときは則ち無常を知らしむ。是の如きの衆生は、四諦の師子吼を聞いて、皆厭心を生じ、厭心の故に離るることを得、離るることを得るが故に涅槃に入る、是を衆中に師子の如くに吼ゆと名く。

【五九】佛の師子吼と師子の吼との差別。

復次に、[五九]佛の師子吼と及び師子の吼ゆるとは差別あり。師子の吼ゆるは衆獸懾き怖れて、若くは

死し、若くは死に近づいて苦しみ、佛の師子吼は死と畏とを免るるとを得。師子の吼るは、世世、死苦を怖れ、佛の師子吼は但今世に死して、更に後の苦なし。師子の吼るは、其の聲麤惡にして物喜ばず、生死を聞いて怖畏し、佛の師子吼は、其の聲柔輭にして、聞く者に厭心なく、皆深く樂み、普遍に遠く聞えて、能く二種の樂、［卽ち］生天の樂と涅槃の樂とを與ふ。是を差別と爲す。

問うて曰く、(四〇)佛の師子吼も亦聞者をして怖を生ぜしむ、師子の吼ると何等の異なりか有る。答へて曰く、佛の師子吼を聞けば、當時は小しく怖るるも、後、大なる利益あり。吾我の心に著する者、世間の樂を渴愛する人、常に顚倒して、邪見の心に縛せらるる者は、怖畏を生ず。經中に言ふが如し。「佛四諦を說き給ふに、乃ち上は諸天に至るまで、悉く皆怖畏して是念を作す。我等は無常相、苦相、無我相、空相なり、何ぞ顚倒心の爲の故に、常樂の相に著せんや」と。是を差別と爲す。復次に、師子の吼るを聞く者は、離欲の人を除けば、餘は皆怖畏し、佛の師子吼は、涅槃を求むる離欲の人も、不離欲の人も皆怖る。師子の吼るは、善人不善人皆恐れ、佛の師子吼は但善人のみ怖る。復次に、師子の吼るは、一切時に怖れ、佛の師子吼は、小しく怖畏すと雖も、衆生に世間の惡罪を示し、世間の生を樂まざらしめ、涅槃の功德利益を觀じて、能く世間の種種の怖畏を除き、惡趣を閉ぢて善道を開き、能く人をして涅槃の城に到らしむ。

【四〇】第八問、佛の師子吼も亦聞く者をして怖を生ぜしむ、獅子吼と何の相異ありや。

復次に、〔六一〕二十事の故に佛語を師子吼と名く。所謂十力に依止するが故に、不揄の故に、不畏の故に、〔六二〕梵音の故に、未曾有の故に、能く大衆を引くが故に、惡魔驚怖するが故に、魔民を擾亂するが故に、諸天歡喜するが故に、魔網を出づることを得るが故に、魔縛を斷ずるが故に、魔鉤を破するが故に、魔界を過ぐるが故に、自法增長するが故に、他法を減損するが故に、果報を誑はざるが故に、說法空しからざるが故に、凡夫の人、聖道に入るが故に、聖道に入る者、漏盡を具足することを得るが故に、所應に隨つて三乘を得るが故に、是の故に佛語を師子吼と名く。是を師子吼の總相別相の義と名く。

〔六三〕梵輪を轉ずとは、清淨なるが故に梵と名け、佛の智慧及び智慧に相應する法、是れを輪と名け、受者、法に隨つて、佛の說きたまふ所を行ずる、是を轉と名く。是の輪は四念處の具足を以て轂と爲し、五根五力を輻と爲し、四如意足を堅牢の轄と爲し、四正勤を密合輪と爲し、三解脫を輞と爲し、禪定智慧を調適と爲し、無漏戒を輪に塗るの香と爲し、七覺意を雜華瓔珞と爲し、正見を右に隨つて轉ずと爲し、信心清淨を可愛喜と爲し、正精進を疾去と爲し、無畏の師子吼を、妙聲能く魔輪を怖れしむと爲す。十二因緣の備解輪を破り、生死の輪を壞し、煩惱の輪を離れ、業輪を斷じ、世間の輪を障へ、苦輪を破し、能く行者をし

【六一】佛語を師子吼と名くる二十の理由。

【六二】梵音とは、大梵天王の出す所の音聲にして、五種清淨の音あり。佛の音聲も亦是の如くなれば三十二相の一に數ふるなり。五種清淨とは一に其の音の正直なると、二に其の音の和雅なると、三に其の音の清徹なると、四に其の音の深滿なると、五に其の音の周く遠く聞ゆるとなり。

【六三】梵輪の義解。

て歡喜せしめ、天人をして敬慕せしむ。是の輪は能く轉ずる者なく、是の輪は佛法を持す。是の故に梵輪を轉ずと名く。復次に、佛の法輪を轉じたまふことは、轉輪聖王の寶輪を轉ずるが如し。

問うて曰く、【問】佛と轉輪聖王と何の相似すること有りや。答へて曰く、王は清淨なる不雜種の中に生じ、姓に隨つて家業を成就し、衆相「を以て」身を莊嚴し、王德を具足して能く寶輪を轉じ、香湯を頂に灌いで王位を受け、四天下の首に於て、一切の賊法を壞除して、敢へて違ふと無からしむ。寶藏は豐溢し、軍容は七寶を以て校飾と爲し、四攝法を以て衆生を攝取し、善く王法を用ゐて貴姓に委任し、主兵大臣、以て國政を治め、妙上の珍寶、樂んで以て布施し、知念する所あれば、終始、異なると無きが如く、佛、法王も亦是の如し。釋迦牟尼・燃燈・寶華等の佛、諸佛は清淨なる姓の中に生れ、先佛の威儀行業たる三十二相を具足し、以て自ら莊嚴し、聖主の威德備に具はり、眞の法輪を轉じ、智慧の甘露味を智首に灌ぎ、三界の中に於て、尊として一切煩惱の賊を破壞し、學無學の衆歡喜し、所結の禁戒に敢へて違ふ者なく、無量の法寶藏を具足し、七覺分の寶莊嚴、八萬四千の法衆の軍、出世間の四攝法を以て、衆生を攝し、方便を知つて四聖諦の法を說き、法王の儀を爲し、舍利弗、彌勒等の大將は、善く佛國の法を治め、諸の無漏の根・力・覺、種種の妙寶を、樂んで以て布施し、深く一切衆生の善事を求め、所念堅固なり。是を相似と爲す。

【問】第九問、佛と轉輪聖王と相似の點如何。

復次に、(六五)佛は轉輪聖王よりも殊勝あり。轉輪聖王は諸の煩惱を離れず。佛は已に、永く諸の煩惱を離れたまふ。轉輪聖王は老死の泥に沒在し、佛は已に出離したまふ。轉輪聖王は恩愛の(六六)僕と爲り、佛は已に過ぎ出でたまふ。轉輪聖王は生死の險道の中を行き、佛は已に過ぎ度りたまふ。轉輪聖王は愚癡の闇中に在り、佛は第一光明の中に住したまふ。轉輪聖王の極は四天下を自在にし、佛は無量無邊の世界を自在にしたまふ。轉輪聖王は財寶自在なるも佛は心寶自在なり。轉輪聖王は天樂を渇愛し佛は乃至有頂の樂をも已に離れたまふ。轉輪聖王は他より樂を求め佛は自心に樂を生じたまふ。是を以て佛は轉輪聖王よりも最も殊勝なりとす。復次に、轉輪聖王は手づから、寶輪を空中に轉ずるに無礙なるも、佛は法輪を一切世間天及び人中に轉じたまふこと無礙無遮なり。其の寶輪を見る者は衆毒皆滅し、佛の法輪に遇へば、一切の煩惱の毒皆滅す。寶輪を見る者は諸の災惡害皆滅し、佛の法輪に遇へば、一切の邪見・疑悔・災害皆悉く消滅す。王は是の輪を以て四天下を治め、佛は法輪を以て一切世間天及び人を治め、法を得ることを自在ならしめたまふ。是を相似と爲す。復次に、法輪は寶輪より大に殊勝あり。寶輪は敗壞にして、法輪は堅實なり。寶輪は三毒の火を長くし、法輪は三毒の火を滅す。寶輪は有漏にして、法輪は無漏なり。寶輪は五欲の樂を樂み、法輪は法樂を樂む。寶輪は結使の處なるも、法輪は結使の處に非ず。寶輪は有量の處に行き、法輪は無量の國に行く。寶輪は一心淸淨に、布施するを以

【六五】法王と輪王との勝劣。
【六六】他本には「業を爲し」に作れり。

ての故に世世に得べく、法輪は無量阿僧祇劫に、一切の善業の因緣及び智慧を集むるが故に得。寶輪は王死すれば後更に轉ぜず。佛滅度の後も法輪は猶ほ轉ず。寶輪は一人に在り、法輪は一切の度すべき者に在り。復次に、梵とは廣きに名く、佛の轉法輪は、遍ねからずといふこと無きが故に、廣と名く。復次に、(六七)四梵行心を說くが故に梵輪と名く。復次に、佛初めて得道したまふ時、梵天王轉法輪を請するが故に梵輪と名く、復次に、佛は波羅奈に在して法輪を轉じたまふに、阿若憍陳如得道の聲、梵天に徹せるが故に梵輪と名く。復次に、有人は梵天を貴んで、歡喜せしめんと欲するが故に梵輪と名く。是の故に梵輪と名く。

問うて曰く、(六八)佛は或時は法輪と名け、或時は梵輪と名けたまふ、何等の異なること有りや。答へて曰く、梵輪、法輪と說くも、異なること無し。復次に、有人の言く、「梵輪と說くは、四無量心を現はし、法輪と說くは四諦の法を示す」と。復次に、梵輪は、四無量心に因つて道を得、是を梵輪と名け、餘法に依つて道を得る、是を法輪と名く。梵輪は四禪を示し、法輪は三十七品を示す。梵輪は、禪定を修する聖道を示し、法輪は、智慧を修する聖道を示す。是の如き等の分別は、梵輪法輪の差別なり。

問うて曰く、(六九)何の法か是れ無畏の性なりや。答へて曰く、佛、初めて得道したまひし時、一切の

【六七】四梵行は又四梵住ともいふ。慈・悲・喜・捨の四無量心なり。此の四心は梵天に生ずる行業なるが故に梵行と名く。

【六八】第一〇問、梵輪と法輪との異同如何。

【六九】第一一問、無畏の性とは何ぞや。

佛法・十力・四無所畏等を得たまふ。此の中、未來世に、四無所畏の智に相應する法を得るを無所畏と名く。布施する時は、心中の思に相應の捨法生ずるが如く、又た四無量心に相應するを、慈法の門と名くるが如し。

問うて曰く、（七〇）是の四無畏の中に何の次第ありや。答へて曰く、初の無畏の中に、人に示して一切法を知らしめ、一切法を知るが故に、（七一）我漏を盡くす。漏を盡くすが故に、漏の盡くるを障ふる法を知り、是の障法を斷するが故に道を說く。復次に、初の無畏は藥師の一切の藥草を示し、第二は一切の病の滅するを示し、第三は禁忌を知り、第四は所應の食を示すが如し。復次に、初の無畏の中に一切種智を說き、第二の無畏の中に一切の煩惱の習なきことを說き、第三の無畏の中に法に謬失なきことを說き、第四の無畏の中に所說の事を辯じて、涅槃に至ることを得。

問うて曰く、（七二）般若波羅蜜「多」の中に說くが如くんば、五衆乃至十力・四無所畏・十八不共法は皆空なり。今云何が分別して其相を說くや。答へて曰く、佛法の中の（七三）不可得空は諸法に於て礙ふる所なし。是の不可得空に因つて、一切の佛法の十二部經を說く。譬へば虛空の所有なくして、而も一切の物皆依つて以て長成するが如し。復次に、是

【七〇】第一二問、四無所畏の次第如何。

【七一】我漏とは我見の煩惱のこと。

【七二】第一三問、諸法は皆空なり、今何ぞ分別して其相を說くや。

【七三】不可得空とは、消極的の表現にて、積極的に言へば、絕對自由の意となる。「無一物中無盡藏、花あり、月あり、樓臺あり」の禪語を玩味せば、自ら不可得空の眞義を了ることを得ん。

の十力・四無所畏は、取相の著心を以て、分別せざるが故に、但衆生を度せんが爲にす。衆生は是の因縁に從つて、解脫を得ることを知る。譬へば、藥草は但病を差やさんが爲にして、藥草の相を求めんが爲にあらざるが如し。〔七四〕中論の中に說くが如し。

『若し諸法の空なることを信ずれば、是れ則ち理に順ず。若し法の空なることを信ぜざれば、一切皆違失す。若し以て是の空を無せば、所應の造作なけん。未だ作さざるに、已に業あり、不作にして作者ある、是の如き諸の法相は、誰か能く思量する者ぞ。唯淨直の心のみありて、所說に依止すること無くんば、有無の見を離れて、心自然に內に滅せん。』

問うて曰く、〔七五〕聲聞法に、十力・四無所畏を說くとは是の如し。摩訶衍に十力・四無所畏を分別することは復た云何。答へて曰く、是の十力・四無所畏の中に、盡く知り、遍ねく知るは、是れ摩訶衍の中に說く十力・四無所畏なり。

問うて曰く、〔七六〕聲聞法の中にも、亦盡知・遍知を說く、云何ぞ摩訶衍の中に、盡知・遍知を說くと言ふや。答へて曰く、諸の論義師の「佛は盡く知り、遍ねく知り給ふ」と說くは、佛自らの說に非ず。今摩訶衍の中に、十力・四無所畏を說くが故に、佛は自ら「我は盡く知り遍ねく知る」と說き給へり。復次に、聲聞人の爲に十力・四無所畏を說き、四諦十二因緣等を合說す。諸の聲聞法は皆涅槃に到るが爲な

〔七四〕中觀論の偈。

〔七五〕第一四問、小乘の十力・四無所畏と、大乘のそれとの異同如何。

〔七六〕第一五問、小乘にも盡知遍知を說けり、何ぞ殊更に大乘の盡知遍知と說くや。

り。今摩訶衍の中に十力・四無所畏を說くは、大悲を合して、諸法實相は不生不滅なりと說く。

問うて曰く、〔七七〕佛に十力・四無所畏あり、菩薩も有りや不や。答へて曰く、有り。〔七八〕何をか是れなる。一には一切智心を發する堅深牢固の力あり。二には大慈を具足するが故に一切衆生を捨てざる力あり。三には一切の供養恭敬の利を須ゐざるが故に大悲を具足するの力あり。四には一切の佛法を信じ具足して一切の佛法を生じ、及び心に厭はざるが故に大精進力あり。五には一心に慧行威儀を壞せざるが故に禪定力あり。六には二邊を除くが故に、十二因緣に隨つて行ずるが故に、一切の邪見を斷ずるが故に、一切の憶想・分別・戲論を滅するが故に、智慧を具足するの力あり。七には一切衆生を成就するが故に、無量の生死を受くるが故に、諸の善根を集めて厭足すると無きが故に、一切世間は夢の如しと知るが故に、生死を厭はざるの力あり、八には諸法實相を觀ずるが故に、吾我なく衆生なきことを知るが故に、諸法の不出不生を信解するが故に、無生法忍の力あり。九には空・無相・無作の解脫門の觀に入るが故に、聲聞辟支佛の解脫を知見するが故に、解脫を得るの力あり。十には深法自在の故に、一切衆生の心行の趣く所を知るが故に、無礙智を具足するの力あり。是を菩薩の十力と爲す。何等をか菩薩の四無所畏と爲す。〔七九〕一には一切を聞持するが故に、諸の陀羅尼を得るが故に、憶念して忘れざるが故に、衆〔中〕に在つて說法して畏るる所なし。二には一切法の中に解脫を得るが故に、一切の法藥を分別して

〔七七〕第一六問、菩薩にも亦た十力・四無所畏ありや如何。
〔七八〕菩薩十力の義解。
〔七九〕菩薩の四無所畏。

知り用ふるが故に、一切衆生の根を知るが故に、大衆の中に在り、「所」應に隨つて、說法して畏る所なし。三には菩薩は常に一切の衆畏を離れて、是念を作さず、「十方より來つて我を難ずる者あらんに、我答ふると能はざらん」と。是の相を見ざれば、大衆の中に在つて、說法して畏る所なし。四には恣ままに一切の人來つて問難する者に、一一皆答へて能く疑惑を斷じ、大衆の中に在つて、說法して畏る所なし、是を菩薩の四無所畏と爲す。

〔八〇〕四無礙智とは、義無礙智と法無礙智と辭無礙智と樂說無礙智となり。義無礙智とは名字言語を用ひて說く所の事、各各諸法の相なり。所謂堅相は地なり。此の中、地の堅相は是れ義なり。地の名字は是れ法なり、言語を以て地を說くは、是れ辭なり。三種の智の中に於て、樂說自在なるは是れ樂說なり。此の四事の中に於て通達して滯ると無き、是を無礙智と名く。濕相は水、熱相は火、動相は風、心思の相、五衆無常の相、五受衆の無常・苦・空相、一切法の無我相、是の如き等の總相別相あり。諸法を分別するとも亦是の如し、是を義無礙智と名く。法無礙智とは是の義と名字を知り、堅相を名けて地と爲す。是の如き等の一切の名字の分別の中に滯ると無き、是を名けて法無礙智と爲す。何となれば名字を離れて義は得べからず、義は必ず名に由ると知るを以てなり。是の故に義に次いで法あり。

問うて曰く、〔八一〕義と名とは合と爲すや離と爲すや。若し名と合せば、火と說く時、應に口を燒くべ

〔八〇〕四無礙智の義解。
〔八一〕第一七問、義と名との關係如何。

し、若し離るれば、火と說く時、應に水を得べし。答へて曰く、亦は不合、亦は不離なり。古人は假に名を立てんが爲に以て諸法と名け、後人は是の名字に因つて是の事を識り、是の如くして各各名字あり。是を法と爲す。是の名字及び義は、云何が衆生をして解することを得せしめん。當に言辭を以て分別莊嚴して、能く人の解をして通達無滯ならしむべし。是れを辭無礙智と名く。說くに道理あれば開演無盡なり。亦諸の禪定の中に於て、自在を得て滯ること無し。是を樂說無礙智と名く。第一第四の無礙智は九地の中に在り。第二第三の無礙智は、欲界及び梵天の上にあり。第二第三の無礙は世智なり。第一は十智なり。第四は九智なり。是の無礙に三種の上中下あり、上は諸佛、中は大菩薩、下は大阿羅漢なり。

問うて曰く、〔八二〕力、無所畏、無礙は皆是れ智慧にして、內に力あり外に畏るる所なければ、則ち具足す、何を以てか、復無礙を說くや。答へて曰く、力と無畏は已に分別せり、有人は無所畏にして、大衆の中に在つて說法すと雖も、而も礙あり、是の故に四無礙智を說く、是の無礙智を得て、四無所畏を莊嚴し、四無所畏は十力を莊嚴す。復次に、無所畏を說けば、或は疑ふ者あつて言はん、「云何が一人にして、大衆の中に在つて無所畏を得ん」と。佛は前に十力あり、後に四無礙智あるを以て、是の故に大衆の中に在つて、說法したまふに畏るる所なきなり。是の如く、四無礙智を分別す。

【八二】第一八問、十力・四無所畏の外に無礙智を說く理由如何。

問うて曰く、(公三)摩訶衍の中に、菩薩の四無礙智ありや否や。答へて曰く、有り。何となれば是の義無礙とは義は諸法實相に名け言說すべからず、義・名・字・語言は別異ならざればなり。前後中亦是の如し。是を義と名く。名字語言を離れて別に義あるべからず、三事等しきが故に名けて義と爲す。復次に、一切諸法の義を了了に知つて通達無礙なる、是を義無礙智と名く。法無礙智とは、法は一切の義に名く。名字は義を知るが爲の故に。復次に、菩薩は是の法無礙智の中に入り、法を信じて人を信せず。常に法に依つて非法に依らず。法に依るとは非法の事なし。何となれば是の人は一切の諸の名字及び語言は自相を離るるを知るを以ての故に。復次に、是の法無礙智を以て三乘を分別す。三乘を分別すと雖も、而も法性を壞らず、所以は何ん、法性は一相にして所謂無相なればなり。是の菩薩は是の語言を用ゐて說法し、語言の空を知ると、響の相の如く、所說の法を衆生に示して、同じく法性を信知せしめ、所說の名字言語に通達して滯ると無し、是を法無礙智と名く。辭無礙智とは、語言を以て名字の義を說き、種種に語言を莊嚴し、其所應に隨つて能く解を得せしむ。所謂天語、龍・夜叉・揵闥婆・阿修羅・迦樓羅・摩睺羅迦等の非人の語、釋・梵・四天王等の世主の語、人語、一語二語、多語、略語、廣語、女語、男語、過去未來現在語、是の如き等の語言を以て能く各各解を得せしめ、自語他語を毀譽する所なし。所以は何ん、是の一切法は語中にあらず、語は是れ實義に非ざればなり。若し語これ實義ならば、善語を以て不善を說くべ

【公三】第一九問、菩薩に四無礙智ありや如何。

からず。但涅槃に入らしめんが爲の故に說き、解をして語言に著すると莫らしむ。復次に是の語言を用ゐて能く衆生をして法義に隨つて行ぜしむ。所以は何ん、言語は皆諸法實相の中に入ればなり。是を辭無礙智と名く。樂說無礙智とは、菩薩は一字の中に、能く一切の字を說き、一語の中に能く一切の語を說き、一法の中に能く一切法を說く。是の中に說く所は皆是れ法。皆これ實、皆是れ眞、皆度すべき者に隨つて所益あり。所謂(八四)修妬路を樂ふ者には爲に修妬路を說き、(八五)祇夜を樂ふ者には爲に祇夜を說き、(八六)弊迦蘭那を樂ふ者には爲に弊迦蘭那を說き、(八七)伽陀、(八八)優陀那、(八九)尼陀那、(九〇)阿波陀那、(九一)一筑多、(九二)闍陀、(九三)爲頭離、(九四)阿浮陀達摩、(九五)優波提舍を樂ふ者には皆爲に是の經を說く。一切衆生の根樂に隨つて說くとは、若し信を好む者には爲に信根を說き、精進を好む者には爲に精進を說き、懃念を好む者には爲に念根を說き、攝心を好む者には爲に定根を說き、智慧を好む者には爲に慧根を說く。五根等の如く、一切の善根も亦是の如し。

復次に、二萬一千の婬欲の人根あり。是の根の爲の故に佛は八萬四千の治法の根を說き給ふ。是の諸根の樂に隨つて、治法の次第を說くは、菩薩の樂說なり。二萬一千の愚癡の人根あり。是の根の爲の故に、佛は八萬四千の治法の根を說き給ふ。是諸根の樂に隨つて、治法の次第を說くは、菩薩の樂

【八四】Sūtra(經)
【八五】Geya(應頌)
【八六】Vyākaraṇa(記莂)
【八七】Gāthā(諷頌)
【八八】Udāna(自說)
【八九】Nidāna(因緣)
【九〇】Avadāna(譬喩)
【九一】Itivṛttaka(本事)
【九二】Jātaka(本生)
【九三】Vaipulya(方廣)
【九四】Adbhutadharma(希法)
【九五】Upadeśa(論議)

說なり。二萬一千の等分の人根あり。是の根の爲の故に、佛は八萬四千の治法根を說き給ふ。是の諸根の樂に隨つて、治法の次第を說くは、菩薩の樂說なり。是を樂說無礙智と名く。復次に、菩薩は是の無礙智を用ゐて、若くは一劫若くは半劫、各各說法を莊嚴して亦諸法の相を壞せず、是の菩薩は或は身を隱して現せず。而も衆生の爲に一切の毛孔を用ゐて說法し、其所應に隨つて本行を失せず。是の菩薩の智慧は無量なり、一切の論議師も窮め盡くすと能はず、亦壞すると能はず。是の菩薩は是の無礙智を得て身を轉じて生を受くる時、一切の五通の仙人の有する所の經書・呪術・智慧・伎能を自然に悉く知る。所謂四韋陀、【九六】六鴦伽・呪術・日月・五星經・原夢經・地動・思語・鳥語・獸語・四足畜鬼の人に著く語、國王占相の豐儉、日月五星の鬪相、醫藥・草・算數・卜・歌舞・妓樂を知る。是の如き等の工巧伎術・諸經を盡く知り、明かに達して、一切の人及び諸の外道に過ぎ、亦自ら高ぶらず、亦他を惱まさず、是の俗事を知るも、涅槃の爲にせず、是の菩薩は四無礙智を成就するが故に色力光明は諸梵に殊る。諸梵は恭敬愛樂尊重すれども心に著する所なく、是の如き等の一切諸天の爲に尊重恭敬せらるるも亦著する所なく、但無常・苦・空・無我の心を生じ、亦神通を以て諸天を發起し、心に渴仰せしめて爲に法を說き、盡くると無く、壞すると無く、疑悔を斷除して阿耨多羅三藐三菩提に住せしむ、是を摩訶衍の中の菩薩の四無礙智力と名け、能く衆生を度する、是を四無礙智の義と名く。

【九六】 鴦伽(Aṅga) は身分又は支の義　六鴦伽は十八大經中の六吠陀分のこと。

巻の第二十六

初品の中の十八不共法を釋す。

十八不共法とは、(一)一には諸佛は身に失なし、(二)二には口に失なし、(三)三には念に失なし、(四)四には異想なし、(五)五には不定心なし、(六)六には知り已つて、捨せざる無し、(七)七には欲減すると無し、(八)八には精進減すると無し、(九)九には念減すること無し、(一〇)十には慧減すると無し、(一一)十一には解脫減すると無し、(一二)十二には解脫知見減すると無し、(一三)十三には一切の身業は智慧に隨つて行ず、(一四)十四には一切の口業は智慧に隨つて行ず、(一五)十五には一切の意業は智慧に隨つて行ず、(一六)十六には智慧もて過去世を知ると無礙なり、(一七)十七には智慧もて未來世を知ると

【一】Nāsti tathāgatasya skhalitaṃ
【二】Nāsti ravitaṃ
【三】Nāsti muṣitasmṛtitā
【四】Nāsti nānātvasaṃjñā
【五】Nāsty asamāhitacittaṃ
【六】Nāsty apratisaṃkhyāyopekṣā
【七】Nāsti chandasyā hāniḥ
【八】Nāsti vīryasya hāniḥ
【九】Nāsti smṛter hāniḥ
【10】Nāsti prjñāyā hāniḥ
【11】Nāsti vimukter hāniḥ
【12】Nāsti vimuktijñānadarśana hāniḥ
【13】Sarvakāyakarma jñānapūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti
【14】Sarvavākkarma jñānapūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti
【15】Sarvamanaḥkarma jñānapūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti
【16】Atīte 'dhvany asaṅgam apratihataṃ jñānadarśanaṃ pravartate
【17】Anāgate 'dhvany asaṅgam apratihataṃ jñānadarśanaṃ pravartate

無礙なり、(二八)十八には智慧もて現在世を知ること無礙なり。

問うて曰く、(二九)是の三十六法は皆是れ佛法なり、何を以ての故に獨り十八を以て不共と爲すや。答へて曰く、前の十八の中には聲聞、辟支佛の分あり、後の十八の中に於ては分なし。舍利弗の如きは能く諸法を分別し、一句を暢演するに通達無礙なり。佛、讃じて言はく、「善く法性に通ず」と。阿泥盧頭は天眼第一なり。是の如き等の諸の聲聞は皆分あり。四無所畏に於て分ありとは、佛の說きたまふが如し。「弟子の中の能く師子吼第一なるは(三〇)賓徒羅巨羅埵逝なり」と。舍利弗も亦自ら誓つて言く、「我は七日七夜、能く一義を演暢すれども、四分別の慧を窮盡すると無からしむ」と。諸の阿羅漢・舍利弗・目揵連・富樓那・阿難・迦旃延等も亦是の如く、名字語言を樂說す。是を以て前の十八を不共と名けず。

問うて曰く、(三一)何を以ての故に(三二)佛は身に失なく口に失なきや。佛は無量阿僧祇劫より來、持戒淸淨なるが故に身口の業に失なし。餘の諸の阿羅漢たる舍利弗等の如きは、極めて多きは六十劫なるも、久しく戒を習はざるが故に失あり。佛は無量阿僧祇劫に諸の淸淨戒を集め成就したまふが故に、常に甚深の禪定を行じたまふが故に、一切の微妙の智慧を得たまふが故に、善く大悲心を修したまふが故に、失あること無し。復次に、佛は諸の罪根の因緣を拔き給ふが

【二八】 Pratyutpanne 'dhvany-asaṅgam apratihataṃ jñāna-darśanaṃ pravartate

【二九】 第一問、十八法のみを以て不共と爲す理由如何。

【三〇】 賓徒羅巨羅埵逝(原音不詳)

【三一】 第二問、諸佛は何故に身にも口にも過失なきや。

【三二】 第一、身無失、第二口無失の義解。

故に、失あること無し。罪の根本の因縁に四種あり。(二三)一には貪欲の因縁、二には瞋恚の因縁、三には怖畏の因縁、四には愚癡の因縁なり。是の罪根の因縁及び(二四)習皆已に拔き給ふ。阿羅漢辟支佛は罪の因縁を拔くと雖も、習を盡くさざるが故に、或時は失あり。佛は一切法中に於て智慧を遍滿し、常に成就し給ふが故に「失なし」。「阿羅漢等は」若くは不知の故に失あり、舍利弗の如きは、五百の比丘と遊行し、一の空寺に至つて宿す。是の時は說戒の日なり、內界外界の事を知らずして佛に白す、佛の言はく、「住處乃至一宿を棄捨すれば則ち界なし」と。又異時に舍利弗、目犍連は五百の比丘を將ゐて還れり、時に高聲大聲せしが故に、佛は驅遣して出でしめ給へり。是を口失と爲す。又舍利弗の如きは、等食法を知らず。佛の言はく、「不淨食を食せり」と。是の如き等の身口の失あり。佛は諸の煩惱の習を盡くし給ふが故に、是の如きの失なし。復次に、佛の一切の身口の業は、智慧に隨つて行じたまふが故に、身に失なく、口に失なし。是の如き等の種種の因縁の故に、身に失なく口に失なし。

念に失なしとは、(二五)四念處の心を長夜に善く修するが故なり。善く甚深の禪定を修して心散亂せざるが故なり。善く欲愛及び法愛を斷じて諸法の中に心著せざるが故なり。第一の心安隱の處を得るが故なり。若し心懅しく怱怱なれば、念に忘失あり。佛は心に失を得るなし、是の故に失なし。復次に、佛は宿命通・明・力の三種あり、念を莊嚴するが故に、念則ち成就して失なし、念は盡く過去に

【二三】罪根の因縁。
【二四】習とは煩惱の餘力なり。
【二五】第三念無失の義解。

在つて用ふるが故なり。復次に、念の根力無邊無盡なるが故に念に失なし。復次に、佛の一切の意業は智慧に隨つて行じたまふが故に念に失なし、一一の念は意に隨つて行ずるが故なり。是の如き等を名けて念に失なしと爲す。〔二六〕天問經の中に說くが如し。

『何人か過失なき。何人か失念せざる、何人か常に心を一にして、應に作すべき者を能く作せる。正しく一切法を知つて、一切の障を脫することを得、諸の功德を成就するは、唯、佛一人のみ有り。』

〔二七〕異想なしとは、佛は一切衆生に於て分別なく、遠近の異想なし。是は貴なり爲に說くべし、是は賤なり爲に說くべからずと「の異想なし」。日の出でて普ねく萬物を照すが如く、佛の大悲の光明は、一切を憐愍して等しく度し給ふ。恭敬する者も恭敬せざる者も、怨親貴賤悉く等しくす。客の除糞人の尼陀と名くるが如きを、佛は之を化度して大阿羅漢を得せしめ給へり。亦德護居士の如きは、火坑、毒飯を以て佛を害せんと欲するに、卽ち其の日を以て、其の三毒を除き、邪見の火を滅し給ふ、是の如く等うして異想あると無し。復次に、佛は舍利弗彌勒菩薩等の、佛法に順じて行ずるに於ても、亦愛し給はず、提婆達多富羅那外道の六師邪見等をも、亦憎み給はず。是れ佛は無量阿僧祇劫より、心を修熏し給ふが爲の故なり。是の衆生の中の寶は眞金の如し、異ならしむべからず。復次に、佛は佛眼を以て、一日一夜各三時に、一切衆生

【二六】天問經讃佛の偈。
【二七】第四無異想の義解。

を觀じたまひ、誰か度すべき者ぞ、時を失せしむること無らんと、等しく衆生を觀じたまふが故に、異想あると無きなり。

復次に、佛は種種の因緣もて善法を讃し、種種の因緣もて不善法を訶したまふ。亦善に於ても、惡に於ても、心に增減なく、但衆生を度せんが爲の故に是の分別あり、是を異想あると無しと爲す。復次に、〔二八〕一切不行經の中に說くが如くんば、佛は一切衆生を觀じたまふこと、己身の如く、所作已に辦じ、無始、無中、無終なり、是を異想なしと名く。復次に、「佛は一切衆生及び諸法を觀じ給ひ、本より已來、不生・不滅、常に清淨にして、涅槃の如きに至る」と。是を異想なしと名く。復次に、不二の法門に入りたまふ。是の諸法實相の門には、異相は卽ち是れ二法にして、二法は卽ち是れ邪道なり。佛は是れ無諍法の人、應に諍法を行ずべからず、常に不二を行じて法門に入りたまふ。諍法は卽ち是れ異相なり。是の如き等を異相なしと名く。〔二九〕不定心無しとは、定は一心不亂に名く。亂心の中には、實事を見ることを得ること能はず、水波蕩なれば、面を見ることを得ざるが如く、風中の燈は、好く照らすことを得ざるが如し。是の故に佛には不定心無しと說く。

問うて曰く、〔三〇〕定とは未到地、乃至滅盡定に名く。此の定中に入れば、身業口業を起すこと能は

〔二八〕一切不行經の所說。
〔二九〕第五無不定心の義解。
〔三〇〕第三問、若し佛に不定心なくんば、何故に諸國に遊行し、四威儀を具し、大衆のために種種の因緣譬喩を說き給ひしや。

す。佛は若し常に定んで不定心なくんば、云何が諸國に遊行し、四威儀を具し、大衆の爲に種種の因緣、譬喩を以て說法し給ふとを得ん。是の如き事は、欲界繫の心及び梵世も、定に入らずして是の事ある可し。答へて曰く、不定心なしとは種種の義あり。定とは常に心を攝して、善法の中に住するに名く。佛は諸法實相の中に於て、定んで不退不失なり、是を不定心なしと名く。復次に、欲界の中に定あり、是の定中に入つて說法すべし。是の故に阿毘曇の中に欲界繫の四聖種、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、無諍三昧、願智、四無礙智を說く。是の如き等の妙功德有りて、佛は欲界の中の定に入りたまふが故に不定心なしと名く。〔三一〕諸の聲聞、辟支佛は定より起つて、若くは無記心に入り、若くは善心に入り、或は退して垢心に入る。佛は定より起つて欲界定に入りたまひ、初より心を散亂する時なし。是の故に不定心なしと名く。復次に、〔三二〕聲聞法の如きは化人法を說けば化主は說かず、化主說けば化人は說かず。佛は則ち爾らず。化主化人倶に能く法を說く。定心も亦異るべし。〔三三〕聲聞は定に入れば則ち說くと無し。佛は定に在つて亦よく法を說き、亦よく遊行したまふ。〔三四〕密迹經の心密の中に說くが如し、「諸佛の心は常に定中に在り、心も亦應に說法すべし」と。復次に、散亂の心法、諸の結使、疑悔等は佛には皆なし。〔三五〕阿羅漢は四諦の中に疑なしと雖も、一

【三一】二乘は定より起つて、無記心に入り、佛は常定にして退くことなし。
【三二】大小二乘の說法上に於ける相異。
【三三】聲聞は入定すれば、說法せず、佛は定中に在るも、說法遊行す。
【三四】密迹經の所說。
【三五】聲聞は一切法中、處處に疑あれども、佛は爾らず。

切法の中に處處に疑あり、佛は一切法の中に於て常に定にして疑なし、不定の智慧なきが故なり。復次に、(三六)聲聞は諸の煩惱の習氣あるが故に、[又]退法あるが故に散亂あり。佛は一切智處の中に於て智滿ちたまふが故に亂なし。瓶中の水滿つれば則ち聲なく、動なきが如し。復次に、唯佛一人のみ不誑法と名け、三堅固人の中に最上にして、苦樂の心異ならず。一相、異相、生滅相、斷常相、來去相、是の如き等の諸の法相は、皆是れ誑法にして、虛妄和合の作法なるが故なり。佛は諸法の實相の中に安立し給ふが故に心に不定なく、不定なきが故に心異ならず。復次に、五種の不可思議法の中に、佛の最も不可思議なるは、是れ十八不共法にして、是れ佛の甚深藏なり、誰か能く思議する者ぞ。是故に佛に不定心なき事必ず常に爾るべし。(三七)佛は常に定に入つて覺觀の麤心なしと雖も、不可思議の智慧あるが故に亦よく說法したまふ。譬へば(三八)天樂の天の好む所の種種の聲に隨ふが如し。[而も]應に是れ亦心なく、亦識法なかるべし。諸天は福德の因緣を以ての故に、是の如き天樂ありて、無心無識にして能く物に應ずるなり。何に況んや佛は有心にして、說法し給はざるをや。是の故に佛には不定心なしと說く。

(三九)知り已つて捨てざると無しとは、衆生に三種の受あり、苦受・樂受・不苦不樂受なり。苦受は瞋を生じ、樂受は愛を生じ、不苦不樂受は愚癡を生ず。是の三種の受に於て、苦受は苦を生じ、苦に住す

【三六】聲聞には心の散亂あるも佛は智滿つるが故に亂なし。

【三七】佛は常に定に入つて說法すること、天樂の無心にして物に應ずるが如し。

【三八】天樂。諸の天上界に於ける天人の伎樂を言ふ。

【三九】第六無不知已捨の義解。

れば樂を滅す。樂受は樂を生じ、樂に住すれば苦を滅す。不苦不樂受は苦と爲すとを知らず、樂と爲すとを知らず。餘人は鈍根の故に、多く苦受樂受を覺し、不苦不樂受の中は於て、不覺不知にして捨心あり、是を癡使の爲に使はるとなす。佛は不苦不樂受の中に於て、覺生する時、覺住する時、覺滅する時を知りたまふ。是の故に佛は知り已つて捨てざるの心無しと言ふ。

問うて曰く、(四〇)此の中に何等をか捨と爲すや、不苦不樂即ち是れ捨なりや、七覺の中の捨と爲すや、四無量心の中の捨を名けて捨と爲すや。答へて曰く、不苦不樂即ち是れ捨なり。二處の捨も亦是れ捨なり。何となれば餘人は不苦不樂受の中に於て、念念の中の生時、住時、滅時を覺せず、久遠より覺せる佛は、念念の中に盡く皆了知したまふ。七覺の中の捨とは、若し心正等なれば、沒せず、掉せず、是の時應に捨すべし。若し沒する時は精進の想を行じ、若し掉する時は攝心の想を行ず。諸の聲聞辟支佛は、或時は攝心掉心を錯り、未だ平等に便ち捨せず。佛は念念心中の麁細深淺に於て悉く知り、知り已つて捨し給はざるとなし。

問うて曰く、(四一)若し爾れば、佛は何を以てか難陀の爲に說き、諸の比丘に「向つて」、「難陀は諸受に於て、生時を覺し、住時を覺し、滅時を覺す。諸想諸覺も亦是の如し」と「告げ給ひしや」。答へて曰く、(四二)覺に二種あり。一には心中を覺す。苦受生ずれば、苦受の生ずるとを知り、苦受住すれば、

【四〇】第四問、捨とは何ぞや。

【四一】第五問、佛は何故に難陀は諸受に於て生時を覺し、住時を覺し、滅時を覺すと宣ひしや。

【四二】二種の覺。

苦受の住することを知り、苦受滅すれば、苦受の滅することを知り、樂受生ずれ、樂受の生ずることを知り、樂受住すれば、樂受の住することを知り、樂受滅すれば、樂受の滅することを知る、不苦不樂受も亦是の如し。但能く是の總相を知つて別相を知ること能はず。二には念念の中の苦樂、不苦不樂受の中に悉く覺し悉く知り、念念の中の心數法を知らずして過ぐること無し、是の故に佛は知り已つて捨ざる無しと說く。復次に、佛は或時、衆生を捨てて甚深の禪定に入り給ふこと一月、二月なり。有人疑ふらく、「佛は衆生を度せんが爲の故に出世したまふ、何を以ての故に常に定に入りたまふや」と。佛の言はく、「我種種の因緣を知るが故に捨す、是れ知り已つて捨する無きに非ず」と。

問うて曰く、(四二)何等か是れ知り已つて、捨するの因緣なりや。答へて曰く、大衆の中に於て、疲れ厭ふことあるが故に小息したまふ。復次に、佛は世世に常に遠離の行を愛したまふ。若し菩薩母胎に在れば母も亦遠離の行を樂ひ、城を去ること四十里の嵐鞞尼林の中にて生む。得道の時は、漚樓頻螺林の中に獨り在し、樹下にて成佛し、初轉法輪の時も、亦仙人の住處なる鹿林の中に在し、涅槃に入りたまふ時は、沙羅林雙樹の下に在つて、長夜に樂んで遠離を行じたまふ。是を以ての故に佛は禪定に入りたまふ。

復次に、佛は常に捨心を成就したまふが故に禪定に入りたまふ。復次に、佛は憒閙及び雜語の處を遠離し、亦自ら諸佛の功德藏を觀じ、亦第一淸淨の樂を受くるが故に禪定に入りたまふ。復次に、佛は

【四二】第六問、知り已つて捨する理由如何。

法を說き已れば、常に諸の比丘に「當に坐禪すべし、後悔せしむることなかれ」と敎へたまへり。口の說く所、身も亦自ら行ずるが故に、禪定に入りたまふ。復次に、惡供養を厭ふが故に、衆生の應に得度すべき者を知つて、禪定に入り、化人と作り、往いて度したまふ。復次に、衆生あり、定少く慧多き者には、禪を行ずることを示し、以て之を敎化したまふ。復次に人あり、常に佛を見て厭想を生ずるが故に、小らく遠離したまふ。〔蓋し〕其をして飢虛せしめんが故なり。

復次に、佛は諸天の爲に、說法せんと欲するが故に、閑靜の處に在したまふ。復次に、佛は後世の作法の爲の故に、坐禪したまふ。又佛は自ら法輪を轉じ已り、事を以て弟子に付したまふが故に、禪定に入りたまふ。復次に、二種の道を現じて衆生を攝するが故なり。一には禪定、二には智慧、佛、大衆に在つて法を說き給ふは智慧を現ぜんが爲にして、靜處に心を攝したまふは、禪定を現ぜんが爲なり。復次に、衆生は六塵の中に於て、三種の行あり。好色を見ては喜樂を生じ、惡色を見ては憂苦を生じ、不苦不樂色を見ては捨心を生ず。乃至法も亦是の如し。佛は六塵の中に於て自在にして、喜樂憂苦の處に於て能く捨心を生じたまふ。聖如意の中に說くが如し。是の如き等の種種の因緣の故に禪定に入りたまふ。知り已つて捨せざるには非ず。

〔四〕欲滅する無しとは、佛は善法の恩を知りたまふが故に、諸の善法を集めんと欲し給ふが故に、欲滅すること無く、諸の善法を修習し、厭足なきが故に、欲滅すること無し。譬へば一長老比丘の如き

【四】第七欲無滅の義解。各原本皆滅は減に作る。

は、目闇くして、自ら僧伽梨を縫ひ、針の袵脫す。諸人に語つて言く、「誰か福德を樂欲する者ぞ、我が爲に針に袵せよ」と。爾の時、佛は其前に現じて語げて言はく、「我は是れ福德を樂欲して厭足なき人なり、汝が針を持ち來れ」と。是の比丘は、朦朧たる佛の光明を見、又佛の音聲を識つて、佛に白して言さく、「佛は無量の功德海の、皆其の邊底を盡くしたまへり、云何が厭足なきや」と。佛比丘に告げたまはく、「功德の果報は甚深にして、我が如く恩分を知る者あること無し。我は復其の邊底を盡くすと雖も、我本心に厭足なきを欲するを以ての故に佛を得たり。是故に今猶ほ息まず。更に功德の得べき無しと雖も、我は心に亦休まざらんとを欲す」と。諸天世人驚悟すらく、「佛すら功德に於て尚ほ厭足なし、何に況んや餘人をや」と。佛は比丘の爲に說法したまふに、是の時、肉眼即ち明にして慧眼成就せり。

問うて曰く、（聖）如し佛は嘗て、一切善法の中の欲を斷せば、今云何が欲滅すること無しと言ふや。答へて曰く、一切善法の中の欲を斷すと言ふは、是れ未だ得ざるを得んと欲し、得已れるを增さんと欲するなり。佛は是の如きの欲なし。佛は一切の功德を具足して得ざる者なく、亦增益したまふと無し。今欲と言ふは、先に說くが如く、佛は其に一切の功德を得ると雖も、欲心猶息まず、譬へば馬寶の至る處に到ると雖も、去心息まざるなり。死に至るまで已まざるが如く、佛寶も亦是の如し。又劫盡の大火の三千大千世界を燒きて悉く盡くせども、火勢故らに息まざるが如

【四五】第七問、斷欲は佛の一特性なり、然るに今ここに「欲滅するなし」といふは何故なるか。

し。佛の智慧の火も亦是の如く、一切の煩惱を燒き、諸法を照し已るも、智慧相應の欲亦盡きず。復次に、佛は一切善法の功德滿足すと雖も、衆生は未だ盡くさざるが故に度せんと欲して息まざるなり。

問うて曰く、(四六)若し佛は衆生を度せんと欲して未だ息まざれば、何を以てか涅槃に入りたまひしや。

答へて曰く、(四七)衆生を度するに二種あり。或は現前の得度あり、或は滅後の得度あり。(四八)法華經の中に說くが如し。「藥師は諸子の爲に藥を合せて之を與へ、而して捨す」と、是の故に涅槃に入る。復次に、衆生あり、鈍根にして德薄きが故に大事を成ずること能はず、但福德の因緣を種うべし。是の故に涅槃に入りたまふ。

問うて曰く、(四九)佛の滅度の後も亦阿羅漢を得るものあり、何を以てか但福德の因緣を種うべしと言ふや。答へて曰く、阿羅漢を得る者ありと雖も少なくして言ふに足らず。佛の一たび說法したまふ時の如きは、十方無量阿僧祇の衆生道を得れども、佛の滅後には爾らず、譬へば大國の征伐して、少しく所得ありと雖も、名けて得と爲さざるが如し。是の故に衆生は未だ盡くさずと雖も而も涅槃に入りたまふ。復次に、摩訶衍の(五〇)首楞嚴經の中に「佛は莊嚴世界に於ては、壽七百阿僧祇劫にして衆生を度脫す」と說く。是の故に佛は欲滅すること無しと說く。(五一)精進滅すること無しとは、欲の中に「欲の義は卽ち是れ精進なり」と說くが如し。

【四六】第八問、佛は何故に涅槃に入り給ひしや。
【四七】二種の度生。
【四八】法華經如來壽量品に出づ。
【四九】第九問、福德の因緣を種うべき理由如何。
【五〇】首楞嚴經の所說。
【五一】第八精進無滅の義解。

問うて曰く、【五一】若し爾らば十八不共法あると無けん。復次に、欲と精進とは、心數法の中には、各別なり、云何が欲は即ち是れ精進なりと言ふや、答へて曰く、【五二】欲を初行と爲し、欲の增長するを精進と名く。佛の說きたまふが如くんば、一切法は欲を根本と爲す。欲は人の渇して飮を得んと欲するが如く、精進は因緣方便を以て飮を求むるが如し。欲は心に得んと欲すと爲し、精進は其の事を成ぜんと爲す。欲は意業に屬し、精進は三業に屬す。欲は內と爲し、精進は外と爲す。是の如き等の差別あり。復次に、是の精進は諸佛の樂ひたまふ所なり。釋迦牟尼佛の如きは、精進力の故に九劫を超越して、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。復次に、說くが如くんば、一時佛、阿難に告げたまはく、「汝、諸の比丘の爲に法を說け、我、背痛む、小らく息まん」と。爾の時、世尊は四疊の鬱多羅僧を下に敷き、僧伽梨を以て、頭に枕して臥したまふ。是の時、阿難は七覺の義を說きて、精進覺に至るに、佛は驚き起きて坐し、阿難に告げたまはく、「汝は精進の義を讚するや」。阿難言さく「讚す」と。是の如くして三たびに至る。佛の言はく、「善哉、善哉、善く精進を修せば、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至らん」と。何に況んや餘道をや。是の義を以ての故に、佛は精進滅するとなし、病時すら猶尙息みたまはず、何に況んや病みたまはざる[時]をや。

復次に、佛は衆生を度せんが爲の故に、甚深の禪定の樂を捨て、種種の身、種種の語言、種種の方

【五一】第一〇問、欲は即ち精進なりといふ理由如何。

【五二】欲と精進との關係。

便力を以て衆生を度脫したまひ、或時は惡險の道を過ぎ、或は惡食を食し、或時は寒熱を受け、或時は諸の邪なる問難、惡口、罵詈に値ひ、忍受して厭ひ給はず。佛世尊は諸法の中に於て、自在にして、是の事を行じたまふと雖も、懈怠を生じたまはず。【四】佛の衆生を度し已つて、薩羅林中の雙樹の下に於て臥したまふ「時の」如きは、梵志須跋陀、阿難に語らく、「我は一切智人の今夜當に滅度したまふべきことを聞けり、我佛に見えんと欲す」と。阿難は之を止めて言く、「佛は衆人の爲に廣く說法して疲極したまへり」と。佛は遙に之を聞き、阿難に告げたまはく、「須跋陀を聽し入れよ、是れ我が末後の弟子なり」と。須跋陀は入ることを得て、佛に疑ふ所を問ひたてまつるに、佛は意に隨つて說法して疑を斷じ、道を得せしめたまへば、佛に先つて無餘涅槃に入りたまへり。諸の比丘、佛に白して言さく、「世尊は甚だ希有と爲す。乃至末後に外道梵志を憐愍して共に語言したまふ」と。【五】佛の言はく、「我は但今世のみ末後に度するに非ず、先世未だ道を得ざる時も亦末後に度せり。乃ち往過去無量阿僧祇劫に大林樹あり、諸の禽獸多し。野火來つて燒き、三邊俱に起る。唯一邊のみ有り、而も一水を隔つ。衆獸窮逼して命を逃るるに地なし。我、爾の時、大身多力の鹿たり。前の脚を以て一岸に跨け、後の脚を以て一岸を距み、衆獸をして脊の上を踏んで渡らしめ、皮肉盡く壞るれども、慈愍の力を以て、之を忍んで死に至る。最後に一の兎來る、氣力已に竭くれども、自ら强努の力を以て、忍

【四】佛、最後の弟子のため說法し給へる因緣。
【五】佛むかし大鹿たりし本生譚。

んで過ぐるを得せしめ、過ぎ已れば、存折れ水に墮ちて死せり。是の如きもの久しく有り、但今のみに非ず。前に得度せる者は今の諸弟子なり、最後の一兎は須跋陀是れなり」と。佛は世世に樂んで精進を行じ、今猶は息みたまはず。是の故に精進滅すること無しと言ふ。(五六)念滅すること無しとは、三世の諸法に於て、一切の智慧相應するが故に、念滿足して滅すると無きなり。

問うて曰く、(五七)先に已に、念に失なきことを說き、今復念滅すること無しと說く。念に失なきと、念滅せざると、一となすか、異となすか。若し一ならば、何を以てか重ねて說くや。若し異ならば、何の差別ありや。答へて曰く、失念は誤錯に名け、滅は及ばざるに名く。失念は威儀・俯仰・去來の法の中に念を失するに名け、無滅は禪定神通の念に住し、過去現世に通達無礙なるに名く。

問うて曰く、(五八)何を以ての故、念滅すると無きは、獨り是れ佛の法なるや。答へて曰く、聲聞、辟支佛は、善く四念處に住するが故に念牢固なり。牢固なりと雖も、猶ほ亦滅少し礙へて通達せず。宿命智力の中に說くが如し。「聲聞、辟支佛は宿命を念ずると、極めて多きは八萬劫なるも廣さに於て滅あり、亦見諦道の中に於て念念に分別すると能はず。佛は念念の中に於て、皆三相を分別したまふ。佛心は一法をも念ぜずと云ふこと有ること無し。是の故に獨り佛にのみ念無滅有るなり。復次に、宿命智力は念に隨つて知る。佛は是の中に於て力あり、聲聞、辟支佛すら尙是の念力なし、何に況んや

【五六】第九念無滅の義解。
【五七】第一一問、念無失と念無滅との異同を問ふ。
【五八】第一二問、念無滅は獨り佛の法なる理由如何。

餘人をや。復次に、佛は一切智無礙解脱を以て念を守護したまふ。是の故に滅すること無し。是の如き等の因縁の故に、佛は念滅すること無し。

五九慧滅すること無しとは、佛は一切の智慧を得たまふが故に、慧滅すると無し、三世の智慧無礙なるが故に、慧滅すること無し。復次に、十力・四無所畏・四無礙智を成就したまふが故に、慧滅すると無し。復次に、譬へば蘇油豐饒なれば燈炷清淨にして、光明も亦盛なるが如し、佛も亦是の如く、三昧王等の諸の三昧禪定の油念滅すると無く、清淨の炷あり、是の因緣の故に慧の光明は無量無滅なり。復次に、初發心より無量阿僧祇劫に、一切の智慧を集むるが故に、深心に法の爲にするが故に、頭目髓腦を悉く捨し、內外に有する所を而も布施し、火に入り山に投じ、皮を剝ぎ身を釘にし、是の如き等の苦として、受けざるもの無きが故に、一心に智慧を集むるが爲の故に、慧は滅すると無し。復次に、佛の智慧は、一切の功德・持戒・禪定等を以て助成するが故に、慧は滅すると無し。復次に、世世に一切の經書を求め、世俗法・佛法・麤細の善不善、悉く皆學び知るが故に、慧は滅すると無し。復次に、十方無量の諸佛より、聞く所の法を讀誦し、思惟し修習し問難するが故に、慧は滅する無し。復次に、一切衆生の爲の故に、一切の善法を增益するが爲の故に、一切處の無明を破するが故に、慧は滅する無し。復次に、是の智慧は、實に諸法の相の不生不滅、不淨不垢、無作無行を知り、是智非智を分別せず。諸法は一等に清淨なると、虛

【五九】第十慧無滅の義解。

空の無染無著なるが如しと知る。二法を以てせざるが故に、不二にして法相に入るを得。不二にして法相に入れば無量無邊なり。是故に慧滅する無し。是の如き等の種種の因緣の故に慧滅する無し。

〔六〇〕解脱滅する無しとは、解脱に二種あり、〔六一〕有爲解脱と無爲解脱となり。有爲解脱は無漏の智慧に相應する解脱に名け、無爲解脱は一切煩惱の習都て盡くして餘なきに名く。佛は二解脱に於て滅なきなり。何となれば聲聞辟支佛は、智慧大利ならざるが故に、煩惱悉く盡くさざるが故に、智慧滅すること有り、佛は智慧第一にして、利なるが故に、煩惱の習、永く盡くして餘すこと無きが故に、解脱滅すること無きなり。

復次に、漏盡力の中に說くが如くんば、佛と聲聞とは解脱に差別あり。佛は漏盡力を得たまふが故に、解脱滅したまふこと無く、二乘は力なきが故に、滅すること有り。〔六二〕解脱知見滅する無しとは、佛は諸の解脱の中に於て、〔その〕智慧無量無邊清淨なるが故に、解脱知見滅する無しと名く。

問うて曰く、〔六三〕佛は一切法中、滅する無し、何を以ての故に、但六事の中にのみ滅する無きや。答へて曰く、一切の自利他利の中に、四事能く具足す、欲は一切の善法を求むるの、根本なり、精進は能く行じ、念は能く守護すると、守門の人の善者は入ることを聽し、惡者は〔之〕を遮るが如し。慧は

【六〇】第十一解脱無滅の義解。
【六一】二種の解脱。
【六二】第十二解脱知見無滅の義解。
【六三】第一三問、佛は一切法中滅することなし、然るに六事の中にのみ滅するなしと言ふは何故なるか。

一切の法門を照して、一切の煩惱を斷ず。是の四法を用ゐて事を成辦するとを得。是の四法の果報に二種あり、一には解脫、二には解脫智見なり。解脫の義は先に說くが如し。解脫知見とは、是の解脫知見を用ゐて、是二種の解脫の相なる、有爲無爲の解脫を知り、諸の解脫の相を知る。所謂時解脫と不時解脫と、慧解脫と俱解脫と、壞解脫と不壞解脫と、八解脫と不可思議解脫と無礙解脫と等なり。諸の解脫の相の牢固、不牢固を分別する、是を「解脫智見滅する無し」と名く。念佛の中に佛は五無學衆を成就す「と說く」。解脫知見衆は、此の中に應に廣く說くべし。

問うて曰く、〔六四〕解脫智見とは但知のみを言ふ、何を以てか復見を言ふや。答へて曰く、知を言ひ、見を言へば、事牢固なるとを得。譬へば繩を二つ合して一と爲せば則ち牢固なるが如し。復次に、若し但知を說けば則ち一切の慧を攝せず。阿毘曇に說く所の如くんば、慧に三種あり、〔六五〕知にして見に非ざる有り、見にして知に非ざる有り、亦見亦知なる有り。知にして見に非ざる有りとは、盡智、無生智、五識相應の智なり。見にして知に非ざる有りとは、八忍、世間の正見、五邪見なり。亦知亦見なる有りとは、餘殘の諸の慧なり。若し知を說けば則ち見を攝せず、若し見を說けば則ち知を攝せず、是の故に知と見とを說けば則ち具足す。復次に、〔六六〕人に從つて誦讀し分別し籌量するが如きは是を知と名け、自身に證を得るは是を見と名く。譬へば耳に其の事を聞き、猶尚疑あるは是を知と名く。親しく自ら目に覩

【六四】第一四問、解脫知と言はずして見を加ふる理由如何。
【六五】三種の慧。
【六六】知と見との差別。

て、了了にして疑なき、是を見と名くるが如し。解脱の中の知と見とも亦是の如く差別す。復次に、有人の言く、「阿羅漢の自ら解脱の中に於て、疑つて自ら了ると能はずんば、是の阿羅漢は、阿羅漢に非ず」と。是を以て、佛は是の如きの邪見を破せんが爲の故に、諸の聖人は解脱の中に於て、亦知亦見と說きたまふ。諸の阿羅漢は解脱知見を得と雖も、解脱知見に滅あり、一切を知るを得ざるが故に、上上の智慧根を成就せざるが故に、諸法の念念に生滅する時、別相の分別を知らざるが故なり。佛は上上の智慧根成就して、諸法の念念の別相、生滅を知りたまふが故に、解脱知見滅すると無し。復次法眼清淨に具足し成就したまふが故なり。法眼の義の中に說くが如くんば、是の衆生は空解脱門より涅槃に入り、是の衆生は、無相解脱門より涅槃に入り、是の衆生は、無作解脱門より涅槃に入ると知り、是の衆生は五衆門、十二入、十八界を觀じ、是の如き種種の法門を以て解脱を得と知る。佛は解脱知見に於て盡く知り遍ねく知りたまふ。是の故に佛の解脱知見は滅する無しと名く。

【六七】第十三・四・五、一切の身口意業は智慧に隨つて行ずの義解。

〔六七〕一切の身業、一切の口業、一切の意業、智慧に隨つて行ずとは、佛は一切の身口意業を先づ知り、然る後智慧に隨つて行じたまふ。諸佛の身口意業の一切の行は、衆生を利益せざる無きが故に、先づ知り、然る後智に隨つて行ずと名く。經の中に說くが如くんば、諸佛の乃至出息入息すら衆生を利益す。何に況んや身口意業を故らに作して而も利益せざらんや、諸の怨惡の衆生は佛の出入の息の

氣香を聞いて、皆信心清淨なるを得、佛を愛樂す、諸天は佛の氣息の香を聞いて、亦皆五欲を捨て、發心して善を修す。是の故に、身口意の業は智慧に隨つて行ずと言ふ。聲聞、辟支佛は是の事なく、心に故らに善を作し、然る後身口業は、善なり、意業は或時は無記なり、智慧に隨はずして自ら生ず、何に況んや餘人をや。憍梵波提比丘の如きは阿羅漢なりと雖も、自ら食し、吐いて更に食せり。是の業は智慧に隨はず。又（六八）摩頭波斯咤比丘阿羅漢の如きは梁上、或は壁上樹上に跳び上れり。又（六九）畢陵伽婆蹉の如きは恆神を罵つて小婢と言へり。是の如き等の身口業は先に智慧なく、亦又智慧に隨つて行ぜず。佛は是の事なし。

問うて曰く、（七〇）若し爾らば、佛の或時の身口業は、亦智慧に隨つて行ぜざるに似たり。何となれば、外道の衆中に入つて說法するに、都て信受する者なく、又復、一時大衆の中に在つて說法するに、胸臆を現はして尼揵子に示し、又復、人の二相を見ざるを疑ふが爲の故に、大衆の中に在つて、舌相陰藏相を現はせり、又復た、諸の弟子を「汝は狂愚の人なり」と罵り、提婆達を「汝は是れ狂人・死人・噉唾人なり」と罵れり、佛は結戒して八種の鉢は蓄ふべからず、比丘には二種の鉢、即ち「若くは瓦、若くは鐵を用ふるを聽し、而も自らは石鉢を用ふ。有時は、外道難問するに、佛は默然として答へず、又佛は處處に我ありと說き、處處に我なしと說き、處處に諸法ありと說き、處處に諸法なしと說けり。是の如き等の身口

【六八】摩頭波斯咤（原音不詳）

【六九】Pilinda-vatsa

【七〇】第十五問、佛陀の身口業は往往智慧に隨つて行ぜざりし例證あり、これは如何に說明すべきか。

業は智慧に隨つて行せざるに似たり。身口業は意業を離れず、意業は亦智慧に隨つて行せざると有るべし、云何ぞ常に智慧に隨つて行ずと言ふや。答へて曰く、是の事は然らず。是の諸事に於て皆先に智慧あり、然る後諸業は智慧に隨つて行じたまふ。何となれば佛は外道の衆中に入つて、「彼等は」今世には信ぜず、受けざるを知り給ふと雖も、後世の大因縁を種うるを以ての故に、又復た、外道の謗つて、佛は自ら高慢なりと言ふを止めんが爲の故に、自ら往いて其衆中に入り給ふ。又外道の言く、「佛は自ら大悲あつて普ねく一切を濟ふと言ひ、而も但自ら四衆の爲に說法す。我等も亦是れ出家して道を求むれども、而も爲に說かず」と。又此の經の如きは、佛、外道の衆中に往いて說法したまふに、信受せざりきと言はず、佛は遙に外道の大會して高聲に論議するを見、餘處に至らんと欲するも廻り往つて之に趣きたまふに、論議師の輩は、遙に佛の來りたまふを見て、自ら其の衆に語らく、「汝等皆默せよ、佛は是れ寂靜を樂しむ人なり。汝等が靜默なるを見ば、或は能く此の中に來らん」と。衆卽ち默然たり。佛は其の衆に入つて〔七〕婆羅門の三諦を說きたまふに、外道の衆は皆默然たり。佛是の念を作したまはく、「狂人の輩は、皆惡魔の爲に覆はる、是の法は微妙なり、乃至一人として、試に弟子と作る者あること無し」と。是の念を作し已つて座より去りたまふ。是の人は魔蔽を離るるとを得て、便ち自ら念ずらく、「我等は妙法を聞くことを得たり、云何が以て自ら利せざ

【七】婆羅門の三諦とは、
(一)。喜（Sattva）
(二)。憂（Rajas）
(三)。闇（Tamas）
のことなり。

らん」と。即ち皆佛所に往詣して、佛弟子と爲り、道を得て苦を離れき。

復次に、外道の弟子は、其の師を難かるが故に敢へて佛所に到らず。是故に佛は自ら、其の衆中に入り給ふに、衆は法を聞くことを得、信受堅固にして、復た師を難からず、弟子と爲ることを得、或は道跡を得。是の如き等の種種の智慧因緣あり、この故に往いて外道の衆に入り給ふ。復次に、薩遮祇尼揵子は銅鍱を腹に絡し、自ら誓つて言く、「人の我が難[問]を得て、汗を流さず、破壞する者あることと無し。大象乃至樹木瓦石も、我が難聲を聞かば、亦皆汗を流さん」と。是の誓を作し已つて、佛所に來至し、佛と論議す。佛之に質問し給ふに皆答ふること能はず、汗流れて地を淹ひ、體を擧げて、漬るが如し。佛、尼揵に告げたまはく、「汝は先に、我が難を聞いて、而も汗を流さざる者あること無し」と誓言せり、汝今汗流れて地を淹へり、汝試みに佛に汗相あるを見るや、不やを觀よ」と。佛は時に鬱多羅僧を脫いで之に示して言はく、「汗何處にか在る」と。

復次に、有人の言く、「或は頭は汗するも、身には汗せざる者あり、佛は頭には汗せずと雖も、身には必らず汗あらん」と。是の故に佛は鬱多羅僧を脫いで其の身を示したまふ。是に因つて外道は大に信向を得、皆佛法の中に入れり。是れ智慧の因緣に身業隨つて行ずるなり。

佛の舌相、陰藏相を現したまふは、有人、佛身の二相を疑ひ、而も是の人は得道すべくして、疑ふが故に得ず、是の故に二相を現じたまふ。舌を出だして面を覆ひ、舌大なりと雖も、還た口中に入

り、而も亦妨なく、見る者疑を斷せり。有人は、出舌の相を見て、若くは輕慢心を生ず。「是故に」舌を出だすこと、小兒の相の如くし、還た口に入れて、法を說き、妨なきことを見せしむるに、恭敬を起し、未曾有なりと歎ず。有人疑ふらく「佛の陰藏は現せず」と。爾の時に世尊は寶象、寶馬を化作し、之を指示して言はく、「陰藏相の現ぜざること正に是の如し」と。有人の言く、「佛は陰藏の相を出して、但一人に示すは、其の疑を斷ずるが故なり」と。論議師の輩の言く、「佛は大慈悲なり、若し人あり、佛の陰藏の相を見ば、能く善根を集め、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、及び能く大に歡喜せん、信敬の心を生ずる者には皆見ることを得せしめて、其の疑心を斷せん、是を除いては皆見ることを得ず」と。佛は大悲を以て衆生を度せんが爲の故に、三種の覆ひより出でて、暫らく現ずること電光の如し。是の衆生は、見已つて、佛に大悲心あることを信じ、實に戒法に於て取らず、著せず。是の如き等の因緣の故に、二相を現じたまふ、戲に非ず、差なきに非ざるなり。

佛は苦切の語もて、諸の比丘に「汝は狂愚人なり」と「宣へり」。苦切の語に二種あり、一には垢心もて瞋り罵る、二には衆生を憐愍し教化せんと欲するが故なり。離欲の人すら垢心にして瞋り罵ること有ること無し、何に況んや佛をや。佛は憐愍し敎化したまふが故に苦切の語あり。衆生あり、軟語もて、善く敎ゆれども道に入らざれば、檢要して苦切の麤敎を須ひ、乃ち法に入ることを得。良馬は鞭影を見て便ち去り、鈍驢は痛手を得て乃ち行くが如し。亦有る瘡は、軟藥唾呪を得て便ち差え、有る瘡は、

刀を以て其の惡肉を破出し、塗るに惡藥を以てすれば、乃ち愈ゆる者の如し。復次に、(三二)苦切の語に五種あり。一には但綺語し、二には惡口し亦綺語し、三には惡口し亦綺語し妄語し、四には惡口し亦綺語し妄語し兩舌す。五には煩惱なき心の苦切の語なり。「是に」弟子に善と不善法とを分別することを教へんが爲の故なり、衆生を苦難の地より拔かんが故なり。四種の惡語を具する者はその罪重し、三二一は轉轉して輕微なり、佛弟子、白衣にして(三三)初道若くは二道を得、奴婢を使令するが故に、惡口すること有るも不善道に非ず。攝律儀に二種あり、若くは綺語、若くは惡口綺語なり。阿那含、阿羅漢は煩惱なくして惡口を起す。但淨心を以て惡言を須ち、教化するが故に惡口綺語す。阿那含、阿羅漢すら尚ほ煩惱の起す所の惡口なし、何に況んや佛をや。復次に、(三四)佛に若し苦切の語あるも應に疑ふべからず、「また」難じて「佛は惡心を以て苦切の語を起こす」と謂ふべからず。何となればば佛は惡心久しく已に滅し、但深心を以て衆生を念じ給ふ。慈父の子を教ふるが如きは、苦言ありと雖も、子を成就せしめんが爲の故にして、是れ惡心に非ず。佛は菩薩たりし時、三毒未だ盡きず、仙人と作り、羼提と名けき、惡王に其の耳鼻手足を截られて、而も惡心を生ぜず、惡言を出さず。爾の時未だ得道せざるすら尚惡心なし、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得、三毒已に盡き、一切衆生に於て、大慈悲を具足し給ふに、云何ぞ佛に惡心の苦切語ありと疑はんや。復次に、佛若し狂愚人と

【三二】五種の苦切語。
【三三】初道とは、聲聞乘四果の第一預流果にて、二道とは一來果のことなり。
【三四】佛に惡心の苦切語なし。

言はば、是れ輭語實語なり。何となれば、三毒發るが故に、名けて狂愚と爲し、亦善事を以て利益するも、而も背ひ受けず、佛心を解せず、佛語を受けざる、是を狂愚と爲すを以てなり。

復次に、佛は內常に無我の智慧を行じ、外常に諸法の空を觀じたまふ。是の如きの者云何が惡口あらん。是の衆生は、佛心を解せざるが故に、佛語の短を求むるなり。若し衆生、佛の深心を以て憐愍し給ふとを解せば、假令大火に入ることを敎へたまふとも、卽時に歡喜して入ること、人の熱悶する時、淸涼の池に入るが如くならん。何に況んや語のみにして受けざらんや。衆生は惡魔の爲に覆はるるが故に、佛の深心を以て之を念ひ給ふことを知らず、是故に佛語を受けず。是れ佛が「汝は是れ狂愚人なり」と言ひし所以なり。復次に、有人は苦切の語を得て、便ち歡喜して言く、「親ら我を愛し給ふが故に是の如く言ふ」と。是を以ての故に佛は狂愚人と言ひ、佛提婆達に「汝は狂人・死人・嗽唾人なり」と語げ給へり。狂人とは、提婆達は罪重くして當に阿鼻地獄に入るべきを以ての故に、三種の苦切語なり。死人とは、人に似て而も諸の善法を集むると能はざるが故なり。亦提婆達の剃頭法服は、聖人の如くに似たるも、內に慧命なきを以ての故に死人と名く。死人は種種に莊嚴すれども轉轉爛壞して、終に活かしむ可らざるが如し。提婆達も亦是の如く、佛は日日種種に敎化し給へども、惡心轉た劇しく、惡不善法日日に轉た增し、乃至その逆罪を作す。是を以ての故に名けて死人と爲す。嗽唾人とは、提婆達は利養を貪るが故に、化して

【七二】佛、提婆に汝は狂人、死人云云と宣ひし因緣。

天身の小兒と作り、阿闍世王の抱中に在り。王は「小兒」鳴けば、其の口に唾を與へて嗽がしむ。是を以ての故に嗽唾人と名く。

問うて曰く、〔一七六〕提婆達は禪定を得て已に欲を離る、云何が復た他に唾を嗽ぐや。答へて曰く、是の人は惡心亦深く、其根も亦利なり、欲を離るるか故によく變化す。唾を嗽ぐ時は便ち失するも、利根なるが故に、求むる時は便ち得、是を以ての故に嗽唾人と名く。狂の義は先に說くが如し。復次に、〔一七七〕提婆達佛に白さく、「佛は已に老い、常に閑靜を樂ひたまふ、林中に入つて禪を以て自ら娯としたまふべく、僧を我に付したまふべし」と。佛の言はく、「舍利弗目揵連等の大智慧ある、善軟清淨の人にすら尙僧を屬せしめず、何に況んや汝狂人・死人・嗽唾人をや」と。是の如き等の因緣の故に、佛は諸法に於て著する所なしと雖も、敎化の爲の故に苦切語を現じ給ふ。而して比丘に八種の鉢を用ふるを聽したまはざるは、金銀等の寶鉢は寶物なるを以て、人貪るが故に、得難きが故に、貪著するが故に、此の寶物を蓄ふるを聽さず、乃至手に名寶を擧するを得ず、亦畜ふるを得ず。若し淨施もて得と作さば、價を用ふるを以て貴からざるが故に、木鉢は垢膩の不淨を受くるが故に、畜ふるを聽さず、三種の鉢は是の如き事なし。

問うて曰く、〔一七八〕瓦鐵の鉢は、皆亦垢膩を受くると、木鉢と異なると無し、何を以てか畜ふるを聽

【一七六】第一六問、已に禪定を得て欲を離れたる提婆達多が、他の唾を嗽げる理由如何。
【一七七】茲に以の字あれども恐くは衍字ならん。
【一七八】第一七問、瓦鐵の鉢も木鉢も、垢膩を受くること異ならざるにあらずや。

すや。答へて曰く、瓦鐵の鉢は熏せざれば亦聽さず、熏すれば垢膩を受けざるが故なり。石に麤細あり、細なる者は垢膩を受けざるが故に、世尊は自ら畜へ給へり。比丘に畜ふるとを聽したまはざる所以は、其の重きを以てなり。佛の乳哺の力は、一萬の白香象に勝れり、是の故に以て重しと爲したまはず。諸の比丘を慈愍するが故に聽したまはざりしなり。

問うて曰く、(七九)侍者の(八〇)羅陀彌、(八一)善迦須那、(八二)刹羅多、(八三)那伽婆婆羅、阿難等は、常に世尊に侍從して、應器を執持せり、何を以てか憐愍せざりしや。答へて曰く、侍從は佛鉢を執持すと雖も、佛の威德力を以ての故に、又佛を恭敬し尊重したてまつるが故に、重しと爲すとを覺せず。又阿難は身力も亦大なればなり。復次に、細なる石鉢は得難きを以ての故に、麤なる者は垢膩を受くるが故に、用ふるとを聽し給はざりき。佛鉢は四天王四山の頭より自然に生ずるが故なり。餘人は此の自然の鉢なく、若し求め作るとは甚だ難く、妨げ廢する所多し、是の故に聽し給はざりき。又佛を弟子と異らしめんと欲するが故に、佛は石鉢を用ゐ給へり。又國王の人に尊重せられ、食器も亦異るが如し。有人は、佛鉢の異るを見て、倍倍尊重を加へ、供養し、信心淸淨なり。

問うて曰く、(八四)若し鉢にして應に異るべくば、衣は何を以て同じきや。答へて曰く、佛衣も亦異れ

【七九】第一八問・侍者に石の應量器を持たしめ給ひしは、彼等を憐愍し給はざりしが爲なりや。
【八〇】羅陀彌(原音不詳)
【八一】善迦須那(原音不詳)
【八二】刹羅多(原音不詳)
【八三】那伽婆婆羅(原音不詳)
【八四】第一九問、佛と弟子と鉢を異にして衣を異にせざる理由如何。

り。佛は初めて成道したまひし時、迦葉の衣は應に佛の著する所なるべきことを知り給へり。迦葉の衣は價直十萬兩金なり。次で後に〔八四〕耆域は佛に摩根羯鞭もて染めたる衣を上るれり、價亦十萬兩金に直れり。佛、阿難に勅して、此の衣を持ち去り、割截して僧伽梨を作らしめ、作り已れば、佛、受けて著したまへり。是を異れりと爲す。

問うて曰く、〔八五〕佛は因みに是を諸の比丘に告げ給はく、「今日より若し比丘あり、一心に涅槃を求め、世間を背捨する者、若し著〔衣〕を欲せば、價直十萬兩金の衣を著することを聽さん。百味の食を食することを聽さん」と。衣は異れども、而も後に聽したまひ、鉢のみ獨り聽したまはざりき。答へて曰く、我先に已に石鉢の因縁を説けり、今當に更に説くべし。佛鉢は人より受けたまはず、佛初めて道を得て、食時に器を須ゐんと欲したまふに、四天王は、佛の心念を知り、四鉢を持て佛に上つれり。三世諸佛の法は、皆應に四天王あつて鉢を上るべし。爾の時に、未だ衆僧あらず、云何が聽すと言はん。後若し聽したまふとするも、人の石鉢を與ふること無し。又閻浮提は、石鉢を好まざるが故に、人の與ふる無し。復次に、佛説き給はく「比丘は常に當に功徳を覆ふべし」と。若し石鉢を受けば、人は「天龍の邊より得る」と謂ん。若し人をして作らしめば其工既に難し。又恐らくは人言はん、「此の比丘は佛と功を齊しうせんと欲す」と。〔これ〕聽さざる所以なり。衣は

〔八四〕 Jivaka or Jiva

〔八五〕 第二〇問、佛によれば佛はその後弟子に高價の衣を著ることを聽し給ひき、高價の鉢のみ聽し給はざりし理由如何。

若し有人は言く、「佛は僧中に在つて、檀越の好衣を受け、獨り著て比丘に聽し給はず」と、是の故に佛は比丘に著ることを聽し給へり。亦自ら著たまふこと無くんば、施者あり難く、著る者、得難きを以ての故なり。若し不清淨の比丘には、人の與へざる所、清淨の比丘は、少欲知足なるが故に著せず。佛は人の疑を斷ずるが故に著衣を聽し、鉢の中には望なし、是の故に聽し給はざりき。

問うて曰く、〔八七〕經中に說くが如くんば、「佛の金剛身は仰食を恃まず」と。何を以てか鉢を畜ふるや、答へて曰く、〔八八〕佛法に二種あり、一には聲聞道、二には佛道なり。聲聞法の中には、佛は人の法に隨つて食噉し給ふ所あり、摩訶衍法の中には、〔八九〕方便もて人の爲にするが故に、噉ふ所あることを現じたまふも、其の實は食したまはず。

問うて曰く、〔九〇〕云何が是れ方便なるや。答へて曰く、佛は人を度せんと欲して、人法を行ずることを示し給ふ。若し爾らずんば、「人は云はん」、「佛は人に非ざるを以て、我等云何ぞ能く其の法を行ぜん」と。復次に、有人は、布施に因つて度を得。是の人の爲の故に、佛は其の食を受け給ふに、便ち是の念を作さく、「我が食は佛身を助益することを得たり」と、心大に歡喜し、歡喜を以ての故に佛語を信受す。大國王を臣下の請して食せしむるに、王は須ゐずと雖も、彼の人を攝するが爲に、多少の食を爲して、其をして歡喜せしむるが如し。是の如き等の因緣を以て、佛

〔八七〕第二一問、佛の金剛身は仰食を恃まずといふ。鉢を畜ふる理由如何。
〔八八〕二種の佛法。
〔八九〕方便示現の故に、佛は仰食を用ひ給ふ。
〔九〇〕第二二問、方便を以てする理由如何。

は食を受くることを現じたまへり。

問うて曰く、〔九一〕若し佛食したまはずんば、受くる所の者は何處に在るや。答へて曰く、佛事は不可思議なり、問を致すべからず。復次に、有人は、佛の食を得て度する者あり。聲を聞き、色を見、身に觸れ、香を聞いて度を得るあり。食を須ゐて度を得る者には、佛は食を以て之に與へ給ふ。〔九二〕密迹金剛經に說くが如し、「佛の食を以て口中に著けたまふに、天にして佛道を求むる者あり、持つて十方に至つて之を施す」と。

問うて曰く、〔九三〕若し爾らば、今の僧の中に、佛の食は衆生の能く食する者あること無しと說けり、此の義云何。答へて曰く、佛與へたまはざれば、能く食すること有ること無し、今佛は之を施したまふ、是の故に食することを得。何を以てか之を知るやと云ふに、佛馬麥を食したまふ時は、食を以て阿難に與へ給ふ。又沙門二十億あつて、好羹を以て佛に上つるに、佛は殘羹を以て、頻婆娑羅王に與へ給へり。是の故に佛受け已つて、與へたまへば食することを得、與へ給はざれば、則ち消することを能はざるを知る。復次に、佛の爲に食を設けたてまつるに、佛未だ食したまはずんば、人消すること能はず。已に食して殘れる者を、佛與へたまへば、能く消す。是の故に實には、食したまはずと雖も、人を度するが爲の故に、食を受け鉢を畜ふることを現じたまふ。

【九一】第二三問、佛もし食し給はずんば、受くる所のものは何處に在るか。
【九二】密迹金剛經の文。
【九三】第二四問、經に「佛の食は衆生の能く食する者あること無し」といへる意義如何。

（九四）佛は十四難に答へたまはず。佛に四種の答あり。一には定答、二には分別義答、三には反問答、四には置答なり。此の十四難の法に應に置答すべし。又復若し利益する所の事あれば、則ち答へたまふ。外道の所問は涅槃の爲にせず、疑惑を增長するが、故に置答を以てし給ふ。必ず所益ありと知れば、分別して答を爲し、必ず所益なければ、置いて答へたまはず。是の因緣を以ての故に、佛は是れ一切智人なることを知る。復次に、若し佛は三種の法、〔卽ち〕有爲法と、無爲法と、不可說法とを說けば、則ち已に一切法を說き覺ると爲す。復次に、是の諸の外道は、常見に依止し、滅見に依止するが故に、問うに常と滅とを以てするも、實相は無なるが故に、佛は答へたまはず。外道の所見の如くんば、常相と無常相とは是の事なし。何となれば外道は相を取つて著す、是れ常〔見〕滅〔見〕なるが故なり。佛は常、無常の相を說きたまふと雖も、但治の爲に用ふるが故のみ。復次に、若し人說いて無なる者を有と爲し、有なる者を無と爲さば、是の如きの人は、卽ち是れ過罪なり、佛の答へ給はざるも、則ち答なし。日の天下を照らせども、高き者を下からしめ、下き者を高からしむると能はず、但顯現を以てするのみなるが如し。佛も亦是の如く、諸法に於て所作なく、諸法の有なる者を有と說き、無なる者を無と說きたまふ。生は老死に因緣たり、乃至無明は諸行に因緣たりと說きたまふが如し。佛あるも佛なきも、是の因緣の法は相續して常に世間にあり。諸佛出世して、衆生の爲に、此の法を顯示し給ふ。復次に、若し常〔見〕、滅〔見〕に

【九四】佛は十四の非難に答へず。

答ふれば、則ち答ありと爲す。石女、黄門の兒の、脩短黒白は、何の類ぞと問はば、此の問には、則ち答ふべからざるが如し。十四難も亦是の如く、但常〔見〕滅〔見〕を以て本と爲すが故に問ひ、常〔見〕滅〔見〕なきが故に佛は答へたまはず。是の如き等の種種の因緣の故に、佛十四難に答へ給はざるも答なし。佛の處處に有我と說き、處處に無我と說き給へるは、若し人佛法の義を解して、假名を知る者には說いて有我と言ひ、若し人佛法の義を解せず、假名を知らざる者には無我と說き給ひしなり。復次に、佛は衆生の斷滅の見に墮せんと欲する者の爲には、說いて「我あり後世の罪福を受く」と言ひ、若し人の常見に墮せんと欲する者には、爲に說いて「我なく、作者、受者なく、是の五衆の假名を離れて、更に一法として自在なる者無し」と言ふ。

問うて曰く、(九五)若し爾らば何等をか實と爲すや。答へて曰く、無我は是れ實なり。法印の中に說くが如し。「一切の作法は無常なり、一切法は無我なり、寂滅は是れ安隱なり、涅槃の法印を名けて、諸法實相と爲す」と。若し人善根未だ熟せず、智慧利からざれば、佛は爲に是の深無我の法を說きたまはず、若し爲に說かば、衆生は卽ち斷滅の見中に墮せん。

問うて曰く、(九六)若し爾らば、迦葉の問の中に佛の說き給へるが如くんば、「我も是れ一邊なり、無

【九五】第二五問、有我と無我とは孰れが眞實なりや。

【九六】第二六問、佛は一時、迦葉の問に對して、「我も一邊、無我も一邊なり、此の二邊を離るるを中道と爲す」と說き給へり。然るを今何故に無我は實にして、有我は方便說と爲すか。

我も是れ一邊なり。此の二邊を離るるを名けて中道と爲す」と、今云何が無我は是れ實にして、有我は方便說と爲すと言ふや。答へて曰く。〔九七〕無我を說くに二種あり、一には無我の相を取つて無我に著す。二には我を破して取らず、無我にも亦著せず、無我をも自然に捨離す。先に說く無我の如きは、則ち是れ邊なり、後に說く無我は是れ中道なり。復次に、佛の有我無我を說き給ふに二の因緣あり、一には世俗の說を用ふるが故に有我、二には第一實相の說を用ふるが故に無我なり。是の如くなれば有我、無我を說くも咎なし。佛は處處に諸法は有なりと說き、處處に諸法は無なりと說きたまへり。

問うて曰く、〔九八〕有無を別說すべからず、有は即ち是れ有我、無は即ち是れ無我なり。何を以てか更に說くや。答へて曰く、然らず、〔九九〕佛法に二種の空あり。一には衆生空、二には法空なり。無我を說くは、衆生空を示し、〔一〇〇〕我所の法ある無きを說くは、法空を示す。有我を說くは、假名の相を知つて、我に著せざる者に示し、無我を說くは、五衆の中に於いて、我相に著する者の、是の著我を破せんが爲の故に說く。但五衆あり、無常と苦と空と無我と寂滅涅槃と、是を有と名く。復次に、〔一〇一〕二種の斷見あり。一には後世に罪福の苦樂を受くる者なし。〔是の輩の〕爲に我有り、今世より後世に至るまで、罪福の果報を受くと說く、二には一切法は、皆空にして著無し「と言ふ」、是れ邪見な

【九七】二種の無我。
【九八】第二十七問、有無と有我無我とを別說する理由如何。
【九九】二種の空。
【一〇〇】我所の法とは、我が所有の物といふほどの意。
【一〇一】二種の斷見。

り。是の衆生の爲の故に、一切の法は有り、所謂る有爲〔法〕、無爲法なりと説く。
復次に、〔一〇二〕大利根ならざる衆生には、爲に無我と説き、利根深智の衆生には、諸法は本末空なりと説く、何となれば無我なれば、則ち諸法を捨すればなり。〔偈に〕説くが如し。

『若し無我を了知せる、是の如きの人あれば、法は有りと聞くも喜ばず、法は無し〔と聞くも〕亦憂へざるなり。』

我と説けば、一切法の所依止の處なり、若し無我と説けば、一切法の依止する所なし。復次に、〔一〇三〕佛法に二種の説あり、若し了了の説は、一切諸法は空なりと言ひ、若し方便の説は、則ち無我なりと言ふ。是の二種の説法は、皆般若波羅蜜〔多〕の相の中に入る。是の故に佛、經の中に説きたまはく、「涅槃の道に、趣くことは皆同一向にして、異道あること無し」と。

【一〇二】淺智のものの爲に無我と説き、深智のものの爲に法空を説く。
【一〇三】二種の佛法の説―諸法空と説くは實説、無我と説くは方便説。
【一〇四】未熟の爲には有と説き、成熟の爲には無と説く。

復次に、我あり、法ありとは、多く在家の者の爲に、父母・罪福・大小の業報ありと説く。何となれば在家の人は、多く涅槃を求めざるが故に、後果の報に著すればなり。出家人の爲には、多く無我・無法を説く。何となれば出家の人は、多く涅槃に向ふが故なり、涅槃を求むる者は、一切法を受けざるが故なり。自然滅は是れ涅槃なり。
復次に、〔一〇四〕人あり、信等の諸根未だ成就せざるが故に、先づ所得あらんことを求め、然る後に能

く捨す。是の人の爲の故に、佛は諸の善法を說いて、諸の惡法を捨てしめたまふ。人あり、信等の諸根を成就せるが故に、諸法に於て所得あることを求めず、但生死の道を遠離せんことを求む。是の人の爲の故に、佛は諸法は空にして、所有なしと說きたまふ。〔一〇五〕此の二は皆實なり。無名指は亦長く亦短し。中指を觀ずれば即ち短く、小指を觀ずれば則ち長く、長短皆實なるが如し。有と說き、無と說くも、亦是の如く、有と說くは、或時は是れ世俗、或時は是れ第一義なり。無と說くも、或時は是れ世俗、或時は是れ第一義なり。佛は是の有我、無我は皆是れ實なりと說き給へり。

問うて曰く、〔一〇六〕若し是の二事皆實ならば、佛は何を以ての故に、多く空を讃歎して、有を毀呰し給ひしや。答へて曰く、空にして所有なきは是れ十方諸佛、一切賢聖の法藏なり。般若波羅蜜〔多〕、囑累品の中に說くが如し。「般若波羅蜜〔多〕は、是れ三世十方の諸佛の法藏なり。般若波羅蜜〔多〕は即ち是れ無所有空なり」と。佛、或時、法有りと說き給ひしは、衆生を教化せんが爲の故なり。久しくして後、皆當に無所有法藏の中に入るべし。

問うて曰く、〔一〇七〕若し爾らば、云何ぞ般若波羅蜜〔多〕の中に、若し五衆の空にして、所有なきを觀ずるは、是れ道に非ずと言ふや。答へて曰く、是の般若波羅蜜の中には、有無は皆無しと說く。〔一〇八〕長

【一〇五】有無の二法の實なること、無名指の如し。
【一〇六】第二八問、有空ともに實ならば、佛は多く空を讃じて有を毀りし理由如何。
【一〇七】第二九問、般若の中に「若し五蘊は空なり、無所有なりと觀ずれば、是れ道に非ず」と說き給ひし理由如何。
【一〇八】長爪梵志經の所說。

爪梵志經の中に說くが如くんば〔二〇九〕三種の邪見あり。一には一切は有なり、二には一切は無なり、三には半有半無なり。佛、長爪梵志に告げたまはく、「是の一切有の見は、欲染の爲に瞋恚・愚癡の縛する所と爲り、一切無の見は、不染・不瞋・不癡の故に縛せざる所と爲り、半有半無の有は、上の有縛に同じく、無は上の無縛に同じ」と。聖弟子は是の念を作さく、「若し我一切有の見を受けば、則ち二人と共に諍ふ、所謂る一切無の者と、半有半無の者となり。若し我一切無の見を受けば、亦二人と共に諍ふ、所謂る一切有の者と、半有半無の者となり。若し我半有半無を受けば、亦二人と共に諍ふ、所謂る一切無の者と一切有の者と鬪諍するが故に相謗り、相謗るが故に惱見を致し、是の諍ひ謗り惱むが故に、是の無の見を捨て、餘の見も亦受けず。受けざるが故に即ち道に入る」と。若し一切諸法の空に著せず、心に諍を起さず、但結使を除かば、是を名けて實智と爲す。若し諸法の空相を取つて諍を起し、諸の結使を滅せず、是の智慧に依止するは、是を實智に非ずと爲す。佛の所說の如きは、衆生を度せんが爲の故に所說あり。是れ實ならざること無し。但衆生は中に於て、著不著あるが故に、實不實あり。是の如き種種の因緣の故に、佛の身口意業は過失あること無し。是の故に佛の身口意「業は」、先づ知つて而る後智慧に隨つて行じたまふと說く。

問うて曰く、〔二一〇〕初に身に失なく口に失なく、念に失なしと說けると、今復た身口意業は智慧に隨

〔二〇九〕三種の邪見。

〔二一〇〕第三〇問。身無失・口無失・念無失と身口意業は智慧に隨つて行ずと說くと何の差別ありや。

つて行ずと說く義と、何の差別ありや。答へて曰く、先の三種は失なきも因緣を說かず、今は因緣を說く。智慧に隨つて行ずるが故に失せず、若し先づ籌量せずして、身口意業を起さば則ち失あり。佛は先づ智慧を以て身口意業を起したまふが故に失なし。復次に、佛は三種の淨業、三種の寂靜業、三の不護業を成就したまふ。有人疑つて、「佛は何の因緣を以てか是の如き業を成就し給ふや」と言ふ。是の故に佛の言はく、「我が一切の身口意業は、先づ智慧を以てし、然る後に智慧に隨つて行ず」と。

佛は智慧を以て、過去・未來・現在世を知りたまふこと、通達無礙なりとは、此の三種の智慧は、三世に於て、通達無礙なるが故に、三業は智慧に隨つて行ずるなり。

問うて曰く、〔二二〕過去の諸法は、已に滅し、已に盡きて、復た有る所なく、未來世の諸法は、今來らず、生せず、和合せず、現在は、乃至一念の中にも、住する時なし、云何ぞ能く三世を知つて、通達無礙ならんや。答へて曰く、佛は、過去・未來・現在に、通達無礙なりと說きたまへり、此の言豈に虛しからんや。復次に、若し過去未來なくして、但現在の一念の頃のみあらば、佛は亦無量の功德を成就したまふことを得ず。十種の智の如きは、是れ十力なり。是の時、亦一心に十智あることを得ず。若し爾らば、佛は亦十力を具足したまふことを得ず。是の因緣を以ての故に、過去未來あることを知る。

【二二】第三一問、過去の法は落謝し、未來の法は生ぜず、現在は一刹那なり、然るが如何ぞ能く三世に亘つて通達無礙なりといふや。

問うて曰く、〔二二〕若し過去・未來・現在皆有ならば、何等か是れ無なるや。佛は四諦を說き、苦諦に無常等の相を觀じたまふ。無常とは、生滅敗壞不可得に名く。若し過去の法、今實有ならば、名けて無常敗壞不可得と爲さず。復次に、若し過去・未來・現在皆有ならば、便ち常に墮す。何となれば是の法は、未來世の中に在つて、定んで有ならば、轉じて現在に來り、現在より轉じて過去に入ればなり。人の一房より一房に入るを、失人と名けざるが如し。答へて曰く、若し失せずんば何の咎かある。

問うて曰く、〔二三〕若し無常なくんば、無罪無福、無生無死、無縛無解ならん。罪を殺等の十不善道と名く。若し無常なくんば、殺等の罪なし、分別邪見の中に說くが如し。「刀は身に在ると、七分の中を過ぐれば、惱害する所なし」と。福を不殺等の十善道と名け、無常を分別生死と名く。若し無常なくんば、亦生死なく、亦縛もなく、亦解もなけん。是の如き等の無量の過咎あり。答へて曰く、諸法は三世の各各に相あり。過去の法は過去の相あり。未來の法は未來の相あり、現在の法は現在の相あり。若し過去未來に、現在の相あらば、應に是の難あるべし。而も今は過去・未來・現在の各自に相あり。復次に、若し實に過去未來なくんば、亦出家の律儀なけん。何となれば若し現在惡心の中に住せば、過去に復た戒なし、是を比丘に非ずと爲す。又賢聖の人も心、世俗の中に在れば、是の時は應當に是れ凡夫なるべし。過去・未來・現在の道なければなり。是の如くならば、亦五逆等の諸罪

【二二】第二二問・三世皆有ならば何をか無と說くや。

【二三】第二三問、若し無常なくんば無罪無福無縛無解の過咎あるを免れざるにあらずや。

なく、是の凡夫は過去等の諸罪なけん。所以何ん、是の五逆の罪業は已に過ぎ去り、死に及ぶの時地獄に入るべければなり。是の五逆の罪は未來に業なきが故に報なけん。現在の身は逆罪を爲さず、若し過去なければ、則ち逆罪なし、若し逆罪なければ何ぞ餘罪あらん。福も亦是の如し。若し罪福なければ是れを邪見と爲す、禽獸と異なると無し。復次に、我は過去未來は、現在の相の如くに有なりとは說かず。我は過去は滅すと雖も、憶想を生じて、能く心と心數法とを生ずべきを說けり。昨日の火滅して、今日は憶想念を生ずべく、憶想念を以ての故に、火は便ち有なるべからざるが如し。若し薪を積むを見て、當に火を燃すべきを知るも、亦心想の念を生ず。明日の火も、過去の火の如く、今の心念の火を以て、火は便ち有なるべからず、未來世の事も亦、是の如し。現在の心は、一念の時も住せずと雖も、相續して生ずるが故に、能く諸法を知る。內には現在の意を以て因と爲し、外には諸法を以て緣となし、是の因緣の中に意識の用を生ず。意識は自在にして過去・未來・現在の法を知り、但自ら現在の心心數法を知らず、餘は悉く知る。

問うて曰く、(二四)般若波羅蜜「多」の如相品の中には、三世は一相なり、所謂る無相なりと「說けり」。云何が佛智慧は、三世に通達無礙なるを知ると言ふや。答へて曰く、諸佛に二種の說法あり。(二五)先づ諸法を分別して後、畢竟空を說きたまふ。若し三世の諸法に通達無礙なりと說くは、是れ分別の說

【二四】第三四問、佛智の三世に亙りて、通達無礙なる理由如何。

【二五】二種の說法。

なり。若し三世は一相無相なりと說くは、是れ畢竟空を說くなり。復次に、一切智人に非ずんば、三世の中の智慧に於て礙あり、乃至觀世音、文殊師利、彌勒、舍利弗等の諸の賢聖は、三世の中に於て智慧皆礙あり。是の因緣を以ての故に、佛の智慧は、三世の中に於て、通達無礙なりと說く。空事の爲の故には說くにあらず。復次に、有人は三世の中に於て、邪見を生じて謂く、「過去の法及び衆生は初あり、初なし」と。若し初あれば則ち新衆生あり。諸法も亦因なく、緣なくして生ぜん。若し初なくんば亦後なし。若し初なくんば後中なし、亦初なきは中あり後ありと名け、前後なきを初あり中ありと名け、後中なきを初あり後ありと名く。若し衆生及び諸法は、初なく亦中なく後なし、若し三世なければ、則ち都て所有なし。復次に、若し初なければ、云何が一切智人あらんと。是の如き等の邪見を破するが故に、三世の諸法は一相なり、所謂る無相なりと說く。三世を破するは佛智慧と爲さず。

問うて曰く、【二六】無相は是を有邊と爲すや。答へて曰く、若し無相なれば、即ち是れ無邊なり。說くべからず、難ずべからざるの法を、云何が有邊と言はん。若し無相の中に相を取るは、是れ無相に非ず、是の無相を名けて、不可得空と爲す。是の中無相も亦不可得、空も亦不可得なり。是の故に不可得空と名く。復次に、【二七】佛に二種の道あり。一には福德道なり。人あり、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等を聞いて、恭敬信樂の心を生ず。二には智慧道なり。人あり、諸法は因緣和

【二六】第三五問、無相は是れ有邊なりや。
【二七】二種の佛法の道。

合して生ずるが故に、自性ある無しと說くを聞いて、便ち諸法を捨離し、空の中に於て心著せず、月の能く物を潤ほし、日の能く物を熟し、二事の因緣の故に、萬物成就するが如し。福德道、智慧道も亦是の如く。福德道は能く諸の功德を生じ、智慧道は能く福德道の中に於て、諸の邪見の著を離る。是の故に佛は諸法畢竟空なりと說くと雖も、亦三世に通達無礙なりと說くに而も咎なし。是の如き等は、略して佛の十八不共法を說けり。

問うて曰く。(二八)若し爾らば、迦旃延尼子は、何を以てか十力・四無所畏・大悲・三不共意止を言つて、名けて十八不共法と爲すや。若し前に說ける十八不共法是れ眞義ならば、迦旃延尼子は何を以ての故に是の如く說くや。

答へて曰く、是の故に「之を」迦旃延尼子「の說と」名く。若し釋子は則ち是の說を作さず。釋子の說は是れ眞の不共法なり。佛法は無量なり。是の三十六法は、佛法の中に於て、大海の一渧の如し。法も亦少からず、何を以てか、數を重ねて十八と爲さん。復次に、諸の阿羅漢、辟支佛、菩薩も亦能く是處不是處を知り、三世の業、果報、及び諸の禪定、乃至漏盡智等を分別す、云何が不共法と言はんや。

問うて曰く、(二九)聲聞、辟支佛、菩薩は盡く知り、遍ねく知ること能はず、(三〇)但通明のみあつて(三一)力あること無し。獨り佛のみ盡く知り、遍ねく知りたまふが故に不共と言ふ。十力の中に說くが如し。答

【二八】第三六問。Kātyāyanīputra が十力・四無所畏・大悲・三不共意止を十八不共法と名けし理由如何。

【二九】第三七問、不共とは、盡く知り、遍く知るの義なりや如何。

【三〇】通明とは、三明六通の如きをいふ。

【三一】力とは、十力の意味ならん。

へて曰く、佛は十力の義を説くに、盡く知り、遍ねく知ると言はず、直に是處不是處を知ると言ふ。盡く知り、遍ねく知ると言ふは、是れ諸の論議師の説なり。

問うて曰く、〔二二〕汝は先に自ら摩訶衍經中の説は、佛自ら菩薩の爲の故に、自ら盡く知り、遍く知るを説きたまふと言へり。答へて曰く、摩訶衍經の中の説は何ぞ汝を益せん。汝は摩訶衍を信せず、以て證と爲すべからず。汝は自ら當に聲聞法を説いて證と爲すべし。復次に、十力の佛は盡く知り遍く知り給ふと雖も、而も聲聞、辟支佛も少分あり。十八不共法の中には始終すべて分なし、是の故に眞の不共法と名く。

問うて曰く、〔二三〕十八不共法は、二乘も亦應に分あるべし。但佛は身口念に常に失なく、二乘の身口念も、亦失無きと有り、是の如き等は皆應に分あるべし。答へて曰く、然らず。何となれば常に失なきが故に、名けて不共と爲す、失せざるを以て、不共と爲すにあらず。聲聞、辟支佛は常に失なきの中に於て分なし。復次に、諸の阿羅漢に力ありと説くも、是の處ある無し、不共法ありと説くも、汝は摩訶衍を信ぜざるが故に、眞の十八不共法を受けず、而も更に重ねて十力等を數ふ。是の事は不可なり。汝が信ずる所の八十種好の如きは、而も三藏の中に無し、何を以て更に説かざる。

問うて曰く、〔二四〕我等は十八不共法を分別して重ねて數へざるなり。何等か十八なる。一には諸法

【二二】第三八問、汝は大乘經の中に、佛は菩薩の爲の故に、盡く知り遍く知るを說くと言へるにあらずや。

【二三】第三九問、二乘も亦應に十八不共法の分あるべきにあらずや。

【二四】第四〇問、十八不共法は下の如く分別して可なりや如何。

の實相を知るが故に一切智と名け、二には佛の諸の功德相は解し難きが故に功德無量なり、三には深く心に衆生を愛念するが故に大悲と名く。四には無比智を得るが故に智慧の中に自在なり。五には善く心相を解するが故に定中に自在なり。六には衆生を度する方便を得るが故に變化自在なり。七には善く諸法の因緣を知るが故に記莂無量なり。八には諸法の實相を說くが故に記別虛しからず、九には分別籌量して、說くが故に失なしと言ふ。十には十力を成就するを得て、智慧減ずると無し。十一には一切有爲法の中に但法聚の無我を觀ずるが故に常に放捨を行ず。十二には善く時と不時とを知る、三乘に安立して常に衆生を觀ずるが故なり。十三には常に一心なるが故に念を失せず。十四には無量阿僧祇劫に善心を深くするが故に煩惱の習なし。十五には眞淨の智を得るが故に、能く法の如くして、其の失を出だすと有るとなし。十六には世世に敬重せられ尊ばるるが故に、能く頂を見ると無し。十七には大慈悲心を修するが故に安穩として足を下し、足の下柔軟にして、衆生の遇ふ者は即時に樂を得。十八には神通波羅蜜を得るが故に、衆生の心を轉じて歡喜して得度せしむるが故に、入城の時の如きは神通力を現ず。答へて曰く。是の如き十八不共法は三藏の中の說に非ず。亦諸佛の經にも說かざる所なり。有人この法を求索するを以ての故に諸の聲聞の論議師の輩、處處より撰集して佛の功德を讃ず、言に失なく、慧減すると無く、念に失せずと言ふが如きは、皆摩訶衍の十八不共法の中より取れり、已に論議を作つて頂を見ると無く、足下柔軟なること有つて、是の如きこと甚だ多

しと雖も、十八不共法の中に有るべからず。不共法は皆智慧を以て義と為す。佛身の力は、十萬の白香象の力の如し〔といふと〕、及び神通力等は皆説かず。是の故に當に十八不共法の中には、但智慧功徳等を説き、自然の果報の法を説かざることを知るべし。

復次に、是の十八不共法は、阿毗曇の分別五衆に攝せんに、身口に失なく、身口は智慧に隨つて行ずるは、是を色衆に攝す。異想なきは、是を想衆に攝す。不定心なきは、是を識衆に攝す。餘は行衆に攝し、皆四禪の中に在り。佛は四禪の中に道を得、涅槃を得給へばなり。有人の言く、四色不共法は色界と欲界の中に攝し、餘は九地の中に攝す。皆是れ善、皆是れ無漏法なり。四色法は二緣〔を以て〕生ず、乃ち因緣と増上緣なり。餘殘の四は緣生なり。四は緣なく、十四は緣あるなり。四の隨心行は心と相應せず、十三は心と相應す。亦隨心行の一は心と相應せず、亦不隨心行なり。是の如き等の種種は、阿毗曇の中に分別して説けり。初め是の如く分別して、般若波羅蜜〔多〕の諸法實相の中に入るるに、盡く皆一相なり。所謂る無相なり。佛心に入れば、皆一寂滅相なり。

巻の第二十七

初品の中の大慈大悲を釋す。

【經】大慈大悲にして、當に般若波羅蜜（多）を習行すべし。

【論】大慈大悲は。四無量心の中に已に分別せり、今當に更に略して說くべし。【一】大慈は一切衆生に樂を與へ、大悲は一切衆生の苦を拔く。大慈は喜樂の因緣を以て、衆生に與へ、大悲は苦を離るるの因緣を以て、衆生に與ふ。譬へば有人の諸子、牢獄に繫在して、當に大罪を受くべく、其の父慈惻し、若干の方便を以て、苦免るることを得せしむるが如きは、是れ大悲なり、苦を離るることを得已つて、五の欲する所を以て、諸子に給與するは是れ大慈なり、是の如き等の種種の差別あり。

問うて曰く、【二】大慈大悲は是の如し、何等か是れ小慈小悲にして、此の小に因つて名けて大と爲すや。答へて曰く、四無量心の中の慈悲を名けて小と爲す。此の中の十八不共法は次第に說く。大慈悲を名けて大と爲す。復次に、諸佛の心中の慈悲を名けて大と爲し、餘人の心中を名けて小と爲す。

問うて曰く、【三】若し爾らば何を以てか、菩薩は大慈大悲を行ずと言ふや。答へて曰く、菩薩の大慈

【一】大慈大悲の義解。
【二】第一問、慈悲の大小の區別如何。
【三】第二問、菩薩の大慈大悲とは、二乘に對する相對的の表言なりや。

は、佛に於ては小と爲し、二乘に於ては大と爲す、此には是れ假名を大と爲す。佛の大慈大悲は、眞實に最大なり。復次に、小慈は但心に念じて、衆生に樂を與へ、實には樂事なし。小悲は衆生の種種の身苦、心苦を觀じて、憐愍するのみに名け、脱せしむると能はず。大慈は衆生に樂を得せしめんと念じ、亦樂事を與ふ。大悲は衆生の苦を憐愍して、亦能く苦を脱せしむ。復次に、凡夫人、聲聞、辟支佛、菩薩の慈悲を名けて小と爲し、諸佛の慈悲を乃ち名けて大と爲す。

復次に、大慈は大人の心中より生じ、十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法は、大法の中より出でて能く三惡道の大苦を破り、能く三種の大樂なる、天の樂、人の樂、涅槃の樂を與ふ。復次に、是の大慈は遍ねく十方三世の衆生、乃至蜫蟲に滿ち、慈は骨髓に徹し、心は三千大千世界の衆生の三惡道に墮せるを捨離せず。若し人の一一に皆代つて、其苦を受け、苦を脱するとを得せしめ已つて、五の所欲の樂、禪定の樂、世間最上の樂を以て、自ら恣に之を與へて、皆滿足せしむるも、佛の慈悲に比すれば、千萬分の中の一分にも及ばず。何を以ての故に、世間の樂は、欺誑不實にして、生死を離れざるが故なり。

問うて曰く、[四]法は佛心中に在つて皆大なり。何を以ての故に、但慈悲のみを大と爲すと說くや。

答へて曰く、佛の所有したまふ功德法は、應に皆大なるべきが故に。

問うて曰く、[五]若し爾らば、何を以てか慈悲のみを說いて、大と爲すや。答へて曰く、慈悲は是れ

【四】第三問、佛心中の法は皆大なるべきにあらずや。
【五】第四問、慈悲を大と稱する理由如何。

佛道の根本なり。何となれば菩薩は衆生の老病死の苦、身苦、心苦、今世後世の苦等の諸苦、所惱を見て大慈悲を生じ、是の如きの苦を救うて、然る後に發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。亦大慈悲力を以ての故に、無量阿僧祇世の生死の中に於て心厭沒せず、大慈悲力を以ての故に、久しくして涅槃を得べくして而も證を取らず。是の故に一切諸佛の法の中にて慈悲を大と爲す。若し大慈大悲なければ便ち早く涅槃に入るなり。

復次に、佛道を得る時、無量甚深の禪定、解脫、諸の三昧を成就し、清淨の樂を生ずるも、棄捨して受けず、聚落城邑の中に入つて、種種の譬喩因緣を以て說法し、其の身を變現し、無量の音聲を以て一切を將迎し、諸の衆生の罵詈誹謗を忍び、乃至自ら妓樂を作す、皆是れ大慈大悲の力なり。

復次に、大慈大悲の大の名は、佛の作る所に非ず、衆生之に名けたるなり。譬へば師子の大力の如きは、自ら力大なりと言はず、皆是れ衆獸の之に名くるなり。衆生は佛の種種の妙法を聞き、佛は衆生を祐け利せんが爲の故に、無量阿僧祇劫に於て、行じ難きを能く行じ給ふを知る。衆生は是の事を聞見し、此法を名けて大慈大悲と爲す。譬へば一人に二の親友あり、罪事の因緣を以ての故に、之を囹圄に繫ぐに、一人は須ふる所を供給し、一人は代つて死するに、衆人は能く死に代る者を言つて、是を大慈悲と爲すが如し。佛も亦是の如く、世世に一切衆生の爲の故に、頭目髓腦を以て、布施し盡して、一切衆生の爲にするに、一切衆生は是の事を聞見して、即ち共に之を名けて大慈大悲と爲す。

尸毗王の如きは、鴿を救はんが爲の故に、盡く身肉を以てして、之に代るに猶ほ鴿と等しからず。復た手を以て秤に攀ち、身を以て之に代らんと欲す。是の時、地は爲に六種に振動し、海水波盪し、諸天は香華を以て王に供養し、衆生は稱へて言はく、「一小鳥の爲に感ずる所乃ち爾なり。眞に是れ大慈大悲なり」と。佛は衆生の名くる所に因るが故に大慈大悲と言ふ。是の如き等の無量は、本生經の中に悉く應に廣く說くべし。

問うて曰く、(六)禪定等の諸餘の功德は、人知らざるが故に、名けて大と爲さず。智慧說法等は能く人をして道を得せしむ、何を以てか稱して大と言はざるや。答へて曰く、佛の智慧の能する所は、遍く知る者あること無し。大慈大悲の故に、世世に身命を惜まず、禪定の樂を捨て、衆生を救護したまふは人皆之を知る。佛の智慧に於て比類して知るべく、了了に知ると能はず。慈悲心は眼に見、耳に聞き、處處に變化して、大師子吼したまふ、是の故に知るべし。復次に、(七)佛の智慧は細妙なり。諸の菩薩、舍利弗等すら、尙ほ知ると能はず、何に況んや餘人をや。慈悲の相は眼に見、耳に聞く可きが故に、人能く信受す、智慧は深妙にして測り知るべからず。復次に、是の大慈大悲は、一切衆生の愛樂する所なり。譬へば美「味」の藥の如きは、人の服せんと樂ふ所なり。智慧は苦藥を服するが如く、人多く樂はず、人多く樂ふが故に、慈悲を稱して大と爲す。

【六】第五問、禪定智慧等を大と稱せざる理由如何。
【七】佛の智慧は深妙にして測り知る可らず。

復次に、智慧は得道の人乃ち能く信受し、大慈大悲の相は、一切の雜類皆能く信を生ず。像を見、若くは說を聞くが如きは、皆能く信受し、饒益する所多し。故に名けて大慈大悲と爲す。復次に、大智慧を〔八〕捨相〔九〕遠離相と名け、大慈悲を憐愍利益相と爲す。是の憐愍利益の法は、一切衆生の愛樂する所なり。是の故に名けて大と爲す。是の大慈大悲は〔一〇〕持心經の中に說くが如し。大慈大悲に三十二種あり、衆生の中に於て行ず。是の大慈大悲の攝相の緣は、四無量心の說の如し。復次に、佛の大慈悲等の功德は一切に應せず、〔一一〕迦旃延の法の中に、分別して其の相を求むるが如し。上の諸の論議師は、迦旃延の法を用ゐて、分別顯示すと雖も、盡く信受すべからず。何となれば〔一二〕迦旃延は、「大慈大悲、一切の智慧は是れ有漏法、繫法、世間法なり」と說けども、是の事は爾らざるを以てなり。何となれば大慈大悲を名けて、一切佛法の根本と爲すが故なり。云何が是を有漏法、繫法、世間法と言ふべき。

問うて曰く、〔一三〕大慈悲は是れ佛法の根本なりと雖も、故是れ有漏なり。淤泥の中より蓮華を生ずるに、泥も亦妙なるべしと、言ふことを得ざるが如し。大慈悲も亦是の如く、是は佛法の根本なりと雖も、これ無漏なるべからず。答へて曰く、菩薩

【八】捨相とは、心平等にして執著なきをいふ。

【九】遠離相とは、一切の事相空寂を觀ずるをいふ。

【一〇】持心經「持心梵天所問經」の略名。四卷。西晉の竺法護譯。思益梵天問經の異譯なり。

【一一】迦旃延の法とは、迦旃延等の諸大阿毘曇によりて、組述されたる阿毘達磨大毘婆沙論などをいふ。

【一二】佛の大慈悲を有爲法となすを云ふ。

【一三】第六問。大慈悲は有漏法ならざる可らずと思ふ、汝の所見如何。

の未だ佛を得ざる時の大慈悲を、若し有漏と言はば其の失は尙ほ可なり。今佛は無礙解脫智を得たまふが故に、一切の諸法は皆清淨にして、一切の煩惱及び習は盡したまふ。聲聞、辟支佛は無礙解脫智を得ず、煩惱の習盡きず、處處の中の疑を斷ぜざるが故に、心應に有漏なるべし。諸佛には是の事なし。何を以てか佛の大慈悲は、是れ有漏なるべしと說かんや。

問うて曰く、〔一四〕我れ敢へて敬せざるにあらざれど、佛は慈悲心を以て衆生の爲の故に生ず、應に是れ有漏なるべし。答へて曰く、〔一五〕諸佛の力勢は不可思議なり。諸の聲聞、辟支佛は衆生想を離るると能はずして慈悲を生ず、諸佛は能く衆生想を離れて而も慈悲を生じたまふ。何となれば諸の阿羅漢、辟支佛の如きは、十方の衆生の相は得べからざるに、而も衆生相を取つて慈悲を生ず、今諸佛は、十方に衆生を求むれども得べからず、亦衆生相を取らずして、而も能く慈悲を生じたまふを以てなり。無盡意經の中に說くが如し。「三種の慈悲あり、衆生緣、法緣、無緣なり」と。復次に、一切衆生の中に、唯佛のみ盡く不誑法を行じたまふ。若し佛、衆生の中に於て、相を取つて、而も慈悲心を行ぜば、不誑法を行ずと名けず。何となれば衆生は畢竟不可得なるを以てなり。聲聞、辟支佛は、名けて盡く不誑法を行ずと爲さず。故に聲聞、辟支佛は、衆生に於ても法に於ても、若くは相を取るも、若くは相を取らざるも、應に難ずべからず、そは悉く不誑法を行ぜざればなり。一切

〔一四〕第七問、佛は慈悲心を以て、衆生の爲に說くが故に、有漏ならざる可らず。
〔一五〕佛は衆生相を離るるが故に無漏なれども、二乘は爾らず。

智〔を以て〕能く一切の諸漏を斷じ、能く一切有漏法の中より出でて、能く無漏の因緣を作す、是の法は云何が自ら是れ有漏ならんや。

問うて曰く、〔二六〕無漏智は各各所緣あつて、能く悉く一切法を緣ずる者あると無し。唯世俗智のみ有つて能く一切法を緣ず。是の故に一切智は、是れ有漏相なりと說く。答へて曰く、汝が法中には是の說あらんも、佛法の中の所說に非ず。人の自ら斗を持つて市に入るに、官斗と相應せざれば、人の用ふる者なきが如し。汝も亦是の如く。自ら汝が法を用ゐて佛法と相應せず、人の用ふる者なし。無漏の智慧何ぞ一切法を緣ずると能はざらんや。有漏智は、是れ假名虛誑、勢力少きが故に、眞實に一切法を緣ずべからず、汝が法中には、自ら能く一切法を緣ずと說く。復次に、是の聲聞法の中に十智あり。摩訶衍法の中に十一智あり、名けて〔二七〕如實智と爲す。是十智は、是如實智の中に入れば、都て一智と爲る、所謂る無漏智なり。十方の水、大海水の中に入れば、都て一味と爲るが如し。是の大慈大悲は、佛の三昧王三昧、師子遊戲三昧に攝する所なり。是の如く略して大慈大悲の義を說けり。

〔二六〕第八問、無漏智には所緣なし、故に一切法を緣ずる佛智は有漏ならざるにあらずや。

〔二七〕如實智の特性。

【經】菩薩摩訶薩、道慧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を習行すべし。菩薩摩訶薩、道慧を以て、道種慧を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を習行すべし。

論 道を一道に名く。一向に涅槃に趣き、善法の中に於て、一心に不放逸ならば、道は身念に隨ふ。道に復た二道あり。惡道と善道、世間道と出世間道、定道と慧道、有漏道と無漏道、見道と修道、學道と無學道、信行道と法行道、向道と果道、無礙道と解脫道、信解脫道と見得道、慧解脫道と俱解脫道なり。是の如き無量の二道門あり。復た三道あり。地獄道、畜生道、餓鬼道なり。三種の地獄あり、熱地獄、寒地獄、黑闇地獄なり。三種の畜生道あり。地行、水行、空行なり。三種の鬼道あり。餓鬼、食不淨鬼、神鬼なり。三種の善道あり。人道、天道、涅槃道なり。人に三種あり。罪を作る者、福を作す者、涅槃を求むる者なり。復た三種の人あり。欲を受け惡を行ずる者、欲を受け惡を行ぜざる者、欲を受けず惡を行ぜざる者なり。天に三種あり。欲天、色天、無色天なり。涅槃道に三種あり。聲聞道、辟支佛道、佛道なり。聲聞道に三種あり。學道、無學道、非學非無學道なり。辟支佛道も亦た是の如し。佛道に三種あり。波羅蜜道、方便道、淨世界道なり。佛に亦復た三道あり、初發意道、行諸善道、成就衆生道なり。復た三道あり。戒道、定道、慧道なり。是の如き等の無量の三道門あり。復た四種の道あり。凡夫道、聲聞道、辟支佛道、佛道なり。復た四種の道あり。聲聞道、辟支佛道、菩薩道、佛道なり。聲聞道に四種あり。苦道、集道、滅道、道道なり。復た四の沙門果道あり。復た四種の道あり、觀身實相道、（一八）觀受心法實相道なり。復た四種の道あり。未生の惡不善を斷せしめ、生ぜざらしむるの道、已生の惡を

【一八】觀受道、觀心道、觀法道、觀實相道の略。

斷せしめて、疾かに滅せしむるの道、未生の善法をして生ぜしむるの道、已生の善法をして增長せしむるの道なり。復た四種の道あり、【一九】欲增上道、精進增上道、心增上道、慧增上道なり。復た四の聖種道あり。衣、食、臥具、醫藥を擇ばず、樂んで苦を斷ぜんことを修する定なり。復た四行道あり。苦難道、苦易道、樂難道、樂易道なり。復た四修道あり。一には今世の爲に樂んで修する道、二には生死の智を修する道、三には漏を盡さんが爲の故に修する道、四には分別の慧を修する道なり。復た四天道あり、所謂四禪なり。復た四種の道あり、天道、梵道、聖道、佛道なり。是の如き等の無量の四道の門あり。復た五種の道あり、地獄道、畜生、餓鬼、人、天道なり。復た五無學衆道あり。無學戒衆道、乃至無學解脫知見衆道なり。復た五種の淨居天道あり。復た五欲天道あり。復た五如法語道あり。復た五非法語道あり。復た五道あり。凡夫道、聲聞道、辟支佛道、菩薩道、佛道なり。復た五道あり、色法を分別するの道、心法を分別するの道、心數を分別するの道、心不相應行を分別するの道、無爲法を分別するの道なり。復た五種の道あり。苦諦所斷道、集諦所斷道、滅諦所斷道、道諦所斷道、思惟所斷道なり。是の如き等の無量の五法道門あり。復た六種の道あり。地獄道、畜生〔道〕、餓鬼〔道〕、人〔道〕、天〔道〕、阿修羅道なり。復た捨六塵道あり。復た六和合道、六神通道、六種阿羅漢道、六地修道、六定道、六波羅蜜道あり。一一の波羅蜜に各各に六道あり、是の如き等の無量の六道門あり。復

【一九】欲とは惡しき意味の欲にあらず、向上を意味する場合の欲を云ふ。

た七道あり、七覺意道、七地無漏道、七想定道、七淨道、七善人道、七財富道、七法福道、七助定道なり。是の如き等の無量の七道門あり。復た八道あり、八正道、八解脱道、八背捨道なり。是の如き等の無量の八道門あり。復た九道あり、九次第道、九地無漏道、九見斷道、九阿羅漢道、九菩薩道なり。所謂六波羅蜜の方便もて、衆生を成就せる淨佛世界なり。是の如き等の無量の九道門あり。復た十道あり。所謂十無學道、十想道、十智道、十一切處道、十不善道、十善道なり。乃至一百六十二道あり。是の如き等の無量の道門あり。(二〇)是の諸の道を知り、盡く知り遍ねく知る、是を道種慧と爲す。

問うて曰く、(二一)般若波羅蜜「多」は是れ菩薩の第一道なり、一相なり、所謂無相なり。何を以てか是の種種の道を説くや。答へて曰く、是の「諸」道は皆一道の中に入る。所謂諸法實相なり。初學に種種の別あるも、後皆同一にして差別あると無し。譬へば劫盡きて燒くる時は、一切の所有皆虚空に同じきが如し。復次に、衆生を引導するが爲の故に、菩薩は分別して是の種種の道を説く。所謂世間道、出世間道等なり。

問うて曰く、(二二)云何が菩薩は一相無相の中に住して、是は世間「道」なり、是は出世間道なりと分別するや。答へて曰く、世間の名は、但顛倒の憶想と虚誑の二法より生じ、幻の如く夢の如く轉火輪の

【二〇】道種智の義解。
【二一】第九問、菩薩は般若波羅蜜多を以て一道となす。然るに今種種の道を説くは何故なるか。
【二二】第一〇問、菩薩は如何にして世間道と出世間道とを分別するか。

如し。凡夫人は強ひて以て世間と爲す。是の世間は皆虛妄の中より來る。今も亦た虛妄、本も亦虛妄なり。其の實は無生無作にして、但內外の、六情と六塵と和合する因緣より生ず。凡夫の著する所に隨ふが故に、爲に世間と說く。是の世間の種種の邪見は、羅網すると、亂絲の相の如く、著すれば常に生死の中に往來す。是の如く世間を知るなり。何等か是れ出世間道なる。如實に世間を知るは卽ち是れ出世間道なり。〔三〕何となれば智者は、世間出世間を求むるに、二事は不可得なればなり。若し不可得なれば、常に假に名けて、世間出世間と爲すことを知るべし。但世間を破せんが爲の故に、出世間を說くのみ。世間の相は卽ち是れ出世間にして、更に所として復た有ると無し。何となれば世間の相は得べからず、是の世間出世間の相は、常に空にして、世間法の定相は不可得なるを以てなり。是の如く行者は世間をも得ず、亦た出世間にも著せず。若し世間をも得ず、亦出世間にも著せざれば、愛慢を破するが故に、世間と共に諍はず。何となれば行者は、久しく世間の空にして所有なく、虛誑なるを知るが故に、憶想分別を爲さざればなり。世間を五衆と名く。五衆の相は、假令十方の諸佛之を求むれども、亦不可得にして、來處なく、住處なく、亦去處なし。若し五衆の來・住・去の相を見ざれば、卽ち是れ出世間なり。行者は爾の時、是の世間、出世間を觀するに實に見る可らず、世間の出世間と合するを見ず、亦出世間の世間と合するを見ず。世間を離れて亦出世間を見ず、出世間を離れて亦世間を見ず。是の如くなれば、則ち二識

〔三〕世間を離れて別に出世間なし。

を生ぜす。所謂此は世間、「彼は」出世間なり」と。若し世間を捨て、出世間を受けざる、是を出世間と名く。若し菩薩能く是の如く知れば、則ち能く衆生の世間、出世間道を分別すと爲す。(二四)有漏、無漏、一切の諸道も、亦是の如く、一相に入る、是を道種慧と名く。

經 道種慧を以て、一切智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。一切智を以て。一切種智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。

論 問うて曰く、(二五)一切智と一切種智と何の差別ありや。答へて曰く、有人言く、「差別なし、或時は一切智と言ひ、或時は一切種智と言ふ」と。有人言く、「總相は是れ一切智にして、別相は是れ一切種智なり」と。因は是れ一切智にして、果は是れ一切種智なり。略說は一切智にして、廣說は一切種智なり。一切智は總じて一切法中の無明の闇を破り、一切種智は種種の法門を觀じて諸の無明を破す、一切智は譬へば四諦を說くが如く、一切種智は譬へば四諦の義を說くが如し。一切智は苦諦を說くが如く、一切種智は八苦の相を說くが如し。一切智は生智を說くが如く、一切種智は種種の衆生の處處に生ずるを說くが如し。復次に、一切法を眼色乃至意法と名く。是の諸の阿羅漢辟支佛は、亦能く總相は、無常、苦、空、無我なり等と知る。是の十二入を知るが故に、名けて一切智と爲す。聲聞辟支佛すら、尙は盡く

【二四】道種慧の義解。
【二五】第一一問、一切智と一切種智の差別如何。

別相を知ること能はず、一衆生の生處、好醜、事業、多少、未來、現在世も亦是の如し、何に況んや一切衆生をや。一閻浮提中の金の名字の如きすら、尚ほ知ること能はず、何に況んや三千大千世界の一物中の種種の名字の、若くは天語、若くは龍語、是の如き等の種種の語言に於てをや。金と名くるすら尚ほ知ること能はず、何に況んや金の因緣、生處、好惡、貴賤を知らんや。因つて福を得、因つて罪を得、因つて道を得、是の如き現事すら、尚ほ知ること能はず、何に況んや心心數法、所謂禪定智慧等の諸法をや。佛は盡く諸法の總相、別相を知りたまふが故に、名けて一切種智と爲す。

復次に、後品の中に、佛は自ら「一切智は是れ聲聞、辟支佛の事、道智は是れ諸の菩薩の事、一切種智は是れ佛事なり。聲聞辟支佛は、但總の一切智のみあり、一切種智あること無し」と説きたまふ。復次に、聲聞、辟支佛は、別相に於て分ありと雖も、而も盡く知ること能はざるが故に、總想の名を受く。佛の一切智、一切種智は、皆是れ眞實なり。聲聞、辟支佛は但名字のみ有り。一切智は譬へば畫の燈の但燈の名のみ有つて、燈の用ある無きが如し。聲聞、辟支佛の如きは、若し人あり、問難するに、或時は悉く答ふる能はず、疑を斷ずる能はず。舍利弗が、佛の三問に、答ふる能はざるが如し。若し一切智あらば、云何が答ふること能はざらん。是の故に但一切智の名のみ有り、凡夫に勝るも實あること無きなり。是の故に佛は是れ實の一切智、一切種智にして、是の如き無量の名字あり。或時は佛を名けて、一切智人と爲し、或時は名けて、一切種智の人と爲す。是の如き等は、略して一切智

と一切種智との種種の差別を說けり。

問うて曰く、〔二六〕經中に說くが如くんば、六波羅蜜・三十七品・十力・四無所畏等の諸法を行じて、一切智を得といふ。何を以ての故に此の中には、但道種智のみを用ゐて、一切智を得と說くや。答へて曰く、汝が說く所の六波羅蜜等は卽ち是れ道なり。是の道を知り是の道を行じて一切智を得。何の疑ふ所かあらん。復次に、初發心より乃至道場に坐するまで、其中間に於ける一切の善法は、盡く名けて道と爲す。此道の中に分別思惟して行ずる、是を道智と名く。此の經の後に說くが如き道智は是れ菩薩の事なり。

問うて曰く、〔二七〕佛道の事已に備るが故に、道智と名けず、阿羅漢、辟支佛は、諸の功德未だ備はらず、何を以てか道智と名けざるや。答へて曰く、阿羅漢、辟支佛道は、自ら所行に於ても亦辦ず。是の故に道智と名けず。道は是れ行相なればなり。復次に、此の經の中に聲聞、辟支佛を說くも、聲聞の中に三は、道を攝するが故に說かず。佛道は大なるが故に、名けて道智と爲し、聲聞、辟支佛道は、小なるが故に、道智と名けず。復次に菩薩摩訶薩は自ら道を行じ、亦衆生の各各に所行の道を示す。是を以ての故に說いて、菩薩は道智を行じて、一切智を得と名く。

問うて曰く、〔二八〕何等か是れ一切智の知る所の一切法なるや。答へて曰く、佛、諸の比丘に告げた

【二六】第一二問、道種智のみを以て、一切智を得といふ理由如何。
【二七】第一三問、阿羅漢、辟支佛を、道智と名けざる理由如何。
【二八】第一四問、一切智の對象たる一切法とは何をいふか。

まふが如し。「汝が爲に一切法を說かん。何等か是れ一切法なる。所謂眼と色と、耳と聲と、鼻と香と、舌と味と、身と觸と、意と法となり、是の十二入を一切法と名く」と。

復た一切法あり、佛、利衆經の中の偈に說きたまふが如し。

〔二九〕「若し眞觀を求めんと欲せば、但名と色と有り。若し實知を審かにせんと欲せば、亦當に名色を知るべし。癡心、多想を離れて諸法を分別するに、更に異事あつて、名色を出づる者なし。」

復次に、一切法とは、所謂色と無色法、可見と不可見、〔三〇〕有對と無對、有漏と無漏、有爲と無爲、心と非心、心相應と非心相應、共心生と不共心生、隨心行と不隨心行、從心因と不從心因、是の如き等の無量の二法門に一切法を攝す。阿毗曇攝法品の中に說くが如し。復次に、一切法は、所謂善法と不善法と無記法、見諦所斷と思惟所斷と不斷法、有報法と無報法と非有報非無報法、是の如き等の無量の三法門に一切法を攝す。復次に、一切法は、所謂過去法と未來法と現在法と非過去未來現在法、欲界繫法と色界繫法と無色界繫法と不繫法と、從善因法と從不善因法と從無記因法と從非善非不善非無記因法、有緣緣法と無緣緣法と有緣緣亦無緣緣法と非有緣緣亦無緣緣法、是の如き等の無量の四法門に、一切法を攝す。復次に、一切法は、所謂色法と、心法と、心數法と、心不相應の諸行法と、無爲法、四諦及び無記無爲と、是の如き等の無量の五法門に、一切法を

【二九】名色を離れて、一切法なしの偈。
【三〇】對とは、障礙の義、又は拘礙の義なり。障礙あり、拘礙あるを有對といひ、これなきを無對といふ。

攝す。復次に、一切法は所謂五衆と及び無爲、苦諦所斷の法と、集諦「所斷の法」、滅諦「所斷の法」と、道諦、所斷の法」と、思惟所斷の法と、不斷法と。是の如き等の無量の六法門に一切法を攝す。七八九十等の諸の法門は、是れ阿毘曇に義を分別せり。復次に、一切法は所謂有法、無法、空法、實法、所縁法、能縁法、聚法、散法等なり。

復次に、一切法は、所謂有法、無法、亦有亦無法、空法、實法、非空非實法、所縁法、能縁法、非所縁非能縁法なり。

復次に、一切法は所謂有法、無法、亦有亦無法、非有非無法。空法、不空法、空不空法、非空非不空法。生法、滅法、生滅法、非生非滅法。不生不滅法、非不生非不滅法、不生不滅亦非不生非不滅法、非不生非不滅亦非不不生亦非不不滅法なり。

復次に、一切法は所謂有法、無法、有無法、非有非無法の是の四句を捨す。法空、不空、生滅、不生、不滅の五句も皆亦是の如し。是の如き等の、種種無量阿僧祇の法門に、攝する所の諸法を、是の無礙の智慧を以て、盡く遍ねく上の諸法を知るを名けて、一切智、一切種智と爲す。

【三】第一五問、佛のみ一切智を得たまへる理由如何。

問うて曰く、㊂一切衆生は皆智慧を求む、云何が獨り佛一人のみ一切智を得給ふや。答へて曰く、佛は一切衆生の中に於て、第一なるが故に、獨り一切智を得給ふ。佛の說きたまふ所の如し。「無足二足、四足、多足、有色、無色、有想、無想、非有想、非無想等の一切の衆生の中、佛は最も第一な

り。譬へば須彌山の衆山の中に於いて、自然に最も第一なるが如く、四大の中、火は最も有力にして能く照し、能く燒くが如し。佛も亦是の如く、一切衆生の中に於て、最も第一なるが故に、一切智を得るなり」と。

問うて曰く、【三】佛は何を以てか、一切衆生[の中に]於て、獨り最も第一なるや。答へて曰く、先に答ふるが如く、一切智を得たまふが故なり。今當に更に說くべし。佛は自ら利益し、亦他を利益したまふが故に、衆生の中に於て最も第一なり。一切の照中[に於て]、日を第一と爲すが如し、一切の人中にては、轉輪聖王最も第一なり、一切の蓮華の中にては、靑蓮を第一と爲す。一切の陸に生ずる華[の中にては]、須曼色第一なり。一切の木香の中にては牛頭栴檀を第一と爲し、一切の珠の中にては、如意珠を第一と爲し、一切諸の戒の中にては、聖戒を第一と爲し、一切の解脫の中にては、不壞解脫を第一と爲し、一切の淸淨の中にては、解脫を第一と爲し、一切諸の觀[法]の中にては、空觀を第一と爲し、一切諸法の中にては、涅槃を第一と爲す。是の如き等の無量は各各第一なり。佛も亦是の如く、一切衆生に於て最も第一と爲す。第一なるが故に、獨り一切智を得たまふ。

【三】第一六問、一切衆生の中に於て、最上第一とする理由如何。

復次に、佛は初發意より大誓[願]を以て、一切衰沒の衆生を莊嚴し、拯濟せんと欲するが故に、盡く遍く諸の善道を行じ、善として集めざる無く、苦として行ぜざる無く、皆一切諸佛の功德を集めたま

ふ。是の如き等の種種無量の因緣の故に、佛は一切衆生の中に於て獨り第一なり。

問うて曰く、(三三)三世十方の諸佛も亦是の功德あり。「いま」何を以ての故に、佛のみ獨り第一なりと言ふや。答へて曰く、諸佛を除いて、餘の衆生「に對するが」爲の故に、佛のみ獨り第一なりと言ふ。諸佛は等しく一切の功德あるなり。復次に、(三四)薩婆若多とは、一切は先に說くが如く、名色等の諸法なり。佛は是の一切法の一相、異相、漏相、非漏相、作相、非作相等の一切法の各各の相、各各の力、各各の因緣、各各の果報、各各の性、各各の得、各各の失を知り給ふ。一切智慧力「を以ての」故に一切世、一切種を盡く遍ねく解知し給ふ。是の故に「道種智を以て、一切智を得ることを具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を習行すべし。一切智を以て一切種智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を習行すべし」と說くなり。

問うて曰く、(三五)佛の佛道を得たまふ時の如きは、道智を以て、一切智一切種智を具足することを得たまふ。今何を以てか一切智を以て、一切種智を具足することを得たまふと言ふや。答へて曰く、佛の道を得たまふ時は、道智を以て具足して一切智、一切種智を得たまふと雖も、未だ一切種智を用ゐたまはず。大國王の位を得る時、境土、寶藏、皆已に得るも、但未だ開き用ゐざるが如し。

【三三】第一七問、三世十方の諸佛も亦この功德あり、然るな今何故に佛のみ獨り第一なりと言ふか。

【三四】Sarvajñata(Sarva＝一切＋jñata＝智)

【三五】第一八問、一切智を以て一切種智を得といふ理由如何。

【經】一切種智を以て、煩惱の習を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を習行すべし。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】問うて曰く。〔三六〕一心の中に一切智、一切種智を得て、一切煩惱の習を斷ず。今云何が一切智を以て、具足して一切種智を得、一切種智を以て、煩惱の習を斷ずと言ふや。答へて曰く、〔三七〕實には一切を一時に得、此の中には人をして、般若波羅蜜〔多〕を信せしめんが爲の故に、次第に差別して品品に說き、衆生をして淸淨心を得せしめんと欲す。是の故に、是の如く說けり。

復次に、一心中に得と雖も、亦初中後の次第あり。一心に三相あつて、生は住に因緣たり、住は滅に因緣たるが如く、又心心數法、不相應諸行、及び身業、口業の如し。道智を以て一切智を具足し、一切智を以て一切種智を具足し、一切種智を以て煩惱の習を斷ずるも亦是の如し。先に一切種智は卽ち是れ一切智なり、道智は金剛三昧に名くと說けり。佛には初發心より卽ち是の一切智、一切種智あり、是の時煩惱の習を斷じ給ふ。一切智、一切種智の相は先に已に說けり。〔三八〕一切煩惱の習を斷ずとは、煩惱の名は、略說すれば則ち三毒なり。廣說すれば則ち三界の九十八使なり。是を煩惱と名く。煩惱の習とは煩惱の

〔三六〕第一九問、一切智を以て一切種智を得、一切種智を以て煩惱の習を斷すといふ理由如何。

〔三七〕此の文も亦天台宗の起原と大關係あり。

〔三八〕習氣の義解、及び其の譬喩例證。

殘氣に名く。若くは身業口業の智慧に隨はずして、煩惱より起るに似たり。他心を知らずとは、其の起る所を見て、不淨心を起す、是れ實の煩惱に非ず。久習の煩惱なるが故に、是の如きの業を起す。譬へば、久しく脚に鎖せる人は、卒に解脱を得て行く時、鎖あること無しと雖も、猶ほ習あること有るが如く、乳母の衣は、久しきが故に垢著き、淳灰を以て淨く洗げば、垢あること無しと雖も、垢氣尙ほ衣に在るが如し。聖人の心垢も亦是の如く、諸の煩惱の如きは、智慧の水を以て洗ぐと雖も、煩惱の氣は尙ほ在り、是の如きの習氣は、諸餘の賢聖は能く煩惱を斷ずと雖も、習を斷ずると能はず、難陀の如きは、婬欲の習あるが故に、阿羅漢道を得と雖も、男女の大衆の中に於て坐するに、眼先づ女衆を視て與に言語し說法す。舍利弗の如きは瞋の習の故に、佛の「舍利弗は不淨食を食せり」と言ふを聞いて、卽便ち食を吐いて、終に復た請を受けず。又舍利弗は自ら偈を說いて言く、

『罪に覆はれ、妄念ある人は、無智にして懈怠なり。終に此の「人」をして、妄りに來つて、我に近づいて住せしむることを欲せず。』

〔三九〕摩訶迦葉の如きは瞋の習あるが故に、佛の滅度の後に集法の時、勅して阿難をして八の〔四〇〕突吉羅罪を懺悔せしめ、而して復た、自ら阿難の手を牽いて、出だして「言はく」、「汝は漏未だ盡きざる不淨の人なり、集法を共にせず」と。〔四一〕畢陵伽婆蹉の如きは常に恆神を罵つて小婢と爲す。〔四二〕摩頭婆

【三九】摩訶迦葉の瞋の習。
【四〇】突吉羅（Duṣkṛta）は惡作と譯す、戒律を犯せる罪名。
【四一】畢陵伽婆蹉の憍慢の習。
【四二】摩頭婆私咤の掉戲の習。

私陀の如きは、掉戯の習あるが故に、或時は衣架より踔つて梁に上り、梁より棚に至り、棚より閣に至る。〔四三〕憍梵鉢提の如きは、牛の業習あるが故に常に、食を吐いて嚼む。〔四四〕是の如き等の諸の聖人は、漏を盡くすと雖も、而も煩惱の習あり、火の薪を焚き已つて灰炭猶は在るも、火力薄きが故に盡きしむると能はざるが如し。若し劫盡くる時は火は、三千大千世界を燒いて復た遺餘なし、火力大なるが故なり。佛の一切智の火も亦是の如く、諸の煩惱を燒いて復殘習なし。〔四五〕一婆羅門の如きは、五百種の惡口を以て、衆中にて佛を罵るに、佛は異色なく、亦異心なし。此の婆羅門は心伏し、還つて五百種の語を以て佛を讚ずるに、佛は喜色なく、亦悦心なく、此の毀譽に於て、心色變する無し。又復た〔四六〕栴遮婆羅門女が、盂を帶して佛を謗るに、佛は慚色なく、事情既に露れたれども佛は悦色なし。法輪を轉ずる時、讚美の聲十方に滿つれども、心亦高ぶり給はず。〔四七〕孫陀利死して惡聲流布すれども心亦下らず。〔四八〕阿羅羅國土は風寒く又蒺藜多けれども、佛は中に於て坐臥して以て苦と爲し給はず、又天上の歡喜園の中に在つて、夏安居をなす時、〔四九〕劍婆石に坐し、柔軟清潔なると、天の褥綖の如きも、亦以て樂受と爲し給はず、大天王請いて天食を奉れども、以て美と爲し給はず、毘蘭若國に於て馬麥を食すれども以て惡と

〔四三〕憍梵鉢提(Gavāṃpati) 牛[illegible]。
〔四四〕諸聖の漏盡は世間の火の如く、佛の漏盡は劫盡の火の如し。
〔四五〕佛は毀譽に於て、心色變ずることなし。
〔四六〕栴遮(Ciñcā) 婆羅門女、無實の罪を構へて佛を謗る。
〔四七〕孫陀利(Sundarī 巴)
〔四八〕阿羅毘(Āḷavī 巴)
〔四九〕劍婆石は Kambala (羊毛の織物) のことにはあらざるなきか。

爲し給はず、諸大國王、上饌を供へ奉れども、以て得と爲し給はず、薩羅聚落に入つて、空鉢にして出づるも以て失と爲し給はず、提婆達多、耆闍崛山に於て、石を推して佛を壓すれども、佛亦悋み給はざりき。是の時、羅睺羅敬心を以て佛を讚すれども、佛は亦愛し給はず、阿闍世〔王〕諸の醉象を縱つて、佛を害せしめんと欲するに、佛は亦畏れずして狂象を降伏し給へり。王舍城の人、益恭敬を加へ、香華瓔珞を持つて、出でて佛を供養すれども、佛は亦喜び給はず、九十六種の外道、一時に和合し議して言く、「我等も亦皆是れ一切智人なり」と。舍婆提より來つて、佛と共に論議せんと欲す。爾の時、佛は神足を以て臍より光を放ち給ふに、光の中に皆化佛あり、國王波斯匿も亦之に命じて其座上に來らしむるに、尙動くとを得ると能はざりき、何に況んや能く佛と論議するを得んや。佛は一切の外道の賊の來るを見れども、心亦退き給ふこと無く、是の外道を破し給へば、諸天世人、倍恭敬供養を益せども、心亦進みたまはざりき。是の如き等の種種の因緣を以て、來つて佛を毀らんと欲するに、佛を動かしたてまつる可らず。譬へば眞の閻浮檀金は、火に燒けども異ならず、槌〔を以て〕打ち、磨き斫れども敗れず、異ならざるが如し。佛も亦是の如く、諸の毀辱誹謗論議を經たまへども、動ぜず、異なりたまはず、是の故に佛は、諸の煩惱の習都て盡きて、餘ること無きことを知る。

【五二】第二〇問、阿羅漢に習の盡きざる理由如何。

問うて曰く、「諸の阿羅漢、辟支佛も、同じく無漏智を用ゐて、諸の煩惱の習を斷ず、何を以て、

か盡と不盡と有るや。答へて曰く、先に已に「聲聞等の」智慧は、力薄きと、世間の火の如く、諸佛の力の大なるとは、劫盡の火の如きとを說けり。今當に更に答ふべし。〔五一〕聲聞、辟支佛は、諸の功德、智慧を集むると久しからず、或は一世・二世・三世なり。佛の智慧功德は、無量阿僧祇劫に於て、廣く習ひ善法を久しく熏じ給ふが故に、煩惱の習に於て復た餘氣なし。復次に、佛は一切の諸の功德に於て、皆已に攝し盡し給ふが故に、乃ち諸の煩惱の習氣に至るまで、永く盡きて餘ること無し。何となれば諸の善法功德は、諸の煩惱を消するが故なり。諸の阿羅漢は此の功德に於て、盡く得ざるが故に、但世間の愛を斷じて直に涅槃に入る。復次に、佛の結使を斷じたまふ智慧力は甚だ利なり、十力を用ゐて大力と爲し、無礙智を以て直に過ぎたまふが故に、諸の結使を斷じ盡くして、復た遺餘なし。譬へば人の重罪あり、國王大に瞋り、其の七世の根本を誅して、遺餘なからしむるが如し。佛も亦是の如く、煩惱の重賊に於て、根本を誅拔して遺餘なからしめ給ふ。是の故に一切種智を以て、一切煩惱の習を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を習行すべしと說くなり。

問うて曰く、〔五二〕但習を斷ずるや、亦は煩惱を除くや。答へて曰く、有人の言く、「煩惱及び習倶に斷じ盡くす」と。先に習を盡くして餘なしと說くが如し。阿羅漢辟支佛は、但煩惱を斷じて、習を斷ずるを能はず、菩薩は一切の煩惱、及び習を斷じ盡くして餘なからしむ。有人の言く、「佛は久しく已

〔五一〕二乘の智斷と佛のそれとには深淺あり。

〔五二〕第二十一問、但だ習氣を斷ずや、亦た煩惱をも除くや如何。

に欲を遠かりへり。佛の說きたまへるが如し、我れ定光佛を見てより已來、已に欲を離れたり。方便力を以ての故に、生死・妻子・眷屬あることを現ず」と。有人の言く、「無生法忍を得てより來、諸法實相を得るが故に、一切の煩惱及び習を盡くす」と。有人の言く、「佛は初發意より來、煩惱あり、道場に坐するに至り、後夜の時に於て、一切の煩惱及び習を斷じたまへり」と。

問うて曰く、【五二】是の如き種種の說は、何者を實と爲すや。答へて曰く、皆是れ佛口づから說きたまへる所なるが故に、不實あると無し。【五三】聲聞法の中に、佛は方便力を以ての故に、現に人法を受け、生・老・病・寒熱・飢渴等あり。人は生れて而も煩惱なき者なし。是の故に、佛も亦應に人の法に隨つて煩惱あるべし。樹王の下に於て外に先づ魔軍を破り、內に結使の賊を滅し、外內の賊を破するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまふに、人皆信受して〔言はく〕、「是の人は能く是の事を爲す。我等も亦當に是の事を學習すべし」と、若し久しきより來、煩惱なく、然燈佛に從つて、無生法忍を得るも、未だ煩惱を斷じ盡くさずと言ふは、是れ亦方便の說にして、諸の菩薩をして歡喜せしむるが故なり。若し菩薩久しく已に一切の煩惱を斷せば、成佛の時、復た何の爲す所かあらん。

問うて曰く、【五四】佛には種種の事あり、結使を斷ずるは是れ一事なり。餘に佛の國土を淨め、衆生を

【五二】第二二問、上に擧げたる種種の說は何れが眞實なりや。

【五三】小乘の中に、佛は方便を以て現に人法を受く。

【五四】第二三問、斷結使は佛としての一事のみ、餘に何は種種の事業あるにあらずや。

成就する等の事ありて未だ具せず、衆事を具足するを以ての故に名けて佛と爲す。答へて曰く、若し爾らば佛の言はく、「結使を斷ずるは末後の身なり」と、人若し都て結使なくんば、云何が生ずることを得んや。

問うて曰く、〔五六〕無生法忍を得てより已來、常に法性生身を得て變化するや否や。答へて曰く、〔五七〕化法は要らず化主あつて、然して後よく化す。若し無生法忍を得て、一切の結使を斷ぜば、死する時、是の肉身を捨して、實身あると無けん、誰か變化を爲さんや。是を以ての故に、無生を得てより已來、結使を盡くすべからざることを知る。復次に、〔五八〕聲聞の人は言ふ、「菩薩は結使を斷ぜず、乃ち道場に坐するに至つて、然る後に斷ず」と。是は大なる錯と爲す。何となれば汝が法の中に、「菩薩は已に三阿僧祇劫を滿し、後更に百劫の中に有つて常に宿命智を得、自ら迦葉佛の時を憶して比丘と爲り、〔五九〕鬱多羅と名けて、佛法を修行す」と說けばなり。云何が今六年苦行して、邪道の法を修し、日に一麻一米を食せん。後身の菩薩は一日すら、尚ほ應に謬るべからず、何に況んや六年をや。瞋も亦是の如し。久遠世の時より毒蛇と作り、獵者生きながら其皮を剝ぐすら猶尙瞋らず、云何が最後身にして、而も五人を瞋らんや。是故に聲聞人の佛の義を受くるは錯たることを知る。佛は方便力を以て、外道を破せ

【五六】第二四問、無生法忍を得てより、法性生身を得て變化することありや如何
【五七】化法には要す化主あり、而して後に能化あり。
【五八】小乘の徒は、菩薩は未だ惑を斷ぜず、道場に坐する時斷ずといふ。
【五九】ウツタ〔[illegible]〕

んと欲するが故に、六年の苦行を現じたまへり。汝が、「五人を瞋る」と言ふは、是を方便と爲す。亦是れ瞋の習にして、煩惱に非ざるなり。今當に如實に說くべし。菩薩は無生法忍を得て、煩惱已に盡くるも、習氣を未だ除かざるが故に、習氣に因つて法性生身を受け、能く自在に化生す。大慈悲あつて衆生の爲の故に、亦本願を滿つるが爲の故に、世間に還り來り、餘殘の佛法を具足し成就するが故に、十地滿ちて道場に坐し、無礙解脫力を以ての故に、一切智・一切種智を得て、煩惱の習を斷じたまへり。摩訶衍の人は言く、「無生法忍を得たる菩薩は、一切の煩惱、及び習を都て盡くす」と。亦是も錯なり。若し都べて盡くさば、佛と異なると無く、亦法性生身を受くべからず。是の故に菩薩は無生法忍を得、生身を捨てて法性生身を得。若し道場に坐するに至つて、一切の煩惱及び習を俱に斷ずと言はば、是の語も亦非なり。何となれば若し菩薩具に三毒あらば、云何が能く無量の佛法を集めん。譬へば毒瓶の如きは、甘露を著くと雖も、皆食するに中らず。菩薩は諸の純淨の功德を集めて、乃ち佛と作るとを得。若し三毒を雜へば、云何が能く清淨の佛法を具足せんや。

問うて曰く、(六〇)諸法實相を觀じ、及び悲心を修するが故に、能く三毒をして薄からしむ。薄きが故に能く清淨の功德を集む。答へて曰く、三毒を薄くすれば、轉輪聖王と諸天王身とを得べし。佛の功德身を得んと欲せば、是の事あると無し、三毒を斷ずれば、習未だ盡きざるも、諸の功德を集むる

【六〇】第二五問、諸法實相を觀じ、悲心を修し、三毒を薄からしむるが故に、清淨の功德を集むるにあらずや。

ことを得べし。復次に、薄とは、離欲の人の、下地の結を斷ずるも、猶上地の煩惱あるが如きに名く。又須陀洹の見諦所斷の結盡くれども、思惟所斷の結未だ盡きざるが如き、是を名けて薄と爲す。佛の說きたまふが如くんば、三結を斷じて、婬・恚・癡を薄くするを名けて斯陀含と爲す。汝若し薄と言はば、應當に是れ斷なるべし。是の故に無生法忍を得る時、煩惱を斷じ、佛を得る時、煩惱の習を斷ずるは、是れ則ち實說なり。

【經】復次に舍利弗よ、菩薩摩訶薩にして、菩薩位に上らんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。

【論】菩薩位とは無生法忍是なり。此の法忍を得て一切世間の空なるを觀せば、心に著する所なくして、諸法實相の中に住し、復た世間に染まず。復次に、般舟般三昧は是れ菩薩位なり、是の般舟般三昧を得れば、悉く現在の十方の諸佛を見、諸佛より法を聞いて諸の疑網を斷じ、是の時菩薩の心動搖せず、是を菩薩位と名く。復次に菩薩位とは、六波羅蜜を具足し、方便智を生じ、諸法實相に於ても亦住せず、自知自證して他語に隨はず、若くは魔、佛形と作って來るも心亦惑はず。

復次に菩薩の法位に入る力の故に[六二]阿鞞跋致の菩薩と名くることを得。復次に菩薩摩訶薩は是の

【六二】Avaivarti は不退轉と譯す。成佛の進路を退轉せざるの義にして、菩薩の階位の名なり。

法位の中に入りて、復た凡夫の數に墮せず、名けて得道の人と爲す。一切世間の事は、其の心を壞らんと欲すれども、動ぜしむると能はず、三惡趣の門を閉ぢ、諸の菩薩の數中に墮し、初めて菩薩の家に生れ、智慧清淨に〔六二〕成熟す。復次に頂に住して墮せざる、是を菩薩の法位と名く。學品の中に說くが如くんば、上位の菩薩は惡趣に墮せず、下賤の家に生れず、聲聞、辟支佛地に墮せず、亦頂より墮せず。

問うて曰く、〔六三〕云何が頂より墮すと爲すや。答へて曰く、須菩提の舍利弗に語つて、「若し菩薩摩訶薩、方便心なくして六波羅蜜を行じ、空・無相・無作の中に入れば、菩薩位に上ること能はず、聲聞・辟支佛地にも墮せず、諸の功德法に愛著し、五衆の無常・苦・空・無我に於て、相を取り心著し、是は道なり、是は道に非ず、是は行ずべし、是は行ずべからず」と言へるが如し。是の如き等の取相分別は、是れ菩薩、頂より墮するなり。何等か是れ頂に住する。上の所說の如く、諸法の愛を斷じ、愛を斷ずるの法に於ても、亦復取らず。頂に住するの義の中に說くが如く、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜「多」を行ずる時は、内空の中に外空を見ず、外空の中に内空を見ず、外空の中に内外空を見ず、内外空の中に外空を見ず、乃至無法、有法も亦是の如し。復次に上位の菩薩は無等等の心を得て亦自ら高ぶらず、心相の眞空を知り、諸の有無等の戲論滅す。

【六二】明本には成就に作れり。

【六三】第二十六問、頂より墮すとは何ぞや。

問うて曰く、(六四)何を以ての故に聲聞法の中には、名けて正位と爲し、此の菩薩法の中の位は、但位とのみ名くるや。答へて曰く、若し正位と言ふも亦咎なし。何となれば若し菩薩法位と言はば、是は則ち正と爲せばなり。聲聞法の中には、但位と言つて聲聞位と言はず、是の故に正位と言ふなり。復次に、聲聞を學する人は大慈悲心なく、智利ならざるが故に、未だ厭心を生せず、多く諸法を求め、種種の邪見、疑悔を生ず。菩薩摩訶薩は大慈にして、一切を愍むが故に、多く衆生の老病死の苦を度脱せんことを求め、種種の戯論を分別することを求めず。譬へば長者に一子あり、之を愛すること甚だ重く、其の子病を得るに、但良藥の能く病を差やす者を求め、諸藥の名字を分別し、之を取るの時節、合和分數を求めざるが如し。是の故に諸の菩薩は、果に從つて十二因緣を觀じ、因に從つて觀せず。見多き者は因に從つて觀じ、愛多き者は果に從つて觀ず。諸の聲聞人は、邪位に因るが故に正位あり、菩薩は邪位薄きが故に但菩薩位と名く。

問うて曰く、(六五)聲聞法の中には、苦法忍より乃ち道比忍に至るを、名けて正位と爲す、經の中に說くが如くんば、三惡道の中には三事を得べからず。所謂正位・聖果・漏盡なり。破戒・邪見・五逆罪等も亦是の如し。何の法を得てより、名けて菩薩位と爲すや。答へて曰く、[菩薩位は]發意より大悲を修行し、方便を具足し、是の四法を行じて、菩薩位に入ることを得。聲聞法の中の如きは、先づ具に四種の

【六四】第二七問、小乘にては正位と言ひ、大乘にては但だ位と名くる理由如何。

【六五】第二八問、何法を得てより菩薩位と名くるや。

善根なる煗法・頂法・忍法・世間第一法を說き、然る後に苦法忍の正位に入る。

問うて曰く、(六六)修行には皆四法を攝す、何を以ての故に差別して四と爲すや。答へて曰く、初發意に修行ありと雖も、久しく修せざるが故に、修行と名けず。在家の如きは、終日、作せずと雖も、名けて行と爲さず。復次に、發意の時は但意願のみ有り、行の時は造作し、財を以て人に與へ、禁戒を受持し、是の如き等の六波羅蜜「多」を行ず、是を修行と名く。修行し已れば、般若波羅蜜「多」を以て、諸法の實相を知り、大悲心を以て衆生を愍念す。是の諸法實相を知らざれば、世間虛誑の法に染著し、種種の身苦、心苦を受く。是は更に大悲の名を受くるが故に、修行と名けず。方便とは、般若波羅蜜「多」を具足するが故に諸法の空を知り、大悲心あるが故に衆生を憐愍し、是の二法に於て、方便力を以て染著を生ぜず、諸法の空を知ると雖も、方便力あるが故に亦衆生を捨てず、衆生を捨てずと雖も、亦諸法の實に空なるを知る。若し是の二事に於て等しければ、卽ち菩薩位に入るを得。聲聞の人の如きは、定慧の二法に於て等しきが故に、是の時は卽ち正位に入るを得。是の法には行ありと雖も、更に餘の名字あれば修行と名けず。初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、其の中間に於て行ずる所は皆修行と名くるも、小小差別して異なること有り、名字解し易きが爲の故なり。譬へば人あり、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發す如きは、一切衆生の老病死等の、身心の諸苦を度脫

【六六】第二九問、修行には、煗、頂、忍、世間第一の四法を攝す、然るに之を差別して四と爲すは何故なるか。

せんと欲し、大誓を作し、功德、慧明の二事を莊嚴する因緣の故に所願皆滿す。是の二事に六分の修行あり、名けて六波羅蜜と爲す。布施・持戒・忍辱は是れ功德分なり。精進・禪定・智慧は是れ慧明分なり。六波羅蜜を修行し、是の諸の法相を知るに、甚深微妙にして解し難く知り難し。是の念を作さく、「衆生は三界の諸法に著せり、何の因緣を以てか、衆生をして是の諸の法相を得せしめん。當に諸の功德を具足するを以て、清淨の智慧を具足すべし」と。佛身は三十二相、八十隨形好、光明具足し、神通無量なり。十力・四無所畏・十八不共法・四無礙智を以て、應に度す可き者を觀て說法開化す。譬へば金翅鳥王の普ねく諸龍の命の應に盡くべき者を觀、翅を以て海を搏ち、水をして兩「方」に闢かしめて取つて之を食するが如し。佛も亦是の如く、佛眼を以て十方世界五道の衆生の、誰か應に度を得べきかを觀じ、初めて神足を現はし、次に爲めに其の心趣を示す。此の二事を以て三障礙を除き、爲に說法し、三界の衆生を拔きたまへり。佛力の無量の神通を得るとは、假令虛妄なりとも猶尙信ずべし、何に況んや實說をや。是を方便と名く。復次に、菩薩は般若波羅蜜多を以て諸の法相を知り、其の本願を念じ、衆生を度せんと欲して、是の思惟を作さく、「諸法實相の中に衆生は不可得なり、當に云何が度すべき」と。復た是の念を作さく、「諸法實相の中に衆生は不可得なりと雖も、而も衆生は是の諸の法相を知らざるが故に、是の實相を知らしめんと欲す」と。復次に、是の實法相は亦衆生を礙へず、實法相とは、名けて除壞せらるると無しと爲し、亦所作なし、是を方便と名く。是の

四法を具足して菩薩位に入ることを得。

【經】聲聞、辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜（を）を學すべし。

【論】問うて曰く、〔三〇〕菩薩は法位に入る時、即ち已に聲聞辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住す、何を以ての故に復た說くや。答へて曰く、三事は一時なりと雖も、諸法の各各に相應して當に次第に讃すべし。一心中に一時に無漏の五根を得るも、而も各各分別して其の相を說くが如し。菩薩は法位に入る時、若干の結使を斷じ、若干の功德を得、是の地を過ぎて是の地に住す。唯佛のみ能く〔是を〕知つて、亦諸の菩薩を引導せんと欲したまふが故に、佛は種種に讃說したまへり。此の經の如きは、始め佛は耆闍崛山に在して五千の比丘と俱なりき。皆是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡き、所作已に辦ずる等なり。阿羅漢は即ち是れ漏盡なり。漏盡とは、即ち是れ所作已に辦ずる等なり。亦餘人を引導し、心をして清淨ならしめんが爲の故に、種種に讃說したまふも咎なし。此も亦是の如くして法位に入る。即ち是れ阿羅漢、辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋地に住するなり。

復次に、法位に入るに因るが故に、阿羅漢辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋地に住することを得。

問うて曰く、〔三一〕法位の中に入つて老病死を過ぎ、及び諸の結使を斷じ三惡道を破る等は先に說くが

【三〇】第三〇問、菩薩は已に小乘の位を過ぎて不退位に住す、然るに今復た之を說く理由如何。

【三一】第三一問、菩薩は僅不退位に住すと說く理由如何。

如し。何を以てか但聲聞辟支佛地を過ぎて、亦種種の功德に住すと說き、何を以ての故に但阿鞞跋致地に住すとのみ說くや。答へて曰く、諸の惡事を捨てて諸の功德を得。後當に次第に說いて、所住の功德に及ぶべし。說法は當に須らく次第にすべく、一時に頓に說くべからず。復次に、菩薩の初發意の時に怖畏すべき所は、聲聞辟支佛地に過ぎたるは無し。正しく地獄に墮せしむるも、是の如きの怖畏無し。永く大乘道を破らざるが故に、阿羅漢辟支佛は、此の大乘に於て以つて永く滅すと爲す。譬へば空地に樹あり、(六九)舍摩梨と名く。觚枝廣大にして、衆鳥集り宿る、一鴿後に至つて、一枝の上に住するに、其の枝及び觚卽時に壓折するが如し。澤神、樹神に問ふ、「大鳥の鵰鷲皆能く住持す、何ぞ小鳥に至つて便ち自ら勝へざるや」と。樹神答へて言く、「此の鳥は我が怨家の尼倶盧樹上より來る。彼の樹果を食し、來つて我が上に栖み、必ず當に糞を放つべし。〔種〕子地に墮つれば惡樹復生じ、害を爲すこと必ず大ならん、是を以ての故に、此の一鴿に於て、大に憂畏を懷き。寧ろ一枝を捨てて全うする者を大なりとしむ」と。菩薩摩訶薩も亦是の如く、諸の外道、魔衆及び諸の結使、惡業に於ては、是の如く畏るると阿羅漢辟支佛〔に於ける〕が如きこと無し。何となれば、聲聞辟支佛は菩薩の邊に於て、亦彼の鴿の如く、大乘心を壞敗せしむればなり。永く佛業を滅す、是の故に但聲聞辟支佛地を過ぐと說く。阿鞞跋致地に住すとは、初發意より已來、常に喜樂して阿鞞跋致地に住す、諸の菩薩の多く退轉あることを見

【六九】舍摩樹(Sama)の枝、衆鳥に折られずして、一鴿のために折れたる譬。

くが故に、發意の時願を作さく、「何の時か當に聲聞辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住することを得べし」と。是の故に阿鞞跋致地に住すと說く。

問うて曰く、(七〇)何等か是れ阿鞞跋致地なりや。答へて曰く、若し菩薩は、能く一切法の不生不滅、不不生、不不滅、不共、非不共を觀じ、是の如く諸法を觀じて、三界に於て脫することを得、空を以てせず、非空を以てせず、一心に、十方諸佛の用ゐたまふ所の、實相の智慧を信忍して、能く壞する[者]なく、能く動ずる者なし。是を無生忍法と名く。無生忍法は、卽ち是れ阿鞞跋致地なり。復次に、菩薩位に入れば、是れ阿鞞跋致地なり。聲聞辟支佛地を過ぐるも、亦阿鞞跋致地と名く。

復次に、阿鞞跋致地に住すれば、世世に常に果報を得、神通を失はず、退せざるなり。若し菩薩此の二法を得れば、諸法實相を得と雖も、而も大悲を以て一切衆生を捨てず。復た二法あり、一には淸淨智慧、二には方便智慧なり。復た二法あり。

七一一には深心に涅槃を念じ、二には所作世間を離れず。譬へば大龍の尾は大海に在り頭は虚空に在り、震電雷霆して、大雨を降すが如し。復次に、阿鞞跋致の菩薩は、是の諸法實相の智慧を得て、世世に失はず、終に暫らくも離れず、諸佛の深經に於て終に疑はず、亦礙ふることを作さざるなり。何となれば、我未だ一切智慧を得ざるが故に。何の方便、何の因緣といふことを知らざるが故なり。是の如

【七〇】第三二問、不退轉とは何ぞや。

【七一】菩薩の涅槃を念じ、而も世間を離れざるは、大龍の尾は海中に沒し頭は虚空にもたげて、大雨を降すが如し。

く阿鞞跋致の菩薩は、常に淨心を以て、終に惡を生ぜず、阿鞞跋致は、深心を以て、諸善を集め、淺心に諸の不善を作すと說く。

問うて曰く、【七二】若し阿鞞跋致の相は無生法忍を得ば、云何が淺心を以て諸の不善を作すや。答へて曰く、【七三】二種の阿鞞跋致あり、一には無生法忍を得、二には未だ無生法忍を得ずと雖も、佛はその過去未來に作す所の因緣を以つて、必ず當に作佛すべきことを知りたまひ、傍人を利益するが爲の故に、其に受記を爲したまふ。是の菩薩は、生死の肉身の結使未だ斷ぜざるも、諸の凡夫の中に於て最も第一と爲す。是も亦阿鞞跋致の相と名く。若し無生忍法を得て、諸の結使を斷ずれば、此は則ち清淨にして、末後の肉身盡きて法性生身を得、結使も覆へざる所にして教戒を須ゐず、大恆河の中の船は將御を須ゐずして、自ら大海に至るが如し。

復次に、初發意より大心を生じ、諸の煩惱を斷じ、諸法の實相を知つて便ち阿鞞跋致を得る有り。但檀波羅蜜のみを行じて、便ち六波羅蜜を具足するあり。乃至般若波羅蜜【七四】も亦是の如し。六波羅蜜を行じて、未だ阿鞞跋致を得ず、衆生の中に於て大悲心を生じ、是の時、便ち阿鞞跋致を得るもの有り。悲心を得て是の念を作さく、『若し諸法空たれば則ち衆生なし、誰か度す可き者ぞ』と。是の時、悲心は便ち弱し。或時は衆生を以て愍むべしとするも、諸法の空觀に於て弱し。若し方便力を得て此

【七二】第三三問、不退轉位の人にして、淺心もて不善を作す理由如何。

【七三】二種の不退轉。

の二法に於て、等しくして偏黨なければ、大悲心は諸法實相を妨げず、諸法實相を得るも大悲を妨げず。是の如くして方便を生ず。是の時、便ち菩薩の法位に入り、阿鞞跋致地に住することを得るもの有り、往生品の中に説くが如し。復次に、阿鞞跋致の相は、後の阿鞞跋致の二品に説くが如し。

卷の第二十八

初品の中の六神通等を釋す。

【經】菩薩摩訶薩、六神通に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。

【論】問うて曰く、(一)讃菩薩品の中の如くんば、諸の菩薩は皆五神通を得と言ふ。今何を以てか、六神通に住せんと欲すと言ふや。答へて曰く、(二)五通は是れ菩薩の所得なり、今六神通に住せんと欲すと云ふは、是れ佛の所得なり。若し菩薩にして六神通を得と云はば、如來を難ず可し。

問うて曰く、(三)往生品の中には、「菩薩は六神通に住して、諸の佛國に至る」と說けり。云何が菩薩は皆五通を得と言ふや。答へて曰く、(四)第六の漏盡神通に二種あり。一には漏と習と俱に盡く、二には漏は盡くせども習は盡きず。習盡きざるが故に、「皆五通を得」と言ふも、漏を盡くすが故に、「六神通に住す」と言ふ。

問うて曰く、(五)若し菩薩は漏を盡くさば、云何が復生じ、云何が受生せん。一切の受生は、皆愛の

【一】第一問、菩薩が六神通に住せんと欲すと云ふは、何故なるか。

【二】五通は菩薩の所得にして、六通は佛の所得なり。

【三】第二問、往生品中に菩薩は六神通に住すといふ、然るに菩薩は皆五通を得といふ理由如何。

【四】二種の漏盡通。

【五】第三問、菩薩もし漏を盡さば、如何にして復た受生するか。

相續に由るが故に有り。譬へば米は良田を得と雖も、時澤終れば生ずると能はざるが如し。諸の聖人は愛糠已に脱するが故に、有漏業生の因緣ありと雖も、生ずることを得ざるべし。答へて曰く、先に已に說けり。「菩薩は法位に入り、阿鞞跋致地に住し、末後の肉身盡きて、法性生身を得。諸の煩惱を斷ずと雖も、煩惱の習の因緣あるが故に、法性生身を受く、三界の生には非ざるなり」と。

問うて曰く、(六)阿羅漢は、煩惱已に盡くれども、習は亦未だ盡きず、何を以てか生ぜざるや。答へて曰く、阿羅漢は大慈悲なく、本誓願して一切衆生を度すると無く、又實際に證を作し、已に生死を離るるを以てなり。復次に、先に已に二種の漏盡あるとを答へたり。此の中には、菩薩は漏盡通を得と說かず、自ら「六神通を得んと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし」と言へり。六神通の義は、後品の中に佛の說き給ふ所の如し。上の讚菩薩品にも、亦已に菩薩の五神通の義を說けり。

【六】第四問、煩惱已に盡き、習未だ盡きざる阿羅漢の受生せざる理由如何。

【七】第五問、神通の順序次第は如何。

問うて曰く、(七)神通には何の次第ありや。答へて曰く、菩薩は五欲を離れ、諸禪を得て、慈悲あるが故に、衆生の爲に神通を取つて、諸の希有奇特の事を現じ、衆生の心をして清淨ならしむ。何となれば、若し希有の事なければ、多くの衆生をして、得度せしむると能はざればなり。菩薩摩訶薩は是の念を作し已つて、心を身中の虛空に繫け、麁重の色相を滅して、常に空の輕相を取り、大に精進せんと欲するの心を發し、智慧もて籌量し、心力能く身を擧げ、未だ籌量し已らざるに、自ら心力大

にして、能く其の身を擧するを知る。譬へば趠を學するに、常に色の麤重の相を壞し、常に輕空の相を修すれば、是の時便ち能く飛ぶが如し。二には亦能く諸物を變化す。地を水と作し、水を地と作し、風を火と作し、火を風と作し、是の如く諸大を皆轉易せしむ。金を瓦礫と作し、瓦礫を金と作し、是の如きの諸物を各能く化せしむ。地を變じて水相と爲し、常に修して水を念し、多く復地相を憶念せざらしむれば、是の時地相は念の如く卽ち水と作る、是の如き等の諸物皆よく變化す。

問うて曰く、(八)若し爾らば一切入と何等の異なること有りや。答へて曰く、一切入は是れ神通の初道なり。先づ已に一切入背捨勝處に「於て」、其の心を柔伏して、然る後に易く神通に入る。

復次に一切入の中には、一身は自ら地變じて、水と爲ると見れども、餘人は見ず、神通に則ち然らず、自ら實に是れ水なりと見れば、他人も亦實の水と見る。

問うて曰く、(九)一切入も亦是れ大定なり。何を以てか實の水と作して、己身他人をして、皆見せしむること能はざるや。答へて曰く、一切入の觀ずる處は、廣くして但能く一切をして是の水相ならしむるも、而も實に是を水ならしむること能はず。神通は能く一切に遍ねからざれども、而も能く地をして、轉じて水と爲らしむるに、便ち是れ實の水なり。是を以ての故に二定の力は各各別なり。

【八】第六問、一切入と神通との區別如何。

【九】第七問、定力なる一切入にして、地を變じて自他をして實水と見せしめざる理由如何。

問うて曰く、〔一〇〕二定の變化の事は、實と爲すか虛と爲すか。若し實ならば、云何が石を金と作し、地を水と作さん。若し虛ならば、云何が聖人にして、而も不實を行ずるや。答へて曰く、皆實なり。聖人には虛なし、三毒を已に拔けばなり。一切法は、各各定相なきを以ての故に、地を轉じて或は水相と作す可し、蘇膠蠟の如きは、是れ地の類なれども、火を得れば則ち消え、水の爲には則ち濕相と成る。水は寒ければ、則ち結んで氷と成つて堅相を爲し、石の汁は金と作り、金敗るれば銅と爲り、或は還た石と爲る。衆生も亦是の如く、惡は善と爲す可く、善は惡と爲す可し。是の故に一切法は定相なし。故に神通力を用ゐて變化するに、實にして誑ならざることを知る。若し本より各各定相あれば、則ち變ずべからず。三に諸の賢聖の神通は、六塵の中に於て意に隨つて自在なり。好を見ては能く厭想を生じ、醜を見て能く樂想を生じ、亦能く好醜の想を離れて捨心を行ず。是を三種の神通と名く。此の自在神通は、唯佛のみ具足し給へり。菩薩は是の神通を得て、諸の佛國に遊ぶに、諸の異國に於ては、語言同じからず、及び遠きに在る微細の衆生は聞えざるが故に、天耳通を求めて、常に種種多衆の大聲を憶念し、相を取つて修行し、常に修習するが故に、耳は色界四大造の清淨色を得、得已つて便ち遠く聞くことを得、天人の音樂麤細遠近に於て通達無礙なり。

問うて曰く 〔一一〕禪經の中に說くが如くんば、先づ天眼を得て衆生を見れども、其聲を聞かざるが故

〔一〇〕第八問、二定にて變ずるものは實なるか、將た虛なるか。

〔一一〕第九問、如意通を神通の最初に置かざる理由如何。

に天耳通を求め、既に天眼、天耳を得て衆生の身形、音聲を見知するも、而も語言の種種の憂喜苦樂の辭を解せざるが故に、辭無礙智を求む。但其の辭を知つて、其の心を知らざるが故に、知他心智を求む。其の心を知り已れども、未だ本の從來する所を知らざるが故に、宿命通を求む。既に來る所を知るも、其の心病を治せんと欲するが故に、漏盡通を求む。五通を具足するを得已れども、變化すること能はざるが故に、度する所未だ廣からず、邪見と大福德の人を降化すること能はず、是の故に如意神通を求む。應に是の如く次第すべし。何を以ての故に先づ如意神通を求むるや。答へて曰く、衆生の麤なる者は多く、細なる者は少し、是の故に先づ如意神通を以てす。如意神通は能く麤細を兼ね、人を度すること多きが故なり。是を以て先に說けり。

復次に、諸の神通は得法異なり、數法異なる。得法の者は多くは先づ天眼を求む、得易きを以ての故なり。行者は日月星宿珠火を用ゐて、是等の光明の相を取り、常に勤めて精進して、善く修習するが故に、晝夜の異なく、若くは上、若くは下、若くは前、若くは後、等しく一に明徹にして罣礙する所なし。是の時初めて天眼神通を得。餘は次第に得ること先に說けるが如し。復次に、佛は自ら得る所の如く、人の爲に次第を說きたまふ。佛は初夜分に一通一明、所謂る如意通、宿命明を得たまひ。中夜分に天耳通、天眼明を得たまひ、後夜分に知他心智通、漏盡明を得たまふ。明の用功を求むると重きが故に、後に在つて說き、通と明とは次第に得ると、四沙門果の如く、大なる者後に在り。

問うて曰く、〔一二〕若し天眼は得易きが故に前に在らば、菩薩は何を以てか、先づ天眼を得ざるや。答へて曰く、菩薩は諸法に於て、皆易くして難きもの無し。餘人は鈍根なるが故に難あり易あり。

復次に〔一三〕初夜の時、魔王來つて佛と戰はんと欲するに、菩薩は神通力を以て、種種に變化して、魔の兵器をして、皆瓔珞たらしめ、魔を降し已つて、續いて神通を念じて、具足せしめんと欲し、心を生じて即ち入つて便ち得たまふ。神通を具足し、魔を降し已つて、自ら一身に云何が大方便を得んと念じて、宿命明を求め、自ら世世に福德力を積めることを知りたまふが故に、中夜の時、魔は即ち遠く去つて、寂寞として聲なし。一切を慈愍したまふが故に、魔衆の聲を念じて、天耳神通、及び天眼明を生じ、是の天耳を用ゐて、十方五道の衆生の、苦樂の聲を聞き、聲を聞き已つて、其の形を見んと欲するに、而も障蔽を以て見ざるが故に、天眼を求め給ふ。後夜の時、既に衆生の形を見、其の心を知らんと欲するが故に、他心智を求め。衆生の心は皆苦を離れ、樂を求めんことを欲することを知る。是の故に菩薩は、漏盡神通を求め、諸樂の中に於て、漏盡は最勝なれば、衆生をして之を得せしめたまふ。

問うて曰く、〔一四〕菩薩は已に無生法忍を得、世世に常に果報神通を得。今何を以てか自ら疑ひ、既に衆生を見て、而も其心を知らざるや。答へて曰く、〔一五〕二種の菩薩あり。一には法性生身の菩薩、二

【一二】第一〇問。天眼もし得易からば、菩薩は何故に先づ天眼を得ざるか。
【一三】佛菩提樹の下に坐して、三明六神を得給ふに、初・中・後夜の前後次第ありき。
【一四】第一一問。菩薩が衆生の心を知らざる理由如何。
【一五】二種の菩薩。

には衆生を度せんが爲の故に、方便して八法を受け、身は淨飯王の家に生れ、四城門より出でて、老病死人を問ふ、是菩薩は樹王下に坐して六神通を具す。復次に、菩薩の神通は先より有れども、而も未だ具足せず。今三夜に得る所は、是れ佛の神通にして、八法を行ずるが故に、自ら疑ふも咎なし。

問うて曰く、【一六】六神通の次第は、常には初は天眼、後は漏盡通なり、亦爾らざると有りや。答へて曰く、多くは先づ天眼にして、後漏盡智なり。或時は好む所に隨つて修し、或は天耳を先とし、或は神足を先とす。有人の言く、「初禪には天耳得易し、覺觀の四心あるが故なり。二禪には天眼得易し、眼識なきが故に、心攝せられて散せざるが故なり、三禪には如意通得易し、身に快樂を受くるが故なり。四禪には諸通みな得易し、一切安隱の處なるが故なり」と。宿命等の三神通の義は、十力の中に說くが如し。

【一六】第二十問、六神通の次第順序は一定するや否や。
【一七】第二十一問、六通中に他心通を說き、今復た「衆生の意の趣向する所を知らんと欲せば」と云ふは何故なるか。

【經】一切衆生の心の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、【一七】六通の中に、已に知他心通を說けり、今何を以てか、重ねて說くや。答へて曰く、知他心通は境界少なり、但欲界色界の現在の衆生の、心心數法のみを知つて、過去未來及び無色界の衆生の心心數法を知らず。凡夫の通は上は四禪地より、所得の通處に隨ひ、已下は遍ねく四天下

の衆生の心心數法を知る。聲聞の通は、上は四禪地より所得の通處に隨ひ、已下は遍ねく千世界の、衆生の心心數法を知る、辟支佛の通は上は四禪地より、所得の通處に隨ひ、已下は遍ねく百千世界の衆生の心心數法を知る。上地の鈍根の者は、下地の利根の者の心心數法を知ると能はず、凡夫は聲聞の心心數を知ると能はず、聲聞は辟支佛の心心數法を知らず、辟支佛は佛の心心數法を知らず、是の故に一切衆生の心の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと說く。

問うて曰く、（一八）何の智を以てか、能く一切衆生の心心數法を知るや。答へて曰く、諸佛は無礙解脫あり。是の解脫の中に入つて、能く一切衆生の心心數法を知り給ふ。諸の大菩薩は、相似の無礙解脫を得て、亦能く一切衆生の心心數を知る。新學の菩薩は、是の大菩薩の無礙解脫、及び佛の無礙解脫を得んとを欲し、此の無礙解脫を以て、一切衆生の心心數法を知る。大菩薩は、佛の無礙解脫を得んとを欲す。是の故に、已に知他心通を說くと雖も、更に一切衆生の、心の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと說く。

問うて曰く、（一九）心の趣向する所とは、心を去ると爲すや、去らずと爲すや。若し去らば此は則ち無心なると猶死人の若く、若し去らずんば云何が能く知らん。佛の言ふが如くんば、意に依つて法を緣じ、意識は意を生ず。若し去らずんば和合すること無からん。答へて曰く、心は去らず住せずして而

【一八】第一四問。一切衆生の心心所を知るは何の智なるか。

【一九】第一五問。心の趣向する所とは、心の去ると言ふ意味なるや、將た去らずと言ふ意味なりや。

も能く知る。般若波羅蜜[一]の中に說くが如くんば、一切法は無來無去の相なり。云何が心に來去ありと言はん。又言く、諸法は生ずる時、從來する所なく、滅する時去る所なしと。若し來去あらば卽ち常見に墮せん、諸法には定相あること無し。是の故に但內の六情、外の六塵和合するを以て、六識を生じ、及び六受・六想・六思を生ず。是の故に心は幻化の如し。能く一切衆生の心心數法を知るも、知る者あること無く、見る者あること無し。歎摩訶衍品の中に言ふが如し。「若し一切衆生の、心心數の法性實有にして、虛妄ならずんば、佛は一切衆生の、心心數法を知りたまふこと能はず。一切衆生の心心數法の性は、實に虛誑にして、無來無去なるを以ての故に、佛は一切衆生の心心數法を知りたまふ。譬へば比丘の貪求するものは供養を得ず、貪求する所なければ、則ち乏短する所なきが如し。心も亦是の如く、若し分別して相を取らば、則ち實法を得ず。實法を得ざるが故に、通達して一切衆生の心心數法を知ること能はず、若し相を取らず、分別する所なければ、則ち實法を得。實法を得るが故に、能く通達して一切衆生の心心數法を知り、罣礙する所なし」と。

問うて曰く、[二]一切衆生の諸の心は悉く知ることを得べきや否や。若し悉く知らば、則ち衆生は邊あらん。若し知らずんば、何を以ての故に一切衆生の心の趣向する所を知らんと欲せばと說くや。云何が佛に一切種智あらんや。答へて曰く、一切衆生の心心數法は、悉く知ることを得べし。何とな

【二】第一六問、一切衆生の心は、悉く知ることを得べきや否やと言ふ理由如何。

れば經の中に說くが如くんば、一切の實語の中にて、佛は最も第一なればなり。若し悉く一切衆生の心を知つて、其の邊際を得たまふと能はずんば、佛は何を以てか、「悉く知る」と言はん。亦一切智人と名けず。而も佛語は皆實なり、必ず應に實に一切智ある人なるべし。復次に、衆生は無邊なりと雖も、一切種智も亦無邊なり。譬へば函大なれば、蓋も亦大なるが如し。若し智慧有邊にして、衆生無邊ならば、應に是の難あるべし。今智慧及び衆生は俱に無邊なるが故に汝が難は非なり。復次に、若し有邊無邊を言はば、此の二は佛法の中に於ては、是れ置答なり。是の十四事は虛妄無實にして、益なきが故に、以て難と爲すべからず。

問うて曰く、(三)若し有邊無邊の二は、俱に實ならざるも、而も佛は處處に無邊を說きたまへり。衆生の如きは、癡愛あつてより已來、無始無邊にして、十方も亦邊際なけん。答へて曰く、衆生無邊なれば佛の智慧も無邊なり。是を實と爲す。若し人無邊に著し、相を取つて戲論するが故に、佛は是を邪見なりと說き給へり。譬へば世間の常、無常の二の如きは、俱に顚倒にして十四難の中に入る。而も佛は多く無常を以て衆生を度し、少しく有常を用ゐ給へり。若し無常に著し、相を取つて戲論せば、佛は是を邪見虛妄と說きたまふ。若し無常に著せざれば、無常は卽ち是れ苦、苦は卽ち是れ無我、無我は卽ち是れ空なるとを知る。能く是の如く無常に依つて、觀じて諸法の空に入らば、便ち是れ實なり。是の故に無常を知れば眞諦の中に入る。

【三】第一七問、若し有邊無邊の二、俱に實ならんずば、佛は何故に處處に無邊と說き給ひしや。

是は實なり。十四難の中には、因緣に著するを以ての故に、是を邪見と説く。是故に無常を説いて、以て無邊を明す、無邊なるが故に、衆生は生死の長久なることを厭ふ。譬へば波梨國の四十の比丘の如きは、倶に十二の淨行を行じ、佛所に來り至るに、佛は爲に厭行を説きたまふ。佛、比丘に問ひたまはく、「五河「即ち」〔二二〕恆伽〔二三〕藍牟那〔二四〕薩羅由〔二五〕阿脂羅婆提〔二六〕摩醯の所來の處より、大海に流入するまで、其の中間の水を多少と爲すや」と、比丘の言く、「甚だ多し」と。佛の言はく、「但一人の一劫の中に、畜生と作る時は、屠割剝刺せられ、或時は罪を犯して、其の手足を截られ、其の身首を斬らるるに、是の如き等の血は此の水よりも多し。是の如くして無邊の大劫の中に身を受け、血を流すことは、勝げて數ふ可らず。啼哭の流淚、及び母乳を飲むとも亦是の如し。一劫の中の一人の積骨を計るに、鞞浮羅大山よりも過ぎたり。是の如く無量劫の中に生死の苦を受く」と。諸の比丘は是を聞き已つて、世間を厭患し、即時に道を得たり。

復次に、十方衆生の無邊なることを聞くが故に、心に歡喜を生じ、不殺戒を受けて、無邊の福德を得。是の因緣を以ての故に、初發意の菩薩は、一切世間の衆生を智慧に供養すべし。何となれば無邊の世界の衆生を度するが爲の故に、功德も亦無邊なればなり。是の如き等の益あるが故に、無邊を説

【二二】恆伽（Gaṅgā）現名 Ganges 河。
【二三】藍牟那は恐らくは閻牟那（Jamunā）現名 Jumna 河のことならん。
【二四】薩羅由（Sarayu）。現名 Ghogra 河
【二五】阿脂羅婆提（Airāvatī）。現名 Rapti 河
【二六】摩醯（Mahī）。現名 Mahi 河。

きたまへり。是の故に、悉く一切衆生の心の趣向する所を知つて、日の天下を照して、一時に倶に至り、遍ねく明かならざるなきが如しと說く。

經 菩薩摩訶薩は、一切の聲聞辟支佛の智慧に勝れんと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を學すべし。

論 問うて曰く、（三七）何等か是れ聲聞辟支佛の智慧なるや。答へて曰く、總相別相を以て、諸法の實相を觀ずるは、是れ聲聞の智慧なり。經の中に說くが如くんば、初は諸法を分別するに智慧を以てし、後には涅槃の智慧を用ゐて諸法を分別す。智慧は是れ別相、涅槃の智慧は是れ總相なり。

> 【三七】第一八問、何なか聲聞辟支佛の智慧といふ。

復次に、是の法は解と爲し、是の法は縛と爲す。是は流轉にして是は來還なり。是は生にして是は滅なり。是は味にして是は患なり。是は逆にして是は順なり。是は此岸にして是は彼岸なり。是は世間にして是は出世間なりと知り。是の如く二門の諸法を分別するを名けて、聲聞の智慧と爲す。復次に、三種の智慧は五受衆を知る。是の如きは集なり、是の如きは散なり、是の如きは出なりと。〔又〕是は味なり、是は患なり、是は離にして、三解脫門相應の智なりと。是の如き等は、三門の諸法を分別す。復次に、四種の智慧あり。四念處の智、法智、比智、他心智、世智、〔又は〕苦智、集智、滅智、道智、〔又は〕不淨智、無常智、苦智、無我智、〔又は〕無常智、苦智、空智、無我智、〔又は〕法

智、比智、盡智、無生智なり、是の如き等は、四門の諸法を分別す。

復次に、苦法智忍の慧より、乃ち空空三昧、無相無相三昧、無作無作三昧智に至るまで、其の中間に於て有する所の智慧は、悉く是れ聲聞の智慧なり。略說すれば世間を厭ひ、涅槃を念じ、三界を離れ、諸の煩惱を斷じ、「最上法」、所謂る涅槃を得。是を聲聞の智慧と名く。復次に、般若波羅蜜「多」義品の中に說くが如くんば、智慧の相は是れ聲聞の智慧なり。是は一の智慧にして但方便なく、大誓の莊嚴なく、大慈大悲なく、一切の佛法を求めず、一切種智を以て、一切法を知ることを求めず、但老病死を厭ひ、諸の愛業を斷じて、直に涅槃に趣くを異となす。

問うて曰く、〔二八〕聲聞は是の如くば、辟支佛の智慧は云何。答へて曰く、聲聞の智慧は、師は是れ辟支佛の智慧なり。但時師と利根と福德とに差別あり。時とは佛世に在したまはず、亦佛法なきに名く。少因緣を以て、出家し得道するを辟支佛と名け、利根なるを異と名く。法相は是れ同じきも、但智慧深入にして、辟支佛道を得、福德の相あるに名く、或は一相二相より乃ち三十一相に至る。若くは先佛の法の中に聖法を得、法滿して後阿羅漢を成ずるを名けて辟支佛と爲し、身に相あること無し。辟支佛の第一に疾き者は、四世にして行き、久しき者は乃ち百劫に至つて行くもの有り、聲聞の如きは、疾き者は三世、久しき者は六十劫なり。此の義は先に已に廣く說けり。

【二八】第一九問、何をか辟支佛の智慧といふ。

問うて曰く、(二九)佛の說きたまふが如くんば、四種の沙門果、四種の聖人あり。須陀洹乃至阿羅漢なり。五種の佛子は、須陀洹乃至辟支佛なり。三種の菩提は、阿羅漢菩提・辟支佛菩提・佛菩提にして、果の中にも、聖[人]の中にも、菩提の中にも、皆菩薩なし。云何が菩提は、一切の聲聞、辟支佛の智慧に勝ると言ふや。答へて曰く、佛法に二種あり。一には聲聞辟支佛の法、二には摩訶衍法なり。聲聞法は小なるが故に、但聲聞の事を讃して菩薩の事を說かず。摩訶衍は廣大なるが故に、諸の菩薩摩訶薩の事を說く。[乃ち菩薩は]發心修行して十地の位に入り、佛の世界を淨め、衆生を成就して佛道を得。此の法の中には菩薩は佛に次いで、應に佛を供養するが如くなるべしと說く。能く是の如く諸の法相を觀ずるを福田と爲し、能く聲聞辟支佛に勝る。是の如く摩訶衍經の中の處處に菩薩摩訶薩の智慧は、聲聞辟支佛に勝れたりと讃す。(三〇)寶頂經の中に說くが如くんば、轉輪聖王は、一を少いで千子に滿たざれば、大力ありと雖も、諸天世人の貴重せざる所なり。眞の轉輪聖王種あつて、胎中に處在すれば、初め受くると七日にして、便ち諸天の爲めに貴重せらる。何となれば九百九十九人は轉輪聖王の種を嗣いで、世人をして二世の樂を得せしむること能はず、是[の一]は胎に在りと雖も、必ず能く聖王を紹出す。是の故に恭敬するなり。諸の阿羅漢辟支佛は、根力・覺道・六神通・諸禪・智慧力を得、實際に於て證を得、衆生の福田と爲ると雖も、十方の諸

【二九】 第二〇問、四果・五種の佛子、五種の菩提中、菩薩なるものあることなし。然るに菩薩は二乘の智慧に勝ると言ふは何故なるか。

【三〇】 寶頂經の所說。

佛の貴重したまはざる所なり。菩薩は諸の結使・煩惱・欲縛・三毒の胎中にありと雖も、初めて無上道の意を發し、未だ所作あること能はず、而も諸佛の爲めに貴ばる。其の菩薩は當に六波羅蜜を行じて、方便力を得、菩薩の位に入つて乃ち一切種智を得るに至り、無量の衆生を度して、佛種・法種・僧種を斷せず、天上、世間の淨樂の因緣を斷ぜざるべきを以ての故なり。又(三一)迦羅頻伽鳥の鷇中に在つて未だ出でざるに、發聲微妙なること餘鳥に勝れたるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、未だ無明の鷇を出でずと雖も、說法論議の音は聲聞辟支佛及び諸の外道に勝れたり。(三二)明綱經の中に說くが如し。「慧命舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の諸の菩薩の所說を、若し能く解する者は大に功德を得ん。何を以ての故に、是の諸の菩薩の、乃至其名字を聞くことを得るすら大利益を得。何に況んや其の所說を聞くをや。世尊よ、譬へば人の樹を種うるに、地に依らずして其根莖枝葉を得、其の果實を成ぜんと欲するも、是を得べきこと難きが如し。諸の菩薩の行相も亦是の如く、一切の法に住せずして、現に生死に住し、諸佛の世界に在り、中に於て自ら恣ままに樂んで智慧の法を說くに、誰か是の大智慧を以て遊戲して自ら恣ままに樂んで法を說くを聞いて、而も阿耨多羅三藐三菩提の意を發せざる者あらんや」と。爾の時會中に(三三)普華菩薩あり、舍利弗に語るらく、「佛の說き給はく、耆年は諸の弟子の中に於て智慧第一なりと、今耆年は諸法の法性に於て得ざるや。何を以てか大智慧を以

【三一】迦羅頻伽鳥の殊勝を以つて菩薩のそれに譬ふ。
【三二】明綱經の所說。
【三三】普華菩薩と舍利弗との問答。

て自ら恣ままに樂んで法を說かざるや。」舍利弗言く、「諸佛の弟子は、其の境界の如く、則ち能く說くと有らん。」普華菩薩復問ふ、「法性に境界ありや不や」と。舍利弗言く、「無し。」「若し法性に境界なければ、云何が耆年は其境界の如く、則ち能く說くと有らんと言ふや。」舍利弗言く、「所得の法に隨つて說くなり。」普華復問ふ、「耆年は無量の相の法相を以て證と爲すや。」舍利弗言く、「爾なり。」普華言く、「今云何が所得に隨つて說くと言ふや、所得の法性は無量なるが如く、說も亦應に無量なるべし、法性は無量にして量相に非ず。」舍利弗、普華に謂げて言く、「法性は得相に非ず。」普華言く、「若し法性は得相に非ずんば、汝は法性を離れて解脫を得るや不や。」舍利弗言く。「不なり、何となれば法性は不壞相なればなり。」普華言く、「汝が得る所の聖智も亦法性の如きや。」舍利弗言く、「我は法を聞かんと欲す、說く時には非ざるなり。」普華言く、「一切法は定んで法性の中に在り、聞者、說者ありや不や。」舍利弗言く、「無し。」普華言く、「汝は何を以てか我は法を聞かんと欲す、說く時に非ずと言ふや。」舍利弗言く、「佛說き給はく、二人は福を得ると無量なり、一心に說く者は一心に聽く者なり」と。普華言く、「汝は滅盡定の中に入つて、能く法を聽くや不や。」舍利弗言く、「善男子よ、滅盡定の中には、法を聽くと無きなり。」普華言く、「法性は常に滅にして、法を聽くと無し、何となれば諸法は常滅の相なればなり。」舍利弗言く、「汝は能く定を起たずして說法するや不や。」普華言く、「法あると無し、定相に非ざる者なり。」舍利弗言く、「若し爾らば一切の凡夫は皆是れ禪定

なりや。」普華言く、「爾なり。一切の凡夫は皆是れ禪定なり。」舍利弗言く、「何等の禪定を以ての故に一切の凡夫は皆是なるや。」普華言く、「法性三昧を壞せざるを以ての故に、一切の凡夫は皆是れ禪定なり。」舍利弗言く、「若し爾らば凡夫と聖人と差別あること無し。」普華言く、「我も亦凡夫と聖人と差別あらしむることを欲せず。何となれば諸の聖人は滅法あること無く、凡夫も亦生法なし。是の二は皆法性の等しき相を出でず。」舍利弗言く、「善男子よ、何等か是れ法性の等相なるや。」答へて言く、「耆年の得道する時に知見する所の者是なり。」又問ふ、「聖法を生ずるや不や、凡夫の法を滅するや否や、聖法を得るや不や、凡夫人の法を見知するや不や、耆年は何の知見を以ての故に、聖道を得るや。」舍利弗言く、「凡夫人も比丘の如く解脱を得、比丘の如く無餘涅槃に入る。是の如く如は一如にして如に別なし。」普華言く、「舍利弗よ、是を法性の相如、不壞如、用是如と名く。當に知るべし、一切法は皆如なることを。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、譬へば大火聚の物として燒かざると無きが如し。是の諸の上人の所說も亦是の如く、一切法は皆法性に入る。」又毘摩羅詰經中に說くが如し、〔二四〕舍利弗等の諸の聲聞に皆自ら說いて、「我は彼に詣り疾を問ふに堪任せず」と言ひ、各各自ら「昔毘摩羅詰の爲に呵せらる」と說けり。是の如く處處の經中に、菩薩の智慧は聲聞辟支佛に勝ると說く。

問うて曰く、〔二五〕何の因緣あるが故に菩薩の智慧は聲聞辟支佛に勝るや。答へて曰く、〔二六〕一本生

【二四】舍利弗等維摩の疾を問ふを辭す。
【二五】第二十一問、菩薩の智慧の二乘に勝る理由如何。
【二六】本生經の所說。

經の中に說くが如くんば、菩薩の智慧は無量阿僧祇劫より已來、衆智を合集せり。無量劫の中に於て、苦として行ぜざる無く、難として爲さざる無く、法を求むるが爲の故に、火に赴き、巖より投じ、剝皮の苦を受け、骨を出だして筆と爲し、血を以て墨と爲し、皮を以て紙と爲して經法を書寫す。是の如く、法の爲の故に無量の苦を受く。智慧を以ての故に、世世に其師に供養し、之を視ると佛の如く、一切所有の經書は悉く皆讀誦し解說し、無量阿僧祇劫に於て、常に思惟し籌量して、諸法の好醜・深淺・善不善・漏無漏・常不常・有無等を尋ね求めて、思惟し分別して問難す。智慧の爲の故に、諸佛及び菩薩聲聞を供養し、法を聽き、問難し、信受し、正しく憶念し、法の如く行ず、是の如く智慧の因緣を具足するが故に、云何が阿羅漢辟支

【三七】 聞持陀羅尼の義解。

佛に勝らざらんや。復次に菩薩の智慧は、五波羅蜜〔を以て〕佐助し莊嚴し、方便力あり、一切衆生に於て、慈悲心あるが故に、邪見の爲に妨げられず、十地の中に住するが故に、智慧勢力深大に、大因の故に聲聞辟支佛に勝り、大因を以ての故に。小なる者は自ら壞す。阿羅漢辟支佛には是の事なし。是の故に聲聞辟支佛の智慧に勝らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべしと言ふなり。

經 諸の陀羅尼門、諸の三昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

論 陀羅尼とは、（三七）讃菩薩品の中に說くが如し。門とは、陀羅尼を得る方便の諸法是れなり。三三

味の解脱門と名くるが如し。何者か是れ方便なる。若し人、所聞皆持つことを得んと欲せば、應當に一心に憶念して念をして增長せしめ、先づ當に作意し、相似の事に於て、心を繫けて見ざる所の事を知らしむべし。周利槃陀迦の如き、心を繫けて革屣を拭き、物の中に禪定を憶して、心の垢法をして除かしむ。是の如く、初め陀羅尼を聞持することを學するに、三たび聞いて能く得、心根轉た利なれば、再び聞いて能く得、或者は一たび聞いて能く得、得て忘れず。是を陀羅尼を聞持する初の方便と爲す。或時は菩薩は、禪定の中に入つて、不忘解脱を得、不忘解脱力の故に、一切の語言說法を、乃ち一句一字も皆能く忘れざるに至る、是を第二の方便と爲す。或時は神呪力の故に、陀羅尼を聞持することを得、或時は先世の行業の因緣を以て、生を受けて聞く所皆持ちて忘れず、是の如き等を陀羅尼門を聞持すと名く。復次に（三八）菩薩は一切の音聲語言を聞いて本末を分別し、其の實相を觀じ、音聲語言の念念に生滅することを知る。音聲已に滅して、而も衆生は憶して想を取り、是の已に滅せる語を念じて、是の念を作して言く、「是の人は我を罵れり」と。而して瞋恚を生ず。稱讚もまた是の如し。是の菩薩は能く是の如く衆生を觀じ、復百千劫罵詈すと雖も、瞋心を生ぜず、若し百千劫稱讚すとも亦歡喜せず、音聲の生滅の響相の如きを知り、又鼓聲の作者あること無く、若し作者なければ是れ住處なく、畢竟空なるが故に、但愚夫の耳を誑はすが如きを「知る」。是を音聲陀羅尼に入ると名く。

【三八】入音聲陀羅尼の義解。

復次に陀羅尼あり、〔三九〕是の四十二字を以て、一切の語言名字を攝す。何者か是れ四十二字なる。〔四〇〕阿・羅・波・遮・那等にして、〔四一〕阿提は、秦に初と言ひ、〔四二〕阿㝹波奈は、秦に不生と言ふ。陀羅尼を行ずる菩薩は、是の阿字を聞いて、即時に一切法の初不生に入る。是の如き等の字字は、所聞に隨つて、皆一切諸法の實相の中に入る。是を字入門陀羅尼と名く。摩訶衍品の中に諸字門を說くが如し。

復次に、菩薩は是の一切三世無礙明等の諸の三昧を得、一一の三昧の中に於て、無量阿僧祇の陀羅尼を得、是の如き等を和合して、名けて五百陀羅尼門と爲す。是を菩薩の善法功德藏と爲し、是の如きを名けて陀羅尼門と爲す。諸の三昧門とは、三昧に二種あり。聲聞法の中の三昧と、摩訶衍法の中の三昧となり。聲聞法の中の三昧とは所謂三三昧なり。復次に、三三昧とは〔四三〕空空三昧、〔四四〕無相無相三昧、〔四五〕無作無作三昧なり。復三三昧あり。有覺有觀、無覺有觀、無覺無觀なり。復五支三昧、五智三昧等あり、是を諸三昧と名く。復次に、一切の禪定は亦は定と名け、亦は三昧と名く。四禪は亦は禪と名け、亦は定と名け、

〔三九〕字入門陀羅尼の義解。

〔四〇〕阿(a)羅(ra)波(pa)遮(ca)那(na)

〔四一〕阿提(Ādi)

〔四二〕阿㝹波奈(Anutpab)

〔四三〕空空三昧とは、阿羅漢の先づ無漏智を以つて、諸法の空無我を觀ずるを空三昧と名け、更に有漏智を以て、前の空智を觀じて空相となし、之を厭捨するをいふ。

〔四四〕無相無相三昧とは、先づ無漏智を以て涅槃の滅諦妙離を觀ずるを無相三昧と名け、更に有漏智を以て、此智を滅盡せる非擇滅非擇滅無爲（倶舍論第一卷擇滅非擇滅の解を見よ）の靜相を觀じて、前の無相を厭捨するをいふ。

〔四五〕無作無作三昧とは、如上の苦・集・道三諦の苦・空・無常等の相を觀じ、更に之を厭捨するをいふ。

亦は三昧と名け、四禪を除いて、諸餘の定は亦は定と名け、亦は三昧と名け、名けて禪と爲さず。十地の中の定に名けて三昧と爲す。有人の言く、「欲界地にも亦三昧あり。何となれば欲界の中に二十二道品あるが故に三昧あるを知る」と。若し三昧なければ、是の深妙の功德を得べからず。

復次に千問の中にも亦是の問あり。「所謂四聖種は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる」と、答へて曰く、「一切は當に四聖種を分別すべし。或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。四念處、四正勤、四如意足も亦是の如し。是の義を以ての故に、當に欲界に三昧あるを知るべし、若し散亂心ならば、云何が此の上妙の法を得ん。是を以ての故に、是三昧は十一地の中に在り。是の如き等の諸の三昧は、阿毗曇の中に廣く分別せり。摩訶衍の三昧とは〔四六〕首楞嚴三昧、乃至〔四七〕虛空際無所著解脫三昧なり。又見一切佛三昧、乃至一切如來解脫修觀師子頻呻等の如し。無量阿僧祇の菩薩の三昧あり。有る三昧を無量淨と名くるが如し。菩薩は、是の三昧を得て、能く一切清淨の身を示現す。三昧あり、威相と名く。菩薩は是の三昧を得て、能く日月の威德を奪ふ。三昧あり、炎山と名く。菩薩は、是の三昧を得て、諸の釋梵の威德を奪ふ。三昧あり、出塵と名く。菩薩は是の三昧を得て、一切の大衆の三毒を滅す。三昧あり、無礙光と名く。菩薩は是の三昧を得て、能く一切の佛國を照らす。三昧あり、不忘一切法と名く。菩薩は是の三昧を得て、一切諸

【四六】Śūraṅgama nāma samādhi

【四七】Ākāśasaṅgavimuktiniru-palepo nāma samādhi

佛の所說の法を皆能く憶持し、復他人の爲めに佛語を講說す。三昧あり、聲如雷音と名く。菩薩は是の三昧を得て、能く梵聲を以て十方の佛國に滿つ。三昧あり、能娛樂一切衆生と名く。菩薩は是の三昧を得て、能く一切をして深心に歡喜せしむ。三昧あり、喜見無厭と名く。菩薩、是の三昧を得て、一切衆生は見聞喜樂して厭足あると無し。三昧あり、功德報不可思議一緣中樂と名く。菩薩は是の三昧を得て、一切の神通を成就す。三昧あり、知一切音聲語言と名く、菩薩は是の三昧を得て、能く一切の音聲語言を說き、一字の中に於て一切字を說き、一切字の中に於て一字を說く。三昧あり、集一切福德業果報生と名く。菩薩は是の三昧を得て、常に默然として禪定に入り、而して能く一切衆生をして佛法を聞かしめ、衆の聲聞辟支佛に六波羅蜜の聲を聞かしむ。而も是の菩薩は實に一言も無し。三昧あり、出高一切陀羅尼王と名く。菩薩は是の三昧を得て、無量無邊の諸の陀羅尼に入ることを得。三昧あり、一切樂說と名く。菩薩は是の三昧を得て、一切字、一切音聲語言、譬喩因緣を樂說す。是の如き等の無量の力勢三昧あり。

問うて曰く、〔四八〕是の三昧は卽ち是れ三昧門なりや不や。答へて曰く、三昧は卽ち此れ三昧門なり。

問うて曰く、〔四九〕若し爾らば何を以てか、但三昧を說かずして、而も復た三昧門を說くや。答へて曰く、諸の三昧は無量無數なること、虛空の無邊なるが如し。菩薩は云何が盡く得んや。菩薩是を聞けば

〔四八〕第二二問、三昧は所謂三昧門なりや如何。

〔四九〕第二三問、三昧を說かずして、三昧門を說く理由如何。

心則ち退沒せん。是の故に佛は三昧門を說いて一門の中に無量の三昧を攝入したまへり。衣の一角を牽けば、衣を擧げて皆得るが如く、亦蜜蜂の王を得れば、餘の蜂を盡く攝するが如し。復次に、展轉して門を爲す。持戒清淨にして、一心に精進し、初夜後夜に勤修し、思惟して五欲の樂を離れ、心を一處に繫け、是の方便を行じて、是の三昧を得るが如し。是を三昧門と名く。

復次に、欲界繫三昧は、是れ未到地三昧門なり。未到地三昧は是れ初禪の門なり。初禪及び二禪の邊地三昧は是れ二禪の三昧門、乃至非有想非無想處三昧も亦是の如し。煖法定は是れ頂法の三昧門なり。頂法は是れ忍法の三昧門なり。忍法は是れ世間第一法の三昧門なり。世間第一法は是れ苦法忍の三昧門なり。苦法忍、乃至金剛の三昧門は、略して說くに一切の三昧に三相あり。入・住・出の相是なり。出相入相は名けて門と爲す。住相は是れ三昧の體なり。是の如き等の法は、是れ聲聞法の中の三昧門なり。摩訶衍法の中の三昧門は、禪波羅蜜の義の中に、諸の三昧を分別して廣く說くが如し。

復次に、尸羅波羅蜜は是れ三昧門なり。何となれば三支は是れ佛道なればなり。所謂戒支、定支、慧支なり。清淨戒支は是れ定支の門にして、能く是の定を生じ、定支は能く慧支を生じ、是の三支は能く煩惱を斷じ、能く涅槃を與ふ。是の故に尸羅波羅蜜及び智慧三昧に近門なり。餘の三波羅蜜〔多〕は、是れ門の義ありと雖も遠門と名く。布施の因緣の如きは福德を得、福德の故に所願皆な得。所願あるが故に心柔軟に、慈悲心あるが故に罪を畏れ、衆生を念ずることを知るが如し。世間の空、無常を

觀ずるが故に、心を攝し忍辱を行ず。忍辱も亦是れ三昧門なり。精進は五欲の中に於て心を攝し、五蓋を除き、心を攝して亂さず、心去れば則ち攝して馳散せしめず、是れ三昧門なり。復次に、初地、二地の三昧門も、是の如く展轉して、乃ち九地に至る、是れ十地の三昧門なり。十地は是れ無量の諸佛の三昧門なり。是の如き等を名けて、諸の三昧門と爲す。

問うて曰く、(五〇)陀羅尼門と三昧門とは、同と爲すや異と爲すや。若し同ならば、何を以てか重ねて説くや。若し異ならば何の義ありや。答へて曰く、先に已に三昧門と陀羅尼門との異を説けり。今當に更に説くべし。三昧は但是れ心相應の法にして、陀羅尼は亦は是れ心相應、亦は是れ心不相應なり。

問うて曰く、(五一)云何が陀羅尼は、是れ心不相應なりと知るや。答へて曰く、人の聞持陀羅尼を得るが如きは、心瞋恚すと雖も亦失せず、常に人に隨つて行く、影の形に隨ふが如し。是の三昧を修行し習ふこと久うして、後能く陀羅尼を成ず。衆生の久しく習つて、便ち其の性を成せんと欲するが如し。是の諸の三昧は、諸法實相の智慧と共に、能く陀羅尼を生ず。坏瓶の火に燒かるるを得て、熟すれば能く水を持して失せず、亦能く人をして河を渡るを得せしむるが如く、禪定ありて智慧なきは亦坏瓶の如し。若し實相の智慧を得ば、坏瓶の火に燒かるるを得て成熟するが如く、能く菩薩は二世の無量の功德を持す。菩薩は亦之に因り、度つて佛に至ることを得。是の

【五〇】第二四問、陀羅尼門と三昧門との異同如何。

【五一】第二五問、陀羅尼門を心不相應とする理由如何。

如く、三昧と陀羅尼とは、種種の差別あり。

問うて曰く、【五三】聲聞法の中には、何を以てか是の陀羅尼の名なく、但大乘の中にのみ有るや。答へて曰く、小法の中には大なし、故問ふべからず。大法の中に小なる者なければ則ち問ふべし。小家に金銀なきことを問ふべからざるが如し。復次に、聲聞は大に厭患に、諸の功德を集めず、但智慧を以て老病死の苦を脱せんことを求む。是の故に聲聞の人は、陀羅尼を用ゐざれども、諸の功德を持す。譬へば人の渇するに、一掬の水を得れば則ち足り、瓶器もて水を持つを須ゐず。若し大衆の人民と共にするは、則ち瓶甕もて、水を持つことを須ふるが如し。菩薩は一切衆生の爲にするが故に、陀羅尼を須ゐて諸の功德を持す。

復次に、聲聞法の中には、多く諸法の生滅無常の相を說くが故に。諸の論議師の言く、「諸法無常ならば、若し無常の相は則ち陀羅尼を須ゐず。何となれば、諸法無常相ならば、則ち所持なし。唯過去の行業因緣を失せず、未來の果報の如きは、無なりと雖も必ず生ず。過去の行因緣も亦是の如し」と。摩訶衍法に於ては、生滅の相も不實なり、不生不滅相もまた不實なり。諸觀諸相を皆滅する是を實と爲す。若し過去法を持するは則ち咎なし。過去の善法・善根・諸の功德を持するを以ての故に陀羅尼を須ふ。陀羅尼は世世常に隨ふ。菩薩の諸の三昧は爾らず、或時は身を易ゆれば則ち失す。是の如く種種に。陀羅尼と諸の三昧とを分別す。是の故に諸の陀羅尼、諸の三

【五三】第二六問、小乘中に陀羅尼の名なき理由如何。

昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべしと言ふ。

【經】一切の聲聞辟支佛を求むる人の布施する時、隨喜心を以て、其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。
一切の聲聞辟支佛を求むる人の戒を持する時、隨喜心を以て、其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。
一切の聲聞辟支佛を求むる人の三昧・智慧・解脫・解脫智見において、隨喜心を以て、其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。

【論】隨喜心とは、隨喜品の中に說くが如し。復次に、隨喜の名は、人あり、功德を作すに、見る者の心も隨つて歡喜し、讚して善哉と言ふ。無常世界の中の癡闇の爲に蔽はるる所に在つて、能く大心を弘め、此の福德を建つ。譬へば種種の妙香を一人は賣り、一人は買ふに、傍人邊に在れば亦香氣を得、香に於て損なく、二主も失なきが如し。是の如く有人施を行じ、人の受くる者あり。有る人邊に在つて隨喜するに、功德を俱に得、二主に失なし。是の如き相を名けて隨喜と爲す。是の故に菩薩は、但隨喜心を以て、二乘を求むるの人の上に過ぐ、何に況んや自ら行ずるをや。

【五三】第二七問、菩薩が隨喜心もて、布施の上に過ぐるや。

問うて曰く、〔五三〕菩薩は云何が能く隨喜心を以て、聲聞辟支佛の人の財を以て、布施する上に過ぐるや、答へて曰く、聲聞辟支佛の是の布施を行ずるに、菩薩は傍に於て之を見、一心に念じて隨喜

し、讃じて善哉と云ふ。此の隨喜の福德を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。そは一切の衆生を度せんが爲の故なり、此を以て無量の佛法を得るが爲の故なり。〔此の〕二種の功德を以て、聲聞辟支佛を求むる人の、行ずる所の布施の上に過ぐ。

復次に、諸法實相の智慧心を以て隨喜するが故に、聲聞辟支佛を求むる人の布施の上に過ぐ。復次に、菩薩は隨喜の心を以て、福德の果報を生じ、回向して三世十方の諸佛に供養して、聲聞辟支佛の布施の上に過ぐ。譬へば、人の少物を以て、國王に獻上するに、報を得ること甚だ多きが如く、又貝を吹くに氣を用ふること甚少なれども、其の音は甚だ大なるが如し。

復次に、菩薩は隨喜の功德を以て、無量の諸餘の功德を和合して、乃ち法滅するに至るも亦盡きず。譬へば、少水を大海の中に置くに、劫を窮めて乃ち盡くるが如く。持戒・三昧・智慧・解脫・解脫智見も亦是の如し。

【吾】第二八問。二乘を求むる人の布施等を過ぎんと欲する菩薩に何の奇特ありや。

問うて曰く、吾諸佛の次第に菩薩あり。菩薩の次第に聲聞辟支佛あり。今菩薩は聲聞辟支佛を求むる人の、布施を過ぎんと欲す等と言ふ、何の奇特ありや。答へて曰く、聲聞辟支佛の布施、持戒等の福德を以て菩薩の功德に比せず、但隨喜心を以て能く勝れたり、何に況んや菩薩自ら功德を行ずるをや。聲聞辟支佛を求むる人は、懃めて身に功德を作して疲勞し、菩薩の默然たる隨喜の智慧力の福德は其の上を過ぐ。譬へば、工匠は但智心を以て指授して去るに、斤斧を執る者は疲れ苦しむ

こと終日なれども、功を計り賞を受くることは、匠者は三倍なるが如く、又征伐に闘者死を冒すに、主將は功を受くるが如し。

問うて曰く、【五五】若し隨喜心の故に、布施持戒に勝らば、何を以てか但菩薩の隨喜勝るとのみを說くや。答へて曰く、凡夫の人は煩惱、心を覆ひ、吾我未だ斷せず、世間の樂に著す。云何が能く聲聞辟支佛を求むる者に勝らんや。聲聞辟支佛の利なるは鈍なるに勝ると雖も、同じく聲聞地に在るが故に說かず。

問うて曰く、【五六】聲聞辟支佛の功德法は甚だ多し、何を以ての故に但六事のみを說くや。答へて曰く、此の六法の中に一切の聲聞辟支佛の法を攝す。若し布施を說けば、已に信聞等の功德を說けり。何となれば先づ聞き已つて能く信じ、信じ已つて布施すればなり。是の施に二種あり。財施と法施となり。持戒に【五七】三種の戒を攝す。律儀戒・禪戒・無漏戒なり。定に諸の禪定・解脫・三昧等を攝す。慧に諸の聞慧・思慧・修慧を攝す。解脫に二種の解脫を攝す。有爲解脫と無爲解脫となり。解脫知見に盡智を攝す。自ら已に漏盡きたりと知りて、三界に於て解脫を得、是の中に於て了了に知見す。是の中、助道法、聖道法は已に說けり。復次に、若し涅槃に向はざる功德は是の中に、上に過ぐと說かず。其の功德薄きを以ての故なり。

【五五】第二九問、若し隨喜心の故に布施持戒に勝らば、但菩薩の隨喜のみを說けるは何故なりや。

【五六】第三〇問、二乘の功德中、但六事のみ說く理由如何。

【五七】三種の戒。

問うて曰く。(五八)勝るとは、力勢相奪ふに名く。今菩薩は聲聞辟支佛と競はず、云何が勝ると言ふや。答へて曰く、勝るとは、但一事の中に於て、智慧・方便・心力を以ての故に、福を得ると多きに名く。譬へば、人は一華の中に於て但色香を取り、蜂は但味を取つて以て蜜と爲すが如し。亦水を取るに器大なれば多く得、器小なれば少しく得るが如し。是の如きの喩は、知る可し、隨喜心は深利にして智慧相應するを以て、聲聞辟支佛の布施等の諸功徳に勝れるなり。是の六法の初の布施は檀波羅蜜の義の中に、聲聞辟支佛の法を分別して說くが如し。持戒は尸羅波羅蜜義品の中に聲聞辟支佛の法を分別して說くが如し。三昧・智慧・解脫・解脫知見は念佛義の中に分別して說くが如し。(五九)

【經】一切の聲聞辟支佛を求むる人の、諸の禪・定・解脫・三昧において、隨喜心を以て其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。

【論】禪定とは四禪、九次第定なり。解脫三昧とは八背捨、三解脫門、慧解脫、共解脫、時解脫、不時解脫、有爲解脫、無爲解脫等。有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧、空三昧、無相三昧、無作三昧、是の如き等の諸の三昧なり。

問うて曰く、(六〇)上の六事の中の三昧は、即ち是れ禪定解脫三昧なり、今何を以てか復說くや。答へ

【五八】第三一問。菩薩は二乘と競はず、何故に勝といふや。

【五九】縮藏にはこれまでを第二十八卷とし、以下を第二十九卷とせり。今は元本に隨つて卷を分つ。

【六〇】第三二問。三昧は六事中に攝せらる、然るを今復これを說く理由如何。

て曰く、二種の三昧あり。一種は慧解脫分、二種は共解脫分なり。前者は慧解脫分にして、禪定に入ると能はず、但未到地の中の三昧のみを說く。此の中には共解脫分を說けり、具には禪定解脫三昧あり。彼は是れ略說、此は則ち廣說、彼は但名のみを說き、此の中には義を分別す。復次に、前の勝三昧とは、有人の謂はく、「一二の三昧は深三昧に非ず、今此の中には具に禪定解脫甚深三昧を說く」と。復次に、禪定解脫三昧に二種あり。一には離欲の時に得、二には求めて得。離欲のとき得とは、前に已に說けり、求めて得とは此の中に說く。復次に、禪定解脫三昧は之を得ること甚だ難く、精懃して之を求むれば乃ち得。菩薩は但隨喜心を持つて、便ち得て其の上に過ぎたり。是を未だ嘗て有らざるの法と爲す。是の故に重ねて說けり。

問うて曰く、〔六〕彼の中の三昧・智慧・解脫・解脫知見も亦得難し、何を以て此を得難しと爲すと言ふや。答へて曰く、先に已に答へたり。是の慧解脫分は甚深の義を盡くさず、共解脫の阿羅漢、三明の阿羅漢は得難きが故に更に說くなり。復次に、是の三昧、智慧・解脫・解脫知見は得難しと雖も、而も廣く周悉ならず直に涅槃と爲す。此の問明かに阿羅漢は現世の禪定の樂を得んと欲す、所謂滅盡定・頂際禪・願智・無諍三昧等、是の如きの事は直に涅槃と爲すに非ず、是の故に更に廣說す。何となれば前者の如きは直に涅槃と爲し、彼の中に解脫と解脫知見の相次を說くが故に、當に一向に直に涅槃と爲すことを知るべければなり。

【六】第三三問、禪定解脫三昧を得難しといふ理由如何。

問うて曰く、【三四】若し禪定解脫三昧は、得難きを以ての故に重ねて說かば、智慧は一切法の中に於て最も難く微妙なり、何を以てか重ねて說かざるや。答へて曰く、上に「聲聞辟支佛の慧を過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と言ふ中に已に說けり。此の禪定は未だ說かざるが故に重ねて禪定智慧を說く。禪定智慧の二法は最妙なり。此の二行あれば所願皆得らる。鳥の兩翼あれば能く至る所あるが如し。解脫は此の二法に從つて得。解脫知見は卽ち是れ智慧なり。布施持戒は是れ身口業なり、麁行にして、得易きが故に重ねて說かず。

問うて曰く、【三五】菩薩は隨喜心を以て、聲聞辟支佛の布施・持戒・智慧に勝ると云ふは當る可し。何となれば布施持戒は眼に見、耳に聞く、智慧も亦是れ聞法なれば、隨喜心を生ずることを得べし。禪定解脫三昧の如きは、是れ見聞すべからざるの法なり。云何が隨喜するや。答へて曰く、菩薩は他心を知るの智を以て而も隨喜す。

問うて曰く、【三六】他心を知るの智法は有漏の知にして、他心智は他の有漏心を知り、無漏の他心を知るの智は他の無漏心を知る。菩薩は未だ成佛せずして、云何が聲聞辟支佛の無漏心を知るや。答へて曰く、汝の聲聞法の中には爾なり、摩訶衍法の中には、菩薩は無生忍法を得て諸の結使を斷じ、世世に常に六神通を失はず、有漏の他心智を以て能く無漏心を知る。何に況んや無漏の他心を知るの智を

【三四】第三四問、得難き智慧を再說せざる理由如何。
【三五】第三五問、見聞すべからざる禪定解脫三昧に如何に隨喜すべきか。
【三六】第三六問、成佛せざる菩薩が如何にして能く二乘の無漏心を知り得べきか。

以てするをや。復有人の言く、「初發意の菩薩は未だ法性生身を得ず、若くは見、若くは聞いて、聲聞辟支佛の布施持戒を比知し、當に阿羅漢の隨喜心を得べし。此の人は諸法の實相を得て、三界を離ると言ふ。我が欲する所は、一切衆生の生老病死を度するにあり。彼は已に脱することを得たり。則ち是れ我が事なり」と。是の如き等の種種の因緣もて隨喜す。是の故に隨喜するに咎なし。

卷の第二十九

初品の中の回向等を釋す。

【經】菩薩摩訶薩、少施、少戒、少忍、少進、少禪、少智を行じ、方便力を以て回向するが故に而も無量無邊の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】問うて曰く、(一)前に已に六波羅蜜を說けり、今何を以てか復た說くや。答へて曰く、上には總相を說けり、此には別相を說かんと欲す。彼には因緣を說けり、此には果報を說くなり。

問うて曰く、(二)爾らず、彼の中には六波羅蜜を說いて、廣く普ねく具足せり、此には少施乃至少智を言ふ。上の六波羅蜜の義に同じからざるに似たり。答へて曰く、然らず。即ち是六波羅蜜なり。何となれば六波羅蜜の義は、心に在つて事の多少に在らず。菩薩の行は、若くは多く、若くは少きも、皆是れ波羅蜜なり。(三)賢劫經に說くが如くんば、八萬四千の諸の波羅蜜は、此の經の中にも亦說けり。世間の檀波羅蜜あり、出世間の檀波羅蜜あり、乃至般若波羅蜜にも、亦世間と出世間ありと。

【一】第一問、重ねて六度を說く理由如何。

【二】第二問、此に說く六度と前に說ける六度とは同じからざるに似たり、果して然るか。

【三】賢劫經—世間の六度と出世間の六度。

問うて曰く、(四)菩薩は何を以ての故に少施するや。答へて曰く、種種の因緣あるが故に少施す。或は菩薩あり。初發意にして福德未だ集まらず、貧なるが故に少施す。或は菩薩あり、施に多少なし、功德は心に在りと聞く。是の故に多物を布施することを求めず、但好心のみを求む。或は菩薩あり。是の念を作さく、「若し我多く財物を集むることを求めば、戒を破し善心を失し、心散亂して多く衆生を惱まさん。若し衆生を惱まして、佛に供養したてまつるは、佛の許したまはざる所、「是れ」法を破して財を求むるが故なり。若し凡人に施すに彼に喜び此に與へば、平等の法に非ず。菩薩の法の如きは等心にして一切皆兒子の如し」と。是の故に少施す。

【四】第三問、菩薩の少施する理由如何。

復次に、菩薩に二種あり。(五)一には敗壞の菩薩、二には成就の菩薩なり。

【五】二種の菩薩。

敗壞の菩薩とは、本阿耨多羅三藐三菩提を發せるも、善根に遇はず、五蓋、心を覆ひ、行雜し行轉して身に大富貴を受け、或は國王、或は大鬼神王、龍王等と作り、本身口意の惡業を造つて、清淨ならざるを以ての故に、諸佛の前、天上、人中の罪なき處に生ずることを得ず、是を名けて敗壞の菩薩と爲す。是の如きの人は、菩薩の心を失ふと雖も、先世の因緣の故に猶は布施を好み、多く衆生を惱まし、劫奪して非法に財を取り、以て福を作すに用ふ。成就の菩薩とは、阿耨多羅三藐三菩提心を失せず、衆生を悲愍す。或は在家にして五戒を受くる者あり、出家にして戒を受くる者あり。在家の菩薩は行業を成就すと雖も、先世の因緣あつて貧窮なり。佛法を聞くに、二種の

施あり。法施と財施なり。出家の人は多く法施すべく、在家の者は多く財施すべし。我今先世の因縁を以ての故に富家に生ぜず、敗せる菩薩の輩の罪を作して、布施するの心を見て喜樂せず、(五)佛は多く財の布施を讃じたまはず、但心の清淨なる施のみを美としたまふを聞く。是を以ての故に所有の物に隨つて施す。又出家の菩薩は、戒を守護するが故に、財物を畜へず、又自ら戒の功德は布施に勝れたりと思惟す。是の因縁を以ての故に所有に隨つて施す。

復次に、菩薩は佛法の中の本生の因縁を聞くに、少施して果報を得ると多し。(六)薄拘羅阿羅漢の如きは、一の呵梨勒菓藥を以て布施し、九十一劫惡道に墮せずして、天人の福樂を受け、身に常に痛なく、末後の身に阿羅漢道を得たり。又沙門(七)二十億耳の如きは、鞞婆尸佛の法の中に於て一の房舍を作りて、比丘僧に給し、一の羊皮を布き、僧をして上を蹈ましむ。是の因縁を以ての故に九十一劫中、足地を蹈まず、人天中の無量の福樂を受け、末後の身に大長者の家に生れ、身を受くると端正に、足下に毛を生じて長さ二寸、色は青瑠璃の如くして右に旋れり。初め生れし時、父は二十億に兩金を與ふ。後世の五欲を厭ひて出家し得道せり。佛は精進の比丘の第一なりと說きたまへり。又(八)須漫耳比丘の如きは先世に鞞婆尸佛の塔を見て、耳上の須漫華を見て布施す。是の因縁を以ての故に、九十一劫の中に常

【六】薄拘羅(Vakkula)比丘、呵梨勒(Haritaki)菓の藥を施せる因縁。

【七】二十億耳(Sroṇakoṭiviṃśa)比丘、房舍を施し、羊皮を布ける因縁。

【八】須漫耳(Sumanākarṇa?)比丘、鞞婆尸佛塔に須曼(Sumanā)華を施し、九十一劫人天に生ぜし因縁。

に惡道に墮せず、天上、人中の樂を受け、末後の身生るる時、須漫耳に在り、香一室に滿つるが故に、字けて須漫耳と爲す。後世を厭ひ、出家して阿羅漢道を得たり。菩薩は是の如き等の本生の因緣あり、少施して大報を得。便ち所有の多少に隨つて布施したまへり。

復次に、菩薩は亦一定して常に少物を布施せず、所有に隨つて多ければ則ち多く施し、少ければ則ち少しく施す。復次に、佛は般若波羅蜜「多」の功德の、大なることを讃せんと欲するが故に、少施して大果を得、功德無量なりと言ふ。

問うて曰く、（九）薄拘羅阿羅漢等の如きも、亦少施して大報を得、何ぞ般若波羅蜜「多」を用ゐんや。答へて曰く、薄拘羅等は果報を得と雖も、劫數に限量あつて小道を得、涅槃に入れり。菩薩は般若波羅蜜「多」の方便を以て回向するが故に、少施するも福德は、無量無邊阿僧祇劫なり。

【九】第四問、少施して大報を得たるもの多し、何ぞ般若波羅蜜多を用ゐんや。

【一〇】第五問、何をか少施を以て無量無邊の功德を得るといふや。

問うて曰く、（一〇）何等か是れ方便回向して、少布施を以て、無量無邊の功德を得るや。答へて曰く、少布施なりと雖も、皆阿耨多羅三藐三菩提に回向す。菩薩は是の念を作さく、「我は是の福德の因緣を以て、人天中の王及び世間の樂を求めず、但阿耨多羅三藐三菩提のみを求む」と。阿耨多羅三藐三菩提の如きは、無量無邊なれば、是の福德も亦無量無邊なり。又是の福德を以て、一切衆生を度せんが爲にす。衆生の如きは、無量無邊なるが故に、是の福德も亦無量無邊なり。復次に、是の福德は大

慈悲を用ふ。大慈悲は無量無邊なるが故に、是の福德も亦無量無邊なり。復次に、菩薩の福德は諸法實相に和合するが故に三分清淨なり。［そは］受者、與者、財物は不可得なるが故なり。般若波羅蜜［多］の如きは、初め舍利弗の爲に菩薩の布施を說く。時に與者、受者、財物は不可得なるが故に般若波羅蜜［多］を具足し、是の實相の智慧を用つて布施するが故に無量無邊の福德を得。復次に、菩薩は皆所有の福德を如相、法性相、實際相と念ずるが故に、如、法性、實際は無量無邊なるを以ての故に、是の福德も亦無量無邊なり。

問うて曰く、〔二〕菩薩摩訶薩は諸法實相を觀じ、如、法性、實際を知らば是れ無爲滅相なり。云何が更に心を生じて福德を作すや。答へて曰く、菩薩は久しく大悲心を習ふが故に、大悲心その時に發起し、衆生は是の諸法實相を知らず、當に是の實相を得せしむべし。精進波羅蜜の力を以ての故に、還つて福德業の因緣を行じ、精進波羅蜜を以て大悲心を助く。譬へば、火の滅せんと欲するに、風と薪とに遇ふことを得れば、火則ち然ゆること熾なるが如し。復次に、本願を念ずるが故に、亦十方の佛來り語つて言く、「汝初發心の時を念ぜよ、又汝始めて是の一法門を得るも、是の如き無量の法門あり、汝未だ皆得ず、當に還た諸の功德を集むべし」と。漸備經の七地の中に說くが如し。

問うて曰く、〔三〕施の多少は爾るべし。戒の中に五戒、一日戒、十戒あり、少多亦知る可し。色法は

〔二〕第六問、菩薩は無爲滅相なり、更に心を生じて福德を作す必要なきにあらずや。
〔三〕第七問、布施持戒以外の四波羅蜜多は如何にして知るべきか。

分別することを得べきが故なり。餘の四波羅蜜は、云何にしてか其の少多を知るや。答へて曰く、是れ皆知るべし。〔一三〕忍の如きは二種あり。一には身忍。二には心忍なり。身忍とは、身口は動かずと雖も心は起らざらしむると能はず、少忍の故に心を制すると能はず。心忍とは、身心倶に忍じて猶ほ枯木の如きなり。復次に、少忍とは、若し人撾罵すれども還た報せず。大忍とは、罵者、忍者を忍法、分別せず。復次に、衆生の中の忍は是を少忍と為し、法忍は是れ大忍と為す。是の如く少忍を分別す。

〔一四〕少進とは二あり。身進と心進なり。身進は少と為し、心進は大と為す。外進は少と為し、内進は大と為す。身口進は少と為し、意進は大と為す。佛の說き給ふが如し。意業の大力の故に、大仙人の瞋る時の如きは、能く大國をして磨滅せしむ。復次に、身口に五逆罪を作せる大惡人は、一劫、阿鼻泥犁に在り、意業の力大なれば、非有想非無想に生ずることを得て、壽八萬大劫なり。亦十方の佛國に在つて、壽命無量なり。是の故に身口の精進を少と為し、意の精進を大と為すことを知る。復次に經に說くが如きは、若し身口意業寂滅不動なる、是を大精進と為し、動けば少精進と為す。是の如き等を名けて少進と為す。

〔一五〕少禪とは、欲界定の未到地にして、欲を離れざるが故に名けて少と為す。二禪より觀ずれば、初禪は則ち少なり。乃至滅盡定「も亦是の如し」。有漏を少と為し、無漏を大と為す。阿鞞拔致に於て未だ無生忍法を得ざる禪は是を少と為し、阿鞞拔致を得、無生法忍を得る禪は是を大と為す。乃至道

〔一三〕二種の忍。
〔一四〕二種の少進。
〔一五〕二種の禪―少禪と大禪。

場に坐し、十六解脱相應の定は少と爲し、金剛三昧は大と爲す。復次に、若し菩薩一切法を觀ずるに、常に定んで散亂なき者は、依止なく分別なし、是を大と爲し、餘は皆少と爲す。

（二六）慧に二種あり。一には世間慧、二には出世間慧なり。世間慧を少と爲し、出世間慧を大と爲す。淨慧、雜慧、相慧、無相慧、分別慧、不分別慧、隨法慧、破法慧、爲生死慧、爲涅槃慧、爲自益慧、爲益一切衆生慧等も亦是の如し。復次に、聞慧を少と爲し、思慧を大と爲す。思慧は少にして、修慧は大なり。有漏慧を少と爲し、無漏慧を大と爲す。阿耨多羅三藐三菩提心を發す慧を少と爲し、六度を修行する慧を大と爲す。修慧を少と爲し、方便慧を大と爲す。諸地の中に方便展轉して、大小、乃至十地あり。是の如き等は多少を分別す。佛は菩薩の奇特を、少事の中に於て、無量無邊の功德を得と歎じ給ふ、豈況んや大事をや。餘人は多くの財を捨て、身口に苦を懃めて、「而も」福を得ると少なり。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧も亦是の如く、菩薩の少にして報大なるに及ばざるとは先に說くが如し。譬へば、口氣もて聲を出だすに聲は、則ち遠からず、聲を角中に入るれば、聲則ち能く遠し。是の如く布施等の因少し。餘人の行は是の得る所の福報則ち少し。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜「多」の方便力を以て回向するが故に、無量無邊の福を得、是の故に「少施・少戒・少忍・少進・少禪・少智を行せんと欲せば」と說くなり。

【二六】二種の慧。

【經】菩薩摩訶薩、檀波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、毘梨耶波羅蜜〔多〕、禪波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】諸の波羅蜜の義は先に說くが如し。

問うて曰く、（一七）五波羅蜜の相卽ち是れ般若波羅蜜〔多〕の相ならば、般若波羅蜜〔多〕の相に若かず、五名を差別すべからず、若し異ならば、何を以てか檀波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべしと言ふや。答へて曰く、亦は同にして、亦は異なり。異なりとは、般若波羅蜜は、諸法の實相を觀ずるが故に、一切の法を受けず著せざるに名け、（一八）檀は、內外一切の所有を捨て、般若波羅蜜の心を以て施を行ずるに名く。是の時檀を波羅蜜〔多〕と名くることを得、復次に、五波羅蜜〔多〕は諸の功德を植ゑ、般若波羅蜜〔多〕は其の著心邪見を除く。一人は穀を種ゑ、一人は藜穢を耘除して、果實を增長するを得せしむるが如し。餘の四波羅蜜〔多〕を成就するも亦是の如し。

問うて曰く、（一九）今云何が檀波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべきや。答へて曰く、（二〇）檀に二種あり。一には淨、二には不淨なり。不淨とは、憍慢の故に施し、是の念を作さく、「我に劣る者すら尙ほ與ふ、我豈能はざらんや」と。嫉妬の故に施し、是の念を作さく、「我が怨憎〔す

【一七】第八問、五度の特性は智度の特性ならば、五度の名を差別するは無用に非ずや。

【一八】檀とは檀那（Dāna＝布施）の略語。

【一九】第九問、布施波羅蜜多を行ぜんと欲するに、智慧波羅蜜多を學せざる可らざる理由如何。

【二〇】二種の布施。

る人は施すが故に、名を得て是の如く我に勝れり、今當に廣く施さば、要必ず彼に勝るべし」と。報を貪るが故に施し、是の念を作さく、「我少物を施して、千萬倍の報を得ん」と。是の故に布施す。名の爲の故に施し、是の念を作さく。「我今好施せば、人の爲に信せられ、人數の中に好まれん」と。人を攝せんが爲の故に施し、是の念を作さく。「我今之を施さば、人心我に歸せん」と。是の如き等の種種の〔二〕雜結もて施を行ずる是を不淨と名く。淨とは是の雜事なく、但淨心を以て因緣果報を信じ、受者を敬愍して今の利を求めず。但後世の功德の爲にす。復た淨施あり。後世の利益を求めず、但修心の助を以て涅槃を求む。復た淨施あり。大悲心を生じて、衆生の爲にするが故に、自ら利して早く涅槃を得ることを求めず、但阿耨多羅三藐三菩提の爲にす、是を淨施と名く。般若波羅蜜〔多〕の心を以ての故に能く是の如く淨施す。是の故に「檀波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と說く。復次に般若波羅蜜〔多〕の力の故に、諸法に著する心を捨つ。何に況んや我心を而も捨てざらんや。吾我の心を捨つるが故に、身及び妻子を視ると、草土の如くにして、戀惜する所なく、盡く以て布施す。是の故に「檀波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と說く。餘の波羅蜜〔多〕も亦是の如し。般若波羅蜜〔多〕の心を以て助成するが故なり。

復次に〔三〕諸餘の波羅蜜〔多〕は、般若波羅蜜〔多〕を得ざれば、波羅蜜〔多〕の名字を得ず、亦牢固な

【二】雜結とは、種種雜糅せる煩惱の義。

【三】若し智度なければ、他は皆度と名くることを得ず。

【四】輪寶を般若に譬ふ。

らず。後品の中に說くが如し。五波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、波羅蜜「多」の名字なし。又(二三)轉輪聖王の輪寶なければ、轉輪聖王と名けず、餘寶を以て名と爲さざるが如く、亦(二四)群盲は導くこと無ければ、至る所あると能はざるが如く、般若波羅蜜「多」も亦是の如し、五波羅蜜「多」を導いて(二五)薩婆若に至らしむ。譬へば、(二六)大軍に健將なければ、其の事を成辦すると能はざるが如く、又人身に餘根を具すと雖も、(二七)若し眼なければ、至る所あると能はざるが如く、又人の(二八)命根なければ、則ち餘根皆滅し、命根あるが故に、餘根の用あるが如く、般若波羅蜜「多」も亦是の如し。五波羅蜜「多」は、般若波羅蜜「多」を得ざれば、則ち増長すると得ず。般若波羅蜜「多」を得るが故に、餘の波羅蜜を増益し具足すると得。是の故に佛は「檀波羅蜜を行せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と言ふ。

【經】菩薩摩訶薩、世世の身體をして、佛と相似ならしめんと欲し、三十二相、八十隨形好を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

【論】問うて曰く、(二九)聲聞經の中には、菩薩は三阿僧祇劫を過ぎて後、百劫の中に三十二相の因緣を修すと說けり、今云何が世世に、佛の身體と相似て、三十二相、八十隨形好ありと說くや。答へて

【二四】群盲の案内者を般若に譬ふ。
【二五】Sarvajña は譯して一切智と言ふ。
【二六】大軍の將帥を般若に譬ふ。
【二七】眼を般若に譬ふ。
【二八】命根を般若に譬ふ。命根とは、有情一期の壽命なり。
【二九】第一〇問、小乘經に於ける菩薩と、大乘經に於けるそれの相好獲得に關する、說明の異なる理由如何。

曰く、迦旃延尼子の阿毘曇鞞婆沙の中に是の如き說あり、三藏の中の所說に非ず。何を以ての故に三十二相は餘人にも亦有り、何ぞ貴しと爲すに足らんや。〔三〇〕難陀の如きは先世の時、一の衆僧を浴せしめ、因に願を作して曰く、「我をして世世に端正淨潔ならしめよ」と。又異世に於て、辟支佛塔に値ひ、飾るに彩畫を以てして、辟支佛の像を莊嚴し、願を作して言く、「我をして世世に色相嚴身ならしめよ」と。是の因緣を以ての故に、世世に身相莊嚴なるとを得て、乃ち後身に至つて出家して沙門と爲るに、衆僧遙に見て其れ是を佛なりと謂ひ、悉く皆起つて迎ふ。難陀は小乘なり、少功德を種うるすら尙此の報を得。豈に況んや菩薩は無量阿僧祇劫の中に於て功德を作立す、世世形體、而も佛に似ざらんや。又〔三一〕彌勒菩薩の如きは、白衣の時、師を婆婆梨と名く、三相あり。一に〔三二〕眉間白毫相、二に〔三三〕舌覆面相、三に〔三四〕陰藏相なり。是の如き等は是れ菩薩に非ずして亦皆相あり。菩薩豈に三阿僧祇の後に乃ち相好を種うべけんや。復次に是の摩訶衍の中に菩薩あり。初發心より乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、初より惡心を生ぜず、世世に報として五通を得、身體は佛に似たり。〔三五〕問うて曰く、菩薩は未だ佛道を得ず、何ぞ身相佛の如くなるとを得るや。答へて曰く、菩薩は衆生を度せんが爲の故に、或は轉輪聖王身と作り、或は帝釋身と作り、或は梵王身と作り、或は聲聞身、

〔三〇〕難陀は一の衆僧を浴せしめて、世々に端正なりき。
〔三一〕彌勒菩薩は白衣の時、師を婆婆梨と名け、三相を具せり。
〔三二〕Ūrṇākeśa
〔三三〕Prabhūtatanujihva
〔三四〕Kośagatavastiguhya
〔三五〕第二十一問、佛道を成ぜざる菩薩にして、如何が身相佛の如くなるを得るか。

辟支佛身、佛身と作る。(三六)首楞嚴經の中に、文殊師利自ら說くが如し。「七十二億にして反つて一緣覺と作つて般涅槃す。又現じて佛と作り、龍種の尊と號せし時、世に未だ佛あるべからずして、而も衆生は佛身を見、歡喜して化を受く」と。

問うて曰く、(三七)菩薩、若し能く佛身と作つて說法し、衆生を度せば、佛と何の差別ありや。答へて曰く、菩薩は大神力ありて十住地に住し、佛法を具足し、而も世間に住して、廣く衆生を度するが故に、涅槃を取らず、亦幻師の如く、自ら身を變化して、人の爲に說法す、眞の佛身に非ず。爾りと雖も、(三八)衆生を度脫するに、量あり限あり、佛の度し給ふ所の者は無量無限なり。菩薩は佛身と作ると雖も、十方世界に遍滿すると能はず、佛身は普ねく能く無量世界に遍滿して、度す可き所の者に皆佛身を現じ給ふ。亦十四日の月の如きは、光明ありと雖も猶ほ十五日に如かず。是の如きの差別あり。或は菩薩あり、無生法忍、法性生身を得、七住地に在つて住し、五神通もて身を變ずると、佛の如くにして衆生を敎化す。或は初發意の菩薩は、六波羅蜜「多」を行じ、行業の因緣を以て、身相佛に似るとを得て衆生を敎化す。

問うて曰く、(三九)三十二相は布施等の果報なり。般若波羅蜜「多」は、無所有なると虛空の如し、云何

【三六】首楞嚴經の所說。
【三七】第一二問、佛身を現じて度衆生の爲に說法する菩薩と佛と何の差別ありや。
【三八】菩薩の利害は有量有限、佛のそれは無量無限。
【三九】第一三問、相好は布施等の善業の果報なり、智度は無所有なること虛空の如し、然るを相好を得んと欲せば、當に智度を學すべしといふは何故なるか。

が相好を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと說くや。答へて曰く、三十二相に二種あり。一には、具足すると佛の如く、二には、具足せざると轉輪聖王、難陀等の如し。般若波羅蜜「多」は布施と和合するが故に、能く相好を具足すると佛の如し。餘人は但布施等を行じて相を具足せず。

問うて曰く、〔四〇〕云何が布施等は三十二相を得るや。答へて曰く、檀越の布施する時の如きは、受者は色力等の五事を得て、身を益するが故に、施者は千足輪相を具す。檀波羅蜜「多」の中に、廣く說くが如し。戒忍等も亦是の如く、各三十二相を具す。何等か是れ三十二相なる、一には足下安立相なり、餘は讚菩薩品の中に說くが如し。

問うて曰く、〔四一〕何の因緣を以てか足安立相を得るや。答へて曰く、佛は世世に一心堅固に戒を持し、亦他をして戒を破らしめたまはず、是の業因緣を以ての故に、是の初相を得給ふ。初相は自ら法の中に於て、能く動ずる者なし。〔四二〕若し轉輪聖王と作れば、自らの國土に於て能く侵す者なく、如法に人民及び出家沙門等を養護す。是の業因緣を以ての故に、千輻輪の相を得。是れ轉法輪の初相なり。若し轉輪聖王と作れば、輪寶を轉ずることを得、殺生の業因緣を離るるが故に、長指の相を得。不與取の業因緣を離るるが故に、足跟滿つるの相を得、四攝法を以て衆生を攝する業因緣の故に、手足縵網の相を得、上妙の衣服・飲食・臥具を以て、尊長を供養する業因緣の故に、手足柔輭の相を得、

【四〇】第一四問、施等の善業もて三十二相を得る理由如何。

【四一】第一五問、足下安立の相（Supratiṣṭhitapāda）を得る理由如何。

【四二】小乘の三十二相の業因緣。

福を修すると轉た增すの業因緣の故に、足趺高き相と、一一の孔に一毛生ずるの相と、毛上に向ふの相とを得。如法に福を爲さしむる和合の因緣、及び速疾に人を誨ふるが故に妙踹の相を得ると〔四一〕伊泥延鹿王の如し。如法に淨物を布施して、受者を惱さざるが故に、平立して手膝を過ぐるの相と、方身の相を得ると、尼拘盧陀樹の如し。多く慚愧を修し、及び邪婬を斷じ、房舍・衣服・覆蓋の物を以て、布施に用ふるが故に、陰藏の相を得ると馬王の如し。慈三昧を修し、信淨の心多く、及び好色の飲食・衣服・臥具を以て布施するが故に、金色の相と丈光の相とを得。常に好んで義を問ひ、尊ぶ所及び善人に供給するが故に、肌皮細軟の相を得、如法に事を斷じ、自ら專執せず、委しく政を執るを以ての故に、上身師子の如きの相と、腋下滿つるの相と、肩圓かなるの相を得。

【四二】アイネーヤヂヤンガ Aineyajanga

尊長を恭敬し、迎逆侍送するが故に、身直く廣き相を得、布施を具足し充滿するが故に、七處滿つるの相を得。一切を捨施して、遺惜する所なきが故に、方頰車相を得、兩舌を離るるが故に、四十齒「具足」の相と、齒齊しきの相と、齒密なるの相とを得。常に慈を修行し好く思惟するが故に、白牙喩無きの相を得、妄語を離るるが故に、舌廣く薄きの相を得。美食を布施し、受者を惱まさざるが故に、味中最上味の相を得、惡口を離るるが故に、梵聲の相を得。善心好眼を以て衆生を觀るが故に、眼睛紺青の相と、眼睫牛王の如きの相とを得。尊ぶ所を禮敬し、及び自ら戒を持し、戒を以て人に敎ふるが故に、肉髻の相を得、讚歎すべき所の者を讚歎するが故に、眉間白毫の

相を得、是を聲聞法を用ふる三十二相の業因縁と爲す。

摩訶衍の中の三十二相の業因縁とは、

問うて曰く、(四四)十方の諸佛、及び三世の諸法は、皆無相の相なり、今何を以ての故に三十二相を說くや。一相すら尚不實なり。何に況んや三十二をや。答へて曰く、佛法に二諦あり、一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の故に三十二相を說き、第一義諦の故に無相を說く。二種の道あり、一には衆生をして福を修せしむるの道、二には慧道なり。福道の故に三十二相を說き、慧道の故に無相を說く。生身の爲の故に三十二相と說き、法身の爲の故に無相を說く。佛身は三十二相、八十隨形好を以て、自ら法身を莊嚴し、十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法の諸の功德を以て、衆生を莊嚴し給ふ。二種の因緣あり。一には福德の因緣、二には智慧の因緣なり。福德の因緣を以て、衆生を引導せんと欲するが故に、三十二相の身を用ゐ、智慧の因緣を以て、衆生を引導せんと欲するが故に、法身を用ふ。二種の衆生あり。一には諸法の假名を知り、二には名字に著す。名字に著する衆生の爲の故に、無相を說き、諸法の假名を知る衆生の爲の故に、三十二相を說く。

問うて曰く、(四五)是の十力、四無所畏の功德も亦各別相あり、云何が法身は無相なりと說くや。答へて曰く、一切の無漏法は十六行、三三昧に相應するが故に皆無相と名く。佛は衆生をして解せしめん

【四四】第一六問、諸佛も諸法も皆無相の相なり、然るに今三十二相を說けるは何故なるか。

【四五】第一七問、法身無相といふ理由如何。

と欲したまふが故に、種種に分別して說き、一切諸佛の法は、空・無相・無作の印を以ての故に、皆如法の性實際に入ると說き、而も色を見て歡喜して、道心を發す者の爲に、三十二相の莊嚴身を現じたまふ。

復次に、一切衆生の中に最勝なることを顯さんが爲の故に、三十二相を現じ、而も無相の法を破らず。

異は菩薩の如きは、初め生れて七日の中に、裹むに白氈を以てし、諸の相師に示すに、相師は古聖の相書を以て之を占ひ、以て王に答へて曰く、「我が讖記の法に、若し人三十二相あれば、在家ならば當に轉輪聖王たるべく、出家せば當に佛と作ることを得べし。唯此の二處にして三處あること無し」と。諸の相師出で已りて、菩薩寢息するに、復た仙人あり、阿私陀と名く。淨飯王に白して言さく、「我は天耳を以て、諸天鬼神の、淨飯王の生せる子は佛の身相ありと說くを聞くが故に、來つて請ひ見るなり」と。王大に歡喜し、「此人は仙聖なるが故に遠より來つて我が子を見んと欲す」と、諸の侍人に勅して、「太子を將ゐて出でよ」といふ。侍人王に答ふらく、「太子は小睡せり」と。是の時に阿私陀の言く、「聖王は常に一切を請じて施すに甘露を以てす、睡るべからざるなり」と。即ち坐より起つて太子の所に詣り、臂上に抱著して上下に之を相し、相し已つて涕零して自ら勝ふること能はざりき。王大に悅ばず、相師に問うて曰く、「何の不祥ありてか涕泣すること是の如くなるや」と。仙人答へて曰く、「假使天より金剛大山を雨ふらすとも、其一毛を

【二〇】諸の相師及び阿私陀仙人悉達太子を相す。

も動かすこと能はず、豈不祥あらんや。太子は必ず當に作佛すべし。我今年已に晩暮なり。當に無色天上に生るべく、佛を見たてまつるを得ず。其の法を聞かざるが故に、自ら悲傷するのみ」と。王言はく、「諸の相師の說は一事を定めず。若し在家ならば當に轉輪聖王と作るべく、若し出家せば當に作佛すべしと說けり」と。阿私陀言く、「諸の相師は世俗を以て比知す。天眼を以て諸聖の相を知るに非ずんば又具足して遍ねく知らず。相に於て總觀すれども、明にして審かなること能はず、是の故に或は「在家ならば當に轉輪聖王と爲るべく、出家せば當に佛と爲るべし」と言ふ。今太子の三十二相は正滿明徹にして甚深淨潔なり、具足して必ず當に作佛すべし、轉輪聖王に非ざるなり。是を以ての故に三十二相は、一切衆生の中に於て最も殊勝と爲すとを知る。無相の法と言ふは、常・淨・樂相、我相、男女生死等の相を破せんが爲の故に是の如く說けり。是の故に佛法は無相の相なりと雖も、而も三十二相を現じて衆生を引導す。佛を第一なりと知りて、淨信を生ぜしめんが故に三十二相を說くも咎なし。

問うて曰く、是れ何を以ての故に三十二相は多からず少からずと說くや。答へて曰く、若くは多と說き、若くは少と說かば俱に難あるべし。復次に、佛身の丈六を若くは少相なりと說かば、則ち周遍せず、莊嚴を具せず。若し三十二相に過ぐるも、則ち復雜亂せん。譬へば人身の其の如きは、復富んで殊勝ありと雖も、重ねて瓔珞を著く可らず。是の故に三十二相は、多からず少からず、正に其の中を

【註】第一八問、三十二相は多からず、少なからずといふ理由如何。

得たり。復次に、若し少けて端嚴ならざれば、則ち八十隨形を留む、好處も過ぐれば則ち雜亂せん。

問うて曰く、【四八】若し八十隨形好を須ゐなば、何ぞ皆名けて相と爲さずして、別に好と爲すや。答へて曰く、相は大にして身を嚴にす。若し大なる者を說けば則ち、已に小を攝す、復次に、相は麤にして好は細なり。衆生の佛を見るは則ち相を見る。好は則ち見難ければなり。又相は餘人と共に得。好は或は共なり、或は共ならず、是の故に相と好とを別に說くなり。

問うて曰く、【四九】佛は畢竟して衆生相、吾我相を斷じて、空法の相を具足し給ふ、何を以ての故に、相を以て莊嚴して、相を取る者の法の如くなるや。答へて曰く、若し佛但妙法のみを以て、其の心身を莊嚴して、相好なくんば、或は度す可き衆生あり。心に輕慢を生じて謂はん、「佛は身相を具せず、一心に樂んで佛法を受くると能はず」と。譬へば不淨器を以て、諸の美食を盛るも、人の喜ばざる所なるが如く、臭ある皮嚢に諸の寶物を盛るに、取る者樂ばざるが如し。是故に佛は三十二相を以て、其身を莊嚴し給ふ。復次に、佛は常に大衆の中に於て、師子吼を作して言はく、「我は衆生の中に於て、一切の功德最も第一なり」と、若し佛の生身、相好を以て莊嚴せずんば、或は人あつて言はん、「身形醜陋なり、何ぞ能く知る所あらん」と。佛の三十二相、八十隨形好を以て其身を莊嚴するすら衆生は猶は信ぜざる有り、何に況んや相好を以て莊嚴せざるをや。

【四八】第一九問、相と好とを別說する理由如何。

【四九】第二〇問、佛は衆生相・吾我相を斷じて空法の相を具足したまふ。何ぞ相を以て莊嚴すべけんや。

復次に、佛法は甚深にして常寂滅の相なるが故に、狂愚の衆生は信せず受けずして謂はん、「身は滅盡して一も取る所なし」と。是の故に佛は廣長舌と、梵音聲と、身放大光とを以て、種種の因緣の爲に、譬喩して上妙の法を說き給ふに、衆生は佛の身相の威德を見、又音聲を聞いて、皆歡喜し信樂す。復次に、莊嚴する物に內外あり、禪定・智慧・諸の功德等は是れ內の莊嚴にして、身相威德・持戒具足は是れ外の莊嚴なり。佛は內外を具足し給ふ。復次に、佛は一切衆生を憐念して、世に出興し給ひ、智慧等の諸の功德を以て、利根の衆生を饒益し、身相の莊嚴を以て、鈍根の衆生を饒益し給ふ。心の莊嚴は涅槃門を開き、身の莊嚴は天人の樂門を開く。身の莊嚴の故に衆生を三福處に置き、心の莊嚴の故に衆生を入れて三解脫門に置く。身の莊嚴の故に衆生を三惡道より拔き、心の莊嚴の故に衆生を三界の獄より拔く。是の如き等の無量の利益因緣あるが故に、相好を以て生身を莊嚴す。

【經】菩薩の家に生れんことを欲し、鳩摩羅伽地を得んと欲し、諸佛を離れざることを得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。

【論】菩薩の家とは、若し衆生の中に於て甚深の大悲心を發せば是を菩薩の家に生ずと爲す。王の家に生ずれば敢て輕んずる者なく、亦飢渴寒熱等を畏れざるが如し。菩薩道の中に入り菩薩の家に生ずるも亦是の如く、佛子なるを以ての故に諸天・龍・鬼神、諸の聖人等敢て輕んずる者なく、益益恭敬を加

ふ。〔又〕惡道・人天の賤處を畏れず、聲聞・辟支佛の人・外道の論師來つて、其心を沮まんとするを畏れず。復次に、菩薩は初發意より一心に願を作さく、「今日より復た諸の惡心に墮せじ、但一切衆生を度脱せんと欲す、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。復次に、菩薩若し能く諸法實相の不生不滅を知れば、無生法忍を得、是より以往常に菩薩道に住せん。佛持心經の中に説きたまふ所の如し。「我錠光佛を見し時、諸法の無生忍を得、初めて六波羅蜜を具足せり。爾より前には都て布施持戒等なし」と。復次に若し菩薩は是の念を作さく、「恆河沙等の如き劫を一日一夜と爲し、是の日夜三十日を用つて月と爲し、十二月を歳と爲し、是の如き歳數百千萬億を過ぎて乃ち一佛あり、是の佛の所に於て、供養し持戒して諸の功德を集め、是の如き恆河沙等の諸佛あり、然る後作佛を受記せられんに、菩薩の心は懈怠せず沒せず厭はず、悉く皆樂んで行せん」と。復次に、菩薩は諸の邪定、五逆の衆生、及び善根を斷せる衆生の中に於て、慈悲を生じて正道に入らしめ恩報を求めず。復次に、菩薩は初發心より已來、諸の煩惱の爲に覆はれ壞せられず。復次に、菩薩は諸法の實相を見ると雖も、諸の觀心に於て亦著を生せず。復次に、菩薩は自然に常に口に實言し、乃ち夢中に至るも亦妄語せず。復次に、菩薩の見る所あるの色は、皆是れ佛色なり、念佛三昧力の故に、色に於て著せざるなり。

復次に、菩薩は一切衆生の生死の苦中に流轉し、一切の樂中に心亦著せざるを見て、但願を作して言く、「我及び衆生は何時か當に度るべし」と。復次に、菩薩は一切の珍寶に於て、心に著を生ぜず、

但三寶のみを樂ふ。復次に、菩薩は常に婬欲を斷じ、乃至念想を生ぜず、況んや實事あらんや。復次に、衆生は眼に菩薩を見れば、卽ち慈三昧を得。復次に、菩薩は能く一切の法を悉く佛法と爲し、聲聞辟支佛の法、凡夫の法、種種の差別あると無からしむ。復次に、菩薩は一切法を分別し、一切法の中に於て亦法相を生ぜず、亦非法相を生ぜず、是の如きの無量の因緣、是を菩薩家に生ずと名く。

問うて曰く、〔五〇〕發心より已來已に菩薩家に生ぜば、今云何ぞ菩薩家に生ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしといふや。答へて曰く、〔五一〕二種の菩薩家あり。有退轉家と不退轉家、名字家と實家、淨家と雜家、有信堅固家と不堅固家なり。不退轉家、乃至信堅固家、是の如き等の家を得んと欲するが爲の故に、「菩薩家に生ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と言ふ。

〔五二〕「鳩摩羅伽地を得んと欲せば」とは、或は菩薩あり、初發心より婬欲を斷じ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、常に菩薩道を行ず。是を鳩摩羅伽地と名く。復次に、或は菩薩あり、願を作さく、「世世に童男として、出家して道を行じ、世間の愛欲を受けじ」と。是を名けて鳩摩羅伽地と爲す。復次に、又王子を鳩摩羅伽と名くるが如し。佛は法王たり、菩薩は法の正位、乃至十地に入るが故に、悉く王子と名け、皆任じて佛と爲す。文殊師利の如きは、十力四無所畏等、悉く佛事を具するが故に、鳩摩羅伽地に住して廣く衆生を度す。復次

【五〇】第二一問、初發心已來、菩薩家に生ぜば、何故に菩薩家に生ぜんと欲せば云云と云ふか。

【五一】二種の菩薩家。

【五二】鳩摩羅伽（Kumāraka）地の義解。

に、又童子の四歳已上を過ぎ、未だ二十に満たざるが如きは、名けて鳩摩羅伽と為す。若し菩薩初めて菩薩家に生ずるは嬰兒の如く、無生法忍乃至十住地を得て、諸の惡事を離るるを名けて、鳩摩羅伽地と為す。是の如き地を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

「常に諸佛を離れざらん」と欲すとは、菩薩は世世、生ずる所に、常に諸佛に値ひたてまつるなり。

問うて曰く、〔二三〕菩薩は當に衆生を化すべし、何を以てか常に佛に値ひたてまつらんと欲するや。答へて曰く、〔二四〕菩薩あり。未だ菩薩位に入らず、未だ阿鞞跋致を得ずして、記莂を受くるが故に、若し諸佛を遠離せば、便ち諸の善根を壞し、煩惱に沒在して、自ら度することを得ず、安んぞ能く人を度せんや。人の船に乘つて、中流にして壞敗せば、他人を度せんと欲して、反つて自ら水に沒するが如く、又少湯を大氷池に投ずるに、少處を消すと雖も、反つて更に氷と成るが如し。菩薩未だ法位に入らず、若し諸佛を遠離せば、少功德にして方便力なきを以て、衆生を化せんと欲するに、少しく利益ありと雖も、反つて更に墜落せん。是の故に新學の菩薩は諸佛を遠離すべからず。

問うて曰く、〔二五〕若し爾らば何を以てか聲聞辟支佛を離れずと說かざるや。聲聞辟支佛も亦能く菩薩を利益せん。答へて曰く、菩薩は大心なり。聲聞辟支佛は涅槃の利益ありと雖も、一切智なきが故

【二三】第二二問、菩薩の常に佛に値ひたてまつらんと欲するは何故なるか。

【二四】未入位の菩薩は、自行滿足せざるが故に、人を濟度すること能はず。

【二五】第二三問、若し然らば、何故に二乘を離れずと說かざるか。

に、菩薩を教導すること能はず。諸佛には一切種智あるが故に、能く菩薩を教導し給ふ。象の泥に沒すれば象に非ずんば出だすこと能はざるが如し。菩薩も亦是の如く、若し非道の中に入れば、唯佛のみ能く救ひ給ふ。大道を同うすればなり。故に、「菩薩は常に諸佛に離れざらんと欲す」と說く。◉復次に、菩薩は是の念を作さく、「我は未だ佛眼を得ざるが故に、盲の如くにして異なること無し、若し佛の爲に引導せられずんば、則ち趣く所なく、錯つて餘道に入らん、設ひ佛法を聞くとも、異處にして行せば、未だ教化の時節、行法の多少を知らず」と。復次に、菩薩は佛を見たてまつりて、種種の利益を得。或は眼見れば心清淨となり、若し所說を聞けば、心則ち法を樂んで大智慧を得、法に隨つて修行して解脫を得。是の如く佛に値ひたてまつれば無量の益利あり、〔三六〕豈一心に求めて佛を見たてまつることを欲せざらんや。譬へば、嬰兒の母を離るべからざるが如く、又道を行くに糧食を離れざるが如く、大熱の時、涼風冷水を離れざるが如く、大寒の時、火を離るるを欲せざるが如く、深水を度るに、船を離るべからざるが如し。譬へば病人の良醫を離れざるが如く、菩薩の諸佛を離れざるは上事よりも過ぎたり。何を以ての故に、父母・親屬・知識・人天王等は皆佛の如く益利すること能はず、佛の益利を以て、諸の菩薩は諸の苦惱を離れて世尊の地に住す、是因緣を以ての故に菩薩は常に佛を離れず。問うて曰く、〔三七〕有爲の法は欺誑不眞にして皆信ず可らず、云何が願の如く、諸佛を離れざることを得

【三六】菩薩の佛を離れざるは猶嬰兒の母を離れざるが如し

【三七】第二問節、有爲法は皆欺誑不眞なり、云何が諸佛を離れざるを得ん。

るや。答へて曰く、福德と智慧とを具足するが故に、乃ち應に佛を得べし。何に況んや諸佛を離れざるをや。衆生は無量劫の罪の因緣あるが故に、願の如くなるとを得ず。福德を行ずと雖も智慧薄少なり、智慧を行ずと雖も福德薄少なるが故に、所願を成せず。菩薩は佛道を求むるが故に、要ず二忍を行ず、生忍と法忍なり。生忍を行ずるが故に、一切衆生の中に慈悲心を發し、無量劫の罪を滅して無量の福德を得、法忍を行ずるが故に、諸法の無明を破して無量の智慧を得。二行和合するが故に何の願か得ざらん。是の故に菩薩は世世に常に諸佛を離れず。復次に菩薩は常に愛樂して佛を念じたてまつるが故に身を捨て身を受けて、恆に佛に値ひたてまつるとを得。譬へば衆生の習欲の心重きは婬鳥の身、所謂孔雀・鴛鴦等を受く。瞋恚を習うて偏多なれば毒蟲の中、所謂惡龍・羅刹・蜈蚣・毒蛇等に生るるが如し。是の菩薩は心に轉輪聖王、人天の福樂を貴ばずして但諸佛を念ず。是の故に心の重する所に隨つて身形を受く。復次に、【五七】菩薩は常に善く念佛三昧を修する因緣の故に、生るる所に常に諸佛に値ひたてまつる。般舟般三昧の中に說くが如きは、菩薩は是の三昧に入れば、卽ち阿彌陀佛の國に生ずるとを見る。便ち其佛に何の業因緣の故に、彼國に生ずるとを得るやと問ふに、佛卽ち答へて言はく、「善男子よ。常に念佛三昧を修し、憶念して癈せざるが故に、我國に生ずるとを得」と。問うて曰く、【五八】何者か是れ念佛三昧にして、彼の國に生ずるとを得るや。答へて曰く、念佛とは佛

【五七】念佛三昧を修して阿彌陀佛の國に生ず。
【五八】前二五問、念佛三昧にして彼國に生ずることを得る者は誰ぞ。

の三十二相、八十隨形好の金色身を念ずるに、身より光明を出だして、遍ねく十方に滿つると、閻浮檀金を融すが如く、其の色明淨なり。又須彌山王の大海の中に在つて、日光照す時、其の色明を發するが如し。行者は是時、都て餘の色想、所謂山地樹木等なく、但虛空の中に諸佛の身相のみを見るに、眞瑠璃の中より赤金外に現ずるが如し。亦比丘の不淨觀に入れば、但身體の膖脹爛壞のみを見、乃至但骨人のみを見るに、この骨人は作者あると無く、亦來去もなく、憶想を以ての故に見るが如し。菩薩摩訶薩の念佛三昧に入つて、悉く諸佛を見たてまつるとも亦復是の如し。心を攝するを以ての故に、心清淨なるが故に。譬へば、人の其の身を莊嚴して、淨水の鏡に照らすに、悉く見ざる無く、[而も]此の水鏡の中に亦形相なく、明淨なるを以ての故に、其の身像を見るが如し。諸法は本より以來、常に清淨なり。菩薩は善く清淨の心を以て、意に隨つて悉く諸佛を見、其の疑ふ所を問ふ。佛、所問に答へたまへば、佛の所說を聞いて、心大に歡喜し、三昧より起ちて是の念を作して言く、「佛は何の所より來り給ふや、我身も亦去らず」と。卽時に便ち「諸佛は從來し給ふ所なく、我も亦去る所なし」と知つて、復た是の念を作さく、「三界の所有は皆心の所作なり。何となれば心の念ずる所に隨つて、悉く皆見ることを得ればなり。心佛を見るを以て、心を以て佛を作るなり。心卽ち是れ佛にして、心は卽ち我身なり。[而るに]心は自ら知らず、亦自らを見ず。若し心相を取らば、悉く皆無智にして心も亦虛誑なり、皆無明より出づ。是の心相に因つて、卽ち諸法實相に入る、所謂常空な

り。是の如きの三昧智慧を得已つて、二行の力の故に、意の所願に隨つて諸佛を離れず、金翅鳥王の二翅を具足するが故に、虚空の中に於て、自在に至るが如し。菩薩は是の三昧智慧力を得るか故に、或は今身「に於いて」意に隨つて諸佛を供養したてまつり、命終すれば、亦復諸佛に値遇したてまつる。

是の故に、「菩薩は常に諸佛を離れざらんとせば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と説く。

卷の第三十

初品の中の善根供養を釋す。

〔經〕諸の善根、供養を以て諸佛を恭敬し、尊重し、讃歎し、意に隨つて成就せんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

〔論〕菩薩、既に諸佛を離れざるを得ば、當に供養すべし。(一)若し佛に値ひたてまつるを得て而も供具なければ甚だ悦ばずと爲す。(二)須摩提菩薩の如きは然燈佛を見たてまつるに供養の具なく、周旋し求索して賣華の女を見、五百の金錢を以て五莖の青蓮華を買ひ得、以て佛を供養したてまつれり。又(三)薩陀波崙菩薩は、師を供養するが爲の故に、身の血肉を賣れり。是の如く、菩薩は既に佛を見たてまつることを得て、心に供養せんことを欲し、若し供具なければ其心に礙ふること有り。譬へば庶民は君長に遇見するに禮物を持せざれば則ち不敬と爲すが如し、是故に諸の菩薩は供養の具を求めて諸佛を供養す。佛は須め給はずと雖も菩薩の心は具足することを得。譬へば農夫の好良の田に遇うて而も種子なく、功を加へんと欲すと雖も、以て力を肆まにすること無ければ、心大に愁憂するが如し。菩薩も亦是の如く、諸佛に遇ひたてまつることを得て、

【一】菩薩は佛を見たてまつれば、必ず供具を用ふ。

【二】須摩提華を買うて佛に供養す。

【三】薩陀波崙身を賣つて師を供養す。薩陀波崙は常啼と譯す。般若を求むるが爲に、七日七夜啼哭す。依て名く。

而も供具なければ、設ひ餘物ありとも、其の意に稱はず、心に便ち礙あり。

「諸の善根」とは、【四】所謂善根・果報・華香・瓔珞・衣服・幡蓋・種種の珍寶等なり。所以は何ん、【五】或時は因を以て果を說く、一月に千兩の金を食すと言ふも、金は食す可らず、金に因つて食を得るが故に、金を食すと言ふが如し。或る時は果を以て因を說く。好畫を見て、是れ好手なりと言ふも、手は是れ畫に非ず、畫の妙なるを見るが故に、說いて好手と言ふが如し。善根果報も亦是の如く、善根の業因緣を以て、供養の具を得るを名けて善根と爲す。

問うて曰く、【六】若し爾らば、何ぞ卽ち華香等を說いて、而も其因を說かざるや。答へて曰く、【七】供養の具に二種あり。一には財の供養、二には法の供養なり。若し但華香等の供養のみを說けば、則ち法の供養を攝せず、今善根供養と說けば、當に則ち財法俱に攝することを知るべし。

「供養」とは、若くは見、若くは聞いて【八】諸佛の功德を心に歡ひ尊重し、迎逆し侍送し、旋遶し禮拜し、曲躬し合掌し、往避して安處に坐し、飲食華香珍寶等を勸進し、種種に持戒・禪定・智慧の諸の功德を稱讚し、所說の法あれば信受し敬諾す。是の如き等の身口意業、是を供養と爲す。

「尊重」とは、【九】一切衆生の中にて、德上に過る無きを知るが故に尊と言ひ、敬畏の心、父母・師長・君

【四】諸の善根の義解。
【五】因中に果を說き、果中に因を說く。
【六】第一問、但だ華香等を說いて、其の因を說かざる理由如何。
【七】二種の供養の具。
【八】供養の義解。
【九】尊重の義解。

王に過ぎ、利益重きが故に重と言ふ。

「恭敬」とは、〔一〇〕謙遜し、畏れ、難かるが故に、恭と言ひ、其の智徳を推すが故に、敬と言ふ。

「讃歎」とは、〔一一〕其の功徳を美むるを讃と爲し、之を讃するも足らずして、又之を稱揚するが故に、歎と言ふ。

「意に隨つて成就す」とは、若し華を須ゐて供養せんに、意の如く即ち至り、或は求めて得、或は求めずして得。自然に出づる者あり、或は變化して生ず。乃至妓樂供養の具、悉く皆是の如し。

問うて曰く、〔一二〕菩薩に遇ひ得れば、便ち以て供養す。何を以てか意に隨つて求索するや。答へて曰く、福徳は心に從ふ、愛重する所に於て、持つて供養に用ふれば、福を得ると益多し、〔一三〕阿育王の如きは、小兒たりし時、重んずる所の土を以て、持用して佛に奉り、閻浮提の王たることを得、一日の中に八萬の塔を起こせり。若し大人多くの土を以て、鉢に投ずと雖も而も所得なし。重んずる所に非ざるが故なり。有人は偏に華を貴重し、其の尊ぶ所を以て、持して佛を供養したてまつるに、福を得ると益多し、乃至寶物も亦是の如し。復次に〔一四〕時の宜しき所に隨ふ。若し寒き時は應に薪火・上衣・溫室・被蓐・及以び飲食を以てすべく、熱時は應に冰水・扇蓋・涼室・生薄の服・上妙の食を以

〔一〇〕恭敬の義解。
〔一一〕讃歎の義解。
〔一二〕第二問、菩薩に遇へば便ち供養す、何ぞ意に隨つて求索するの要あらんや。
〔一三〕阿育王、土を以つて佛を供養す。
〔一四〕供物は時の宜しきに隨ふべし。

てすべく、風雨の時は就いて供具を送る。是の如く、時に隨つて供養す。又土地の宜き所に隨ひ、受者の須ふる所に隨つて、皆持つて供養す。

復次に、「意に隨つて供養す」とは、菩薩あり、佛は須ゐたまふ所なきことを知り、又諸物は虚誑にして幻の如く、一相は所謂無相なりと知り、衆生を敎化せんが爲の故に、衆生國土の重んずる所に隨つて、引導するが故に供養す。復た菩薩あり、甚深の禪定を得、菩薩の神通を生じ、神通力を以ての故に、飛んで十方の佛前に到り、或は佛國に於て若し遍ねく天華を雨ふらすべくんば、卽ち三千世界に滿て持つて佛を供養したてまつる。或は天栴檀を雨ふらし、或は眞珠の光相鮮發なるを雨ふらし、或は七寶を雨ふらし、或は如意珠の大さ須彌の如きを雨ふらし、或は妓樂の音聲淸妙なるを雨ふらし、或は身を以て須彌の如くし、以て燈炷と爲して諸佛に供養したてまつる。是の如き等を名けて財の供養と爲す。又菩薩は六波羅蜜「多」を行じ、法を以て諸佛を供養したてまつる。或は菩薩あり、一地の法を行じて、諸佛を供養し、乃至十地に法を行じて、供養したてまつる。或時は菩薩は無生法忍を得て、自の煩惱及び衆生の煩惱を除く。是れ法の供養なり。或時は菩薩は十地に住し、神力を以ての故に地獄の火を滅せしめ、餓鬼道に於て、皆飽滿を得「せしめ」、畜生をして、恐怖を離るることを得せしめ、人天に生じて漸く阿惟越致地に住せしむ。是の如き等の大功德力を名けて、法の供養と爲す。是の故に「善根を成就することを得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と說く。

經 一切衆生の願ふ所の衣服・飲食・臥具・塗香・車乘・房舍・牀榻・燈燭等を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

論 問うて曰く、〔二五〕何の次第あつてか、一切衆生の願を滿さんと欲するや。答へて曰く、〔二六〕菩薩の業に二種あり。一には、諸佛を供養せんが爲なり。二には衆生を度脫せんが爲なり。諸佛を供養して、無量の福德を得、是の福德を持つて衆生を利益す。所謂衆生の願を滿すなり。賈客の主の海に入つて寶を採り、安隱に出でて還り、所親及び智識等を利益するが如し。菩薩も是の如く、諸佛の法海に入つて無量の功德の寶を得、衆生を利益す。小王の大王を供養して、能く歡喜せしむるに、其の願ふ所の職位、財帛を與へられて、其の本國に還り、故人物を利益し、怨賊を除却するが如し。菩薩は、諸佛法王を供養するが故に、記莂を受くることを得。無量の善根の珍寶を以て、無盡の智力を得、來つての善人衆生に入り、貧なる者に供養し、其の須ふる所に隨つて、之に給與し、魔民・邪見・外道の屬は、悉く皆破壞す。是を諸佛を供養し、次いで衆生の所願を滿たすと爲す。

問うて曰く、〔二七〕菩薩は實に能く一切衆生の願を滿たすや否や。若し悉く衆生の願を滿たさば、餘の佛菩薩は何の利益する所かある。若し悉く滿たさずんば、是の中に何の故に、一切衆生の願を滿たさんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと說くや。答へて曰く、〔二八〕二種の願あり。一には、可得の

【二五】第三問、一切衆生の願を滿すに、何等かの次第ありや。

【二六】二種の菩薩業。

【二七】第四問、菩薩若し能く一切の衆生の願を滿さば、餘の佛菩薩は利益すべき事業なきにあらずや。

【二八】二種の願——可得と不可得。

願、二には、不可得の願なり。不可得の願とは、人あり、虚空を籌量して、其の邊際を盡くし、及び時方の邊際を求めんと欲するに、小兒の水中の月、鏡中の像を求むるが如し。是の如き等の願は皆不可得なり。可得の願とは、木を鑽つて火を求め、地を穿つて水を得る〔が如く〕、福を修して人天の中の生を得、及び阿羅漢辟支佛果を得、乃至諸佛法王を得。是の如き等の名は、皆可得の願なり。(一九)可得の願に二種あり、一には、謂はく世間、二には、謂はく出世間なり。是の中には、世間の願の故に、衆生の願を滿たす。云何が知ることを得る、飲食牀臥より乃ち煙燭に至るまで、須ふる所の物を以て、皆之を給與す。

問うて曰く、(二〇)菩薩は何を以ての故に、衆生に得易きの願を與へ、難き者を與へざるや。答へて曰く、(二一)願に下中上あり。下願は、今世の樂の因緣を致さしめ、中願は、後世の樂の因緣となり、上願は、涅槃の樂の因緣を與ふ。是故に先づ下願、次に中願に及び、然る後に上願を與ふ。復次に、衆生の多くは今の樂に著し、少きは後の樂を求め、涅槃を樂ふ者は轉た復た少し。若し多き者を說けば少きも亦攝す。

復次に、此の經の前後には、多く後世の涅槃の道を說き、少しは今世の利事を說く。菩薩の法は、常に衆生に種種に利益を與へて、捨つると有るべからず。所以は何ん、初心は但衆生をして、大乘の法を行せしめんと欲するも、化を受くるに堪へざるを以て、次に聲聞辟支佛の道を與へ、若し復

【一九】二種の可得の願。
【二〇】第五問、菩薩は何故に衆生に易きを與へて、難きを與へざるか。
【二一】衆生の願に上中下あり。

た能はずんば、當に十善因并行等を與へて、福徳を修せしむべく、若し衆生都て願はざれば、是の如き衆生をも遺捨すべからず、當に今世の利益、所謂飲食等を與ふべし。復次に、凡夫にして能く人に飲食等を與ふと雖も、彼の願を滿すには皆因緣あり。若くは今世の事、若くは後世の事なり。聲聞辟支佛は因緣なくして、衆生の願を滿すと雖も、而も益する所甚だ少し。菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜等を行ずる因緣の故に、國王と爲ることを得。或は大長者と爲り、財富無量にして、四方の衆生の若し來つて求むる者には、悉く之を滿足せしむ。〔三〕頻頭居士の如きは、大檀越と爲り、七寶の大牀を坐とし、金剛を脚とし、敷くに天縟を以てし、赤眞珠を以て上に帳幔と爲し、左右に立ち侍するもの各八萬四千にして、皆莊嚴奇妙なり。四大門を開き、恣ままに求むる所の者の爲に、晝夜六時に鼓を鳴し、又光明を放つに、十方無量の衆生の音聲を聞き、光明身に觸るることある者は、悉く來らざるもの無し。種種の飲食を得んと欲すれば、是の長者は其の大集を見て、卽時に默然として、仰いで虚空を視、時に空中より種種の百味の食を雨ふらし、意に隨つて皆得せしむ。若し衆生の自ら取らざれば、左右より給使し、分與して之に與へ、足り滿つれば乃ち止む。飲食・衣被・臥具・資物等を與ふるとも、皆亦是の如く、衆生の欲する所を恣ままにし已つて、然る後に法を說き、四食を離れて皆阿鞞跋致地に住せしむ。是の如き菩薩の神通力の故に能く衆生の願を滿す。

〔三〕頻頭居士（[illegible]）施を行じて衆生の願を滿す。

問うて曰く、〔三三〕佛在世の時すら衆生に尙ほ飢餓あり。天は雨を降さず、衆生困弊するに、佛は猶ほ一切衆生の願を滿たしたまふ能はず、云何ぞ菩薩にして能く其の願を滿たさんや。答へて曰く、菩薩は十地に住し、首楞嚴三昧に入り、三千大千世界に於て、或時は初發意を現じて、六波羅蜜〔多〕を行じ、或は阿鞞跋致を現じ、或は一生補處を現じて、兜率天上に於て、諸天の爲に法を說き、或は兜率天上より來り下つて淨飯王宮に生れ、或は現に出家して成佛し、或は現に大衆の中にて、法輪を轉じて無量の衆生を度し、或は現に涅槃に入つて七寶の塔を起し、遍ねく諸の國土の衆生をして舍利を供養せしめ、或時は法都て滅盡せり、菩薩の利益是の如し、何に況んや佛に於てをや。而して〔三四〕佛身に二種あり、一には眞身、二には化身なり。衆生あり、佛の眞身を見れば、願として滿さざること無し。佛の眞身は虛空に滿ち、光明遍ねく十方を照らし、說法の音聲も亦、遍ねく十方無量恆河沙等の世界の中に滿ち、大衆皆共に法を聽き、說法して息まず、一時の頃、各聞く所に隨つて、解悟することを得、劫盡き已るが如きは、衆生の行業の因緣の故に、大雨を澍ぎ下し、間に斷絕なく、三大も制する能はざる所、唯劫盡くるあれば十方に風起り、更に互に相對して能く此の水を持す。是の如く、法性身の佛は說法する所あり。十住の菩薩を除けば、三乘の人は皆持すること能はず、唯十住の菩薩の不可思議なる。方便智力あつて悉く能く聽受す。衆生、其法身

〔三三〕第六問、佛すら尙ほ衆生の願を滿したまふ事能はざりき、如何ぞ菩薩之を能くすることを得んや。

〔三四〕二種の佛身——眞身と化身。

の佛を見ると有れば、三毒あると無く、及び衆の煩惱・寒熱の諸苦、一切皆滅し、願として滿さざる無し、如意珠の如きすら、尚ほ衆生をして、願に隨つて皆得せしむ。豈況んや佛に於てをや。珠は一切世間の願を與へ、佛は一切出世間の願を與ふ。若し佛は悉く衆生の所願を滿たすこと能はずと言はば、是の語は然らず。復次に、釋迦牟尼佛は、王宮に身を受け、人法を受けて、寒熱・飢渴・睡眠あり。諸の誹謗・老病死等を受けたまふも、內心の智慧神德は、眞佛の正覺と異なること有ること無し。衆生の所願を滿さんと欲し、悉く皆能く滿すも、而も滿さざる者は、無數世より來、常に衆生の衣食の願を滿して、而も苦を免れざるを以て、今但涅槃無爲の常樂を以て、之を與したまふ。人の所親を憐愍して、毒を雜へたる美食を與へざるが如し。是の如く世間の願は、諸の結使を生じ、又復た離るる時は、心に大苦を生ず。是の故に以て要と爲さず。復次に、有人の言く、「釋迦牟尼佛は、[二五] 已に衆生の所願を滿したまふも、而も衆生は自ら得ること能はず」と。毘摩羅詰經に說くが如くんば、佛、足の指を以て地を按じたまふに、即時に國土は七寶もて莊嚴し、我が佛國は是の如し。惡害多き者の爲に、佛國の異なることを現じたまふ。又龍王等の心に雨を降らすに、人に在つては、水と爲り、餓鬼の身上には、皆炭火と爲るが如し。

問うて曰く、[二六] 若し能く一切衆生の願を滿たさば、則ち衆生は邊あつて、飢寒の苦を受くる者ある

【二五】 佛は衆生の願を滿したまふも、衆生の之を受けざるは、餓鬼の降雨を見て、火と爲すが如し。

【二六】 第七問、若し一切衆生の願を滿さば、世に飢寒等の苦を受くる衆生は、あり得べからざるにあらずや。

と無けん。何となれば一切衆生、皆願ふ所の願を滿たさば、苦を離れ樂を得るが故なり。答へて曰はく、一切を滿すとは、名字の一切にして、實の一切に非ず、(二七)法句の偈に說くが如し。

『一切のものは皆死を懼れ、杖痛を畏れざるもの莫し。己を恕して、譬へと爲すべし、殺すこと勿れ、杖を行ずること勿れ。』

一切は杖痛を畏ると言ふと雖も、無色〔界〕の衆生の如きは、身なきが故に則ち杖痛なく、色界の衆生は、身あるべしと雖も亦杖痛なく、欲界の衆生にも、亦杖痛を受けざるあり。而も一切と言ふは、謂はく、杖を得べき者を說いて一切と言ふ。實の一切に非ず。是の故に菩薩、一切衆生の所願を滿すとは、應に度すべき者を謂ふ。然るに菩薩の心は齊限なく、福德の果報も、亦量あること無し、但衆生は無量阿僧祇劫の罪、厚く障ゆるが故に得ると能はず。舍利弗の弟子の(二八)羅頻周比丘の如きは、持戒精進にして乞食し、六日にして而も得ると能はず、乃至七日にして命在ること久しからず。同道の者あり、食を乞ふ。持して與ふるに、鳥即ち持ち去る。時に舍利弗、目揵連に語るらく、「汝大神力を以て、此の食を守護して、彼をして之を得せしめよ」と。即時に目連は食を持して、往いて與ふ。始めて「食」を口に向けんと欲するに、「食」變成して泥と爲る。又舍利弗食を乞ひ、持して與ふるに而も口自ら合す。最後に佛來つて、食を持つて之を與へ給ふに、佛の福德の無量の因緣を以ての

【二七】 法句經の偈。

【二八】 羅頻周七日間食を得ず、佛終に之に食を與へ給へる因緣。

故に、彼をして食を得せしむ。是の比丘は食し已つて心に歡喜を生じ、倍信敬を加ふ。佛、比丘に告げたまはく、「有爲の法は皆是れ苦相なり」と。爲に四諦を說きたまふに、卽時に比丘は漏盡を意解して阿羅漢道を得たり。薄福の衆生あり、罪甚しければ、此の者は佛も救ひたまふこと能はず。又衆生は不可得なることを知るが故に、深遠の法性の故に、諸佛は憶想あつて、是は度すべく、是は度すべからずと分別したまふこと無く、心常に寂滅にして意に增減なきことを知る。是の故に菩薩は、一切衆生の願を滿たさんと欲するも、彼に罪あるが故に、而も得ること能はざるも、菩薩に咎なし。

(二九)「飮食」とは略說するに麁細の二種あり。餅飯等の百味の食なり。經には四食の衆生の久しく住するを說くと雖も、而も此には但摶食のみを說く。餘は無色にして相與ふべからず。若し摶食を施せば則ち三食を與ふ。何を以ての故に、摶食に因るが故に、三食を增益す。經の所說の如くんば、檀越、食を施して、則ち受者に與ふるに、五事の利益あり。(三〇)飮は總じて二種を說く。一には草木酒、所謂る蒲桃、甘蔗等及び諸の穀酒なり。二には草木漿、甘蔗漿、蒲桃漿、石蜜漿、安石榴漿、梨㮈漿、波盧沙菓漿等、及び諸の穀漿なり。是の如きを和合して人中に飮食し、及び天飮食す。所謂修陀甘露味、天菓食等、摩頭摩陀婆漿等なり。衆生の各各食する所は、或は穀を食する者あり、或は肉を食する者あり、或は淨なるものを食する者あり、不淨「なるものを食する」者あつて、「此等の者」來つて皆偏滿す。

【二九】飮食の義解。
【三〇】二種の飮——酒類と漿類。

「衣服」とは〔三一〕衣に二種あり。或は衆生より生ず、所謂綿絹・毛氈・皮革等なり。或は草本より生ず、所謂布氈・樹皮等なり。諸の天衣あり、經緯あること無く、自然に樹より出で、光色輕輭なり。〔三二〕「臥具」とは牀榻・被褥・幃帳・枕等なり。

「塗香」とは、〔三三〕二種あり。一には旃檀木等を摩して以て身に塗り、二には種種の雜香を擣いて以て〔三四〕末と爲し、以て其の身に塗り、及び衣服に熏じ並に地壁に塗る。

〔三五〕「乘」とは、所謂象・馬・車・轝等なり。「房舍」とは所謂土木寶物を以て、成ずる所の樓閣・殿堂・宮觀等にして、以て寒熱風雨・賊盜の屬を障ゆ、「燈燭」とは、所謂脂膏・酥油・漆蠟・明珠等なり。「諸物」とは、是れ一切衆生の須ゆる所の物、具に說くべからざるが故に、略して諸物と言ふ。

問うて曰く、〔三六〕此中に何を以てか、燒香、妙華を說かざるや。答へて曰く、諸物を說けば、皆已に之を攝す。

問うて曰く、〔三七〕若し爾らば但應に略して三種、所謂飲食・衣服・莊嚴の具を說くべし。答へて曰く、此の諸物は是れ須要する所のものなり。若し衆生を慈念せば、飲食を以て先と爲し、次に衣服を以てし、身垢臭なるを以て、須ふるに塗香を以てし、次に臥具を以てし、寒雨には、房舍を須ゐ、黑暗には燈燭を須ふ。

【三一】二種の衣。
【三二】臥具の義解。
【三三】二種の塗香。
【三四】末は抹と同義。
【三五】乘と房舍と燈燭と諸物の義解。
【三六】第八問、此の中に燒香妙華を說かざる理由如何。
【三七】第九問、爾らば宜に略して飲食・衣服・莊嚴の具を說くべきにあらずや。

問うて曰く。〔三八〕華香も亦よく臭を除く、何の故に說かざるや。答へて曰く、華は常に有るに非ず、亦速かに萎爛し、利益少なし。是の故に說かず。燒香は、寒には則ち須ふる所なれども、熱時には、患を爲す。塗香は寒熱に、通用し、寒時には雜ゆるに、沈水を以てし、熱時には雜ゆるに、栴檀を以てし、以て其の身に塗る。是の故に但塗香を說く。

問うて曰く、〔三九〕若し檀波羅蜜を行せば、無量の果報を得て、能く一切衆生の所願を滿さん。何故に「衆生の願を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふや。答へて曰く、先に已に般若波羅蜜「多」を以て和合するが故に、檀波羅蜜と名くることを得と說けり。今當に更に說くべし。衆生の願を滿す可き所の者は、一國土・一閻浮提のみを謂ふに非ず。都べて十方世界の、六趣の衆生の所願を滿さんと欲す。「是は」但布施の能く辦ずる所に非ざるが故に、般若波羅蜜「多」を以て近遠の相を破し、一切衆生の相と、非一切衆生の相とを破す。諸礙を除くが故に、彈指の頃に無量の身を化して、遍ねく十方に至り、能く一切衆生の所願を滿す。是の如きの神通利益は、要ず般若より出生す。是の故に菩薩は、一切衆生の願を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

〔三八〕第一〇問、除臭の物ある華香を說かざる理由如何。

〔三九〕第一一問、布施は能く無量の果報を得て衆生の所願を滿す、然るに今何故に衆生の願を滿さんと欲せば當に智度を學すべしといふか。

【論】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、恒河の沙等の如き、世界の衆生をして、檀波羅蜜〔多〕に於て立ち、尸羅・羼提・毘梨耶・禪・般若波羅蜜〔多〕に於て、立たしめんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【釋】問うて曰く、〔四〇〕是の義の次第は何の因縁ありや。答へて曰く、利に三種あり。今世の利、後世の利、畢竟利なり。復た三種の樂あり。今世と後世と出世の樂なり。前に今世の利樂を説けり、此には、後世出世の利樂を説く。是の故に衆生をして、六波羅蜜〔多〕に住せしむ。菩薩の衆生を愍念するとは、父母の子を念ふにも過ぎ、慈悲の心は骨髓に徹す。先づ飮食を以て、其の身に充足して、飢渴の苦を除き、次に衣服を以て、其の身を莊嚴して、樂を受くることを得せしむるも、菩薩の心は滿足せずして、復た是の念を作さく、「衆生は已に今世の樂を得たり」と。復た更に思惟すらく、「後樂を得せしめん、若し世間の六波羅蜜を以て之に敎へば、則ち人天の中の樂を得るも、久しくして還た來つて生死に輪轉せん。當に復た出世間の六波羅蜜を以てして、無爲の常樂を得せしむべし」と。復次に、先には衣服・華香等を以て其の身を莊嚴せり、今は功德を以て其の心を莊嚴す。若し三種の莊嚴あれば、具足すと爲し、過ぐる者あること無し。一には衣服七寶等、二には福德、三には道法なり。菩薩は三種を具足して、衆生を莊嚴せんと欲するが故に先づ功德の果報を説き、今功德の因縁を説く。復次に、前には大施ありと雖も而も衆生は罪の故に、悉く得ること能はざることを説けり。〔四一〕餓鬼經に説くが如くんば、其の食を

【四〇】第一二問、是の義の次第に何等の理由ありや。
【四一】餓鬼經の所説。

與ふと雖も、而も噉ふべからず、變じて炭火不淨の物と成ると。又菩薩は一切を捨てず、當に方便を作し衆生をして衣食の利益を得せしむべし、是の故に福を修して自行自得せしむ。菩薩は善く因緣は彊ふ可らず、福を得て之を得せしむるとを知る。是の故に次第に衆生をして六波羅蜜に住せしむ。

問うて曰く、(四一)菩薩は、十方の一切衆生をして六波羅蜜「多」に住せしめんことを志願す。何を以てか但恒河の沙の如き世界の衆生と說くや。答へて曰く、聽法の者、恒河の沙の數を聞くが爲の故なり。又新發意の菩薩に於ては、無量無邊を以て多しと爲す。多ければ則ち亂を致す。若し大菩薩は恒河の沙を以て數と爲さず。復次に、恒河の沙の如きと說くは、是れ無邊無量の數なり。後品の中に說くが如し。復次に、恒河の沙の如きとは、已に十方の諸の世界なりと說けり。此の中にも亦一恒河の沙と言はず、難を爲すべからず。是の故に恒河の沙の如き世界と說くも、咎なし、恒河沙世界の義は先に說くが如し。

「衆生」とは、五衆・十八界・十二入・六種・十二因緣等の衆多の法中に於て、假に衆生と名く。是れは天、是れは人、是れは牛、是れは馬なり。(四二)衆生に二種あり。動なる者と靜なる者となり。動なる者は身口の業を生じ、靜なる者は能はず。〔衆生に〕有色の衆生、無色の衆生、無足・二足・四足・多足の衆生、世間と出世間の衆生、大なる者、小なる者、賢聖、凡夫・邪定・正定・不定の衆生、樂・苦・不苦・不樂の

【四一】第一三問、十方の一切衆生といはずして、恒河の沙の如き世界の衆生と說く理由如何。

【四二】二種の衆生——動的と靜的。

衆生、上中下樂の衆生、學・無學・非學・非無學の衆生、有想・無想・非有想・非無想の衆生、欲界・色界・無色界の衆生あり。欲界の衆生とは三種あり。善根に上中下あるを以てなり。上とは六欲天なり、中とは人中の富貴なり。下とは人中の卑賤なり。面類同じからざるを以ての故に、四天下別異なり。不善にも亦三品あり。上は地獄、中は畜生、下は餓鬼なり。

復次に、欲界の衆生に十種あり。三惡道と人と及び六天となり。地獄に三種あり、熱地獄、寒地獄、黑闇地獄なり。畜生に三種あり。空行と陸行と水行、晝行と夜行と晝夜行、是の如き等の差別あり。鬼に二種あり。弊鬼と餓鬼なり。弊鬼は天の如く樂を受け、但餓鬼と同住して、卽ち其の主と爲る。【四四】餓鬼は腹は山谷の如く、咽は針の如く、身に唯三事あり、黑皮と筋と骨となり。無數百歲に、飲食の名だも聞かず、何に況んや見ることを得んや。復た鬼あり。火口より出で、飛べる蛾の如く、火に投じて以て飲食を爲す。糞、涕唾、膿血、洗器の遺餘を食する有り。或は祭祀を得、或は産生の不淨を食す。是の如き等の種種の餓鬼あり。六欲天とは四王天等なり。六天の中間に於て、別に復た天あり。所謂持瓔珞天、戲忘天、心恚天、鳥足天、樂見天なり。此の諸天等は、皆六天に攝する所なり。有人の言く、「欲界の衆生に應に十一種あるべし」と。先には五道を說き、今阿修羅道を益す。

問うて曰く、【四五】阿修羅は卽ち五道の攝する所なり。是の阿修羅は天に非ず人に非ず、地獄の苦多く

【四四】餓鬼の種類。
【四五】第一四問、阿修羅を鬼道に攝せざる理由如何。

畜生の形と異なる。是の如きは應に鬼道の攝する所なるべし。答へて曰く、然らず、阿修羅の力は三十三天と等し、何となれば或は諸天の爲に破られ、或時は能く諸天を破るを以てなり。經の中に說くが如くんば、釋提桓因は、阿修羅の爲に破られ、四種の兵衆は、藕根の孔に入つて以て自ら藏隱し、「阿修羅は」五欲の樂を受くると天と相似し、〔また〕佛弟子と爲る。是の如き威力は、何ぞ鬼道の攝する所たるを得んや。是の故に應に六道あるべし。復次に、阿修羅・犍陀羅・乾沓婆・鳩槃茶・夜叉・羅刹・浮陀等の大神の如きは、是れ天の阿修羅の民衆にして、樂を受くること少しく諸天に減じ、威德あり、變化は意に隨つて作す所なり。是の故に人疑つて言く、是の修羅は修羅に非ず」と。說く者の言はく、是の阿修羅は修羅に非ず、阿修羅道は初めて名を得。餘の者と皆同一道なりと。

【四六】第一五四則、經には五道とあり、今何故に六道といふか。

問うて曰く、異經には五道ありと說けり、云何が六道と言ふや。答へて曰く、佛を去ること久遠にして、經法流傳すること五百年の後、多く別異あり、部部同じからず。或は五道と言ひ、或は六道と言ふ。若し五と說く者は、佛經に於て文を迴して五と說き、若し六と說く者は、佛經に於て文を迴して六と說く。又摩訶衍の中の法華經には、六趣の衆生ありと說けり、諸の義意を見るに應に六道あるべし。復次に、善惡を分別するが故に六道あり。善に上中下あるが故に三善道あり。天、人、阿修羅なり。惡に上中下あるが故に、地獄、畜生、餓鬼道なり。若し爾らずんば、惡に三果報あつて、而も

善に二果あり、是の事は相違す。若し六道あるは、義に於て違ふこと無し。
問うて曰く、(四七)善法にも亦三果あり。下は人なり、中は天なり、上は涅槃なり。答へて曰く、是の中に涅槃を説くべからず、但應に衆生の果報の住處を分別すべし。涅槃は法に非ざればなり。善法に二種あり。一に三十七品にして、能く涅槃に至る。二は能く後世の樂を生ず。今は但受身の善法を説き、涅槃に至る善法を説かず。善に三品あり。上分の因縁の故に、天道の果報あり、中分の因縁の故に、人道の果報あり、下分の因縁の故に、阿修羅道の果報あるなり。
問うて曰く、(四八)汝は自ら阿修羅は天と力等しく、樂を受くることも、天と異ならずと説けり。云何が今善の下分を説いて阿修羅の果報と爲すや。
答へて曰く、(四九)人中は出家受戒を得て以て道に至る可し、阿修羅道は結使心を覆うて、道を得ると甚だ難し。諸天は結使に隨ふと雖も、心直くして道を信ず。阿修羅衆は心多く邪曲にして、時として道に近づかず、是の故に阿修羅は天と相似すと雖も、其道に近くと難きを以ての故に、故らに人の下に在り。龍王、金翅鳥の力勢は大なりと雖も、亦よく變化するが故に、畜生道の中に在るが如く、阿修羅道も亦是の如し。
問うて曰く、(五〇)若し龍王と金翅鳥王は力勢大なりと雖も、猶ほ畜生道の攝と爲さば、阿修羅も亦應に餓鬼道の攝なるべし、何を以てか更に六道と作すや。答へて曰く、是の龍王と金翅鳥は、復た樂を

【四七】第一六問、善法にも人・天・涅槃の三果あるにあらずや。
【四八】第一七問、善の下分を阿修羅の果報といふ理由如何。
【四九】阿修羅と天との相異。
【五〇】第一八問、阿修羅を餓鬼道に攝せざる理由如何。

受くと雖も、傍行の形、畜生に同じきが故に畜生道に攝す。地獄餓鬼は、形人に似たりと雖も、其の大苦を以ての故に人道に入らず。阿修羅は力勢既に大にして形、人、天に似たるが故に、別して六道を立つ。是れ總して欲界の衆生を說くと爲す。色、無色界の衆生は後品の中に說くが如し。

「檀波羅蜜を立つ」とは、菩薩、諸の衆生に語るらく、「當に布施を行ずべし、貪より大苦たるは無し。貪を以ての故に、諸の惡行を作して三惡道に墮す。諸の惡行を作して、三惡道に墮すれば、則ち救ふべからず」と。衆生は聞き已つて、慳貪の心を捨てて、檀波羅蜜を行ず、後品の中に廣く說くが如し。復次に、菩薩は衆生の前に於て、種種の因緣、種種の譬喩を以て、爲に法を說き、慳貪を毀呰す。夫れ慳貪は、自身の須ゐる所すら惜んで用ふること能はず、告げ求むる者を見れば、心濁り色變じ、卽ち現身に於て、醜色醜惡にして、後世の惡業を種うるが故に形を受くること醜陋に、先に布施の因緣を種ゑざるが故に、今身には貧賤なり。財物を慳著し、多く求めて息ます。諸の罪門を開いて、專ら惡事を造るが故に、惡道の中に墮す。

復次に、生死輪轉利益の業は、布施に過ぎたるは無し。今世後世常に意に隨ひ、便ち身の事は、悉く施に從つて得。施を善導と爲して能く三樂「卽ち」天上・人中・涅槃の樂を開く。何となれば好施の人は聲譽流布して八方信樂し、愛敬せざる無く、大衆の中に處して畏れ難る所なく、死時に悔なきを以てなり。其人は自ら念ずらく、「我は財物を以て良福田に植ゑ、人天中の樂涅槃の門我必ず之を得ん」

と。何となれば施は慳結を破り受者を慈念し、瞋惱を滅除し嫉妬の心息むを以てなり。受者を恭敬すれば、則ち憍慢を除き、決定の心施を以て疑網自ら裂け、施の果報を知れば、則ち邪見を除き及び無明を滅す、是の如き等い諸の煩惱破るれば、則ち涅槃門開く。復次に、但三藥を開くのみに非ず、乃ち能く無量の佛道、世尊の處を開く。何となれば六波羅蜜「多の中」、是の佛道には檀を初門と爲し、餘行は皆悉く隨從するを以てなり。是の如く布施に無量の功德あり。是の因緣を以ての故に、衆生をして檀波羅蜜「多」に立たしむ。檀波羅蜜の義は先に檀の中に說くが如し。

「尸羅に立つ」とは、〔五一〕菩薩は衆生の前に於て戒行を讃說すらく、「汝、諸の衆生は、當に持戒を學すべし、持戒の德は、三惡趣及び人中の下賤を拔いて、天人の尊貴乃至佛道を得せしむ。戒は一切衆樂の根本なること、譬へば、大藏より諸の珍寶を出すが如し。戒は大護たり。能く衆怖を滅すること、譬へば、大軍の賊を破るが如し。戒は莊嚴たり、瓔珞を著くるが如し。戒は大船たり、能く生死の巨海を渡る。戒は大乘たり、能く重寶を致して涅槃城に至る。戒は良藥たり、能く結病を破る。戒は善知識たり、世世に隨逐して、相遠離せず、心をして安隱ならしむ。譬へば、井を穿つに、已に濕泥を見て、喜慶して自ら歡び、復た憂患すること無きが如し。戒は能く諸行を利益し成就すること、譬へば、父母の衆子を長育するが如し。戒は知梯たり、能く無漏に入る。戒の能く諸結を驚怖せしむると。譬へば、師子の能く群獸をして攝伏せしむ

【五一】戒の功德を讃す。

るが如し。戒を一切諸德の本、出家の要と爲す。淨戒を修むる者は、所願意に隨ふと、譬へば、如意珠の念ずる時に得べきが如し。是の如く種種に、戒の德を讚じて、衆生をして歡喜發心し、尸羅波羅蜜「多」に住せしむ。

「羼提に住す」とは　〔三〕衆生の前に於て忍辱を讚歎す。忍は一切出家の力たり、能く諸惡を伏し、能く衆中に於て奇特の事を現ず。忍は能く守護し、施戒をして毀れざらしむ。忍は大鎧たり、衆兵〔害を〕加へず。忍は良藥たり、能く惡毒を除く。忍は善勝たり、生死の險道に於て、安隱にして患なし。

【五二】忍の功德を讚ず。

忍は大藏たり、貧苦の人に施せば、極りなきの大寶なり。忍は大舟たり、能く生死の此岸を渡つて、涅槃の彼岸に到る。〔四〕忍は瓔珞たり。能く瑩いて諸德を明かにす。若し人惡を加ふるも、猪の金山を揩するが如く、益その明を發す。佛道を求め衆生を度するの利器なり。忍を最妙と爲す。行者は當に是念を作すべし、「我若し瞋を以て彼に報ゆれば、則ち自ら害を爲す、又我先世に自ら是の罪あれば、意の如くなることを得ず、要必ず當に償ふべし。若し此の人に於て受けずんば、餘も亦我を害せん。俱に免るることを得ず、云何が瞋を起さん」と。復次に、衆生は煩惱の爲に牽かれ、諸の惡事を爲して、自在なることを得ず。譬へば、人非人の爲に持せられて、而して良醫を罵辱するに、良醫は是の時、但鬼を除くことを爲して、其の罵を嫌はず。行者も亦是の如く、衆生惡を加へて己に向ふとも、其の瞋を嫌はず、但爲めに結を除くべし。

復次に、忍を行ずる人は、前に罵辱する者を視て、父母の嬰孩を視るが如く、其の瞋り罵じるを見て、益益慈念を加へ、之を愛すること逾逾深し。又復た自ら念ずらく、「彼の人悪を我に加ふ、是の業因緣は前世に自ら造れり、今當に之を受くべし。若し瞋を以て報ぜば更に造つて後苦なり、何の時か解け已らん。若し今之を忍ばば、永く苦を離るることを得ん。是の故に瞋を起すべからず」と。是の如き種種の因緣もて瞋恚を呵し、慈悲を生じて衆生忍の中に入る。衆生忍の中に入り已つて、是の念を作さく、「十方諸佛の說きたまふ所の法は、皆我ある無く、亦我所なし。但諸法和合して假に衆生と名く。機關木人の動くが如く能く動作すと雖も、內に主あること無し。身も亦是の如く、但皮骨相持して、心風轉ずるに隨つて念念生滅し、無常空寂にして作者あること無く。罵者なく亦受者なし。そは本末畢竟空なればなり。但顛倒虛誑の故に、凡夫の心著するのみ」と。是の如く思惟し已れば則ち衆生なし。衆生なければ、已に法の屬する所なし。但因緣の和合のみにして、自性あること無し。衆生の如きは、和合を強ひて衆生と名く。法も亦爾なり」、是の如くにして、卽ち法忍を得。是の衆生忍と法忍とを得るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。何に況んや諸餘の利益をや」と。衆生は之を聞き已つて羼提波羅蜜「多」に住す。

【五二】 精進の德を讃す。

「毗梨耶に立つ」とは、〔三〕衆生に敎へて曰く、「汝懈怠すること莫れ。若し能く精進すれば、諸善功德悉く皆得易し。若し懈怠すれば、木に火あるを見るも、而も得ること能はず、何に況んや餘事をや。

是の故に勸めて精進せしむ。若し人方便に隨つて精進すれば、願として得ざると無し。凡そ勝法を得るとは、因緣なきに非ず、皆精進より生ず。【五】精進に二相あり。一には能く諸の善法を集生し、二には能く諸の惡法を除く。復た三相あり。一には事を造らんと欲す。二には精進して作す。三には休息せず。復た四相あり。已に生ぜざる惡法は、之を斷じて滅せしめ、未だ生ぜざる惡法は、能く生ぜざらしめ、未だ生ぜざる善法は、能く發生せしめ、已に生ぜる善法は、能く增長せしむ。是等の如きを精進の相と名く。精進の故に能く一切の善法を助成す。譬へば、火は風の助を得て其の然ゆると乃ち熾なるが如く、又世間の勇健なる人の、能く山を越え海を渡るが如く、道法は精進して乃ち能く佛道を得るに至る。何に況んや餘事をや」と。衆生は聞き已つて、皆精進波羅蜜「多」に立つ。

【五】精進の特性

復次に菩薩は未だ阿耨多羅三藐三菩提を發さざる者あるを見て、阿耨多羅三藐三菩提を讚歎すると爲し、一切諸法の中に於て、最も第一たり、極めて尊貴たり。能く一切を饒益して、諸法實相不斷の法を得せしむ。大慈悲あり、一切智、金色の身相、第一微妙、三十二相、八十隨形好、無量の光明、無量の戒・定・智慧・解脫・解脫智見・三達無礙を具す。一切の法に於て無礙にして解脫す。是の如くなるを得れば、一切衆生の中に最も尊上と爲し、應に一切世間の供養を受くべし。若し人但心に佛を念ずるすら、尚無量無盡の福德を得、何に況んや精進・布施・持戒・供養・承事・禮拜するをや。衆生に語げ

て言く、「佛事は是の如し。汝等當に無上道心を發すべし。精進を勤修し如法に行ずる者は、之を得ると難からず」と。衆生は是を聞き已つて、便ち無上道心を發す。若し發心する者は、但空なるのみにては得べからず。當に檀波羅蜜［多］を行ずべし。檀波羅蜜［多］を行じて、次に尸羅波羅蜜［多］、羼提波羅蜜［多］、禪波羅蜜［多］、般若波羅蜜［多］を行す。五波羅蜜を行ずるは、則ち是れ毗梨耶波羅蜜［多］なり。若し大乘の心を發さざれば、當に辟支佛道を敎ゆべし。若し辟支佛道なければ、聲聞道を行ずるとを敎ゆ。若し聲聞道なければ、敎へて色を離れて、無色定の寂滅安樂を受けしむ。若し無色定なければ、敎へて欲を離れして、色界の種種の禪定の樂を受けしむ。若し禪なければ、十善道を修して、人天中の種種の樂を受けしむ。自ら懈怠すること莫れ。空しく所得なく、貧窮下賤にして、種種に勤苦するは、甚だ爲に患ふべし。懈怠の法は最も弊惡たり、今世後世の利益善道を破壞す。衆生は聞き已つて諸の善法を集め、勤めて精進を行ず。

「禪に立つ」とは、（五五）菩薩は衆生の前に於て、禪定の清淨の樂、內樂、自在樂、離罪樂、今世後世の樂、聖の受くる所の樂、梵天王の樂、遍身に受くる樂、深厚妙樂を讃歎すらく、「汝諸の衆生は何を以てか、五欲不淨の樂に著し、畜生と同じく、諸の罪垢の樂を受けて、而も是妙樂を捨つるや。（五六）若

【五五】禪定の功德を歎ず。

【五六】五欲の小樂を捨てて禪定の大樂を得るは、田夫の少種を棄てて大收穫を得、王に少物を獻じて大賞を得、小餌もて大魚を得るが如し。

し汝能く小樂を捨つれば、則ち大樂を得ん。汝見ずや、田夫の少種子を棄てて、後に大果を獲るが如く、人の王に少物を獻じて、大報を得るが如く、小鈎の餌もて、而も大魚を得るが如く、捨つる所甚だ少くして獲る所大に多し。智者も亦是の如く、能く世間の樂を捨つれば、甚深の禪定の快樂を得。旣に此の樂を得て、反つて欲樂を見るに、甚だ不淨と爲し、獄より出づるが如く、病狀差ゆることを得て、更に樂を求めざるが如し。

復次に禪定は實智の初門と名く。智慧をして、澄清にして、能く諸法を照さしむ。燈の密室に在れば、其明を用ふることを得るが如く、若し禪定に依れば、四無量・背捨・勝處・神通・辯才等の諸の甚深の功德を得、悉く皆具ふることを得れば、能く瓦石を變じて如意珠と成らしむ。何に況んや餘事をや。意に隨つて爲す處、能く作さざる無し。地に入ること水の如く、水を履むこと地の如く、手に日月を捉へて、身焦冷せず、化して種種の禽獸の身と爲つて、而も其法を受けず。或時は身を變じて虛空に充滿し、或時は身微塵の若く、或は輕きこと鴻毛の如く、或は重きこと太山の若し。或時は足指を以て地を按するに、天地大に動すること草葉を動かすが如し。是の如きの神通變化力は、皆禪より得。衆生は是を聞き已つて、禪波羅蜜〔多〕に於いて立つ。

【五七】智慧の功德を讃す。

「般若波羅蜜〔多〕に立つ」とは、（五七）菩薩は諸の衆生に、當に智慧を學すべきを敎ゆ。智慧とは、其の明第一なるを名けて慧眼と爲す。若し慧眼なければ、肉眼ありと雖も、猶故らに是れ盲なるが如く、

眼ありと云ふと雖も、畜生と異なること無し。若し智慧あれば、自ら好醜を別ち、他の敎に隨はず。若し智慧なければ、人に隨つて東西すること、牛〔又は〕駱駝の鼻を穿たれて、人に隨ふが如し。一切有爲法の中にて、智慧を上と爲し聖の親愛する所なり。〔そは〕能く有爲法を破すればなり。經中に說くが如くんば、諸寶の中に於て、智慧寶を最と爲し、一切の利器の中にて、慧刀の利を最と爲す。智慧の山頂に住すれば、憂患あること無く、諸の苦惱の衆生を觀じて、悉く見ざること無し。智慧の刀は、能く無始の煩惱、生死の連鏁を斷ち、智慧力の故に、能く六波羅蜜〔多〕を具し、不可思議無量の佛道を得、一切智を成ず。何に況んや、聲聞辟支佛及び世間の勝事をや。是の智慧增長し、淸淨にして、沮壞すべからざるを名けて波羅蜜〔多〕と爲す。衆生は之を聞き已つて、般若波羅蜜〔多〕に住す。復次に、菩薩は或時は口を以つてせずして敎へ、或は神足光明を現じて、衆生をして六波羅蜜〔多〕に住せしめ、或は種種の餘緣を現じ、乃至夢中にも爲に因緣を作して、其れをして覺悟せしめ、衆生をして六波羅蜜〔多〕に住せしむ。是の故に經に、「衆生をして、六波羅蜜〔多〕に住せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と言ふ。

【經】一善根を佛の福田の中に植ゑて、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、盡きざらんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】善根とは(五八)三善根なり。無貪善根、無瞋善根、無癡善根なり。一切の諸の善法は、皆三善根より生じ、増長すること、薬樹草木の根あるに因つての故に、生成し増長することを得るが如し。是の故に名けて諸の善根と爲す。今善根と言ふは、善根の因緣なる供養の具にして、所謂華香燈明及び法供養持戒誦經等なり。因中に果を說く、何となれば香華は不定なれども、善心を以て供養するが故に名けて善根と爲す。布施は卽ち是れ福に非ず、但能く慳貪を破し、善法の門を開く善根「なるが故に」名けて福と爲す。針の縷を導いて衣を縫ふに、縫ふは針に非ざるが如し。一とは、若くは華、若くは香、若くは燈明、若くは禮敬、若くは誦經、持戒、若くは禪定、若くは智慧等の一一の供養、及び法供養を以て、諸佛の田中に植うるなり。「佛田」とは、十方三世諸佛の若くは佛の在世、若くは形像、若くは舍利、若くは但佛を念ず。「植う」とは、專心に堅著するなり。

問うて曰く、(五九)經には種種の福田と言ふ、何を以てか獨り佛田に植うと言ふや。答へて曰く、種種の福田ありと雖も佛を第一の福田と爲す。十力・四無畏・十八不共法、是等の如き無量の佛法を以て、具足したまふを以て、是の故に獨り佛田に植うと說く。(六〇)法寶は佛の師なりと雖も、若し佛、法を說き給はざれば無用と爲る。好藥ありと雖も、若し良醫なければ、藥は則ち用なきが如し。是の故に法寶

【五八】三善根。
【五九】第一九問、經には種種の福田とあり、何故に獨り佛田に植うといふか。
【六〇】法寶は佛の師なれども、佛を第一の福田となす。好藥あるも、良醫なければ、其効用なきが如し。

は上なりと雖も、而も前に佛寶を說く、何に況んや僧寶をや。復次に、佛田は能く無量の果報を獲、餘は無量と言ふと雖も、而も差降あり。是の故に佛田は第一なり。

「盡きず」とは、諸佛は無盡の功德を成就したまふが故に、中に於て福を植うるに、福も亦盡きざるなり。復次に、佛の功德は無量無邊無數無等なるが故に、福を植うる者の福も亦盡きず。復次に、佛は菩薩たりし時、一切衆生を緣じ給へり。衆生、無量無邊なるが故に、福も亦無盡なるが如し。復次に、佛田は清淨にして、愛等の諸の煩惱の穢草を拔き、淨戒を平地と爲し、大慈悲を良美と爲し、諸の惡邪の鹼土を除き、三十七品を溝塍と爲し、十力・四無所畏・四無礙智等を垣墻と爲して、能く三乘の涅槃の果を出生す。種を此の無上無比の田に植うれば、其の福無盡なり。

【六二】第二〇問、有爲法なる福田の盡きざる理由如何。

問うて曰く、〔六二〕一切の有爲法は、無常相なるが故に、皆「滅」盡に歸す。福は因緣より生ず、何ぞ不盡なるとを得んや。答へて曰く、亦常に不盡なりと言はず、自ら乃至、佛たるを得るまでの中間に盡きずと言ふ。復次に、一切の有爲法は念念生滅すと雖も、相續して斷ぜず果報失せざるが故に、名けて盡きずと爲す。燈の如きは、焰焰として生滅すと雖も名けて滅と爲さず、脂盡きて炷滅すれば、乃ち滅と稱すべし。福も亦是の如く。深心を良田に種うるが故に、乃至法盡くるも而も亦盡きず。復次に、菩薩は諸法實相を知り、涅槃の不盡なるが如く、福德は諸法實相に入るが故に而も亦不盡なり。

問うて曰く、〔六二〕若し爾らば涅槃は不盡なれば、福德も亦應に常に不盡なるべし。云何が乃ち佛に至る中間に盡きすと言ふや。答へて曰く、是の福は智慧力を以ての故に、是の功德をして涅槃の如く、畢竟空にして、不生不滅ならしむ。是の故に涅槃の如しと喩ふ、涅槃に卽するには非ず。若し是れ涅槃ならば喩と爲すべからず。若し是れ涅槃ならば、云何が果報の、成佛して而も盡きざるあらんや。譬へば三解脱門、空・無相・無作の如し。解脱の畢竟空相なるが如きは、是れ空解脱門なり。世間を觀ずるに亦畢竟空なり。解脱無相の相の如きは、是れ無相解脱門なり。世間を觀ずるに亦無相の相なり。解脱無作の相の如きは、是れ無作解脱門なり。世間を觀ずるに亦無作の相なり。是の故に一善根を佛の福田に植ゑ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、而も盡きざらんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと説く。

【六二】第二一問。福德は佛に至るまで、中間に於いて、盡きすといふ理由如何。
【六三】第二三問、無我を悟了せる菩薩にして、諸佛の稱讃供養にあづからんと欲する理由如何。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、十方の諸佛をして、其の名を稱讚せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

論 問うて曰く、〔六三〕菩薩、若し諸法は畢竟空にして、内に吾我なきを觀じ、已に憍慢を破らば、云何が諸佛をして、其名を稱讚せしめんと欲するや。又菩薩の法は應に諸佛を供養すべし、云何が、反つて諸佛の供養を求むるや。答へて曰く、佛法に二門あり。一を第一義門と爲し、二を世俗法門と爲

す。世俗門を以ての故に、諸佛をして讃歎せしめんと欲す。諸佛の爲に讃歎せらると雖も、而も我を見ず衆生相を取らず。世間の假名の故に説く、汝が「云何が反つて佛の供養を求むるや」と言へるは、後品の中の如し。佛の讃歎し給ふ所の菩薩は、畢竟するに阿鞞跋致阿耨多羅三藐三菩提なり。今是の菩薩は決定して是の阿鞞跋致を知るとを得んと欲するに不を以てす。是を以ての故に佛の讃歎を求む、供養を求むるには非ず。復次に、餘人、餘の衆生は、貪欲瞋恚愚癡あつて、心を覆ふが故に、實の如く讃歎すること能はず。何となれば偏に愛する所あれば、實の過を見ずして但功德のみを見る。若し偏に瞋る所あれば、但其過のみを見て其德を見ず。若し愚癡多ければ、實の如く其の好醜を見ること能はず。諸天世人は智慧あり、三毒薄き者と雖も亦如實に讃ずるとを得ると能はず。猶ほ謬失あり。「之れは」一切智なきが故なり。結使を盡くさざるが故なり。聲聞辟支佛は三毒盡きたりと雖も、亦如實に讃ずること能はず。猶餘氣あつて未だ盡きず、又智慧具足せざるが故なり。唯佛一人のみ、三毒及び「餘」氣永く盡きて、一切智を成就し給ふが故に、能く如實に讃して不增不減なり。是を以ての故に行者は諸佛の所讃を得て、其の實德を知らんと欲し、餘人の稱讃を求めざるなり。

問うて曰く、（六三）若し諸佛は三界を出て世間に著せず、我及び我所あると無くんば、外道惡人を視ても、大菩薩阿羅漢と一等にして、異なること無けん。云何が菩薩を讃歎するや。答へて曰く、佛は吾

【六三】第二三問、諸佛には、外道も、惡人も、菩薩も、羅漢も、等しく一等にして異なるなし、云何ぞ獨り菩薩をのみ讃し給ふや。

我なく、憎愛あること無く、一切法に於て、心著し給ふ所なしと雖も、衆生を憐愍し、大悲心を以て、一切を引導し給ふが故に、善人を分別して、讃じ給ふ所あり。亦惡魔の所願を破壞せんと欲するは、佛の讃歎し給ふを以ての故に、無量の衆生は、菩薩の恭敬供養を愛樂し、後に皆佛道を成ず。是を以ての故に諸佛は菩薩を讃歎したまふ。

問うて曰く、（三五）云何が讃歎するや。答へて曰く、如し佛は大衆の中に於て說法するに、衆生をして甚深の法に入らしめんと欲し給ふが故に、是の菩薩を讃じたまふ。薩陀波崙等の如し。復次に、佛は菩薩を讃歎して言はく、「是の菩薩は能く諸法の畢竟空を觀じ、亦能く衆生に於いて大慈悲あり、能く生忍を行じて、亦衆生を見ず、法忍を行ずと雖も、一切法に於て著を生せず、宿命の事を觀ずと雖も、邪見に墮せず、衆生を觀ずと雖も、無餘涅槃に入つて、邊見に墮せず、涅槃は是れ無上の實法なりと知ると雖も、亦能く身口意の善業を起し、生死の中に行くと雖も、而も深心に涅槃を樂しみ、三解脫門に住すと雖も、涅槃を觀じ亦本願及び善法を斷せず。是の如き等の種種の奇特功德は甚だ有り難しと爲す」と。

復次に、若し菩薩は未だ無生忍を得ず、未だ五神通を得ざるも、生死の肉身に大慈悲心あれば、（三六）能く衆生の爲の故に、內外のあらゆる貴惜する所の者を、悉く能く施與す。外は謂はく、著する所の妻子、上妙の五欲、如意珠最上の妙寶、安隱の國土等なり。內は謂はく、身體・肌肉・皮膚・骨血・頭目・

【三五】第二四問、佛は何故に菩薩を讃歎し給ふや。
【三六】菩薩の內施外施。

髓腦・耳鼻・手足なり。是の如き等の施は甚だ有り難しと爲す。是の故に諸佛は其の德を讃歎し給ふ。若し菩薩、法位に入つて神通を得れば、苦行を行ずれども、難しと爲すに足らず。是の菩薩は生身の肉眼を以て、志願弘曠にして、大悲心あり、佛道を愛樂す。是の如き事を行ずるは、甚だ希有と爲す。

復次に、若し菩薩は持戒清淨に具足して、持戒破戒を分別する所なく、一切諸法の畢竟不生常空に於て、法忍精進して、休まず息はず、著せず厭はず。精進懈怠は一相にして異ならず、無量無邊無數劫に、懃修し精進して、都て甚深の禪定を受行せんと欲し、依止する所なく、定と亂と異ならず、定より起たずして能く身を變ずると無量に、遍ねく十方に至つて説法して人を度し、深智慧を行じて、一切法の不生不滅、非不生非不滅、亦非不生亦非不滅、非非不生非非不滅を觀じ、諸の語言を過ぎ、心行處滅し、壞す可らず破すべからず、受く可らず著す可らず、諸聖の行處は淨なると涅槃の如く、亦是の觀にも著せず、意も亦沒せず、能く智慧を以て饒益す。諸佛は是の如きの菩薩を讃歎し給ふ。

復次に、菩薩は未だ受記を得ず、未だ無生法忍を得ず、生れて佛に値はず、賢聖を見ず、「而も」正思惟を以ての故に、能く諸法の實相を觀じ、實相を觀ずと雖も、心亦著せざるなり、是の如きの菩薩は、十方の諸佛皆共に讃歎したまふ。

復次に、菩薩は、甚深無量無邊不可思議の佛法を聞き、自ら未だ智慧を得ず、未だ及ばずと雖も、而も能く心を定めて信樂して、疑悔を生せず、若し魔、佛と作り來つて、詭つて其の意を說くも、

意に增減なし。是の如きの菩薩は諸佛の讃じたまふ所なり。

復次に、諸の菩薩あり、一時に發心する中に、疾かに成佛する者あれば、佛は則ち讃歎したまふ。大精進力あるが故なり。釋迦牟尼佛の如きは、彌勒等の諸の菩薩と同時に發心し給ひしも釋迦牟尼佛は、精進力の故に、九劫を超越し給へり。復次に、若し菩薩あり、菩薩の事、所謂十地、六波羅蜜、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等、無量の清淨の佛法を具足し、衆生の爲の故に、久しく生死に住して、阿耨多羅三藐三菩提を取らず、廣く衆生を度せば、是の如きの菩薩は諸佛讃歎し給ふ。何者か是なる。〔六七〕文殊師利、毘摩羅詰、觀世音、大勢至、遍吉等の如し。諸の菩薩の上首として、三界に出で、無央數の身を變化して生死に入る。それは衆生を教化するが故なり。是の如き希有の事は、皆甚深般若波羅蜜「多」より生ず。是の故に「諸佛の其の名を稱歎することを得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と說く。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は一たび意を發し、十方如恆河沙等の世界に到らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】菩薩は身に「神」通變化の力を得て、十方恆河沙等の身と作り、十方恆河沙等の世界に於て、一時に能く到る。問うて曰く、〔六八〕經に說くが如くんば、彈指の頃に六十念あり。若し一念の中に、能く

〔六七〕文殊・維摩・觀音・勢至・遍吉等の諸菩薩は、衆生のために久しく生死の世界に住したまふ。

〔六八〕第二五問、一念の中に能く十方恆沙世界に到ることは如何にして可能なるか。

一方恆河沙等の世界に至るすら、尚信ずべからず、何に況んや十方恆河沙等の世界は、時少くして、所到の處多きをや。答へて曰く、(六九)經に五事の不可思議を說く。所謂衆生の多少、業の果報、坐禪人の力、諸龍の力、諸佛の力なり。五不可思議の中に於て、佛力は最も不可思議なり。菩薩は禪定に入つて、不可思議の神通を生ずるが故に、一念の中に悉く十方諸佛の世界に到る。四種の神通の中に說くが如し。唯佛菩薩のみ如意疾遍神通あり。(七〇)金翅鳥の子の若きは、始めて鷇より出で一須彌より一須彌に至る。諸の菩薩も亦是の如く、無生忍力を以ての故に、諸の煩惱の無明の鷇を破り、即時に一念の中に無量の身と作り、遍ねく十方に至る。

復次に、菩薩は一切無量世の罪、悉く已に消滅し、智慧の力を以ての故に、能く一切諸法を轉ず。所謂小を能く大と爲し、大を能く小と爲し、能く千萬無量劫を以て一日と爲し、又能く一日を以て千萬劫と爲す。是の菩薩は、世間の王として、欲する所自在なり、何の願か滿さざらん。毘摩羅詰經所說の如くんば、七夜を以て劫壽と爲す。是の因緣を以ての故に、菩薩は神通力に乘じて、能く速疾に十方世界を超越す。

問うて曰く、(七一)前の五不可思議の中には、菩薩あること無し。今何を以てか菩薩の不可思議を說くや。答へて曰く、或時は因中に果を說く。日に百斤の金を食す「と言ふが」如きは、金は食す可らず。

【六九】五不可思議中、佛力最も不可思議なり。

【七〇】金翅鳥の子は、始め鷇より出で、一須彌より一須彌に至る。

【七一】第二六問、前の五不可思議中には菩薩なし　今何故に菩薩の不可思議を說くか。

金に因つて食を得るが故に、金を食すと言ふ。是を因中に果を說くと爲す。或時は果中に因を說く。好畫を見て、是は好手なりと言ふが如し。是を果中に因を說くと爲す。諸の菩薩も亦是の如く、菩薩を因と爲し、諸佛を果と爲す。若し佛力は不可思議なりと說けば、當に已に菩薩を說くと知るべし。是の故に一たび意を發し、十方恆河沙世界に到らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、一たび音を發し、十方如恆河沙等の世界をして、聲を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。

【論】菩薩は六神通を得て、梵聲の相を增長し、三千大千世界を過ぎて、十方恆河沙等の諸の世界に至る。

問うて曰く、(七二)若し爾らば、佛の音聲と何ぞ異らん。答へて曰く、菩薩の音聲は恆河沙等の數あるも、佛の音聲は到る所限數あること無し。密跡經中の所說の如くんば、目連、佛の音聲の極を試みんとして、西方に至るに、猶は佛音を聞くこと、恰も對面するが如くなりき。

問うて曰く、(七三)若し爾らば佛、常に國土聚落に在して、說法教化し給ふに、閻浮提の內の人は、佛邊に至らざれば、則ち聞くことを得ず。何を以てか之を知る。多く遠方より來つて、說法を聽かんと欲する者あるが故なり。答へて曰く、(七四)佛の音聲に二種あり。一を密中の音聲と爲し、二を不密の音聲と

【七二】第二七問、菩薩の音聲と佛の音聲との相異如何。
【七三】第二八問、然らば佛、村落にありて、說法し給ふに、聽衆遠方より來りしは、何故なるか。
【七四】二種の佛音。

爲す。密の音聲は、先に已に說けり。不密の音聲は、佛邊に至つて乃ち聞く。是れ亦二種の弟子あり。一を出世の聖人と爲し、二を世間の凡夫と爲す。出世の聖人は、目揵連等の如く、能く微密の音聲を聞き、凡夫の人は其の近づく所に隨つて乃ち聞く。

復次に、諸の菩薩は、正位に入ることを得、生死の身を離れて、法性眞形を得、能く十方無量の佛身、及び遍照の光明を見、亦能く諸佛の六十種の梵音、無量の音聲を聞くことを得。諸の大菩薩は、未だ佛の如き音聲を具足せずと雖も、佛の音聲の中に於て、普ねく其の分を得。(七五)是の佛、菩薩の音聲に三種あり。一には先世に善き音聲の因緣を種うるが故に、咽喉の中に微妙の四大を得、能く種種の妙好遠近の音聲を出だす、所謂一里、二里、三里、十里、百千里、乃至三千大千世界に音聲遍滿す。二には神通力の故に、咽喉の四大より聲を出だし、遍ねく三千大千世界、及び十方恒河沙世界に滿つ。三には佛の音聲にして、常に能く十方虛空に遍滿す。

問うて曰く、(七六)若し佛の音聲は、常に能く遍滿せば、今の衆生は何を以てか、常に聞くことを得ざるや。答へて曰く、衆生は無量劫より以來、作す所の惡業に覆はる、是の故に聞えず。譬へば、雷電霹靂は、聾者は聞えざれども、雷聲は滅すると無きが如し。佛も亦是の如く、常に衆生の爲に說法し給ふと、龍の大雷聲を震ふが如し。衆生は罪業を以て、自ら聞くことを得ず。今世の人の精進持戒する

【七五】三種の佛音聲。
【七六】第二九問、佛の音聲は、常に遍滿せば、今の衆生は何故に之れを聞かざるか。

者の如きは、念佛三昧に於て、心定を得る時、罪垢障らず、即ち佛を見、佛の說法の音聲の淸了なるを聞くことを得。菩薩は、三種の音聲の中に於て、二種を得んと欲す。是の二種の音聲は、甚難だ希有なるが故なり、果報の音聲の如く、自然に得べきが故なり。是の故に「菩薩摩訶薩は一音を以て十方恒河沙等の世界をして、聲を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と說く。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、諸佛の世界をして、斷ぜざらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

【論】佛の世界の不斷とは、菩薩は、國國をして相次ぎ、皆衆生をして發心し、作佛せしめんと欲するなり。

問うて曰く、(七)次第と言ふは、一國の前後の相次と爲すや。十方世界の次第と爲すや。若し一國の相次ならば、大悲普く一切衆生を覆ふ。何を以てか餘國に及ばざるや。若し十方一切世界の次第ならば、餘の佛菩薩は何の利益する所かあらん。答へて曰く、菩薩の心願は、一切世界をして皆悉く作佛せしめんと欲し、大心廣遠にして齊限あること無し。それは是の心を以て、諸の智慧、無量の福德、神通力を集むるが故なり。又衆生の作佛の因緣を種うる者に隨ひ、是の菩薩は皆悉く作「佛」せしむ。若し一切世界皆作佛の因緣を種ゑば、餘の佛菩薩に益あるべからず「と言はば」、但是の事は然らず。

【七】第三〇問、次第とは一國の前後をして、相次がしむるの謂なるか、將た十方世界の次第の謂ひなるか。

復次に、十方世界は無量無邊なり。一菩薩にして盡く遍ねく諸の世界に、佛種を斷ぜざらしむることを得べからず。諸餘の菩薩も各因緣に隨つて皆其の分あり。慈悲大なるを以ての故に、願も亦無量にして利益の心は齊限あること無し。衆生は種種無量なるが故に、一佛一菩薩の盡く度すべき所に非ず。

問うて曰く、(七八)若し事心に稱はずんば何故に願を作すや。答へて曰く、心願をして曠大清淨ならしめんと欲するが故なり。慈三昧を行ずるが如きは、衆生をして苦を離れしむること能はずと雖も、但自ら心をして、曠大清淨ならしめんと欲して、利益の願を成す。諸佛、大菩薩の力の如きは、皆能く一切を度すれども、而も衆生の福緣未だ集らず、未だ智慧あらず、因緣會せざるが故に度することを得ず。大海水の如きは、一切衆生取り用ふれども、水は窮竭せず、但衆生の用ふることを得ること能はざるのみなり。餓鬼の衆生の如きは、自らの罪の因緣を以て、水を見ることを得ず。設ひ之を見ることを得るも、即時に乾れ竭き、或は烊銅と爲り、或は膿血と成る。佛も亦是の如く、大慈悲智慧あり、無量無邊にして、悉く能く衆生を滿足するも、而も衆生は罪業の因緣の故に、佛に値ひたてまつらず。設ひ佛に値ひ上つることを得るも、如し餘人と異なること無ければ、或は瞋恚を生じ、或は誹謗を起す。是の因緣を以ての故に、佛の威相神力を見たてまつらず、佛に値ひ上つることを得と雖も、而も利益なし。復次に、二因、二緣あつて正見を發す。所謂内因、外緣なり。佛は外の因緣を具足したまひて、三十二相、八十隨形好、無量の光明あり、其の身

【七八】第三一問、若し事心に稱はざれば何故に願を作すか。

を莊嚴し、種種の神力、種種の音聲あり、意に隨つて說法し、一切の疑を斷じたまふ。(七九)但衆生は内の因緣を具足せず、先に見佛の因緣を種ゑず、而して信敬せず精進し持戒せず、鈍根深厚にして世樂に著す。是の故に利益あると無きは、佛の咎と爲すに非ず。佛は衆生を化度するの神器、利用、悉く皆備足し給ふ。譬へば、日出づるに、目あれば則ち覩、盲者は見ず、設使目あるも、而も日なければ、則ち覩る所なきが如し。是の故に咎なしと曰ふ、佛の明も亦是の如し。

問うて曰く、(八〇)云何が佛の世界の因緣斷せざるや。答へて曰く、菩薩は衆生の中に於て、種種の因緣を以て、佛道を讃歎し、衆生をして阿耨多羅三藐三菩提を發せしむ。［衆生は］漸漸に六波羅蜜を行じ、然る後に諸の世界に於て各各作佛す。若くは一國に於て次第に作佛し、或は異國に於て各自に作佛す。是を佛國を斷ぜずと名く。復次に、菩薩は疾く智慧を集め、具足して作佛し、無量の衆生を度して、涅槃に入らんと欲し給ふ時、菩薩の爲に受記して、「我が滅度の後、汝次いで佛と作らん」と。展轉して、皆是の如くにして斷絕せざらしむ。若し佛、菩薩に記したまはずんば、則ち佛國を斷せん。譬へば、王、太子を立て、展轉して、是の如くにして、國祚、斷せざるが如し。

問うて曰く、(八一)何を以てか有佛の世界を貴び、無佛の國を賤むや。答へて曰く、是の事は問を致す

【七九】衆生は内の因緣なきが故に佛を見ず。
【八〇】第三二問、如何にせば佛世界の因緣を斷ぜざるか。
【八一】第三三問、有佛世界を貴び、無佛世界を賤む理由如何。

べからず。佛は是れ十方世界を莊嚴するの主なり。何に況んや一國をや。若し有佛の國を離るれば、人天の樂を受くと雖も、而も是の佛の恩力の致す所を知らず、畜生と異なること無けん。若し一切諸佛あつて、世に出で給はずんば、則ち三乘涅槃の道なく、常に三界の獄に閉在して、永く出づる期なけん。若し世に佛あれば、衆生は三界の牢獄を出づることを得ん。譬へば、二國の間の日なき處の如し。是の中の衆生は、冥中より生じて、冥中に從つて死す。若し佛生れ給ふ時は、光明暫らく照して、各各相見し、乃ち日月を見ん。照らされたる衆生は、「彼は大福たり、我等は罪あること是の如し」と知る。或時は、佛、光明を以て、遍ねく諸の佛國を照らし給ふに、無佛國の衆生は、佛の光明を見て、則ち大に歡喜し、念じて言はく、「我等は黑闇なるに、彼は大明たり」と。復次に、有佛の國の衆生は、罪福あることを知り、人は三歸、五戒、八齋、及び出家。五衆等、種種甚深の禪定、智慧。四沙門果、有餘涅槃等、是の如き種種の善法を受く。是の因緣を以ての故に、佛國を貴しと爲す。若し佛國の衆生は、佛を見たてまつらずと雖も、經法に値遇して善を修し、持戒、布施、禮敬等の涅槃の因緣を種ゑ、乃ち畜生に至るまで皆能く、福德の因緣を種う。若し無佛の國は、乃ち天人に至るまで、善を修すること能はず。是の故に菩薩は願を生じて、佛の世界をして斷せざらしめんと欲す。

卷の第三十一

初品の中の十八空を釋す。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】〔一〕內空とは、內法〔に於て〕內法は空なり。內法とは、所謂內の六入なる眼・耳・鼻・舌・身・意なり。眼は空にして、我なく我所なく、眼法なし。耳・鼻・舌・身・意も亦是の如し。〔二〕外空とは、外法〔に於て〕外法は空なり。外法とは、所謂外の六入なる色・聲・香・味・觸・法なり。色空とは、我なく、我所なく、色法なきなり。聲・香・味・觸・法も亦是の如し。內外空とは、內外の法に於て內外の法は空なり。內外法とは、所謂內外の十二入なり。十二入の中には、我なく我所なく內外法なし。

問うて曰く、〔三〕諸法は無量なり、空は法に隨ふが故に、則ち亦無量なり、何を以てか但十八と說くや、若し略說せば應に一空なるべし。所謂一切法空なり。若し廣說せば一一の法に隨つて空なり。所謂眼空色空等甚だ多し。何を以てか但十八空と說くや。答へて曰く、若し略說せば則ち事周からず、若し廣說せば卽ち事繁し、譬へば藥を服すること少ければ、則ち病を除かず、多ければ、則ち其の患を

〔一〕內空の義解。
〔二〕外空の義解。
〔三〕第一問、諸法は無量なるに、何故に十八空を說くか。

增し、病に應じて藥を投じ、增減せざらしむれば則ち能く病を愈すが如し。空も亦た是の如く、若し佛但一空を說きたまはば、則ち種種の邪見及び諸の煩惱を破ること能はず、若し種種の邪見に隨つて廣く空を說けば、空は則ち多きに過ぎ、人は空相に愛著して、斷滅に墮在せん、十八空を說けば、正しく其の中を得。復次に、若くは十と說き、若くは十五と說くも、倶に亦疑あり、此は問に非ざるなり。復次に、善惡の法には、皆定數あり、若くは四念處、四正勤、三十七品、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、五衆、十二入、十八界、十二因緣、三毒、三結、四流、五蓋等なり。諸法も亦是の如く、各定數あり。十八種の法の中に著を破るを以ての故に、十八空ありと說く。

【四】第二問、智度と十八空との相異如何。

問うて曰く、【四】般若波羅蜜多の空と十八空と異と爲すや一と爲すや。若し異ならば十八空を離る、何を以てか般若の空と爲すや。又佛の說き給ふが如くば、何等か是れ般若波羅蜜多なるや。所謂色空、受・想・行・識空、乃至一切種智空なり。若し異ならば、云何が十八空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと言ふや。答へて曰く、因緣あるが故に異と言ひ、因緣あるが故に一と言ふ。異とは般若波羅蜜「多」を諸法實相と名け、一切を滅する觀法なり。十八空は則ち十八種の觀にして、諸法をして空ならしむ。菩薩は是の諸法實相を學し、能く十八種の空を生ず、是を異と名く。一とは、十八空は是れ空無所有相なり。般若波羅蜜「多」も亦空無所有相なり。十八空は是れ相を捨離し、般若

波羅蜜も一切法の中に、亦相を捨離す。是の十八空は相に著せず。般若波羅蜜も亦相に著せず。是を以ての故に般若波羅蜜を學せば則ち是れ十八空を學するなり、異ならざるが故なり。般若波羅蜜に二分あり、小あり大あり。大を得んと欲せば、先づ當に小方便門を學すべし。大智慧を得んと欲せば、當に十八空を學すべし。是の小智慧方便門に住せば能く十八空を得。何等か是れ方便門なる。所謂般若波羅蜜「多」經を讀誦し、正憶念し、思惟して、說の如く修行するなり。譬へば人あり、種種の好寶を得んと欲し、當に大海に入るが如し。若し人あり、内空等の三昧、智慧の寶を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」の大海に入るべし。

問うて曰く、【五】行者は云何が般若波羅蜜「多」を學する時、内空・外空・内外空に住するや。答へて曰く、【六】世間に四顛倒あり。所謂不淨の中に淨顛倒あり、苦中に樂顛倒あり、無常の中に常顛倒あり、無我の中に我顛倒あり。行者は四顛倒を破せんが爲の故に、四念處と十二種の觀を修す。所謂初め内身に三十六種の不淨充滿し、九孔より常に流れて、甚だ厭患すべく、淨相不可得なりと觀す。淨相不可得なるが故に、内空と名く。行者は旣に内身の不淨を知る。外の所著を觀ずることも、亦復是の如く、倶に實に不淨なり。愚夫は狂惑し、婬欲の爲に、心を覆はるるが故に之を謂つて淨と爲す。所著の色を觀ずることも、亦我が身の如く淨相は不可得なり、是を外空と爲す。行者若し己身の不淨を觀ずるも、或は外色を計

【五】第三問。行者智度を學する時、如何が内空・外空・内外空に住するや。

【六】以下内空・外空・内外空を釋す。

つて淨と爲し、若し外の不淨を觀ずるも、或は己身を謂つて淨と爲せば、倶に內外を觀せしむ。我が身不淨なれば、外も亦是の如く、外身不淨なれば、我も亦是の如く、一等にして異なると無く、淨相は不可得なり。是を內外空と名く。行者は思惟して、內外の身倶に實に不淨と知る。而も惑ふ者は愛著し、愛著深きが故に、由つて以て身を受く。身は大苦たり、而も愚は以て樂と爲す。

問うて曰く、(七)三受は皆外入に攝する所なり、云何が內受を觀ずと言ふや。答へて曰く、六塵始めて六情と和合して生ずる樂、是を外樂と名け、後貪著深く入つて生ずる樂は是を內樂と名く。復次に、(八)內法の緣ずる樂、是を內樂と名け、外法の緣ずる樂、是を外樂と名く。復次に、五識相應の樂、是を外樂と名け、意識相應の樂、是を內樂と名く。麁樂を名けて外樂と爲し、細樂を名けて內樂と爲す。是等の如く、內外の樂を分別す。苦受・不苦不樂受も、亦是の如し。復次に、行者は思惟すらく、「是內樂を觀ずるに實に不可得なり。卽ち分別して知るは實に不可得なり。但是の苦なるを强ひて名けて樂と爲すのみ。何を以ての故に、是の樂は苦の因緣より生じ、亦苦の果報を生ず。樂には厭足なきが故に苦なり」と。復次に(九)人疥を患ひ、搔けば小しく樂なりと雖も、後轉た身を傷めて、則ち大苦なるが如し。愚人は之を謂つて樂と爲し、智者は但其を苦と見る。是の如く世間は樂顚倒の病の故に、五欲の樂に著し、煩惱轉た多し。是の故に行者は樂と見ず、」

【七】第四問、三受は皆外入の所攝なり、何故に內受といふか。
【八】內樂と外樂。
【九】樂の還つて苦なること疥を搔くが如し。

但苦と見る。病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の如し。復次に、樂は少く苦は多く、少樂は現ぜざるが故に名けて苦と爲す。大河の水に一合の鹽を投すれば、則ち鹹相を失し、名けて鹹と爲さざるが如し。復次に、樂は不定なるが故に。或は此は以て樂と爲し、彼は以て苦と爲す。彼は以て樂と爲し、此は以て苦と爲す。著する者は樂と爲し、失する者は苦と爲す。愚「者」は以て樂と爲し、智「者」は以て苦と爲す。樂の患を見る者は苦と爲し、樂の過を見ざる者は樂と爲す。樂の無常相を見ざれば、樂と爲し、樂の無常相を見れば苦と爲す。未だ欲を離れざる人は以て樂と爲し、欲を離れたる人は以て苦と爲す。是の如く樂を觀じて苦と爲し、苦を觀ずると箭の身に入るが如し。不苦不樂を觀ずるに、無常變異の相なり。是等の如く、三種の受を觀ずれば、心則ち捨離す、是を內受の空を觀すと名く。外受、內外受を觀ずるも、亦是の如し。行者は是の念を作す、「若し樂即ち是れ苦ならば、誰か是の苦を受けん」と。念じ已つて則ち心受を知り、然る後に心を觀じて實と爲し虛と爲す。心を觀ずるに、無常生住滅の相なり。苦受心、樂受心、不苦不樂受心各各念を異にす。覺樂の心滅して苦心生じ、苦心は爾所の時住し、住し已つて還た滅す。次に不苦不樂受の心を生じ、爾所の時不苦不樂受の心住すと知るも、住し已つて還た滅し、滅し已つて還た樂心を生ずるを知る。三受無常なるが故に心も亦無常なり。復次に、染心・無染心・瞋心・無瞋心・癡心・不癡心・散心・攝心・縛心・解脫心・是等の如き心は、各各異相なるを知る。故に知んぬ、心は無常にして、一定心の常住する無く、受苦受樂等の心は、和合の

因緣より生じ、因緣離散せば心も亦隨つて滅すと。是等の如く內心・外心・內外心の無常相を觀ず。

問うて曰く、［一〇］心は是れ內入に攝す、云何が外心と爲すや。答へて曰く、內身を觀ずるを名けて內心と爲し、外身を觀ずるを名けて外心と爲す。復次に內法を緣ずるを內心と爲し、外法を緣ずるを外心と爲す。復次に、五識は常に外法を緣じて分別する能はざるが故に、名けて外心と爲し、意識は能く內法を緣じ、亦好醜を分別するが故に、名けて內心と爲す。復次に意識の初めて生ずるや未だ分別し決定すること能はず、是を外心と爲す。意識轉た深うして、能く分別して相を取る、是を內心と名く。是の如く內外心を分別す。行者は心意轉た異なり、身を知つて不淨相と爲し、受を知つて苦相と爲し、心の住せざることを知つて無常相と爲すも、結使未だ斷せざるが故に、或は吾我を生じて、是の如く思惟す「若し心、無常ならば、誰か是の心を知り、心は誰に屬すと爲さん。誰か心の主と爲つて、而も苦樂を受けん。一切の諸物は誰の所有ぞ」と。即ち分別して、別に主あることを無しと知る。但五衆に於て相を取るが故に人相ありと計し、而して我心を生ず。我心を以ての故に我所を生じ、我所の心生ずるが故に、我を利益する者あれば貪欲を生じ、我に違逆する者には而も瞋恚を生ず。此の結使は智より生せずして狂惑より生ず。故に是を名けて癡と爲す。三毒は一切煩惱の根本たり。亦吾我に由るが故に、福德を作しては、我の爲に後に當に得べく、亦助道の法を修しては、我當に解脫を得べしと爲す。初めて相を取るが故に名けて想

【一〇】第五問、心を外心といふ理由如何。

衆と爲し、吾我に因つて結使、及び諸の善行を起す、是を行衆と名く。是の二衆は、則ち是れ法念處なり。想・行・衆法の中に於て我を求むるに不可得なり、何となれば是の諸法は皆因縁より生じ、悉く是れ作法にして而も牢固ならず。實我の法なし。行は芭蕉の如く、葉葉に之を求むるに中に堅相あること無し。遠く野馬を見れば、水なけれども水想あるが如く。眼を誑惑す。是の如く内法・外法・内外法を觀ず。

問うて曰く、(二)法は是れ外入に攝す、云何が内法と爲すや。答へて曰く、内法を名けて内心と爲し、想衆・行衆に相應す。外法を名けて外心と爲し、想衆・行衆及び心不相應の諸行及び無爲法に相應す。一時に等しく觀ずるを名けて内外法と爲す。復次に、内法を名けて六情と爲し、外法を名けて六塵と爲す。復次に、身・受・心及び想衆・行衆を總觀するを法念處と爲す。行者は既に想衆・行衆及び無爲法の中に於て我を求むるに不可得なり、還た身・受・心法の中に於て、求むるも亦不可得なり。是の如く一切法の中に、若くは色、若くは非色、若くは可見、若くは不可見、若くは有對、若くは無對、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲、若くは遠き、若くは近き、若しくは麤なる、若しくは細なる、其の中に我を求むるに、皆不可得なり。但五衆和合の故に、強ひて名けて衆生と爲す。衆生は即ち是れ我なり。我は不可得なるが故に亦我所なし。我所は不可得なるが故に、一切諸の煩惱は皆衰滅と爲る。復次に、身念處に一切

【二】第六問、法を内法といふ理由如何。

色法に名く。行者、內色を觀ずるに無常・苦・空・無我なり。外色を觀じ、內外色を觀ずるも亦是の如し。受・心法も亦爾なり。四念處の內觀相應の三昧を內空と名け、四念處の外觀相應の三昧を外空と名け、四念處の內外觀相應の三昧を內外空と名く。

問うて曰く、〔二〕是の空は是の三昧力の故に空と爲すや、是の法は自ら空なりと爲すや。答へて曰く、有人は言ふ、「名けて三昧力と爲すが故に空なり。經に說くが如し。三三昧とは、三解脫門〔卽ち〕空・無相・無作なり。是の空三昧は、身・受・心法を緣じて、我我所を得ざるが故に名けて空と爲す」と。

問うて曰く、〔三〕四念處は空法、皆應に無常・苦・空・無我を觀ずべし。何を以ての故に、身は不淨と觀じ、受は是れ苦なりと觀じ、心は無常と觀じ、法は無我と觀ずるや。答へて曰く、四法は皆無常・苦・空・無我と觀ずと雖も、而も衆生の身中には多く淨顚倒に著し、受の中には多く樂顚倒に著し、心の中には多く常顚倒に著し、法の中には多く我顚倒に著す。是の故に行者は身は不淨なりと觀じ、受は苦なりと觀じ、心は無常なりと觀じ、法は無我なりと觀ずるなり。復次に、內外空とは內外に定まれる法あること無く、互に相因つて得るが故に謂つて內外と爲す。彼は以て外と爲し、我は以て內と爲す。我は以て外と爲し、彼は以て內と爲す。人の繫がる所の內に隨つて、內法と爲し、人の著する所の外法に隨つて、外を受

〔二〕第七問、法は三昧の力の故に空なりや、將た又それ自ら空なりや。

〔三〕第八問、四念處は空法なり、皆無常・苦・空・無我と觀ずべきにあらずや。

く。人の自ら合を内と爲し、他の合を外と爲すが如し。行者は是の内外法を觀ずるに定相なきが故に空なり。復次に是の内外法は自性あると無し。何を以ての故に。和合して生ずるが故に。是の内外法も亦和合の因緣の中に在らず。若し因緣の中に無き者は餘處にも亦無なり。内外法の因緣も亦無なり、因緣なきが故に内外法は空なり。

問うて曰く、(一四)内外法は定んで有なり、云何が無と言ふや。手足等の如きもの和合するが故に、身法生ずるあり、是を内法と名く。梁・椽・壁等の如きもの和合するが故に、屋法生ずるあり、是を名けて外と爲す。是の身法は別名ありと雖も亦足等と異ならず。所以は何ん、若し足等を離れては、身は不可得の故に。屋も亦是の如し。答へて曰く、若し足は身と異ならざれば頭は應に是れ足なるべし、足と身と異ならざるが故なり。若し頭は是れ足ならば、甚だ笑ふべしと爲す。

問うて曰く、(一五)若し足と身と異ならざるは是の如きの過あり。今は足等和合するが故に更に法あつて生ずべし、名けて身と爲す。身は足等と異なると雖も、當に足に依つて住すべし。衆縷の和合して能く氈を生じ、是の氈は縷に依つて住するが如し。答へて曰く、是の身法は足等の分中に具有すと爲すや、分有すと爲すや。若し具有せば頭中に應に脚あるべし、何を以ての故に、身法を具有するが故

(一四)　第九問、何故に内外の法を無と言ふか。

(一五)　第十問、足と身とは異なるも、而も足等の和合するが故に、身と名くるにあらずや。

なり。若し分有せば足分と異なること無し。又身は是れ一法にして所因の者は多なり。一は多と爲らず、多は一と爲らず。復次に、若し足等の分を除いて別に身あらば、一切世間と皆相違せん。是の故に身は即ち是れ諸分なりと言ふことを得ず。亦諸分と異なると言ふことを得ず。是の故に則ち身なし。身無きが故は足等も亦無し。是の如き等を名けて内空と爲す。房舍等の外法も亦是の如く、空なるを名けて外空と爲す。

問うて曰く、〔一六〕身舍等を破すれば、是れ一を破し異を破すと爲す。一を破し異を破する是の破は外道の經なり。佛經の中には實に内外法あり。所謂内は六情、外は六塵なり。此れ云何が無ならんや。答へて曰く、是の内外の法和合して假に名字のみあり。身の如く舍の如し。復次に、略して說くに二種の空あり。衆生空と法空なり。〔一七〕小乘の弟子は鈍根なるが故に、爲に衆生空を說く。我我所無きが故に、則ち餘法に著せず。大乘の弟子は利根なるが故に、爲に法空と說くに、即時に世間は常空にして、涅槃の如しと知る。聲聞は内空を說く。内法の中には、我なく我所なく、無常にして作者なく、知者なく、受者なし、是を内空と名く。外空も亦是の如し。内法の相、外法の相は即ち是空と說かず。大乘は内法の中に内法の相なく、外法の中に外法の相なしと說く。般若波羅蜜「多」の中に說くが如くば、色の色たる相は空なり。受・想・行・識の識たる相は空なり。

【一六】第一一問、内六情、外六塵なしと謂はば、外道の說に墮するにあらずや。

【一七】小乘の弟子には、我空を說き、大乘の弟子には、法空を說く。

眼の眼たる相は空なり。耳・鼻・舌・身・意の意たる相は空なり。色の色たる相は空なり、聲・香・味・觸・法の法たる相は空なり。是等の如く、一切の諸法は自法空なり。

問うて曰く、〔一八〕此の二種の說、內外の空は、何か是れ實なるや。答へて曰く、二は皆是れ實なり。但小智鈍根の爲の故に先づ衆生空を說き、大智利根の者の爲に法空を說く。人の囹圄せられて、桎梏を破壞し獄卒を傷殺して意に隨つて去ることを得、又有は、盜を怖畏し牆壁を穿ち、亦免れ出づるとを得るが如し。聲聞は、但吾我の因緣を破して、諸の煩惱が生ぜず。諸法の愛を離れ、老病死、惡道の苦を怖畏するも、復欲の本末を推求して、了了に諸法を壞破せず、但得脫を以て事と爲す。大乘は三界の獄を破り、魔衆を降伏し、諸の結使を斷じ及び習氣を滅し、一切諸法の本末を了知し、通達無礙に、諸法を破散し世間をして涅槃の如く、同じく寂滅の相ならしめ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、將に一切衆生を三界より出でしめんとす。

問うて曰く、〔一九〕大乘は云何が諸法を破壞するや。答へて曰く、佛說きたまはく、「色は種種の因緣より生じて、堅實有ること無し。水の盪浪して、泡沫を成し、暫らく見えて、即ち滅するが如く、色も亦是の如し。今世の四大は、先世の行業の因緣和合するが故に成することを得、色の因緣滅するが故に色も亦俱に滅す。無常道を行じ、轉じて空門に入る。所以は何ん、諸法は生滅して、住する時ある

【一八】第一二問、內空と外空と孰れか實なるか。
【一九】第一三問、大乘は云何か諸法を破壞するか。

こと無く、若し住する時なければ則ち取るべきこと無し。復次に、有爲の相なるが故に生の時に滅あり、滅の時に生あり。若し已生の生は、用ふる所なく、若し未生の生ならば、生ずる所なけん。「然れば」法と生とは、亦異なること有るべからず、何を以ての故に、生若し法を生ぜば、應に生を生ずること有るべく、是の如く復た生あるべくんば、是れ則ち無窮ならん。若し生を生ずるに更に生なくんば生も亦生ずること有るべからず。若し生あり、生ずること有ること無ければ法も亦生ずること有るべからず。是の如く生は不可得なり、滅も亦是の如し。是の故に諸法は空にして不生不滅なり。是を實と爲す。復次に諸法若し有ならば終に無に歸せん。若し後に無ならば初も亦無なるべし。人の履を著くるが如し。初より已に有るが故に微細にして覺せず。若し初め無ならば故らに則ち應に常に新なるべし。若し後に有ならば故らに相は初めも亦有ならん。法も亦是の如く、後の有無の故に初も亦有無なり。是の故に一切法は應に空なるべし。衆生は顚倒して內の六情に著するを以ての故に、行者は是の顚倒を破するを名けて內空と爲す。外空、內外空も亦是の如し。

【三〇】空空の義解。

(三〇)空空とは空を以て內空・外空・內外空を破し、是の三空を破するが故に名けて空空と爲す。復次に、先づ法空を以て內外法を破し、復た此の空を以て是の三空を破す、是を空空と名く。復次に、空三昧を以て、五衆の空を觀じ、八聖道を得、諸の煩惱を斷じて、有餘涅槃を得。先世の業因緣の身命盡く

る時、八道を放捨せんと欲するが故に、空空三昧を生ず、是を空空と名く。

問うて曰く、(三)空と空空と何等の異ありや。答へて曰く、空は五受衆を破し、空空は空を破す。

問うて曰く、(三)空若し是れ法空ならば、已に破すと爲す。空若し法空に非ずんば、何の破する所ぞ。答へて曰く、空は一切法を破し、唯空のみ有つて 三 存す。空にして、一切法を破し已らば、空も亦應に捨すべし。是の故に須らく是れ空空なるべし。復次に、空は一切法を緣じ、空空は但空のみを緣ず。一の健兒あり、一切の賊を破る。復た更に人あり、能く此の健人を破るが如く、空空も亦是の如し。亦藥を服するが如し。藥は能く病を破し、病已に破することを得ば、藥も亦應に出だすべく、若し藥を出ださざれば、則ち復た是れ病なり。復た空を以て諸の煩惱の病を滅するも、恐らくは空復た患を爲さん。是の故に空を以て空を捨す。是を空空と名く。

四 大空とは、聲聞法の中には法空を大空と爲す。雜阿含の大空經に說くが如くんば、生は因、老死に緣たり。有人は言ふ、「是の老死は是れ人の老死なり」と。二は倶に邪見なり。是の人の老死は則ち衆生空なり、是の老死は是れ法空なり。摩訶衍經に十方を說いて、「十方の相は空なり」と「いふ」。是を大空と爲す。

【三】第一四問、空と空空との相異如何。

【三】第一五問、空若し法空にあらずんば、破する所は何なるか。

【三】原文には在りに作れども、今は行文上存すと改む。

【四】大空の義解。

問うて曰く、〔二五〕十方空は、何を以てか名けて大空と爲すや。答へて曰く、東方に無邊なるが故に、名けて大と爲し、亦一切處に有なるが故に名けて大と爲し、一切色に遍ずるが故に名けて大と爲し、常に有なるが故に名けて大と爲し、世間を益するが故に名けて大と爲し、衆生をして迷悶せざらしむるが故に名けて大と爲し、是の如く大方能く破するが故に名けて大空と爲す。餘の空は因緣生の法を破す。作法虛法は破し易きが故に名けて大と爲さず。是の方は因緣生の法に非ず、作法に非ず、微細の法にして、破し難きが故に、名けて大空と爲す。

問うて曰く、〔二六〕若し佛法の中には方なし。三無爲・虛空・智緣盡・非智緣盡も亦攝せざる所なり、何を以てか方ありと言ふや。亦是れ常是れ無爲法にして因緣生の法に非ず。作法微細法に非ず。答へて曰く、是の方なる法は聲聞の論議の中には無し、摩訶衍法の中には世俗諦を以ての故に有り。第一義の中には一切法は不可得なり、何に況んや方をや。五衆の和合を假に衆生と名くるが如く、方も亦是の如し。四大造色の和合の中に此間彼間等を分別し、假に名けて方と爲す。日出の處は是れ則ち東方、日沒の處は是れ則ち西方なり。是の如き等は是れ方の相なり。是の方は自然に常に有なるが故に因緣生に非ず、亦先無にして今有、今有にして後無なるにあらざるが故に、作法に非ず、現前に知るにが故に、是れ微細の法に非す。

【二五】第一六問、十方空なば、名けて大空と爲すは何故なるか。

【二六】第一七問、方ありと言ふ理由如何。

問うて曰く、〔一七〕方若し是の如くならば、云何が破すべきや。答へて曰く、汝聞かずや、我先に世俗諦を以ての故に有にして、第一義の故に破すと說けり。俗諦を以て有なるが故に斷滅の中に墮せず、第一義〔を以て〕破するが故に常の中に墮せず、是を略して大空の義を說くと名く。

問うて曰く、〔一八〕第一義空には亦能く無作法、無因緣法、細微法を破す。何を以て大空と言はざるや。

答へて曰く、前に已に大の名を得るが故に名けて大と爲さず、今第一義の名は異なりと雖も義は實に大と爲す。出世間には涅槃を以て大と爲し、世間には方を以て大と爲す。是の故に第一義も亦是れ大空なり。

復次に、大邪見を破するが故に、名けて大空と爲す。行者、慈心を以て東方の一國土の衆生を緣じ、復た一國土の衆生を緣じ、是の如く展轉して緣ずる時の如きは、若し盡く東方の國土を緣ずと謂はば、則ち邊見に墮し、若し未だ盡くさずと謂はば、則ち無邊見に墮す。是の二見を生ずるが故に、即ち慈心を失す。若し方空を以て是の東方を破すれば、則ち有邊無邊見を滅す。若し方空を以て東方を破せざれば、則ち東方心に墮し、心に隨つて已まざれば、慈心則ち滅して、邪心則ち生ず。譬へば大海の潮の時、その限に至れば、水は則ち旋還するに、魚あり、若し還らずして則ち漂はば、露地に在つて諸の苦患あり、若し魚に智あれば、則ち水に隨つて還り、永く安隱なることを得るが如く、行者も是の如し。若

〔一七〕第一八問、方は如何にして破すべきか。

〔一八〕第一九問、第一義空を大空と言はざる理由如何。

し心に隨つて還らざれば、則ち邪見に漂在し、若し心に隨つて還れば、慈心を失はず。是の如く、惡時の大邪見を破するが故に、名けて大空と爲す。

(二九)第一義空とは第一義は諸法實相に名く。破せず壞せざるが故なり。是の諸法實相も亦空なり。何を以ての故に、受くると無く著すると無きが故なり。若し諸法實相は有ならば受くべく著すべし、無實なるを以ての故に受けず著せず。若し受け著せば卽ち是れ虛誑なり。復次に諸法の中の第一の法を名けて涅槃と爲す。阿毘曇の中に說くが如し。「云何が有上法、一切有爲法、及び虛空、非智緣盡にして、云何が無上法、智緣盡なる」と。智緣盡は是れ卽ち涅槃なり。涅槃の中には、亦涅槃の相なし、涅槃空は是れ第一義空なり。

問うて曰く、(三〇)若し涅槃は空無相ならば、云何が聖人は、三種の乘に乘じて涅槃に入るや。又一切の佛法は、皆涅槃の爲の故に說く。譬へば衆流の皆海に入るが如し。答へて曰く、涅槃あり、是れ第一寶無上法なり。是に二種あり。一には有餘涅槃、二には無餘涅槃なり。愛等の諸の煩惱を斷ず、是を有餘涅槃と名く。聖人あり、今世に受くる所の五衆盡きて更に復た受けざる、是を無餘涅槃と名く。涅槃無しと言ふとを得ず。衆生は涅槃の名を聞いて、邪見を生じ、涅槃の音聲に著して、若くは有なり、若くは無なりとの戲論を作す、著を破するを以ての故に、涅槃は空なりと說く。若し人有に著するは。是れ世間に著するなり。若し無に著

【二九】 第一義理の義解。

【三〇】 第二〇問、若し涅槃、空にして無相ならば、聖人は何故に三種の乘に乘じて涅槃に入るや。

するは、則ち涅槃に著す。是の凡人の著する所の涅槃を破して、聖人の得る所を依せず、何を以ての故に、聖人は一切法の中に於て相を取らざるが故なり。

復次に、愛等の諸の煩惱を假に名けて縛と爲す。若し道を修して是の縛を解き、解脱を得れば即ち涅槃と名く。更に法あつて涅槃と爲すもの無し。人の被むれる械を脱するとを得て、而して戯論を作し、是は械、是は脚なり、何者か是れ解脱なる「と云ふが」如し。是の人は笑ふ可し、脚械の外に於て、更に解脱を求む。衆生も亦是の如く、五種の械を離れて、更に解脱の法を求む。復次に、一切法に第一義を離れず、第一義は諸法實相を離れず、能く諸法實相をして空ならしむるを名けて第一義空と爲す。是の如き等の種種を名けて第一義空と爲す。

【三二】第二一問。有爲法も有爲法の相も空なりと言ふ理由如何。

有爲空、無爲空とは、有爲法とは因緣和合の生に名く、所謂五衆、十二入、十八界等なり。無爲法は、因緣なく、常に不生不滅なるに名く、虚空の如し。今有爲法は二の因緣の故に空なり。一には我なく我所なく、及び常相不變異なるは、得べからざるが故に空なり。二には有爲法の有爲法たる相は、空にして不生不滅なり。「何となれば」所有なきが故なり。

問うて曰く、[三二]我・我所・及び常相は不可得なるが故に應に空なるべし。云何が有爲法の有爲法たる相は空なりと言ふや。答へて曰く、若し衆生なければ、法は所依なく、又無常なるが故に、住する時なし、住する時なきが故に不可得なり、是の故に法も亦空なることを知る。

問うて曰く、（三二）有爲法の中に、常相は不可得ならば、不可得とは、是れ衆生空と爲すや、是れ法空と爲すや。答へて曰く、有人の言く、我心顚倒の故に我を計して常と爲す。是の常を空ずれば則ち衆生空に入ると。有人の言く、心を以て常と爲す、梵天王の是の四大を說くが如くんば、四大は色を造り悉く皆無常なり、心意識は是れ常なり、是の常を空ずれば則ち法空に入ると。或は有人の言く、五衆は卽ち是れ常なり、色衆は復變化すと雖も而も亦滅せざるが如く、餘衆も心を說くが如し。五衆の空は卽ち是れ法空なり、是の故に常空も亦法空の中に入ると。復次に（三三）有爲法、無爲法の空とは、行者は、有爲法無爲法の實相は作者あると無く、因緣和合の故に有なり。皆是れ虛妄にして憶想分別より生じ、內に在らず外に在らず、兩の中間に在らず、凡夫の顚倒の見の故に有なりと觀ず。智者は有爲法に於て其の相を得ず、但假名なることを知る。此の假名を以て衆生を導引して、其の虛誑不實にして、生なく、作心なく、著する所なきを知らしむ。復次に、諸の賢聖人は、有爲法を緣ぜずして道果を得、有爲法の空を觀ずるを以ての故に、有爲法に於て、心繫著せざるが故なり。復次に、有爲を離れて則ち無爲なし。何となれば有爲法の實相は卽ち是れ無爲なればなり。無爲の相は則ち有爲に非ず。但衆生の顚倒の爲の故に分別して、有爲相とは生滅住異なり、無爲相とは不生不滅不住不異なり、是を佛法に入るの初門と爲すと說く。若し無爲法に相あらば則ち是れ有爲なり。有爲法の生ず

【三二】第二二問、不可得とは、我空ないふか、又は法空の義なるか。

【三三】有爲空無爲空の義解。

る相は、則ち是れ集諦なり。相を滅するは則ち是れ〔三四〕盡諦なり。若し集めざれば則ち作らず、若し作らざれば則ち滅なし。是を無爲法と名く。實相の如し。若し是の諸法實相を得れば、則ち復た生滅住異の相の中に墮せず。是の時に有爲法と無爲法とを見ず、合して無爲法と有爲法とを見ず、合して有爲法と無爲法に於て相を取らず、是を無爲法と爲す。何となれば若し有爲法無爲法を分別すれば、則ち有爲と無爲とに於て礙あり、若し諸の憶想分別を斷じ、諸緣を滅し、無緣の實智を以て生數の中に墮せざれば、則ち安隱常樂の涅槃を得。

問うて曰く、〔三五〕前の五空は皆別說せり。今有爲無爲の空は何を以てか合說するや。答へて曰く、有爲無爲の法は、相對して有なり。若し有爲を除けば即ち無爲なく、若し無爲を除けば則ち有爲なし。是の二法に一切法を攝す。行者は有爲法の無常・苦・空等の過を觀じ、無爲法の所益の處廣きことを知る。是の故に二事を合說す。

問うて曰く、〔三六〕有爲法は因緣和合より生じ、自性なきが故に空なり、此は則ち爾るべし。無爲法は因緣生の法に非ず、破すること無く、壞すること無く、常に虛空の如し、云何が空なりや。答へて曰く、先に說くが如く、若し有爲を除けば則ち無爲なし、有爲の實相は即ち是無爲なり。若し有爲空なれば、無爲も亦空なり、二事は異ならざるを以てなり。復次に、人あり、有爲法の過罪を聞いて無爲

〔三四〕盡諦は、滅諦といふに同じ。
〔三五〕第二三問、有爲空と無爲空とを合せ說く理由如何。
〔三六〕第二四問、無爲法を何故に空なりといふか。

法に著し、著するを以ての故に諸の結使を生ず。阿毗曇の中に說くが如し。八十九の有爲法の緣六、無爲法の緣三、當に分別すべし。欲界繫の盡諦所斷の無明使は或は有爲緣、或は無爲緣なり。何者か有爲緣にして盡諦所斷なる。有爲法緣使に相應する無明使なり。何者か無爲緣にして盡諦所斷なる。有爲法緣使に相應せざる無明使なり。色・無色界の無明も亦是の如し。此の結使を以ての故に、能く不善業を起し、不善業の故に三惡道に墮す。是の故に無爲法は空なりと言ふ。無爲緣使とは疑・邪見・無明なり。疑とは涅槃法の中に於て有か無か「と疑ふなり」。邪見とは若し心を生じて定んで涅槃なしと言ふなり。是の邪疑に相應する無明、及び獨りの無明を合して無明使と爲す。

問うて曰く、〔三七〕若し無爲法は空なりと云はば、邪見と何ぞ異ならん。答へて曰く、邪見の人は涅槃を信ぜず、然る後に心を生じ、定んで涅槃の法は無しと言ふ。無爲法は空なりとは、涅槃の相を取るを破す、是を異と爲す。復次に、若し人有爲を捨て、無爲に著せば、著するを以ての故に、無爲は卽ち有爲と成る。是の故に無爲を破すと雖も、邪見に非ず。是を有爲、無爲の空と名く。

〔三八〕畢竟空とは有爲空、無爲空を以て、諸法を破して遺餘あると無からしむ。是を畢竟空と名く。漏盡の阿羅漢をば、畢竟清淨と名け、阿那含乃至無所有所の欲を離れたるをば、畢竟清淨と名けざ

〔三七〕第二五問、無爲法を空と言はば邪見にあらざるなきか如何。

〔三八〕畢竟空の義解。

るが如し、此も亦是の如く、內空、外空、內外空、十方空、第一義空、有爲空、無爲空にして更に餘の不空法あること無し。是を畢竟空と名く。復次に、若し人七世、百千萬億無量世に貴族なる、是を畢竟貴と名け、一世二三世の貴族を以て眞實と爲さず。畢竟空も亦是の如く、本より已來因緣あり、定んで實に不空なる者あること無し。有人の言く、今は空なりと雖も最初は不空なり。天、造物の始、及び冥初の微塵の如しと。是等は皆空なり。何となれば果無常なれば因も亦無常なればなり。虛空の如きは果と作らず亦因と作らざるが如く、天及び微塵等も亦應に是の如くなるべし。若し是れ常ならば、無常を生ずべからず。若し過去に定相なくんば、未來現在世も亦是の如し。三世の中に於て、一法として定んで、實に空ならざる者あること無し。是を畢竟空と名く。

問うて曰く、【三九】若し三世都べて空にして、乃至微塵一念も所有なくんば、則ち是は大に畏る可き處なり。諸の智慧人は禪定の樂を以ての故に世間の樂を捨て、涅槃の樂を以ての故に禪定の樂を捨す。今畢竟空中、乃至涅槃あること無くんば何の法に依止して涅槃を捨することを得るや。答へて曰く、吾我に著する人あり、一異の相を以て諸法を分別す。是の如き人は則ち以て異と爲す。佛の說きたまふが如くんば、凡夫人の大に驚怖する處は所謂無我無我所なり。復次に、有爲法には三世あり、有爲法なるを以ての故に著を生ずる處なり。涅槃は一切の愛著を斷せるに名く。云何が涅槃に於て捨離を

【三九】第二六問、畢竟空ならば何の法に依止して涅槃を捨するや。

求めんや。復次に、比丘の四重禁を破るが如きは、是を畢竟破戒と名く。得道に任へざるなり。又五逆罪を作すが如きは、畢竟して三善道を閉るなり。若し聲聞の證を取れば、畢竟作佛を得ず。畢竟空も亦是の如く、一切法に於て、畢竟空にして、復た餘ある無し。

問うて曰く、(四〇)一切法畢竟空なりとは、是の事は然らず。何となれば三世十方の諸法、乃至法相、法住に、必ず實あるべし、一法の實あるを以ての故に、餘法を虚妄と爲す、若し一法の實なくんば、亦諸の虚妄法、是れ畢竟空あるべからず。答へて曰く、乃至一法の實なる者有ると無し。何となれば若し乃至一法の實あらば、是の法は應に若くは有爲、若くは無爲なるべし。若し是れ有爲ならば、有爲空の中に已に破せり、若し是れ無爲ならば、無爲空の中に亦破せり。是の如く世間出世間［の中］、若し世間は內空、外空、內外空、大空を以て已に破せり。若し出世間は第一義空を以て已に破せり。色法・無色法・有漏・無漏法も、亦是の如し。復次に、一切法は、皆畢竟空なり。是の畢竟空も亦空なり。空にして法ある無きが故に、亦虚と實と相待すると無し。復次に、畢竟空とは、一切法を破して遺餘なからしむるが故に、畢竟空と名く。若し小にても遺餘あらば、畢竟と名けず。若し相待の故に、應に有るべしと言はゞ、是の事は然らず。

問うて曰く、(四一)諸法は盡く空ならず、何となれば因緣所生の法は空なるも、而も因緣は不空なれば

【四〇】第二七問。一切法畢竟空とは背理の甚しきもの也。何となれば一の實法ありて餘の諸法の空を知るべければなり。

【四一】第二八問。諸法盡く空なりと言ふは背理なり、そは因緣それ自らは空ならざるを以てなり。

なり、譬へば、樑椽の因緣和合するが故に舍と名く。舍は空なるも、樑椽は空なるべからざるが如し。答へて曰く、因緣も亦空なり。因緣は定まらざるが故なり。譬へば父子の如し。父生ずるが故に名けて子と爲し、子を生ずるが故に名けて父と爲す。復次に、最後の因緣は依止する所無きが故なり。山河樹木、衆生の類の如きは皆地に依止し、地は水に依止し、水は風に依止し、風は虛空に依止するも、虛空は依止する所なし。若し本にして依止する所なければ、末も亦依止する所なけん。是の故に當に一切法の畢竟空なることを知るべし。

問うて曰く、〔四一〕然らず、諸法は應に根本あるべし。神通を以て變化する所あるに、化する所は虛なりと雖も、而も化主は不空なるが如し。答へて曰く、凡夫人は見る所の化物、久しからざるが故に、之を謂て空と爲し、化主は久しきが故に、之を謂つて實と爲す。聖人は、化主も復た前世の業因緣の和合より生じ、今世に復た諸の善法を集めて神通力を得るが故に能く化を作すと見る。般若波羅蜜〔多〕の後品の中に說くが如くんば、三種の變化あり。煩惱變化、業變化、法變化なりと。是の故に化主も亦空なることを知る。

問うて曰く、〔四二〕諸の牢固ならざる者は、不實の故に、應に空なるべし、諸の牢固なる物、及び實法は空なるべからず。大地・須彌山・大海水・日月・金剛等の如きは、色の實法にして、牢固なるが故に、

〔四一〕第二九問、諸法には不變不空の根本なかる可らず。
〔四二〕第三〇問、須彌山海等も畢竟して空なりといふ理由如何。

空なるべからず。何となれば地及び須彌は常住なればなり。劫を竟はれば衆川は竭くるとあらんも、海は則ち常に滿ち、日月周天は窮極すると有ること無けん。又凡人の所見の如きは虛妄不眞なるが故に、應に空なるべきも、聖人の所得、及び法性眞際涅槃の相の如きは、應に是れ實法なるべし。云何が畢竟皆空と云ふや。復次に、有爲法は因緣生なるが故に、不實なれども、無爲法は因緣より生せざるが故に實なるべし。復云何が畢竟空と言ふや。答へて曰く、堅固不堅固は不定なり、故に皆空なり。何となれば有人は此を以て堅固と爲し、有人は此を以て不堅固と爲す。人は金剛を以て牢固と爲せども、帝釋は手に執り、人の杖を捉ふるが如く、以て牢固と爲さざるが如し。又金剛を破する因緣を知らざるが故に以て牢固と爲す。若し龜甲の上に著けて、山羊の角を以て打ち破るとを知れば、則ち牢固ならざることを知る。七尺の身には、大海を以て深しと爲せども、羅睺阿脩羅王は、大海の中に立ちて膝水上に出で、兩手を以て須彌の頂を隱し、下に向つて忉利天の喜見城を觀る。此は則ち大海を以て淺しと爲す。若し短壽の人は地を以て常久牢固と爲し、長壽の者は地を無常にして牢固ならずと見る。佛說七日喩經の如きは、佛、諸の比丘に告げたまはく、「一切有爲の法は無常變異にして皆磨滅に歸す。劫盡きんと欲する時は、大旱積ること久しく、藥草樹木は皆悉く燋枯す。第二日あつて出づるや、諸の小流水は皆悉く乾き竭き、第三日出づるや、大河の流水は亦都べて涸れ盡く。第四日出づるや閻浮提の中の四大河、及び阿那婆達多池は皆亦空竭し、第五日出づるや、大海乾涸し、

第六日出づるや、大地須彌山等、皆悉く烟を出だすこと陶燒器の如く、第七日出づるや、悉く皆熾然として復た烟氣なく、地及び須彌、乃至梵天まで、火然え滿つ、爾の時に、新に光音天に生ずる者あり、火を見て、怖畏して言はく、既に梵宮を燒けり、將に此に至ること無きやと。先に生ぜる天は、後に生ぜし天を慰喩して言はく、「吾」曾つて已に此に有りたるに、正しく梵宮を燒き、彼に於て滅して此に來り至らざりきと。三千大千世界を燒き已つて復た灰炭なし」。「又」佛、比丘に語りたまはく、「此の如き大事は、誰か之を信ずる者ぞ。唯眼に見て乃ち能く信ずること有るのみ。又比丘よ、過去の時に須涅多羅外道なる師あり。欲を離れて四梵行を行じ。無量の弟子も亦欲を離るることを得たり。須涅多羅は是の念を作さく、我は弟子と同じく一處に生ずべからず、今當に深く慈心を修すべしと。此の人は深く慈を思ふを以ての故に光音天に生じたり」と。「其時に」佛の言はく、「須涅多羅は我が身是なり。我は是の時、眼に此の事を見たり」と。是の故に當に牢固なる實物も、皆悉く滅に歸することを知るべし。

問うて曰く、【一四四】汝は畢竟空を說くに何を以てか無常の事を說くや。畢竟空は今即ち是れ空にして、無常は今有にして後空なり。答へて曰く、【一四五】無常は則ち是れ空の初門なり。若し無常を諦め了れば、諸法は則ち空なり。是の故に聖人は初に四行を以て世間の無常を觀ず。若し所著の物を見るに無常な

【一四四】第三一問、畢竟空と無常空との矛盾の調和如何。
【一四五】無常は空の初門なり。

り、無常なれば則ち能く苦を生じ、苦なるが故に心に厭離を生ず。若し無常なれば空相は則ち取る可らず、幻の如く化の如し、是を名けて空と爲す。外物既に空なれば、内主も亦空なり。是を無我と名く。復次に、畢竟空は是を眞空と爲す。二種の衆生あり。一は多く愛を習ひ、二は多く見を習ふ。愛多き者は、喜んで著を生じ、著する所、無常なるを以ての故に、憂苦を生ず。是の人の爲には、「汝が著する所の物は、無常にして壞するが故に、汝は則ち之が爲に苦を生ず。若し此の所著の物、苦を生ぜば著を生ずべからず」と說く。是を無作解脫門を說くと名く。見多き者は、諸法を分別することを爲し、實を知らざるを以ての故に、邪見に著す。是の人の爲の故に、直に諸法は畢竟空なりと說く。復次に、若し所說あれば皆是は破すべし、破すべきが故に空なり。所見既に空なれば、見主も亦空なり。是を畢竟空と名く。汝が、「聖人所得の法は應に實なるべし」と言ふは、聖人の法を以て能く三毒を滅するは顚倒虛誑に非ず、能く衆生をして老病死の苦を離れて涅槃に至ることを得せしむ。是れ名は實なりと雖も、皆因緣和合より生ずるが故に、先に無にして今有なり。今有にして後無なるが故に、受くべからず。著す可らざるが故に、亦空にして實に非ず。佛、栰喩經に說きたまふが如くんば、善法すら尚捨つべし、何に況んや不善をや。

【四六】栰喩經の所說。

復次に、聖人の有爲・無漏の法は有漏法の緣より生ず。「而るに」有漏法は虛妄不實の緣より生ずる

所の法なり。云何が實と爲す「と云ふに」、有爲法を離れて無爲法無きとは先に說けるが如し。有爲法の實相は卽ち是れ無爲法なり。是を以て一切法は畢竟不可得なり。故に名けて畢竟空と爲す。

(四七)無始空とは、世間の若くは衆生、若くは法は、皆始あること無し。今生の如きは、前世の因緣によつて有り。前世も復た「その」前世によつて有り。是の如く展轉すれば、衆生は始あること無く、法も亦是の如し。何となれば若し先に生じて後に死せば、則ち死に從はざるが故に生ず、生も亦死無けん。若し先に死して後に生あらば、則ち因なく緣なく、亦生ぜずして而も死あり。是の故に一切法は則ち始あること無し。經の中に說くが如し。佛、諸の比丘に語りたまはく、「衆生は始あること無し、無明に覆はれ愛に繫がれて生死に往來するも、始は不可得なり」と。是の無始法を破するが故に名けて無始空と爲す。

問うて曰く、(四八)無始は是れ實なり、破すべからず。何となれば若し衆生及び法に始あらば、邊見に墮し、無因見に墮す。是等の如き過を遠離するが故に、應に衆生及び法は無始なりと說くべし。今無始空を以て是の無始を破せば、則ち還つて有始の見に墮せん。答へて曰く、今無始空を以て無始の見を破すとも又有始の見に墮せず。譬へば人を火より救うて深水の中に著くべからざるが如し。今是の無始を破するも亦有始の中に著せず、是れ則ち中道を行ず。

【四七】無始空の義解。生死無始なるが故に祖父母等盡きざるなり。

【四八】第三二問、無始空を以て無始を破せば、還つて有始の見に墮するにあらずや。

問うて曰く、〔四九〕云何が無始を破するや。答へて曰く、無窮なるを以ての故に。若し無窮なれば則ち後なく、無窮にして後無くば則ち亦中なし。若し無始なれば則ち一切智人を破すと爲す。何となれば世間の無窮に著すれば則ち其の始を知らず、始を知らざるが故に則ち一切智人なし。若し一切智人あれば無始と名けず。復次に、若し衆生相を取り、又諸法の一相、異相を取り、此の一異の相を以て今世より前世を推し、前世より復前世を推し、是の如く展轉して、衆生及び法の始は不可得なれば、則ち無始の見を生ず。是の見は虛妄なり。一異を以て本と爲す。是の故に破すべし。有爲空〔を以て〕有爲法を破するが如きは、是の有を空と爲すも、卽ち復た患と爲す。復た無爲空を以て無爲法を破す。今無始を以て有始を破するに、無始も卽ち復た患と爲し、復た無始空を以て是の無始を破す。是を無始空と名く。

問うて曰く、〔五〇〕若し爾らば佛は何を以てか衆生は生死に往來して本際不可得なりと說きたまふや。答へて曰く、衆生をして久遠より已來生死に往來して大苦を爲せることを知り、厭患の心を生ぜしめんと欲したまへばなり。經に說くが如きは、一人世間に在つて一劫の中に身を受け害を被る時を計るに、諸血を聚集することは海水より多く、啼泣して淚を流し、及び母乳を飮むことも皆亦是の如く、身骨を積集すること〔五一〕毘浮羅山より過ぎたり。譬喩へば、天下の草木を斬つて二寸の籌と爲し、其の父

【四九】第三三問、無始を破する理由如何。

【五〇】第三四問、佛陀が衆生の本際は不可得なりと說き給ひし理由如何。

【五一】毘浮羅山(Vipula)

祖・曾祖を數ふるに猶盡くすこと能はず、又盡く地を以て泥丸と爲して、其の母及び曾祖母を數ふるに猶亦盡くさざるが如し。是の如き等無量劫の中に生死の苦惱を受け、初始は不可得なるが故に、心に怖畏を生じて諸の結使を斷ず。無常の如きは邊と爲すと雖も而も佛は是の無常を以て衆生を度したまへり。無始も亦是の如く、是れ邊なりと爲すと雖も、亦是の無始を以て衆生を度し給へり。衆生を度して厭心を生ぜしめんが爲の故に、無始ありと說くも、實に無始ありと爲すに非ず。何となれば實に無始あらば無始空を說くべからざればなり。

問うて曰く、(三二)若し無始は實法に非ずんば云何が以て人を度するや。答へて曰く、實法の中には人を度するに、諸の說法すべき語言なし。人を度するは皆是れ有爲虛誑の法なり。佛は方便力を以ての故に、是無始を說き給ふ。無著の心を以て說き給ふか故に、受者も亦無著なるを得、無著の故に則ち厭離を生ず。復次に、宿命智を以て衆生を見るに、生死相續して無窮なり、是の時を實と爲す。若し慧眼を以てすれば、則ち衆生及び法の畢竟空を見る。是を以ての故に無始空と說く。般若波羅蜜「多」の中に說くが如くんば、常觀も不實なれば、無常觀も、亦不實なり。苦觀も不實なれば、樂觀も、亦不實なり。而も佛は常樂は倒と爲し、無常と苦とは、(三三)諦と爲すと說きたまへり。「これ」衆生多くは、常樂に著して、無常と苦とには、著せざるを以てなり。是の故に、無常と苦との諦を以て是の常、樂の倒を破す。是

【三二】第三五問、非實の法なる無始を以て、云何が人を度するや。

【三三】諦とは、原理若くは眞理の義なり。

を以ての故に無常と苦とを諦と爲すと說きたまふ。若し衆生あり、無常と苦とに著せば、無常も苦も亦空なりと說く。有始無始も亦是の如く、無始〔を以て〕能く始に著する〔顚〕倒を破す。若し無始に著すれば復た無始を以て空と爲す。是を無始空と名く。

問うて曰く、〔五四〕有始の法も亦是れ邪見にして應當に破すべし。何を以てか唯無始の見のみを破すや。答へて曰く、有始は是れ大惑なり。所以は何となれば若し始あらば、初身は則ち罪福の因緣なくして、而も善惡の處に生ず。若し罪福の因緣に從つて生ぜば名けて初身と爲さず。そは若し罪福あれば則ち前身に從つて後身を受くればなり。若し世間有始ならば是の如き咎あり。是の故に菩薩は先に已に是の麤惡の邪見を捨て、菩薩は常に習ふに無始を用つて、衆生を念ずるが故に無始と說き常に因緣の法を行ずるが故に、法は無始なりと言ふも、未だ一切智を得ざるが故に、或は無始の中に於て錯謬す。是の故に無始空を說く。復次に、無始〔を以て〕已に有始を破すれば、空を須たずして有始を破す。今無始を破せんと欲するが故に無始空を說く。

問うて曰く、〔五五〕若し無始〔を以て〕有始を破せば、有始も亦能く無始を破せん、汝は何を以てか但空を以て無始を破すと言ふや。答へて曰く、是の二は皆邪見なりと雖も而も差別あり。有始は諸の煩惱

【五四】 第三六問、有始の見を破せずして、無始の見のみを破する理由如何。

【五五】 第三七問、無始よく有始を破せば、有始も亦よく無始を破せん、今何故に但空を以て無始を破するか。

を起す邪見の因縁なり。無始は慈悲及び正見を起す因縁なり。何となれば衆生の無始より世界の苦惱を受くることを念じて悲心を生じ、身に從つて次第に身を生じ、相續して斷せざることを知り、便ち罪福の果報を知つて正見を生ずればなり。若し人無始に著せざれば、即ち是れ助道の善法なり。若し相を取り著を生ぜば、即ち是れ邪見なり。常・無常の見・有始の見の如きは、無始の見を破すと雖も、畢竟して無始を破すること能はず。無始は能く畢竟して有始を破す。是の故に無始を勝れりと爲す。(五六)善[を以て]不善を破り、不善[を以て]善を破するが如きは、互に相破すと雖も、而も善は能く畢竟して惡を破す。賢聖の道を得て永く惡を作さざるが如し。惡法は則ち然らず、勢力微薄なるが故なり。人の五逆罪を起して善根を斷じ、地獄に墮すと雖も、久しうして一劫に過ぎず。緣に因て地獄を脱することを得、終に道果を成ずるが如く、無始有始の優劣不同も亦是の如し。無始の力大なるを以ての故に、能く有始を破す、是の故に有始空を說かず。

(五七)散空とは、散は別離の相に名く。諸法の如きは和合するが故に有なり。車は輻輞轅轂あり、衆合するを以て車と爲す。若し離散して各一處に在れば則ち車名を失するが如し。五衆和合の因緣の故に名けて人と爲す、若し五衆を別離すれば人は不可得なり。

問うて曰く、(五八)若し是の如く說けば但だ假名のみを破して色を破せず、亦輻輞を離散すれば車の名

【五六】善は惡よりも强し。
【五七】散空の義解。
【五八】第五八問、若し是の如くんば、事物成立の要素は儼として存在するにあらずや。

を破すべくして、輻輳を破せざるが如し。散空も亦是の如く、但五衆を離散して人を破すべきも、而も色等の五衆を破せず。答へて曰く、色等も亦是れ假名なりと破す。所以は何ん微塵の和合せるを假に名けて色と爲すが故なり。

問うて曰く、[五九]「我は微塵を受けず、今は可見の者を以て色と爲し、是れ實に有と爲す、云何が散じて空と爲すや。答へて曰く、若し微塵を除けば、四大和合の因縁より、生じ出でたる可見の色も亦假名なり。四方の風和合して水を扇げば則ち沫聚を生ずるが如く、四大和合して色を成ずることも亦是の如し。若し四大を離散すれば則ち色あること無し。復次に、是の色に香味觸及び四大の和合を以ての故に有色可見なり。諸の香味觸等を除いては更に別色なく、智を以て分別するに各各離散して色は不可得なり、若し色は實有ならば、此の諸法を捨して應に別に色あるべし、而も更に別なし。是の故に經に言はく、「所有の色は皆四大の和合によつて有なり」と。和合「を以て」有なるが故に皆是れ假名なり、假名なるが故に散ずべし。

問うて曰く。[六〇]色は假名なるが故に散ず可くんば四衆は色なし、云何が散ずべきや。答へて曰く、四陰も亦是れ假名なり。生老住無常觀の故に散じて空と爲す。何となれば生時は異なり、老時は異なり、住時は異なり、無常の時は異なるを以てなり。復次に、三世の中に是の四衆は皆亦散滅すと觀

【五九】第三九問、可見のものを色となし、有と爲さば云何が散じて空と爲すや。

【六〇】第四〇問、色は假名なるが故に散ずべくんば、受・想・行・識の四衆には色なし、云何が散ずべきや。

す。復次に、心は所緣に隨ひ、緣滅すれば則ち滅し、緣破すれば則ち破す。復次に、此の四衆は不定なり。緣に隨つて生ずるが故に。譬へば火の如し、所燒の處に隨つて名を得、若し燒處を離れては火は不可得なり。眼色を緣ずるに因つて眼識を生ず、若し所緣を離れては識は不可得なり。餘の情識も亦是の如し。經の中に、佛羅陀に告げたまはく、「此の色衆は破壞散滅すれば所有なからしむ、餘衆も亦是の如し」と說くが如し。是を散空と名く。復次に、譬へば小兒の土を聚めて臺殿・城郭・閭里・官舍と爲し、或は米と名け、或は名けて麪と爲し、愛著し守護し、日暮れ將に歸らんとして其の心捨離し、蹋壞すれば[則ち]散滅するが如く、凡夫の人も亦是の如し。未だ欲を離れざるが故に諸法の中に於て愛著を生じ、心若し欲を離るることを得れば、諸法を見て皆散壞し棄捨す、是を散空と名く。復次に、諸法は合集の故に各名字あり。凡夫の人は名字を隨逐し、顚倒を生じて染著す。佛爲に法を說きたまはく、「當に其實を觀ずべし、名字を逐ふこと莫れ、有無は皆空なり」と。迦旃延經に、「集諦を觀ずれば則ち無の見なく、滅諦を觀ずれば則ち有の見なし」と說くが如し。是の如き種種の因緣[の故に]是を散空と名く。

【六二】性空の義解。

(六二)性空とは諸法の性は常に空なるも、假業相續するが故に空ならざるが若きに似たり、譬へば水性は自ら冷なれども火を假るが故に熱し、火を止むること停久ければ水は則ち還つて冷なるが如く、諸法の性も亦是の如し。未だ生ぜざる時は、空にして所有なきこと水性の常に冷かなるが如し。諸法は衆緣和合の故に

有なること、水の火を得て熱を成すが如し。衆緣若くは少く、若くは無ければ、則ち法あること無きこと、火滅すれば湯冷やかなるが如し。經に說くが如し。「眼は空にして我なく我所なし、何となれば性として自ら爾なればなり。耳鼻舌身意、色乃至法等も亦復是の如し」と。

問うて曰く、〔六三〕此の經は我・我所の空を說く、是を衆生空と爲す。法空を說かず、云何が性空を證するや。答へて曰く、此の中には但性空のみを說き、衆生空及び法空を說かず。〔六四〕性空に二種あり。一には十二入の中に於て我なく我所なし。二には十二入の相は自ら空にして我なく我所なし。是れ聲聞論の中の說なり。摩訶衍法には、十二入は我我所無きが故に空なり。十二入の性は無なるが故に空なりと說く。復次に、若し我なく我所なくば自然に法空を得。人は我及び我所に著するを以ての故に、佛は但我なく我所なしと說きたまへり。是の如くなれば應當に一切法は空なることを知るべし。若し我我所の法にすら尚ほ著せず、何に況んや餘法をや。是の故に衆生空「及び」法空は終に一義に歸す。是を性空と名く。復次に性の名は自から有にして因緣を待たず、若し因緣を待たば則ち是れ作法にして名けて性と爲さず。諸法の中には皆性なし。何となれば一切の有爲法は皆因緣より生じ、因緣より生ぜば則ち是れ作法、若し因緣の和合によらざれば則ち是れ無法なるを以てなり。是の如く、一切諸法の性は、不可得なるが故に、名けて性空と爲す。

【六三】第四一問、法空を說かずして、云何が性空を證するか。
【六四】二種の性空を明す。

問うて曰く、（四二）畢竟空にして所有なきは則ち是れ性空なり。今何を以てか重ねて説くや。答へて曰く、畢竟空とは名けて遺餘あること無しと爲し、性空とは名けて本來常に爾りと爲す。水性は冷やかにして、火を假るが故に熱し、火を止むれば則ち還つて冷やかなるが如し。畢竟空は虚空の如く、常に不生不滅不垢不淨なり。云何が同じと云はん。復次に、諸法は畢竟空なり。何となれば性は不可得なればなり。諸法の性は空なり。何となれば畢竟空なればなり。復次に、性空は多くは是れ菩薩の所行にして、畢竟空は多くは是れ諸佛の所行なり。何となれば性空の中には、但因緣和合あつて實性あること無く、畢竟空は三世清淨なるを以てなり。是の如き等の差別あり。

【四二】第四二問、畢竟空なれば性空なり、今之を重説する理由如何。

復次に、一切諸法の性に二種あり。一には總性、二には別性なり。總性とは無常・苦・空・無我・無生・無滅・無來・無去・無入・無出等にして、別性とは火は熱性、水は濕性、心は識性なるが如く、人の喜んで諸惡を作すが故に名けて惡性と爲し、好んで善事を集むるが故に名けて善性と爲すが如し。十力經の中に、「佛は世間の種種の性を知りたまふ」と説くが如し。是の如く諸の性は皆空なり、是を性空と名く。何となれば若し無常性是れ實ならば、應に業の果報を失すべければなり。所以は何んとなれば生滅し、過去は住せざるが故に六情も亦塵を受けず、亦因緣を積習せず、若し積習なくんば則ち誦經、坐禪等無ければなり。是の故に無常性は不可得なることを知る。無常すら尙不可得なり、何に況んや常相をや。復次に、苦性も亦不可得なり。若し實に是

れ苦有らば則ち染著の心を生ずべからず。若し人苦痛を厭患せば、諸樂の中に於ても、亦應に厭患すべく、佛も亦三受――苦・樂・不苦不樂――を説きたまふべからず。亦苦の中に瞋を生じ、樂の中に愛を生じ、不苦不樂の中に癡を生ずべからず。若し一相ならば、樂の中に瞋を生ずべく、苦の中に愛を生ずべし。但是の事は然らず。是の如き等の苦性すら尚不可得なり。何に況んや、樂性の虚妄なるを得可けんや。復次に、空相も亦不可得なり。何となれば若し空相あれば則ち罪福無く、罪福なきが故に、亦今世・後世無ければなり。復次に、諸法は相對して有なり。何となれば若し空あれば應當に實あるべく、若し實あれば應當に空あるべければなり。〔而るに〕空性すら尚無なり、何に況んや實有らんや。復次に、若し無我ならば則ち縛なく解なく、亦今世より後世に至つて罪福を受くること無く、亦業因縁の果報なし。是の如き等の因縁により、無我性を知るすら、尚不可得なり、何に況んや我性をや。復次に、無生無滅の性も亦不實なり。何となれば若し實なれば、則ち常見に墮す。若し一切法常ならば、則ち罪なく福なし。若し有ならば常有、無ならば常無、若し無ならば不生、有ならば不失にして不生不滅性の如きは不可得なり、何に況んや生滅の性をや。無來・無去・無入・無出等の諸の總性も亦是の如し。復次に、諸法の別性、是も亦然らず。何となれば如し火は、能燒の造色と、能照との、二法和合の故に、名けて火と爲せばなり。若し是の二法を離れて火あらば、應に別に用あるべし、而も別に用なし。是の故に火は是れ假名にして亦實あること無きことを知る。若し實に火法なくんば、

云何が熱は是れ火性なりと云はん。復次に、熱性は衆緣より生ず。内に身根あり、外に色觸あり、和合して、身識覺知を生じて熱あり。若し未だ和合せざる時は則ち熱性なし。是の故に熱は火性に非ざることを知る。復次に、若し火、實に熱性あらば、云何が人あり、火に入るに燒けざる 及び人身中に火ありて、而も身を燒かず、空中の火を、水能く滅せざるや。火は定んで、熱性あること無きを以ての故に、神通力の故に火も身を燒くこと能はず、業因緣の五藏は熱せず、神通力の故に水も滅すること能はざるなり。復次に、若し熱性と火と異ならば、火は則ち熱に非ず。若し熱と火と一ならば、云何が熱は是れ火性なりと言はん。餘性も亦是の如く、是の總性、別性は無なるが故に、名けて性空と爲す。復次に、性空とは本より已來空なり。如し世間の人は、虛妄にして久しからざる者、是を空と謂ひ、須彌、金剛等の物、及び聖人所知の如きは、以て眞實にして不空と爲す。此の疑を斷せんと欲するが故に、佛は、「是は堅固に相續して久しく住すと雖も皆亦性空なり」と說きたまへり。聖人の智慧は衆生を度して、諸の煩惱を破すと雖も、不可得となるが故に是れ亦空と爲す。又人は「五衆十二入、十八界は皆空にして、但法性實際の如きは是れ其の實性なり」と謂ふ。佛は此の疑を斷せんと欲するが故に、但分別して、「五衆は法性實際の如く皆亦是れ空なり」と說きたまへり。是を性空と名く。復次に、有爲の性に（会）三相あり、生、住、滅なり。無爲の性にも亦三相あり、不生、不住、不滅なり。有爲の性すら尚空なり、何に況

【会】有爲無爲の三相を明す。

んや有爲法をや。無爲の性すら尙空なり、何に況んや無爲法をや。是の種種の因緣を以て、性の不可得なるを名けて性空と爲す。

自性空とは、〔六六〕一切法に二種の相あり。總相と別相なり。是の二相は、空なるが故に名けて相空と爲す。

問うて曰く、〔六七〕何等か是れ總相にして、何等か是れ別相なるや。答へて曰く、總相とは無常等の如し。別相とは諸法は皆無常なりと雖も、而も各別相あり。地に堅相、火に熱相あるが如し。

問うて曰く、〔六八〕先に已に性を說き、今相を說く。性と相は何等の異あるや。答へて曰く、「有人は言ふ、其の實は異なること無く、名に差別あり。性を說けば則ち相を說くと爲し、相を說けば則ち性を說くと爲す。譬へば火性は卽ち是れ熱相と說けば、熱相は卽ち是れ火性と說くが如し」と。有人は言ふ、「性と相とは小しく差別あり、性とは其の體を言ひ、相とは識る可きを言ふ。釋子の禁戒を受持するが如きは是れ其の性にして、剃髮、割截、染衣は是れ其の相なり。梵志の自ら其法を受くるは是れ其の性にして、頂に〔六九〕周羅あり、三岐杖を執るは是れ其の相なり。火の熱するは、是れ其性にして、烟は是れ其の相なるが如し。近きを性と爲し、遠きを相と爲す。相は不定にして身より出で、性は則ち其の實を言ふ。

【六六】自性空の義解。
【六七】第四三問、何をか總相といひ、何をか別相と言ふや。
【六八】第四四問、性と相との區別如何。
【六九】Śūrga（スーリヤ）小結と譯す。

黄色を見て金相と爲せども、而も内は是れ銅にして、火に燒き石に磨けば、金性に非ざるを知るが如く、人の恭敬供養する時、是れ善人に似たるは、是を相と爲し、罵詈・毀辱・忿然として瞋恚するは、是れ其の性なるが如し」と。性相・内外・遠近・初後等には、是の如きの差別あり。是の諸相の皆空なるを名けて相空と爲す。一切の有爲法は皆是れ無常の相なりと說くが如し。所以は何ん、生滅して住せざるが故に、先無にして今有、已に有にして還、無なるが故に、諸の因緣に屬するが故に、虛誑にして眞ならざるが故に、無常にして因緣生なるが故に、衆合の因緣より起るが故に、是の如き等の因緣の故に、一切の有爲法は是れ無常の相なり。能く身心に惱を生ずるが故に、名けて苦身と爲す。四威儀は苦ならざること無きが故に、苦は聖諦なるが故に、聖人は捨てて受けざるが故に、時として惱まさざること無きが故に、無常なるが故に、是等の如き因緣を以て名けて苦相と爲す。我所を離るるが故に空なり。因緣和合して生ずるが故に空なり、無常・苦・空・無我なるが故に名けて空と爲す。始終不可得なるが故に空なり、心を誑はすが故に名けて空と爲す。賢聖は一切法に著せざるが故に名けて空と爲す。無相・無作の解脫門を以ての故に名けて空と爲す。諸法の實相は無量無數なるが故に名けて空と爲す。一切語言の道を斷ずるが故に名けて空と爲す。一切の心行を滅するが故に名けて空と爲し、諸佛・辟支佛・阿羅漢は、入りて而も出でざるが故に、名けて空と爲す。是の如き等の因緣の故に、是を名けて空と爲す。無常・苦・空なるが故に無我なり。自在ならざるが故に無我なり。主なきが故に名

けて無我と爲し、諸法は因緣より生ぜざるは無し、因緣より生ずるが故に無我なり。無相無作なるが故に無我なり。假名字の故に無我なり。身見顚倒の故に無我なり。我心を斷じて、道を得るが故に、無我なり。是の種種を以て名けて無我と爲す。是の如き等を總相と名く。別相とは、地は堅相、火は熱相、水は濕相、風は動相なり。眼識の依處を眼相と名く、耳・鼻・舌・身も亦是の如し。識は覺相、智は慧相、慧は智相なり。捨を施相と爲し、悔いず惱まざるを持戒の相と爲し、心變異せざるを忍相と爲し、勤を發すを、精進相と爲し、心を攝するを禪相と爲し、著する所なきを智慧相と爲し、能く事を成ずるを方便相と爲し、識の生滅を作すを世間相と爲し、識無きを涅槃相と爲す。是の如く諸法には各各別相あり。是の諸相は皆空なりとを知る。是を自相空と名く。性空の中に說くが如し。

問うて曰く、(七〇)何を以てか但相空と說かずして自相空と說くや。答へて曰く、若し相空と說けば法體の空を說かず、自相空と說けば卽ち法體空なり。復次に、衆法和合するが故に一法生ず。是の一法は空なり。是くの如く一一の法は皆空なり。今因と緣とを和合せる法は展轉して皆亦空なり。一切法は各各自相空なり。是を以ての故に名けて自相空と爲す。

問うて曰く、(七一)若し一切法は各各自相空ならば、云何ぞ復た所說あるや。答へて曰く、衆生は顚倒の故に一相・異相・總相・別相等を以て、而も諸法に著す。是を斷ぜんが爲の故に所說あり。是の如き等

【七〇】第四五問、但相空と言はずして、自相空と言ふ理由如何。

【七一】第四六問、若し一切法は自相空ならば、云何ぞ復た所說あるや。

の因緣を名けて自相空と爲す。

一切法空とは、(七一)一切法は五衆・十二入・十八界等に名く。是の諸法は、皆種種の門に入る。所謂一切法は有相・知相・識相・緣相・增上相・因相・果相・總相・別相・依相なり。

問うて曰く、(七二)云何が一切法は有相なるや。答へて曰く、(七三)一切法には好あり醜あり。內あり外あり、一切法は心あつて生ずるが故に名けて有と爲す。

問うて曰く、(七五)無法の中に云何が相ありと言ふや。答へて曰く、若し無法は名けて法と爲さず、但有を遮するを以ての故に。名字して無法と爲すのみ。若し實に無法あらば、則ち名けて有と爲す。是の故に一切法は有相なりと說く。

知相とは、(七六)苦法智・苦比智もて能く苦諦を知り、集法智・集比智もて能く集諦を知り、滅法智・滅比智もて能く滅諦を知り、道法智・道比智もて能く道諦を知り、及び世俗智もて能く苦を知り、能く集を知り、能く滅を知り、能く道を知り、亦能く虛空・非智緣滅を知る。是を一切法の知相と名く。

識相とは、(七七)眼識は能く色を知り、耳識は能く聲を知り、鼻識は能く香を知り、舌識は能く味を知り、身識は能く觸を知り、意識は能く法を知る。能く眼を知り、能く色を知り、能く眼識を知る。能

【七一】一切法空の義解。
【七二】第四七問、一切法の有相なる理由如何。
【七三】有相の義解。
【七五】第四八問、無法なるに而も相有りと言ふ理由如何。
【七六】知相の義解。
【七七】識相の義解。

く耳を知り、能く聲を知り、能く耳識を知る。能く鼻を知り、能く香を知り、能く鼻識を知る。能く舌を知り、能く味を知り、能く舌識を知る。能く身を識り、能く觸を識り。能く身識を識る。能く意を知り、能く法を知り、能く意識を知る。是を識相と名く。

緣相とは、（七八）眼識及び眼識相應の諸法は能く色を緣じ、耳識及び耳識相應の諸法は能く聲を緣じ、鼻識及び鼻識相應の諸法は香を緣じ、舌識及び舌識相應の諸法は能く味を緣じ、身識及び身識相應の諸法は能く觸を緣じ、意識及び意識相應の諸法は能く法を緣じ、能く眼を緣じ、能く色を緣じ、能く眼識を緣じ、能く耳を緣じ、能く聲を緣じ、能く耳識を緣じ、能く鼻を緣じ、能く香を緣じ、能く鼻識を緣じ、能く舌を緣じ、能く味を緣じ、能く舌識を緣じ、能く身を緣じ、能く觸を緣じ、能く身識を緣じ、能く意を緣じ、能く法を緣じ、能く意識を緣す。是を緣相と名く。

增上相とは、（七九）一切の有爲法は、各各增上し、無爲法も亦、有爲法に於て增上あり、是を增上相と名く。

因果相とは、（八〇）一切法は各各因と爲り、各各果と爲る。是を因果相と名く。

總相・別相とは、（八一）一切法の中に各各總相別相あり。馬は是れ總相、白は是れ別相なるが如し。人は是れ總相にして、一耳を失へるは則ち是れ別相なるが如し。是の如く各各展轉して皆總相・別相あり。

【七八】緣相の義解。
【七九】增上相の義解。
【八〇】因果相の義解。
【八一】總相別相の義解。

是を總相・別相と爲す。

[八二]依相とは諸法は各各共に相依止す。草木山河の地に依止し、地の水に依止するが如し。是の如く一切各各相依る、是を依止相と名く。是の如く一法門の相に一切法を攝す。復次に、二法門に一切法を攝す。所謂色と無色法、可見と不可見法、有對と無對法、有漏法と無漏法、有爲法と無爲法、内法と外法、觀法と緣法、有法と無法、是の如き種種の二法門の相、三四五六乃至無量の法門の相ありて一切法を攝す。是の諸法の皆空なることは上に說けるが如し。

問うて曰く、[八三]若し皆空ならば何を以て一切法の種種の名字を說くや。

答へて曰く、凡夫の人は空法の中に於て、無明[を以て]顚倒して相を取るが故に愛等の諸の煩惱を生じ、煩惱に因るが故に種種の業を起し、種種の業を起すが故に種種の道に入り、種種の道に入るが故に種種の身を受け、種種の身を受くるが故に種種の苦樂を受く。[八四]蠶の絲を出だすに因る所なく、自ら己より出だし、自ら纒裹して燒煮の苦を受くるが如し。聖人は清淨の智慧力の故に、一切法は本末皆空なりと分別し、衆生を度せんと欲するが故に其の著處を說く。謂ゆる五衆・十二入・十八界等なり。汝は但無明を以ての故に而も五衆等を生じ、自ら作し自ら著す。若し聖人但空のみを說かば道を得ると能はざらん。[そは]因る所なく厭ふ所なき

【八二】依相の義解。

【八三】第四九問、若し空ならば何故に一切法の種種の名字を說くか。

【八四】有に著して苦を受くることは、蠶の己より絲を出して自ら苦しむが如し。

を以てなり。

問うて曰く、〔五〕汝は一切法は、空なりと言ふも、是の事は然らず。何となれば一切法は、各各自ら相攝すればなり。地は堅相、水は濕相、火は熱相、風は動相、心は識を相と爲し、慧は知を相と爲すが如し。是の如く一切法は、各自其の相に住す。云何が空と言ふや。答へて曰く、性空と自相空との中に已に破せり。今當に更に說くべし。相は不定の故に、是れ相なるべからず。酥蜜膠蠟等の如きは皆是れ地相なれども、火と合するが故に自ら其の相を捨てて、轉じて濕相と成り、金銀銅鐵は火と合するが故に亦自ら其の相を捨てて變じて水相と爲り、水の如きは寒を得て氷と成り、轉じて地相と成る。人の醉ひ睡れる、〔或は〕無心定に入れる、〔又は〕凍氷の中の魚の如きは、皆心識なく、其の心相を捨てて覺知する所なし。如し慧は知を相と爲すも、諸法實相に入れば、則ち覺知する所なく自ら知相を捨つ。是の故に諸法は定相あること無し。復次に、若し諸法は定相ありと謂はば是れ亦然らず。何となれば如し未來の法相は、應に現在に來至すべからず。若し現在に至れば則ち未來の相を捨つ。若し未來の相を捨てずして現在に入らば、未來は則ち是現在にして、未來の果報なしと爲す。若し現在は過去に入れば則ち現在の相を捨つ。若し現在の相を捨てずして過去に入らば、過去は即ち是れ現在なり。是の如き等の過〔あるが故に〕、則ち諸法には定相あること無しと知る。

〔五〕 第五〇問、一切法みな空なりと言ふも、法等に各それぞれの特性あるは何故なるか。

復次に、若し有爲法を謂へば定んで三相あり。生と住と滅となり。無爲法にも亦三相あり。不生と不住と不滅となり。汝は未來世の中の非智緣滅の法を以てするも、是れ有爲法にして而も有爲の相なし。若し汝非智緣盡を以て、是滅相と謂はば、是亦然らず。何となれば無常にして滅するが故に是を滅相と名け、非智緣滅を以ての故に、名けて滅相と爲すに非ざればなり。是の如く、種種〔に考察するも〕定相あること無し。若し定相あり、而して空ならず〔といはば〕、是の事は然らず。

問うて曰く、(八六)實有の法は空ならざるべし。何となれば凡夫と聖人は知る所各異なり、凡夫の知る所は是れ虛妄にして、聖人の知る所は是れ實なればなり。實の聖智に依るが故に虛妄の法を捨し、虛妄に依つて虛妄を捨すべからず。答へて曰く、凡夫の知る所を破するが爲の故に名けて聖智と爲す。若し凡夫法なければ則ち聖法なし。病なければ則ち藥なきが如し。是の故に經に言く、「凡夫の法を離れて更に聖法なく、凡夫法の性即ち是れ聖法なり」と。

復次に、聖人は諸法に於て相を取らず、亦た著せず。是の故に聖法を眞實と爲す。凡夫は諸法に於て相を取り、亦た著するが故に凡夫人の法を以て虛妄と爲す。聖人は用ふと雖も而も相を取らず。相を取らざるが故に則ち定相なし。是の如きは應に難と爲すべからず。凡夫の地に於ては、法に著して「是は聖法なり、是は凡夫法なり」と分別すれども、若し賢聖の地に於ては、則ち分別する所なく、衆

【八六】第五一問、聖人の知れる實法は空にあらざるべし、然るを何故に一切法皆空なりと言ふや。

生の病を斷ずるが爲の故に、「是は虛、是は實」と言ふのみ。「佛語は虛に非ず、實に非ず、縛に非ず、解に非ず、一に非ず、異に非ず、是の故に分別する所なく、淸淨なること虛空の如し」と說くが如し。

復次に、若し法は悉く空ならざれば、說くべからず。不戲論を智人の相と爲すも、亦た說くべからず、受けず著せず依止する所なく、空・無相・無作なるを名けて眞法と爲す。

問うて曰く、〔八七〕若し一切の法は空にして、卽ち亦是れ實ならば、云何が實なるもの無しと言ふや。

答へて曰く、若し一切の法空ならば、假令法あるも已に一切法中に入って破す。若し法なければ難を致すべからず。

問うて曰く、〔八八〕一切の法は空にして是れ實ならば、佛は三藏の中に何を以てか、多く無常・苦・空〔及び〕無我の法を說きたまひしや。經に說くが如くんば、佛が諸の比丘に告げたまはく、「汝が爲に法を說く。名けて第一義空と爲す。何等か是れ第一義空なる。眼生ずるも、從來する所なく、滅するも亦去る所なし。但業あり、業の果報あって、作者は不可得なり。耳鼻舌身意も亦復た是の如し」と。是の中に若し生ずるも從來する所なく、滅するも亦去る所なしと說くは、是れ常法は不可得なるが故に無常なり。但業及び業果報あり、而も作者は不可得なりとは、是を聲聞法中の第一義空と爲す。云何が一切法は空なりと言ふや。答へて曰く、我は是れ一切諸の煩惱の根本なり。先づ五衆

【八七】第五二問、一切の法は空にして而も實ならば、云何ぞ實なるものなしと言ふや。

【八八】第五三問、一切法は空にして是れ實ならば、佛は何故に無常・苦・空及び無我の法を說かれしか。

に著して我と爲し、然る後に外物に著して我所と爲す。我所の縛の故に而も貪恚を生じ、貪恚の因緣の故に諸業を起す。佛の說きたまふが如く、作者なければ則ち一切法の中の我を破す。若し眼は從來する所なく、滅するも亦去る所なしと說くは、則ち眼の無常を說くなり。若し無常なれば卽ち是れ苦なり。苦なれば卽ち是れ我我所に非ず。我我所なきが故に、一切法の中に於て心に著する所なし。心に著する所なきが故に、則ち結使を生ぜず。結使を生ぜざれば、何を以てか空と說かん。是の故に三藏の中には多く無常・苦・空［及び］無我と說いて、多く一切法は空なりと說かず。

復次に、衆生は佛の無常・苦・空及び無我を說き給へるを聞くと雖も、而も諸法を戲論す。是の人の爲の故に、諸法は空なり。若くは我なく亦我所なしと說く。若し我なく我所なければ、是れ卽ち空義に入るなり。

問うて曰く、〔八九〕佛は何を以てか業あり果報ありと說きたまひしや。若し業あり果報あらば、是れ則ち空ならず。答へて曰く、佛の說法に二種あり。一には無我、二には無法なり。神を見て、有常なりと著する者の爲の故に、作者無しと說き、斷滅の見に著する者の爲の故に、業あり、業の果報ありと說きたまへり。若し人あり、作者なしと說くを聞いて、轉た斷滅の見の中に墮するが爲に、業あり業の果報ありと說く。此の五衆は業を起して後世に至らず、此の五衆の因緣［を以て］五衆を生じ、業

【八九】第五四問、佛は業あり、果報ありと說く。然らば空なりといふは、極めて大なる矛盾にあらずや。

の果報の相續を受くるを以ての故に、業の果報を受くと説く。〔九〇〕如し母子は、身異なると雖も、而も因緣相續するが故に、母藥を服すれば、兒の病則ち差ゆるが如し。是の如く、今世後世の五衆は異なりと雖も、而も罪福の業因緣あつて相續するが故に、今世の五衆の因緣に從つて、後世の五衆の果報を受くるなり。

復次に、有人は諸法の相を求めて、一法の若しくは有、若しくは無、若しくは常、若しくは無常等に著す。法に著するを以ての故に、自法には愛を生じ、他法には恚を生じて、而も惡業を起す。是の人の爲の故に諸法は空なりと説く。諸法空なれば、則ち法有ること無し。何となれば愛す可き所の法は、能く結使を生じ、能く結使を生ずれば、則ち是れ無明の因緣なればなり。若し無明を生ぜば、云何が是れ實ならんや。是を法空と爲す。

復次に、衆生に二種あり。〔九一〕一には世間に著し、二には出世間に著す。出世間を求むるに上中下あり。上は利根大心にして、佛道を求め、中は中根にして、辟支佛道を求め、下は鈍根にして、聲聞道を求む。佛道を求むる者には、六波羅蜜[多]及び法空を説き、辟支佛を求むる者の爲めには、十二因緣及び獨行の法を説き、聲聞を求むる者の爲には、衆生空及び四眞諦の法を説く。〔九二〕聲聞は生死を畏れ惡み、衆生空及び四眞諦の無常・苦・空・無我を聞けば、諸法を戲論せず。

〔九〇〕母、藥を服すれば、兒の病則ち癒ゆるが如し。罪福の業因緣の相續も亦是の如し。

〔九一〕二種の衆生——(一)世間に著し、(二)出世間に著す。

〔九二〕三乘の意義を圖中の鹿、馬、白香象に譬ふ。

闇中に處あり、既に毒箭を著け、一向に脱せんことを求めて、更に他念なきが如し。辟支佛は老病死を厭ふと雖も、猶よく少しく甚深の因緣を觀じ、亦能く少しく衆生を度す。譬へば犀の闇中に在つて毒箭を被ると雖も、猶能く其の子を顧戀するが如し。菩薩は老病死を厭ふと雖も、能く諸法の實相を觀じ、究盡して深く十二因緣に入り、法空に通達して無量の法性に入る。譬へば白香象王の獵圍の中に在つて、箭射を被むると雖も、獵者を顧視せず、心に畏るる所なく、及び眷從を將ゐて安歩して去るが如し。(九三)是の故に三藏の中に多く法空を說かず。或は利根の梵志あり。諸法の實相を求めて老病死を厭はず、種種の法相に著す。是が爲に故らに法空を說く。所謂(九四)先尼梵志は、五衆は即ち是れ實なりと說かず。亦五衆を離れて是れ實なりと說かず。復強論梵志あり。佛答へたまはく、「我が法の中には有無を受けず、汝何の論ず所かある。有無は是れ戲論の法、結使の生處なり」と。及び雜阿含の中の大空經には二種の空を說く。衆生空と法空なり。羅陀經の中には色衆を破裂分散して所有なからしむることを說き、栰喩經の中には、法すら尙捨つべし、何に況んや非法をやと說けり。波羅延經、利衆經の中には、智者は一切法に於いて受けず著せず、若し法を受け著すれば、則ち戲論を生ず。若し依止する所なければ、則ち所論なし。諸の得道の聖人は、諸法に於いて取らず捨てず、若し取捨なければ、能く一切諸見を離ると說けり。是の如き等は三藏の中の處處に說ける法空なり。

【九三】小乘經には多く法空を說かず、但少分を說く。
【九四】Senikaは譯して勝軍、又は有軍といふ。

是を名けて一切法空と爲す。

不可得空とは、(九五)有人の言く、「衆、界、入の中に於て、我法も常法も不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す」と。有人の言く、「一切法、及び因緣は、畢竟不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す」と。

問うて曰く、(九六)何を以ての故に不可得空と名くるや。智力少きが爲の故に不可得なりや。實に無なるが爲の故に不可得なりや。答へて曰く、諸法は實に無なるが故に、不可得なり、智力少きには非ざるなり。

問うて曰く、(九七)若し爾らば畢竟空、自相空と異なること無し。今何を以ての故に更に不可得空を說くや。答へて曰く、若し人あり、上の諸空の都べて所有なきことを聞かば、心に怖畏を懐いて、疑を生ぜん。今空なる所以を說くは、因緣を求索するに、不可得なるを以てなり。不可得空を說いて、是の疑怖を斷ぜんが爲の故に、佛は不可得空を說きたまへり。所以は何ん、佛の言はく、「我れ初發心より乃ち成佛するに至るまで、及び十方の佛は、諸法の中に於て實を求むるに不可得なり」と。是を不可得空と名く。

問うて曰く、(九八)何事か不可得なるや。答へて曰く、一切法、乃至無餘涅槃は、不可得なるが故に、

【九五】不可得空の義解。
【九六】第五五問、不可得空と名くる理由如何。
【九七】第五六問、畢竟空自相空と不可得空と何等の相異ありや。
【九八】第五七問、何事か不可得なるや。

名けて不可得空と爲す。復次に、行者は是の不可得空を得れば、(九九)三毒、(一〇〇)四流、(一〇一)四縛、(一〇二)五蓋、(一〇三)六愛、(一〇四)七使、(一〇五)八邪、(一〇六)九結、(一〇七)十惡の諸の弊惡、垢縛等を得ず。都べて不可得なるが故に、不可得空と爲す。

問うて曰く、(一〇八)若し爾らば行は是不可得空なり、何等の法

【九九】三毒とは、貪瞋癡なり。

【一〇〇】四流とは、一に見流、三界の見惑卽ち智的煩惱。二に欲流、見惑と無明とを除ける、欲界の一切の煩惱。三に有流、見惑と無明とを除ける、上二界の一切の煩惱。有とは生死の果報不亡の義なり。四に無明流、三界の無明。有情は此の四法の爲に漂流して、息まざるが故に名けて流となす。

【一〇一】四縛とは、又四結ともいふ。一に欲愛身縛、欲界の貪欲の身を縛するもの。二に瞋恚身縛、瞋恚の身を縛するもの。三に戒盜身縛、邪戒の身を縛するもの。戒盜又は戒取と名く。もと之れ戒に非ざるを強ひて以て戒と名くれば戒盜と名け、又取つて以て進行すれば戒取と名く。卽ち外道の邪戒なり。四に我見身縛、我見の身を縛するもの。

【一〇二】五蓋。蓋は蓋覆の義。心性を蓋覆して、善法を生ぜざらしむるもの五あり、故に之を五蓋といふ。一に貪欲蓋、五欲(財色食名睡)の境に執著し以て心性を蓋ふもの。二に瞋恚蓋、違情の境(己が氣に入らぬもの)に於て忿怒を懷き、以て心性を蓋ふもの。三に睡眠蓋、心昏く身重くして其の用を爲さず、以て心性を蓋ふもの。四に掉悔蓋、心の躁動するを掉といひ、所作の事に於て、心に憂惱するを悔といふ、以て心性を蓋ふもの。五に疑蓋、事件に於て猶豫して決斷なく、以て心性を蓋ふもの。(本論第十七卷を參照せよ)。

【一〇三】六愛の名數は、大藏法數中に見當らず、多分下記六著心のことならん。一に貪、二に愛、三に瞋、四に癡、五に欲、六に慢。一に引取の心を貪と爲す。謂く六塵等の順情の境に於て、引取して厭くことなく、戀著して捨てざるが故に貪著心と名く。二に貪取の心を愛と爲す。謂く六塵等の順情の境に於て而も愛欲を生じて戀著して捨てざるが故に愛著心と名く。三に忿怒の心を瞋と爲す。謂く一切の違情の境に於て、卽ち忿怒を起し捨去するを能はざるが故に瞋著心と名く。四に迷惑の心を癡と爲す。謂く一切事理の諸法に於て、明了するところなく妄に邪見を生じ執著して捨てざるが故に癡著心と名く。五に樂取の心を欲と爲す。謂く可愛の境に於て、而も樂欲

利を得るや。答へて曰く、戒定慧を得、四沙門果、五根、五無學衆、六捨法、七覺分、八聖道分、九次第定、十無學法を得。是の如き等を得るは、是聲聞法なり。若し般若波羅蜜「多」を得れば、則ち六波羅蜜「多」、及び十地の諸の功德、諸の功德趣を具足す。

問うて曰く、上には一切法乃至涅槃

を起し戀著して捨てざるが故に欲著心と名く。六に自恃輕他の心を慢と爲す。謂く自種姓高貴にして多く才能有るを恃んで他を蔑して捨去すること能はざるが故に慢著心と名くるなり。

【一〇四】七使とは、一に欲、二に見、三に疑、四に慢、五に瞋、六に隨眠、七に慳。一に欲は即ち貪愛の義、使とは、垢なり、汚なり。謂く人諸の所有の功德に於て愛の因ることを求めず、若し他をして我が是の如きの功德を成就せりと知らしめんと欲す、是を欲使と名く。二に見とは執著分別なり。謂く人諸の所有の功德に於て執著分別の見をなし、若し執著を生ずる是を見使と名く。三に疑とは迷惑して了らざるなり。謂く人諸の所有の功德に於て、若し或は功德と爲んや、過失と爲んやと疑惑す。是の如く疑ふ者を是を疑使と名く。四に慢とは、己を恃んで他を凌ぐなり。謂く人己れが所有の功德を以て、他と校量して輕慢を生ぜざれ。若し輕他の心を生ぜば是を慢使と名く。五に瞋とは、狂誇して自ら高うするなり。謂く人己が所有の功德を以て、折責を生ぜざれ。若し折責貢高の心を生ずれ、是を瞋使と名く。六に依附して捨てざるを隨といひ、五情暗冥なるを眠といふ。謂く人諸の所有の功德に於て、常に護念を加へ隨眠煩惱の爲に蓋覆せられざれ。若し煩惱の習氣未だ除ぜざる是を隨眠使と名く。七に謂く、人諸の所有の功德に於て、一切の衆生に回施して惜倍の心なし。若し慳惜の念を生ぜば是を慳使と名く。

【一〇五】八邪とは、一に我、二に衆生、三に壽命、四に士夫、五に常、六に斷、七に有、八に無、一に謂く、衆生五陰の法の中に於て、妄に我我所ありと計し、之を執して實と思ひ強て主宰を立つ、是を我見と名く。二に謂く、衆生は妄に五陰と共に和合して而も生ずと計す、是を衆生見と名く。三に謂く、衆生五陰の法中に於て、妄に我一期の果報を受け、壽命長あり短ありと計す、是を壽命見と名く。四に謂く、衆生妄に我れ士夫の用ありて商買書算耕農等の事を能すと計す、是を士夫見と名く。五に謂く、衆生五陰の身に於て、妄に今世滅すと雖も、後世復た生じ相續して斷ぜずと計す、是を常見と名く。六に謂く、衆生五陰の身に於て、妄に今世滅し已つて

は、不可得なりと言へり。今何を以てか、戒定慧乃至十地の諸の功德法を得と言ふや。答へて曰く、是の法は皆（一〇五）趣を得と雖も、不可得にして空なるが故に不可得と名け、受なく著なきが故に、是を不可得と名け、無爲法たるが故に不可得と名け、聖諦なるが故に不可得と名け、第一義諦なるが故に不

更に再び生ぜずと計するときは卽ち斷滅を生ず、是を斷見と名く。七に謂く、衆生妄に一切の諸法實に因緣和合によつて生ずと計して、之を執して有となす、是を有見と名く。（因緣は眼等の六根を因となし、色等の六塵を緣となすなり）。八に謂く、衆生と一切諸法とに於て妄に皆自性なしと計し、之を執して無となす、是を無見と名く。

【一〇六】九結とは、一に愛、二に恚、三に慢、四に無明、五に見、六に取、七に疑、八に嫉、九に慳、結は卽ち繫縛の義。謂く一切衆生此の妄惑に因つて、諸の業を造作して而かも衆苦の爲に繫縛せられ、三界に流轉して出離すること能はざるが故に結と云ふなり。一に謂く、諸の衆生貪愛の爲の故に廣く不善を行じ、此に由て遂に未來生死の苦を招き、三界に流轉して出離するを能はず、是を愛結と名く。（廣く不善を行ずとは、謂く廣く殺、盜、婬、妄等の惡業を作すなり）。二に謂く、諸の衆生瞋恚の爲の故に、廣く不善を行じ、此に由つて遂に未來生死の苦を招き、三界に流轉して出離するを能はず、是を恚結と名く。三に謂く、諸の衆生、慢、過慢、我慢、增上慢、下劣慢、邪慢の爲めの故に廣く不善を行じ、此に由つて、遂に未來生死の苦を招き、三界に流轉して、出離するを能はず、是を慢結と名く。四に謂く、諸の衆生無明の爲に覆はれ、苦法集法に於て解了すること能はず、廣く不善を行じ、此に由つて遂に未來生死の苦を招いて三界に流轉して、出離すること能はず、是を無明結と名く。（苦法とは三界生死衆苦の法なり、集法とは三界有爲の法の積集にして卽ち惑業なり）。五に謂く、諸の衆生身見邊見邪見に於て、妄に執著を起し、廣く不善を行じ、此に由て遂に未來生死の苦を招き、三界に流轉して出離すること能はず、是を見結と名く。六に、取は卽ち取著、謂く諸の衆生見取、戒取に於て妄計執著し廣く不善を行じ、此に由て遂に未來生死の苦を招き、三界に流轉して出離すること能はず、是を取結と名く。七に謂く、諸の衆生佛法僧寶に於て、妄に疑惑を生じ、正行を修せず廣く不善を行じ、此に由て遂に未來生死の苦を招き、三界に流轉して出離するを能はず、是を疑結と名く。八に謂く、諸の衆生利養に耽著して他の榮富

可得と名く。聖人は諸の功徳を得と雖も、無餘涅槃に入るが故に以て得と爲さず、凡夫の人は以て大に得と爲す。師子は所作あり、自ら以て奇と爲さずと雖も、餘の衆生は見て以て希有と爲すが如し。[一一〇]聖人は所得ありと雖も而も以て得と作さず、是を名けて不可得と爲す。

[一一一]無法空・有法空・無法有法空。無法とは、有人の曰く、「法の已に滅せるに名け、是に滅して無きが故に無法空と名く」と。有法空とは、諸法は因緣和合して生ずるが故に有法なり。有法は無なるが故に有法空と名く。無法有法空とは、無法有法の相を取るに不可得なり。是を無法有法空と爲す。復次に、無法有法空を觀ずるが故に、無法有法空と名く。復次に、行者は諸法の生滅の若くは有門、若くは無門を觀ずるに、[一一二]生門には喜を生じ、滅門には憂を生ず。行者は生法の空を觀じて、則ち喜心を滅し、滅法の空を觀じて、則ち憂心を滅す。所以は何ん、生ずるも得る所なく、滅するも失ふ所なくして、世の貪愛を除くが故なり。是を無法有法空と名く。

な見て、心に瞋結を起し廣く不善を行じ、此に由て能く未來生死の苦を招き、三界に流轉して出離する能はず、是を瞋結と名く。九に慳く、諸の衆生利養に貪著し資生の具に於て其の心妬悋として捨施すること能はず廣く不善を行じ、此に由て能く未來生死の苦を招き、三界に流轉して出離すると能はず、是を慳結と名く。

【一〇七】十結とは、不殺以下十個作の罪責を破るをいふ。

【一〇八】第五八問、若し爾の如くならば、行は不可得空なり、今何等の法を得るか。

【一〇九】縮藏には趣を助に作る。

【一一〇】縮藏には「知是鈞義名爲不可得」に作る。

【一一一】無法空、有法空、無法有法空の義解。

【一一二】生門とは、生するときといふ程の意。

復次に、十八空の中の初三品の空は一切法を破し、後の三空も亦一切法を破す。有法空は一切法の生時、住時を破し、無法空は一切法の滅時を破し、無法有法空は生滅を一時に倶に破す。

復次に、有人の言く、「過去と未來法の空は、是を無法空と名け、現在及び無爲法の空は、是を有法空と名く。何となれば過去の法は、滅失し變異して無に歸し、未來の法は、因緣未だ和合せずして、未だ生ぜず、未だ有らず、未だ出でず、未だ起らず、是を以ての故に無法と名く。現在の法及び無爲法を觀知するに、現在は是を有法と名くるも、是の二は倶に空なるが故に、名けて無法有法空と爲す」と。

復次に、有人の言く、「無爲法は、生住滅なし、是を無法と名け、有爲法は、生住滅あり、是を有法と名け、是の如き等の空を名けて無法有法空と爲す」と。是を菩薩は、內空乃至無法有法に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと爲すなり。

巻の第三十二

初品の中の四縁の義を釋す。

經 菩薩摩訶薩は、諸法の因縁、次第縁、縁縁、增上縁を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

論 一切の有爲法は、皆四縁より生ず。所謂(一)因縁、(二)次第縁、(三)縁縁、(四)增上縁なり。因縁とは(五)相應因と(六)共生因と(七)自種因と(八)遍因と(九)報因と、是五因を名けて因縁と爲す。復次に、一切の有爲法を亦因縁と名く。次第縁とは、阿羅漢の過去現在末後の心心數法を除いて、諸餘の過去現在の心心數法は、能く次第を與ふ。是を次第縁と名く。縁縁、增上縁とは、一切法なり。復次に、菩薩は四縁の自相、共相を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

問うて曰く、(一〇)般若波羅蜜〔多〕の中には、四縁の如きは皆不可得なり。何となれば若し因中に先に果あるは、是の事は然らず。因中に先に無きも、亦然らず。若し先に有ならば、則ち無因となる。若

【一】Hetupratyaya.
【二】Samanantarapratyaya.
【三】Ālambanapratyaya.
【四】Adhipatipratyaya.
【五】Saṃprayuktakahetu.
【六】Sahabhūhetu.
【七】Sabhāgahetu.
【八】Sarvatragahetu.
【九】Vipākahetu.
【一〇】第一問、智度の中には四縁不可得なり。然るに今この四縁を知らんと欲せば、當に智度を學すべしといふは何故なるか。

し先に無ならば、何を以てか因と爲すや。若し先に無にして、而も有ならば、亦無因より生ずべし。復次に、果は因より生ずと見るが故に、之に名けて因と爲す。若し先に果なくんば、云何が因と名けん。

復次に、若し果は因より生ぜば、果は則ち因に屬す。因は自在ならず更に餘因に屬す。若し因にして自在ならずんば、云何が果と言はん。但此の因より生ずるのみ。是の如く、種種は則ち因緣なきことを知る。又過去の心心數法は、都て滅して能く作す所なし。云何が能く次第緣と爲るや。現在の有心は則ち次第なし。若し未來に生ぜんと欲する心に次第を與ふれば、未來は則ち未だ有らず、云何が次第を與へんや。是の如くなれば、則ち次第緣なし。是の如く一切法は、無相無緣なり。云何が緣緣と言はん。若し一切法は所屬なく、所依なく、皆平等ならば。云何が增上緣と言ふや。是の如く四緣は不可得なり。云何が四緣を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと說くや。

答へて曰く、汝は般若波羅蜜「多」の相を知らず、是の故に般若波羅蜜「多」の中の四緣は、皆不可得なりと說く。般若波羅蜜「多」は、一切の法に於て、捨つる所なく、破する所なく、畢竟清淨にして、諸の戲論なし。佛の說きたまへるが如くんば、四緣あり。但少智の人は、四緣に著して、邪論を生ずるを以て、著を破せんが爲の故に說いて、諸法は實に空にして破する所なしと言ふ。心法の內外處の因緣の和合に從つて生ずるが如し。是の心は、幻の如く、夢の如く、虛誑にして、定性ある無

し。心數法も亦是の如し。是の心は共に、心數法を生ず。所謂受・想・思等は是れ心數法なり、相を同じうし、緣を同じうするが故に、名けて相應と爲す。〔一〕心は心數法と相應するを以て因と爲し、心數法は心と相應するを以て因と爲す。是を相應因と名く。相應因は、譬へば、親友と知識と和合して事を成すが如し。

共生因とは、〔二〕一切の有爲法は、各各共生因あり。共に生ずるを以ての故に、更に相佐助す。譬へば、兄弟は同生の故に、互に相成濟するが如し。

自種因とは、〔三〕過去の善種は現在・未來の善法の因なり。過去・現在の善種は未來の善法の因なり。不善・無記も亦是の如し。是の如く一切法には各自種因あり。

遍因とは、〔四〕苦諦、集諦〔を以て〕、斷ずる所の結使、〔乃ち〕一切の垢法の因、是を遍因と名く。

報因とは、〔五〕行業の因緣の故に、善惡の果報を得。是を報因と爲す。是の五因を名けて因緣と爲す。心心數法の次第に相續して間〔間〕なきが故に名けて、次第緣と爲し、心心數法の塵を緣ずるが故に生ぜる、是を緣緣と名け、諸法生ずる時、相障礙せざる、是を無障と爲す。

復次に、心心數法は四緣より生じ、無想〔定〕、滅盡定は三緣より生ず。緣緣を除く。諸餘の心不相

〔一〕相應因の義解。
〔二〕共生因の義解。
〔三〕自種因の義解。
〔四〕遍因の義解。
〔五〕報因の義解。

應の諸行、及び色は二緣より生ず。次第緣と緣緣とを除く。有爲法は性羸きが故に、一緣より生ずること有ること無し。報生の心心數法は五因より生ず。不隱沒無記は、垢法に非ざるが故に、遍因を除く。諸の煩惱は亦五因より生ず。報因を除く。何となれば諸の煩惱は、是れ隱沒にして、報は是れ不隱沒なるが故に、報因を除くなり。報生色及び心不相應の諸行は、四因より生ず。心心數法に非ざるが故に、相應因を除き、不隱沒の無記法なるが故に、遍因を除く。染汙色及び心不相應の諸行も亦四因より生ず、心心數法に非ざるが故に、相應因を除き、垢なるが故に、報因を除く。諸餘の心心數法は初の無漏心を除いて、皆四因より生ず、報因と遍因を除く。何となれば無記に非ざるが故に、報因を除き、垢に非ざるが故に、遍因を除く。諸餘の不相應法、所謂色心不想應の諸行は、若し自種因あれば、則ち三因より生ず、相應因、報因、遍因を除く。若し自種因なければ、則ち二因より生ず、[卽ち]共生因と無障因となり。初の無漏の心心數法は、三因より生ず、相應因と共生因と無障因となり。是の初の無漏心の中の色、及び心不相應の諸行は、二因より生ず、共生因と無障因となり。法は一因より生ずること有ること無し。若し六因[を以て]生ずるは、是を四緣と名く。菩薩は般若波羅蜜[多]を行じて、是の如く四緣を觀じ、心に著する所なく、是の法を分別すと雖も、而も其の空にして、皆幻化の如しと知る。幻化の中に種種の別異ありと雖も、智者は之を觀じて、實あること無く、但眼を誑はして、分別を爲すとを知る。凡夫人の法は、皆是れ顚倒虛誑にして、實あること無きこと

を知るが故に、四緣あり是の如きを云何が實と爲さん。賢聖法の因は、凡夫法より生ずるが故に、亦是れ不實なり。先の十八空の中に說けるが如し。菩薩は般若波羅蜜［多］の中に於いて、一法も定性として、取るべきこと有ること無きが故に、則ち破す可らず。衆生は因緣の空法に著するを以ての故に、名けて破すべしと爲す。譬へば小兒の水中の月を見て、心に愛著を生じ、取らんと欲して而も得ること能はず、心に憂惱を懷くに、智者は敎へて、眼には見る可しと雖も、手には捉ふ可らずと言ふが如し。但取る可きを破して、見る可きを破せず。菩薩は、諸法は因緣より生ずることを觀知して、因緣の中の定相を取らず。四緣和合の生は、水中の月の如し。虛誑無所有なりと爲すと雖も、要ず水月の因緣より生じ、餘緣に從はず、諸法有るも亦是の如く、各自ら因緣より生じて、亦定實なきなり。是の故に菩薩は實の如く、因緣・次第緣・增上緣を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべしと說く。

問うて曰く、【一七】若し廣く四緣の義を知らんと欲せば、應に阿毗曇を學すべし。云何が此の中に四緣の義を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべしと［說く］や。答へて曰く、阿毗曇の四緣の義は、初めて學すれば、其の實を得るが如きも、之を求むること轉た深ければ、邪見に入る。上の四緣の義を破する中に說くが如し。

【一七】第二問、因緣の義を知るには、阿毗曇を學するを最もよしとす。然るに今、般若波羅蜜多を學すべしといふは何故なるか。

復次に、諸法の因る所は因縁に因る、因縁は復何の因る所ぞ。若し因あれば則ち無窮なり。若し無窮なれば則ち始なく、若し始なければ則ち因なし。若し然らば一切法は皆應に因なかるべし。若し始あらば始は則ち因る所なし、若し因る所無うして而も有ならば、則ち因縁を待たず。若し然らば一切諸法も、亦因縁を待たずして而も有ならん。

復次に、諸法の因縁より生ずるに二種あり。若し因縁の中に先に有ならば、則ち因縁を待たずして生ず。則ち非因縁なり。若し因縁の中に先に無なれば、則ち各各の因縁なし。戲論の四縁を以てするが故に、是の如き等の過あり。如し般若波羅蜜「多」の不可得空には、是の如き等の失なし。世間の人の耳目の覩る所の生老病死は、是れ則ち有と爲せども、細く其の相を求むれば、則ち不可得なるが如し。是の故に般若波羅蜜「多」の中には、但邪見を除いて而も四縁を破せず。是の故に四縁の相を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと言ふ。

【一七】如の義解。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、諸法の如、法性、實際を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、應に是の如く般若波羅蜜「多」に住すべし。

論 諸法の如に二種あり。(一七) 一には各各の相、二には實相なり。各各の相とは、地の堅相、水の濕

相、火の熱相、風の動相の如き、是等の如く諸法は各各自相ありと分別す。實相とは、各各の相の中に於いて、分別して實を求むるに不可得なり。破すべからず、諸の過失なし、自相空の中に說くが如し。地若し實に是れ堅相ならば、何を以ての故に膠蠟等は火と會する時、その自性を捨つるや。神通ある人は、地に入ること、水[に入るが]如くす。又木石を分散すれば、則ち堅相を失す。又地を破して以て微塵と爲し、方を以て塵を破すに、終に空に歸して、亦堅相を失す。是の如く地相を推求するに、則ち不可得なり。若し不可得なれば、其の實は皆空なり。空なるは則ち是れ地の實相なり。一切の別相も皆亦是の如し。是を名けて如と爲す。法性とは、〔一八〕前に說くが如く各各の法は空なり。空と有の差品、是を如と爲し、同じく一空と爲すは是を法性と爲す。是の法性に亦二種あり、〔一九〕一には無著の心を用つて、諸法を分別するに、各自ら性あり。二には無量の法に名く。所謂諸法實相なり。持心經に、「法性は無量なり。聲聞人は法性を得と雖も、智に量あるを以ての故に、無量に說くこと能はず。人の大海に到ると雖も、器小なるを以ての故に、無量の水を取ると能はざるが如し」と說くが如し。是を法性と爲す。實際とは、〔二〇〕法性を以て實證と爲すが故に際と爲す。又阿羅漢を名けて實際に住すと爲すが如し。

問うて曰く、〔二一〕如と法性と實際と、是三事は一と爲すや異と爲すや。若し一ならば云何が三と說く

〔一八〕法性の義解。
〔一九〕二種の法性。
〔二〇〕實際の義解。
〔二一〕第三問、如と法性と實際との異同如何。

や。若し三ならば、今應當に分別して說くべし。答へて曰く、是の三は皆是れ諸法實相の異名なり、何となれば凡夫は無智にして、一切法に於いて邪觀を爲す。所謂〔三〕常と樂と淨と實我等なり。佛弟子は、法の本相の如く觀るに、是の時常を見ざる、是を無常と名け、樂を見ざる、是を苦と名け、淨を見ざる、是を不淨と名け、實を見ざる是を空と名け、我を見ざる是を無我と名く。若し常を見て無常を見ざるは、是れ則ち妄見なり。苦、空、無我、不淨を見るも亦是の如し。是を名けて如と爲す。如は本の如くにして、能く敗壞すること無し。是の故に佛は三法を說いて、法印と爲したまふ。所謂一切有爲法の無常印と、一切法の無我印と涅槃寂靜印となり。

問うて曰く、〔四〕是の三法印は般若波羅蜜〔多〕の中に悉く皆破壞せり。佛、須菩提に告げ給ひしが如し。「若し菩薩摩訶薩は、色を常なりと觀ずれば、般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。色を無常なりと觀ずれば、般若波羅蜜〔多〕を觀ぜず。苦と樂、我と無我、寂滅と非寂滅も亦是の如し」と。是の如きは云何が法印と名くるや。答へて曰く、二經は皆是れ佛說なり。般若波羅蜜〔多〕經の中の如きは、了了に諸法の實相を說く。人あり、常顚倒に著するが故に、常見を捨て、〔而も〕無常相に著せざる、是を法印と名く。常を捨てて無常に著する者を以て、法印と名く。常を捨てて無常に著する者を以て、法印と爲すと謂ふには非ず。我乃至寂滅も亦是の如

〔三〕これを淨樂我淨の四顚倒といふ。

〔四〕第四問、三法印は智度の中に悉く破壞せられたり、今それ之を法印となすは何故なるか。

し。般若波羅蜜「多」の中には、無常等の見に著するを破す、受けず著せざるを破すと謂ふに非ず。是の諸法の如を得已れば、則ち法性の中に入り、諸觀を滅して異信を生ぜず。それは性自ら爾ればなり。譬へば小兒の水中の月を見、水に入つて之を求め、得ずして便ち愁ふるに、智者は語つて、性自ら爾なり、憂惱を生ずること莫れと言ふが如し。善く法性に入る、是を實際と爲す。

問うて曰く、〔言〕聲聞法の中には何を以てか是の如・法性・實際を說かず、而も摩訶衍法の中にのみ處處に說くや。答へて曰く、聲聞法の中にも亦說く處あり、但少なきのみ。雜阿含の中に說くが如し。一比丘あり、佛に問ふ、「十二因緣の法は是を佛の作と爲すや、是を餘人の作と爲すや」と。佛比丘に告げたまはく、「我は十二因緣を作らず、亦餘人の作るにも非ず、佛あるも佛なきも、諸法は如にして法相、法位は常有なり、所謂是の事あるが故に是の事あり。是の事生ずるが故に是の事生ず。無明の如き因緣あるが故に諸行あり、諸行の因緣の故に識あり、乃至老死の因緣の故に憂悲苦惱あり。是の事無なるが故に是の事無なり、是の事滅するが故に是の事滅す。無明滅するが故に諸行滅し、諸行滅するが故に識滅し、乃至老死滅するが故に憂悲苦惱滅するが如し。是の如く生滅の法は佛あるも佛なきも常に爾なり」と。是處には、如を說き給ひしなり。雜阿含の舍利弗師子吼經の中に說くが如し。佛、舍利弗に一句義を問ひ、三たび問ひたまふに、三たび答ふること能はず。佛は、少しく舍利弗に

【言】第五問、小乘經中に、眞如・法性・實際を說かずして、大乘經中にのみ之を說く理由如何。

開示し已つて靜室に入りたまへり。舍利弗、諸の比丘を集め、諸の比丘尼に語つて言く、「佛は未だ我に事端を示したまはず、未だ卽ち答へたてまつること能はず。今我此の法に於て、七日七夜、其の事を演說するに、而も窮盡せず」と。復一比丘あり、佛に白さく、「佛、靜室に入りたまひて後、舍利弗は師子吼を作して自ら讃歎せり」と。佛は比丘に語りたまはく、「舍利弗の語は實にして虛ならず、何となれば舍利弗は善く法性に通達すればなり」と、聲聞法の中にては、諸法生滅の相を觀ずる、是を如と爲し、一切の諸觀を滅すれば諸法の實相を得。是處には法性を說き給ひしなり。

問うて曰く、(二五)是處には但如・法性のみを說く、何の處にか復實際を說くや。答へて曰く、此の二事は因緣あつて起るが故に說く。實際は因緣なし、故に實際を說きたまはず。

問うて曰く、(二六)實際は卽ち是れ涅槃なり。涅槃の爲の故に佛は十二部經を說き給へり、云何ぞ因緣なしと言ふや。答へて曰く、涅槃には種種の名字あり。或は名けて離と爲し、或は名けて妙と爲し、或は名けて出と爲すと說く。是の如き等は則ち爲に實際を說くなり。但名字を說かざるが故に因緣無しと言ふのみ。復次に、諸法の如とは、諸法の未だ生ぜざる時の如く、生ずる時も亦是の如く、生じ已つて過去、現在も亦是の如し。諸法は三世に平等なり、是を名けて如と爲す。

【二五】第六問、小乘經中、何れの處にか「實際」を說けるや。

【二六】第七問、實際は涅槃なり。十二部經は涅槃の爲に說けり。今如何ぞ實際を說くの因緣なしといふか。

問うて曰く、〔二七〕若し未だ法を生ぜざれば名けて未だ生法あらずと爲す。現在は則ち法あつて用ふ可し。現在の法は、事用相あるに因るが故に、過ぎたる事を追憶す、是を過去と名く。「是の如く」三世は各異つて如實にして一なりと爲すべからず。云何にしてか、三世平等、是を名けて如と爲すと言ふや。答へて曰く、諸法實相の中には、三世は等一にして異なること無し。般若波羅蜜「多」如品の中に説くが如し。「過去の如、未來の如、現在の如、如來の如は一如にして異なること有ること無し」と。復次に、先に論議の中に已に破せり。生法若し無生ならば、未來、現在も亦無生なり、云何が等しからざらん。又復過去世は始なく、未來世は後なく、現在世は住まらず。是の故に三世は平等にして、名けて如と爲す。是の如を行じ已つて、無量の法性の中に入る。

法性とは、〔二八〕法は涅槃に名け、壞す可らず戲論す可らず。法性は本分の種に名く。黄石の中に金性あり、白石の中に銀性あるが如く、是の如く一切世間の法の中には、皆涅槃の性あり。諸佛賢聖は智慧・方便・持戒・禪定を以て、教化引導して是の涅槃の性を得せしめたまふに、利根の者は卽ち是の諸法は皆是れ法性なることを知る。譬へば神通の人は能く瓦石を變じて、皆金と爲らしむるが如し。鈍根の者は、方便「を以て」分別して之を求めて、乃ち法性を得。譬へば大冶の石を鋼して、然して後に金を得るが如し。復次に、水の性は下流するが故に海に會歸し、合して一

〔二七〕第八問、諸法は三世に平等、卽ち如なりといふ理由如何。

〔二八〕法性卽涅槃の説。

味と爲るが如く、諸法も亦是の如し。一切の總相、別相は、皆法性に歸して同じく一相と爲る。是を法性と名く。金剛の山頂に在つて漸漸に穿ち下り、金剛の地際に至つて、自性に到れば乃ち止むが如く、諸法も亦是の如し。智慧もて分別し、推求し已つて如の中に到り、如より自性に入り。(二九)本末の如くにして生じ、諸の戲論を滅する、是を名けて法性と爲す。又犢子の周章し鳴呼して、母を得れば、乃ち止むが如く、諸法も亦是の如し。種種別異にして取捨同じからざるも、自性に到れば乃ち止むことを得て、復過ぐる處なし、是を法性と名く。實際とは先に說くが如く、法性を名けて實と爲し、入處を名けて際と爲す。

復次に、(三〇)一一の法に九種あり。一には體あり、二には各各法あり、眼耳は、同じく四大造なりと雖も、而も眼のみ獨り能く見、耳には見る功なきが如し。又火は熱を以て法と爲し、而も潤ほすこと能はざるが如し。三には諸法、各力あり、火の燒くことを以て力と爲し、水は潤ほすことを以て力と爲すが如し。四には諸法は各自ら因あり。五には諸法は各自ら緣あり。六には諸法は各自ら果あり。七には諸法は各自ら性あり、八には諸法は各限礙あり、九には諸法は各開通方便あり。諸法の生ずる時は、體及び餘の法、凡て九事あり。(三一)此の法には各體法あつて具足することを知る、是を世間の下知と名く。此の九法は終に變異して盡滅に歸することを知る、是を中知と名く。譬へば此の身は生ずるに

〔二九〕他本には、「如本末生滅諸戲論是名爲法性」に作れり。
〔三〇〕諸法は一一の法に、各九種あり。
〔三一〕三知——下知、中知、上知。

不淨より出で、復澡浴し嚴飾すと雖も、終に不淨に歸するが如し。是の法は有に非ず無に非ず、生に非ず滅に非ず、諸の觀法を滅して、究竟清淨なる、是を上知と名く。

復次に、有人の言く、是の九事の中の有法、是を如と名く。譬へば地法は堅重、水法は冷濕、火法は熱照、風法は輕動、心法は識解なるが如とし。是の如き等の法を名けて如と爲す。經の中に説くが如し、「佛あるも佛なきも、法相、法位、常住にして世間の如し。所謂無明の因縁、諸行、常にして本法の如し」と。法性とは是の九法の中の性なり。實際とは九法の果證を得るなり。

復次に、諸法實相は常住不動なれども、衆生は無明等の諸の煩惱を以ての故に、實相の中に於いて轉異して邪曲なり。諸佛賢聖は、種種の方便もて法を説き、無明等の諸の煩惱を破して、衆生をして還た實性を得せしめたまへり。本の如くにして異ならざる、是を名けて如と爲す。實性と無明と合するが故に、變異すれば則ち不清淨なり。若し無明等を除却すれば、其の眞性を得。是を法性清淨實際と名け、法性の中に入ると名く。法性の無量無邊たることを知るを最も微妙と爲す。更に有法の性に勝ぐれ、法性を出づる者なければ、心則ち滿足して更に餘を求めず、則便ち證を作す。譬へば道を行くに、日日に發引して止息せざれば、所至の處に到つて、復去る心なきが如し。行者の實際に住するも亦復是の如し。羅漢、辟支佛の如きは實際に住して、縱ひ復恆沙の諸佛の其の爲に説法したまふとも、亦能く更に增進あらず、又復三界に生ぜず。若し菩薩は是の法性の中に入れば、懸に實際を知

る。若し未だ六波羅蜜〔多〕を具足せずして、衆生を敎化せんに、爾の時若し成佛の道を妨ぐることを證すれば、是の時菩薩は大悲、精進力を以ての故に還つて諸行を修す。

復次に、諸法實相の中には常法あること無く、樂法あること無く、我法あること無く、實法あること無しと知り、亦是の觀法を捨つれば、是の如き等の一切の觀法は皆滅す。是を諸法は實に涅槃の如く、不生不滅にして、本末の如く、生ずと爲す。譬へば、水は是れ冷相なるも、火を假るが故に熱し、若し火滅すれば、熱盡きて還た冷なること、本の如くなるが如し。諸の觀法を用ふるは、水の火を得るが如く、若し諸の觀法を滅するは、火滅して水冷やかなるが如し。是を名けて如・如實・常住と爲す。何となれば諸法の性は自ら爾なるを以てなり。譬へば一切の色法に皆空分あるが如く、諸法の中には皆涅槃の性あり。是を法性と名く。涅槃の種種の方便を得るも亦名けて法性と爲す。若し證を得る時、法性の如くなれば則ち是れ實際なり。復次に、法性は無量無邊にして、心心數法の量る所に非ず。是を法性と名く。妙に此を極むる、是を眞際と名く。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は三千大千世界の中の大地、諸山、微塵を數へ知らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。菩薩摩訶薩は一毛を折つて百分と爲し、一分毛を以て、盡く三千大千世界の中の大海、江河、池泉の諸水を擧げんに、而も水性を擾さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。三千大千世界の中の諸火、一時に皆燃え、譬へば劫

盡き燒くが如き時、菩薩摩訶薩は一吹して滅せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を學すべし。三千大千世界の中の諸の大風起つて、三千大千世界、及び諸の須彌山を吹き破ること、腐草を摧くが如くならんと欲するに、菩薩摩訶薩は一指を以て、其の風力を障へて起らざらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を學すべし。

【論】問うて曰く、〔三二〕佛は何を以てか諸の菩薩の六度等の諸の功德を讚歎せずして、此の大力を讚歎したまひしや、答へて曰く、衆生に二種あり。〔三三〕一には善法を樂しみ、二には善法の果報を樂しむ。善法を樂しむ者の爲には諸の功德を讚歎し、善法の果報を樂しむ者の爲には大神力を讚歎したまへり。復次に、有人の言く、四大の名は其の實は亦無邊無盡にして、常に世に在るが故に、能く悉く動かして其の多少を量る人なし。城郭、臺殿を造作すと雖も、用ふる所甚だ少し。地は廣大にして萬物を載せ育て、最も牢固なりと爲す。是の故に佛は三千大千世界の中の地及び須彌、諸山の微塵、皆盡く其の數を知らんと欲し、及び一一の微塵の中の衆生の業因緣の各に分あつて、其の多少を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を學すべしと說きたまふと爲す。

問うて曰く、〔三四〕一石土の微塵すら尙ほ數ふ可きこと難し。何に況んや三千大千世界の地、及び諸山の微塵の數をや。是は信ず可らず。答へて曰く、聲聞、辟支佛の智慧すら尙ほ知ること能はず、何に

【三二】第九問、佛、菩薩の六度等の功德を讚歎せずして、此の大力を讚歎し給へるは何故なるか。
【三三】二種の衆生。
【三四】第一〇問、一石土の微塵すら數ふること難し、況んや三千大千世界等の微塵をや。

況んや凡夫をや。是の事は諸佛及び大菩薩の知りたまふ所なり。法華經に「譬へば三千大千世界の地及び諸山を末して以て塵と爲し、東方千世界を過ぎて一塵を下し、是の如く千世界を過ぎて復た一塵を下し、是の如くして三千世界の諸塵を盡くすと。佛比丘に告げたまはく、是の塵數の世界は算數籌量して知り得べきや否やと。諸の比丘の言く、知ることを得べからずと。佛の言はく、微塵を著く可き、及び微塵を著けざる所の諸國を、悉く皆末して塵と爲さんに、大通慧佛出世已來の劫數は是の如し」と說くが如し。是の如き無量恆沙等の世界の微塵を佛[及び]大菩薩は皆悉く能く知りたまへり。何に況んや一恆河等の世界をや。

復次に、無量とは人心に隨つて說く。大海水の如きは名けて無量と爲すも、而も深さ八萬由旬にして、大身の羅睺阿修羅王は、其の多少を量ることすら、尚ほ以て難しと爲さず。

【三五】第一一問、云何が智度を行じて是の智慧を得るか。

問うて曰く、(三五)云何が般若波羅蜜[多]を行じて是の智慧を得るや。答へて曰く、人あり。般若波羅蜜[多]を行じて、諸の法相及び邪見戲論を滅し、菩薩の甚深禪定に入り、念智清淨にして增廣なるが故に、則ち能く一切諸色の微塵を分別して其量數を知る。復次に諸佛及び大菩薩は無礙解脫を得たまふが故に、是に過ぎたる事すら尚以て難しと爲したまはず。何に況んや此に[及ばざるに]於てをや。

復次に、有人の謂はく、「地を牢堅と爲す。心は形質なく、皆是れ虛妄なり」と。是の故に佛は心力

を大と爲すと說きたまへり。般若波羅蜜「多」を行ずるが故に、此の大地を散じて、以て微塵と爲す。地は色香味觸あり、重きを以ての故に、自ら所作無く。水は香少きが故に。動作地に勝り、火は香味少きが故に、勢水に勝り、風は色香味少きが故に、動作火に勝り、心は四事なきが故に、所爲の力大なり。又心は多くの煩惱結使あつて繫縛するを以ての故に、心力をして微少ならしむ。有漏の善心は煩惱無しと雖も、心を以て諸法の相を取るが故に、其の力も亦少なり。二乘の無漏心は相を取らずと雖も、智慧に量あり、及び無漏道を出づる時、六情もて俗に隨ひ、分別して諸法の相を取るを以ての故に、心力を盡くさず。諸佛及び大菩薩は、智慧無量無邊にして、常に禪定に處し、世間と涅槃とに於いて分別する所なし。諸法の實相は其れ實に異ならず、但智に優劣あるのみ。般若波羅蜜「多」を行ずる者は、畢竟淸淨にして罣礙する所なく、一念の中に、能く十方一切如恆河沙等の、三千大千世界の大地諸山の微塵を數ふ。何に況んや十方各各の一恆河沙の世界をや。

復次に、若し般若波羅蜜「多」を離れては、神通を得と雖も則ち上の如く知る所あること能はず。是の故に是の大神力を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと說く、復有人の言く、「一切諸物の中にて、水を最大と爲す。何となれば大地の上下四邊に水あらざる無く、若し護世天主も、天龍の雨を節量せず、又水を消する珠なくんば則ち天地は漂沒す。又水の因緣を以ての故に、世間の衆生數、非衆生數は、皆生長することを得。是を以て水を最大と爲すことを知るべし」と。是の故に佛は、

「菩薩は水滴の多少、滴滴分散して、力無からしめんことを知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と說きたまへり。復た有人の言く、「火を最大と爲す。何となれば、香味を除けばなり、又水の出處は甚だ多きを以て、而も火は能く之を滅す。大火の力は能く萬物を燒き、能く諸の闇を照す。是を以ての故に火を最大と爲すことを知る」と。是の故に佛は、「菩薩は大火を吹き滅せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と說きたまへり。

問うて曰く、（二六）火は風に因つて乃ち然ゆること熾なることを得、云何が相滅するや。答へて曰く、復相ありと雖も、因過ぐれば則ち相滅す。

問うて曰く、（二七）若し爾らば火は多きこと無量にして、口の風は甚だ少し、何ぞ能く之を滅するや。答へて曰く、菩薩は般若波羅蜜「多」を行じ、禪定に因つて神通を得、能く身を變じて大ならしむ、口の風も亦大なるが故に能く之を滅す。又神力を以て、小風なれども能く滅す。譬へば小金剛の能く大山を摧破するが如し。是の故に諸天世人は、此の神力を見て皆悉く（二八）崇伏す。復次に、菩薩は火の害を爲す處廣きを以て、衆生を憐愍するが故に神力を以て之を滅し、又三千世界の成立することは、甚だ難きを以て、菩薩は福德智慧の故に力能く之を制す。

復有人の言く、「四大の中に於て風力最も大たり。色香味無きが故に動相最大なり。何となれば虛

【二六】第一二問、火相は如何にして滅するか。

【二七】第一三問、火は多く、口の風は少し、如何が少を以て多を滅するか。

【二八】縮藏には崇を宗に作れり。

空の無邊なるが如く、風も亦無邊なればなり。一切の生育、成敗は皆風に由る。大風の勢は三千大千世界の諸山を摧破す」と。是を以ての故に佛は、「能く一指を以て其の風力を障へんとせば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と說きたまへり。所以は何ん、般若波羅蜜「多」の實相は、無量無邊にして、能く指力をして、是の如くならしむればなり。

經 菩薩摩訶薩は一たび結跏趺坐し、悉く三千大千世界の中の虛空に滿ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

論 問うて曰く、(三九)菩薩は何の因緣を以ての故に、是の如く結跏趺坐するや。答へて曰く、梵天王は三千世界に主なるを以て、邪見心を生じ、自ら以て大と爲す。「されど」菩薩の結跏趺坐して、虛空に遍滿するを見て、則ち憍慢の心を息む。又神通力の中に於いて、巧方便の故に、一を能く多と爲し、多を能く一と爲し、小を能く大と爲し、大を能く小と爲す。亦希有の難事を現はさんと欲するが故に、坐して虛空に遍す。亦、諸の鬼神、龍王の衆生を惱亂するを遮せんが爲の故に、坐して虛空に滿ち、衆生をして安隱ならしむ。(四〇)難陀、(四一)婆難陀龍王兄弟の舍婆提城を破らんと欲して、諸の兵仗、毒蛇の屬を雨らすに、是の時、目連は端坐して虛空に遍滿し、諸の害物を變じて皆華香瓔珞と成せしが如し。是を以ての故に、「菩薩摩訶薩は一たび結跏趺坐して、三千大千世界の虛空に遍滿せん

【三九】第一四問、菩薩の結跏趺坐する理由如何。
【四〇】難陀（Nanda）
【四一】婆難陀（Upananda）

と欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と説く。

經 菩薩摩訶薩は一毛を以て、三千大千世界の中の、諸の須彌山王を舉げ、他方の無量阿僧祇の諸佛の世界を擲過して、衆生を擾さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

論 問うて曰く、〔四二〕菩薩は何を以ての故に、須彌山及び諸山を舉げて、他方の無量の世界を〔四三〕擲過するや。答へて曰く、必ずしも舉ぐる者有るにあらず、此れ菩薩の力は、能く之を舉ぐることを明にするのみ。復次に、諸の菩薩は佛の當に法を説きたまふべきが爲の故に、先づ三千大千世界を莊嚴し、諸山を除いて地を平整ならしむ。法華經の中に説くが如し。「佛は諸の化佛を集めんと欲したまふが故に、先づ地を平治したまふ」と。亦希有の事を現じて、衆生をして見せしめんと欲するが故なり。何となれば一須彌山の高さは、八萬四千由旬なり。若し此の一山を舉ぐるすら、已に希有と爲す、何に況んや三千大千世界の百億の須彌山をや。若し一毛を以て、三千大千世界の百億の須彌山を舉ぐることすら尚ほ難し、何に況んや一毛頭を以て、百億の須彌山を擲げ、無量阿僧祇の世界を過ぐるをや。衆生は菩薩の希有の事を見て、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是の念を作して言く、「是の菩薩は未だ佛道を成ぜずして、神力乃ち爾なり、何に況んや成

〔四二〕第一五問、菩薩は何故に須彌山及び諸山を舉げて、他方の無量の世界を擲過するか。

〔四三〕縮藏には擲過を過擲に作れり。

佛するをや」と。是を以ての故に是の如く說けり。

經 一食を以て、十方の各恒河沙等の如き、諸佛及び僧を供養せんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。一衣、華香、瓔珞、末香、塗香、燒香、燈燭、幢旛、華蓋等を以て、諸佛及び僧を供養せんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。

論 問うて曰く、(四四)菩薩は若し一食を以て、一佛及び僧を供養することすら尙ほ是れ難事なり、何に況んや十方如恒河沙等の諸佛及び僧をや。答へて曰く、(四五)供養の功德は、心に在つて事に在らず。若し菩薩、一食の大心を以て、悉く十方の諸佛及び僧に供養せば、亦遠近を以て礙と爲さず。是の故に諸佛は皆見て皆受けたまふ。

問うて曰く、(四六)諸佛は一切智あるが故に、皆見て皆受けたまはんも。僧は一切智なし、云何が見るとを得、云何が受くるとを得ん。答へて曰く、僧は見ず、知らずと雖も、而も其の供養は施者福を得。譬へば人あり、使を遣はし、彼の人を供養せんに、彼の人は得ずと雖も、而も此の人は已に施の福を獲るが如し。慈三昧は、衆生に於いて施す所なしと雖も、而も行者の功德は無量なるが如し。復次に諸の菩薩は、無量無盡の功德を成就し、一食を以て、十方の諸佛及び僧を供養するに、皆悉く充足して而も亦盡きず。

【四四】第一六問、一食を以て、一佛一僧を供養することすら尙ほ難し、何ぞ能く十方如恒河沙等の、諸佛及諸僧を供養せんや。

【四五】供養の功德は、心にありて、物にあらず。

【四六】第一七問、一切智なき僧が、如何にして遠近を以て礙となさず、供養を見、之を受くることを得るか。

譬へば湧泉の出でて竭きざるが如し。文殊尸利が、一鉢の歡喜丸を以て、八萬四千の僧に供養せしに、皆悉く充足して而も亦盡きざりしが如し。復次に、菩薩は此に於て、一鉢の食を以て、十方の諸佛を供養するに、而も十方の佛前に、飮食の具、具足して出づ。譬へば鬼神は、人の一口の食を得て、而も千萬倍を出だすが如し。

復次に、菩薩は般若波羅蜜「多」を行じ、無量の禪定門を得、及び無量の智慧方便門を得。是を以ての故に能はざる所なし。般若波羅蜜「多」は無礙なるを以ての故に、是の菩薩の心の所作も亦無礙なり。是の菩薩は、能く十方千萬億恆河沙等の諸佛及び僧を供養す、何に況んや一恆河沙の如き「諸佛及び僧」をや。衣服、華香、瓔珞、末香、塗香、燒香、燈燭、幢旛、華蓋等の如きも、亦是の如し。

【四七】信行とは、他の教を信じて行ずるをいふ。卽ち信行は、鈍根にして、聞慧を成ずるなり。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、十方の各恆河沙等の如き世界の中の衆生をして、悉く戒・三昧・智慧・解脱・解脱知見を具せしめ、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・乃至無餘涅槃を得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜多を學すべし。

【論】五衆の義は先に說くが如し。須陀洹果に二種あり。一には佛說きたまはく、「三結を斷じて無爲果を得」と。又阿毘曇に說くが如きは、「八十八結を斷じて、無爲須陀洹果を得」と。二には【四八】信

行、【四八】法行の人にして、道比智の中に住し、須陀洹果の證を得る者是なり。

復次に、須陀洹を流と名く。卽ち是れ八聖道分なり。【四九】般那を入と名く。是の八聖道分に入りて、涅槃に流入するなり。是を初めて諸法の實相を觀ずと名く。無量の法性分の中に入るを得て、聖人の數の中に墮す。【五〇】息忌を一と名け、【五一】「阿」伽彌を來と名く。是の人は此に死してより天上に生じ、天上より一たび來つて、衆苦を盡くすを得。

【五二】阿那を不と名け、「阿」伽彌を來と名け、是を不來の相と名く。是の人は欲界の中に死して色界、無色界の中に生じ、彼に於て漏を盡くして、復來り生ぜざるなり。

問うて曰く、【五三】今世に滅せる阿那伽彌、中陰に滅せる阿那伽彌は、此も亦色無色界に生ぜず。何を以てか名けて、阿那伽彌と爲すや。答へて曰く、阿那伽彌は多く色無色界の中に生じ、現在に滅する者は少し。少を以て多に從ふが故なり。中間に滅する者も亦色界に生ぜんと欲し、後身の患ふ可きを見て卽ち涅槃を取る。是の故に多に因つて名を得。阿羅漢は一切の煩惱を盡くすが故に、應に一切の天龍、鬼神の供養を受くべし。是の阿羅漢に九種あり。退法、不退法、死法、護法、住法、勝進、不壞法、慧解脫、共解脫なり。九種の義は先に說くが如し。及び八背捨、八勝處、十一切處、

【四八】法行とは、自ら聖法によりて行ずるをいふ。卽ち法行は、利根にして、思慧を成ずるなり。故に玄義十に曰く、「教門は信行の人の爲にし、觀門は法行の人の爲にす」と。

【四九】般那 (Panna)

【五〇】息忌 (Sakrida)

【五一】阿伽彌 (Agamin)

【五二】阿那 (An)

【五三】第一八問、不來と名くる理由如何。

滅盡定、無諍三昧、願智等、阿羅漢の諸の妙功德、及び無餘涅槃を得。無餘涅槃を阿羅漢と名け、此の五衆を捨して更に復相續して後を受けず、身心の苦、皆悉く永く滅す、後の三道の果は初道に說けるが如し。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行じて布施する時、應に是の分別を作すべし。「是の如き布施〔を以て〕大果報を得、是の如き布施〔を以て〕刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家に生じ、是の如き布施〔を以て〕四天王天處、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化自樂天、他化自在天に生じ、是の布施に因つて初禪、二禪、三禪、四禪、無邊空處、無邊識處、無所有處、非有想非無想處に入ることを得、是の布施に因つて能く八聖道分を生じ、是の布施に因つて能く須陀洹道乃至佛道を得んとせば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】菩薩摩訶薩は、諸法實相の取〔る所〕無く、捨〔つる所〕無く、破壞する所無きを知り、不可得の般若波羅蜜〔多〕を行じ、大悲心を以て、還た福行を修し、福行の初門に先づ布施を行ず。菩薩は般若波羅蜜多を行じ、智慧明利にして能く施福を分別す。施物は同じと雖も、福德の多少は、心の優劣に隨ふ。舍利弗が一鉢の飯を以て佛に上つるに、佛、卽ち狗に廻施して、而も舍利弗に問ひたまひしが如し。「汝は飯を以て我に施し、我は飯を以て狗に施す。誰か福を得ること多からん」と。舍利弗言さく、「我が佛法の義を解するが如くんば、佛の狗に施したまふもの福を得ること多からん」と。舍利弗

は一切人中に於いて智慧最上なり、而して佛の福田は最も第一と爲す。「而も」佛が狗の惡田に施して、福を得たまふこと極めて多きに如かず、是を以ての故に大福は心に從ひ、田に在らざることを知る。舍利弗は千萬億倍するも、佛心に及ばざるが如し。

問うて曰く、〔五四〕汝の說の如くんば、福田妙なるが故に福を得ること多し。而るを舍利弗、佛に施すに「如何ぞ」大福を得ざらんや。答へて曰く、良田は復福を得ること多しと雖も、而も心に如かず。何となれば、心は內主たり、田は是れ外事なればなり。或時には、布施の福は福田に在り。億耳阿羅漢の如きは、昔一華を以て佛塔に施し、九十一劫「の間」人天の中に樂を受け、餘の福德力もて阿羅漢を得たり。又〔五五〕阿輸迦王の如きは、小兒の時、土を以て佛に施し、閻浮提に王となり、八萬の塔を起て、最後に道を得き。施物は至つて賤しけれども、小兒の心淨く、但福田妙なるを以ての故に、大果報を得たり。當に大福は良田より生ずることを知るべし。若し大中の上は、三事都べて具し、心と物と、福田との三事皆妙なり。「般若波羅蜜」〔多〕の初品の中に、「佛、好華を以て、十方の佛に散じたまへり」と說くが如し。復次に、又般若波羅蜜〔多〕、心を以て布施するが如きは、著する所無きが故に大果報を得。復次に、涅槃の爲の故に施すも亦大報を得。大悲心を以て、一切衆生を度せんが爲の故に布施するも、亦大報を得。復次に、大果報とは是の中に說くが如く、剎利家に生じ、乃至佛たるを

【五四】第一九問、舍利弗が、佛の福田に施して、大福を得ざる理由如何。

【五五】阿輸迦王、佛陀に土を施して、大福を得し因緣。

得る、是なり。

問うて曰く、【五六】云何が布施して刹利家に生ずるを得、乃至佛たるを得るや。答へて曰く、若し有人は布施及び持戒の故に、人天の中の富貴を得、有人の如きは、至心に布施持戒するが故に、刹利家に生ず。刹利とは王及び大臣なり。若し智慧經書に著するも、而も衆生を惱まさず、布施持戒するが故に、婆羅門の家に生ず。若し布施持戒減少して、世樂を樂著すれば、居士の大家に生ず。【五七】居士とは小人にして而も巨富なるなり。【五八】若し布施持戒清淨小勝にして、家業を厭患し、聽法を好樂し、善人に供養すれば、四天王處に生ず。何となれば彼に在つて須ゆる所あり、欲心生じて、皆常に此の間の賢聖善人を見ることを得、心に供養を生じ、修福の處に近づくを以ての故なり。若し布施持戒清淨にして、父母及び其の尊ぶ所を供養し、心に勝れんことを求めんと欲せば、三十三天に生ず。若し布施持戒清淨にして、學問を好み、心意柔和なれば、夜摩天に生ず。若し布施持戒清淨にして、二事をしを轉た勝れしめ、多聞を好樂し好醜を分別し、涅槃を愛樂し、心、功德に著すれば、兜率天に生ず。若し布施し、深心に持戒し、多聞にして學問を好樂し、自力を以て生活すれば、化自樂天に生ず。若し布施する時清淨に、持戒轉た深く、多聞を好樂し、自ら貴く、情多くして、能く自ら苦しまず、他より樂を求むれば、他化自在天に生ず。他の思惟する所

【五六】第二〇問、布施の功德によりて、刹帝利の貴族に生れ、又佛たるを得る理由如何。
【五七】居士の意義。
【五八】施戒に依つて、諸天に生ずるを得。

を勤心に方便し、化して女色と作り、五欲を奪ふこと而も自在なり、譬へば、庶民の身を苦しめるを、自業の强力もて之を奪ふが如し。

復次に、布施する時は、願の因緣を以ての故に天上に生ず。經に說くが如くば、人あり。少しく布施持戒を行じ、禪定を知らず。是の人は四天王天あることを聞いて、心に常に志願せるに、佛の言はく、「是の人は命終して四天上に生ぜん、必ず是の處有り」と。乃至他化自在天も亦是の如し。復次に、人あり。布施持戒し、布施を修する時、其の心に樂を得。若し施多ければ、樂も亦多し。是の如く思惟して五欲を捨て、五蓋を除きて、初禪に入る。乃至非有想非無想天も亦是の如し。四禪、四無色定の義は上に說くが如し。

復次に、人あり。佛及び佛弟子に布施し、其に從つて道法を說くを聞かんに、是の人は此の布施に因るが故に、心柔軟を得、智慧明利にして、卽ち八聖道分を生じ、三結を斷じて須陀洹果を得。乃至佛道も亦是の如し。是の布施に因り、其の說法を聞き、便ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。復次に、未だ欲を離れずして布施すれば、人中の富貴及び六欲天の中に生じ、若し欲心を離れて布施すれば、梵世天上、乃至廣果天に生ず。若し色心を離れて布施すれば、無色天中に生じ、三界を離れて布施し、涅槃の爲にするが故に、聲聞道を得。布施する時、憒閙を憎み厭ひ、閑靜を好樂し、深智慧を喜べば、辟支佛を得。布施する時、大悲心を起して、一切を度せんと欲する、第一甚深畢竟清淨の

智慧の爲にすれば、佛道を成ずることを得。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、布施する時、慧の方便力を以ての故に、能く檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毘梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を具足す。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何が布施する時、慧方便力を以ての故に、檀(那)波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)を具足するや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「施人、受人、財物は不可得なるが故に、能く檀波羅蜜(多)を具足し、罪不罪は不可得なるが故に、尸羅波羅蜜(多)を具足し、心動ぜざるが故に、羼提波羅蜜(多)を具足し、身心精進して懈らざるが故に、毘梨耶波羅蜜(多)を具足し、不亂不味なるが故に、禪波羅蜜(多)を具足し、一切法の不可得なることを知るが故に、般若波羅蜜(多)を具足す」と。

論 具足の義は先に已に廣く說けり。慧方便は今此の中に說かん。所謂三事不可得なる者是れなり。

問うて曰く、(五九)慧方便は能く其の事を成就して破壞する所なく、更に所作無し。今此の三事を破せば、應に斷滅に墮すべし。云何が慧方便と言ふや。答へて曰く、二種の不可得あり。一には得不可得、二には不得不可得なり。得不可得は、斷滅に墮す。若し不得不可得は、是を慧方便と爲し、斷滅に墮せず。若し慧方便無うして布施せば三事の相を取る。若し三事の空を以てすれば則ち取に相無し。慧方便ある者は、本より以來、三事の相を見ず。是の故に慧方便の者は有無の中に墮せず。復次

【五九】第二問、何なか慧方便といふや。

に、布施する時、諸の煩惱を壞す。是を慧方便と名く。

復次に、一切衆生に於いて、大悲心を起して布施す。是を慧方便と名く。復次に、過去未來、無量世に修する所の福德布施を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦慧方便と名く。復次に、一切十方三世の諸佛、及び弟子の有ゆる功德に於いて、憶念し隨喜し布施し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向する、是を慧方便と名く。是の如き等の種種の力は、是を慧方便の義と爲す。乃至般若波羅蜜「多」の慧方便も亦是の如し。

【經】 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、過去・未來・現在の諸佛の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

【論】 問うて曰く、(六〇)過去の佛の功德は已に滅し、未來の佛の功德は未だ有らず、現在の佛の功德は不可得なり。云何が三世の佛の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと言ふや。答へて曰く、三世の佛の功德を得んと欲すとは、自ら得んと欲すと言にあらず。三世の佛の功德の如く、所として減少する所無きのみ。所以は何ん、一切の佛の功德は、皆等しうして、多も無く少も無ければなり。

問うて曰く、(六一)若し爾らば何を以てか、阿彌陀佛は壽命無量、光明は千萬億由旬にして、無量劫

【六〇】 第二二問、過去の佛の功德は已に滅し、未來の佛の功德は未だ有らず、現在の佛の功德は不可得なり。然るを三世の佛の功德を得んと欲せば、當に智度を學すべしといふは何故なるか。

【六一】 第二三問、阿彌陀佛は壽命無量、光明無量にして、無量劫に住り、衆生を度すといふ意義如何。

に衆生を度したまふと言ふや。答へて曰く、諸佛の世界は種種にして、淨、不淨、雜あり。（六三）三十三天品經に說くが如くんば、佛、三十三天に在して、安居したまひ、自恣の時至つて、四衆は久しく佛を見たてまつらず、愁思して樂まず、目連を遣はして、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が此の衆生を捨てて、彼の天上に住したまふや」と。時に佛、目連に告げたまはく、「汝三千世界を觀るや」と。目連は佛力を以ての故に觀るに、或は諸佛の大衆の爲に說法したまふを見、或は坐禪したまふを見、或は乞食したまふを見、是の如く種種に佛事を施作したまへるを見て。目連卽時に五體を地に投ずれば、是の時、須彌山王跛峨大に動じ、諸天皆大に驚怖す。目連、涕泣し稽首して佛に白さく、「佛は大悲あり、一切を捨てたまはず。是の如く種種に、衆生を化度することを作したまふ」と。佛、目連に告げたまはく、「汝が見る所は甚だ少し、汝が所見に過ぎて、東方に國あり、純ら黃金を以て地と爲す。彼の佛弟子は、皆是れ阿羅漢にして、六通無礙なり。復是の東方を過ぎて國あり、純ら白銀を以て地と爲す。彼の佛弟子は、皆辟支佛道を學す。復是の東方を過ぎて國あり、純ら七寶を以て地と爲す。其の地は常に無量の光明あり、彼の佛の所化の弟子は、純ら諸の菩薩にして、皆陀羅尼諸三昧門を得、阿毗跋致地に住す。目連よ、當に知るべし、彼の諸佛は皆是れ我が身なりと。是の如き等の東方の恆河沙等の、無量の世界の莊嚴せる者〔又は〕莊嚴せざる者あり、皆是れ我が身にして佛事を作す。東方の如く南西北方、四維上下も亦復是

【六三】　三十三天品經の所說。

の如し」と。是の故に當に知るべし、釋迦文佛には、更に清淨の世界あり、阿彌陀國の如く、阿彌陀佛にも、亦嚴淨と不嚴淨の世界あり、釋迦文佛國の如きことを。諸佛の大悲は骨髓に徹し、世界の好醜を以てせず、度すべき者に隨つて之を敎化したまひ、慈母の子を愛し、子の廁溷に沒在すと雖も、懃求し拯拔して、以て惡しと爲さざるが如し。

卷の第三十三

初品の中の到彼岸等を釋す。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、有爲無爲法の彼岸に到らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】彼岸とは、(一)有爲無爲の法に於て、盡く其の邊に到るなり。云何となれば是の彼岸は、大智慧を以て、悉く知り悉く盡くし、有爲法の總相別相を、種種に悉く解し、無爲法の中、須陀洹より佛に至るまで、悉く皆了知すればなり。有爲〔法〕と無爲法との相と義とは、先に說くが如し。

〔一〕彼岸の意義。
〔二〕第一問、重ねて如を說く理由如何。

【經】菩薩摩訶薩は、過去・未來・現在の諸法の如、諸法の法相、無生際を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】問うて曰く、(二)上に已に如を說き、今何を以てか更に說くや。答へて曰く、上には直に諸法の如を言ひ、今は三世は皆如なりと言ふ。上には略して說き、此には廣く說く。上には一を說き、此には三を說く。法相は卽ち是れ法性なり。無生際は卽ち是れ實際なり。過去法の如は、卽ち是れ過去の法相なり、未來、現在も亦是の如し。復次に、過去法の如は、卽ち是れ未來現在法の如なり。現在法

の如は、即ち是れ過去未來法の如なり。未來法の如は、即ち是れ過去現在法の如なり。所以は何ん、如の相は、一に非ず、異に非ざるが故なり。

復次に、先に說くが如く、二種の如あり。一には世間の如、二には出世間の如なり。是の世間の如を用ふれば、三世各各異なり、是の出世間の如を用ふれば、三世を一と爲す。復次に、法相とは、諸法の業、諸法の所作力、因緣、果報に名く。火を熱相と爲し、水を濕相と爲すが如し。是の如く諸法の中に、因緣、果報を分別すれば、各各別相あり。是處非是處力の中に說くが如し。是を世間の法相と名く。若し是の諸法の相を推求し尋究すれば、無生法の中に入り、更に是に過ぐる者なし、是を無生際と名く。

問うて曰く、〔三〕如の法相は、分別するに、三世ある可し。無生際は是れ未來の法なり、云何が是れ過去現在にあらん。阿毘曇に說くが如きは、生法は過去現在にして、是の無生法は未來及び無爲法なり。是を云何ぞ、過去現在の有をして無生ならしめんと欲するや。答へて曰く、先に種種に說いて、生法を破するが如く、一切法は皆無生なり。何ぞ但だ未來のみ無生ならんや。一時の義の中に已に三世を破するが如く、三世は一相にして、所謂無相なり。是の如きは則ち無生の相なり。復次に、無生を名けて、涅槃と爲す。涅槃は不生不滅なるを以ての故なり。涅槃とは、末後究竟にして、復た更に生せざるなり。而も一切法は即ち是れ涅槃なり。是の故に佛は、一切法

【三】第二問、無生法は未來及び無爲法なり。云何ぞ過去現在の存在をして、無生ならしめんと欲するか。

は、皆是れ無生際なりと說きたまへり。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、一切の聲聞、辟支佛の前に在らんことを欲し、諸佛に給侍せんことを欲し、諸佛の內眷屬たらんことを欲し、大眷屬を得んと欲し、菩薩の眷屬を得んと欲し、淨報大施を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、（四）若し菩薩は未だ漏盡を得ずんば、云何が漏盡の聖人の前に在るや。答へて曰く、菩薩は初發意の時、已に一切衆生の前に在り、何に況んや劫を積んで修行せるをや。是の菩薩は功德智慧大なるが故に、世世に常に大に能く、聲聞辟支佛を利益す。衆生は菩薩の恩を知るが故に、推崇敬重し、乃至畜生の中にても亦尊重を爲す。菩薩、昔、鹿と作るに、其の色は金の如く、其の角は七寶にして、五百の鹿、隨逐して崇事せるが如し。若し人中に在つては、好世には轉輪聖王と作り、惡世には恆に大王と作つて、佛法を護持し、衆生を利益す。若し出家して佛法あるに値へば、則ち世の爲めに大度師と作つて、佛法を興顯し、若し佛法無ければ、則ち外道の大師と爲り、四無量を行ず。（五）羅漢、辟支佛は、無漏ありと雖も、利益の事少し。譬へば一升の酥は精なりと雖も、大海水の酪に如かざるが如し。菩薩は有漏の智慧なりと雖も、其の成熟するに及んでは、利益無

【四】第三問、未だ漏を盡さざる菩薩が、聖人の前に給侍する理由如何。
【五】羅漢は卽ち聲聞なり。

量なり。

復次に、羅漢辟支佛は、四事の供養、助道の具を、多くは菩薩に由つて得。首楞嚴經に說くが如し。「文殊師利は七十二億[度]辟支佛と作つて辟支佛の人を化し、其をして成道せしむ」と。是を以ての故に聲聞辟支佛の前に在り。諸佛の給使たらんと欲せばとは、釋迦文佛の未だ出家したまはざる時の如きは、(六)車匿給使し、(七)優陀耶戲笑し、(八)瞿毘耶、(九)耶輸陀等の諸の婇女を內眷屬と爲り、出家して六年苦行の時は、五人の給侍あり、道を得たまひし時は、彌喜羅陀、(一〇)須那剎多羅、阿難、(一一)蜜跡力士等あり、是を內眷屬と名く。大眷屬とは、舍利弗、目揵連、摩訶迦葉、須菩提、迦旃延、富樓那、阿泥盧豆等の諸の聖人、及び彌勒、文殊師利、(一二)颰陀婆羅の諸の阿毘跋致、一生補處の菩薩等なり、是を大眷屬等と名く。

復次に、佛に(一三)二種の身あり。一には法性生身、二には隨世間身なり。世間身の眷屬は先に說くが如し。法性生身には、無量無數阿僧祇の一生補處の菩薩ありて侍從す。何となれば、不可思議解脫經に說くが如くんば、佛の生れんと欲したまふ時、八萬四千の一生補處の菩薩、前に在つて導き、菩薩は後に從つて生じたまふ。譬へば陰雲の月を籠むるが如し。又法華經に說くが如し。「地より踊き出づる菩薩等は皆是れ內眷屬、大眷屬なり」と。菩薩の眷屬とは、有る佛は

【六】Chaṇḍaka チャンダカ
【七】Udāyin ウダーイン
【八】Gopī ゴーピー
【九】Yaśodharā ヤショーダラ
【一〇】Sunakṣatra スナクシャトラ
【一一】Guhyapāda グヒヤパーダ
【一二】Bhadrapāla バドラパーラ
【一三】二種の佛身――(一)法性生身、(二)隨世間身。

純ら菩薩を以て眷屬と爲したまひ、有る佛は純ら聲聞を以て眷屬と爲したまひ、有る佛は菩薩聲聞を雜へて眷屬と爲したまふ。是の故に但菩薩は眷屬たることを得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと言ふ。(四)眷屬に三あり、上中下なり。下は純ら聲聞にして、中は雜り、上は但菩薩なり。淨報大施とは、有人の言く、「菩薩は多く福德を集むるも、未だ煩惱を除かず。人の信施を受くるも、未だ淨報すると能はず」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜「多」を行じ、諸法は皆空にして不可得なり、何に況んや諸の結使をや」と。菩薩は法性の中に入るが故に眞際を證せず、是の故に淨報施福す。

復次に、菩薩は功德廣大にして、發心より已來、一一の衆生に代つて一切の苦を受けんと欲し、一切の功德を以て、一切衆生に與へんと欲し、然して後に當に自ら佛道を求むべし。但是の事は不可得なるが故に、自ら成佛して、一切衆生を度す。

【四】　三種の眷屬――上中下

又菩薩は志願して、阿僧祇を以て如の世間、及び如の法性・實際・虛空等に拘はることを爲さず。久住の菩薩は、心世間に住して衆生を利益するが故に、亦是の如く久住し、窮已あると無し。已に是の人にして淨報施福すること能はずんば、誰か能く淨め畢らん。父母の如きは、結使の諸惡ありと雖も、一世に子を利益するを以ての故に、其の供養を受け、子をして大福を受けしむ。何に況んや菩薩は諸の結使無くして、無邊の世の中に住し、衆生を利益す、而も淨め畢らざらんや。又復菩薩は、但悲心のみ有つて、般若なきすら尚能く利益す、何に況んや般若波羅蜜「多」を行ずるをや。

問うて曰く、〔二五〕若し菩薩に結使無くんば云何が世間に生を受くるや。答へて曰く、先に已に答へたり、菩薩は無生法忍を得、法性生身を得て處處に變化し、以て衆生を度し、世界を莊嚴す、是の功德因緣の故に、未だ佛を得ずと雖も、能く淨報施福す。

經 復次に舍利弗よ菩薩摩訶薩は慳心・破戒心・瞋恚心・懈怠心・亂心・癡心を起さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。

論 是の〔二六〕六種の心は、惡なるが故に、能く六波羅蜜[多]の門を障蔽す。菩薩の布施を行ずる時の如きは、若し慳心の起るあれば、施をして淸淨ならざらしめ、所謂好物を以て、施すこと能はず。若し好物を與ふるも多く與ふること能はず。若し外物を與ふれば、則ち内施すること能はず。若し能く内施するも、盡く與ふること能はず、そは皆慳心に由るが故なり。菩薩は、般若波羅蜜[多]を行じて、一切法は我なく、我所なし、諸法は皆空にして、夢の如く、幻の如しと知つて、身の頭目、骨髓を以て、布施すること、草木を施すが如くす。是の菩薩は未だ道を得ずと雖も、常に是の慳心を起さざらんことを欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。諸餘の人は欲を離れ、道を得るが故に、破戒の心を生ぜず。菩薩は般若波羅蜜[多]を行ずるが故に、破戒の事を見ず。何となれば戒は一切の諸の善功德の住處たればなり。譬へば地は一切萬物の所依止の處たるが如し。破戒すら尙ほ餘

【二五】兼因問、菩薩は結使なくして、如何が能く世間に生を受くるか。

【二六】般若は六蔽を治す。

道を得ず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。是の故に破戒の心を生ぜず。復た是の念を作さく、「菩薩の法は衆生を安樂にす。若し破戒の者は、一切を惱亂す」と。是の故に菩薩は破戒の心を生ぜず、何に況んや戒を破らんや。小乘及び諸の凡夫すら、尚ほ瞋恚の心を生ぜず。何に況んや菩薩にして、阿耨多羅三藐三菩提の意を發するをや。身は苦器たり。法は自ら惱を受く。譬へば、犯罪人の自ら刑戮を致すは、自ら作り自ら受け、人を怨むべからざるが如し。但當に自ら其の心を護つて、惡を起さざらしむべし。譬へば、人の風雨寒熱に遭ふも、亦瞋る所無きが如し。復た是の念を作す、「菩薩の佛を求むるは、大悲を以て本と爲す。若し瞋恚を懷けば則ち志願を喪ふ。瞋恚の人は尚ほ世間の樂すら得ず、何に況んや道の樂をや。瞋恚の人は、自ら樂を得ず、何ぞ能く樂を以て人に與へんや。懈怠の人は、世間の勝事すら尚ほ成ずると能はず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。譬へば火を鑽るに、數數息ふときは、火を得ることを期すること無きが如し。散亂の心は、譬へば風中の然燈の光明ありと雖も、物を照すこと能はざるが如く、亂心の中の智慧も亦復た是の如し。智慧は是れ一切善法の根本なり。若し是の智を成就せんと欲せば、先づ當に心を攝して、然して後に成ずべし、譬へば狂醉の人は、自利・他利・好醜の事を、都て覺知せざるが如く、散亂の心も亦是の多し。世間の好事すら尚ほ善く知ること能はず、何に況んや出世間の法をや。愚癡の人は、心、一切の成敗の事に、皆及ぶこと能はず、何に況んや微妙の深義をや。譬へば無目の人の、或は溝坑に墜ち、或は非

道に入るが如く、無智の人も、亦復た是の如し。智慧の眼無きが故に、邪法に受著して、正見を受けず。是の如きの人は、世間の近事すら尚ほ成ずること能はず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。菩薩は般若波羅蜜［多］を行ずる力の故に、能く是の六蔽を障し、六波羅蜜を淨む。是の故に、若し六蔽を起さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべし」と說くなり。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は一切衆生をして、布施の福處、持戒の福處、修定の福處、勸導の福處に立たしめんと欲し、衆生をして財福、法福の處に立たしめんと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべし。

論 問うて曰く、〔二七〕「云何が名けて福處と爲すや。」答へて曰く、阿毘曇に言く、「福とは、善なる有漏の身口意の業なり」と。

復た有人の言く、〔二八〕「不隱沒無記是なり。何となれば善なる有漏業の因緣果報なればなり」と。是の不隱沒無記の福を得るは、是れ果報なれば、亦名けて福と爲す。世間の人の能く大事を成し、多く成辦する所を說いて、是を福德人と名くるが如し。〔二九〕是の福は略しく說くに三種あり。布施と持戒と修定となり。何等か是れ布施なる。人あり、

【二七】 第五問、福處とは何ぞや。

【二八】 不隱沒無記とは、新譯に所謂無覆無記なり。無記性の體に二種あり。一に有覆無記、妄惑の體性極めて贏劣なるもの、俱生起の我法に執す。即第七識の如き是なり。是れ體性極めて贏弱なれば無記なれども、自性妄惑なれば以て聖道を障覆すれば有覆無記と名く。二に無覆無記 阿賴耶識の自體及び内の五根、外の山河草木等是なり。自性妄惑にあらず又贏劣にして善惡にあらざれば無覆無記なり。

【二九】 三種の福。

衣服、臥具、飲食、華香、瓔珞等を以て人に與ふる、是を布施と名く。

問うて曰く、〔二〇〕飲食等の物は便ち是れ布施なり。更に布施ありと爲すや。答へて曰く、〔二一〕飲食等の物は布施に非ず。飲食等の物を以て與ふる時、心中に生ずる法を捨と名け、慳心と相違す。是を布施と名く。福德は是れ或は有漏なり、或は無漏なり。常に是の善の心數法と、心相應の隨心行と共に心生じ、無色無形にして能く緣と作り、業相應の隨業、行業と共に生じ、先業の果報に非ず、修行、修慧もて身證を證することを得、凡夫人も得、亦聖人も得。有人の言く、

「是の〔二二〕捨法相應の思は、是を布施の福德と名く。何となれば業は能く果報を生ずるが故なり。思は卽ち是れ業なり。身口を名けて業と爲さず、思より生ずるが故に、業と名くることを得。此の〔二三〕布施に二種あり。一には淨、二には不淨なり。不淨とは〔二四〕直に施すのみ。或は財を失はんことを畏るるが故に與へ、或は訶罵を惡むが故に與へ、或は無用なるが故に與へ、或は親愛なるが故に與へ、或は勢を求めんが爲の故に與へ、施を以ての故に多く勢援を致す。或は死急なるが故に與へ、或は善譽を求むるが故に與へ、或は貴勝と名を齊しうせんとを求むるが故に與へ、或は嫉妬の故に與へ、或は憍慢の故に與ふ。小人の愚賤なるすら尚施す、我は貴重の大人たり、云何が與へざらんと。或は咒願福德の爲の故に與へ、或は吉を求め凶を除くが故に與へ、或は伴黨に入らんとを求むるが故に

〔二〇〕第六問、飲食等の外に、更に餘の布施ありや。
〔二一〕布施の眞意義。
〔二二〕布施の福德。
〔二三〕二種の布施――淨、不淨。
〔二四〕不淨施の義解。

與へ、或は心を一にせず恭敬せず、受者を輕賤して與ふ。是の如き種種の因緣は、今世の事の爲の故に施し、淨と相違するを名けて、不淨と爲す。

淨施とは、(二五)經の中に說くが如くんば、治心の故に施し、意を莊嚴するが故に施し、第一の利を得るが爲の故に施し、清淨の心を生じ、能く分別して涅槃を助くるが爲の故に施す。譬へば新華の未だ萎えず、色良く且香あるが如く、淨心の布施も亦復た是の如し。說くが如くんば、「諸天の不淨の心もて布施する者は、宮殿の光明薄少なるも、若し淨心もて布施する者は、宮殿の光明增廣なり」と。此布施の業は、過去乃至千萬世中に雖も失せず、譬ば券要の如し。

問うて曰く、(二六)此布施の福は云何が增長するや。答て曰く、時に應じて施すが故に、福の增長を得。經に說くが如し。饑餓せる時に施せば、福の增多を得、或は遠く行き來りし時、若くは曠路險道の中に「於て」施し、若くは常に施して斷せず、或時は常に施を念ずるが故に施せば增廣するとを得。(二七)六

【二五】淨施の義解。
【二六】第七問、布施の福は如何にして增長するか。
【二七】六念とは、一に念佛、佛は十號を具足し、大慈大悲大光明あり、神通無量にして能く衆生の苦を救濟す。我れ能く佛と同じからんと念ずるなり。二に念法、如來所說の三乘十二部經は大功德あり、諸の衆生に施與せんと念ずるなり。三に念僧、僧はこれ如來の弟子、無漏法を得、戒定慧を具足し、能く世間の良田たり、我れ僧行を修せんと念ずるなり。四に念戒、戒行は大勢力あり、能く衆生の惡法を除く、我れ能く精進護持せんと念ずるなり。五に念施、施行に大功德あり、能く衆生の慳貪の重病を除く、我れ能く善施を以て衆生を攝取せんと念ずるなり。六に念天、天とは欲界の六天乃至色界無色界の諸天なり、彼處自然の快樂を受く皆往昔布施の善根を修するによる、我れ亦如是の功德を具して彼の天處に生ぜんと念ずるなり。

念の中の（二八）念捨の說の如くんば、若し大施するが故に福を得ること多し。若くは好人に施し、若くは佛に施し、若くは施者、受者淸淨なるが故に、若くは決定の心もて施し、若くは自ら力を以て財を致して施し、若くは所有の多少に隨つて、能く盡く施し、若くは交交物を以て施し、若くは園丁、使人等を以て施す。是の如き布施は、唯菩薩のみ有つて能く深心を以て之を行ず。（二九）韋羅摩菩薩の如きは、十二年布施し已つて嚴飾せる乳牛、七寶の鉢及び婇女各八萬四千あり、及び諸の飾物、飮食の屬、勝げて數ふべからず。又（三〇）須帝隸拏菩薩の如きは、善勝の白象を下して怨家に施與し、入つて深山に在つて、愛する所の二子を以て、十二の醜婆羅門に施し、復妻及び眼を以て施して、婆羅門を化す。爾の時、地は爲に大に動じ、天は雷震を爲し、空中よりは華を雨らせり。又（三一）薩婆達多王の如きは、自ら其身を縛して婆羅門に施し、尸毗王の如きは、一鴿の爲の故に、自ら其身を持ちて、以て鴿の肉に代ゆ。又菩薩の如きは、曾て兎身と爲り、自ら其の肉を炙つて仙人に施與す。是の如き等は菩薩本生經の中に說く所なり。復聲聞の人の布施あり、（三二）須彌陀比丘尼の如きは、二の同學と與に、（三三）迦那伽牟尼佛の爲に精舍を作り、無數千萬世に於て、轉輪聖王及び天王の福を受く。施婆羅門の如きは、一瓶の酪を持つて僧に施し、世世に樂を受け、今阿羅漢を得て、諸の受樂の中に、受樂第一なり。（三四）末

【二八】念捨とは、六念中の第五の念施なり。
【二九】Virāma ?（ヸラーマ）
【三〇】須帝隸拏菩薩（原音不詳）
【三一】Sarvadatta ?（サルワダッタ）
【三二】Sumitā（スミタ）
【三三】Kanakamuni（カナカムニ）
【三四】Mallikā（マッリカー）

利夫人の如きは、[三五]須菩提を供養するが故に今世の果報を得て、[三六]波斯尼示王の后と爲り、[三七]尸婆の如きは、[三八]迦旃延を供養するが故に今世の「果」報を得て、[三九]旃陀婆周陀王の后と爲り、[四〇]鬱伽陀居士の如きは、舍利弗等の五百の阿羅漢を供養するが故に即日に「果」報を得、五百の賈客は其の餘食を得、人人には珠の瓔珞を以て之に與へて、卒に大富を得、遂に號して卒鬱伽陀と爲す。是の如く、布施は今世の「果」報を得。當に知るべし。布施は論議して說くも、盡くす可らざることを。

持戒の福處は、[四一]佛、五戒の福を說きたまへるもの是なり。

問うて曰く、[四二]云何が殺罪の相なるや。答へて曰く、是れ衆生なりと知つて、故らに命を奪へば、殺罪を得。故に安隱快心ならざるに非ざれば、殺罪を得。散亂狂心に非ずして、命を奪へば殺罪を得。瘡を作すに非ざるも死すれば已に殺罪を得。未だ死に非ざる身業、是れ殺罪なり。口に[四三]敎ふれば、身に作すに非ざるも、是れ殺罪なり。但心に惡を生ぜず、是の如き等の罪を止めて作さざるは、是れ持戒善の相なり。或は有人の言く、「是を不隱沒無記と謂ふ」と。或は三界業、或は不繋にして、是は心に非ず、心數法に非ず、心相應に非ず、隨心行に非ず、或は心と共に生じ、或は心と共に生ぜず。業相應に非ず、隨業行に非ず、或は業と共に生じ、或は業と共に

【三五】Subhūti

【三六】Prasenajit

【三七】Śivā ?

【三八】Katyāyanī

【三九】Caṇḍavasuda

【四〇】Udgata ?

【四一】持戒の福處。

【四二】第八問、殺罪の相とは何ぞや。

【四三】異本には、殺を敎に作れり。

生せず。先業の果報に非ず。得修、行修、身證、慧證なり。或は思惟斷、或は不斷にして、欲界の欲を離るる時、斷ずることを得。凡夫聖人の共に有することを知る。是を不殺生戒の相を說くと名く。餘戒も亦是の如く。義に隨つて諸戒を分別し、讃歎し論議す。尸羅波羅蜜の中に說くが如し。

修定の福處とは、經の中に、「慈を修する、是れ修定の福なり」と說くと雖も、亦有漏の禪定は、能く果報を生ずと說くは、總じて修定の福と名く。欲界は多瞋多亂なるを以ての故に、先づ慈心を說いて、修定の福を得と爲す。慈は方便もて、衆生に樂を與へんことを願ひ、後に實に受樂を見る。是の心相應の法を名けて、慈法と爲す。是の法は或は色界繫、或は不繫なり。是を眞慈と爲す。是の方便慈は欲界繫にして、常に心行に隨ひ、心に隨つて生じ、無形無體、能緣の法にして、業に非ず、業に相應し、而して業に隨つて行じ、業と共に生ず。先業の果報に非ず、得修、行修、身證、慧證なり。或は思惟斷、或は不斷にして、色界の欲を離るる時、斷ずることを得、〔四〕有覺有觀、亦は無覺有觀、亦は無覺無觀を知る。或は喜あり、或は喜無く、或は息あり、或は息なし。亦は凡夫の人、亦は聖人にして、或は樂受と相應し、或は不苦不樂受と相應す。先づ得禪の相を緣じ、後に實義を緣ず。根本四禪の中にも、亦四禪を過ぎて、四禪に依止することを得る者は、牢固にして力あり。慈には親愛と言ふべからず、怨無く諍無きが故に名

【四】有覺有觀。覺とは心の外界に向ふ働をいひ、觀とは心が外界のものを取り入れて認識をなし事物を考ふる働をいふ、故に吾人の感官により外相を認め意識によりて事物を認識する心作用をいふ。

けて親愛と爲し、能く無量の衆生を緣ずるが故に、名けて無量に能く衆生を利益すと爲し、能く欲を離るるが故に、名けて梵行と爲す。慈心の餘の論議は四無量の中に說くが如し。

問うて曰く、【四五】修定の福の中に、佛は何を以てか但慈心のみを說いて、餘を說きたまはざるや。答へて曰く、四無量の中、慈心は能く大福德を修し、悲心は憂愁なるが故に、福德を捨て、喜心は自ら功德を念ずるが故に、福德深からず、捨心は放捨するが故に、福亦少し。

復次に、佛は【四六】慈心に五利あるを說いて、餘を說き給はず。何等か五なる。一には刀も傷けず、二には毒も害せず、三には火も燒かず、四には水も沒せず、五には一切の瞋恚惡害の衆生の中に於て、見て皆歡喜す。悲心等の事は爾らず。是の故に修定福を慈と爲すと說く。餘は隨從、及び諸の能く果報を生ずる有漏定なり。勸導の福處とは、若し比丘あり、坐禪すること能はず、誦經すると能はざれば、敎化勸導して福德を修立す。或は比丘あり、能く坐禪誦經するも、諸の比丘の衣食乏少なるを見て、力めて能く引致し、亦勸導を行ず。及び諸の菩薩は、衆生を憐愍するが故に、福德の因緣を以て之を勸化す。又出家人にして、若し自ら財を求めば、戒に於て失あり。是の故に勸導して以て因緣を爲す。財福とは、衣服・飲食・臥具・醫藥・金銀・車馬・田宅等なり。

【四五】第九問、修定の福中に慈心のみを說く理由如何。
【四六】慈心の五利。
【四七】第一〇問、布施の福處と財福との相異如何。

問うて曰く。【四七】上には布施の福處と言ひ、此には財福と言ふ。何等の異あるや。答へて曰く、布施

とは、總じて一切の施、財施、法施、俗施、道施を攝す。(四八)今法施と財施を分別せんと欲す。法施とは、佛、大慈を以ての故に、初轉法輪より無量の衆生の道を得るが如し。後、舍利弗は佛を逐うて法輪を轉じ、餘の諸の聖人は、法輪を轉ずるに非ずと雖も、亦衆生の爲に法を說いて得道せしむ、[これ]亦法施と名く。復た遍吉菩薩、觀世音、得大勢、文殊師利、彌勒菩薩等あつて二種の神通力、[即ち](四九)果報神通と(五〇)修得神通を以て是の中に住し、福德、方便力、光明、(五一)神足等の種種の因緣を以て、衆生を(五二)開度するも亦法施と名く。諸の辟支佛の虛空に飛騰して、一偈を說き、衆生を引導して善根を植ゑしむるも、亦法施と名く。又佛弟子の未だ聖道を得ざる者の、坐禪誦經し、諸の法相を壞せず、弟子を敎化するも皆法施と名く。是の如き等の種種を名けて、法施の相と爲す。是の故に菩薩は、衆生をして、六種の施福に立てしめんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべしと說く。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、五眼を得んと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。

【四八】財施と法施との區別。

【四九】果報神通、果報とは昔人今日の境界は過去世の業因に對する結果なれば果といひ、又其業因に應じ報いし者なれば報といふ。されば一切の衆生が生より死に至るまでの間に自己の感受する吉凶、苦樂、好醜等に於て避る可らざる無碍の力用をいふ。

【五〇】修得神通。三乘の聖者三學を修して六通を得、外道仙人禪定を修して現に五通を得るもの。

【五一】神足。神足通也。又神境智證通、神境通と略稱す。

【五二】開度とは、衆生の迷を轉じて悟を開かしむるをいふ。

論 何等か五なる、（五二）肉眼と、天眼と、慧眼と、法眼と、佛眼となり。肉眼は近きを見て遠きを見ず、前を見て後を見ず。外を見て內を見ず。晝を見て夜を見ず。上を見て下を見ず。此の礙を以ての故に天眼を求む。是の天眼を得れば遠近皆見て、前後、內外、晝夜、上下悉く皆礙なし。是の天眼は和合因緣生の假名の物を見て實相を見ず。所謂空·無相·無作·無生·無滅なり。前中後の如きも亦爾なり。實相の爲の故に慧眼を求む。慧眼を得れば、衆生の盡滅一異の相を見ず、諸の著を捨離して一切法を受けず、智慧自ら內に滅す。是を慧眼と名く。但慧眼は衆生を度すること能はず。何となれば分別する所無ければなり。是の故に法眼を生ず。法眼は、是の人には是の法を行じて、是の道を得せしめんと、一切衆生の各各の方便門を知つて、道證を得せしむ。法眼は遍ねく衆生を度する方便道を知ること能はず。是を以ての故に佛眼を求む。佛眼は事として知らざる無く、覆障密なりと雖も見知せざる無し。餘人に於ては極めて遠きも、佛に於ては至つて近し。餘に於ては幽暗なれども、佛に於ては顯明なり。餘に於ては疑と爲せども、佛に於ては決定す。餘に於ては微細なれども、佛に於ては麤と爲す。餘に於ては甚深なれども、佛に於ては甚だ淺し。是の佛眼は事として聞かざる無く、事として見ざる無く、事として知らざる無く、事として難しと爲ること無し。思惟する所なけれども、一切法の中に佛眼は常に照らす。後品の五眼の義の中に當に廣く說くべし。

【五二】五眼の義解。

【經】菩薩摩訶薩は、天眼を以て、十方の如恒河沙等の、世界の中の諸佛を見んと欲し、天耳を以て、十方諸佛の說きたまふ所の法を聞かんと欲し、諸佛の心を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべし。

【論】天眼法の見る所は三千大千世界に過ぎず。今般若波羅蜜［多］の力の故に、十方恒河沙等の國中の諸佛を見たてまつる。何となれば、般若波羅蜜多の中には、近なく、遠なく、障礙する所無ければなり。

問うて曰く、(五四)般舟三昧經に說くが如き、般舟三昧力を以ての故に、未だ天眼を得ずと雖も、而も能く十方現在の諸佛を見たてまつると。此の菩薩の天眼を以ての故に十方の諸佛を見たてまつると何等の異なること有りや。答へて曰く、此の天眼は不隱沒無記なり。般舟三昧は離欲の人も、未離欲の人も倶に得、天眼は但是れ離欲の人のみ得。般舟三昧は憶想分別して、常に修し常に習ふが故に見、天眼は神通を修して得、色界の四大造色の眼は、四邊に遍ねく明相を得、是を差別し爲す。天眼は功易きこと、譬へば日出ずれば、色を見ること難からざるが如し。三昧の功の難きことは、夜燃ゆる燈に、色を見るは易からざるが如し。天耳も亦是の如し。

諸佛の心を知るとは、問うて曰く、(五五)上地の鈍根の如きは、下地の利根の心を知ること能はず、菩

【五四】第一一問、般舟三昧經に說ける、般舟三昧力の故に十方の諸佛を見ると、此の菩薩の天眼を以て十方の諸佛を見ると、何等の相異あるか。

【五五】第一二問、菩薩は一佛の心すら知ること易からず、如何が能く恒河沙等の十方の諸佛の心をや。

薩は一佛心すら尙知るべからず、何に況んや恆河沙等の十方の諸佛の心をや。答へて曰く、佛の神力を以ての故に、菩薩をして知らしむ。經に說くが如くんば、「一切衆生には佛心を知る者無し。若し佛神力を以て知らしめたまへば、乃ち蜫蟲に至るまで亦よく知る」と。是を以ての故に佛は神力を以ての故に、菩薩をして佛心を知らしめたまふ。復次に、般若波羅蜜「多」は無礙相にして麤細、深淺、愚聖都べて差別無し。諸佛の心の如と菩薩の心の如は、一如にして異なること無し。菩薩は是の如に隨ふが故に、能く諸佛の心を知りたてまつる。復次に、希有難事にして、知るべからざるを而も知る。是の故に是を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと言ふ。

經 十方諸佛の說きたまふ所の法を聞き、聞き已つて、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、忘れざらんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。

論 問うて曰く、〔五六〕佛の說たまふ所すら猶尙持ち難し、何に況んや、無量の諸佛の說きたまふ所を憶して忘れざらんと欲するをや。答へて曰く、菩薩は〔五七〕聞持陀羅尼力を以ての故に、能く受け、能く憶念し、陀羅尼力

【五六】第一三問、一佛の說法すら尙ほ持ち難し、如何ぞ能く無量の諸佛の說法を持ち得んや。

【五七】聞持陀羅尼。陀羅尼、譯して持、總持、能持能遮といふ。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名く。之を四種に分つ。一に法陀羅尼、佛の敎法に於て聞持して忘れざるをいふ。二に義陀羅尼、諸法の義に於て總持して忘れざるをいふ。三に呪陀羅尼、禪定によつて秘密語を發し、不測の神驗を有するを呪といひ、呪に於て總持して失せざるをいふ。四に忍陀羅尼、法の實相に於て安住するを忍といひ、忍を持するを忍陀羅尼といふ。故に陀羅尼力によりて能く法を持するをいふ。

の故に忘れず。

復次に、此の中には般若波羅蜜[多]の力を以て、畢竟淸淨にして、著する所無しと說く。譬へば大海の衆流を含受するが如く、菩薩は、十方の諸佛より聞く所の法たる般若波羅蜜[多]の器、大なるを以ての故に、能く無量の法を受け持して忘れず。復次に、是の般若波羅蜜[多]は、譬喩すべからざること虛空の如し。劫燒け、盡き已つて、大雨彌滿つるに、是の雨は虛空を除いては、更に處として能く受くること無きが如く、十方諸佛の說法の雨、佛口より出づるに、般若波羅蜜[多]を行ずる菩薩を除いては、更に能く受くる者なし。是を以ての故に十方諸佛の說法を聞かんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべしと言ふ。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、過去・未來の諸佛の世界を見、及び現在十方の諸佛の世界を見んと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。

論 問うて曰く、[六八]若し十方の佛を見たてまつれば、則ち已に世界を見ん。今何を以てか復た世界を見んと欲せばと說くや。答へて曰く、菩薩は未だ深く禪定に入らず、若し十方世界の山河草木を見ば、心則ち散亂せん。故に但諸佛のみを觀る。念佛義の中に說くが如く、行者は但諸佛を觀て、土地山河樹木を觀ず、禪定力を得已れば、意に隨つて廣く觀る。

【六八】第一四問、十方の諸佛を見ば、已に其世界をも見るべきなり。然るを今また「諸佛の世界を見んと欲せば」といふは何故なるか。

復次に、淸淨なる佛國は見難きが故に、諸佛の國を見たてまつらんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべしと言ふ。又一佛に、無量百千種の世界あること、先に說くが如し。嚴淨あり、不嚴淨あり、雜なるあり。畢竟淸淨の世界ありて見難きが故に、般若波羅蜜「多」の力を以て、乃ち能く見ることを得。譬へば天子の正殿は、則ち外人も見る可きことを聽せども、內殿深宮は能く見る者無きが如し。

問うて曰く、(五九)十方の現在の世界は見る可し、過去、未來の諸佛の世界は、云何が見るとを得るや。答へて曰く。菩薩には、過去未來を見る三昧あり。是の三昧に入り已れば、過去未來の事を見ること、夢中に見る所の如し。復次に、菩薩に不滅際三昧あり。是の三昧に入り已れば、諸佛の滅する者あるを見ず。

問うて曰く。(六〇)此二法は眼に非ず、云何が能く見るや。答へて曰く、此は是れ智慧なり、假に名けて眼と爲す。轉法輪の中の四諦に於て眼智明覺を得るが如し。復次に、菩薩は十方現在の佛世界を見て、定んで過去未來の諸佛世界も亦爾なりと知る。何となれば一切の諸佛は、功德同じきを以てなり。是の事は先に說くが如し。復次に是の般若波羅蜜多の中には、(六一)

【五九】第一五問、現在十方の世界は見る可し、過去未來の諸佛の世界は、云何にして見るを得るか。

【六〇】第一六問、過去未來を見るの三昧と、不滅際三昧とは、眼にあらず、而も能く見得るは何故なるか。

【六一】如とは、法の各各の相の如きなり。法の實相の如きなり、地の堅相の如く、水の濕相の如きを各各の相といふ。是れ事相の如なり。然るに此の各各の事相は實有にあらず、其の實皆空なり。彼此の諸法空を以て實とす。空は是

如にして、現在、過去、未來、等しうして異なる無し。〔そは〕一如一法性なるが故なり。是を以ての故に難ずべからず。

【經】 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、十方諸佛の說きたまふ所の十二部經、修多羅、祇夜、受記經、伽陀、優陀那、因緣經、阿波陀那、如是語經、本生經、廣經、未曾有經、論議經を聞き、諸の聲聞等の與り聞かざるを聞かんと欲し、盡く誦し受持せんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】 先に、「盡く十方諸佛の所說の法を聞かんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と說けり。〔一〕所說の法とは、即ち是れ十二部經なり。諸經の中の直說せる者を修多羅と名く。所謂四阿含、諸の摩訶衍經、及び二百五十戒經なり。三藏に出づる外に亦諸經あり。皆修多羅と名く。諸經の中の偈を祇夜と名く。衆生には九道の中に受記す。所謂三乘道と六趣道となり。此の人は、爾所の阿僧祇劫を經て、當に作佛すべし。若くは爾所の歲に、當に作佛すべしと〔二〕記す。聲聞の人には、今世後世に道を得と記し、辟支佛人には、但後世に道を得と記し。餘の六道にも亦皆後世に報を受くと記す。諸佛の法は

れ諸佛の實相なり、此實相の如きを如と稱す。故に實相即ち如なり。又此の如は諸法の性なれば法性と名け、此法性は眞實の際極なれば實際といふ。故に如と法性と實際とは諸法實相の異名なり。又諸法の理性相同にきを如と云ふ。諸法は各各差別すれども理體は一味平等なればなり、故に如とは理の異名なり。此理眞實なれば眞如と云ひ、其の理一なれば一如といふ、但し其の理體に就て般若經の如きは宗と立て、法華經の如きは宗と立つ、是れ教門の不同なり。

【一】 十二部經の義解。

【二】 記とは、受記の略にて、記別を授け、若くは記別を受くることなり。

衆生の與めに受記せんと欲し、先づ皆微笑するに無量種の光〔あつて〕四牙の中より出づ。所謂青黄赤白縹紫等なり。上の二牙より出づる者は、光三惡道を照し、其の光明に從つて無量の法を演じ、一切作法の無常、一切法の無我、安隱涅槃を說く。衆生は、斯の光に遇ふことを得て、說法を聞けば、身心安樂にして、人中天上に生ずることを得。是の因緣に從つて皆苦を畢ることを得。下の二牙より出づる者は上人天、乃至（四）有頂禪を照し、若くは聾盲、瘖瘂、狂病、皆除愈することを得。六欲天、人、及び阿修羅は五欲の樂を受け、佛の光明に遇ふて說法の聲を聞き、皆欲樂を厭患して身心安隱なり。色界の諸天は禪定の樂を受くる時、佛の光明に遇うて、說法の聲を聞き、亦厭患を生じて、佛所に來詣す。此の諸の光明は復た十方に至り、遍ねく六道を照し、佛事を作し已つて、還た身を遶ぐること七帀す。若し地獄を記すれば、光足下より入り。若し畜生を記すれば、光蹲より入り。若し餓鬼を記すれば、光髀より入り。若し人道を記すれば、光臍より入り。若し天道を記すれば、光胸より入り。若し聲聞を記すれば、光口より入り。若し辟支佛を記すれば、光眉間相より入り、若し佛を得ることを記すれば、光頂より入る。若し受記せんと欲せば、先づ此の相を現じ、然る後に阿難等の諸の弟子問を發す。一切の偈を祇夜と名く。六句、三句、五句なり。句の多少は定まらず。亦は祇夜と名け。亦は伽陀と名く。優陀那は、有法と名く。佛は必ず應

【四】有頂禪とは、色界の第四禪にして、これ形ある世界の最頂に位すれば有頂と稱す。卽ち色界の第四處、非想非非想天を云ひ、なほ輪廻を免れず。

に說きたまふべく。而も問ふ者あること無きも。佛は自ら問端を開きたまふ。佛、舍婆提に在せし〔時の〕如きは。毘舍佉堂の上の陸地に經行し。自ら優陀那を說き給へり。所謂、「我なく我所なく、是の事は善哉なり」と。爾の時に一比丘合掌して。佛に白して言さく、「世尊よ。云何が我無く、我所無く、是の事は善哉なる」と。佛、比丘に告げたまはく、「凡夫の人は、未だ無漏道を得ず。顚倒覆心の故に、我なく、我所なきに於いて。心大に驚怖す。若し佛、及び佛弟子の好法を聞く者は、歡喜し奉行す。顚倒無きが故に。復た更に作さず」と。是の如きは雜阿含の中に廣く說けり。又般若波羅蜜〔多〕品の中の如きは、諸天子、須菩提の所說を讚すらく、「善哉善哉、希有なり、世尊は、有り難し」と。世尊は是を優陀那と名け給へり。又佛、涅槃の後。諸の弟子の要偈、諸の無常偈等を抄集して、無常品を作り、乃至婆羅門偈等もて。婆羅門品を作るも。亦優陀那と名け、諸有の美妙の事を集むるも、皆優陀那と名け、是の如き等を優陀那經の相と名く。尼陀那とは、諸の佛法の本起の因緣を說く。「佛は何の因緣もて此の事を說きたまふや」と。修多羅の中に。人あり、問ふが故に、爲に是の事を說き、毘尼の中に、人あり、是の事を犯すが故に、是の戒を結す。一切の佛語の緣起の事を皆尼陀那と名く。阿波陀那とは、世間の相と似て、柔輭の淺語なり。中阿含の中の長阿波陀那經、長阿含の中の大阿波陀那、毘尼の中の億耳阿波陀那、二十億阿波陀那、二百五十戒經の中に欲阿波陀那一部、菩薩の阿波陀那一部を出だすが如く、是の如き等の無量の阿波陀那あり。如是語經には二種あ

り。一には經の結句、我先に說くべき者は今已に說き竟れり「の如し」。二には三藏、摩訶衍の外に更に經あり、一日多迦と名く。有人は、目多迦と言ふ。目多迦の名は三藏及び摩訶衍に出でたり。何等か是なる。佛、淨飯王に說いて强ひて出家せしめて、佛弟子と作す者、五百人の得道に堪任る者を選擇し、將ゐて舍婆提に至り給ひしが如し。何となれば其の未だ欲を離れざるを以て、若し親里に近ければ、其の破戒せんことを恐るるが故に、將ゐて舍婆提に至り、舍利弗、目連等をして之を敎化せしめたまひ。初夜、後夜、專精にして睡らず。勤修精進するが故に道を得。道を得已つて、佛は還た將に本生の國に至らんとしたまふ。一切諸佛の法として、本國に還りたまふ時は、大會の諸天衆と倶に、（六七）迦毘羅婆仙人の林中に住したまふ。此の林は、迦毘羅婆城を去ること五十里にして、是れ諸釋の遊戲の園なり。此の諸釋子の比丘は、舍婆提に處る時、初夜後夜、專精にして睡らざるが故に、夜を以て長しと爲し、林中より來つて城に入つて乞食し、道里の長遠なることを覺れり。爾の時、佛は其の心を知りたまふ。一の師子あり來つて佛足を禮し、一面に在つて住す。佛は是の三因緣を以ての故に偈を說きたまはく、

『寢らざれば夜長く、　愚なれば生死長く、　正法を知ること莫し。』

と。佛、比丘に告げたまはく、「汝、未だ出家せざる時、その心放逸にして、睡眠多きが故に、夜の長きを覺せざるなり。今は初夜後夜、專精にして道を求め、睡眠を滅じ省くが故に、夜を覺して長し

【六七】 Kapila ?

と爲す。此の迦毘羅婆林に、汝本騎乘遊戲して、覺して遠しと爲さざりしが、今は衣を著け、鉢を持して歩行し、疲極するが故に、道の長きを覺するなり」。是の師子は毘婆尸佛の時、婆羅門の師と作り、佛の說法を見て、佛の所に來至す。爾の時に、大衆は聽法を以ての故に、共に語る者無し。卽ち惡念を生じ惡罵の言を發すらく、「此の諸の禿輩は、畜生と何ぞ異ならん。好人を別たず、言語を知らず」と。是の惡口の業を以ての故に、毘婆尸佛より乃ち今日に至るまで、九十一劫、常に畜生に墮せり。此の人は爾の時に得道すべくして、愚癡なるを以ての故に。自ら生死を作すこと長久なり。今佛所に於いて、心淸淨なるが故に、當に解脫を得べし」と。是の如き等の經を名けて、出因緣と爲す。何の處より出でたる。三藏摩訶衍の中より。出でたるが故に。名けて出と爲す。何をか因緣と名く。是の三事の本を名けて因緣と爲す。

本生經とは昔は菩薩曾て師子と爲り、林中に在つて住し、一獼猴と共に親友と爲る。獼猴は二子を以て師子に寄す。時に鷲鳥ありて飢ゑ、行いて食を求む。師子の睡るに値ふが故に、猴の子を取つて去り、樹上に住す。師子は覺め已つて、猴の子を求むるに得ず。鷲の持して樹上に在るを見、而して鷲に告げて言く。「我は獼猴の寄托する二子を受け、之を護つて謹まず。汝をして得去らしめば、言信に孤負す。請ふ、汝が宗に從はん、我は獸中の王たり、汝は鳥中の主たり、貴勢同等なり、宜しく以て相還すべし」と。鷲言く。「汝は時を知らず。吾は今飢乏せり、何ぞ同異を論ぜん」と。師子は

其の得がたきことを知り。自ら利爪を以て、其の香肉を攫み。以て猴子に貿ふ。又過去世の時、人民多く黄白痿熟を病めり。菩薩は爾の時。身赤魚と爲り。自ら其の肉を以て諸の病人に施し、以て其の疾を救へり。又昔菩薩は一の鳥身と作り。林中に在つて住す。一人あり。深水に入るを見る。人の行く處に非ず。水神の爲めに羂され。水神の羂法は、著して解く可らず。鳥は解法を知つて、香山の中に至り。一藥草を取つて其の羂の上に著くるに。縄即ち爛壞して人は脫し去ることを得たり。是の如き等無量の本生に多く濟ふ所ある是を本生經と名く。

、廣經とは、摩訶衍に名く。所謂般若波羅蜜「多」經、六波羅蜜「多」經、[六]華手經、法華經、佛本起因緣經、雲經、法雲經。大雲經、是の如き等の無量阿僧祇の諸經は。阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故に說けり。

未曾有經とは、佛種種の神力を現じたまふが如きは。衆生は未曾有なりと怪しめり。所謂佛の生じたまひし時は。身に大光明を放ちて三千大千世界及び幽暗の處を照らし。復た十方無量諸佛の三千大千世界を照らしたまふ。是の時、佛母の前に於いて、清淨の好池あり、以て菩薩を浴したてまつる。梵王は蓋を執り、帝釋は身を洗ひ、二龍は水を吐く。又生れたまひし時、扶持することを須たずして、行くこと七步したまへば、足跡の處に皆蓮華あり。而して是の言を發したまはく、「我は是れ、一切衆生の老病死を度する者なり」と。地は大に震動し、天は衆華を雨らし、樹は音聲を出だして。

【六】縮藏には、手を首に作れり。

天の妓樂を作す。是の如き等の無量の希有の事、是を未曾有經と名く。

論議經とは、諸の問者に答へ、其の所以を釋す。又復た廣く諸義を說く。佛の四諦を說きたまふが如し。何等か是れ四諦なる。謂ゆる四聖諦なり。何等か是れ四なる。所謂苦集滅道の聖諦なりと。是を論議と名く。何等をか苦聖諦と爲す。所謂生苦等の八種の苦なり。何等か是れ生苦なる。所謂諸の衆生は、各各の生處に、此の中に苦を受く。是の如き等の問答もて廣く其義を解く。是を優婆提舍と名く。摩訶衍經の中に、佛、六波羅蜜「多」を說き給ひしが如し。何等か六なる。所謂檀波羅蜜「多」乃至般若波羅蜜「多」なり。何等か是れ檀波羅蜜「多」なる。〔七〕檀波羅蜜「多」に二種あり、一には具足、二には不具足なり。何等か是れ具足なる。般若波羅蜜「多」と和合して、乃至十住の菩薩の所得。是を具足と名く。不具足とは、初めて菩提心を發して、未だ無生忍を得ず、法未だ般若波羅蜜「多」と和合せざる、是を不具足と名く。乃至禪波羅蜜「多」も是の如し。般若波羅蜜「多」を具足する者は、大方便あり、未だ具足せざる者には、方便力無し。復次に、佛の說き給ひし所の論議經、及び摩訶迦旃延の解する所の修多羅、乃至像法の凡夫人の如法說をも、亦優波提舍と名く。

聲聞の聞かざる所とは、佛は獨り菩薩の與めに說法し、諸の聲聞の聽く者無し。又佛は神通力を以て、身を變じたまふこと無數にして、遍ねく十方一乘の世界に至つて法を說きたまふ。又復た、佛は

〔七〕二種の檀波羅蜜多――(一)具足、(二)不具足。

欲天、色天の爲めに法を說きたまひしに、諸の弟子なきが故に聞くことを得ざりき。

問うて曰く、【一七】諸の六通の阿羅漢は、若し佛說きたまふ時、坐に在らずと雖も、天耳天眼を以て、見聞することを得べし。若し宿命通を以てせば、幷に過去の事を知るべし。何を以てか聞かざるや。

答へて曰く、諸の聲聞の神通力も及ばざるの處、是の故に聞かざるなり。

復次に、佛は諸の大菩薩の爲めに、不可思議解脫經を說きたまふに、舍利弗、目連は佛の左右に在りて而も聞くとを得ざりき。是れ大乘の行法を聞く因緣を種ゑざるを以ての故なり。譬へば坐禪の人は、一切處に定の中に入りて、能く一切をして、皆水、皆火ならしむるも、而も餘人は見ざるが如し。不可思議解脫經の中に廣く說くが如し。盡く受持せんと欲すとは、聞いて奉行するを受と爲し、久久に失せざるを持と爲す。

【一七】第一七問、六神通を得たる阿羅漢にして、見聞せざるは何故なるか。

卷の第三十四

初品の中の信持等を釋す。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、十方の如恒河沙等の世界の中の、諸佛の說きたまふ所の法、已に說き、今說き、當に說くべきを聞き已つて、一切を信持し自ら行じ、亦人の爲めに說かんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【論】問うて曰く、(一)先に已に十方諸佛の所說を憶持して、忘れざらんと欲せば、當に般若を學すべしと說く、今何を以てか、復三世佛の法を信持すと說くや。答へて曰く、上には十方諸佛の法を憶持せんと欲せばと說くも、未だ是れ何の法なりといふことを知らず、故に十二部經は是れ佛の法なり、及び聲聞の聞かざる所の者なることを說けり。上には但恒河沙等の世界の諸佛と言ひ、今は恒河沙の三世の諸佛の法と言ふ。又上には但受持して忘れずと說き、受持の利益を說かず。今は自らの爲にし、亦他人の爲に說くと言ふ。是の故に復た說くなり。

〔一〕第一問、已に十方諸佛の所說を憶持して、忘れざらんと欲せば、當に智度を學すべしと說けり。然るに、今復三世諸佛の法を信持せんと欲せばといふは何故なるか。

■ 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、過去の諸佛の説き已りたまひ、未來の諸佛の當に説きたまふべきを聞き、聞き已つて自を利し、亦他人を利せんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

■ 問うて曰く、(二)十方現在の佛の所説の法は、受く可く、持つべし。過去は已に滅し、未來は未だ有らず、云何が聞くべきや。答へて曰く、此の義は先に已に答へたり、今當に更に説くべし。菩薩に三昧あり、觀三世諸佛三昧と名く。菩薩は是の三昧の中に入りて、悉く三世の諸佛を見、其の説法を聞きたてまつる。譬へば外道の神仙の如し。未來世の事に於いて、未だ形兆あらず、未だ言説あらざるも、智慧力を以ての故に、亦見、亦聞くなり。

復次に、諸の菩薩の力は不可思議にして、未來世は未だ形あらず、未だ言説あらずと雖も、而も能く見、能く聞き、或は陀羅尼力を以てし、或は今の事を以て、過去未來の諸事を比知す。是の故に是を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべしと言ふなり。

【二】第二問、現在の諸佛の説法は、受くべく、持つべし、而も過去未來の説法は、如何にして之を聞き得んや。

■ 十方の如恒河沙等の諸の世界の、中間の闇處に、日月の照さざる所を、光明を持つて普ねく照らさんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

■ 菩薩は兜率天上より、神を母胎に降さんと欲し、爾の時、身より光明を放ちて、遍ねく一切世

界及び世間の幽冥の處を照らし、次に後生る時も、光明遍ねく照らすこと、亦復た是の如く、初めて道を成ずる時、轉法輪の時、般涅槃の時、大光明を放ちたまふとも、皆亦是の如く、及び餘時にも、大神通を現じ、大光明を放つ。般若波羅蜜［多］を說かんと欲する時の如きも、大神通を現じ、大光明を以て。遍ねく世間の幽冥の處を照らし給へり。是の如く、此處處の經中に、神通光明を說けり。

問うて曰く、㈢此は是れ佛力なり、何を以ての故に菩薩［力］と說くや。

答へて曰く、「今菩薩、是を得んと欲せば、當に般若波羅蜜［多］を學すべし」と言へり。諸の大菩薩は、能く是の力あり。遍吉菩薩、觀世音、得大勢、明網、無量光菩薩等の如きは、能く是の力ありて、身より無量の光明を出し、能く十方の如恆河沙等の世界を照らす、又阿彌陀佛の世界の中の諸の菩薩の如きは、身常に光を出だして、十萬由旬を照らす。

問うて曰く、㈣菩薩の身光、是の如きは、本何の業因緣を以て得るや。

答へて曰く、身業清淨なるが故に、身に莊嚴を得。經に說くが如し。㈤一鬼あり。頭は豬に似て、臭蟲口より出で、身に金色の光明あり。是の鬼は、宿世に比丘と作つて、客の比丘を惡口罵詈す。身に淨戒を持つが故に、身に光明あるも、口に惡言あるが故に、臭蟲口より出づるなり。經に說くが如

【三】第三問、神通光明を現ずるは佛力なり、然るに何故之を菩薩［力］なりと說くや。

【四】第四問、菩薩は何の業因緣によりて、是の如きの身光を得るか。

【五】一比丘の戒を持し、客比丘を惡口するが故に、身光ありと雖も、臭蟲常に口より出づるの因緣。

し。心の清淨、優劣あるが故に、光に上中下あり。少光と、大光と、光音となり。欲界の諸天は、心清淨にして、布施持戒するが故に、身に光明あり。

復次に、有人は、衆生を憐愍するが故に、闇處に於て燈を燃やし、又佛像塔寺を供養するが爲の故に、亦明珠、戶鑰・明鏡等の、明淨の物を以て布施するが故に、身に光明あり。

復次に、常に慈心を修して、衆生を念じ、心清淨なるが故に、又常に念佛三昧を修し、諸佛の光明神德を念ずるが故に、身に光明を得。復次に、行者あり。常に火一切入を修し、又智慧の光明を以て、愚闇邪見の衆生を教化す。是の業因緣を以ての故に、心中に智慧の明を得、身にも亦光あり。是の如き等の業因緣もて、身光清淨なることを得。

【八】火一切入は、新譯に火一切處といふ。火の一切處に周遍するを觀ずる禪定の名。

經 十方の如恒河沙等の世界の中に、佛名、法名、僧名あること無くして、一切衆生をして皆正見を得、三寶の音を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

論 菩薩は、先づ佛法塔寺なき處に於いては、中に於いて塔を起す。是の業因緣を以て、後身に力を成就することを得、佛法の衆無き處に於いては、三寶を讚歎して、衆生をして正見を得せしむ。經に說くが如し。人あり、佛塔無き國土の中に生れて、塔廟を作立し、梵の福德、梵の名、無量の福德

を得。是の因緣を以て、疾かに禪定を得、禪定を得るが故に、無量の神通を得。神通力の故に能く十方に至つて、三寶正見の者を讃歎す。若し先には三寶の功德を識らず、菩薩に因つての故に、三寶を信ずることを得。三寶を信ずるが故に、業因緣の罪福を信じ、業因緣を信ずるが故に、世間は是れ縛、涅槃は是れ解なりと信ず。三寶を讃歎するの義は、八念の中に說くが如し。

經 十方の如恆河沙等の、世界の中の衆生をして、我が力を以ての故に、盲者は視ることを得、聾者は聽くことを得、狂者は念ふことを得、裸者は衣を得、飢渴者には飽滿を得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【七】 法性生身の菩薩佛は、見者の所願を滿すこと、寶珠の如し。

論 菩薩は、(七)無礙の般若波羅蜜〔多〕を行じて、若くは無礙解脫を得て成佛し、若くは法性生身の菩薩と作る。文殊師利等の如きは、十住地に在つて、種種の功德あつて具足し、衆生の見る者は皆願の如くなることを得。譬へば如意珠の欲する所皆得るが如し。法性生身の佛及び法性生身の菩薩を人の見る者あれば、皆所願を得ることも、亦復た是の如し。

復次に、菩薩は初發意より已來、無量劫の中に於いて、一切衆生の九十六種の眼病を治し、又無量世の中に於て、自ら眼を以て衆生に布施し、又智慧の光明〔を以〕て邪見の黑闇を破し、又大悲を以て衆生をして所願を皆得せしめんと欲す。是の如きの業因緣もて、云何ぞ衆生をして、菩薩の身を見、

而も眼を得ざらしめんや。餘事も亦是の如し。此の諸の義は、放光の中に說くが如し。

經 復次に、舎利弗よ、菩薩摩訶薩は、若し十方の如恒河沙等の、世界の中の衆生の、諸の三惡趣に在る者をして、我が力を以ての故に、皆人身を得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を學すべし。

論 問うて曰く、(八)自ら善業の因緣を以ての故に人身を得。云何が菩薩は我が力の因緣を以ての故に、三惡道の中の衆生をして、皆人身を得せしむと言ふや。答へて曰く、菩薩の業因緣を以て、衆生をして人身を得せしむとは言はず、但菩薩の恩力の因緣の故に得と言ふのみ。菩薩は神通變化說法の力を以ての故に、衆生をして善を修して人身を得せしむ。經の中に說くが如し。二の因緣ありて正見を發起す。一には外に正法を聞くと、二には內に正念あるとなり。又草木の內に種子あり、外に雨澤あつて、然る後に生ずることを得るが如し。若し菩薩無ければ、衆生は業因緣ありと雖も、因つて發起すること無し。是の故に諸佛菩薩の所益の甚だ多きを知る。

問うて曰く、(九)云何が能く三惡道の中の衆生をして、皆解脫を得せしむるや。佛すら尚ほ能はず、何に況んや菩薩をや。答へて曰く、菩薩は心願して爾も則ち過咎なからんことを欲す。多く解脫を得

【八】第五問、業は自律的なり、云何ぞ菩薩は、三惡道の中の衆生をして人身を得せしむるか。

【九】第六問、菩薩は云何にして、三惡道の衆生をして、解脫を得せしむるか。

るが故に一切と言ふ。諸佛及び大菩薩の如きは、身より遍ねく無量の光明を出だし、是の光明より無量の化身を出だし、遍ねく十方の三惡道の中に入つて、地獄の火を滅し、湯を冷やかならしめ、其の中の衆生は心清淨なるが故に天上人中に生ず、餓鬼道の飢渴をして飽滿せしめ、善心を開發して天人の中に生ずることを得せしむ。畜生道をして意に隨つて食を得、諸の恐怖を離れしむ。善心を開發して亦天人の中に生ずることを得せしむ。是の如きを名けて、三惡道を解脫することを得せしむと爲す。

問うて曰く、〔一〕餘經に說くが如くんば、天人の中に生ず。此には何を以てか但皆人身を得と說くや。答へて曰く、人中に於いては大功德を修することを得、亦福樂を受く。天上は多く樂に著するが故に道を修すること能はず、是を以ての故に皆人身を得せしめんと願す。復次に、菩薩は衆生の但福樂を受くることを願はず、解脫常樂涅槃を得せしめんと欲す。是を以ての故に天上に生ずることを說かず。

〔一〕第七問、餘經には、天人の中に生ずといひ、此には但人身を得と說くは、何故なるか。

〔二〕第八問、重ねて道果を說く理由如何。

經 十方の恒河沙等の世界の中の衆生をして、我が力を以ての故に、戒、三昧、智慧、解脫、解脫知見に立たしめ、須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

論 問うて曰く、〔二〕先に已に此の五衆の道果を說けり。今何を以てか更に說くや。答へて曰く、上

には但是の聲聞法を說けり。須陀洹乃至無餘涅槃なり。今は雜へて三乘を說く、聲聞、辟支佛、乃至阿耨多羅三藐三菩提なり。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、諸佛の威儀を學ばんと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を學すべし。

【論】問うて曰く。（二）何等か是れ諸佛の威儀なるや。答へて曰く、威儀とは、身の四の動止に名く。譬へば象王の身を廻して、而して觀るが如く、行く時は足地を離れ、四指は地を蹈まずと雖も、而も輪跡現じ、遲からず疾からず、身傾動せず、常に右手を舉げて衆生を安慰し、結跏趺坐して其の身を正直にし、常に右脇にして偃し、膝を累ねて臥し、敷く所の草蓐は齊整にして亂れず、食するには味の美惡等に著せず、一たび若し人の請を受くれば、默然として（三）言なく、言辭柔輭にして、方便利益して時節を失はざるなり。復次に、法身佛の威儀は、東方の如恆河沙等の世界を過ぎて、以て一步を爲す。梵音說法も亦復た是の如し。法身佛の相の義は先に說くが如し。

【二】第九問、諸佛の威儀とは何ぞや。

【三】諸經には、言を逆に作れり。

【經】復次に、菩薩摩訶薩は、象王の如く、四觀することを得んと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を學すべし。菩薩は是の願を作さく、「我をして行く時、地を離るること四指にして、足、地を蹈まざらしめよ。我れ當に四天王、乃至阿迦膩吒天と共に、無

量千萬億の諸天衆に圍遶し恭敬せられて、菩提樹下に至り、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。」と

論 象王の如くに視るとは、若し身を廻らして觀んと欲する時は、身を擧げて倶に轉ず、大人の相は身心專一なり。是の故に若し觀る所あれば、身心倶に廻らず。譬へば、師子の搏撮する所あるも、小物を以ての故に、而も其の壯勢を改めざるが如し。佛も亦是の如く、若し觀る所あり、若くは說く所あれば、身と心と倶にして常に分散せず。何となれば無數劫より來、一心に法を集むればなり。是の業因緣を以ての故に、頂骨と身と一と爲つて、分解あること無し。又世世に憍慢を破したまふを以ての故に、衆生を輕んじたまはず、觀るときは則ち倶に轉じたまふ。尼陀阿波陀那の中に說くが如し。(一四)舍婆提國に除糞の人あり。而して佛は手を以て頭を摩で、敎へて出家せしめたまひ、猶ほ之を輕んじたまはざりき。

【一四】佛は除糞の人を輕んぜず。

足地を離るるの四指とは、佛若し常に飛びたまはば、衆生は疑ひ恠んで、「佛は是れ人類に非ず」と謂つて、則ち歸附せざらん、若し足地に到らば、衆生は以て常人と異ならずと爲して、敬心を生ぜざらん。是の故に地を行くと雖も、四指到らざるに而も輪跡現す。

【一五】第一〇問、衆生の盡く佛に敬附せざる理由如何。

問うて曰く、(一五)如し佛は、常に大光を放ちたまひ、足地に到らずんば、衆生は何を以ての故に盡く敬附せざるや。答へて曰く、衆生は無量劫の中に、罪を積むこと甚だ重く、無明の垢深うして、佛に於いて疑を生じ、是は幻師にして、術を以て人を誑はすと謂ひ、或は、「足地を蹈まざるは生性自ら

爾り、鳥の如きは能く飛ぶ、何の奇特か有らん」と言ふ。或は衆生あつて、罪重き因緣の故に、佛相を見たてまつらず、直に、大威德沙門と謂ふのみ。譬へば人重病にして死せんと欲すれば、名藥、美食も、皆臭穢と謂ふが如し。是の故に盡く敬附せず。四天王天乃至阿迦膩吒「天」と共に、無量千萬億の諸天衆に恭敬し圍遶せられて菩提樹下に至るとは、是れ諸佛の常法なり。佛は世尊たり、菩提樹下に至つて、(二六)二種の魔を破せんと欲したまふ。一には結使の魔、二は自在天子の魔なり。一切智を成ぜんと欲するに、是の諸の天衆は云何が恭敬侍送せざらんや。又諸天は世世に、菩薩を佐助し擁護し、乃至出家の時には、諸の官人の、婇女をして淳惛して臥せしめ、馬の足を捧げ、城を踰えて出で、今日の事辨じて「謂はく」、「我當に共に侍送して菩提樹下に至るべし」と。

問うて曰く、(二七)何を以つてか、刹帝利、婆羅門等の無量の人の侍送を說かずして、但だ諸天を說くや。答へて謂はく、佛は獨り深林の中に於いて、菩提樹を求めたまふ。是は人の行く處に非ず。是の故に說かず。又人は、天眼、他心智無きを以つての故に、佛の當に成道したまふべきを知らず、是の故に說かず。復次に、諸天は人より貴きが故に、但天のみを說く。復次に、諸天は常に閑靜の處を樂しむ。諸天は能く身を隱して現せず、閑靜を妨げず、是の故に但諸天の侍從を說く。復次に、菩薩は

【二六】二種の魔——(一)結使魔、(二)自在天子魔。

【二七】第一問、刹帝利、婆羅門の人の侍送を說かずして、但諸天衆を說くは何故なるか。

（二八）五比丘の菩薩を捨てて去るを見て、而も菩薩は獨り樹下に至る。是の故に是の願を作す。

【經】我當に菩提樹下に於て坐し、四天王乃至阿迦貳吒天、天衣を以て座と爲すべしとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、（二九）經に說くが如くんば、佛は草を樹下に敷き、坐して佛道を成じたまへり。今云何が願つて天衣を以て、座と爲すと言ふや。答へて曰く、聲聞經の中には草を敷きたまふと說く。摩訶衍經の中には、衆生の所見に隨ひ、或は草を樹下に敷きたまふと見る有り、或は天の綩綖を敷きたまふと見るあり、其の福德の多少に隨つて所見同じからず。復次に、生身の佛は草を樹下に把りたまひ、法性生身の佛は、天衣を以て座と爲したまふ。或は天衣に勝るあり。復次に、佛、深林の樹下に於いて成佛したまふに、林中の人は見て則ち佛に草を奉つれり。若し貴人ありて見ば、當に貴ぶ所の衣服を以て座と爲すべし。但林中には貴人なし。故に時に諸の龍神天は、各妙衣を以て座と爲す。（三〇）四天王の衣は重さ二兩、忉利天の衣は重さ一兩、夜摩天の衣は重さ十八銖、兜率陀天の衣は重さ十二銖、化樂天の衣は重さ六銖、他化自在天の衣は重さ三銖、色界の天衣は重相なく、欲界天の衣は樹邊より生じて縷無く織無し。譬へば薄氷に光曜けば、

【二八】五比丘とは、佛の苦行中常に隨侍せし、憍陳如(Ajñāta Kauṇḍinya)頞鞞(Aśvajit)跋提(Bhadrika)十力迦葉(Daśabala Kāśyapa)摩男拘利(Mahānāma Kulika)なり。

【二九】第一二問、佛は草を敷いて座となし、成道し給へり、今それ天衣を以て座となす云云と言ふは何故なるか。

【三〇】天衣の輕重に就て。

明淨にして種種の色あるが如し。色界の天衣は純ら金色にして、光明稱げて知る可らず。是の如き等の寶衣を座と爲し、菩薩は座に上つて阿耨多羅三藐三菩提を成じたまへり。

問うて曰く、〔二〕何を以てか但だ諸天の衣を敷くを說いて、十方の諸の大菩薩の、佛の爲に座を敷くを說かざるや。諸の菩薩等は佛の時に成道せんとしたまふ時、皆佛の爲に座を敷けり。或は廣長一由旬、十百千萬億乃至無量由旬なり。高さも亦是の如し。此の諸の寶座は是れ菩薩の無漏の福德より生ずるが故に、是れ諸天の目に見ざる所なり。何に況んや手に觸れんや。十方三世諸佛の降魔、得道、莊嚴、佛事、皆悉く照見すること、譬へば明鏡の如し。是の如きの妙座は、何を以てか說かざるや。答へて曰く、般若波羅蜜〔多〕に二種あり。〔三〕一には聲聞、菩薩、諸天の與めに共に說き、二には但十住を具足せる菩薩の與めに說く。是の般若波羅蜜〔多〕の中には、應に菩薩の、佛の爲に座を敷くことを說くべし。所以は何ん、諸天は佛恩を知ること、一生二生、諸の大菩薩に及ばざればなり。是の如きの菩薩にして、云何が神通力を以つて、佛に供養し奉つらざらんや。是の中には聲聞を合して說く、是の故に說かず。

【二】第一三問、諸天の衣を敷くことのみを說いて、諸の大菩薩の佛の爲に座を敷けるを說かざるは何故なるか。

【三】二種の智度に就て。

經 我れ阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、行住坐臥處、悉く金剛と爲らしめんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

論 問うて曰く、(三三)何を以ての故に、佛は四威儀の中の地を、悉く金剛と作したまふや。答へて曰く、有人は言ふ、「菩薩は菩提樹下に至る時、此の處に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。爾の時、菩薩、諸法實相の中に入りたまふに、地の能く是の菩薩を擧ぐるものあると無し。所以は何ん、地は皆是衆生の虚誑の業因緣の報なるが故に有なり。是の故に菩薩を擧ぐると能はざるなり。成佛せんと欲する時は實相の智慧の身なり、是の時に座處は變じて金剛と爲る」と。有人の言く、「土は金輪の上に在り、金輪は金剛の上に在り、金剛際より出づるは蓮華臺の如く、直に上に菩薩の座處を持つて陷沒せざらしむ。是を以ての故に此の道場の座處を名けて金剛と爲す」と。有人の言く、「佛道を成じ已れば四種の威儀の處は、悉く變じて金剛と成る」と。

問うて曰く、(三四)金剛も亦是れ衆生の虚誑の業因緣によりて有り、云何が能く佛を擧ぐるや。答へて曰く、金剛は是れ虚誑の所成なりと雖も、地よりも最も牢固と爲す、更に金剛に勝る者なし。水を下す諸大龍王は、此の堅固の物を以て、佛に獻じ奉つる。亦是れ佛の宿世の業因緣の故に、此の安立の處を得給ひしなり。

又復た、佛は金剛及び四大を變じて虚空と爲らしめたまへり。虚空は不誑なり。佛の智慧も亦不誑にして、二事は既に同じ、此の故に能く擧ぐるなり。

【三三】第一四問、佛は何故に四威儀中の地を悉く金剛と作したまはざりしか。

【三四】第一五問、金剛も亦衆生の業因緣によりて有り、然らば如何にして佛を擧ぐることを得ん。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、出家の日に、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を成じ、卽ち是の日に法輪を轉じ、法輪を轉ずる時、無量阿僧祇の衆生、塵を遠れ垢を離れて、諸法の中に法眼淨を得、無量阿僧祇の衆生は、一切法を受けざるが故に、諸の漏心を解脫するを得、無量阿僧祇の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉なるを得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。

【論】或は菩薩あり。惡世の邪見の衆生の中に於て、衆生の邪見を除かんが爲の故に、自ら勤苦甚難の行を行ず。釋迦文佛の如きは、(三五)漚樓頻螺樹林の中に於いて、一麻一米を食したまふに、諸の外道の言く、「我等が先師は苦行を修すと雖も、是の如く六年勤苦すること能はず」と。又復た、有人の謂はく、「佛は先世の惡業によりて、今苦報を受けたまふ」と。菩薩あり、謂はく、「佛、實に是の苦を受けたまふが爲に、是の故に、我當に卽ち出家の日を以て、成佛すべしと發心す」と。

又菩薩ありて好世に於いて出家す。大通慧の如きは、佛道を求めて結跏趺坐し、十小劫を經て佛と成ることを得たり。菩薩は是を聞き已つて發心して言はく、「願はくは我、出家の日を以て、卽ち佛と成ることを得ん」と。菩薩あり、成佛し已つて卽ち法輪を轉ぜず。然燈佛の如きは、成佛し已つてより十二年、但光明を放ちたまふのみにして、人の識る者無く、而して法を說きたまはざりき。又(三六)須扇多佛の如きは、成佛し已つて化を受くる者無く、化佛と作つて留つて一劫に住し、法を說い

【三五】Uruvilvā
【三六】Suśānta

て人を度し、自身は滅度したまへり。又釋迦文佛の如きは、成佛し已つて五十七日、法を說きたまはざりき。菩薩は是れを聞き已つて「言はく」、「願はくは我、成佛し已らば、即ち法輪を轉ぜん」と。佛あり、衆生を度したまふに限數あり。釋迦文佛の法輪を轉じたまふ時の如きは、憍陳如一人のみありて、初めて道を得、八萬の諸天は、諸法の中に法眼淨らかなるを得たり。菩薩は是れを聞き已つて是の願を作さく、「我、法輪を轉ずる時、無量阿僧祇の人をして、塵を遠ざかり、垢を離れて、諸法の中に法眼淨らかなるを得せしめん」と。釋迦文佛の初めて法輪を轉じたまひし時、一比丘及び諸天は皆初めて道を得たるも、而も一人として阿羅漢及び菩薩道を得たる者無し。是の故に菩薩は願「を作」して言はく、「我、作佛するの時、當に無量阿僧祇の衆生をして、一切法に於いて」諸漏を受けず、心に解脫を得せしめ、及び無量阿僧祇の衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退轉せざることを得せしむべし」と。

問うて曰く、(三七)若し一切の佛は、神力功德もて衆生を度したまふこと皆等し。此の菩薩は何を以てか此の願を作すや。答へて曰く、一佛は能く無量阿僧祇の身を變作して、而して衆生を度したまふ。而も世界は嚴淨なる者あり、嚴淨ならざる者あり。菩薩は若くは見、若くは聞くに、是の諸佛には、苦行して佛を得難き者あり、即ち法輪を轉じたまはざる者あり。釋迦牟尼佛の如く、六年苦行して成

【三七】第一六問、一切の佛は神力もて衆生を度したまふ。今この菩薩は何故に是の願を作したまふや。

道したまふ有り。又初轉法輪を開きたてまつる時は、未だ阿羅漢道を得る者あらず、何に況んや菩薩道を得んや。是の故に菩薩は、未だ諸佛の力の等しきことを聞かず、故に是の願を作す。然るに、諸佛の神力功德は平等にして無量なり。

【釋】我、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、無量阿僧祇の聲聞を以て僧と爲し、我一たび說法する時は、便ち座上に於いて盡く阿羅漢を得せしめんとせば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。

【論】有佛は、(二八)聲聞を以て僧と爲したまふに、數あり、限あり。釋迦文尼佛の如きは、千二百五十の比丘を僧と爲したまひ、彌勒佛には、初會に僧九十九億、第二會に九十六億、第三會に九十三億あり、是の如く諸佛の僧は各各限あり數あつて同じからず。是の故に菩薩は願(を作)して言く、「我當に無量阿僧祇の聲聞を以て僧と爲すべし」と。有佛は、衆生の爲に法を說きたまひ、一たび法を說きたまふに、(二九)初道を得、異時に更に說きたまふに二道、三道、第四道を得。釋迦文尼佛の如きは、(三〇)五比丘の爲に法を說きたまふに初道を得、異日に阿羅漢道を得たり。舍利弗の如きは、初道を得てより半月を經、然る後に阿羅漢道を得たり。摩訶迦葉は、佛を見たてまつりて初道を得、八日を過ぎ已つて阿羅漢道を得たり。阿難の如きは、須陀洹道を得てより、二十五

【二八】佛、衆生を度するに限數あり。

【二九】初道とは、三乘行位の初階なり。

【三〇】五比丘、舍利弗、大迦葉、阿難陀等が、先づ初道を得て、後異日に阿羅漢道を得たる例。

歲、佛を供養し已り、佛の般涅槃の後、阿羅漢を得たり。是等の如く、諸の阿羅漢は、一時に四道を得ず。是を以ての故に菩薩に願「を作」して言はく、「我一たび法を說く時、便ち座上に於いて盡く阿羅漢を得せしめん」と。

〔經〕我れ當に無量阿僧祇の菩薩摩訶薩を以て僧と爲し、我一たび法を說く時、無量阿僧祇の菩薩は、皆阿鞞跋致を得べし。

〔論〕菩薩の此の願を作す所以は、諸佛は多く聲聞を以て僧と爲し、別に菩薩僧無し。彌勒菩薩、文殊師利菩薩等の如きは、釋迦文佛に別に菩薩僧無きを以ての故に、聲聞僧の中に入つて次第に坐せり。有佛は、(三一)一乘の爲めに法を說き、純ら菩薩を以て僧と爲したまひ、有佛は、聲聞菩薩を雜へて以て僧と爲したまふ。(三二)阿彌陀佛の國の如きは、菩薩僧は多く、聲聞僧は少し。是を以ての故に、「無量の菩薩を以て僧と爲さん」と願す。有佛の初轉法輪の時には、人あり(三三)阿鞞跋致を得るもの無し。是を以ての故に菩薩に願「を作」して言く、「我一たび法を說くに、無量阿僧祇の人をして阿鞞跋致を得せしめん」と。

【三一】一乘とは、成佛する唯一の敎。乘は運載にて佛の敎法に譬ふ。敎法人を載せて涅槃の岸に運べば乘と名く。法華經は此一乘の理を說ける代表的聖典なり。

【三二】阿彌陀佛の國には、菩薩僧多く、聲聞僧少なし。

【三三】Avaivarti は、不退轉と譯す。

【註】壽命無量にして、光明の具足を得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

【解】諸佛の壽命に、長き有り、短きあり。〔三四〕毘婆尸佛の如きは、壽八萬四千歳なり、〔三五〕拘樓餐陀佛の如きは壽六萬歳なり。〔三六〕迦那伽牟尼佛は壽三萬歳なり。〔三七〕迦葉佛は壽二萬歳なり。〔三八〕釋迦文佛は壽百歳なり。少しく過ぐれば、〔三九〕彌勒佛は、壽八萬四千歳なり。釋迦文佛の如きは、常光一丈にして彌勒佛は、常光十里なり。〔四〇〕諸佛の壽命と光明に各二種あり。一には隱藏にして、二には顯現なり。一は眞實にして、二は衆生の爲の故なり。隱藏は眞實なれば無量なるも、顯現は、衆生の爲なれば、限あり量あり實に佛の壽は短なるべからず、何となれば諸佛は、長壽の業因縁を具足し給へばなり。〔四一〕婆伽梵の如きは、當世に一聚落の人命を救ふが故に、無量阿僧祇の壽命を得、梵世の中の壽法は、半劫に過ぎず、而も此の梵天の壽は無量なり。是を以ての故に邪見を生じて言はく、「唯我のみ常住なり」と。佛は其の所に到つて、其の邪見を破し、其の本縁を說きたまふ。一聚落を救ふすら、其の壽乃ち爾なり、何に況んや佛は世世に、無量阿僧祇の衆生を救ひたまふをや。或は財物を以て救濟し、或は身命を以て死に代りたまふ。云何が壽限つて、百歳に過ぎざらんや。又不殺生戒は、是れ長壽の業因縁なり。佛は大慈を以て、衆生を愛したまふこと骨髓に徹して、常に能く衆生の爲の故に死したまふ。何に況

【三四】Vipaśyi

【三五】Krakucchanda

【三六】Kanakamuni

【三七】Kāśyapa

【三八】Śākyamuni

【三九】Maitreya

【四〇】諸佛の壽命と光明とに二種あり。

【四一】Bhagavat

んや業性をや。又諸法實相の智慧は、眞實にして不誑なるが故に、亦是れ長壽の因縁なり。菩薩は般若波羅蜜の多きを以て、持戒の諸の功德に和合するを以ての故に、壽命を得ること無量なり。何に況んや佛は世世に、此の諸の無量の功德を具足したまふ、而も壽命に限あらんや。

復次に、一切の色の中の如きは、佛身第一なり。一切の心の中には、佛心第一なり。是を以ての故に一切の壽命の中に、佛壽は亦應に第一なるべし。世俗の人の言へるが如し。「人の世に生るるや、壽を以て貴しと爲す。佛は人中の上たり、壽も亦應に長かるべし」と。

問うて曰く、【四】佛は長壽の業因縁ありと雖も、惡世に生じたまふが故に壽命便ち短し。此の短壽を以て能く佛事を具したまふ、長きを用つて何にか爲んや。又佛は、神通力を以ての故に、一日の中に、能く佛事を具したまふ、何に況んや百歲をや。答へて曰く、此の間の閻浮提は、惡しきが故に、佛の壽は短かかるべく、餘處は好きが故に、佛の壽は長かるべし。

問うて曰く、【五】若し爾らば菩薩は、此の閻浮提の淨飯王の宮に於て生れ、出家し成道したまふ、是れ實の佛なり。餘處には皆是れ神通力もて、變化し作佛して、以て衆生を度したまふ。答へて曰く、此の言に非なり。何となれば餘處の閻浮提も亦各各言はく、「我が國は是れ實の佛にして、餘は變化

【四】第一七問、佛には神通力あり、何ぞ壽命の長きを要せんや。

【五】第一八問、爾らば實佛は淨飯王の宮に生れ給ひし佛にして、餘他の佛は神通力の變化なるにあらずや。

と爲す」と。何を以てか之を知る。若し餘處の國土にして、自ら是れ化佛なりと知らば、則ち敎戒を信受することを背んせず。又餘の國土の如きは、人の壽命一劫なり。若し佛壽百歲ならば、彼に於いて裁に一日も無し。衆生は則ち輕慢を起して背へて敎を受けざらん。彼は則ち一劫を以て、實佛と爲し、此を以て變化と爲す。首楞嚴經に說くが如くんば、神通もて遍ねく照にす、佛壽七百千阿僧祇劫なり。佛、文殊師利に告げ給はく、「彼の佛は則ち是れ我が身にして、彼の佛も亦釋迦文佛と言ふ、則ち是れ我が身なり」と。是を以ての故に諸佛の壽命は實に皆無量なるも、人を度せんが爲の故に、長短あるを現じたまふことを知る。汝は言ふ、「釋迦文佛は、神通力を以ての故に、度する所の衆生と人壽と異ならざれば、則ち百歲を須ゐずして、一日の中に佛事を具足すべし」と。

【三】佛、阿難の爲に、一時に無量の佛事を作す。

(三)阿難の如きは、一時、心に是の念を生ずらく、「然燈世尊、一切勝佛、鞞婆尸佛の如きは、好世に出で壽命極めて長し、能く佛事を具したまはん。我が釋迦文佛は、惡世に出世して、壽命極めて短し、將に世尊は佛事を具足し能はざること無きや」と。爾の時、世尊は、日出三昧に入り、身に從つて變化し、無量の諸佛及び無量の光明を出だし、普ねく十方に至り、一一の化佛は、諸の世界に在つて、各佛事を作し、或は說法するあり、或は神通を現じ、或は三味を現じ、或は飮食を現じ。是の如きの此の種種の因緣を以て佛事を施作し、而して衆生を度したまふ。三昧より起つて阿難に告げて曰はく、「汝は悉く是の事を見聞するや否や」と。阿難言さく、

「唯然なり、已に見たてまつる」と。佛阿難に告げたまはく、「佛は是の如く神力を以て、能く佛事を具するや不や」と。阿難言さく、「假令、佛壽は一日なるも、大地草木、悉く度す可き衆生の爲めに、則ち能く度し盡したまはん、何に況んや百歲をや」と。【三五】是を以ての故に、諸佛の壽命は皆、悉く無量なれども、人を度せんが爲の故に、長短あるを現じたまふことを知る。譬へば、日出でて、影を水に現さんに、水の大小に隨ひ、水大なれば則ち影久しく、水小なれば則ち速かに滅し、若し琉璃頗梨珠の山を照せば、影久しく住するが如し。又火の草木を燒くに、然ゆるもの少ければ、則ち速かに滅し、然ゆるもの多ければ、則ち久しく住するが如し。滅せる處に火無きを以ての故に、多く然ゆる處にも亦無しと謂ふ可らず。無量の光明の長短の義も亦是の如し。

【經】其、阿耨多羅三藐三菩提を成ずる時は、世界の中に婬欲・瞋恚・愚癡あること無く、亦三毒の名無く、一切衆生、是の如き智慧ありて、菩提・禪定・善心・善行を成就して、善く衆生を饒さざらしめんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、【三六】若し世界に三毒無く、亦三毒の名無くんば、佛は何等の爲の故に、其の國に出世したまひしや。答へて曰く、【三七】貪欲、瞋恚、愚癡を名けて、三不善根と爲す。是れ欲界繋の法なり。佛若し貪欲、瞋恚、愚癡を說きたまはば、是れ欲界繋の不善なり。【三八】若し愛見無明を說きたまはば、

【三五】諸佛の壽命は、實には無量なり。
【三六】第一九問、若し世に三毒なく、亦三毒の名なくんば、佛は何の爲に出世し給ひしや。
【三七】三毒の名は欲界繋なり。
【三八】愛見無明は三界に通ず。

是れ則ち三界に通ず。有佛の世界には、純ら諸の欲を離るる人あり。是の衆生の爲の故に、菩薩は願「を作」して言く、「我成佛する時、國に三毒及び三毒の名無し」と。復淸淨の佛國あり。純ら阿鞞跋致法性生身の菩薩あり、諸の煩惱無く、唯餘習のみ有り。是の故に、「三毒の名なし」と言ふ。若し有人の言く、「菩薩は願して、我當に一切衆生を度すべしと言ふも、而も衆生は實に盡く度せざるが如く、此も亦是の如し。世界をして三毒の名無からしめんと欲するも、亦應に實に三毒あつて盡きざるべし。若し三毒無くんば、何ぞ佛を用ふることを爲さん。地に大闇無ければ、則ち日の照らすことを須ゐざるが如し」と。經に說く所の如し。「若し三法無ければ、則ち佛は世に出でたまはず。若し三法斷ぜざれば、則ち老病死を離るることを得ず」と。三法とは、則ち是れ三毒なり。三法經の如きは、此の中に應に廣く說くべし。復次に、有世界の衆生は、諸法を是は善なり、是は不善なり、是は縛なり、是は解なり等と分別して、一相寂滅の法の中に於いて戲論を生ず。菩薩は是の故に、願「を作」して言く、「我が世界の衆生をして、三毒を生ぜず、三毒の實相は、卽ち是れ涅槃なることを知らしめん」と。

【四九】第二〇問、一切衆生は是の如きの智慧を得といふが、そは何等の智慧なるか。

問うて曰く、【四九】一切衆生は、是の如きの智慧を得と、是は何等の智慧なるや。答へて曰く、智慧とは、是れ世間の正見なり。世間の正見の中には、布施あり、罪福あり。今世後世あり、阿羅漢ありと說く。罪福を信ずるが故に、善く布施を能くして阿羅漢ありと信ずるが故に、善く持戒し、善く禪定

し、善く梵行を能くす。正見の力を得るが故に、善く衆生を壞さざるを能くす。世間の智慧は是れ無漏の智慧の根本なり。是を以ての故に國中に三毒の名無しと說く。【五一】貪欲に二種あり。一には邪貪欲二には貪欲なり。【五二】瞋恚に二種あり。一には邪瞋恚二には瞋恚なり。【五三】愚癡に二種あり。一には邪見愚癡二には愚癡なり。是の三種の邪毒の衆生は、化度す可きこと難く、餘の三は度し易し。三毒の名無しとは、邪三毒の名無きなり。善布施等の王尊は、上の放光品の中に說くが如し。

【經】我が般涅槃の後、法をして滅盡すること無く、正法の名も無からしめんには、【五四】當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、諸佛の法王たるすら尚自ら滅度したまふ、云何が法に滅盡なしと言ふや。答へて曰く、上に說く所の如く、是れ菩薩の願事にして、必ずしも實ならず。一切有爲の法は、因緣の和合より生ず、云何が常住にして滅せざらんや。佛は日の明なるが如く、法は日沒して餘光あるが如し。云何が日沒して、而も餘光滅せざらん。但久しく住するが故に、能く滅を見る者無し、故に不滅と名く。

復次に、是の菩薩は、諸佛の法の住するを見るに、多きあり少きあり。【五五】迦葉佛の法の如きは、住

【五一】二種の貪欲。
【五二】二種の瞋恚。
【五三】二種の愚癡。
【五四】梵本二問、法に滅盡なしといふ理由如何。
【五五】過去佛の法は住すること七日、釋尊の法は住すること千歲なり。

するこゝと七日、釋迦牟尼佛の法の如きは、住すること千歳なり。是の故に菩薩は是の願を發して言く、「法は有爲なりと雖も、願はくは相續して滅せざらしめん」と。火の薪を得て相傳ふれば絶えざるが如し。復次に、諸法實相を名けて佛法と爲す。是の實法の相は、不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不來、不去、不受、不動、不著。不依にして、所有なく、涅槃の相の如し。法相は是の如し、云何が滅あらんや。

問うて曰く、(五三)法相是の如くんば、一切の佛法は皆滅せざるべきや。答へて曰く、言ふ所の如し。諸法實相は、滅するものあること無し。人あり、憶想し、分別して、諸法の相を取り、實法相を壞し、二法を用ゐて說く。是の故に滅あるも。實相の中には滅あることなし。復次に、般若波羅蜜[多]は、無礙の法なり。無量の功德を集むるが故に、其の本願に隨ひ、諸法相續して、其の滅を見るものあること無し。譬へば仰いで虛空を射るに、箭の去ること、極めて遠くして、人[これを]見ずと雖も、要必ず當に墮すべきが如し。

【五三】第二一問、然らに一切の佛法は滅せざるべきや如何。

經 我、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、十方の如恒河沙等の、世界の中の衆生、我が名を聞く者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の如き等の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし。

【論】問うて曰く。〔五六〕有人は生れて佛世に値ひ、佛法の中に在つて、或は地獄に墮する者あり。〔五七〕提婆達、〔五八〕俱伽梨訶。多くの釋子等の如きは、五の不善法あつて、心を覆ふが故に、地獄に墮せり。此の中、云何が佛を去ること如恒河沙等の世界にして、但佛名を聞くのみにして便ち道を得と言ふや。

答へて曰く。上に已に說けり。二種の佛あり。一には法性生身佛。二には衆生の優劣に隨つて化佛を現ず。法性生身の佛の爲の故に、乃至名を聞いて得度すと說き。衆生に隨つて身を現ずる佛の爲の故に、佛と共に住すと雖も、業因緣に隨つて、地獄に墮するものありと說く。法性生身の佛は、事として濟さざる無く、願として滿たさざること無し。所以は何ん、無量阿僧祇劫に於いて、一切の善本、功德を積集し、一切の智慧無礙を具足し、衆の聖主、諸天及び大菩薩の希に能く見る者の爲にすればなり。譬へば如意珠は見難く得難く、若し見る者あれば、所願必ず果すが如く、善見の藥は、其を見る者あれば、衆患悉く除くが如く、轉輪聖王に、人の見るものあれば、富み足らざること無きが如く、釋提桓因に、人の見る者あれば、願に隨つて悉く得るが如く、梵天王に、衆生依附すれば、恐怖悉く除くが如く、人の觀世音菩薩を念ずれば、悉く危難を脫するが如き、是の事すら尙爾なり。何に況んや諸佛の法性生身をや。

〔五六〕第二三問、佛を去ること遠く、但佛名のみを聞いて、道を得ること、如何にして可能なるか。
〔五七〕Devadatta
〔五八〕Kokālika

問うて曰く、(五九)釋迦文佛も亦是れ法性生身の分にして、異體あること無し。何を以ての故に、佛在世の時、五逆罪の人・飢餓・賊盜、是の如き等の惡を作すもの有りしや。答へて曰く、「釋迦文佛の本誓は、「我は惡世に出でて、道法を以て衆生を度脫せんと欲す、富貴世樂の爲の故に出でず」と。若し佛、力を以て之に與へたまはば、事として能はざること無し。又亦た是の衆生は、福德の力薄く、罪垢深重なるが故に、意に隨つて度脫することを得ず。又今佛は但清淨涅槃を說きたまふに、而も衆生は譏論誹謗して言はく、「何を以てか多く弟子を畜へ、人民を化導するや。此も亦是れ繫縛の法なり」と。但涅槃の法を以て化するすら、猶尙譏謗す、何に況んや世樂を以て雜ふるをや。提婆達「多」の如きは、足下に千輻相輪を有らしめんと欲するが故に、鐵を以て模を作り、燒いて之を(六〇)烙く。烙き已るに足壞し身惱み、大に(六一)號す、爾の時に阿難は已に涕泣するを聞いて、佛に白さく、「我が兄死せんと欲す。願はくは佛哀んで救ひたまへ」と。佛は卽ち手を伸し、就いて其の身を摩し、至誠の言を發したまふらく、「我、羅睺羅と提婆達とを等しく看ば、彼の痛は當に滅すべし」と。是の時、提婆達は衆痛卽ち除き、手を執つて之を觀て、是れ佛手なることを知り、便ち是の言を作さく、「淨飯王の子は、此の醫術を以て、自ら生活するに足れり」と。佛、阿難に告げたまはく、「汝、提婆達を觀るや不や、心を用ふること是の如

【五九】第二四問、釋尊も亦法性生身なり、然るに佛の在世に、五逆罪の人ありしは何故なるか。

【六〇】縮藏には、焰を爍に作れり。

【六一】縮藏には、號を呼に作れり。

し。云何が度す可き」と。若し好世の人は則ち是の苦なし。是の如きの衆生は、若し世樂を以て度すことを得ず。是の人は苦樂の因緣をもて。上に已に廣く說けり。是を以ての故に佛名を聞いて、道を得る者あり、得ざる者ありと說く。復次に、佛身は無量なり、阿僧祇にして、種種同じからず。有佛は衆生の爲に法を說いて道を得せしめ、有佛は無量の光明を放ち、衆生の之に遇ふて、而して道を得る者あり。神通變化を以て、其の心を指示したまふに、而も道を得る者あり。有佛は但色身を現じたまふに、而も道を得る者あり。有佛は遍身の毛孔より、衆の妙香を出だしたまふに、衆生、之を聞いて、而も道を得る者あり。有佛は食を以て、衆生に與へて道を得せしめ、有佛、衆生但念じて道を得。佛は能く一切の草木の聲を以て、佛事を作して、衆生をして道を得せしめたまふ。有佛あり、衆生は「その」名を聞いて、而して道を得。是れ佛の爲の故に說いて、我、佛と作る時、其の名を聞く者をして、皆得度せしめんと言ふ。復次に、名を聞くも、但名のみを以ては、便ち道を得ざるなり。聞き已つて道を修し然る後に得度す。須達長者の如きは、初めて佛名を聞いて、內心に驚喜し、佛に詣り、法を聽いて、而して道を得たり。（六二）又貰夷羅婆羅門の如きは、（六三）難泥耶結髮梵志の所に從つて、初めて佛名を聞き心卽ち歡喜し、直に佛所に詣り、法を聞いて道を得。是但名を聞くを說く。名を聞けば、得道の因緣と爲るも、道を得るには非ざるなり。

【六二】貰夷羅（原音不詳）
【六三】難泥耶結髮梵志（原音不詳）

問うて曰く、(六四)此の經には諸佛の名を聞いて卽時に道を得と言ひ、名を聞き已つて道を修し、乃ち得とは言はず。答へて曰く、今卽時と言ふは、一心中を言はず、但更に異事無く、之を聞くと言ふが故に、卽時と言ふ、譬へば經の中に、慈心を修する時は卽ち(六五)七覺意を修すと說くが如し。難ずる者の言く、「慈三昧は有漏にして、是れ衆生法を緣ず。云何が卽時に七覺を修するや」と。答ふる者の言く、「慈より起ち已つて卽ち七覺を修し、更に餘法無きが故に卽時と言ふ。(六六)卽時に二種あり。一には同時、二には久しと雖も、更に異法無し。卽ち是の心にして、而も七覺を修するを得るも、亦卽時と名く」と。復次に、衆生あり。福德淳熟して、結使の心薄く、應當に得道すべくして、若し佛名を聞けば、卽時に道を得。又復た佛の威力を以ての故に、聞いて卽ち得度す。譬へば熟せる菓の、若し治なき者も、小因緣を得て、便ち自ら潰ゆるが如く、亦熟果に若し人の取ること無くとも、微風の因緣もて、便ち自ら墮落するが如し。譬へば、新淨なる白疊は、爲に色を受け易きが如し。是の人の爲の故に、若し佛名を聞けば、卽時に道を得と說く。譬へば、鬼神の人に著くに、仙人の咒術を

【六四】第二五問、此の經には、諸佛の名を聞いて、卽時に道を得といひ、名を聞き已つて道を修して、乃ち得とは言はざるにあらずや。

【六五】七覺意とは、七覺支のことなり。又七菩提分、七等覺支といふ。七科道品中の第六なり。覺は覺了覺察の義。聖道の生ぜざるは定慧の調はざるによる、故に心の定慧に操るを明に見分けて偏に一方にかたよらしめず、定慧均等ならしむる法なるが故に等覺と名け、覺法七種に分るれば、支或は分といふ。修道に於て思惑を斷ずること此七覺によ る。

一、擇法覺支　二、精進覺支
三、喜覺支　四、輕安覺支
五、念覺支　六、定覺支
七、行捨覺支。

【六六】卽時の二義。

聞けば。即時に捨て去るが如し。

問うて曰く、（六七）如恆河沙等の世界を過ぎて。誰か此の名を傳へて。彼をして聞くことを得せしむるや。答へて曰く。佛は神力を以て。舉身の毛孔より無量の光明を放ち。一一の光の上に皆寶華あり、一一の華上に皆坐佛あり。一一の諸佛は、各妙法を說き。以て衆生を度し、又諸佛の名字を說きたまふ。是を以ての故に聞くこと放光の中に說くが如し。復次に。諸の大菩薩は本願を以て。佛法無き處に至り。佛名を稱揚せんと欲す。此の品の中に說く者の如きは。是の故に聞くことを得。復た大功德力の人あり。虛空の中より。佛の名號を聞く。（六八）薩陀波崙菩薩の如し。諸天より聞く有り、或は樹木の音聲の中より聞き。或は夢中より聞く。

復次に。諸佛には不可思議の力あり。或は自ら往いて語りたまひ。或は聲を以て告げたまふ。又菩薩の如きは。一切衆生を度せんと誓願を作す。是を以ての故に。「我。佛と成る時。如恆河沙等を過ぐる世界の衆生は。我が名を聞いて皆佛と成ることを得。是を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と說く。

問うて曰く、（六九）上に諸の功德及び諸の所願を得んと欲す。是の諸事は、皆是れ衆行の和合して成ずる所なり。何を以ての故に但當に般若波羅蜜「多」を學すべしと說くや。答へて曰く、是の經を般若

【六七】第二六問、如恆河沙等の世界を過ぎて、誰か此の名を聞いて、彼をして聞くことを得せしむるか。
【六八】Sadāpralāpa
【六九】第二七問、諸の功德及び諸の願は、衆行の和合によりて成ぜらる、然るを今但智度を學せよと言ふ理由如何。

波羅蜜「多」と名く。佛は其の事を解説せんと欲したまふ。是の故に品品の中に皆般若波羅蜜「多」を讃したまへり。復次に。(一〇)般若波羅蜜「多」は。是れ諸佛の母なり。父母の中にて、母の功は最も重し。是の故に佛は。般若を以て母と爲し。般舟三昧を父と爲したまふ。三昧は能く三昧を攝持し、智慧をして成ずることを得せしむるも。而も諸法實相を觀ずること能はず、般若波羅蜜「多」は、能く遍ねく諸法を觀じて、實相を分別し、事として達せざること無く。事として成せざること無し、功德大なるが故に。之を名けて母と稱す。是の故に行者は六波羅蜜「多」を行じ。及び種種の功德と和合して、能く衆願を具すと雖も。而も但當に般若波羅蜜「多」を學すべしと説く。復次に。般若の後品の中に説くが如く。若し般若波羅蜜「多」無くんば。(一一)餘の五事は波羅蜜「多」と名けず。普ねく衆行を修すと雖も。亦諸願を滿具すること能はず。種種の華彩も。若し膠なくんば。亦用に中らざるが如し。衆生は無始より世界の中に來つて、布施。持戒。忍辱。精進し、一心に智慧を修すと雖も、世間の果報を受け已れば。復た還つて盡く、何となれば般若波羅蜜「多」を離るればなり。今佛恩を以て、般若波羅蜜「多」は。六事を修行するを以ての故に。波羅蜜「多」と名くることを得、佛道を成就し、佛佛をして相續して。而も窮盡すること無からしむ。

復次に。菩薩は般若波羅蜜「多」を行ずる時。普ねく諸法を觀ずるに、皆空にして、空も亦復た空な

【一〇】智度は是れ諸佛の母なり。

【一一】餘の五事とは、布施と持戒と、忍辱と精進と禪定となり。

り。諸觀を滅して、佛德の般若波羅蜜〔多〕を得、大悲の方便力を以て、還つて諸の功德業を起す。此の清淨の業因緣の故に、報つて諸の功德を得ざること無く、般若波羅蜜〔多〕を離るれば、無礙の智慧あること無し。云何ぞ。諸願を得んと欲せば當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし等と言はん。復次に。又 (三) 五波羅蜜〔多〕に。般若を離るるを以て波羅蜜〔多〕の名字を得ず。五波羅蜜〔多〕は盲の如く、般若波羅蜜〔多〕は眼の如し。五波羅蜜〔多〕は坏瓶に水を盛るが如く、般若波羅蜜〔多〕は成熟の瓶の如し。五波羅蜜〔多〕は鳥の兩翼なきが如く、般若波羅蜜〔多〕は翼ある鳥の如し。是の如き等の種種の因緣の故に、般若波羅蜜〔多〕は能く大事を成ず。是の故に諸の功德及び願を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべしと言ふ。

【三】五波羅蜜多とは、布施波羅蜜多、持戒波羅蜜多、忍辱波羅蜜多、精進波羅蜜多、靜慮波羅蜜多なり。

巻の第三十五

(二)奉鉢品第二を釋す。

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行じて、能く是の功德を作さば、是の時、四天王皆、大に歡喜し、意に念じて、『我等當に四鉢を以て、上の菩薩に奉つること、前の天王の、先佛に鉢を奉つるが如くすべし』と言はん」と。

【論】問うて曰く、(三)前品に說いて已に具足せり。今何を以てか重ねて說くや。答へて曰く、前に般若波羅蜜〔多〕を讃歎すと雖も、事未だ具足せず、聞かん者厭ふこと無し。是の故に復說けり。復次に、初品には但般若波羅蜜〔多〕の力を讃じ、今は行者、能く是の功德を作せば、四天王等歡喜して鉢を奉つると讃す。復次に、菩薩は能く諸の願行を具するが故に、佛は安慰勸進して言はく、「此の果報あつて終に虛しからざるなり」と。

復次に、般若波羅蜜〔多〕に二種の果あり。一には成佛して衆生を度し、二には未だ成佛せずと雖も、世間の果報を受け、轉輪聖王、釋梵天王として、三千世界に王たり。世間の福樂、供養の事を悉く皆備足す。今は世間の果報を以て、衆生に示すを以ての故に、是の事を說く。復次に、世間の大業

【二】以下第二釋般若德なり。
【三】第一問、般若の功德を重ねて說く理由如何。

是を成さんと欲するに、多く壞亂する者あり。菩薩は則ち然らず。內心既に定まり、外事も亦應ず。是の如き等の因緣の故に此の品を說く。

問うて曰く、〔三〕菩薩の六波羅蜜〔多〕を增益する時、諸天世人は、何の因緣の故に喜ぶや。答へて曰く、諸天は皆十善・四禪・四無量に因つての故に、是の諸の功德を生じ、皆諸佛菩薩に由るが故に有り。若し佛出世したまへば、諸天衆を增益し、阿脩羅種を減損したまふ。若し佛世に在したまはざれば、阿脩羅種は多く、諸天は減少す。雜福を種ゑ、清淨ならざるを以ての故なり。若し諸佛出世したまへば、能く諸天の疑網を斷じ、能く大事を成じたまふ。釋提桓因の如きは、命終らんと欲する時、心に怖畏を懷いて、佛に自救を求むるに、遍ねくして處を知らず。出家の人の山澤閑處に供養せらるる者を見ると雖も、皆亦其の疑網を斷ずること能はず。爾の時に〔四〕毘首羯磨天、釋提桓因に白して言さく、「尸毘王は、苦行奇特にして、世の希有とする所なり。諸の智人言く、「是の人は久しからずして、當に作佛することを得べしと」」と。釋提桓因言く、「是の事は辨じ難し。何を以てか之を知る。魚子と菴羅樹華と發心の菩薩との如し。是の三事は因の時は多しと雖も、果と成ること甚だ少し。今當に之を試むべし」と。帝釋は自ら化して鷹と爲り、毘首羯磨は化して鴿と作る。鴿、王に投するに、王は自ら身肉を割き、乃至身を擧げて稱に上り、以て鴿の命に代れば、地は爲に震動せり。是の時、

【三】第二問、菩薩の六度を增益する時、諸天世人は何故に歡喜するか。

【四】Viśvakarman

釋提桓因等は、心大に歡喜し、衆の天華を散じ、未曾有なりと歎ず。是の如く、決定して大心なれば、成佛すること久しからず。

復次に、凡人の肉眼は智慧あること無く、身を苦しめ財を求めて、以て自ら生活するすら、菩薩、六波羅蜜[多]を增益すれば、成佛すると久しからずと聞いて、猶尚歡喜す。何に況んや諸天をや。問うて曰く、[三]四天王天、三十三天は阿脩羅の難あれども、上の諸天等は此の患あること無し、何を以てか歡喜するや。答へて曰く。上の諸天は、阿脩羅の患なしと雖も、若し佛出世したまはざれば、其の天上に生るる者少く、設ひ生ずる者あるも、五欲妙ならず。何となれば但不淨の福を修すればなり。色界の諸天の宮殿・光明・壽命も亦復是の如し。

【三】第三問、四天王天、三十三天には阿修羅の難あれども、上の諸天等には此の患なし、然るに今歡喜する理由如何。

復次に、諸天の中に智慧ある者は、能く禪味を知り、五欲は悉く皆無常なるも、唯佛出世して、能く常樂の涅槃を得せしめたまふことを知る。世間の樂と、涅槃の樂とは、皆佛菩薩に由つて得るを以て、是の故に歡喜す。譬へば甘美なる果樹茂盛し成就すれば人大に歡喜するが如し。「(そは)」樹に種種の利益あるを以てなり。其の蔭を庇ふ者あり。其の華を用ゐ、其の果實を食ふもの有り。菩薩も亦是の如く、能く不善法の蔭を離るるを以て、三惡の苦熱を遮して、能く人天に福樂の華を與へ、諸の賢聖に三乘の果を得せしむ。是の故に歡喜す。

問うて曰く、[六]諸天は供養の事多し、何を以てか鉢を奉るや。答へて曰く、四天王は鉢を奉り、餘天の供養。諸天の供養も、各定法あり。佛初めて生れたまふ時の如きは、釋提桓因は天衣を以て佛身に奉承し。梵天王は躬自ら蓋を執り、四天王は四邊を防護し、淨居諸天は、菩薩をして、厭離の心を生ぜしめんと欲するが故に。化して老病死人及び沙門の形と作る。又「佛」出家したまふ時は。四天王は使者に勅して、馬の足を捧擧せしめ、自ら四邊に菩薩を侍護し、天帝釋は髮を取つて、其の天上の城の東門の外に於いて、髮塔を立て、又菩薩の寶衣を持して、城の南門の外に於いて、衣塔を立て。佛、樹下に至りたまふ時は。好草を奉上す。[七]執金剛菩薩は、常に金剛を執つて菩薩を衞護し。梵天王は佛の轉法輪を請す。是の如く各常法あり。是の故に四天王は鉢を奉つれり。四鉢の義は先に說くが如し。

問うて曰く、[八]佛は一身なり、何を以てか四鉢を受けたまふや。答へて曰く、四王は力等し、偏じて[九]一人を受く可らず。又佛、神力もて四鉢を合して、一と爲すを見せしめたまふに、心喜び。信淨うして、是の念を作す、「我等は菩薩の初め生れてより、今成佛に至るまで、修する所の供養功德虛しからず」と。

問うて曰く、[一〇]四天王の壽命は、五百歲なるに、菩薩は無量阿僧祇劫を過ぎて、然る後に成佛す。

【六】第四問、諸天には供養の事多し、然るを今特に鉢を奉つる理由如何。

【七】Vajrapāṇi or Vajradhara

【八】第五問、佛は一身にて、四鉢を受け給ふ理由如何。

【九】縮藏には、一人の二字なし。

【一〇】第六問、四天王の壽命は五百歲なるに、菩薩は無量劫を過ぎて後に成佛す。されば今の四天王は、後の四天王にあらず、喜ぶべき理由なきにあらずや。

今の四天は是れ後の天に非ず、何を以ての故に喜ぶや。答へて曰く、同一姓なればなり。譬へば貴姓の胤流は、百世の遠きを以ての故に異と爲さず。或る時、行者は、菩薩の六波羅蜜「多」を增益するを見て、時に心に是の願を作す、「是の菩薩の成佛する時、我當に鉢を奉るべし」と、是の故に生るることを得。

復次に、(一)四天王の壽は五百歳なるも、人間の五十歳を四天王處の一日一夜と爲し、亦三十日を一月と爲し、十二月を一歳と爲す。此を以て歳壽五百歳は、人間の九百萬歳と爲る。菩薩の能く是の功德を作す者、或は近く成佛せんに、初生の四天王は値ふとを得べきに足る。

問うて曰く、(二)摩訶衍經の中に說くが如くんば、有佛は、喜を以て食と爲し、揣食を食したまはず。天王佛の如きは、衣服儀容、白衣と異ならず、鉢食を須ゐたまはず。何を以てか四天王は、定んで應に鉢を奉つるべしと言ふや。答へて曰く、「定んで」とは鉢を用ふる者と爲す、故に用ゐずとは說かず。復次に、鉢を用ふる諸佛は多く、鉢を用ゐざる者は少し。是の故に多きを以て、「定んで」と爲す。

【一】四天王の壽命五百歳は、人間の九百萬歳に當る。

【二】第七問、或る佛は喜を以て食となし、天王佛は、衣服儀容、白衣と異らず、然るに四天王が鉢を奉るは何故なるか。

經 三十三天乃至他化自在天、亦皆歡喜し、心に念じて言く、「我等は當に晝夜に給侍供養し、阿修羅神を減損し、諸天を增益

すべし」と。三千大千世界の四天王天、乃至阿迦膩吒天、皆大に歡喜し、意に念じて言く、「我等は當に是の菩薩の轉法輪を請すべし」と。

論 釋して曰く、是の諸天等は、華香、瓔珞、禮拜、恭敬、聽法、讚歎等を以て供養し、亦是の念を作さく、「人淨福を修すれば、阿修羅種を減じ、三十三天を增益す。我が諸天も亦增益することを得ん」と。

問うて曰く、〔一三〕上に六種の天は已に說けり、何を以てか、更に三千大千世界の中の、乃至阿迦膩吒天の歡喜供養を說くや。答へて曰く、先には一須彌山上の六天を說けり、此には三千大千世界の諸天を說く。先には但欲界を說けり、今此には欲界色界の諸天、佛の轉法輪を請ずるを說く。上には淨居諸天の、種種に供養勸助するを說くと雖も、今、轉法輪を請ずる事は大なるが故なり。

問うて曰く、〔一四〕三藏の中には但梵天、轉法輪を請ずと說けり、今何を以てか四天王乃至阿迦膩吒天を說くや。答へて曰く、欲界の天は近きが故に前に來る、色界は都ての名を梵と爲す。若し梵王、佛を請ずと說けば、已に餘天を說くなり。又梵を色界の初門と爲す、初を說くが故に後も亦說けり。復次に、衆生は佛あるも、佛なきも、常に梵天を識り、梵天を以て世間の祖父と爲す。世人の爲の故に

〔一三〕第八問、已に六種の天を說き、今又更に三千大千世界乃至阿迦膩吒天の歡喜供養を說く理由如何。

〔一四〕第九問、小乘經中には但梵天の轉法輪を請するを說き、今四天王乃至阿迦膩吒天を說くは何故なるか。

梵天を説く。法輪の相を説くこと先に説くが如し。

【経】舎利弗よ、是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜（多）を行じ、六波羅蜜（多）を増益する時、諸の善男子、善女人は各各歡喜して意に念言すらく、「我等、當に是の人の爲に父母、妻子、親族、知識と作るべし」と。

【論】問うて曰く、（二五）前に已に能く是を作すの功徳を説けり、今何を以てか、復六波羅蜜「多」を増益すと説くや。答へて曰く、先には總相を説き、今は別相を説く。復次に、前に説く所の功徳の中、種種無量なれば聞く者厭倦す。今は但略して六波羅蜜「多」を説けば、則ち盡く諸の功徳を攝す。復次に、天の爲に説くが故に能く諸の功徳を作し、人の爲めに説くが故に六波羅蜜「多」を増益す。何を以てか之を知るや。後に善男子、善女人を説くが如し。是を以ての故に知る。

問うて曰く、（二六）四天王天より乃ち阿迦膩吒天に至るまで、何を以てか善天を説かずして、而も但人中の善男子、善女人を説くや。答へて曰く、諸天は皆天眼、天耳、他心智あつて、菩薩に供養することを知るが故に、別して其の善を説かず。人は肉眼を以て見るに知なし。善なる者は能く知つて供養す。少きを以ての故に別して善者を説く。善者は佛より法を聞き、或は弟子の菩薩より聞き、或は受記せられて當に作佛すべしと聞き、又佛、其の名を讃歎したまふ者を聞くが故に、知つて善を修す。

【二五】第一〇問、重ねて六度の増益を説く理由如何。

【二六】第一一問、善天を説かず、何故に但人中の善男子善女人を説くか。

問うて曰く、〔一七〕何を以てか但男子女子の善を說いて、二根、無根の者の善を說かざるや。答へて曰く、無根は所謂無得道の相なり。是の故に說かず。毗尼の中に〔說くが〕如くんば、〔二根無根の者は〕出家するを得ず。其の男女相を失するを以ての故に、其の心不定なり。小因緣を以ての故に、便ち瞋結使多きが故に、世事に著し、多く疑網を懷き、道法を樂まず。能く少しく福事を修すと雖も、智慧淺薄にして、深く本性に入つて、轉移すること能はず。是の故に說かず。〔一八〕聲聞法の中には是の如く說けり。摩訶衍の中には、譬へば大海の容れざる所なきが如く、是の無根の人も、或時は善を修す。但少きを以ての故に說かざるのみ。所謂少しとは男女の中に於いて、是の人は最も少く、是の人の善を修する者も少し。譬へば白人は鬚髮黑子黑しと雖も、黑人と名けざるが如し。〔一九〕二根の人は結使多く、雜して亦は男事を行じ、亦は女事を行じ、其の心邪曲にして、勉濟す可きこと難し。譬へば稠林に木を曳くに、曲れる者は出し難きが如し。又〔二〇〕阿脩羅の如きは、其の心不端なるが故に、常に佛を疑うて、謂はく、「佛は天を助く」と。佛、爲に五衆を說きたまふに、謂はく、「六衆あれども、爲に一を說かず」と。若し四諦を說きたまへば、謂く、「五諦あれども、一事を說かず」と。二根の人も、亦是の如く、心多く邪曲なるが故に、道を得るに任へず。是の故に但男子女人の中の善者のみを說くなり。

〔一七〕第一二問、但男子女人の善を說いて、二根無根の者の善を說かざる理由如何。
〔一八〕小乘には無根の得道を許さず。大乘には之を許す。
〔一九〕二根の人は邪曲の故に道を得ず。
〔二〇〕阿修羅は疑多くして佛を疑ふ。

〔二〕善相とは、慈悲心あつて、能く惡罵を忍ぶ。法句馬品の中に說くが如くんば、能く惡罵を忍ぶ人、是を人中の上と爲す。譬へば好良の馬の、王乘と爲るに中る可きが如し。

復次に、五種の邪語、及び輕呵、打害、縛繫等を以て、其心を毀壞すること能はざる、是を名けて善相と爲す。復次に、三業に樂を失ふこと無く、善人に於いて他の善を毀らず、己の德を顯さず、衆人に隨順して他の過を說かず、世樂に著せず、名譽を求めず、道德の樂を信樂し、自業淸淨にして衆生を惱まさず、心に實法を貴んで世事を輕賤し、唯直信を好んで他語に隨はず、一切衆生に樂を得せしむるが爲の故に、自ら己の樂を捨て、一切衆生をして、苦を離るることを得せしむるが故に、身を以て之に代る。是の如き等の無量を名けて善人の相と爲す。是の相は多く男女に在るが故に、善男子善女人を說く。

問うて曰く、〔三〕善男子善女人は、何に因つてか能く是の願を作すや。答へて曰く、善男子善女人は自ら福薄く、智慧尠少なることを知り、菩薩に習近して過度を求めんと發す。譬へば沈石は重しと雖も、船に依つて度すことを得るが如し。又善男子善女人は、菩薩は一世二世に從つて、而も道を成ずるとを得ず、無央數世に生死に往來すと聞き、便ち是の念を作す、「我當に與めに因緣を爲すべし」と。

復次に、菩薩は德を集むこと厚きが故に、所生の處に在つて、衆生皆來つて菩薩を敬仰す、利益を

〔二〕善人の相を論す。
〔三〕第一三問、善男子善女人の能く是の願を作せる理由如何。

蒙ること重きを以ての故なり。若し菩薩の壽を捨するを見ては、則ち是の願を作す。「我當に菩薩の與めに父母、妻子、眷屬と作るべし」と。何となれば善人に習近すれば、功德を增益することを知ればなり。譬へば衆香を積集すれば、香氣轉た多きが如し。[三]菩薩の如きは、先世に國王の太子と爲り、閻浮提の人の貧窮なるを見て、如意珠を求めんと欲し、大海に入つて龍王の宮に至る。龍は太子の威德の殊妙なるを見て、即ち起つて迎逆し、前に供養を延べて、而も之に問うて言く、「何ぞ能く遠く來るや」と。太子答へて曰く、「我閻浮提の衆生を憐愍するが故に、如意寶珠を求めて、以て之を饒益せんと欲す」と。龍の言く、「能く我が宮に住し、供を受くると一月せば、當に以て相與ふべし」と。太子は即ち住すること一月にして、龍王の爲めに多聞を讃歎するに、龍は即ち珠を與ふ。是の如意珠は能く一由旬を雨らす。龍の言く、「太子に相あり、久しからずして作佛せん、我れ當に多聞第一の弟子と作るべし」と。[四]時に太子は復一龍宮に至つて珠を得、二由旬を雨らし、二月神通力を讃歎す。龍の言く、「太子作佛せんこと久しからじ、我當に神足第一の弟子と作るべし」と。[五]復一龍宮に至つて珠を得、三由旬に雨らし三月智慧を讃歎す。龍の言く、「太子は作佛せんと久しからじ、我當に智慧第一の弟子と作るべし」と。諸龍は珠を與へ已つて言

【三】菩薩龍宮に入りて寶珠を求むるに、一龍珠を與へて、多聞第一の弟子たらんと願を作す。

【四】菩薩龍宮に入りて寶珠を求むるに一龍、珠を與へて、神通第一の弟子たらんと願を作す。

【五】菩薩龍宮に入りて、寶珠を求むるに、一龍、珠を與へて、智慧第一の弟子たらんと願を作す。

く、「汝が壽命盡きなば、珠は當に我に還すべし」と。菩薩は之を許す。太子は珠を得て閻浮提に至るに。一珠は能く飲食を雨らし、一珠は能く衣服を雨らし、一珠は能く七寶を雨らして衆生を利益す。

又〔二六〕須摩提菩薩の如きは、然燈佛を見たてまつり、〔二七〕須羅婆女に從ひ五莖の華を買ふに背へて之を與へず。卽ち五百の金錢を以て五莖の華を得るに女は猶ほ與へず、而も之を要して言く、「願はくは我れ世世に常に君が妻と爲らば、當に以て相與ふべし」と。菩薩は佛に供養するを以ての故に、卽便ち之を許す。

又〔二八〕妙光菩薩あり。長者の女あつて、其の身を見るに、二十八相あり。愛敬の心を生じて、門下に住在す。菩薩旣に到る、女は卽ち頸の琉璃珠を解きて、菩薩の鉢の中に著け、心に是の願を作す、「我れ當に世世に此の人の婦と爲らん」と。此の女は二百五十劫の中に諸の功德を集め、後に喜見婬女園の蓮華の中に生ず。喜見は養育して女と爲すに、年十四に至つて女は世智に工にして皆悉く備足す。爾の時、閻浮提に王あり、名けて財主と爲す。太子を德主と名け大悲心あり。時に城を出でて園に入りて遊觀するに、諸の婬女等導き引いて、德主を歌讃す。太子は諸の寶物衣服飲食を散ずること、譬へば龍の雨の周遍せざること無きが如し。喜德女は太子を見自ら歌偈を造つて太子を讃じ、愛眼を以て之を視、目未だ曾つて眴かずして、而も自ら發言すらく、

〔二六〕須摩提菩薩（Sumati）五莖の華を以て、然燈佛を供養する因緣。
〔二七〕須羅婆女（原音不詳）
〔二八〕喜德女、德主太子を見て、其の婦となり、俱に妙日身佛の所に詣る因緣。

「世間の事は我れ悉く之を知れり。我れ此の身を以て太子に奉給せん」と。太子問うて言く、「汝は誰に屬すと爲すや、若し所屬あらば此れ我が宜しきに非ず」と。爾の時に喜見婬女は、太子に答へて言く、「我が女なり。生年の日月時節皆太子と同じ。此の女は我が腹より生じたるに非ず、我、晨朝園に入り、蓮華の中に此の女あつて生ずるを見る。我因つて養育し、畜つて以て女と爲す。我を以ての故に、此の女を輕んずること無れ。此の女は、六十四能く悉く備へざる無し。女工、技術、經書、醫方皆悉く了達し、常に慚愧を懷き。内心中直にして、嫉妬あること無く、邪婬の想なし。我が女の德儀は是の如し、太子必らず之を納るべし」と。德主太子、答へて女に語つて言く、「姉よ、我は阿耨多羅三藐三菩提心を發し。菩薩道を修し、愛著する所なく。國財、妻子。象馬七珍を求索せらるる所あれば人の意に違らはず。若し汝が生める男女及び汝が身を。人の求むる者あらんには、當に以て之を施すべし。憂悔を生ずること莫れ。或る時は汝を捨てて出家し、佛弟子と爲つて淨く山藪に居らんに、汝亦愁ふること勿れ」と。喜德女答へて言く。「假令地獄の火來つて我が身を燒き滅するとも、終に亦悔いざらん、我も亦婬欲戲樂の爲の故に、直も以て相好むにあらず。我は阿耨多羅三藐三菩提を勸助せんが爲の故に。正士に奉事す」と。女は又太子に白して言さく、「我、昨夜夢に妙日身佛。道樹の下に坐したまへるを見き。往いて之を觀る可し」と。太子は女の端正なるを見、又佛の出でたまふを聞いて、此の二因緣を以ての故に、共に一車に載り、俱に佛所に詣る。佛、爲に法を說きたまふ

に、太子は無量陀羅尼門を得、女は調伏の心志を得たり。太子は爾の時五百の寶華を以て、佛に供養したてまつり、以て阿耨多羅三藐三菩提を求む。太子、父王に白して言さく、「我れ妙日身佛を見たてまつることを得て、大に善利を得たり」と。父王は聞き已つて、愛重する所の物を捨て、以て太子に與へ、其の官屬、國內の人民と倶に佛所に詣る。佛、爲に法を說きたまふに、王は一切法無關燈陀羅尼を得たり。時に王は思惟すらく、「白衣の法を以て、國土を攝治し、五欲を受けて、而も道を得べしとす可らず」と。是の思惟を作し已つて、德主太子を立てて王と爲し、出家して道を求む。是の時、太子は月の十五日に於いて、六寶來り應じ、喜德妻は變じて寶女と爲る。不可思議經の中に廣く說くが如し。是の如き等の因緣の故に、善男子善女人は、世世に菩薩の父母妻子眷族と爲らんことを願ふを知る。

【一九】第一四問。諸天の是の願を作せる理由如何。

【經】爾の時に、四天王天より乃ち阿迦膩吒天に至るまで、皆大に歡喜し、各自に念言すらく、「我等當に方便を作して、是の菩薩をして婬欲を離れ、初發意より常に童眞を作し、色欲と共に會せしむること莫かるべし。若し五欲を受くれば、梵天に生ずることを障す、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや」と。是を以ての故に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、婬欲を斷じて出家すれば、應に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、欲を斷ぜざるに非ず。

【論】問うて曰く、一九諸天は何を以てか是の願を作すや。答へて曰く、世間の中には五欲第一にし

て、愛樂せざるもの無し。五欲の中に於いて觸を第一と爲し、能く人心を繫ぐ。人深泥に墮在すれば、拯濟す可きこと難きが如し。是の故に諸天は方便を以て、菩薩をして婬欲を遠離せしむ。復次に、若し餘の欲を受くるも猶智慧を失せず、婬欲會する時は、身心荒迷して省覺する所なく、深く著して自ら沒す、是の故に諸天は菩薩をして之を離れしむ。

問うて曰く、【三〇】云何が離れしむるや。答へて曰く、釋迦文菩薩の如きは、淨飯王の宮に在り、城を出でて遊觀せんと欲するに、淨居の諸天化して老病死人と爲り、其の心をして厭はしむ。又夜半に諸の宮人妓直の惡露不淨にして、涕唾流涎し、屎尿塗漫するを見せしむ。菩薩は見已つて、卽便ち穢厭す。或る時、諸天は女人をして、惡心妬忌にして恩德を識らず、惡口欺誑して、省察する所なからしむ。菩薩は見已つて、卽ち念を生じて言く、「身は人に似たりと雖も、其の心は傯むべし」と、卽便ち之を捨つ。菩薩をして初發心より、常に【三一】童眞行を作し、色欲と共に會せざらしめんと欲す。何となれば【三二】婬欲を諸結の本と爲せばなり。佛の言はく、「寧ろ利刀を以て身體を割截すとも、女色と共に會せざれ」と。刀截は苦なりと雖も惡趣に墮せず。婬欲の因緣は、無量劫數に於いて、地獄の苦を受く。人の五欲を受くるすら、尙梵世に生ぜず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。

【三〇】第一五問、諸天は菩薩をして如何にして婬欲を離れしむるか。

【三一】童眞行とは、十住の第八住、初めて佛家に生じて童子の位にあるをいふ。第一發心位より六住を經て此の位に來り佛の十身の靈相一時に具足するなり。

【三二】婬欲は諸結の本なり、寧ろ利刀を以て、身體を割截すとも、女色と共に會せざれ。

或は有人の言く、「菩薩は五欲を受くると雖も、心に著せざるが故に道を妨げず」と。是の故に經に言く、「五欲すら尚梵世に生ぜず」と。梵世には無始より、衆生皆中に生ずることを得。五欲を受くる者は、應に得べき所すら尚之を得ず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。本得ざる所を而も之を得んと欲す。是の故に菩薩は、應に童眞を作すべし。梵行を修行せば、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。梵行の菩薩は、世間に著せざるが故に、速に菩薩の道を成ず。若し婬欲の者は、譬へば膠漆の離れ得べきこと難きが如し。何となれば身に愛欲を受くればなり。婬欲は根深し。是の故に出家法の中には、婬戒は初に在り、又亦重しと爲す。

【三】 三種の菩薩――五欲の離不離に就て。

經 舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、要らず當に父母妻子親族知識あるべきや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「或は有る菩薩には、父母妻子親族知識あり、或は有る菩薩は、初發意より婬欲を斷じ、童眞行を修するより、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、色欲を犯さず、或は有る菩薩は、方便力の故に、五欲を受け已つて、出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得」と。

論 釋して曰く、是れ【三】三種の菩薩なり。初は世間の人の如く、五欲を受けて、後に捨離して出家し、菩提道を得。二は大功德牢固にして、初發心の時に、婬欲を斷じてより、乃ち佛道を成ずるに至る。是の菩薩は或は法身、或は肉身、或は欲を離れ、或は未だ欲を離れず。三は清淨法身の菩薩

にして、菩（三四）無生法忍を得て、六神通に住し、衆生を敎化するが爲の故に衆生と事を同じうし、而も之を攝取す。或は轉輪聖王と作り、或は閻浮提王、長者、刹［帝］利と作り、其の須ふる所に隨つて而も之を利益す。

【論】譬へば、幻師、若くは幻弟子の善く幻法を知つて、五欲を幻作し、中に於いて共に相娯樂するが如きは、汝が意に於いて云何。是の人は此の五欲に於いて、頗る實に受くるや不や」。舍利弗言さく、「不なり世尊よ」と。佛舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の、方便力を以ての故に、五欲を化作し、中に於いて樂を受け、衆生を成就するも亦復是の如し。是の菩薩摩訶薩は欲に染まず、種種の因緣を以て、五欲を毀呰し、欲を熾然と爲し、欲を誑惑と爲し、欲を敗壞と爲し、欲を怨の如しと爲す。是の故に舍利弗よ、當に菩薩は、衆生の爲の故に、五欲を受くることを知るべし。

【論】問うて曰く、（三五）三種の菩薩の中にて、何を以てか獨り一種の菩薩の爲に譬喩を作すや。答へて曰く、一は人法の如く婬欲を斷せず、二は常に婬欲を斷じて淨行を修し、三は亦淨行を修するも現に婬欲を受く。人了せざるを以ての故に、爲に譬喩を作るなり。

問うて曰く、（三六）何を以てか夢化等を以て喩と爲さざるや。答へて曰く、夢は（三七）五情の知る所に非

【三四】無生法とは、生滅を遠離せる眞如實相の理體なり。眞智此理に安住して動かざるを無生法忍といふ。
【三五】第一六問、三種の菩薩中、何故に一種の菩薩の爲にのみ譬喩を作すか。
【三六】第一七問、夢化等を以て譬喩となす理由如何。
【三七】五情とは、眼耳鼻舌身の五根、卽ち觀聽嗅味觸の五官なり。

す、但内心憶想の故に生ず。人の五情を以て見る所は、變失無常なり、以て解するを得べし。化は五情の知る所なりと雖も、而も見る者は甚だ少し。佛を度と爲す、度すべきは衆生なり。幻は是れ衆人の信ずる所、是の故に喩と爲す。幻師の如きは、幻術を以ての故に、衆人の中に於いて希有の事を現じ、人をして歡喜せしむ。菩薩の幻師も亦是の如く、五神通の術を以ての故に、衆生の中に於て五欲を化作し、共に相娛樂し、衆生を化度す。〔三八〕衆生に二種あり。在家と出家なり。出家の衆生を度するが爲の故に、聲聞、辟支佛、佛、及び諸の出家の外道師を現ず。在家の衆生は、或は出家の者を見て得度する有り、或は在家の同じく五欲を受くるを見て、化度す可き有り。

菩薩は〔三九〕常に種種の因緣を以て、五欲を呵責す。欲を熾然と爲すとは、若し未だ失せざる時は、三毒の火然ゆ。若し其の失する時は、常に火燒くこと無し。二火燒くが故に名けて熾然と爲す、都べて樂時なし。欲を穢惡と爲すとは、諸佛、菩薩、阿羅漢等の、諸の離欲の者に、皆穢惡せらる。譬へば、人、狗の糞を食ふを見て、賤んで之を愍むが如し。好食を得ずして、而も不淨を噉ふ。受欲の人も、亦復是の如く、内心に離欲の樂を得ず、色欲に於いて、不淨の樂を求む。欲を毀壞と爲すとは、五欲の因緣に著するが故なり。天王、人王、諸の富貴の者の國を亡ぼし、身を危うくするは、之に由らざる無し。欲は怨の如しとは、人の善利を失ふなり。亦刺客の、外は親善の如くにして、内、心に害を懷くが如し。五欲も是の如く、善心を喪失

〔三八〕二種の衆生——在家と出家。
〔三九〕菩薩は五欲を訶責す。

し、人の慧命を奪ふ。五欲の生ずるは、正しく衆善を破壞し、德業を毀敗せんが爲の故に出づ。又知る、五欲は鉤の魚を賊ふが如く、獵の鹿を害するが如く、燈の蛾を燒くが如きことを。是の故に欲は怨の如しと說く。怨家の害は一世に過ぎず。五欲に著するの因緣は、三惡道に墮し、無量世に諸の苦毒を受く。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩は、云何が當に般若波羅蜜（多）を行ずべきや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず、般若波羅蜜（多）を見ず、亦我は般若波羅蜜（多）を行ずるを見ず、亦我は般若波羅蜜（多）を行ぜざるを見ず。何となれば菩薩は、菩薩の字は性空なるを以てなり。空の中には色もなく、受想行識もなく、色を離れて亦空なく、受想行識を離れて亦空なく、空は即ち是れ色、色は即ち是れ空、空は即ち是れ受想行識、受想行識は即ち是れ空なり。何となれば舍利弗よ、但名字あるが故に、謂つて菩提と爲し、但名字あるが故に、謂つて菩薩と爲し、但名字あるが故に、謂つて空と爲せばなり。何となれば諸法の實性は、生なく、滅なく、垢なく、淨なきを以てなり。菩薩摩訶薩は、是の如く行ずるも、亦生を見ず、亦滅を見ず、亦垢を見ず、亦淨を見ず。何となれば、名字は、是れ因緣和合の作法にして、但分別憶想の假名を說くを以てなり。是の故に菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、一切の名字を見ず、見ざるが故に著せざるなり。

【四二】第一八問、舍利弗は已に、菩薩の如何にして智度を行ずべきかを問へり。今また重ねて問ふは何故なるか。

【論】問うて曰く、（四二）是の事は舍利弗上に已に問へり。今何を以て重ねて問ふや。答へて曰く、先に

は佛、「一切種[智]を以て、一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜[多]を學すべし」と說きたまひしに因る故に問へり、自意の間には非ず。復次に、舍利弗は、上に種種に、般若の功德を讃ずるを聞いて、心に歡喜し、般若を尊重するが故に、云何が行ずべきと問へり。病人の良藥を歎ずるを聞いて、便ち、云何が服すべきと問ふが如し。

問うて曰く、〔一九〕先に已に住不住法の行を問へり。檀波羅蜜[多]は、施者、受者、財物不可得なるが故に、是の如き等は般若を行ずと爲す、今何を以てか復行を問ふや。答へて曰く、上には總じて諸波羅蜜[多]を問ひ、此には但般若を問ふ。上には廣く般若を讃歎するを主と爲し、此には直に般若を行ずることを問ふ。復次に、上には廣く般若波羅蜜[多]を歎ずる時に會ふと雖も、渴仰して得んと欲す。是の故に舍利弗は聖人の爲の故に、般若波羅蜜[多]を行ずるとを問ふ。般若波羅蜜[多]の功德は、無量無盡なれば、佛の智慧も亦無量無盡なり。若し舍利弗問を發せずんば、則ち佛の讃歎は窮りなくして已むなん。若し舍利弗問はざれば、則ち因緣なきが故に止むべからず。

〔一九〕第一九問、重ねて般若を行ずるを問ふは何故なるか。
〔二〇〕第二〇問、般若の功德は尊重なり、佛これを讃し給ふと廣しと雖も、何の不可なることあらんや。

問うて曰く、〔二〇〕般若の功德は尊重なり、若し佛廣く讃じたまふとも、何の不可か有らん。答へて曰く、般若を讃歎すれば、聞く者歡喜し、尊重し、則ち其の福德を增す。若し般若を說くを聞けば、則

ち其の智慧を增す。但福德の因緣を以ての故に佛道を成ずべきにはあらず。要ず智慧を須ちて成ずることを得べし。是の故に但讚歎のみを須ゐざるなり。人は讚歎を聞いて、心已に清淨を得て、渴仰して般若を得んと欲す。〔三〕渴人の爲めに、廣く美飮を讚歎するも、渴を解かざるが如し。即便ち應に之を與ふべきなり。是の如き等の因緣の故に、舍利弗は、今般若を行ずることを問へり。

問うて曰く、〔四〕人の眼あつて方を見、所趣の處を知つて、然る後に能く行くが如く、菩薩も亦是の如し。先づ佛道を念じて般若を知り、已が身を見て、然る後に行くべし。今何を以てか菩薩及び般若を見ずと言ふや。若し見ずんば、云何が行ずることを得ん。答へて曰く、此の中に、常に見ずとは言はず。但般若に入つて觀ずる時は、菩薩及び般若波羅蜜〔多〕を見ざることを明すのみ。般若波羅蜜〔多〕は、衆生をして實法を知らしめんが爲の故に出づ、此の菩薩の名字は、衆緣和合して、假に稱すること、後品の中に廣く說くが如し。般若波羅蜜〔多〕の名字も亦是の如く、衆法和合するが故に、假に般若波羅蜜〔多〕と名く。般若波羅蜜〔多〕は是れ假名なりと雖も、而も能く諸の戲論を破す。自性無なるを以ての故に、說いて見るべからずと言ふ。火は衆緣に從つて和合し、假に名けて火と爲す。實事なしと雖も、而も能く物を燒くが如し。

問うて曰く、〔五〕若し般若の中に入れば見ず、出づれば則ち見ば、何をか信ずべきや。答へて曰く、

【三】渴人の爲に美飮を說くも、渴を解かず。

【四】第二十一問、菩薩は般若を見ずして、云何が之を行ずるを得るか。

【五】第二十二問、若し般若の中に入れば見ず、出づれば卽ち見ば、何をか信ずべきや。

上に般若を實法と爲すが故に出づと言へり、是れ則ち信ずべし。般若波羅蜜〔多〕を出づるは、不實なるが故に信ずべからず。

問うて曰く、〔四六〕若し般若の中に入れば見ず、出づれば則ち見ば、當に知るべし、法は常空に非ず、般若の力を以ての故に空なることを。答へて曰く、世俗の法の故に、行者は般若波羅蜜〔多〕に入ると言ふも、諸の戲論を滅することを觀ずるが故に、出なく入なし。若し諸の賢聖は、名字を以て說かざれば、則ち以て凡夫を敎化することを得ざるなり。當に說意を取るべし、語言に著すること莫れ。

問うて曰く、〔四七〕若し般若の中には、一切法空を貴ばば、此の中、何を以てか先づ衆生空を說いて、我を破するや。答へて曰く、初に般若を聞けば、便ち一切法空を說くことを得ず。我は五情を以て求むるに得べからず。但憶想分別して我想を生じ、無なるを有と謂ふ。又意情の中に定緣あること無し、但憶想分別の顚倒の因緣の故に、空なる五衆の中に於いて、而も我想を生ずるのみ。若し無我を聞けば、則ち解すべきこと易し。色等の諸法は現に眼の見る所なれば、若し初に空無と言はば、則ち信ずべきこと難し。今先づ我を破し次に我所の法を破す。我、我所の法を破するが故に、則ち一切の法は盡く空なり。是の如く欲を離るるを名けて得道と爲す。

〔四六〕第二三問、若し然らば法は常空にあらず、般若の力によるか故に、空なるにあらずや。

〔四七〕第二四問、般若の中に若し法空を貴ばば、今先づ衆生空を說くは何故なるか。

復次に、般若波羅蜜「多」は一定の法なきが故に、我の般若を行ずることを見ざるなり。行せざるを見ずとは、凡夫の如きは、般若を得ざるが故に、行せずと名く。菩薩は則ち然らず。但空般若を行ずるが故に、行せざるを見ずと說くなり。復次に、佛を法王と爲す。餘の菩薩を觀るに、其の智甚だ少く、諸の結使を雜ゆ、名けて行と爲さず。譬へば國王の、少物を得と雖も、名けて得と爲さざるが如し。佛も亦是の如く、諸の菩薩を敎へて、少行ありと雖も、名けて行と爲さず。復次に、般若波羅蜜「多」を行ずる者は、憍慢の心を生じて、我は般若波羅蜜「多」を行ずと言ひて、是の相を取り、若し行せざる者は、心自ら懊沒して、憂悴を懷く。是の故に我の行ずると、行せざるとを見ずと言ふ。

復次に我の般若波羅蜜「多」を行ずるを見ずとは、有に著するの見を破し、我の般若波羅蜜「多」を行せざるを見ずとは、無に著するの見を破す。復次に、我の般若波羅蜜「多」を行ずるを見ずとは、諸法の戲調を止め、我の行せざるを見ずとは、懈怠の心を止むるが故なり。譬へば、馬に乘るに、疾ければ則ち之を制し、遲ければ則ち之に鞭つが如し。是の如く、行と不行とを分別するなり。復次に、佛は自ら因緣を說きたまへり。所謂る菩薩の字は性空なり。是の中に但菩薩の字の空を說くと雖も、而も五衆も亦空なり。空の中に色なく、色を離れて亦空なしとは、空は法空に名く。法空の中には、乃ち一毫の法なし、何に況んや麤色をや。空も亦色を離れず、何となれば色を破するが故に空あればなり、云何ぞ色を離ると言はんや。受想行識も亦是の如し。何となれば佛は自ら更に因緣を說きたまひ

しを以てなり。所謂但名字のみあるを謂つて菩提と爲し、但名字のみあるを謂つて菩薩と爲し、但名字のみ有るを謂つて空と爲す。

問うて曰く、【四八】先に已に此の事を說けり、今何を以てか重ねて說くや。答へて曰く、先には菩薩を見ず、菩薩の字を見ず、般若波羅蜜「多」を見ざるを說き、今は是の因緣を見ざるを說く。所謂但名のみ有るを謂つて菩提と爲し、但名のみ「有る」を謂つて菩薩と爲し、但名のみ「有る」を謂つて空と爲す。上の菩薩は此の菩薩の義に同じし。菩薩の字は卽ち菩薩の中に說くが如し。般若波羅蜜「多」は分ちて二分と爲す。成就とは名けて菩提と爲し、未だ成就せずとは名けて空と爲し、生相は實に不可得なるが故に名けて無生と爲す。何となれば若くは先に生じて後に法あり、若くは先に法あつて後に生じ、若くは生法一時ならば、皆不可得なるを以てなり。先に說くが如し。生ずること無きが故に、滅すること無し。若し法、不生不滅ならば、虛空の如し、云何が垢あり淨あらん。譬へば虛空は萬歲といへども、雨も亦濕さず、大火燒くとも熱せず、煙も亦著かざるが如し。何となれば本自ら無生なるを以てなり。菩薩は能く是の如く觀じて、是の不生不滅の法を離れて、生あり、滅あり、垢あり、淨ありと見ず。佛自ら因緣を說きたまふに、一切の法は皆憶想分別し、因緣和合するが故に、强ひて名を以て說く。說く可らすとは、是れ實義にして、說く可しとは、皆是れ名字なり。菩薩は般若波羅蜜「多」を行ずるに、一切

【四八】第二五問、先に已に此の事を說き、今復た重ねて說くは何故なるか。

の名字を見ずとは、先には略して名字を說く。所謂る菩薩・菩薩の字・般若波羅蜜「多」・菩提の字なり。今は廣く一切の名字は、皆見る可らずと說く、見ざるが故に著せざるなり。著せずとは、不可得なるが故なり。諸眼の中には、慧眼第一なるが如し。菩薩は慧眼を以て、遍ねく求むるに見ず、乃至細微の一法をも見ず、是の故に著せざるなり。

問うて曰く、若し菩薩は一切法の中に著せずんば、何ぞ涅槃に入らざることを得るや。答へて曰く、此の事は處處に已に說けり。今此の中には略して說かん。大悲心の故に、十方の佛を念ずるが故に、本願未だ滿さざるが故に、精進波羅蜜の力の故に、般若波羅蜜「多」と方便との二事和合するが故に、所謂不著に著せざるが故に、是の如き等の種種の因緣の故に、菩薩は諸法に著せずと雖も、而も涅槃に入らずと說く。

【四九】第二六問：菩薩もし一切法中に著せずんば、云何にして涅槃に入らざることを得るか。

習相應品第三を釋す。

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜「多」を行ずる時、是の如く思惟すべし。菩薩は但字のみあり、佛も亦但字のみ有り、般若波羅蜜「多」も、亦但字のみ有り、色も但字のみ有り、受想行識も、亦但字のみ有り。舍利弗よ、我の如きは但字のみ有り、一切の我は常に不可得なり。衆生、壽者、命者、生者、養育、衆數、人、作者、使作者、起者、使起

者・受者、使受者、知者、見者、是の一切は皆不可得なり。不可得空なるが故に、但名字のみを以て說く。菩薩摩訶薩も亦是の如く般若波羅蜜［多］を行じて我を見ず、衆生を見ず、乃至知者、見者を見ず。所說の名字も亦見る可らざるなり」と。

■ 問うて曰く、［五〇］第二品の末に已に空を說けり、今何を以て重ねて說くや。答へて曰く、上には多く法空を說き、今は雜へて法空、衆生空を說く。行者は外法を觀ずるに、悉く空にして所有なし、而も謂く、「能く空を知る者は空ならず」と。是の故に復說けり。觀者も亦空なる是れ衆生空なり。聲聞法の中には多く、一切の佛弟子は、皆諸法の中の無我を知ると說けり。［五一］佛滅後の五百歳を分つて二分と爲し、有は法空を信じ、有は但衆生空を信ず。言く、「五衆は是れ定んで［五二］有法なり、但五衆を受くる者は空なり」と。是を以ての故に佛は衆生空を說いて、以て法空を況したまふ。

復次に、我空は知り易く、法空は見難し。何となれば我は五情を以て、之を求むるに不可得なればなり。但身見の力を以ての故に、憶想分別して我と爲す。法空とは、色は眼に見る可く、聲は耳に聞く可く、是の故に其の空を知ること難し。是の二事は般若波羅蜜［多］の中には皆空なり。十八空義の中に說くが如し。

問うて曰く、［五三］我乃至知者、見者の如きは、是れ一事と爲んや、各各異れりと爲んや。答へて曰

【五〇】第二七問、今復た空を重說する理由如何。

【五一】佛滅後の五百歳を分ちて二分と爲す。(一)法空を信ずるもの、(二)但我空を信ずるもの。

【五二】有法とは、存在せるものといふこと、實在せるものと言ふほどの義。

【五三】第二八問、我及び知者見者等の一異の區別如何。

く。皆是れ一の我なり、但事に隨ふを以て異と爲す。(五四)五衆の中に於いて、我我所の心起るが故に、名けて我と爲し、(五五)五衆和合の中の主なるが故に、名けて衆生と爲し、(五六)命根を成就するが故に、名けて壽者、命者と爲し、(五七)能く衆事を起すこと、父の子を生ずるが如きを名けて、生者と爲し、(五八)乳哺衣食の因緣を以て、長ずることを得る。是を養育と名け、(五九)五衆・十二入・十八界等の諸法の因緣、是の衆法には數あるが故に、衆數と名く。(六〇)人法を行ずるが故に名けて人と爲し、(六一)手足を以て、能く所作あるを名けて、作者と爲し、(六二)力能く他を役するが故に使作者と名け、(六三)能く後世の罪福の業を造るが故に能起者と名け、(六四)他をして、後世の罪福の業を起さしむるが故に、使起者と名け、(六五)後身に、罪福の果報を受くるが故に、受者と名け、(六六)他をして苦樂を受けしむる、是を使受者と名け、(六七)目に色を視るを名けて、見者と爲し、五識を以て知るを名けて、知者と爲す。

復次に、眼を用ゐて色を見、五邪見を以て五衆を觀じ、世間出世間の正見を用ゐて、諸法を觀ずる、是を見者と名く。所謂眼根、五邪見、世間の正見、無漏見は、是を見者と名け、餘の四根の知る所、及び意識の知る所を通じて、名けて知者と爲す、是の如き諸法は皆是の

【五四】我と名くる所以。
【五五】衆生と名くる所以。
【五六】壽者命者と名くる所以。命根とは、壽命を維持する作用あるもの。
【五七】生者と名くる所以。
【五八】養育と名くる所以。
【五九】衆數と名くる所以。
【六〇】人と名くる所以。
【六一】作者と名くる所以。
【六二】使作者と名くる所以。
【六三】能起者と名くる所以。
【六四】使起者と名くる所以。
【六五】受者と名くる所以。
【六六】使受者と名くる所以。
【六七】見者と名くる所以。

神を說く。此の神は、十方三世の諸佛及び諸の賢聖、之を求むるに不可得なり。但憶想分別して、強ひて其の名と爲すのみ。諸法も亦是の如く、皆空にして實なく、但假に其の名と爲すのみ。

問うて曰く、(六八)是の神に但十六の名字あり、更に餘名ありや。答へて曰く、略して說けば則ち十六なり。廣く說けば則ち無量なり。事に隨つて名を起すは、官號の工能、智巧を差別するが如し。出家得道の種種の諸名は、皆是れ因緣和合の生なるが故に無自性なり、無自性なるが故に畢竟空なり、生空なるが故に法空なり、法空なるが故に、生も亦空なり。

【經】菩薩摩訶薩の作は、是の如く般若波羅蜜を多く行じ、佛智慧を修ければ、一切の聲聞、辟支佛の上に過ぐ。不可得空を用ふるが故なり。何となれば是の菩薩摩訶薩は、諸の名字、法の名字、所著の處も皆不可得なればなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は常に是の如く行じて、般若波羅蜜を多く行ずることを爲す。譬へば閻浮提に竹葦稻麻を滿たすが如く、諸の比丘は、其の數是の如く、智慧あること、舍利弗、目連等の如くし、菩薩の般若波羅蜜を多く行ずるの智慧に比せんと欲するに、百分の一にも及ばず、千分、百千分乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、智慧を用つて一切衆生を度脫するが故なり。

【論】釋して曰く、(六九)二の因緣あるが故に、菩薩の智慧は、聲聞、辟支佛に勝れたり。一には空を以て一切法を知り、空も亦見ず、是の空を空ずるに、不空を以てし、等一にして異ならず。二には此の

【六八】第二九問、神に十六の名字あり、其の外更に餘名ありや如何。

【六九】菩薩の智慧の聲聞辟支佛に勝る理由に二あり。

智慧を以て、爲に一切衆生を度脫して、涅槃を得せしめんと欲す。聲聞、辟支佛の智慧は、但諸法の空を觀ずるのみにして、世間、涅槃を觀じて、一と爲すこと能はざるなり。譬へば人の獄を出づるに、但牆を穿つて出でて自ら身を脫する者あると、獄を破り鎖を壞し、旣に自ら身を脫し、兼ねて衆人を濟ふ者と有るが如し。

復次に菩薩の智慧は二法に入るが故に勝れたり。一には大悲、二には般若波羅蜜（多）なり。復二法あり、一には(七〇)般舟三昧、二には(七一)方便なり。復二法あり、一には常に禪定に住し、二には能く(七二)法性に通達す。復二法あり、一には能く一切衆生に代つて苦を受け、二には自ら一切の樂を捨つ。復二法あり、一には慈心にして、怨なく恚なく、二には乃至諸佛の功德にも、心亦著せざるなり。是の如き等の種種の功德は、智慧を莊嚴するが故に、聲聞辟支佛に勝れたり。

問うて曰く、(七三)諸の鈍根なる者は、以て喩と爲す可し。舍利弗は智慧ありて利根なり、何を以てか喩と爲すや。答へて曰く、必ずしも鈍根を以て譬喩と爲さず。譬喩は論議を莊嚴し、人をして信著せしめんが爲の故な

【七〇】般舟三昧とは、般舟は佛立と譯す、此三昧を行ずれば諸佛現前すればなり。此三昧を行ずるには七日或は九十日を期して間斷なく修行す。大集賢護經には思惟諸佛現前三昧といふ。又常行道と譯す。

【七一】方便とは、種種の機に應じて適當の便法を用ゐ、眞實法に入らしむる俗に所謂てだいてなり。

【七二】法性とは、眞如の義なり、諸法の體性虛妄を離れて眞實なれば眞といひ、常住にして不變不改なれば如といふ。佛性といひ、實相といふも皆同體異名なり。

【七三】第三〇問、鈍根の者を喩とせずして、利根なる舍利弗を喩とする理由如何。

り。五情の見る所を以て以て意識に喩へ、其をして悟ることを得せしむ。譬へば樓に登るに、梯を得れば、則ち上り易きが如し。復次に、一切衆生は、世間の樂に著し、道徳涅槃を聞けば、則ち信せず樂しまざるなり。是の故に眼に見る事を以て、見ざる所のものに喩ふ。譬へば苦藥は之を服すること甚だ難く、之に假すに蜜を以てすれば、之を服すること則ち易きが如し。

復次に、舍利弗は、聲聞の中に於いて、智慧第一なれども、諸佛菩薩に比すれば、未だ現ずること有らず。（一四）閻浮提の如しとは、閻浮は樹の名にして、其の林茂盛し、此の樹は林中に於いて最も大なり。提は名けて洲と爲す。此の洲の上に此の樹林あり。林中に河底あり、金沙あり、名けて（一五）閻浮檀金と爲す。閻浮樹を以ての故に、名けて閻浮洲と爲し、此の洲に五百の小洲あつて圍遶す、通じて閻浮提と名く。

問うて曰く、（一六）諸の弟子は甚だ多し、何を以ての故に、舍利弗、目揵連等は、閻浮提の中に滿つること、竹麻稻葦の如しと説くや。答へて曰く、一切の佛弟子の中に智慧第一なる者は舍利弗にして、神足第一なるものは目揵連なり。此の二人は、佛法の中に於いても大にして、外法の中に於いても亦大なり。（一七）富樓那、（一八）迦絺那、（一九）阿那律等は、佛法の中に於いて大なりと雖も、外法に於いて如かず。又此の二人は、常に大衆に在つて、佛を助けて化を揚げ、諸の外道を

【一四】Jambudvipa
【一五】Jambunadasuvarṇa
【一六】第三一問、諸の佛弟子中、舍利弗、目犍連を擧げて、他を擧げざる理由如何。
【一七】Pūrṇa
【一八】Kathina
【一九】Aniruddha

破せり。富樓那等の比丘は、是の功徳なし。是の故に說かず。

復次に、若し舍利弗を說けば、則ち一切の智慧人を攝し、若し目揵連を說けば、則ち一切の禪定人を攝す。〔八一〕譬喩に二種あり。一には假を以て喩と爲し、二には實事を喩と爲す。今此を名けて、假喩と爲す。餘物を以て喩と爲さざる所以の者は、此の四物は叢生稠緻にして、種類も又多きを以てなり。舍利弗、目連等の比丘は、閻浮提に滿つ。是の如き諸の阿羅漢の智慧を和合すとも、菩薩の智慧に及ばず、百分の一乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。

問うて曰く、〔八二〕何を以てか、但算數譬喩も及ぶ能はざる所なりとのみ說かずして、而も百分千分の一にも及ばずと說くや。答へて曰く、算數譬喩も及ぶ能はざる所なりとは、是れ其の極語なり。譬へば人の重罪あるに、先づ打縛楚毒を以てし、然る後に乃ち殺すが如く、聲聞法の中の如きは、常に十六の一にも及ばざるを以て喩と爲し、大乘法の中には、則ち乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所を以てす。

【八一】二種の譬喩。
【八二】第三十二問。算數譬喩も及ばずと言へば足りならん、今それ百分千分の一にも及ばずと言ふは何故なるか。

【經】舍利弗よ、閻浮提の中に滿つる、舍利弗、目連等の如くならんを置け。若くは三千大千世界に滿つるもの舍利弗、目連等の如くならんも復是の事を置け、若くは十方の如恒河沙等の世界に滿つるもの、舍利弗、目連等の智慧の如くならんも、菩薩の般若波羅蜜を行ずるの智慧に比せんと欲せば、百分の一にも及ばず、千分百千分乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。

論 釋して曰く、此の義は上の閻浮提に同じ、但多きを以て異と爲すのみ。

問うて曰く、(八二)舍利弗、目連等は多しと雖も、智慧は異なること無し。何を以ての故に多きを喩と爲すや。答へて曰く、有人の謂はく、「少ければ力無く、多ければ則ち力あり。譬へば水少ければ、其の力も亦少きが如く、又絶健の人は、少衆の力寡なければ、之を制する能はざるも、大軍之を攻むれば、則ち伏するが如し」と。有人の謂はく、「一の舍利弗の智慧は少なければ、則ち菩薩の多きに及ばず、或は能く及ぶ」と。佛の言はく、「多しと雖も及ばず」と。故に多きを以て喩と爲すなり。一切の草木の力は、火に如かず、一切諸の明勢は、日に及ばざるが如く、亦十方世界の諸山は、一の金剛山に如かざるが如し。何となれば菩薩の智慧は、是れ一切諸佛の法の本にして、能く一切衆生をして、苦を離れて樂を得せしむればなり。(八三)迦陵毘伽鳥の子の如きは、未だ殼を出でずと雖も、其の音は衆鳥に勝れたり。何に況んや殼を出でたるをや。菩薩の智慧も亦是の如く、未だ無明の殼を出でずと雖も、一切の聲聞、辟支佛に勝れたり、何に況んや成佛せるをや。又轉輪聖王の太子の如きは、未だ福祚威福を成就せずと雖も、一切の諸王に勝れたり。何に況んや轉輪聖王と作れるをや。菩薩も亦是の如く、未だ成佛せずと雖も、無量阿僧祇劫に、無量の智慧福德を集むるが故に、聲聞辟支佛に勝れたり。何に況んや成佛せるをや。

【八二】 第三三問、多を以て喩とする理由如何。
【八三】 Kalaviṅka

〔經〕復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行じ、一日智慧を修せんに、一切の聲聞、辟支佛の上に出過す。

〔論〕問うて曰く、(八四)先に已に、佛の智慧を除いて、一切の聲聞、辟支佛の上に過ぎたることを說けり、今何を以て復重ねて說くや。答へて曰く、重ねて說くに非ず。上には總相を說き、今は別相を說くなり。先には一切の聲聞、辟支佛は、菩薩の智慧に及ばずと言ひ、今は但一日の智慧にも及ばざるを明す、何に況んや千萬歲をや。

〔經〕舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、聲聞の有らゆる智慧、若くは須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の智慧、佛の智慧、是の諸の衆智は、差別ある無く、相違背せず、無生にして性空なり。若し法は相違背せず、無生にして性空ならば、是の法は別異あること無けん。云何が、世尊よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、一日智慧を修せんにも、聲聞、辟支佛の上に出過すと言ふや」と。

〔論〕問うて曰く、(八五)上に佛は已に、菩薩摩訶薩の修する智慧は、聲聞、辟支佛の上に出過すと說きたまふ。今舍利弗は何を以ての故に問ふや。答へて曰く、智慧の勢力の能く衆生を度するとを問はず、今は但佛及び弟子の智慧を問ふ。體性の法中に差別あること無しとは、諸の賢聖の智慧は、皆是れ諸法實相の慧なるを以てなり。皆是の四諦及び三十七品の慧は、皆是れ三界を出でて(八六)三脫門に

【八四】第三四問、重ねて菩薩の智慧の、二乘のそれに勝れるを說く理由如何。

【八五】第三五問、重ねて菩薩の修する智慧の、二乘のそれに勝れるを說く理由如何。

【八六】三脫門とは、空、無相、無願の三なり、是れ菩薩摩訶薩初發心より一切智に至る諸行の根本なり。

入り、三乘の果慧を成ず。是を以ての故に、差別あること無しと說くなり。
復次に、須陀洹の、無漏智を以て、結を滅し果を得るが如く、乃至佛も亦是の如し。須陀洹の、二種の解脫の果、（八七）有爲解脫と（八八）無爲解脫とを用ふるが如く、乃至佛も亦是の如し。佛の入りたまへる涅槃の如きは、須陀洹の極遲なるものも、七世を過ぎず、皆同事、同緣、同行、同果報なり。是を以ての故に相違背すること無しと言ふ。所以は何ん不生にして、性空なるが故なり。

問うて曰く、（八九）無明を破して、諸の善法を集むるが故に、智慧を生ず、是の智慧は心に相應し、心と共に生じ、心に隨つて行ず。是の中に云何が、智慧と無生の性空とは、別異あること無しと說くや。答へて曰く、智慧は滅諦を緣ず、是れ不生なり。因緣和合の故に、自性あること無き、是を性空と名け、分別する所なし、智慧は緣に隨つて名を得。眼の如きは、色を緣じて眼識を生じ、或は眼識と名け、或は色識と名く。智慧は因緣和合の作法なりと雖も、無生の性空を緣ずるを以ての故に、名けて無生の性空と爲す。

問うて曰く、（九〇）諸の賢聖の智慧は、皆四諦に緣つて生ず、何を以てか但滅諦を說くや。答へて曰く、四諦の中には、滅諦を上と爲す。何となれば是の三諦は皆滅諦に屬すればなり。譬へば人の天

【八七】有爲解脫とは、阿羅漢の無漏の眞智をいふ。
【八八】無爲解脫とは、是れ涅槃なり。
【八九】第三六問、智慧と無生の性空と別異なしといふ理由如何。
【九〇】第三七問、聖賢の智慧は四諦より生ずるに、但滅諦を說くは何故なるか。

子、幷及びに群臣を請するをも、亦天子を供養すと名くるが如し。復次に、滅諦の故に無生を說き、三諦の故に性空を說く。復次に、有人の言く、「是の諸の智慧の性は、自然に不生にして、性、自ら空なり。何となれば一切の法は、皆因緣和合の故に自性なく、自性なきが故に不生なればなり」と。

問うて曰く、（九一）若し爾らば智慧と愚癡と別異あること無けん。答へて曰く、諸法の、法性の中に入るが如きは、別異あること無きこと、火の各各不同にして、而も滅相は異なること無きが如し。譬へば、衆川萬流は、各各色を異にし、味を異にするも、大海に入れば、同じく一味一名と爲るが如し。是の如く愚癡と智慧とは、般若波羅蜜「多」の中に入れば、皆同じく一味にして、差別あること爲し。五色は須彌山に近づけば、自ら其の色を失して、皆同じく金色なるが如し。是の如く內外の諸法は、般若波羅蜜「多」の中に入れば、皆一味と爲る。何を以ての故に、般若波羅蜜「多」の相は、畢竟淸淨なるが故なり。

復次に、（九二）愚癡の實相は、卽ち是れ智慧なり。若し分別して、此の智慧に著せば、卽ち是れ愚癡なり。是の如く愚癡と智慧と、何の別異か有らん。初めて佛法に入るに、是の癡は是の慧に轉じ、後深く入れば癡と慧と異なること無し。是の故に是の諸の衆智は別異あること無く、相違背せず、不生にして性空なるが故に咎なきなり。

【九一】第三八問、爾らば智慧と愚癡とは、別異なきにあらずや。

【九二】愚癡の實相は智慧なり。

經 佛、舍利弗に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行じ、一日に修する智慧を以て心に念ずらく、「我、行道の慧を以て一切衆生を益し、當に一切種智を以て一切法を知り、一切衆生を度すべし」と。諸の辟支佛の智慧は、是の事ありと爲すや不や」と。舍利弗言さく、「不なり、世尊よ」と。

論 釋して曰く、（九三）四種の論あり。一には必定論、二には分別論、三には反問論、四には置論なり。必定論とは、「衆生の中にては、世尊を第一と爲し、一切法の中には、我なく、世間は樂しむ可らず、涅槃は安隱寂滅と爲す。業因緣は失せず」といふが如き、是の如き等を名けて、必定論と爲す。分別論とは、無畏太子、佛に問ひ奉るに、佛、能く是の語を說き給へるが如し。「問うて曰く」「他人をして瞋らしむるや不や」と。佛の言はく、「是の事は當に分別して答ふべし」と。太子言さく、「諸の（九四）尼犍子の輩は了せり」と。佛は或る時、憐愍の心の故に、衆生を罪の中より出し給ふに、衆生は瞋れり。然も衆生は後に當に利を得べし。爾の時に無畏の子、其の膝の上に坐す。佛、無畏に問ひ給はく、「汝が子、或る時、諸の瓦石草木を呑まんに、汝は噉むことを聽すや不や」と。答へて言く、「聽さず、先づ教へて吐かしむ。若し肯へて吐かずんば、左の手に耳を捉へ、右の手に口を擿つて、縱ひ血を出さしむとも、亦之を置かず」と。佛の言はく、「汝は之を愍まざるや」と。答へて曰く、「之を愍むこと深き

【九三】 四種の論の義解。
【九四】 尼犍子（Nirgrantha）とは、離繫と譯す、三界の繫縛を離るる義なり。是れ外道出家の總名なり。但此外道、殊に裸形塗灰等種々の苦行を修すれば、總名をとりて別名とす。而して佛教より之を毀つて無慙と名く。

が故に、瓦石を出だすことを爲す。當時は痛むと雖も、後には安穩なることを得ん」と。佛の言はく、「我も亦是の如く。若し衆生重罪を作さんと欲するに善く敎へ、從はずんば苦言を以て之を諫めんに、瞋恚を起こすと雖も、後には安穩なることを得ん」と。又五比丘の佛に問ひたてまつるが如きは、「樂を受けて道を得るや」と。佛の言はく、「必らずしも定まらず、苦を受けて罪を得、苦を受けて樂を得るあり。樂を受けて罪を得、樂を受けて福を得るあり」と。是の如き等を名けて分別論と爲す。反問論とは、還つて問ふ所を以て、之に答ふるなり。佛、比丘に告げ給ひしが如し。「汝が意に於いて云何。是の色は常なりや、無常なりや」と。比丘の言さく、「無常なり」と。「若し無常ならば、是れ苦なりや不や」と。答へて言く、「苦なり」と。「若し法は是れ無常にして苦ならば、法を聞ける聖弟子は是の法に著して、是の法は是れ我なり是れ我所なりと言ふや不や」と。答へて曰く、「不なり、世尊よ」と。佛、比丘に告げたまはく、「今より已後、所有る色、若くは過去、若くは未來、若くは現在、若くは內、若くは外、若くは好、若くは醜なる、是の色は我所に非ず、我は此の色所に非ず。是の如く應に正實の智慧を以て知るべし、受想行識も亦是の如し」と。是の如き等を反問論と名く。置論とは、十四難の如し。世間有常、世間無常、世間有邊、世間無邊、是の如き等は、是を名けて置論と爲す。今佛は反問論を以て、舍利弗に答へ給ふ。舍利弗の智は、事に於いて未だ悟らざるを以て、佛は事端を反問して、其をして解を得せしめ給へり。菩薩の衆生を度する智慧を名けて、道慧と爲すこと、後

品の中に說くが如し。(九五)薩婆若慧は聲聞辟支佛の事、一切種智慧は是れ諸佛の事、道種慧は是れ菩薩の事なり。

復次に、八聖道分を實道と爲す。衆生をして、種種の因緣もて道に入らしむる、是を道慧と名け、衆生をして、道の中に住せしむる、是を聲聞種、辟支佛種、佛種を利益すと爲す。

又復、一切の智慧、得ざる所なき、是を一切種と名く。若くは有爲、若くは無爲の一切種智を用つて、佛道を得ることを知り已つて、應に一切衆生を度し、一切衆生を利益するに、或は大乘、或は聲聞乘、或は辟支佛乘を以てす。若し三乘道に入らずんば、福德を修して、天上人中の富樂を受くることを敎へ、若し福を修すること能はざれば、今世の益利の事なる、衣服、臥具等を以てし、若し復た得ざれば、當に慈悲心を以て利益すべし。是を一切衆生を度すと名く。

問うて曰く、(九六)若し佛、一切の聲聞辟支佛は、衆生の爲にすると能はざるを知り給はば、何を以ての故に問ひ給ひしや。答へて曰く、佛意是の如し。舍利弗をして、口に自ら說かしめんと欲し給ふ。諸の聲聞、辟支佛は菩薩に如かず、是の故に佛問ひたまふに、舍利弗言さく、「不なり、世尊よ」と。何となれば聲聞、辟支佛は、慈心ありと雖も、本發心して一切衆生を度せんと願はず、亦善根を

【九五】 Sarvajñā(サルヴァヂニャー)は、譯して一切智といふ。

【九六】 第三九問、佛もし一切の二乘は衆生の爲にする事能はざるを知らば、何故に之を舍利弗に問ひたまひしか。

廻して、阿耨多羅三藐三菩提に向はず。是の故に菩薩の一日修する智慧は、聲聞、辟支佛の上に過ぎたり。

【經】「舍利弗よ、汝が意に於いて云何、諸の聲聞、辟支佛は頗る是の念あり。我等は、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生を度すべしと。今無餘涅槃を得せしむるや不や」と。舍利弗言さく、「不なり、世尊よ」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の因緣を以ての故に、當に知るべし、諸の聲聞、辟支佛の智慧を、菩薩摩訶薩の智慧に比せんと欲するに、百分の一にも及ばず、乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり」と。

【論】問うて曰く、(九七)上に已に舍利弗に反問する事は已に定まれり、今何を以てか復問ふや。答へて曰く、舍利弗は、須陀洹の、同じく解脫を得るを以ての故に、諸佛菩薩と等しからんと欲するを以て、而も佛は聽し給はず。譬へば人あり。毛孔の空なるを以て、虛空と等しくせんと欲するが如し。是の故に佛は重ねて其の事を質し給ふ。

復次に、同一事なりと雖も、義門各異なれり。先に智慧を言ふは、一切衆生の爲にするが故なり。今は頗る是の念あり、「我當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生をして無餘涅槃を得せしむべし」と言ふ。無餘涅槃の義は、先に說くが如し。復次に、一の聲聞、辟支佛すら、尙ほ是の念を作さず、何に況んや一切の聲聞、辟支佛をや。

【九七】第四〇問、佛、重ねて舍利弗に問ひ給へる理由如何。

【経】舍利弗よ、汝が意に於いて云何。諸の聲聞、辟支佛は頗る是の念あり、「我は六波羅蜜〈多〉を行じ、衆生を成就し、世界を荘厳し、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を具へ、無量阿僧祇の衆生を度脱して、涅槃を得せしめんや、不や」と。舍利弗言さく、「不なり、世尊よ」と。

【論】釋して曰く、先には略して、「我は當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と説き、今は廣く阿耨多羅三藐三菩提を得るの因縁を説く。所謂六波羅蜜「多」、乃至十八不共法なり。六波羅蜜「多」の義は、先に説くが如し、衆生を教化し、佛世界を浄むることは、後に當に説くべし。餘の十力等は先に説くが如し。

【経】佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は能く是の念を作さく、我れ當に六波羅蜜〈多〉乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、無量阿僧祇の衆生を度脱して、涅槃を得せしめんと。譬へば螢火蟲に、是の念を作さざるか知し。我が力は能く閻浮提を照らして、普ねく大明ならしむと。諸の阿羅漢、辟支佛も、亦是の如く、是の念を作さず、我等は六波羅蜜〈多〉乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無量阿僧祇の衆生を度脱して、涅槃を得せしめん」と。

【論】釋して曰く、（九八）十方恒河沙の舍利弗目連の、一菩薩に如かざる所以の者は、譬へば螢火蟲は衆多にして、各照らす所ありと雖も、日に及ばざるが如し。螢火蟲は亦是の念を作さず、「我が光明は能く閻浮提を照らす」と。諸の聲聞、辟支佛も、是の念を作さず、「我が智慧は、能く無量無邊の衆生

【九八】聲聞辟支佛は螢火の光の如く、菩薩は日光の如し。

を照らす」と。螢火蟲は夜は能く照らす所あるも、日出づれば則ち能はざるが如く、諸の聲聞、辟支佛も亦是の如し、未だ大菩薩あらざる時は、能く師子吼し說法し教化するも、菩薩出づるあれば、所作あること能はざるなり。

【經】舍利弗よ、譬へば日出づる時は、光明遍く閻浮提を照らして、明ならざる者無きが如く、菩薩摩訶薩も亦是の如し。六波羅蜜（多）乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無量阿僧祇の衆生を度脫して、涅槃を得せしむ。

【論】釋して曰く、日天子は衆生を憐愍するが故に、七寶の宮殿を與へ、倶に四天下を遶り、初より終に至るまで常に懈息せず。衆生の爲に諸の冷乾を照し、諸の闇冥を除き、各所を得せしむるが如く、菩薩も亦是の如し。初發心より、常に六波羅蜜（多）乃至十八不共法を行じ、衆生を度せんが爲に、懈息すること有ること無く、不善の冷を除き、五欲の泥を乾竭し、愚癡の無明を破り、教導して善業を修し、各所を得せしむ。又日は明にして、普ねく照らし、憎むこと無く、愛すること無く、其の高下深淺に隨つて、悉く照らす。菩薩も亦是の如く、世間に出で、五神通に住し、虛空に處し、智慧の光明を放ち、諸の罪福の業及び諸の果報を照らす。菩薩は智慧の光明を以て、衆生の邪見、戲論を滅すること、譬へば朝露の日を見れば則ち消ゆるが如し。

卷の第三十六

習相應品第三の餘を釋す。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、「云何が菩薩摩訶薩は、聲聞、辟支佛地を過ぎて、阿毗跋致地に住し、佛道を淨むるや」と。

【論】問うて曰く、(一)舍利弗は何に因つてか此の問を作すや。答へて曰く、舍利弗は上に衆智異なること無きを問ひ、佛、既に種種の譬喩を以て、菩薩の智の勝れたるを明したまへる意を既已に解せり。今は、云何が能く二乘を過ぎて、阿毗跋致地に住して、佛道を淨むるやを問ふなり。

問うて曰く、(二)小乘は成佛するに(三)任へず、何を以ての故に、佛道を淨むる事を問ふや。答へて曰く、舍利弗は、是れ佛に隨つて法輪を轉じ、將に自ら益すること無しと雖も、佛道を求むる衆生を利益せんが爲の故に問へり。又菩薩は大悲を以て利益する所多し。是の故に菩薩の事を問ひ、以て衆生を益するなり。復次に、舍利弗は、佛恩を蒙るが故に、諸の邪見を破して、道果を成することを得。恩を報せんと欲するが故に、菩薩の事を問ふなり。

【一】第一問、舍利弗が、「菩薩は云何にして、二乘地を過ぎて、不退轉に住し、佛道を淨むるや」と問へる理由如何。

【二】第二問、小乘は成佛するに任へざる事明なり。然るを今、佛道を淨むるやと問ふは何故なるか。

【三】宮藏には任を住に作れり。

又舍利弗は、聲聞地の中に於いて、邊際を究盡し、未だ了せざる所の者は、唯菩薩の事なり、是の故に復た問へり。又菩薩の法は、甚深微妙なるを以て、得ること能はずと雖も、愛樂するが故に問ふ。譬へば人の妙寶を見て、已に自ら無しと雖も、愛樂するが故に問ふが如し。

經 佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は初發意より六波羅蜜（多）を行じ、空・無相・無作の法に住し、能く一切の聲聞、辟支佛地を過ぎ、阿毘跋致地に住し、佛道を淨む」と。

論 問うて曰く、〔四〕是の三事は後品の中に各因緣あり、佛は今何ぞ併せて說き給ひしや。答へて曰く、是の中には略して說き、後に當に廣く三事の因緣を說くべし。又今は但空・無相・無作の因緣を說き、後には當に種種の功德を說くべきが故に、三事を合說するなり。

問うて曰く、〔五〕三解脫門に入れば、則ち涅槃に到る。今云何が空・無相・無作を以て、能く聲聞、辟支佛地を過ぐるや。答へて曰く、方便力なきが故に、三解脫門に入りて、直に涅槃を取るなり。若し方便力あれば、三解脫門に住して涅槃を見、慈悲心を以ての故に、能く心を轉じて還起すること、後品の中に說くが如し。譬へば仰いで虛空を射、箭箭相拄へて地に墮ちしめざるが如し。菩薩も〔亦〕是の如く、智慧の箭を以て、仰いで三解脫の虛空を射、方便の後の箭を以

【四】第三問、空・無相・無作に就いては後品に說くべき因緣あり、然るを今敢て併說するは何故なるか。

【五】第四問、三解脫門は涅槃に到るの道なり、今それ空・無相・無作を以て、二乘地を過ぐる理由如何。

て、前の箭を射、涅槃の地に墮ちしめざるなり。是の菩薩は、涅槃を見ると雖も、直に過ぎて住せず、更に大事を期す。所謂る阿耨多羅三藐三菩提なり。今是の觀の時は、是れ證の時に非ず、是の如き等は應に廣く說くべし。若し是の二地を過ぐれば、諸法の不生不滅を知る、即ち是れ阿毘跋致地なり。阿毘跋致地の中に住して、衆生を教化し、佛世界を淨むる、是を能く佛道を淨むと爲す。

復次に、菩薩は三解脫門に住し、四諦を觀じて、是の聲聞辟支佛の法を知り直に四諦を過ぎて一諦に入る。所謂る一切法の不生·不滅·不垢·不淨·不來·不去等なり。是の一諦の中に入る、是を阿毘跋致地と名く。是の阿毘跋致地に住して、佛道の地を淨む。身口意の麤惡の業を滅除し、及び諸法の中の初より已來、失ふ所の事を滅する、是を佛道の地を淨むと名く。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩は、何等の地に住してか、能く諸の聲聞辟支佛の爲めに、福田と作るや」と。

【論】釋して曰く、舍利弗は深心に菩薩を恭敬す、故に今菩薩は（六）漏結未だ盡くさざるに、何の功德に住してか、能く諸の聲聞辟支佛の爲めに、福田と作るやを問へるなり。

【六】漏結。漏（アースラワ Āsrava）は煩惱の異名にて、流注漏泄の義なり。又煩惱活動して、絕えず心をして、連注流散せしむるが故に漏といふ。結とは、結果、結縛の義にて、煩惱の異名なり。煩惱因となりて、生死を結集すれば、結といひ、又衆生を繫縛して、解脫せしめざれば結といふ。

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、初發地に六波羅蜜（多）を行じ、乃至道場に坐するまで、其の中間に於いて、常に諸の聲聞辟支佛の爲に福田と作る」と。

【論】釋して曰く、佛は是の義を以て舍利弗に示したまふ。三解脫門と、涅槃の事とは、同じしと雖も、而も菩薩には、大慈悲あり、聲聞、辟支佛には無し。菩薩は（七）初發心に六波羅蜜（多）乃至十八不共法を行じ、一切の衆生を度せんと欲し、一切の佛法を具するが故に勝れたるなり。

【經】何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、因緣あるを以ての故に、世間の諸の善法生ず。

【論】釋して曰く、佛は先に已に、一の因緣を以て、益衆行を行じたまふが故に、諸の聲聞、辟支佛の爲に、福田と作りたまへり。今菩薩は、外に因緣を益すが故に、世間一切の諸の善法あることを說く。何となれば菩薩は發心して未だ成佛せずと雖も、度すべき衆生をして、三乘道に住せしめ、三乘を得ざる者には、十善道に住せしむればなり。何に況んや成佛せるをや。

問うて曰く、（八）聲聞辟支佛も因緣の故に、亦世間をして善法を得せしむ。何を以てか但菩薩のみ能く世間に善法あらしむと說くや。答へて曰く、聲聞辟支佛に因つて世間の善法あるは、亦皆菩薩に由

【七】初發心とは、初めて菩提を求むる心を發すをいふ。初發心に四十一義あり、十住毘婆沙論一を見よ。

【八】第五問、但、菩薩のみ能く世間に善法あらしむと說く理由如何。

るが故にあり。若し菩薩發心せざれば、世間にすら尚ほ佛道なし。何に況んや聲聞、辟支佛の佛道をや。是れ聲聞、辟支佛の根本なるが故なり。復次に、聲聞、辟支佛に因つて善法ありと雖も、少なきを以ての故に說かず、尚ほ聲聞、辟支佛すら說かず、何に況んや外道の諸師をや。

【經】何等か是れ善法なる。所謂、十善道、五戒、八分成齋、四禪、四無量心、四無色定、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分にして、盡く世に現じ、菩薩の因緣を以ての故に、六波羅蜜〔多〕、十八空、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、一切種智あつて、盡く世に現じ、菩薩の因緣を以ての故に、刹〔帝〕利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天乃至非有想非無想天あつて皆世に現じ、菩薩の因緣を以ての故に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛ありて皆世に現す。

【論】問うて曰く。〔九〕菩薩の因緣を以ての故に、善法あることは世に於いて爾るべし。〔一〇〕刹〔帝〕利の大姓、〔一一〕婆羅門の大姓、〔一二〕居士の大家は、若し世に菩薩なくとも、亦此の貴姓あり、云何が皆菩薩より生ずと言ふや。答へて曰く、菩薩の因緣を以ての故に、世間に〔一三〕五戒。〔一四〕十善、〔一五〕八齋等

【九】第六問、菩薩なくとも、世に刹帝利、婆羅門、居士等の大姓は存すべきにあらずや。
【一〇】Kṣatriya クシャトリヤ
【一一】Brahman ブラフマン
【一二】Kulapati クラパティ。在家にて佛道を志するものをいふ。
【一三】五戒とは、不殺生、不偸盗、不邪婬、不飲酒、不妄語なり。
【一四】十善とは、前の五戒に、不說過、不自讃毀他、不慳貪財、不瞋恚、不謗三寶の五を加へたるなり。
【一五】八齋とは、八戒の異名。一に殺生、二に不與取、三に非梵行、四に不虚誑、五に飲酒、六に塗飾香鬘歌舞觀聽、七に眠坐高廣嚴麗床上、八に食非時食、此等の八種の非法を離るるを八戒といふ。

あり。是の法に上中下あり。上なる者は道を得、中なる者は天に生じ、下なる者は人と爲る。故に刹〔帝〕利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家あるなり。

問うて曰く、〔六〕若し世に菩薩なくも世間に亦五戒、十善、八齋、〔並に〕刹〔帝〕利等の大姓ありや。

答へて曰く、菩薩の身を受くるは種種あり。或る時は業因緣の身を受け、或は變化の身を受けて、世間に於て敎化し、諸の善法及び世界の法、王法、世俗の法、出家の法、在家の法、種類の法、居家の法を說き、衆生を憐愍し、世界を護持し、菩薩の法なしと雖も常に世法を行ず。この因緣を以ての故に皆菩薩に從つて有り。

問うて曰く、〔七〕菩薩は淸淨にして、大慈悲を行ず。云何が世俗の諸の雜法を說くや。答へて曰く、〔八〕二種の菩薩あり。一には慈悲を行じて直に菩薩道に入り、二には敗壞の菩薩にして亦悲心あり。治むるに國法を以てし、利を貪る所なし。惱む所ありと雖も、安んずる所の者多し。一の惡人を治して、以て一家を成ず。是の如く法を立つる人は、名けて淸淨の菩薩と爲さずと雖も、敗壞の菩薩と名くることを得。是の因緣を以ての故に、皆菩薩に由つて有り。世間の諸の富貴は皆二乘道に從つて有り。二乘道は佛に從つて有り、佛は菩薩に因つて有り。若し菩薩の善法を說くこと無くんば、世間に天道、人道、阿修羅道あること無く、樂受、不苦不樂受あること無く、但苦受のみありて、常に地獄の啼哭の聲のみ有

〔六〕第七問、世に菩薩なくとも、五戒、十善、八齋、及び刹帝利等の大姓ありや如何。
〔七〕第八問、菩薩が世俗の雜法を說く理由如何。
〔八〕二種の菩薩。

らん。菩薩は是の如く、大に利益するが故に、云何ぞ名けて、世間の爲の福田と作さざらんや。舍利弗は、是の菩薩に大功德あることを聞いて、應當に供養すべく、心に念ずらく、「煩惱未だ盡きざれば、大福ありと雖も、其の供養を消すること能はざらん。人の好食を噉ふと雖も、內に病あるを以ての故に、消化すること能はざるが如し」と。〔二九〕是を以ての故に、

經 舍利弗、佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩は、淨畢にして福を施すや不や」と。佛の言はく、「不なり、何となれば本淨畢なればなり」と。

論 釋して曰く、菩薩は初發心の時を以て、便ち一切衆生の供養の上首たり。何となれば心決定して、無量無邊阿僧祇劫の衆生の爲に、代つて勤苦を受け、又無量阿僧祇劫の衆生を利益して、度脫することを得せしめ、一切諸佛の法、大智慧力を取らんと欲するが故に。能く世間即ち是れ涅槃ならしむ。是の如き種種の因緣の故に、本より已に淨畢なりと言ふ。復次に、佛、重ねて施を消するの因緣を說き給ひしが故なり。

〔二九〕この句は、次の經文を引き出す語ゆゑ、「是を以ての故に、舍利弗、佛に白して言さく……」と續けて讀むべし。

經 舍利弗よ、「菩薩摩訶薩は大施主と爲つて何等をか施すや」、（舍利弗答へて言く）「諸の善法を施す」。（佛言はく）何等か善

法なる。」「舍利弗、答へて言く、」「十善道、五戒乃至十八不共法、一切種智、是を以て施與す。」

論 釋して曰く、先には菩薩の因緣に由つて世間の善法あることを說き、今は菩薩は善法を施すの主なることを說く、是を差別と爲す。

經 舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜（多）を習應し、般若波羅蜜（多）と相應せん」と。

論 釋して曰く、上には一日般若波羅蜜（多）を修するも、聲聞、辟支佛に勝ることを說けり。是の因緣より來つて、佛は種種に菩薩を讃歎したまふ。「是の如き大功德は、皆般若波羅蜜（多）より生ず」と。是の故に今云何が菩薩は、是の般若波羅蜜（多）を習行し、般若波羅蜜（多）と相應するや」と問ふなり。復次に、舍利弗は、般若波羅蜜（多）の行じ難く、得難く、幻の如く、化の如く、受持すべきこと難きことを知り、行者の違錯を恐るるが故に、習應を問へるなり。

經 佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の色空を習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名け、受想行識空を習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名く」。

「復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩の眼空を習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名け、耳鼻舌身心空を習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名け、色空を習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名け、聲香味觸法空を習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名け、眼界空、色界空、識界空を習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名け、耳聲識、鼻香

識、舌味識、身觸識、意法識の空を習應する、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名け、苦の空を習應する、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名け、集、滅、道の空を習應する、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名け、無明の空を習應する、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名け、行、識、名色、六塵、觸、受、愛、取、有、生、老死の空を習應する、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名け、一切諸法の空、若くは有爲、若くは無爲を習應する、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名く」と。

■ 釋して曰く、五衆とは(二〇)色、(二一)受、(二二)想、(二三)行、(二四)識なり。(二五)色衆とは是れ可見の法なり。是の色は因縁の故に、亦不可見有對なるあり。對あれば、見るべからずと雖も、亦名けて色と爲す。得道の者を名けて道人と爲し。餘の出家は未だ道を得ざるも、道を得る者に因つて、亦名けて道人と爲すが如し。何等か是れ可見なる。一處は是れ可見有對の色なり。少分は(二六)一入に攝す。餘の(二七)九處及び(二八)無作業を不可見の色と名く。有對とは十處、無對とは唯(二九)無作の色なり。有漏、無漏等の分別も、亦是の如

【二〇】色(Rūpa)は、物質の義なり。
【二一】受(Vedanā)は、感覺の義なり。
【二二】想(Saṃjñā)は、想像の義なり。
【二三】行(Saṃskāra)は、感情の義なり。
【二四】識(Vijñāna)は、認識の義なり。
【二五】色衆の義併。
【二六】一入とは、青黄等の色塵をいふ。
【二七】九處とは、五境五根のうち色塵を除きたるなり。
【二八】無作業。業の體に作業無作業の二種あり、新に表業無表業といふ。小乘有部宗は二業共に實の色性を體とすれば復た表色無表色といひ成實宗は非色非心を體とし、大乘法相宗は心法を體とすれども假に名けて表色無表色と名く。
【二九】無作色とは、新に無表色といふ。受戒の時に強盛なる身口の表業を縁として滿身の因大が發生する一種の色體なり。此色體に防非止惡の功能ありて後に身口の過非を防止すれば、之を戒體となし、其物體、外相に顯はるるものにあらざれば無表と名け、又身

し。經に說くが如し。「色に（三〇）三種あり。有色は可見有對、有色は不可見有對、有色は不可見無對なり」と。是の故に當に知るべし、但眼見のみにあらざることを。故に是の色は內外の十處の能く五識を起こす者を皆色と名け、是の色分に因るが故に無作の色を生ず。是の色に復た四種あり。內有の受と、不受と、外有の受と、不受となり。復た五種の色あり、所謂五塵なり。復た一種の色あり。所謂惱壞の相なり。衆生の身色を名けて惱壞の相と爲す。非衆生の色をも亦名けて惱壞の相と爲し、惱相の因緣の故に亦惱と名く。譬へば身あれば、則ち飢渴寒熱老病刀杖等の苦あるが如し。復た二種の色あり、所謂四大と四大造色と、內色と外色と、受色と不受色と、繫色と不繫色と、有色の能く罪

內の地水火風の四大より生ずるものなれば色と名く。是れ他色の如く物質あり障礙あるにあらざれども、四大の色法より生ずれば色法の中に攝むといふ。是れ小乘有部宗の義なり。若し成實宗の義によれば此法緣慮の性用なければ心にあらず、質礙の性用なければ色にあらず、即非色非心の法となし、大乘法相宗には之を第八阿賴耶識の有する思の種子の別作用として之を心法に攝むるなり。此の無表色に善惡ありて、善性の無表色には樂果を招く業道の功能と、又念念に陪增する防非止惡の功能とあり。惡性の無表色には苦果を招く業道の功能と、又念念に陪增する防善止善の功能とある也。三種の無表業色一に律儀無表色、善戒を受くる表業に依つて發し、或は禪定と共に發し、或は無漏智と共に生ずる無表色にて、防非止惡の功能あるもの。二に不律儀無表色、或は不律儀の家に生れて其の家法として殺生等の惡法を行ずるにより、或は活命の爲の故に我れ一生殺生業を爲さん等の誓心を發するに依つて生ずる無表色にて防善止善の勢用あるもの。三に非律儀非不律儀無表色、上の二種は戒律的の無表色にして此は善性にして善戒ほどにあらず、惡性にして惡戒ほどにあらざる善惡の表業に依つて生ずる無表色にて、此の中に善と惡との二種を攝むるなり。即ち極善極惡を開て二となし、中善中惡を合せて一とせしなり。此の中に善の非律儀非不律儀の無表色を發するを示さば一は福田に由る、諸の福田に向つて財寶園林等

を生ずると、有色の能く福を生ずると、業色と非業色と、業色と果色と、業色と報色と、果色と報色と、隱沒無記色と不隱沒無記色と、可見色と不可見色と、有對色と無對色と、有漏色と無漏色と、是の如き等の二種に分別する色あり。復た三種の色あり。上の可見有對の中に說くが如し。復た三種の色あり。善色と不善色と無記色と、學と無學と非學非無學色と、見諦所斷より生ずる色と思惟所斷より生ずる色と無斷より生ずる色となり。復た三種の色あり、欲界繫色と色界繫色と不繫色と。有色の能く貪欲を生ずると、有色の能く瞋恚を生ずると、有色の能く愚癡を生ずるとなり。三結、三漏等も亦是の如し。有色は能く不貪善根、不瞋善根、不愚癡善根を生ず、是の如き等の諸の三善法は應に廣く說くべし。有色は能く隱沒無記法を生じ、能く不隱沒無記法を生ず。不隱沒無記に二種あり。有は報生、有は非報生なり。是の如き等の二種の無記あり。復た四種の色あり。上の受、不受の中に說くが如き四大、及び造色の三種なる善、不善、無記と、身業の作、無作色と、口業の作、無作色。受色、止色、用色、不用色の是の如き四種の色あり。復た五種の色あり、

を施すなり。二は意による、未だ佛を證せずんば念は十善の奮を起すなり。三は作に由る、殷重の作意を以て善を行ずるなり、此等皆無表を發するなり、此より已下は下善十惡にして無表を發するに非らず。

【三】三種色。一に可見有對色、謂は對礙の義にして色法の自性、對礙の自性を具して眼見すべきもの、青黃等の色塵是なり。二に不可見有對色、對礙の自性を具して、眼見すべからざるもの、聲等の四塵、眼等の五根是なり。三に不可見無對色、其自性に對礙なく眼見すべからざるもの、無表色是なり。對礙の自性なきにこれを色に攝むるに、對礙ある四大より生ずる法なればなり。

身の作・無作の色と、口の作・無作の色と、及び非業色と、五情・五塵・麤色と、動色・影色・像色・誑色となり。麤色は見るべく聞くべく、嗅ぐべく味ふべく、觸るべきと、土石等の如し。動色に二種あり。一には衆生の動作、二には非衆生の動作にして、水火風の動作の如し。地は地に依るが故に動き、下に大風あつて水を動かし、水は地を動かす。風の樹を動じ、酒の自ら沸動し、磁石の鐵を噏ふが如く、眞珠、玉、硨磲、瑪瑙の夜能く自ら行くが如きは、皆是れ衆生の先世の福德業の因緣にして不可思議なり。

問うて曰く、(三一)影色、像色は別に說くべからず、何となれば眼の光明は、清淨の鏡に對するが故に、反つて自ら照し見ればなり。影も亦是の如く、光を遮するが故に影現じ、更に法あること無ければなり。答へて曰く、是の事は然らず、油の中に像を見るに、黑ければ則ち本色に非ざるが如く、五尺の刀の中を、橫に觀れば則ち面像廣く、縱に觀れば則ち面像長きは、則ち本面に非ざるが如し。(三二)大秦の水精の中の玷の如し、玷に皆面像あれば則ち一面の像に非ず。是の因緣を以ての故に、還た本像を見るにあらず。復次に鏡あり、人あり、持つ者あり、光明あり、衆緣和合するが故に、像あつて生ず。若し衆緣具せざれば、則ち像は生ぜず。是の像は亦因緣なきに非ず、亦因緣の中に在らず。是の如く別に自ら法あるは是れ面にあらざるなり。此は微色の生

【三一】第九問、顯色と形色とを區別するは不合理にあらずや。此の文中、影色は、新譯に顯色といふ。卽ち青黃赤白等なり。像色は、新譯に形色といふ。卽ち長短方圓等なり。

【三二】大秦とは、波斯國の異名なり。

せる法にして、是の如きは麁色に同じからず。火に因つて烟あり、火滅するも烟在るが如し。

問うて曰く、(三三)若し爾らば別に影を說くべからず、同じく是れ細色なるが故に。答へて曰く、鏡中の像は種種の色あるも、影は則ち一なり。是の故に同じからず。是の二は形を待つと雖も倶に形質を動かし、各影を異にし、明を遮するに從つて像を現ず。則ち種種の因緣に從つて生じ、同じく細色なりと雖も各各差別す。(三四)誑色とは、炎の如く、幻の如く、化の如く、乾闥婆城等の如く、遠ければ人の眼を誑らかし、近ければ所有なし。是の如き等の種種無量の色を總じて色衆と名く。

(三五)受衆とは、經に說くが如し。眼に因つて色を緣じて、眼識を生じ、三事和合するが故に觸を生ず。是の觸は、卽時に三衆共に生ず。所謂受と想と行となり。

問うて曰く、(三六)眼識も亦三衆のために因とならば、何を以てか但因を說くや。答へて曰く、眼識は少時住するも、色を見れば便ち滅す。次に意識を生じて、能く好醜等を分別す。是の故に眼識を說かず。眼と色と識との三事和合するが故に、觸を生じ、觸は心數法を生ず。眼識は因緣遠きが故に說かざるなり。

問うて曰く、一切の識には皆觸あり、何を以てか但觸法の因緣は心數法を生ずるや。答へて曰く、

【三三】第一の問、然らば別に影を說くべからざるにあらずや。
【三四】誑色の義解。
【三五】受衆の義解。
【三六】第二の問、眼識も亦三衆のために因とならば、何を以て但因を說くや。

心に二種なり。一には念念に生滅するの心、二には次第相續の心なり。觸も亦是の如く、次第相續の觸は、麤なるが故に、觸に因つて心數法を生ずと說き、念念の觸は微細にして、亦共に心數法を生ずれども、了らざるが故に說かず。若し情塵識の三事和合すれば、能く苦樂を受く。爾の時、觸法は了了なり。是の故に觸に因つて心數法を生ずと說くなり。色法の因緣和合より生ずるが如く、心數法も亦是の如く觸法の和合より生ず。色法は和合より生じ、和合なければ則ち生ぜざるが如く、心數法も亦是の如し。觸あれば則ち生じ、觸なければ則ち生ぜず。この受樂に〔三七〕一種あり、所謂受相なり。復た〔三八〕二種の受あり。身受と心受、內受と外受、麤と細、遠と近、淨と不淨等なり。

復次に、〔三九〕三種の受あり。苦と樂と不苦不樂と、善と不善と無記と、學と無學と非學非無學と、見諦所斷と思惟所斷と不斷と、見諦所斷に因つて生ずる受と、思惟所斷に因つて生ずる受と、不斷に因つて生ずる受と、或は身見に因つて生じて還た身見のために因と作らず、或は身見に因つて生じて還た身見のために因と作り、或は身見に因つて生ぜず還た身見のために因と作らず。復た三種の受あり。欲界繫と色界繫と無色界繫となり。是の如き等の三種の受あり。

復た〔四〇〕四種の受あり。內身受と外身受と內心受と外心受と、四正勤、四如意足等に相應する受、及び四流、四縛等に相應する受、是を四種の受と名く。

〔三七〕一種の受。
〔三八〕二種の受。
〔三九〕三種の受。
〔四〇〕四種の受。

復た〔四一〕五種の受あり、樂根と苦根と憂根と喜根と捨根と、見苦所斷相應の受と乃至思惟所斷相應の受となり。五蓋、五結の諸の煩惱に相應する受も亦是の如し。

復た〔四二〕六の受衆あり。六識相應の受なり。復意識の分別する〔四三〕十八の受あり。所謂眼に色を見、思惟し分別して心に喜を生じ、眼に色を見、思惟し分別して、心に憂を生じ、眼に色を見、思惟し分別して心に捨を生ず、乃至意識に至るも、亦是の如し。是の十八受の中に淨あり垢ありて、三十六と爲る。三世に各三十六ありて、百八と爲る。是の如き等の種種の因緣により分別するに、受の義無量なるを、名けて受衆と爲す。想衆、相應行衆、識衆も、亦是の如く、分別す。何となれば受衆と相應するを以てなり。

〔四一〕五種の受。
〔四二〕六種の受。
〔四三〕十八の受。

復次に、佛、說きたまはく、「四種の想あり。小想、大想、無量想、無所有想なり」、小想とは小法を覺知するなり。說くが如くんば小法とは、小欲と、小信と、小色と、小緣の相を名けて小想と爲す。

復次に、欲界繫の想を名けて、小と爲し、色界繫の想を名けて大と爲し、三無色天繫の想を名けて無量と爲し、無所有處繫の想、これを無所有想と名く。

復次に、煩惱相應の想を名けて小想と爲す。〔そは〕煩惱覆ふが故なり。有漏の無垢想を名けて大想と爲し、諸法實相の想を名けて、無所有想と爲し、無漏想を名けて無量想と爲す。〔そは〕涅槃を無量

法と爲すが故なり。

復次に、佛の說きたまはく、「六想あり」と、眼觸相應生の想乃至意觸相應生の想なり。

(四四)行衆とは、佛、或時說きたまはく、「一切の有爲法を名けて行と爲す」と。或は說きたまはく、「三行あり。身行、口行、意行なり」と。身行とは、出入の息なり、何となれば、息は身に屬するが故なり。口行とは、覺觀なり、何となれば、覺觀あつて、然る後に語言するが故なり。意行とは、受想なり、何となれば、苦樂を受けて相を取り、心を發する、是れを意行と名くるが故なり。心數法に二種あり、一は見に屬し、二は愛に屬す。愛に屬する主を名けて受と爲し、見に屬する主を名けて想と爲す。是を以ての故に是の二法を說いて意行と爲す。佛、或は說きたまはく、「十二因緣の中に、三行あり。福行と、罪行と、無動行となり」と。福行とは、欲界繫の善業なり、罪行とは、不善行なり、無動行とは、色〔界〕無色界の繫業なり。阿毘曇には、受と想とを除いて、餘の心數法、及び無想定、滅盡定等の心不相應の法、是を名けて行衆と爲す。(四五)識衆とは、(四六)內外六入の和合の故に、六覺を生ずるを名けて識と爲す。內緣力大なるを以ての故に名けて眼識と爲し、乃至名けて意識と爲すなり。

問うて曰く、(四七)意は即ち是れ識なり、云何が意緣力の故に意識を生ずるや。答へて曰く、意は生滅

【四四】行衆の義解。
【四五】識衆の義解。
【四六】內外六入とは、眼等の六根(內)と色等の六境(外)とをいふ。
【四七】第一二問、意は是れ識なり、云何が意緣力の故に、意識を生ずるか。

の相なるが故に、多く前に生ぜる意を因とす。故に法を縁じて意識を生ず。

問うて曰く、【四八】前の意は已に滅せり、云何が能く後の識を生ずるや。答へて曰く、【四九】意に二種あり。一は念念に滅し、二は心の相續するを名けて一と爲し、是の相續心の爲の故に諸心を名けて一意と爲す。是の故に意に依つて識を生ずるも咎なし。意識は解し難きが故に、九十六種の外道は、意に依るが故に識を生ずと說かず、但神に依るを以て本と爲す。此の五衆は四念處の中に廣く說けり。何となれば、身念處は色衆を說き、受念處は受衆を說き、心念處は識衆を說き、法念處は想衆、行衆を說けばなり。

問うて曰く、【五〇】應に五衆あるべからず、但應に色衆と識衆とのみあるべし。識衆は時に隨つて分別するが故に異名あり、名けて、受、想、行と爲す。不淨識を名けて煩惱と爲し、淨識を名けて善法と爲すが如し。答へて曰く、然らず。何となれば若し名異なるが故に、實も亦異なればなり。若し異法なくんば、名は異なるべからず。若し唯心のみあつて、心法なくんば、心に垢あり、淨あるべからず。譬へば清淨の池水に、狂象中に入れば、其をして混濁せしめ、若し清水珠を入るれば、水卽ち清淨にして、水の外に象なく、珠なしと言ふを得ざるが如し。心も亦是の如く、煩惱入るが故に、能く心をして濁らしめ、諸の慈悲等の善法、心に入れば、心をして清淨ならしむ。是を以ての故に煩

【四八】第一三問、前の意は已に滅せり、云何が能く後の識を生ずるや。

【四九】二種の意。

【五〇】第一四問、必らずしも五蘊を立つるを要せず、色蘊のみ存在せば、可なるにあらずや。

惱慈悲等の法は、即ち是れ心なりと言ふを得ず。

問うて曰く、〔五一〕汝は我先に、垢心は即ち是れ煩惱、淨心は即ち是れ善法なりと説きしを聞かず。答へて曰く、若し垢心ならば、次第に云何が能く淨心を生じ、淨心ならば、次第に云何が當に垢心を生ずべけん。是を以ての故に是の事は然らず。汝は但麁現の事を知つて心數法を知らず。知らざるを以ての故に、便ち謂つて無しと爲すべからず。當に必ず五衆あることを知るべし。

問うて曰く、〔五二〕若し有らば何を以てか多からず少からず、但五と説くや。答へて曰く、諸法は各定限あり　手法の五指は、其の多少を求むることを得ざるが如し。復次に、有爲法は復た無量なりと雖も、佛は分判して五分と爲して、則ち盡くしたまふ。

問うて曰く、〔五三〕若し爾らば、何を以ての故に復た十二入、十八界を説くや。答へて曰く、衆の義は應に備るべし、入と界の義は、異なれり。佛を法王と爲す。衆生の爲の故に、或る時は略説し、或る時は廣説したまふ。衆生あり、色と識の中に於いては、大に邪惑せず、心數法の中に於いて多く錯謬あるが故に、五衆を説く。衆生あり、心・心數法の中に邪惑を生ぜず、但色に惑ふ。是の衆生の爲の故に、色を説いて十處と爲し、心・心數法を總じて二處と説く。衆生あり、心數法の中に於いて少し

〔五一〕第一五問、我は先に垢心は煩惱、淨心は善法なりと云ひしにあらずや。

〔五二〕第一六問、五よりも多からず少なからざる理由如何。

〔五三〕第一七問、十二入、十八界を説くは何故なるか。

く邪惑を生じ、而も多く色と心とを了せず。是の衆生の爲の故に、心數法を説いて一界と爲し、色と心とを十七界と爲す。或は衆生あり、世間の苦法生滅を知らず、苦道を離ることを知らず、是の衆生の爲の故に、四諦を説き、「世間及び身は皆是を苦と爲し、愛等の煩惱は是れ苦の因なり、煩惱滅すれば是の苦滅す、煩惱を滅する方便の法は是を道と名く」と。或は衆生あり、吾我に著するが故に、諸法の中に於いて、邪見して、一異の相を生じ、或は世間には因なく緣なしと言ひ、或は邪因緣に墮す。是の衆生の爲の故に、十二因緣を説く。有人は常法と説き、或は神は常なりと説き、或は、一切法は常なり、但滅する時は隱藏して微細なるも、是れ無には非ざるなり。若し因緣會するを得れば、還た出づ、更に異法なしと説く、是の人の爲の故に、一切の有爲法は、皆是れ作法にして常定あること無しと説く。譬へば木人の種種の機關木關和合するが故に、能く動作するも實事あること無きが如し。是を有爲法と名く。

【五三】 第一八問。是の中に五蘊を説くは、何の次第なるか。

問うて曰く、(五三)是の中に五衆を説くは何の次第あるや。答へて曰く、行者は初に觀法を習ひ、先づ色法を觀じて、身の不淨、無常、苦、空、無我等の身患を知る。是の如く衆生の此の身に著する所以は、能く樂を生ずるを以ての故なり、此の樂を諦觀するに、無量の苦あつて、常に之を隨逐す。此の樂も亦無常、空、無我等なり。六塵の中に無量の苦あり、衆生は、何の因緣を以てか著を生ずる。衆生は相を取るを以ての故に著す。人身の如し。一種は偏に著する所あり、能く命を沒し、死に隨つて

相を取り、苦樂を受けて發動し、思等の諸行を生じ、心行發動するとき、苦を離れて樂を得るの方便を識知す、是を識と爲す。

復次に、衆生は五欲の因緣の故に苦樂を受け、相を取る因緣の故に、是の樂に染著し、樂に染著するを以ての故に、或は三毒、若くは三善根を起す。是を名けて行と爲す。識は其の主たり、上の事を受用す。五欲は卽ち是れ色にして、色は是れ根本なるが故に、初に色衆を說き、餘は次第に名あり。餘の入界の諸法等も皆五衆の次第に由る。唯法入法界中に有つては、無爲法を增し、四諦の中には、智緣滅を增し、入界乃至有爲無爲の法は上に說くが如し。今五衆等の諸法は皆な是れ空なり。何となれば聖主の說なればなり。(五五)聖に三種あり。下と中と上となり。佛を其の主と爲す。星宿月の中にては、日を其の最と爲すが如し。そは光明大なるを以てなり。佛は一切智慧を得たまふが故に名けて聖主と爲す。聖主の說きたまふ所なるが故に、應當に是れ實なるべし。

復次に、十八空を以ての故に、一切法は空なり。若し性空を以ての故に能く一切法を空ず、何に況んや十八をや。若し內空、外空を以て、能く一切法を空ず、何に況んや十八をや。

復次に、若し法あり、不空ならば應當に二種あるべし。色法と非色法となり。是の色法は分別破裂して、乃ち微塵に至る。微塵を分別することも、亦得べからず。終卒に皆空にして、色法なし。念念

【五五】三種の聖。

生滅するが故に皆空なること、四念處の中に說くが如し。

復次に、諸法は性空にして、但名字のみあり、因緣和合するが故に名字あり。山河草木、土地人民州郡城邑は之を名けて國と爲し、巷里市陌、廬館宮殿は之を名けて都と爲し、梁柱椽棟、瓦竹壁石は之を名けて殿と爲すが如し。上中下分の和合する之を名けて柱と爲し、片片和合するが故に分の名あり、衆札和合するが故に片の名あり、衆微和合するが故に札の名あり、是の衆の微塵に、大あり、中あり。小あり、大は遊塵にして見るべく、中は諸天の見る所、小は上聖人、天眼の見る所にして、慧眼之を觀れば、則ち見る所なし。何となれば性は實に無なるが故なり。若し微塵は實に有ならば、卽ち是れ常にして分裂すべからず、毀壞すべからず、火も燒くこと能はず、水も沒すること能はざらん。

復次に、若し微塵は有形なるも、無形なるも、二つ倶に過あり。若し無形ならば、云何が是れ色ならん。若し微塵にして有形ならば、則ち虛空と分を作し、亦十方の分あり。若し十方の分あらば、則ち名けて微塵と爲さず。佛法の中には、色に遠近、麁細、是の常なる者あること無し。

復次に、是の因緣名字を離るれば、則ち法あることなし。今山河土地の因緣名字を除いては、更に國名なく、閭里道陌の因緣名字を除けば、則ち都の名なく、梁椽竹瓦の因緣名字を除いては、更に殿の名なく、三分柱の因緣名字を除いては、更に柱の名なく、片の因緣名字を除けば、則ち分の名な

く、札の因緣名字を除けば、則ち片の名なく、衆微の因緣名字を除けば、則ち札の名なく、中微塵の名字を除けば、則ち大微塵の名なく、小微塵の名字を除けば、則ち中微塵の名なく、天眼、妄見を除けば、則ち小微塵の名なし。是の如き等の種種の因緣の義あるが故に、諸法は必ず空なることを知るなり。

問うて曰く、(五六)若し法は畢竟空ならば、何を以てか名字あるや。答へて曰く、名字、若し是れ有ならば、法と倶に破せん。若し無ならば、則ち難ずべからず。名字と法とは、倶に異なること有ることなし。是を以ての故に一切法は、空なることを知る。

復次に、一切法は、實に空なり、何となれば(五七)定んで一法あること無ければなり。皆多法の和合より生ず、若し一なければ、亦多あること無し。譬へば樹の根莖枝葉和合するが故に、假名の樹あるが如し。若し樹法の根莖枝葉なくんば、誰か和合を爲さん。若し和合すること無くんば、則ち一法なし。若し一法なくんば、則ち亦多も無し。初の一は後の多なるが故なり。

復次に、一切の諸觀、語言、戲論は皆實なき者なり。若し世間の常なるも亦然らず、世間の無常なるも亦然らず。無衆生、有衆生、有邊無邊、有我無我、諸法の實なる、諸法の空なる、皆然らず、先に種種の論議門の中に説くが如し、若し是の諸觀、戲論皆無ならば、云何が空ならざらん。

【五六】第一九問、法もし畢竟空ならば、何故に名字あるか。

【五七】縮藏には、「有無一法定故」に作れり。

問うて曰く、(五八)汝は、諸法の實、諸法の空は、皆然らずと言へり。今云何が復た諸法は空なりと言ふや。答へて曰く、(五九)二種の空あり。一には名字の空なることを說いて、但有に著するを破し、而も空を破せず。二には空を以て有を破し、亦空あること無し。小劫の盡くる時、刀兵、疾疫、飢餓すれども、猶は人物鳥獸山河あり。大劫の燒くる時、山河樹木乃至金剛地の下の大水も亦盡き、劫火既に滅し、持水の風も亦滅し、一切廓然として、遺餘あること無きが如し。空も亦是の如く、諸法を破するに、皆空にして、唯空のみ在るあり。而も相を取つて之に著す。大空は一切法を破し、空も亦復た空なり。是の故に汝は是の難を作すべからず。若し諸の語言を滅せば、云何が空ならざらん。是の如き等の種種の因緣もて處處に空を說けり、常に一切法は空なることを知るべし。

習とは、般若波羅蜜「多」に隨つて修習し、行觀し、息まず、休まざる、是を名けて習と爲す。弟子の師の敎に隨順し、師の意に違はざる、是を相應と名くるが如し。般若波羅蜜「多」の相の如く、菩薩も亦是の相に隨ひ、智慧を以て觀じ、能く得。能く成就し、增さず減らざる、是を相應と名く。譬へば函蓋の大小相稱ふが如し。般若波羅蜜「多」は、諸の觀法を滅すと雖も、而も智慧力の故に、名けて「能はざる所なく、觀せざる所なし」と爲す。能く是の如く、二邊に墮せざることを知る、是を般若と相應すと爲す。

【五八】第二〇問、一切諸法の空なるを否定せば、汝は何故に諸法は空なりといふか。
【五九】二種の空。

〔經〕復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩の性空を習應する、是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名くること是の如し。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕を行じ、七空、所謂性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空を習應する、是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く。

〔論〕問うて曰く、〔六〇〕何を以てか十八空に住すと說かず、但七空に住すと說いて、般若波羅蜜〔多〕と相應すと名くるや。答へて曰く、佛法の中に廣く說けば、則ち十八空、略して說けば、則ち七空なり、廣く助道法を說けば則ち三十七品あるも、略して說けば、則ち七覺分なるが如し。

復次に、是の七空は、多く用ゐて衆生を利益するが故に、大空、無始空の如き、或時は、衆生あつて是の邪見を起す。是が爲の故に說く。

性空とは、一切諸法の性は、本末〔六一〕常に自ら空なり、何に況んや現在の因緣の常に空なるをや。何に況んや果報をや。自相空とは、諸法の總相、別相は、盡く其の空を觀ずれば、心則ち遠離す。是の二空を用ふるに、諸法は皆空なり。是を諸法の空と名く。性空に從ふが故に相あり、相は空なるが故に諸法は皆空なり。諸法は空なるが故に更に所得なし、是を不可得空と名く。是の四種の空を用ゐて、一切の有法を破せんに、若し有法有相を以て、過と爲す者は、無法を取る。是の故に無法空を說

〔六〇〕第二一問、何故に十八空に住するを說かず、七空に住するを說いて、智度と相應するといふか。

〔六一〕縮藏には常を倘に作れり。

く。若し無法を以て非と爲さば、還た有法を取らんと欲す。是の故に有法空を說く。先に四空を說いて、有法を破すと雖も、行者の心は、則ち有を離れて、無に存す。是に則ち無法空を說く、若し無法を非と爲すと說かんに、心に寄る所なく、還つて有を存せんと欲す。是の故に略して有法空を說く。[それは]有を存するの心薄きを以ての故なり。無法有法空とは、行者は無法空を以て非と爲し、心に還つて有を疑ひ、若し心に有を觀じては、還つて無法を疑ふ。是の故に有無ともに其の空を觀ずること、內外の空觀の如し。是の故に但七空を說く。

問うて曰く、(二三)汝は一切法の空なることを知つて、諸觀を滅する、是を般若波羅蜜「多」と相應すと名くと言へり。是の如く觀ずる、是を相應と名け、是の如く觀ぜざれば、則ち相應せず。是非を分別するが故に、卽ち亦是の觀あり。云何が滅と言ふや。答へて曰く、是を以ての故に、

【(二三)】第二三問、一切法の空なるを知つて、諸觀を滅する、是を智度に相應すと名けば、是の觀を[illegible]さざる者は相應せざるべし。然らば則ち是の如く是非を分別するの觀を存するあり、云何がこれを滅と言はんや。

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、菩薩摩訶薩は七空を習應する時、色の、若くは相應し、若くは相應せざるを見ず。受想行識の若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。色の、若くは生する相、若くは滅する相を見ず。受想行識の、若くは生する相、(二四)若くは滅する相を見ず。色の、若くは垢なる相、若くは淨なる相を見ず。受想行識の若くは垢なる相、若くは淨なる相を見ず。

【論】釋して曰く。色の、若くは生ずる相、若くは滅する相を見ずとは、五衆に生あり滅あることを見ざるなり。若し五衆に生滅の相あれば、即ち斷滅の中に墮す。斷滅に墮するが故に、則ち罪なく福なし、罪なく福なきが故に、禽獸と異なること無し。色の、若くは垢、若くは淨を見ずとは、五衆に縛あり、解あることを見ず。若し五衆は、是れ縛性ならば、解脫を得る者あること無けん。若し五衆は是れ淨性ならば、則ち學道の法あることなけん。

【經】色と受と合することを見ず、受と想と合することを見ず、想と行と合することを見ず、行と識と合することを見ず。何を以ての故に、法と法と合する者あること無く、その性は空なるが故なり。

【六三】第二三問、受想行識は共に和合せずと說く理由如何。

【論】釋して曰く、心・心數法は無形なり。無形なるが故に、則ち住處なし。是の故に色と合せず。四大及び四大所造の色の如きは、二觸和合す、心・心數法の中には、觸法なきが故に、和合することを得ず。

問うて曰く、〔六三〕若し爾らば何を以てか、「受想行識は共に和合せず」と說くや。答へて曰く、佛は此の中に自ら說きたまはく、「法と法と合する者あることなし。何となれば一切法の性は常に空なるを以てなり。若し法と法と合することなくんば、亦離るることもあることなし」と。復次に、佛は自ら因緣を說きたまへり。

【経】舍利弗よ、色空の中に色あることなく、受想行識空の中に識あることなし。

【釋】釋して曰く、何となれば色と空と相違するを以てなり。若し空來れば、則ち色を滅す。云何が色空の中に色あらん。譬へば水中に火なく、火中に水なきが如し。「そは」性相違するが故なり。復次に、有人の言く、「色は實に空にあらず、行者は空三昧の中に入つて、色を見て空と爲す。是を以ての故に色空の中には、都べて色あることなしと言ふ」と。受想行識も亦是の如し。

【六四】第二四問、此の義に何の次第あるか。

【経】舍利弗よ、色空なるが故に、惱壞の相なく、受空なるが故に、受相なく、想空なるが故に、知相なく、行空なるが故に、作相なく、識空なるが故に、覺相なし。

【論】問うて曰く、(六四)此の義に何の次第あるや。答へて曰く、先に五衆の空の中には、五衆なきことを説けり。今是の中には、其の因縁を説く。「そは」五衆の各各の自相は、不可得なるが故なり。故に五衆の空の中には、五衆なしと言ふ。

【釋】何となれば、舍利弗よ、色は空に異なるに非ず、空は色に異なるに非ず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色、受想行識もまた是の如くなればなり。

【論】釋して曰く、佛は重ねて因緣を說きたまふ。若し五衆と空と異ならば、空の中に應に五衆あるべし。今五衆は空に異ならず、空は五衆に異ならず、五衆は卽ち是れ空、空は卽ち是れ五衆なり。是を以ての故に空は五衆を破せず、何となれば是の中に佛は自ら因緣を說きたまへばなり。

【經】舍利弗よ、是の諸法は空相にして、生ぜず、滅せず、垢つかず淨からず、增さず、減らず。是の空法は、過去に非ず。未來に非ず、現在に非ず、是の故に空の中には色も無く、受想行識も無く、眼耳鼻舌身意も無く、色聲香味觸法も無く、眼界も無く、乃至意識界も無く、無明も無く、亦無明の盡くることも無く、乃至老死も無く、亦た老死の盡くることも無く、苦集滅道も無く、亦智も無く、亦得も無く、須陀洹も無く、須陀洹果も無く、斯陀含も無く、斯陀含果も無く、阿那含も無く、阿那含果も無く、阿羅漢も無く、阿羅漢果も無く、辟支佛も無く、辟支佛道も無く、佛も無く、亦佛道も無し。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名く。

【六五】第二五問、人は皆空の中には、所有なきを知る。今それ佛は何故に五蘊等の諸法の空なる旨を說き給ひしや。

【論】問うて曰く、(六五)人は皆空の中には、所有無く、生ぜず、滅せず、垢つかず、淨からず、增さず、減らず、一切の法無きことを知る。佛は何を以てか分別して、五衆等の諸法は、各各空なりと說きたまひしや。答へて曰く、有人は復た空を習ふと雖も、而も空想の中には、猶ほ諸法あり。慈を行ずる人は、衆生なしと雖も、而も衆生の樂を得んことを想ふが如し。自ら無量の福を得るが故なり。是の故に佛說きたまはく、「諸法の性は常に自ら空なり。空三昧の故に、法をして空ならしむること、

水は冷相、火は其をして熱からしむるが如くにあらず。若し空三昧を以ての故に、法をして空ならしむと言はば、是の事は然らず」と。智とは、是れ（註）無漏の八智、得とは初めて須陀洹果を得るより乃ち佛道に至るなり。是の義は先に已に廣く說けり。

【註】無漏の八智とは、欲界の四諦を證する智を四法智と云ひ、上二界の四諦を證する智を四類智と云ひ、四法四類合せて八智なり。即八諦を觀じて正く煩惱を斷する無間道の位を忍と云ひ、既に煩惱を斷じ了りし解脱道の位を智と云ふ。總じて八忍八智あり。是れ無漏智の綱なり。法智類智の說明は前卷の註に擧げたり。

經 舎利弗よ、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜「多」を行じて、般若波羅蜜「多」と、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。禪波羅蜜「多」、尸羅波羅蜜「多」、羼提波羅蜜「多」、毘梨耶波羅蜜「多」、檀波羅蜜「多」と、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。亦色と、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。受想行識と、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。眼乃至意、色乃至法、眼界乃至意識界と、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智と、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。是の如く、舎利弗よ、當に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜「多」と相應することを知るべし。

論 釋して曰く、菩薩は諸法實相を得、般若波羅蜜「多」に入り、即ち般若波羅蜜「多」に於いて、定相と、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。何に況んや餘法あることを見んや。云何が般若と相應すると、相應せざるとを見ざる。是の如く行じて、般若波羅蜜「多」に應せんと爲すことを見ず。是の如く行せずして、般若波羅蜜「多」に應せざることを爲すとを見ず。

常・樂・我の行の如きは、般若波羅蜜〔多〕に應せず、無常・苦・無我の行は、般若波羅蜜〔多〕に應ずと爲す。若し實を行ずれば般若波羅蜜〔多〕に應せず、若し空を行ずれば、般若波羅蜜〔多〕に應ずることを爲す。有無行の如きは、般若波羅蜜〔多〕に應せずと爲し、非有非無行の如きは、般若波羅蜜〔多〕に應ずと爲さば、般若波羅蜜〔多〕の中には、皆是の事なし。そは般若波羅蜜〔多〕の相は、畢竟清淨なればなり。五波羅蜜〔多〕、五衆乃至一切種智も亦是の如し。

問うて曰く、〔六七〕般若波羅蜜〔多〕の畢竟清淨なることは應に爾るべし、五波羅蜜〔多〕及び餘法は云何が清淨なるや。答へて曰く、先に五事を說けり。般若波羅蜜〔多〕を離るるを、波羅蜜〔多〕と名けず、般若波羅蜜〔多〕と和合するを波羅蜜〔多〕と名く。般若波羅蜜〔多〕は初品の中に說くが如し。云何が檀波羅蜜〔多〕は、施者を見ず、受者を見ず、財物なきが故にと名くるや。五衆の法は是れ菩薩の觀處なり。般若波羅蜜〔多〕と和合するが故に、畢竟清淨なるが故に、相應と不相應とを見ず。十二入、十八界、十二因緣も亦是の如し。是の諸法は定性あること無く、定法あること無し。是の故に若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。十八空、四念處乃至大慈大悲、一切種智の、若くは相應し、若くは相應せざることを見ず。

問うて曰く、〔六八〕是の菩薩は聲聞、辟支佛に非ず、云何が三十七品あるや。未だ佛道を得ず、云何が

〔六七〕　第二六問、智度の畢竟清淨なるは可なり、他の五度及び餘法は、如何にして清淨なるか。

〔六八〕　第二七問、菩薩に三十七品あり、十力、四無所畏あるは何故なるか。

十力、四無所畏あるや。答へて曰く、是の菩薩は聲聞、辟支佛に非ざるも、亦聲聞辟支佛の法を觀じ、聲聞辟支佛の道を以て、衆生を度せんと欲するが故なり。

復た、有人の言く、「聲聞辟支佛の道を行じて、但證を取らず」と。後品の中に說くが如し。空、無相、無作三昧に入れる菩薩は、是の三解脫門に住して、是の念を作して言く、「今は是れ觀の時にして、是れ證の時に非ず」と。或は新發意の菩薩あり、聲聞辟支佛に三十七品の法あるを聞き、讃誦し正憶念し分別す。是の故に菩薩に三十七品ありと說く。佛の十力等も亦是の如し。菩薩は自ら菩薩の十力、四無所畏、十八不共法の中に於いて住す。是の法の中に住して、若くは聞き、若くは憶想して分別すらく、「佛の十力、四無所畏、十八不共法等は、甚深微妙なるも、亦是れ我が分なり」と。

復次に、是の菩薩は、無量阿僧祇劫より來、佛の十力、四無所畏等を修習し、樹下に坐する時、〔六九〕無礙解脫を得るが故に、增益して清淨なり。譬へば勤勞旣に立つて、然して後に其の功賞を受くるが如し。菩薩も亦是の如く、是の功德あつて、乃ち其の名を受く。是の功德は、皆是れ般若波羅蜜〔多〕の勢力の合なるが故に、若くは相應し、若くは相應せざるを見ず。此の諸法の義は、六波羅蜜〔多〕より乃ち一切智に至るまで、先に已に說けり。

【六九】無礙とは、自在に通達して、礙りなきことなり。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、空と空と合せず、無相と無相と合せず。無作と無作と合せず。何となれば空・無相・無作には、合と不合とあることなければなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く。

【論】問うて曰く。〔七〇〕一心の中に二空あることなし。云何が空と空と合せずと說くや。答へて曰く。〔七一〕空に二種あり。一には空三昧。二には法空なり。空三昧と法空とは合せず。何となれば若し空三昧力を以て法空と合せば、是の法は自性空に非ざればなり。又空とは、性自ら空にして、因緣より生ぜず。若し因緣より生ぜば、則ち性空と名けず。行者にして、若し入る時空を見て、出づる時に空を見ざれば、當に知るべし、是れ虛妄なることを。

復次に、佛は自ら因緣を說きたまはく、「空の中には、合も無く、不合も無し。無相、無作も亦是の如し。舍利弗よ、是の如く習應する、是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く」と。

問うて曰く。〔七二〕但一處に、般若波羅蜜〔多〕と相應すると。相應せざるとを見ずと說かば便ち足る。何を以ての故に。復た更に種種に、相應と不相應の因緣を說くや。若し一處に應せば、餘は則ち皆應せん。若し一處に應せずんば、餘も亦應せざらん。譬へば一盲の見ること無ければ、千盲も倶に爾る

〔七〇〕第二八問、一心の中には二空なし、今それ空と空と合せずといふは何故なるか。

〔七一〕二種の空――空三昧と法空。

〔七二〕第二九問、智度と相應すると、相應せざるとは、唯一處に說かば便ち足る。然るを種種の因緣を舉げて、之を說くは何故なるか。

が如し。答へて曰く、然らず、若し戲論を以て、詰たんことを求めんと欲せば、應に是の如く難ずべし。諸法の相は、說くべからずと雖も、佛は大慈大悲を以ての故に、種種に方便して說きたまへり。又佛の說法は、一種の衆生、[illegible]とするも、未だ悟らざる者の爲に、重ねて說きたまふ。又復一たび說きては、〔五〕見諦の結使を斷ずることを得し、二たび說きては、〔六〕思惟の結使を斷ずることを爲し、復更に說きては、諸餘の結使を分分に斷ずることを爲す。又一たび說けば、人あり、聲聞の道を得、〔また〕一たび說けば、辟支佛道の因緣を種ゑ、更に一たび說けば、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、更に一たび說けば、六波羅蜜〔多〕を行じ、更に一たび說けば、方便を行じて無生忍を得、更に一たび說けば、〔七〕初住地を得、更に一たび說けば、乃至〔八〕十住地に至る。更に一たび說くは人の爲の故にして、更

【五】見諦の結使とは、眞理を觀ずるときの障礙となる迷惑にして、即ち分別の邪見なり。

【六】思惟の結使とは、一旦眞理を證悟したる上に、更に思惟し修養して、斷ずべき迷惑、即ち倶生の煩惱なり。

【七】初住地とは、菩薩乘五十二位中十住の第一發心住なり。

【八】十住地とは、既に信を得たるを以て更に佛地に住するなり。(一)に發心住、眞方便を以て十住心を發し、十信の用を涉入したる初位一心の位なり。(二)に治地住、心の明淨、瑠璃の内に精金を現ずるが如く、前の妙心を以て履治して地となすをいふ。(三)に修行住、前に地を涉知し、倶に明了なる故、十方に遊履して留礙なきをいふ。(四)に生貴住、佛と同じく佛の氣分を受け、彼此冥通して如來種に入るをいふ。(五)に方便具足住、自利利他方便具足して相貌缺くる所なきをいふ。(六)に正心住、相貌のみならず、心相も亦佛と同じきをいふ。(七)に不退住、身心合成して日日增長するをいふ。(八)に童眞住、佛の十身の靈相一時に具足するをいふ。(九)に法王子住、初發心より第四住に至る迄を入聖胎と名け、第五より第八に至る迄を

に一たび說くは天の爲の故なり。

復次に、是の般若波羅蜜[多]の相は、甚深にして、解し難く、知り難し。佛は、衆生の心根に、利鈍あることを知りたまひ、鈍根少智には、其の爲に重ねて說き。若し利根の者には、一說二說したまふに便ち悟り、種種重ねて說くことを用ゐず。譬へば快馬は一鞭を下せば便ち走り、駑馬は多鞭して、乃ち去るが如し。是の如き等の種種の因緣の故に、經の中に重說することは咎なし。

長養聖胎と名づく。而して此の第九に於て衆相具足して出胎するをいふ。(十)に灌頂住、菩薩既に佛子となりて佛事を行ふに堪ふれば、佛、智水を以て灌頂す、刹利王子の受職灌頂の如きをいふ。

【七七】合の義解。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜[多]を行ずるとき、諸法の自相空に入り、入り已つて色と合することを作さず、合せざることを作さず、受想行識と合することを作さず、合せざることを作さず、色と前際と合せず。何を以ての故に、前際を見ざるが故なり。色と後際と合せず。何を以ての故に、後際を見ざるが故なり。色と現在と合せず。何を以ての故に、現在を見ざるが故なり。受想行識も亦是の如し。

【論】釋して曰く、先には空、無相、無作、無合、無不合を說き、今は更に因緣を說く、自相空に入るが故に、五衆は合と作さず、不合と作さず、若し一切法は自相空ならば、是の中に合と不合と有ることなし。(七七)合とは、諸法は其の相の如く、地の堅相、識の知相の如し。是の如き等の自相は異法に

在らず。是を名けて合と爲す。(七八)不合とは、自相は自法の中に在らず、略して諸法の相を說けば、增さず、減らず、色と前際と合すと說かず。何となれば前際は空にして、所有なく、但名字のみあるを以てなり。若し色、過去に入れば、則ち滅して所有なし、云何が前際と合せん。後際は未だ有らず、未だ生せず、色は後際と合すべからず。現在の色は、生滅して住せざるが故に、相を取るべからず、色は現在と合すべからず。

復次に、佛、自ら因緣を說きたまはく、「色は前際と合せず、合せざるに非ず。何となれば前際は見るべからざるを以てなり。色は後際と合せず、合せざるに非ず。何となれば後際は見るべからざるを以てなり。色は現在と合せず、合せざるに非ず。何となれば現在は見るべからざるを以てなり。受想行識も亦是の如し」と。

【七八】不合の義解。
【七九】第三〇問、云何が前際と後際と合するや。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、前際と後際と合せず、後際と前際と合せず、現在と前際、後際と合せず、前際、後際も亦現在と合せず、三世の名は空なるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の、是の如く習應する者、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名く。

論 問うて曰く、(七九)云何が前際と後際と合するや。答へて曰く、有人は說く、「三世の諸法は皆是

れ有なり。未來の法は轉じて現在と爲り、現在は轉じて過去と爲る。泥團は現在にして、瓶を未來と爲し、土を過去と爲すが如し。若し瓶を成ずる時は、瓶を現在と爲し、泥團を過去と爲し、瓶の破るを未來と爲す。是の如きは是を合と爲す。若し三世の相ありとせば是の事は然らず、過多きを以ての故なり、是を不合と爲す。

復次に、三世合すとは、過去の法は、過去・未來・現在世のために因と作り、現在の法は、現在・未來世のために因と作り、未來世の法は、未來世の與めに因と作るが如し。又過去の心・心數法は、三世の法を緣ず、未來・現在の心・心數法も亦是の如し。心・心數法を斷ずれば能く、不斷の法を緣ず。心・心數法を斷せざれば、能く可斷の法を緣ず。是の如き等、三世の諸法の因緣、[合]業果の共に相和合する、是を名けて合と爲す。菩薩は是の合を爲さず。何となれば、先に說くが如く、過去は已に滅せり、云何が能く因と爲り、能く緣と爲らん。未來は未だ有らず、云何が因緣と爲らん。現在は乃ち一念の中に至るまで住せず、云何が因緣と爲らん。是を不合と名く。復次に、佛、自ら因緣を說きたまはく、「三世及び名字は、空なるが故に云何が合と言はん」と。

【合】諸本には業緣に作れり。

巻の第三十七

習相應品の三を釋す。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜「多」を行ずるに、薩婆若は過去世と合せず、何となれば過去世は見るべからざればなり。何に況んや薩婆若、過去世と合せんをや。薩婆若は未來世と合せず、何となれば未來世は見るべからざればなり。何に況んや薩婆若と、未來世と合せんをや。薩婆若は現在世と合せず、何となれば現在世は見るべからざればなり。何に況んや薩婆若と、現在世と合せんをや。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の、是の如く習應する、是を般若波羅蜜「多」と相應すと名く。

【論】釋して曰く、菩薩は、般若波羅蜜「多」を行ずるに、(一)薩婆若と過去世と同じと觀せず、何となれば過去世は是れ虛妄、薩婆若は是れ實法、過去世は是れ生滅の相、薩婆若は生滅の相に非ざればなり。過去世及び法は、求覓するに不可得なり。何に況んや薩婆若と過去世と合せんをや。

復次に、佛、自ら因緣を說きたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜「多」を行ずるに、過去世を見ず、何に況んや薩婆若と過去世と合せんをや。未來、現在世も亦是の如し」と。未來世は生滅の相を

【一】Sarvajña は譯して一切智といふ。

除きて、其の餘の義は同じ。復次に、時を以ての故に三世ありと說く。過去、未來、現在なり。時の義は一時の中に說くが如し。復次に、薩婆若は、是れ十方三世諸佛の眞實の智慧なり。三世は凡夫の虛妄より生ず、云何が薩婆若と合せん。譬へば眞金と弊銅と同相ならざるが如し。

問うて曰く、〔二〕隨喜品の中に說くが如くんば、「菩薩摩訶薩は、過去現在の諸佛の、薩婆若の智慧等の、諸の功德を念じて、阿耨多羅三藐三菩提に回向す」と。云何が過去現在世は、薩婆若と合せずと言ふや。答へて曰く、若し著心を以て、相を取り、薩婆若を念ぜば、阿耨多羅三藐三菩提に回向すと名けず。譬へば雜毒を食するに、初は香美なりと雖も、後には身に便ならざるが如し。若し菩薩、過去現在諸佛の薩婆若を分別せば、應に三世と合すべし。今は相を取らざるが故に、則ち合すること有ることなし。

問うて曰く、〔三〕菩薩は亦念ずらく、「未來世に當に成佛すべし」と。薩婆若も亦自ら念ずらく、「我當に薩婆若を得べし」と。是を未來世と薩婆若と合すと名く。云何が合せずと言ふや。答へて曰く、薩婆若は三界を過ぎ、三世を出て、畢竟淸淨の相なり。行者は但憶想分別を以て、「我當に是の薩婆若を得べし」と。世間の法の如きは、憶想するに當に所得あるべし。而も是の事は未だ生ぜず、未だ有ならず、時節未だ至らず、因緣未だ會せざれば、都て處所なし、云何が當に合すべき。明けて當に

〔二〕第一問、何故に過去及び現在世は、一切智と合せずと言ふか。

〔三〕第二問、云何が一切智と未來世と合せずといふか。

酥を服すべきに、今已に臭を憶するが如し。又、迦旃延の弟子の輩、未來世の中の菩提を言ふが如し。菩薩に語つて、「若し能く相好の身を修せば、我當に來つて之に處すべし」と言ふは、貴家の女の自恣無難にして、使を遣して貧家の子に語らしめて、「汝、好を莊嚴、房舍、帷帳、種種を備具せよ、我當に來つて汝が家中に處るべし」と言はんが如し。是の如きの說は是れ不〔四〕相應なり。是を以ての故に、薩婆若と三世と合することを得ず。

問うて曰く、〔五〕餘法は甚だ多し、何を以てか但薩婆若のみを說くや。答へて曰く、是の薩婆若は、菩薩の歸趣する所、深心に得んと欲して、三世の中に於いて求索するが故なり。

問うて曰く、〔六〕何を以てか有爲、無爲法の中に於て求めざるや。答へて曰く、後に當に一切法の中に求むることを說くべし。

【四】論には、相應を如去に作れり。

【五】第三問、餘法を說かずして但一切智のみを說く理由如何。

【六】第四問、有爲法、無爲法の中に於いて求めざる理由如何。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色と薩婆若と合せず、色は見るべからざるが故に。受想行識も亦是の如し。眼と薩婆若と合せず、眼は見るべからざるが故に。耳鼻舌身意も亦是の如し。色と薩婆若と合せず、色は見るべからざるが故に。聲香味觸法も亦是の如し。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜〈多〉と相應すと名く。

【論】問うて曰く、[七]何を以てか但五衆、十二入を說きて、十八界、十二因緣を說かざるや。答へて曰く、應當に說くべし、或時は誦者忘失す。何を以てか之を知る。佛の說きたまふ所の五衆、十二入、十八界、十二因緣は、事なり、垢なり、淨なり。五衆、十八界、十二入、十二因緣を名けて事と爲す。定んで是れ垢ならず、定んで是れ淨ならず。是の中に或は結使あつて生じ、或は善法あつて生じ、田の定んで能く物を生じ、種に隨つて皆生ずるが如し。衆、界、入、十二因緣、是を事と爲し、六波羅蜜〔多〕乃至一切種智、是を淨種と爲す。垢を說かざる所以は、是の菩薩は、[八]結使已に薄く、自ら惱まざるを以て、是の故に說かざるなり。又菩薩は智慧深く入つて、諸法の空を解し、諸の煩惱なく、但諸の功德を集む、是を以ての故に應に十八界、十二因緣を說くべし。色等の事の中の如きは、薩婆若と合すること有るべからず、何となれば是の薩婆若は、三世の中に得べからざるが故なり。色等の事の中にも亦不可得なり。是れ皆世間の因緣和合にして定性あることなし。

【七】第五問、但五蘊と十二處のみを說いて、十八界十二因緣を說かざる理由如何。

【八】結使とは、結も使も共に煩惱の異名なり。心身を繫縛し、苦果を結成するが故に、結といひ、衆生に隨逐し、又は衆生を驅使するが故に、使といふ。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずるに、檀波羅蜜〔多〕と薩婆若と合せず、波羅蜜〔多〕は見るべからざるが故なり。乃至般若波羅蜜〔多〕も亦是の如し。四念處は薩婆若のために念ぜず、四念處は見るべからざるが故なり。

乃至八聖道分も亦是の如し。〔八〕

【論】 問うて曰く、〔九〕五衆等は是れ世間の法にして薩婆若と合せざるべし、六波羅蜜「多」は云何が合せざるや。答へて曰く、〔一〇〕六波羅蜜「多」に二種あり、一には世間、二には出世間なり。世間の檀波羅蜜「多」の爲の故に、合せずと說く。出世間の檀波羅蜜「多」は應に合すべし。復次に、〔一一〕菩薩は六波羅蜜「多」を行じ、漏結未だ盡くさず、佛の薩婆若と合することを得ず。復次に、佛說きたまはく、「六波羅蜜「多」の空すら尙ほ見るべからず、何に況んや薩婆若と合せんや。三十七品も亦是の如し」と。

問うて曰く、〔一二〕摩訶衍品の中に、三十七品あり、亦た是れ菩薩道なり、云何が薩婆若と合せざるや。答へて曰く、菩薩あり、心に著するを以ての故に、三十七品を行じて、多く涅槃に廻向す、是を以ての故に佛は合せずと說きたまふ。

【九】 第六問、一切智と六度と合せざる理由如何。
【一〇】 二種の六度。
【一一】 菩薩は佛の一切智と合すること能はず。
【一二】 第七問、大乘の三十七品は菩薩道なり、何故に一切智と合せざるや。

【經】 佛の十力、乃至十八不共法は、薩婆若と合せず。佛の十力・乃至十八不共法は、見るべからざるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應するを、是れ般若波羅蜜「多」と相應すと名く。

【論】 釋して曰く、是の十力乃至十八不共法は、是れ妙法なりと雖も、薩婆若の爲の故に行ず。菩薩

は漏結未だ盡くさざるを以ての故に、應に薩婆若と合すべからず。

復次に、〔三〕佛の十力等の法に三種あり、一には菩薩の所行は、未だ佛道を得ずと雖も、漸漸に修習す。二には佛の得たまふ所を、而も菩薩は憶想分別して之を求む。三には佛心の得る所の、上の二種は合すべからず、下の一種は合すべしと雖も、而も菩薩は未だ得ず、是の故に合せず。復次に、空なるが故に、見るべからず、見るべからざるが故に合せず。是を以て皆言はく、「見るべからざるが故に」と。

【三】三種の十力。

【四】第八問、佛及び菩提と一切智と合せざる理由如何。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずるに、佛と薩婆若と合せず、薩婆若と佛と合せず、菩提と薩婆若と合せず、薩婆若と菩提と合せず。何となれば佛は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ佛、菩提は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ菩提なればなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名く。

論 問うて曰く、〔四〕菩薩及び菩薩の法は、薩婆若と合せざるべけんも、云何が佛及び菩提も亦合せざるや。答へて曰く、佛は是れ人、薩婆若は是れ法なり。人は是れ假名、法は是れ因緣なり。衆生乃至知者、見者は、無なるが故に、佛も亦無なり。衆生の中にて、尊上第一なる、是を名けて佛と爲す。是の故に合せざるなり。

復次に、薩婆若を得るが故に、名けて佛と爲す。若し佛、薩婆若を得ば、先には以て是の佛は薩婆若を須ゐず、若し佛、薩婆若を得るに非ずんば、何を以てか佛は薩婆若を得と言はん。是を以ての故に和合の因緣より生ず、先後を言ふことを得ず。

復次に、(二五)佛を離れて薩婆若なく、薩婆若を離れて佛なし、薩婆若を得るが故に佛と名け、佛の所有なるが故に薩婆若と名く。

問うて曰く、(二六)佛は是れ人なるが故に合せざるべきも、菩提は是れ無上道なり、云何が合せざるや。答へて曰く、菩提を名けて佛の智慧と爲し、薩婆若を名けて、佛の一切智慧と爲す。(二七)十智を菩提と爲し、第十一の如實智を名けて、薩婆若と爲す。二智は一心の中に生ずることを得ず。

復次に、是の十力等の諸佛の法、及び佛の菩提は、皆是れ菩薩の憶想分別にして實にあらず、唯、佛の得たまふ所の薩婆若のみ是れ實なり。今此

【二五】佛を離れて一切智なく、一切智を離れて佛なし。

【二六】第九問、菩提と一切智と合せず――いふ理由如何。

【二七】十智とは大乘に於ては、如來所具の十智を說く。(一)に三世智、三世の法に於て通達圓明なる智なり。(二)に佛法智、一切の佛法に通達して說法度生する智なり。(三)に法界無礙智、一切衆生本より法界の體を具し、事理融通して互に相礙せざるを知る智なり。(四)に法界無邊智、衆生の色心の諸法一切に充滿して邊際なきを知るなり。(五)に充滿一切世界智、如來定より廣大の妙用を起し、徧く世間に充滿するの智なり。(六)に普照一切世間智、如來大智慧光明ありて普く無量の世界に照了する智なり(七)に住持一切世界智、如來大神力ありて世界を住持し、一切の衆生を攝化する智なり。(八)に知一切衆生智、如來一切衆生善惡因緣を知る智なり。(九)に知一切法智、如來既に所化の衆生を知り、復た能化の諸法を知る智なり。(十)に知無邊諸佛智、如來無邊の諸佛世間に出現して、一切衆生を說法敎化することを知る智なり。

の菩提は、是れ菩薩の菩提なり。是の心中は、虚妄にして、未だ實ならず、云何んがして、薩婆若と合せんや。

復次に、此の經の中に佛自ら不合の因縁を説きたまへり。何となれば佛は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ佛、菩提は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ菩提なるを以てなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜「多」を行ずるに、是の如く習應する、是を般若波羅蜜「多」と相應すと名く。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜「多」を行ずるに、色の有を習はず、色の無を習はず、受想行識も亦是の如し。色の有常を習はず、色の無常を習はず、受想行識も亦是の如し。色の苦を習はず、色の樂を習はず、受想行識も亦是の如し。色の我を習はず、色の非我を習はず、受想行識も亦是の如し。色の寂滅を習はず、色を寂滅ならずと習はず、受想行識も亦是の如し。色を空と習はず、空を非空と習はず、受想行識も亦是の如し。色を有相と習はず、色を無相と習はず、受想行識も亦是の如し。色を有作と習はず、色を無作と習はず、受想行識も亦是の如し。是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜「多」を行ずる時、是の念を作さず、「我般若波羅蜜「多」を行ず、般若波羅蜜「多」を行ぜず、般若波羅蜜「多」を行ずるに非ず、行ぜざるに非ず」と。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜「多」と相應すと名く。

【論】釋して曰く、若し菩薩、五衆を觀ずるに、有に非ず、無に非ず。是に於いても亦著せずんば、爾の時、般若波羅蜜「多」と相應す。何となれば一切の世間は、二見の、若くは有、若くは無に著するを以てなり。生死の流に順ずる者は、多く有に著し、生死の流に逆ふ者は、多く無に著す。我見多き

者は、有に著し、邪見多き者は、無に著す。

復次に、〔一八〕四見多き者は有に著し、邪見多き者は無に著す。三毒多き者は有に著し、無明多き者は無に著して、五衆の因緣集りて、是の有を生ずることを知らず。集を知らざる者は無に著し、惡知識及び邪見、外書に近づくが故に斷滅無罪福の中に墮す。無の見の者は無に著し、餘は有に著す。或は衆生あり」謂はく、「一切は皆空なり」と。心是の空に著す、是の空に著するが故に、名けて無の見と爲す。或は衆生あり、謂はく、「一切の六根もて知らるる法は皆有なり」と。是を有の見と爲す。〔一九〕愛多き者は、有の見に著し、〔二〇〕見多き者は無の見に著す。是の如き等の衆生は有見、無見に著す。是の二種の見は、虛妄にして實に非ず、中道を破す。譬へば人の狹道を行くに、一邊は深水、一邊は大火にして、二邊ともに死するが如し。有に著し、無に著するの二事は、俱に失あり。何となれば若し諸法は實に定んで有ならば、因緣なし、若し因緣に從つて和合して生せば、是の法は自性なし。若し自性なければ、即ち是れ空なり。若し法なくんば、是れ實に則ち罪福なく、縛なく、解なく、亦諸法の種種の異なし。

【一八】四見とは、一異、常非常等の義に就て總て四句あり、一切の言計必らず其一に墮するを、名けて四見と云ふ、復四種の見あり、世間常と世間無常と世間亦常亦無常と世間非常非無常となり。我及び世間の有邊無邊も亦た是の如し。

【一九】愛とは、神聖の愛、若くは慈悲の愛などをいふにあらず、貪欲の煩惱より起る愛著の愛をいふ。

【二〇】見とは、見解、見識等と熟字すれども、今此處には、邪見我見等の見を意味す。

復次に、有の見の者は、無の見の者と相違し、相違するが故に、是非あり。是非の故に共に諍ひ、諍あるが故に、諸の結使を起こし、結使の故に、業を生じ、業を生ずるが故に、惡道の門を開く。實相の中には相違、是非鬪諍あることなし。

復次に、有に著する者は、事若し無常なれば、則ち憂惱を生ず。若し無に著する者は、諸の罪業を作し、死して地獄に墮して苦を受く。有無に著せざる者は、是の如き等の種種の過失あることなし。應に捨すれば、是れ則ち實を得べし。

復次に、(三)是の五衆は、若くは常なり、若くは無常なりとは、是の事は然らず。何となれば若し五衆にして常ならば、則ち生なく滅なし、生なく滅なきが故に、則ち罪福なく、罪福なきが故に、則ち善惡の果報なきを以てなり。世間は涅槃の如く、不壞の相なりとは、是の如き妄語を、誰か當に信ずべき者あらん。現に死亡を見て啼哭す、是れ則ち衆生の無常なり、草木の凋落し、華果の磨滅するが如きは、是れ則ち外物の無常なり、大劫盡くる時は、一切すべて滅す。是を大の無常と爲す。是の如き等の種種の因緣あり、是の如く五衆は常に不可得なり。

復次に、無常は常を破す、無常を以て、是と爲すべからず。何となれば若し諸法は、無常の相にして、念念に皆滅せば、則ち六情は六塵を取ること能はざるを以てなり。何となれば内心、外塵は俱に

【三】五蘊を觀じて、有にあらず無にあらずとし、又不著なれば般若と相應す。

住することと無きが故に、緣ずることを得べからず、知ることを得べからざればなり。亦修習の因緣なし。果報の因緣多きが故に、果報も亦多しと、此の事は得べからず。又常見と無常見と有るを以て共に諍ふ。是の如き等の種種の因緣あり。五衆は無常ならば則ち苦樂、我非我、若くは空、若くは實、有相と無相、有作と無作を得べからず。此の義は先に處處に說くが如し。

五衆の〔三二〕寂滅とは、因緣生なるが故に〔三三〕無性なり、無性なるが故に寂滅、寂滅なるが故に、涅槃の如し。〔三四〕三毒熾然なるが故に、寂滅ならず。無常の火然ゆるが故に、寂滅ならず。三毒の實相に著せざるが故に、寂滅ならず。三毒は、各各分別の相なるが故に、寂滅ならず。此の義は先に未だ說かざるが故に、今是の中に說かん。若し菩薩摩訶薩は能く是の如きの二邊を離れて、中道を行じ、般若波羅蜜〔多〕を行ずるも亦著せず。何となれば菩薩不可得なれば、般若波羅蜜〔多〕も亦不可得なるを以てなり。般若波羅蜜〔多〕を行せざるにも亦著せず。何となれば餘の諸の凡人は、菩薩の如く諸法の實相を觀ずること能はず、云何か當に、「我は般若波羅蜜〔多〕を行せず」と言はん。行ずると行せらるとにも亦著せず。二は俱に過あればなり。是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く。

【三二】寂滅とは、寂然として滅無に歸すといふ意味にあらず。物それ自らは、其の體寂靜にして、一切の相を離れたれば、言語文字の形容表言を超絶するの義なり。

【三三】無性とは、性は體なり、萬物は皆因と緣とより生ずるが故に、常恆不變の實體あることなし。故に之を無性といふ。

【三四】三毒とは、貪欲、瞋恚、愚癡の三種の根本煩惱なれば、生命を害ふ毒に喩へたるなり。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜〔多〕の爲の故に般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。檀波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、毘梨耶波羅蜜〔多〕、禪波羅蜜〔多〕の爲の故に般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。阿鞞跋致地の爲の故に般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。衆生を成就するが爲の故に般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。佛世界を淨むるが爲の故に般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法の爲の故に、般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。內空の爲の故に般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、諸法空、自相空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空の爲の故に、般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。如・法性・實際の爲の故に、般若波羅蜜〔多〕を行ぜず。何となれば是の菩薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、諸法の相を壞せざればなり。是の如く習應する、是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く。

【論】問うて曰く、〔二五〕六波羅蜜〔多〕乃至〔二六〕如・法性・實際、此は是れ佛法なり。菩薩、若し是の法の爲の故に、般若波羅蜜〔多〕を行ぜずんば、更に何の法あつてか、爲に般若波羅蜜〔多〕を行ずべきや。答へて曰く、佛、此の中に自ら說きたまふが如くんば、諸法は破壞する者ある無し、諸法の相を壞せざるが故に、亦是は檀、是は慳乃至是は三界、是は實際と分別せざるなり。

【二五】第一〇問、菩薩もし眞如法性等の爲に智度を行ぜずんば、何の爲に智度を行ずべきか。

【二六】如に、現象的の如と、本體的の如との、二方面あり。水の濕相の如く、地の堅相の如きは、是れ現象的の如なり。然るに此の現象は實在にあらず。其の實皆空なり。森羅萬象、皆空を以て實となす、空は是れ諸佛の實相なり。此の實相の如きを、本體的の如と稱す。故に實相卽ち如なり。而して此の如は諸法の性なれば、法性と名け、此の法性は眞實の際極なれば、實際といふ。是の故に如といひ、法性といひ、實際といふは、皆諸法實相の異名なりと知れば足るなり。

復次に、菩薩あり、此の善法に於いて深心に繫著す。繫著を以ての故に、能く罪を生ず、是の人の爲の故に、是の六波羅蜜［多］乃至實際は皆空にして、自性あることなく、夢の如く幻の如し。汝、著を生ずること莫れ。眞の菩薩は、是が爲の故に行ぜずと說く。菩薩あり、心に著する所なく、六波羅蜜［多］乃至實際を行ず。是の人の爲の故に、是の事の爲の故に、般若波羅蜜［多］を行ずることを說く。［卽ち］後品の中に說くが如し。六波羅蜜［多］を具足せんが爲に、乃至衆生を敎化し、佛世界を淨めんが爲の故に、般若波羅蜜［多］を行ずることを說く。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜［多］を行ずるに、如意神通の爲の故に、般若波羅蜜［多］を行ぜず、天耳の爲の故にせず、他心智の爲の故にせず、宿命智の爲の故にせず、天眼の爲の故にせず、漏盡神通の爲の故に般若波羅蜜［多］を行ぜず。何となれば菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜［多］を行ずるすら、尚ほ般若波羅蜜［多］を見ず、何に況んや菩薩の神通を見んや。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く行ずる、是を般若波羅蜜［多］と相應すと名く。

【二七】第一一問、重ねて五神通を說く理由如何。

論 問うて曰く、(二七)先に禪波羅蜜［多］を說く中に、已に具に五神通を說けり。今何を以てか、復た重ねて說くや。答へて曰く、彼の中には、總相を說いて名字を列ねず、此の中には別相を說けり。復次に、功德果報は、所謂五神通なり。菩薩は是の五神通を得て、廣く能く衆生を利益す。復次に

慈悲「あり」、般若波羅蜜「多」ありと雖も、五神通なければ、鳥の兩翼なくんば、高く翔ること能はざるが如く、健人の諸の器仗なくして、敵陣に入るが如く、樹の華果なくんば、饒益する所なきが如く、枯渠の水なくんば潤及する所なきが如し。是を以ての故に重ねて、五神通を說き、及び餘の無量を、佛法の中に別說するも咎なし。

問うて曰く、〔二六〕若し爾らば、佛は何を以てか、五神通の爲の故に、般若波羅蜜「多」を行ずること莫れと言ひしや。答へて曰く、有無の方便多し。菩薩は五神通を得て、餘の菩薩を輕んじ、心に憍高を生ず。是が爲の故に說く。何となれば菩薩は、般若波羅蜜「多」、諸佛の母に於いてすら、尙ほ著せず、何に況んや五神通をや。

〔二六〕第一二問、然らば佛は何故に、菩薩は五神通の爲に、智度を行ずること莫れと言ひしや。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜「多」を行じて、是の念を作さず、「我は如意神通を以て飛んで東方に到り、如恆河沙等の諸佛を供養し恭敬せん。南西北方、四維上下も、亦是の如し」と。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜「多」を行じて、是の念を作さず、「我は天耳を以て、十方諸佛の說きたまふ所の法を聞かん」と。是の念を作さず、「我は他心智を以て、當に十方衆生の心に念ずる所を知るべし」と。是の念を作さず、「我は宿命通を以て、十方衆生の宿命に作す所を知らん」と。是の念を作さず、「我は天眼を以て、十方衆生の此に死し

彼に生ずることを見ん」と。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く行ずる、是を般若波羅蜜（多）と相應し。亦能く無量阿僧祇の衆生を度すと名く。

【論】釋して曰く、先には五神通の名を說くと雖も、今此の中には其の功用を說く。

問うて曰く、〔二九〕菩薩は何を以ての故に是の念を作さざるか、「我は如意神通を以て、飛んで十方に到り、如恆河沙等の諸佛を供養し恭敬せん」と。答へて曰く、已に我見の根本を拔けるが故に、憍慢の山を摧破するが故に、善く三解脫門、三三昧を修するが故に、佛身は妙なりと雖も、亦三解脫門に入る。熱せる金丸は、色は妙に見ゆると雖も、手に觸るるべからざるが如く、又諸法は、幻の如く、化の如く、來ることなく、去ることなく、近きことなく、遠きことなく、定相あることなし。幻化の人の如く、誰か來り、誰か去らん。神通、國土、此彼、近遠の相を取らざるが故に咎なし。若し能く佛前に在つて、禪定に住し、變じて無量の身と爲り、十方に至つて、諸佛を供養するに、分別する所なし。已に法愛を斷ずるが故なり。餘通も亦是の如し。菩薩は是の五神通を得、諸佛を供養せんが爲の故に、無量の身に變じ、大神力を顯し、十方世界の三惡趣の中に於いて、無量の衆生を度すること、往生品の中に說くが如し。

〔二九〕第一三問、菩薩が「我は如意通を以て、飛んで十方に到り、如恆河沙等の諸佛を恭敬し供養せん」との念を作さざるは何故なるか。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩の能く是の如く般若波羅蜜〔多〕を行ずるに、惡魔も其の便を得ること能はず、世間の衆事の欲する所は意に隨ふ。十方の各如恒河沙等の諸佛は、皆悉く、是の菩薩を擁護して、聲聞辟支佛地に墮せざらしめ、四天王天乃至阿迦膩吒天も、皆亦是の菩薩を擁護して、礙あらしめず。是の菩薩は有らゆる重罪を現世に輕受す。何となれば是の菩薩摩訶薩は、普ねく慈を用ゐて、衆生に加ふるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く行ずる、是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く。

【論】釋して曰く、今は是の菩薩の、上の如く般若波羅蜜〔多〕を行じて、大功德を得ることを讃す。

」是の菩薩の智慧功力の果報は、此の五利を得と名く。

【三〇】第一四問、欲界の主たる魔が、人間たる菩薩に對して、便を得る能はざる理由如何。

問うて曰く、（三〇）魔は是れ欲界の主にして、菩薩は是れ人、肉眼にして自在を得ず、云何が其の便を得ること能はざるや。答へて曰く、此の中に佛自ら說きたまひしが如く、諸佛、諸大天の擁護するが故なり。

復次に、是の菩薩は、畢竟不可得自相空を行ずるが故に、一切法の中に於いて皆著せず。著せざるが故に、違錯なし。違錯なきが故に、魔も其の便を得ること能はず。譬へば人身に瘡なければ、毒厝の中に臥すと雖も、毒も亦入らざれども、若し小瘡あれば、則ち死するが如し。又是の菩薩は、諸佛の中に於いて心著せず、諸魔の中に於いて心瞋らず。是の故に魔も便を得ざるなり。

復次に、菩薩は、深く忍波羅蜜〔多〕、慈三昧に入るが故に、一切の外惡も中傷すること能はず。所謂

謂水火刀兵等の世間の衆事は、資生の須ふる所なり。所謂治生の〔三二〕諧偶なり。種を蒔き果を樹ゑ、曠路に井を作り、客舍を安立し、事を理むるに、皆意の如くなるとを得。若し塔寺を造立して、大福徳を作さんと欲し、若くは大施を作し、若くは法を説いて衆生を教度せんと欲するに、皆意の如くなることを得、是の如き等の世間の衆事の、若くは大なる、若くは小なるもの、皆法の如くにして、意に隨ふことを得。何となれば是の菩薩は、世世に無量の福徳智慧の因緣を集むるを以てなり。

復次に、是の菩薩は般若波羅蜜「多」を行じ、一切法の中に於いて、心著せず、心著せざるが故に、結使薄く、結使薄きが故に、能く深厚の善根を生じ、深厚の善根を生ずるが故に、所願意の如し。

復次に、是の菩薩は、般若波羅蜜「多」を行ずるが故に、諸大天は皆是の菩薩を敬念し、其の名を讃歎稱揚す。諸の龍、鬼等も、諸天の稱説を聞いて、亦來りて其の事を助成す。是の故に世間の衆事は、皆意の如くなることを得。復次に、菩薩は諸佛の爲に念ぜられ、威徳を加へられて、皆意の如くなることを得。

問うて曰く、〔三三〕十方諸佛の心は等し、何を以てか、偏に是の菩薩を念ずるや。答へて曰く、是の菩薩は、智慧功徳大なるが故に、諸佛の心は平等なりと雖も、法として應に是の菩薩を念じ、以て餘人を勸進すべし。又是の菩薩は佛の智慧の氣分を得るが故なり。善惡を別知し、好人を賞念することは

〔三二〕諧偶は、二字ともにかなふの義なり。

〔三三〕第一五問、諸佛の心は等し、然るな何故に偏に是の菩薩を念ずるか。

佛に過ぎたるはなし。是の故に佛は念じたまふ。

復次に、佛は念じて、聲聞、辟支佛に墮せしむるを欲したまはざるが故なり。何となれば空・無相・無作に入つて、佛を念ずるを以ての故に墮落せざればなり。譬へば魚子の母の念ずれば、則ち生ずることを得、念ぜざれば、則ち壞するが如し。諸大天の擁護する者は、其の所行を失せしむることを欲せず、諸天は佛念に效ふが故なり。諸天あり、菩薩の般若波羅蜜「多」を行じて、都べて著する所なく、世樂を樂ます。但衆生を教化せんと欲するが故に、世間に住し、其の尊貴を知るが故に、有らゆる重罪の者を念ず。先世の重罪は應に地獄に入るべきも、般若波羅蜜「多」を行ずるを以ての故に、現世に輕く受く。譬へば〔三〕重囚の死すべきに、勢力ある者護れば、則ち鞭杖のみを受くるが如し。又王子の重罪を作すと雖も、輕罰を以て之を除くが如し、是れ王種の中に生ずるを以ての故なり。菩薩も亦是の如く、能く般若波羅蜜「多」を行じて、實の智慧を得るが故に、卽ち佛種の中に入りて生じ、佛種の中に生ずるが故に、重罪ありと雖も、云何が重く受けん。

復次に、譬へば鑪器の中空なるが故に、水に在りて能く浮び、中實なれば則ち沒するが如し。菩薩も亦是の如く、般若波羅蜜「多」を行じて、智慧の心虛なるが故に、重罪に沒せず、凡人は智慧なきが故に、重罪に沈沒す。復次に、佛は此の中に自ら因緣を說きたまへり。「五功德を得る所以の者は、

【三】罪死刑に値するものも、國王の師、又は勢力ある大臣等などの庇護するあれば、罪輕減せらるるが如しとの意味なり。此の譬喩は、彌蘭陀王問經にも出づ。

普ねく慈を用ゐて衆生に加ふるが故なり」と。

問うて曰く、〔三四〕先には般若波羅蜜「多」を行ずるが故に、五功徳を具すと言へり。今何を以てか、普ねく慈を用ゐて、衆生に加ふるが故にと言ふや。答へて曰く、能く無量の福を生ずることは、慈より過ぎたるはなし。是の慈は般若波羅蜜「多」に因りて生じて無量の利益を得。

復次に、惡魔も便を得ず、諸佛に念ぜられて、重罪を今世に輕く受くるは、是れ般若波羅蜜「多」の力なり。世間の衆事の欲する所、意に隨ひ、諸天の擁護する、是れ大慈の力なり。復次に、〔三五〕二種の緣あり、一には衆生、二には法なり。是の菩薩若し衆生を緣ずるは、則ち是れ慈心にして、若し法を緣ずるには、則ち是れ般若波羅蜜「多」を行ず。是の慈は般若波羅蜜「多」より生じ、般若波羅蜜「多」に隨順す。是の故に慈を說くも咎なし。

〔三四〕第一六問、先に菩薩は、五功徳を具すといひ、今普ねく慈を用ゐて、衆生に加ふといふは何故なるか。

〔三五〕二種の緣——衆生緣、法緣。

〔經〕復次に、舍利佛よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜「多」を行ずる時、疾かに諸の陀羅尼門、諸の三昧門を得、所生の處に常に諸佛に値ひたてまつり、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に佛を見たてまつることを離れず。舍利佛よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜「多」と相應すと名く。

〔論〕釋して曰く、陀羅尼、三昧門は先に說くが如し。疾かに得とは、福德の因緣の故に、心柔輭に、

深般若波羅蜜「多」を行ずるが故に、智慧の心利なり。是を以ての故に疾かに得。上に說くが如く、五功德の故に疾かに得。所生の處に、常に諸佛に値ひたてまつるとは、是の菩薩は諸佛の母なる般若波羅蜜「多」を除いて、其の餘の一切の衆事に皆愛著せず、是を以ての故に所生の處に在りて、常に諸佛に値ひたてまつる。人常に鬪諍を喜めば還活ながら地獄に生じ、復び刀杖を執つて、共に相害を加へ、婬欲多きが故に、常に胞胎を受け、又婬鳥と作り、瞋恚多きが故に、還つて毒獸・虵虺の屬に生ずるが如く、愚癡多き者は、燈蛾の火に赴き、地中に蟲の隱るる等の如し。是の諸の菩薩は、佛及び實相般若波羅蜜「多」を愛敬し、及び念佛三昧の業を修するが故に、所生の處に、常に諸佛に値ひたてまつるなり。

復次に、先に、菩薩の諸佛を見たてまつらんことを願ふ中に說くが如し。終に佛を見たてまつることを離れずとは、又人は一世に佛を見たてまつると雖も、更に復た値ひたてまつらず。毗婆尸佛の時、王師、婆羅門の如きは、佛及び僧を見ると雖も、而も惡口毀呰して言く、「此の人等は畜生の如し。(三六)好人を別たず、我を見て起たず」と。是の罪を以ての故に、九十一劫を經て畜生の中に墮せり。

復次に、深く佛を念ずるが故に終に佛を離れず、世世善く念佛三昧を修するが故に、菩薩の心を失

【三六】人は己より長上の仁に對しては、起立して敬意を表するを法とす。然り、これ特に印度社會の風儀なり。然るに佛僧等が婆羅門を見て、起立せざりしが故に、斯く言へるなり。蓋し佛僧は、婆羅門を己の長上なりと思惟せざりしならん。

せざるが故に、作して佛願を離れず。生じて佛世に在らんことを願ふが故に、佛に値ふの業因緣を種ゑ、常に相續して斷せざるが故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に佛を見たてまつることを離れざるなり。

問うて曰く、(三七)此は是れ果報の事なり、云何が般若波羅蜜「多」と相應すと說くや。答へて曰く、般若波羅蜜「多」に相應するが故に、佛に値ひたてまつるなり。或る時は果中に因を說くが故なり。相應に二種あり、(三八)一には心相應、二には菩薩の行に應ず。謂ゆる好處に生れて、諸佛に値遇したてまつり、常に法を聞いて、正憶念す。是を相應と名く。

續 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜「多」を行ずる時、是の念を作さず、「法と法と、若くは合し、若くは合せず、若くは等しく、若くは等しからざるあり」と。何となれば是の菩薩摩訶薩は、是の法と餘法と、若くは合し、若くは合せず、若くは等しく、若くは等しからざることを見ざればなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の、是の如く相應する、是を般若波羅蜜「多」と相應すと名く。

釋 釋して曰く、一切の法は、法と法と共に合する者あること無し。何となれば諸法は少分の合なきを以てなり。譬へば二指の四方あり、其の一方は合するも、三方は合せざるが如し。合せざるもの多きが故に、何を以てか名けて合せずと爲さざらん。

【三七】第一七問、果報の事を以て、般若波羅蜜多と相應すといふは何故なるか。

【三八】二種の相應——心相應と應菩薩行。

問うて曰く、〔三九〕合する處あるを以ての故に、名けて合すと爲す。云何が合せずと言ふや。答へて曰く、合處は指と爲さず、是れ指の分なり。但是れ指の分にして、更に指法なし。二指の相近づくを以ての故に、假に名けて合すと爲すも、更に合法なし。

復次に、色香味觸を總べて名けて指と爲す。但觸にのみ合する力あり、餘の三は合することなし。是を以ての故に指合すと言ふことを得ず。復次に、異類にして、處を同じくするが如きは、名けて合相と爲さず、そは相各異なれるが故なり。諸法も亦爾なり。地相は地中、水相は水中、火相は火中にあり。是の如く性異なれば、名けて合すと爲さず。是を以ての故に法と法と、合すること、有ることなしと言ふ。〔四〇〕合すること無きが故に、合せざることも無し。

等しとは、一切法は、一相なるが故に、等しと名くるなり。皆是れ有相、皆是れ無常相、皆是れ苦相、皆是れ空・無我の相、皆是れ不生不滅の相にして、事異なること無きを以ての故に、名けて等しと爲す。

等しからずとは、各各別相なるが故なり。色相、無色相、堅相、濕相の如し。是の如く、各異にして同じからざる、是を等しからずと名く。菩薩は等と不等とを見ず。何となれば一切の法は無なるが故に、自性空なるが故に法なきなり。法なきが故に見るべからず、見るべからざるが故に等、不等な

〔三九〕第一八問、合する處あるが故に合すと言ふ、然るを何故に不合といふか。

〔四〇〕縮藏には、「若合若不合」に作れり。

きなり。等と合とは、是れ習相應、不合と不等は、是れ不相應なり。

問うて曰く、〔四一〕何を以てか相應を説き竟りて、然る後に讃歎せざるや。答へて曰く、聽く者、厭懈す。是の故に佛は果報功徳を讃歎したまふ。〔そは〕聞く者、心に悦樂を得るが故なり。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、是の念を作さず、「我、當に疾かに法性を得、若くは得ざるべし」と。何となれば法性は得の相に非ざればなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜(多)と相應すと名く。

【論】釋して曰く、〔四二〕法性とは、諸法の實相なり。心中の無明、諸の〔四三〕結使を除き、清淨の實觀を以て、諸法の本性を得るを、名けて法性と爲す。性とは眞實に名く、衆生は邪觀を以ての故に縛せられ、正觀〔を以て〕の故に解かる。菩薩は是の念を作さず、「我、疾かに法性を得ん」と。何となれば法性は無相にしに遠近あることなければなり。亦、「我は久久しうして、當に得べし」と言はず。何となれば法性は遲きことなく、久しきこと無ければなり。法性の義は如なり。法性は實際の義の中に説くが如し。

【四一】第一九問、何故に相應を説き竟りて然る後讃歎せざるか。

【四二】法性の義解。

【四三】煩惱は人を束縛して、自在ならしめざるが故に結といひ、又人を驅使し、或は人に隨逐するが故に使といふ。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、法あり、法性を出す者を見ず。是の如く（四三）習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名く。

【論】釋して曰く、（四四）無明等の諸の煩惱、一切法中に入るが故に、諸法の自性を失し、自性を失するが故に、皆邪曲にして、正しからず。聖人は無明等を除却し、諸法の實性は還た明顯なることを得。譬へば陰雲は虛空の清淨性を覆ひ、陰雲を除けば、則ち虛空の清淨性現ずるが如し。若し法あり、無明入らざれば、是れ則ち法性を出す。但是の事は然らず。法ありて、無明を出す者なし。是の故に菩薩は、是の法の法性を出す者を見ず。譬へば衆流は皆海に歸するが如く、粟散の小王は皆轉輪聖王に屬するが如く、衆小の明は皆日に屬するが如し。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、是の念を作さず、「法性は諸法を分別す」と。是の如く習應する、是を般若波羅蜜（多）と相應すと名く。

【論】問うて曰く、（四五）何を以ての故に、「法性は諸法を分別す」と、是の念を作さざるや。答へて曰く、法性に著するが爲に、法性を貴ぶ。是の因緣を以て、諸の結使を生ず、是の故に是の念を作さず。問うて曰く、（四六）若し法性は空にして一相無相ならば、云何が諸法を分別するや。答へて曰く、是の

【四四】菩薩は法あり、法性を出す者あるを見ず。

【四五】第二〇問、「菩薩は何故に法性は諸法を分別す」との念を作さざるか。

【四六】第二一問、若し法性は空にして、一相無相ならば、云何が諸法を分別するか。

法性を得て、無明等の諸の煩惱を滅し、諸法實相を破すれば、然る後に心淸淨に、智慧明了にして諸法の實を知る。〔四七〕法性に隨ふ者を善と爲し、法性に隨はざる者を不善と爲す。婆蹉梵志の佛に問へるが如し。「世尊よ、天地の間に善惡好醜ありや不や」と。佛の言はく、「有り」と。婆蹉の言さく、「我は久しく佛に歸命したてまつれり、願はくは我が爲に善く説きたまへ」と。佛の言はく、「三種の惡と三種の善と、十種の惡と、十種の善とあり。謂ゆる、貪欲は是れ惡にして、貪を除けば是れ善なり。瞋恚と愚癡とは、是れ惡にして、恚と癡とを除けば、是れ善なり。殺生は是れ惡にして、殺生を除けば是れ善なり。乃至邪見は是れ惡にして、邪見を除けば是れ善なり。能く如實に、善惡を分別すれば是れ我が弟子にして、法性に入るを名けて得道と爲す」と。

【四七】善と不善との區別。

經 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、是の念を作さず、「是の法は能く法性を得、若くは得ず」と。何となれば是の菩薩は是の法の能く法性を得、若くは得ざることを用ふることを見ざればなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く。

論 釋して曰く、云何が法性を得、八聖道分を行じ、諸法實相を得るや。所謂涅槃は、是れ法性を得と名く。復次に、性を諸法實相と名け、法を般若波羅蜜〔多〕と名く。菩薩は是の念を作さず、「般若波羅蜜〔多〕を行じて、是の諸の法性を得ん」と。何となれば般若波羅蜜〔多〕、及び諸法の性、是の

二法は異なること無く、皆畢竟空なるが故に、云何が般若波羅蜜〔多〕を以て、法性に達することを得ん。

【経】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、法性と空と合せず、空と法性と合せず。是の如く習應する是を般若波羅蜜〔多〕と相應すと名く。

【論】釋して曰く、菩薩は法性は是れ空なりと觀ぜず、空は是れ法性なりと觀ぜず、空を行じて法性を得、法性を縁じて空を得。是を以ての故に異なること無し。何となれば、是の二は畢竟空なればなり。

【経】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、眼界は空と合せず、空は眼界と合せず、色界は空と合せず、空は色界と合せず、眼識界は空と合せず、空は眼識界と合せず、乃至意界は空と合せず、空は意界と合せず、法界は空と合せず、空は法界と合せず、意識界は空と合せず、空は意識界と合せず。是の故に、舍利弗よ、是の空と相應するを名けて、第一相應と爲す。

【論】釋して曰く、眼界は空と合せず、空は眼界と合せずとは、眼は是れ有、空は是れ無なり。空と有と云何が合せん。

復次に、菩薩は種種の因縁を分別して、是の眼を散滅するに、眼は則ち空なり。空にして眼の名なく、本に因るが故に有り、眼は空なり、空も亦無分別なり。是の眼の空は是れ眼の空に非ず、是れ則ち眼と空と合せず、又空は眼の因縁より生ぜず、何となれば是の二法は本自ら空なればなり。乃至意識界も亦た是の如し。

問うて曰く、(四八)此の中何を以てか、五衆等の諸法を說かずして、但十八界を說くや。答へて曰く、應に說くべくして、或る時は誦寫する者忘失す。

復有人の言く、若し十八界を說けば則ち一切法を攝す。有る衆生は、心色の中に於いて錯り、心法の中に錯らず、應に十八界を開いて度することを得べし。是の故に但十八界を說くなり。

問うて曰く、(四九)何を以てか名けて、第一習相應と爲すや。答へて曰く、空は是れ十方諸佛の深奧の藏なり、唯一の涅槃門にして、更に餘門なく、能く諸の邪見戲論を破す。是の相應は壞すべからず、破すべからず、是の故に名けて第一と爲す。

【四八】第二二問、五蘊十二處等を說かずして、但十八界を說く理由如何。

【四九】第二三問、第一習相應と名くる理由如何。

經 復次に、佛は自ら第一因緣を說きたまふ。所謂、舍利弗よ、空を行ずる菩薩摩訶薩は、聲聞辟支佛地に墮せず、能く佛土を浄め、衆生を成就し、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗よ、諸の相應中、般若波羅蜜〔多〕相應を最第一、最尊、最勝と

最妙と爲し、上あることなしと名す。何となれば是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）相應、謂ゆる空、無相、無作を行ずればなり。當に是の菩薩は記を受くるが如くして異なることなく、若くは近く記を受くることを知るべし。舍利弗よ、菩薩摩訶薩、是の如く相應する者は、能く無量阿僧祇の衆生の爲に、益を作すこと厚し。是の菩薩摩訶薩は、亦是の念を作さず、「我は般若波羅蜜（多）と相應す、諸佛は當に我に記を授けたまふべく、我は當に近く記を受くべし。我は當に佛土を淨むべし、我は阿耨多羅三藐三菩提を得て、當に法輪を轉ずべし」と。何となれば是の菩薩摩訶薩は、法あつて法性を出すことを見ず、亦是の法の般若波羅蜜（多）を行ずるを見ず。亦是の法の諸佛の記を授くることを見ず。亦法あつて阿耨多羅三藐三菩提を得ることを見ず。何となれば菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、我相、衆生相、乃至知者・見者相を生ぜず。何となれば衆生は畢竟不生不滅なればなり。衆生は生あることなく、滅あることなく、若くは法あり、生相、滅相あることなし。云何が法あつて、當に般若波羅蜜（多）を行ずべき。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、衆生を見ざるが故に、般若波羅蜜（多）を行ずることを爲す。衆生は受けざるが故に、衆生は空にして、諸の衆生は不可得なるが故に、衆生は離るるが故に、般若波羅蜜（多）を行ずることを爲す。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は諸の相應の中に於いて、最第一相應と爲す。所謂る、空相應なり。是の空相應は、餘の相應に勝れたり。菩薩摩訶薩は、是の如き空を習うて、能く大慈大悲を生ず。菩薩摩訶薩は、是の相應を習うて、慳心を生ぜず、犯戒の心を生ぜず、瞋心を生ぜず、懈怠心を生ぜず、亂心を生ぜず、無智心を生ぜざるなり。

【五二】二種の空相應――但空と不可得空。

論 釋して曰く、聲聞辟支佛地に墮せずとは、（五〇）空相應に二種あり、一には但空、二には不可得空

なり。但空を行ずれば、聲聞辟支佛地に墮し、不可得空を行ずれば、空も亦不可得にして、則ち處として墮すべきなし。復【五二】二種の空あり。一には無方便空にして、二には有方便空にして、則ち墮する所なく、直に阿耨多羅三藐三菩提に至る。

復次に、本深き悲心あつて空に入れば、則ち墮せず、大悲心なければ、則ち墮す。是の如き等の因緣〔を以て〕二地に墮せず。

能く佛の世界を淨め、衆生を成就すとは、菩薩は是の空相應の中に住して、復た礙する所なく、衆生を教化して、十善道及び諸の善法を行ぜしむ。衆生の善法を行ずる因緣を以ての故に佛土淸淨に、不殺生を以ての故に壽命長く、劫せず盜せざるを以ての故に佛土豐樂なり。應に念ずれば則ち至るべし。是の如き等の衆生、善法を行ずれば則ち佛土莊嚴なり。

問うて曰く、【五三】衆生を教化すれば則ち佛土淨し、何を以てか別に說くや。答へて曰く、衆生は善を行ずと雖も、要らず菩薩の行願、廻向の方便力の因緣を須ふるが故に、佛土淸淨なり。牛力の車を挽くに、要らず御者を須ふれば、乃ち所至の處に到ることを得るが如し。是を以ての故に別に說けり。

疾かに得とは、是の空を行ずるに、相應して障礙あること無ければ、則ち能く疾かに、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。

【五二】二種の空――無方便空と有方便空。

【五三】第二四問、衆生を教化すれば佛土自ら淨し、今それ之を別說するは何故なるか。

問うて曰く、(五三)先には空相應を說き、今は般若波羅蜜〔多〕相應を說き、後には無相無作相應を說けり、何の差別ありや。答へて曰く、(五四)二種の空あり。一には般若空、二には非般若空なり。先に空相應を言ふに、聽く者疑つて、一切空と謂ふが故に、是の般若波羅蜜〔多〕空を說く。

復人あり、疑つて但空は第一にして、無相無作は第一に非ざらんかと言ふ。是の故に空無相無作相應は、而も是れ第一なりと說く。何となれば空なれば、則ち是れ無相なり、若し無相なれば、則ち是れ無作なり。是の如く、一の名字にして、別を爲すことなく、最上なるが故に、尊と言ひ、有を破するが故に、勝と言ひ、是の相應を得て、復た餘を樂まざる、是を最妙と爲す。一切衆生の中、佛を無上と爲し、一切法の中にて、涅槃は無上に、一切有爲の法の中にて、善法は習相應を無上と爲すが如し。餘の義は讃般若品の中に說くが如し。

問うて曰く、(五五)若し能く是の如く空想應を行ずれば、便ち應に受記すべし。云何が記を受くるが如くにして異なることなく、若くは近く記を受くと言ふや。答へて曰く、是の菩薩は新に道を行じ、肉身に未だ無生法忍を得ず。未だ般舟三昧を得ず。但智慧力を以ての故に、能く是の如く分別して深く空に入る。佛は其の空に入るの功德を讃したまふが故に、記を受くるが如

【五三】第二五問、先には空相應を說き、今は六度相應を說き、後に無相無作相應を說く。何の別因ありや。

【五四】二種の空——般若空と非般若空。

【五五】第二六問、若し能く是の如く、空相應を行ずれば、便ち應に受記すべし。云何が記を受くるが如くにして異なることなく、若くは近く記を受くと言ふか。

くにして異なること無しと言ふ。(五六)三種の菩薩の受記を得る者あり、記を受くるが如き者、近く記を受くる者、記を受くることを得る者なり。阿毘跋致品中に説くが如く、二種は此の中に説くが如し。

問うて曰く、(五七)此の如く相應は第一無上なりと説く、云何が受記を與へざるや。答へて曰く、餘の功德、方便、禪定等未だ集らず、但智慧のみ有り、是の故に未だ受記を與へず。復次に、是の菩薩は復た利根にして智慧ありと雖も、餘の功德未だ熟せざるが故に、現前の受記を聞きて或は憍慢を生ず。是の故に未だ受記を與へず。讃歎する所以は以て其の心を勸進せんと欲す。利根なる者は、是の空相應を行じ、記を受くるが如くにして、異なること無く、鈍根なる者は、是の空相應を行じて若くは近く記を受け、衆生をして常に安隱に涅槃を得せしむ。是を利益と名く。復(五八)二種の利益あり、一には苦を離れ、二には樂を與ふ。復た二種あり、衆生の身苦と心苦とを滅す。復(五九)三種あり、天樂と人樂と涅槃樂となり。復た三種あり、三界を離れて三乘に入る。是の如く、菩薩摩訶薩は、無量阿僧祇に衆生を利益す。衆生の義は先に説くが如し。世人は大功勳あれば、則ち憍心を生じ、其の報賞を求む。報を求むるを以ての故に、則ち不淨を爲す。菩薩は則ち然らず。般若波羅蜜「多」と相應して、無量の衆生を利益すと雖も、我心なく、憍慢なきが故に功報を求めず、地の物を利する功重しと雖も、其の報を

【五六】菩薩に三種の受記者あり。
【五七】第二七問、此の如く相應は第一無上なりと説く、云何が受記を與へざるか。
【五八】二種の利益——離苦と與樂。
【五九】三種の樂——天樂、人樂涅槃樂。

求めざるが如し。是を以ての故に是の菩薩は是の念を作さず、「我は般若と相應す、諸佛は當に我に記を授くべし、若くは近く記を受けん。我は當に佛土を淨め、無上道を得、法輪を轉ずべし」と。法輪の義は先に說くが如し。

問うて曰く、〔四〇〕何等の法か法性を出すや。答へて曰く、此の中に佛答へたまふ、般若波羅蜜〔多〕を行ずる者なり。般若波羅蜜〔多〕を行ずる者は卽ち是れ菩薩なり。知者、見者は、卽ち是れ衆生なり。法性の中には、衆生、總じて法性と爲る。是を以ての故に、菩薩は自ら高心を生ぜず、衆生に從つて恩分を求めず、諸佛の受記を與へたまふことを見ず。菩薩の空なるが如く、佛も亦是の如し。行者の空なるが如く、阿耨多羅三藐三菩提を得る者も亦空なり。何となれば佛、自ら說きたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行じて衆生相、乃至知者見者相を生ぜず」と。菩薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずるすら、尙は法相を生ぜず、何に況んや衆生相をや。何となれば佛は自ら因緣を說きたまはく、「是の衆生は畢竟不生なり。不生なるが故に不滅なり」と。若し法、不生不滅なれば、卽ち是れ法性の相なり。法性は卽ち是れ般若波羅蜜〔多〕なり。云何が般若波羅蜜〔多〕なる。般若波羅蜜〔多〕を行ずるなり。菩薩は、衆生を受けずとは、神を受けざるなり。但虛妄〔を以て〕我を計するのみ。衆生は空なりとは、衆生の法は所有なきが故なり。衆生は不可得なりとは、實智を以て求索するに、不可得なるが故なり。衆生は離るとは、一切法

〔四〇〕第二八問、法性を出す者は何ぞや。

は、自相を離るるが故なり。一切は自相を離るとは、火の熱相を離るる等の如し。相空の中に廣く説くが如し。第一相應にして餘の相應に勝るとは、上に説くが如し。菩薩は是の衆生空、法空を行じ、深く空相應に入り、本願を憶うて衆生を度し、衆生の狂惑顛倒して、空事の中に於て、種種に著を生ずるを見て、卽ち大悲心を生じ、「我は是の事を知れりと雖も、餘者は知らず」と。教化を以ての故に大慈大悲を生じ、亦た能く常に六波羅蜜「多」の法を破することを生ぜず。何となれば初發心の菩薩は六波羅蜜「多」を行ずるに、六惡雜行を以ての故に、六波羅蜜「多」增長せず、增長せざるが故に、疾かに道を得ず。今は諸法の相を知りて、是の六惡法の根本を拔く。何となれば、菩薩は布施を善と爲し、慳心は不善なり、能く餓鬼、貧窮の中に墮すと知り、慳貪は是の如しと知り、自ら其の身を惜みて世間の樂に著するが故に、還た慳心を生ず、是の菩薩は輕物を能く施し、重物を能くせず。外物を能くし、内物を能くせず。我に著するを以て、受者に著し、相を取るを以て、財物に著す。是を以ての故に、檀波羅蜜を破す。施す所ありと雖も、而も清淨ならず。是の菩薩は空相應を行ずるが故に、我を見ず、亦た世間の樂を見ず。云何ぞ著を生じて、檀波羅蜜「多」を生ぜんや。

問うて曰く、(六二)若し我を見ず、世間の樂を見ざるが故に破せずんば、亦た檀を見ざるべし、云何んが布施を行ずるや。答へて曰く、是の菩薩は布施を見ずと雖も、清淨の空心を以て布施して、是の念

【六二】第二九問、若し我を見ず、世間の樂を見ざるが故に破せずんば、亦檀を見ざるべし。云何が布施を行ずるや。

を作さく、「是の布施は、空にして所有なし。衆生の須ふるが故に施與す」と。小兒は土を以て、金銀と爲せども、長者は則ち是を金銀と見ざるが如し。便ち意に隨つて與ふるも、竟に與ふる所なし。餘の五法も亦た是の如し。是を以ての故に。同じく空にして慳を破すと雖も、而も檀を破せず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は是の空相應中に住して、能く常に是の六惡心を生せず」と。

巻の第三十八

往生品第四の上を釋す。

經 舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕を行じて、能く是の如く相應を習ふ者は、何處より來りて終に此の間に生じ、此の間より終に當に何處に生ずべきや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕を行じて、能く是の如く相應を習ふ者は、或は他方の佛國より來りて、此の間に生じ、或は兜率天上より來りて此の間に生じ、或は人道中より來りて、此の間に生す。舍利弗よ、他方の佛國より來る者は、疾かに般若波羅蜜〔多〕と相應し、般若波羅蜜〔多〕と相應するが故に、身を捨て來りて、此の間に生じ諸の深妙の法皆現在前し、後に還た般若波羅蜜〔多〕と相應し、所生の處に在りて、常に諸佛に値ひたてまつる。舍利弗よ、一生補處の菩薩あり、兜率天上より、終に來りて此の間に生ず。是の菩薩は、六波羅蜜〔多〕を失せず、所生の處に隨つて、一切の陀羅尼門、諸の三昧門、疾かに現在前す。舍利弗よ、菩薩の、人中に命終して、還た人中に生ずる者あり、阿毗跋致を除く。是の菩薩は根鈍にして、疾かに般若波羅蜜〔多〕と相應すること能はず、諸の陀羅尼門、三昧門は能く疾かに現在前せず」と。

論 問うて曰く、〔一〕是の般若波羅蜜〔多〕中には、衆生の畢竟不可得なると上品に說けるが如し、舍

〔一〕第一問。舍利弗は已に衆生の畢竟不可得なることを知れり。今それ此の衆生の何所より來り、何所に去るやと問へるは何故なるか。

利弗は、一切衆生は不可得にして、壽者、命者、乃至知者見者等、衆生の諸の異なれる名字は皆空にして實なきことを知れり。此の中何を以てか、何所より來り、去りて何所に至り止まるやと問ふや。衆生の異名は、即ち是れ菩薩なり、衆生無なるが故に、菩薩も亦た無なり。又此の經の中に、菩薩は但名字のみありて、實法あること無しと說けり。今舍利弗は、何を以て、此の問を作すや。答へて曰く、（三）佛法中に二諦あり、一には世諦、二には第一義諦なり、世諦の爲の故に、衆生有りと說き、第一義諦の爲の故に、衆生は所有無しと說く。復た二種あり、有は名字の相を知れると、有は名字の相を知らざるとなり。譬へば軍の立てたる密號を知る者あると、知らざる者あるとの如し。復た二種あり、有は初て習ひ行じ、有は久しく習ひ行ず。著する者あり、著せざる者あり。他意を知るあり、他意を知らざる者あり。名字の相を知らざる「者」初めて習ひ行ずる〔者〕、著する者、他意を知らざる者の爲の故に、衆生無しと說き、名字の相を知る〔者〕、久しく習ひ行ずる〔者〕、著せざる〔者〕、他意を知る者の爲の故に、說いて衆生有りと言ふ。舍利弗は、天眼を以て明かに六道の衆生の生死善惡を見、此に於いて疑なく、但他方の無量阿僧祇の世界より、諸の菩薩の來れる者を知らざるが故に問へるのみ。有る諸の大菩薩は此の間より、終に他方の無量阿僧祇の佛國に生る。舍利弗は、天眼もて見ざる所なるが故に問ふ。

【三】佛法の二諦――世諦と第一義諦。

復次に、聲聞の人あり、菩薩の六波羅蜜「多」を行じ、久しく生死の中に住し、漏未た盡くさざるが

故に、種種の智慧、（三）内外の經書を集め、而も實際を證せず、未だ生老病死を免れざるを見て、愍んで而も之を輕んじて言はく、「此等は命終せんに、三毒未だ盡きざるを以ての故に、當に何處に墮すべき」と。佛、說き給はく、「諸の凡夫の人は、常に（四）三惡道の門を開き、（五）三善道に於て客と爲り、三惡處に於て家を爲す。三毒の力強く、過去世無量劫の罪業を積集して、涅槃を取らず、將に苦を受けんとす、甚だ之を愍むべし。是の如き等の小乘の人は、是の菩薩を輕んじ愍む」と。舍利弗は、一切の聲聞の中に於て、第一の大法將たり。是の事あるを知りて、衆生をして菩薩に於いて敬心を起さしめんと欲するが故に問へば、佛は三事を以つて答へたまへり。一には他方の佛國より來り生ず、二には兜率天上より來る、三には人道中より來ると。

問うて曰く、（六）如し他方の佛國より來る者は、遠きを以ての故に、舍利弗は知らざらんも、兜率天上、人道中より來る者を、何を以てか知らざるや。答へて曰く、舍利弗は他方の佛國より來る者を知らざるが故に問へるに、佛爲に所應の如く分別して、三處より來るありと答へたまへり。

問うて曰く、（七）世間に六道あり、何を以ての故に、天中に於いて兜率天より來るを別說し、人道の

【三】内外の經書とは、内は佛教の聖典、外は外道の經籍をいふ。

【四】三惡道とは、地獄道と、餓鬼道と、畜生道となり。

【五】三善道とは、阿修羅道と、人間道と、天上道となり。

【六】第二問、舍利弗が遠き佛國より來れる者を知らざるは可なり、兜率天及び人道中より來れるを知らざるは何故なるか。

【七】第三問、世間に六道あるに、天道のみを別說し、人道中に他方の佛國より來るを分別せず、亦天道と人道とを分別せざる理由如何。

中に處所の、他方の佛國より來る者を分別せず、亦た天道と、人道とを分別せざるや。答へて曰く、六趣中の三は是れ惡道なり。惡道の中より來るは、苦を受くる因緣〔を以て〕、心鈍なるが故に、道を得るに任へず、是の故に說かざるなり。

問うて曰く、〔八〕三惡道中より來るも、亦た道を得る者あり。舍利弗の大弟子の牛足比丘の如きは、五百世、牛の中に生じ、末後に人身を得、足は猶ほ牛に似たるも、而も阿羅漢道を得たり。復た〔九〕摩偸婆尸他比丘あり、五百世「のあひだ」、獼猴の中に生じ、末後に人身を得、三明六通の阿羅漢を得たるすら、猶ほ跳擲を好む、餘習あるを以ての故なり。是の如き等は皆道を得。何を以てか、〔道を得るに〕任へずと言ふや。答へて曰く、得る者ありと雖も、少くして言ふに足らず。又此の人は先世に深く涅槃の善根を種ゑ、小しく謬錯あるが故に、惡道の中に墮するも、罪を償ふこと既に畢り、涅槃の善根熟するが故に、道果を成ずることを得。此の中には聲聞道を說かず、但阿耨多羅三藐三菩提を得るが爲に、前身と後身と次第す。譬へば垢心起りてより、次第に無漏に入るを得ず、中間には必ず善の有漏心あるが如し。無漏心貴きを以ての故に、三惡道より出づるも〔道を得るに〕任へず、次第に阿耨多羅三藐三菩提心を得と言ふ。天人、阿修羅は則ち然らず、下の三天は結使利にして深く、上の二天は結使深くして利ならず。兜率天は結使深からず利ならず。何となれば常に菩薩あり

〔八〕第四問、三惡道中より來れる者も、亦道を得るは何故なるか。
〔九〕摩偸婆尸他（原音不詳）

て說法するを以てなり。是の故に餘處を說かず。或は有ること少きが故に說かず。色界の諸天の得道せる者は、復た來下せず、未だ得道せざる者は、禪味に樂著するが故に下らず、味に著するを以ての故に、智慧も亦た鈍なり。是の故に說かず。阿脩羅は、下の二天と同じきが故に說かず。他方の佛國より來る者は、諸佛の前より是の間に來り生じ、諸根猛利なり、何となれば無量阿僧祇劫の罪を除くが故なり。又諸佛に遇ひたてまつりて心に隨つて敎導せらるるが故なり。刀の好石を得れば則ち利なるが如し。又常に聞いて誦し、正しく般若波羅蜜「多」を憶念するが故に利なり。是の如き等の因緣を以て、則ち菩薩の心は利なり。人中より來る者は、此の間の佛弟子なり。般若波羅蜜「多」を聞き、諸の功德を集め、身を捨て、還た是の間に生じ、異國土に於いて、佛あること無しと雖も、佛法に値遇して、聽受し、書寫し、正憶念し、力の多少に隨つて、福德智慧を修す。是の人は諸根鈍なりと雖も、般若波羅蜜「多」を受くるに堪へたり。現在の佛を見たてまつらざるを以ての故に心鈍なるのみ。他方の佛國より來る者は、利根なるが故に、般若波羅蜜「多」を修行して、疾かに相應することを得。相應するを以つての故に、常に諸佛に値ひたてまつれり。佛に値ひたてまつるの因緣は、先に說くが如し。

【一〇】第五問、兜率天上を一生補處といひ、二生三生といはざる理由如何。

問うて曰く、〔一〇〕兜率天上は、何を以てか一生補處を說き、二生三生を說かざるや。答へて曰く、人身は罪結煩惱の處る所なり。唯大菩薩のみは之に處するも、則ち染累なし。鵝は水に入るも、水に濕

ほはしめざるが如し。是の如く、菩薩は一切世間の法に能く著せざる所なり。何となれば佛は自ら因緣を說きたまはく、「六波羅蜜多、諸の陀羅尼門、諸の三昧門を失せず、疾かに現在前す。是の菩薩は是の世界に於て、應に衆生を利益すべし」と。其餘の菩薩は十方に分布す。譬へば大智慧の人已に一處に在れば、其の餘の大智は則ち異處に至るが如し。是の故に說かず。復次に、有人の言く、但大のみを說けば小を限らずと。

復次に、餘天中より來り生ずる者は、餘處に當に廣く說くべし。人中に死し人中に生ずる者は、上の二處に如かず。何となれば人身は、地大多きを以ての故に、身重く心鈍く、心心數法は身の强弱に隨ふを以ての故なり、又諸業の結使は、因緣生なるが故なり。彼の二處より來る者は、是れ法身の菩薩なり、身を變すること無量にして、以て衆生を度す、故に來りて是の間に生ず。人道中の者は皆是れ肉身なり。

問うて曰く、二阿毘跋致の菩薩は結業を以て身を受けず、何を以てか人道の中に說くや。答へて曰く、此の間に來り生じ、阿毘跋致を得て、未だ肉身を捨てざるが故に、鈍根を以ての故に、諸の陀羅尼、三昧門、疾かに現在前せず、疾かに現在前せざるが故に、疾かに般若と相應せざるなり。

【二】第六問、不退轉の菩薩は、結業を以て身を受けず、人道の中に說くは何故なるか。

【四】舍利弗よ、汝が問ふ所に、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多と相應せば、此の間より、終に當に何處に生ずべき者ぞと。舍利弗

よ、此の菩薩摩訶薩は一佛國より一佛國に至り、常に諸佛に値ひたてまつりて、終に佛を離れたてまつらず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、方便を以てせずして、初禪に入り乃至第四禪も、亦た六波羅蜜(多)を行ず。是の菩薩摩訶薩は、禪を得るが故に、長壽天に生じ、彼の壽の終るに隨つて、來りて是の閒に生じ、人身を得、諸佛に値ひたてまつる。是の菩薩の諸根は利ならず、舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初禪乃至第四禪に入り、亦た般若波羅蜜(多)を行じ、方便を以てせざるが故に、諸禪を捨てて欲界に生ず。是の菩薩の諸根も亦た鈍なり、舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初禪乃至第四禪に入り、慈心乃至捨に入り、虛空處乃至非有想非無想處に入り、四念處乃至八聖道分を修し、十力乃至大慈大悲を行ず。是の菩薩は方便力を用ゐて、禪に隨つて生ぜず。無量心に隨つて生ぜず、四無色定に隨つて生ぜず、所有る佛處に在りて中に於いて生じ、常に般若波羅蜜(多)の行を離れず、是の如き菩薩は賢劫中に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

【三】第七問、舍利弗が前世後世を合して問へるに、佛は何故に前世中に三種を答へ、後世中に廣く分別し給ひしか。

講 問うて曰く。(三)舍利弗は前世と後世を合して問へり。佛は何を以ての故に前世中に三種を答へ、後世中に廣く分別し給ひしや。答へて曰く、人は肉眼を以て、過去未來を見ざるが故に邪疑を生じ、二處を疑ふと雖も。而も未來世に、當に受くべきが故に廣く分別せり。譬へば已に滅せる火は、復た救ふことを求めず。但多く方便して未來の火を防ぐが如く、又病を治するに、已に滅せる病は、復た治を加へず。但將に生ずべき病を治するが如し。

復次に、佛は無量の辯才を自ら恣まにし、舍利弗の問ふ所は少しと雖も、佛は廣く其の爲に說き給へり。問は般若波羅蜜(多)と相應するの一事なれども、而も佛は種種に分別したまへるが如し。貧

者の、大富にして施を好む者より乞ふに、乞ふ所は少しと雖も、與ふる所は甚だ多きが如し。佛も亦た是の如く。無量の無漏の佛法を具足し、富あり、大慈悲を以て、好んで施與を行じたまふ。因りて舍利弗は少しく問へるが故に、佛は大衆の爲に、廣く分別して說きたまへり。

復次に、是の般若波羅蜜「多」の中の、種種の因緣譬喩は多く空法を說く。新發意の者あり、空相を取りて、是の空法に著し、生死の業因緣の中に於いて疑を生ず、「若し一切法は畢竟空ならば、來ること無く、去ること無く、出づること無く、入ること無きの相なり。云何が死して、而も生ずること有らん。現在、眼に見る法すら、尙ほ有るべからず。何に況んや、死して後、餘處に生ぜんことは、見る可らずして、而も有らんや」と。是の如き等の種種の邪疑、顚倒の心を斷ずることを爲す。是の故に佛は種種の因緣「を以て」、廣く死あり生あることを說きたまへり。

問うて曰く、（三）死生の因緣あることなし。何となれば人は死して滅に歸すればなり。（四）滅に三種あり。一には火に燒かれて灰と爲り、二には蟲に食はれて糞と爲り、三には終に土に歸す。今は但其滅を見るのみにして、更に出づる者ありて、後身を受くるを見ず。見ざるを以ての故に、則ち無と爲すことを知る。答へて曰く、（五）若し汝は身滅して便ち無なりと謂はば、云何が衆生の、先世に習ふ所の

【三】第八問、人は死して滅無に歸す、如何ぞ生死の因緣あらんや。
【四】三種の滅を擧ぐ——灰、糞、土。
【五】斷滅の見を破し、三毒あることを明す。

憂喜怖畏等あらんや。小兒の生るる時に、或は啼き、或は笑ふが如き、先に憂喜を習ふが故に、今人の教ふること無くして、而も憂喜續生す。又犢子は生れながらにして、乳に趣くことを知り、猪羊の屬は、其の生るること未だ幾ばくならざるに、便ち牝牡の合あることを知るが如し。子は父母を同うするも、好醜・貧富・聰明・闇鈍、各各不同なり。若し先世の因緣なくんば、異なること有るべからず。是の如き等の、種種の因緣「を以て」、後世あることを知る。又汝は先に、別に去る者あることを見ずと言へり。人身中には、獨り眼根のみ能く見るにあらず。身中の六情は、各所知あり、法あり。聞くべく、嗅ぐべく、味ふべく、觸るべく、知るべき者あり。聞くべき法すら尚ほ見るべからず、何に況んや知るべき者をや。生あり、死ある法も、亦た見るべく、亦た知るべし。汝は肉眼の故に見ざるなり。(一六)天眼の者は了了に能く見、人の一房より一房に出入するを見るが如く、此の身を捨てて、後身に至るも亦た是の如し。若し肉眼「を以て」能く見ば、何ぞ天眼を求むることを用ゐん。若し爾らば、天眼と肉眼、愚と聖とは異なること無けん。汝は畜生に同ずる見を以て、何ぞ能く後世の知るべき者を見ん。人の死生の如きは、來去する者なしと雖も、而も煩惱盡きざるが故に、身情意に於いて、相續して更に身情意を生ず。身情意の造業は亦後世に至らざるも、而も是の因緣に從って、更に生じて後世の果報を受く。譬へば、乳中に毒を著けんに、乳變じて酪と爲り、酪變じて酥と爲る。乳は酪酥に非ず、酪酥は乳に

【一六】天眼の人は生死を見ること、人の一房より一房に入るを見るが如し。

非ず、乳は酪に變ずと雖も、而も皆毒あるが如し。此の身も亦た是の如く、今世の五衆の因緣の故に更に後世を生じ、五衆の行業相續して異ならざるが故に、而も果報を受く。又冬木は未だ華葉果實あらずと雖も、時節會すれば、則ち次第に而も出づるが如し。是の如き因緣あるが故に、死生あることを知る。

復次に、現世に(一七)宿命を知る者あり、人の夢に行きて披憶し、睡臥覺め已りて、經由する所を憶するが如し。又一切の聖人、內外の經書は皆後世を說けり。

復次に、現世に不善法を動發して過重く、瞋恚煩惱を生じ、憂ひ悔いて內に惱むが故に、身は卽ち枯悴し、顏色悅ばず。惡不善法の害を受くること是の如し。何に況んや、身業口業を起こさんをや。若し善法、淨信業の因緣を生ずれば、心淸淨にして、如實の智慧を得、心則ち歡悅して身に輕軟を得、顏色和悅す。苦樂の因緣あるを以ての故に善不善あり、今定んで善不善あるが故に、當に必ず後世あることを知るべし。但衆生の肉眼は見ず、智慧薄きが故に而も邪疑を生じ、福事を修すと雖も所作淺薄なり。譬へば藥師の王の爲に病を療じ、王は密に爲に宅を起こすに、而も藥師は知らず。便に歸りて之を見、乃ち悔を意に加へず、力を盡くして、王を治するが如し。

復次に、聖人は今現在の事を說くに、實に信ずべきが故に、後世の事を說くも亦皆信ずべし。人の

【一七】宿命とは、宿世の生命生活なり。

夜、險道を行くに、導師手を授けんに、信ずべしと知るが故に、則便ち隨逐するが如く比智及び聖人の語〔を以て〕定んで後世あることを知るべし。汝は肉眼なり。重罪にして、比智薄きを以ての故に、又天眼なし。旣に自ら智なく、又聖語を信せず、云何が後世を知ることを得ん。

復次に、〔一八〕佛法の中には、諸法は畢竟空にして亦た斷滅せず。生死相續すと雖も、亦た是れ常ならず、無量阿僧祇劫の業因緣は過ぎ去ると雖も、亦た能く果報を生じて滅せず、是を微妙にして知り難しと爲す。若し諸法は都べて空ならば、〔一九〕此品中に往生を說くべからず、何ぞ智あらん者、前後相違せん。若し死生の相は實有ならば、云何が諸法は畢竟空なりと言はん。但諸法中の愛著、邪見、顚倒を除かんが爲の故に畢竟空と說く。後世を破せんが爲の故に說くにあらず。汝は天眼なきが故に後世を疑ひ、自ら罪惡に陷いらんと欲す。是の罪業の因緣を遮せんが故に、種種に往生を說く。佛法は有に著せず、無に著せず、有無にも亦た著せず、非有非無にも亦た著せず、不著にも亦た著せざるなり。是の如きの人は、則ち難を容れず。譬へば刀を以て、空を破せんに、終に傷くる所なきが如し、衆生の爲の故に、緣に隨つて說法するも、自ら著する所なし、是を以ての故に、中論の中に說く。

〔二〇〕「一切の諸法は實なり、一切の法は虛妄なり、諸法は實にして亦た虛なり、實に非ず亦た虛に

〔一八〕畢竟空は執著を破せんが爲にして、後世を破せんが爲めにあらず。
〔一九〕往生を說く理由。
〔二〇〕中觀論涅槃品の偈。

非ず。

涅槃の際を眞と爲せば、世間の際も亦た眞なり、涅槃と世［間］と別なし、小異も得べからず。」是を畢竟空の相と爲す。畢竟空は生死の業因緣を遮せず、是の故に往生を說くなり。

問うて曰く、〔三〕若し般若波羅蜜［多］は一相、所謂る無相ならば、云何が般若と相應して、一佛國より一佛國に至り、常に諸佛に値ひたてまつるや。答へて曰く、般若波羅蜜［多］は一切法を攝す。譬へば大海の如し。是を以ての故に難を作すべからず。

復次に、汝は自ら般若波羅蜜［多］は一相無相なりと說けり。若し無相ならば云何が難あるや。汝は則ち無相中に相を取れり。是の事は然らず。復次に、般若波羅蜜［多］に因るが故に、念佛三昧等の諸善法を行じ、生れて諸佛に値ひたてまつるなり。

復次に、般若波羅蜜［多］を行ずる者は深く大悲に入ること、慈父の子を見るに、直する所の物なきが爲の故に死するも、父甚だ之を愍むが如し。此の兒は但だ癡騃の爲の故に死するのみ。諸佛も亦是の如く、諸法は畢竟空にして、不可得なりと知りたまふも、而も衆生は知らず、衆生は知らざるが故に空法の中に於て染著し、著の因緣の故に大地獄に墮す、是の故に深く大悲に入り、大慈悲の因緣を以ての故に、無量の福德を得。無量の福德を得るが故に、諸佛に生れ値ひたてまつり、一佛國より一佛

〔三〕第九問、若し智度は一相ならば、云何ぞ般若と相應して、一佛國より一佛國に至り、常に諸佛に値ひ上つるや。

國に至る。是の菩薩は此より死して、彼の間に生じ、彼の間に死して復た彼の間に至りて生じ、是の如く乃ち佛を得るに至るまで終に佛を離れたてまつらず。譬へば有福の人の一大會より一大會に至るが如し。或は是の間に死して彼の間に生ずるあり。彼に於いて五神通力を以ての故に、一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養したてまつり、衆生を度脫す、是れ初の菩薩なり、佛國とは、十方如恆河沙等の諸の三千大千世界、是を一佛土と名く。諸佛の神力は能く普遍に自在無礙なりと雖も、衆生の度せらるる者は局あり。諸佛は現に在すとは、佛は現に其の佛國土中に在す者なり。第二の菩薩は、方便なくして、初禪に入り、乃至、六波羅蜜「多」を行ず。〔三〕方便なしとは、初禪に入るとき、衆生を念ぜず、住する時も、起つ時も、亦た衆生を念ぜず。但禪味に著し、初禪と和合して般若波羅蜜「多」を行ずると能はず。是の菩薩は、慈悲心薄きが故に、功德薄少なり。功德薄少なるが故に、初禪の果報の爲に牽かれて、長壽の天に生ず。

復次に、初禪の福德を以て、衆生に與へ、共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すること能はず。是の如き等の無量は、方便なきの義なり。〔三〕長壽の天とは、非有想非無想處にして、壽八萬大劫なり。或は有人の言く、「一切の無色定を通じて長壽の天と名く。無形にして、化すべからざるを以ての故に、得道に任へず。常に是れ凡夫に處するが故に、或は無想天を說いて名けて長壽と爲す。亦た得道に任

【三】無方便の意義。
【三】長壽の天とは何處なるか。

へざるが故に、或は說いて、初禪より四禪に至るまで、淨居天を除いて、皆長壽と名く」と。味に著し、邪見なるを以て、道を受くること能はざる者は、還た人間に生じ、佛に値ふ者は本、阿耨多羅三藐三菩提心を發すを以ての故に、或は禪の中に於て諸の福德を集む。何となれば、彼の間は味に著し善心生じ難きが故なり。【二四】經中に說くが如し。佛、比丘に問ひたまはく、「甲頭の土多きや、地上の土多きや」と。諸の比丘の言く、「地の土は甚だ多し、喩と爲すべからず」と。佛の言はく、「天上に命終して、還た人中に生ずる者は甲頭の土の如く、地獄に墮する者は地土の如し」と。

問うて曰く、【二五】鈍根とは、二十二根中の何者か是なるや。答へて曰く、有人の言はく、「【二六】慧根もて能く諸法を觀じ、久しく禪味を受け著するを以ての故に鈍なり」と。有人の言く、「菩薩は清淨の福德智慧の因緣の故に、十八根皆利なるも、罪の故に則ち鈍なり」と。眼等の六根は、法華經に說くが如し。【二七】命根は老病貧窮等の爲に惱まされず、安隱に樂を受く。是を命根の利樂等と爲す。五根は了了に覺知するが故に利なりと言ふ。

復次に、樂を受くる時は、樂は無常等の過ありと知りて、隨逐して貪欲を生ぜざるが故に利なり。餘の受も亦た是の如し。【二八】信根は牢堅深固にして、難事を能く信ずるが故に、利なりと言ふ。亦た意

【二四】天人の死して人間に生ずる者は甲頭の土の如く、地獄に墮する者は大地の土の如し。

【二五】第一〇問、鈍根は二十二根中の何れに屬するか。

【二六】慧根とは、眞理を思惟することなり。

【二七】命根とは、有情の一期の壽命なり。

【二八】信根とは、佛・法・僧の三寶、及び四諦の妙を信ずることなり。

に是の如く、相に隨つて分別すべし。〔二九〕男根淨き者は、陰藏の相を得、細滑に著せざるが故に、欲の過たることを知る。是を利と爲す。復次に、三の善根利なるが故に、名けて利と爲す。菩薩は或る時は、〔三〇〕三無漏根に於いて、實際を證せざるが故に利なり、利と相違するが故に鈍なり。

問うて曰く、〔三一〕第三の菩薩、若し能く禪を捨せば、云何が方便なしと言ふや。答へて曰く、是の菩薩は命終の時、不善心に入り、諸の禪定方便を捨つ。菩薩は、若くは欲界繫の善心、若くは無記心に入り、諸禪に入り、慈悲心に入り衆生を憐愍して、是の念を作さく、「我もし禪定に隨つて生ぜば、廣く衆生を利益すること能はざらん」と。欲界に生ずとは、十處あり。〔三二〕四天下の人と、〔三三〕六欲天となり。三惡道は菩薩の生ぜざる所なり。鈍根とは第二の菩薩に說くが如し。第四の菩薩は位に入りて、菩薩道を得、三十七品を修して、能く十八空乃至大慈大悲に住す。此を方便と名く、上の二菩薩は、但禪定のみ有りて、

〔二九〕男根とは、男子の身中、色欲を行ずる處をいふ。

〔三〇〕三無漏根とは、見道、修道、無學道、卽ち三道の無漏智をいふ。(一)未知當知根、(二)已知根、(三)具知根なり。

〔三一〕第一問、第三の菩薩、若し能く禪を捨せば、云何ぞ方便なしと言はんや。

〔三二〕四天下とは、東西南北の四大洲のことなり。

〔三三〕六欲天とは、欲界に六重の天あるをいふ。(一)四王天、持國、廣目、增長、多聞の四王あるが故に四王天と名く。(二)忉利天、三十三天と譯す。帝釋天を中心として、四方に各八天あれば、天數に從つて三十三天と名く。(三)夜摩天、時分と譯す。此の天中、時時に快哉を唱ふるが故に時分と名く。(四)兜率天、喜足と譯す。五欲の樂に於いて、喜足の心を生ずればなり。(五)樂變化天、五欲の境に於いて、自ら變化して、樂しめばなり。(六)他化自在天、他をして自在に、五欲の境を變化せしむればなり。

直に六波羅蜜［多］を行ず。是を以ての故に方便なし。第四の菩薩は、方便力の故に、禪定に隨はずして無量心生ず。何となれば四念處乃至大慈大悲を行ずるを以てなり。命終の時は衆生を憐愍して、他方の現在の佛國に生じ、續いて般若波羅蜜［多］と相應せんと願ふ。所以は何ん、般若波羅蜜［多］を愛敬し隨順するが故なり。

問うて曰く、(二四)此は是れ何等の菩薩なりや。答へて曰く、佛は自ら說きたまはく、(二五)「颰陀劫中に菩薩あり、或は非颰陀劫中に菩薩あり、但其の大なる者を取る」と。

問うて曰く、(二六)云何が颰陀と名け、云何が劫と名くるや。答へて曰く、經に說くが如くんば、(二七)一比丘あり。佛に問うて曰く、「世尊よ、幾許を劫と名くるや」と。佛、比丘に告げたまはく、「我、能く說くと雖も、汝は知ること能はざらん。當に譬喩を以て解くべし。方百由旬の城あり、芥子を溢滿せんに、長壽の人あり、百歲を過ぎて、一の芥子を持ち去らんに、芥子都べて盡くれども、劫は猶は(二八)澌きず、又方百由旬の石あり、人ありて百歲に(二九)迦尸［所產の］輕軟の㲲衣を持して、一たび來りて之を拂はんに、石は盡くれども、劫は猶は澌きざるが如し。時の中に最も小なる者は、六十念中の一念なり。大なる時を劫と名く。劫に二種あり、(三〇)一には大劫、二

【二四】第一二問、是の如きは何等の菩薩なるか。
【二五】颰陀劫（Bhadrakalpa）とは、現在の住劫なり。
【二六】第一三問、颰陀とは何ぞや、劫とは何ぞや。
【二七】劫（Kalpa）の說明、——芥子劫と大石劫。
【二八】一本には「儩」に作れり。
【二九】迦尸（Kāśi）とは、現今のベナレス市のことなり。
【三〇】二種の劫——大劫と小劫。

し、二には小劫と爲す。大劫とは、上の譬喩の如し。劫盡きんと欲する時は、衆生は自然に心樂を遠離す。樂を遠離するが故に、五蓋を除きて初禪に入る。是の人は生を離れて喜樂し、是より起ち已りて、聲を擧げ、大に唱へて言く、「諸の衆生の甚だ惡むべき者は、是れ五欲第一にして、安隱なる者は是れ初禪なり」と。衆生は是の唱を聞き已り、一切衆生の心、皆自然に五欲を遠離して初禪に入り、自然に覺觀を滅す。第二禪に入るも亦た是の如く唱へ、或は二禪三禪を離るるも亦た是の如し。三惡道の衆生は、自然に善心を得、命終して皆人中に生ず。若し重罪なる者は、他方の地獄に生ずるとは泥犁品中に說くが如し。是の時に三千大千世界に、一衆生として在る者なし。爾の時に二の日出づるより乃ち七の日出づるに至りて、三千大千世界の地は、盡く皆燒盡ること、十八空中に廣く劫の生滅の相を說くが如し。

復た有人の言はく、「四大の中の三大は、動作する所あるが故に、〔四一〕三種の劫あり。或る時は、火劫起りて、三千大千世界より、乃ち初禪四處に至るまでを燒き、或る時は水劫起り漂ひて、三千大千世界より乃ち二禪八處に至るまでを壞し、或る時は風劫起こりて、三千大千世界より乃ち三禪十二住處に至るまでを吹き壞る。是を大劫と名く。〔四二〕小劫にも亦た三種あり。外に三大發つて世界滅し、內に三毒發るが故に衆生滅す。所謂る飢餓、刀兵、疾病なり」と。

復た有人の言く、「時節歲數を名けて、小劫と爲す。法華經中に說くが如くんば、舍利弗の佛と作る

〔四一〕三種の大劫――火劫と、水劫と、風劫。

〔四二〕三種の小劫。

とき、正法の住すること二十小劫、像法の住すること二十小劫なり。佛は三昧より起ち、六十小劫の中に於いて法華經を説きたまふ。是の衆の小劫の和合せるを名けて大劫と爲す」と、千萬劫過ぎ去り、空にして佛なきこと有り。是の一劫中に、千佛興ることあり、諸の淨居天、歡喜するが故に名けて善劫と爲す。淨居天は何を以てか、此の劫に當に千佛あるべきを知るや。前の劫盡き已りて、廓然として都べて空なり。後に大水あり。水底に湧出する千枚の七寶の光明の蓮華あり。是れ千佛の相なり。淨居諸天は、是によりて千佛あることを知る。是を以ての故に、是の菩薩は、此の劫中に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を得と説くなり。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初禪、乃至第四禪に入り、慈心、乃至捨に入り、空處、乃至非有想非無想處に入り、方便力を以て禪生に隨はず、還つて欲界の刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家に生ず。衆生を成就せんが故なり。

【四三】第一四問、菩薩に二種あり、隨業生身と、得法性身となり。今ここに説けるは、二者中の孰れの菩薩なるか。

【論】問うて曰く、【四三】菩薩に二種あり。一には業に隨つて生じ、二には法性を得たる身なり。衆生を度せんが爲の故に種種に變化し、身は三界に生れて佛の功德を具す。「てに」衆生を度脱するが故なり。二身の中、いま是れ何者ぞや。答へて曰く、是の菩薩は、是れ業因緣生の身なり。所以は何ん、諸禪の方便力に入るが故に、禪に隨つて生ぜざればなり。法身の菩薩は、變化自在にして、則ち大に方便

を須ゐず。禪方便に入るの義は先に已に說けり。

問うて曰く、(四四)若し禪定に隨はずんば、何を以てか欲界に生じて、他方の淸淨世界に生ぜざるや。答へて曰く、諸の菩薩の行は、各各不同なり。或は菩薩あり、禪に於いて心を轉じて、他方の佛國に生ず。菩薩の心を廻して欲界に生ずるも、亦た是の如し。

問うて曰く、(四五)他方の佛國に生ずとは、是れを欲界と爲すや。欲界にあらざるや。答へて曰く、他方の、佛國の雜惡不淨なる者を、則ち欲界と名く。若し淸淨なる者は、則ち三惡道三毒なく、乃至、三毒の名も無し。亦た二乘の名も無く、亦た女人もなきなり。一切の人は、皆三十二相あり、無量の光明は、常に世間を照らし、一念の頃に無量の身を作り、無量の如恆河沙等の世界に到りて、無量阿僧祇の衆生を度し、還た本處に來る。是の如き世界は、地上に在るが故に、色界と名けず。欲無きが故に欲界と名けず。形色あるが故に、無色界と名けず。諸の大菩薩は、福德淸淨業の因緣の故に、別に淸淨の世界を得て、三界より出づ。或は大慈大悲を以て、衆生を憐愍すること有るが故に、此の欲界に生ず。

問うて曰く、(四六)若し命終の時、此の禪定を捨せば、初め何を以てか學を求むるや。答へて曰く、欲界の心は、狂して定まらず。柔軟の爲に、心を攝するが故に禪に入り、命終の時、衆生を度せんが爲

【四四】第一五問、若し禪定に隨はずんば、何を以てか欲界に生じて、他方の淸淨世界に生ぜざるか。

【四五】第一六問、他方の佛國に生ずとは、欲界なるか、將た欲界にあらざるか。

【四六】第一七問、若し命終の時、此の禪定を捨せば、何故に學を求むるか。

に、欲界の心を起す。

問うて曰く、(四七)若し人中に生ずるに、何を以ての故に正しく刹利等の大家に生じ、餘處に生ぜざるや。答へて曰く、刹利に生ずるは、勢力あるが爲なり。婆羅門家に生ずるは、智慧あるが爲なり。居士家に生ずるは、大富の故に、能く衆生を利益せんが爲にして、貧窮の中にては自らを利すること能はず。何ぞ能く人を益せん。欲界天に生ずることは、次に當に説くべし。

【經】舍利弗よ、復た菩薩摩訶薩あり。初禪、乃至第四禪に入り、慈心、乃至捨に入り、空處、乃至非有想非無想處に入り、方便力を以ての故に、禪に隨つて生ぜず。或は四天王天處に生じ、或は三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天に生じ、是の中に於いて衆生を成就し、亦た佛世界を淨め、常に諸佛に値ひたてまつる。

【論】是の義は上に同じ、天に生ずるを異と爲すのみ。問うて曰く、(四八)欲界の諸天は、情、五欲に著し、化度すべきこと難し。菩薩は何を以てか彼に生じて、人中に生ぜざるや。答へて曰く、諸天の著心は、大なりと雖も、菩薩の方便力も亦た大なり。説くが如くんば、三十三天上に須浮摩樹林あり。天中の聖天は五欲を厭捨し、中に在りて止住し、諸天を化度す。兜率天上に、恆に一生補處の諸の菩薩あり。常に法を聞くことを得、密迹金剛力士も亦た四天王天の上に在り。是の如き等は、諸天を教

【四七】第一八問、人中に生ずる時は、刹帝利族等の大家にのみ生ずるは何故なるか。

【四八】第一九問、欲界の諸天は、五欲に著して、化度し難し。然るに菩薩は何故に、彼處に生ずるか。

化す。

経 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以て、初禪に入り、此の間に命終し、梵天處に生じて、梵天王と作り、梵天處より一佛國に遊び、一佛國に至るに、有らゆる諸佛在りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、未だ法輪を轉じたまはざる者を勸請して轉ぜしめたてまつる。

論 問うて曰く、(四九)若し初禪に隨つて生ずるに何の方便ありや。答へて曰く、生ずと雖も、而も味に著せず、佛道を念じ、本願を憶し、慈心に入りて、念佛三昧と、禪と和合するが故に、名けて方便と爲す。

問うて曰く、(五〇)何を以ての故に梵王と作るや。答へて曰く、菩薩は、福徳の因緣を集むること、大なるが故に、世世に常に物の主と爲り、乃至鹿中に生ずるも、亦た其の王と爲る。

【四九】第二〇問、若し初禪に隨つて生ずるに、何の方便ありや。

【五〇】第二一問、梵天王となる理由如何。

復次に、是の菩薩の本願は、佛に轉法輪を請せんと欲す、散天と作すべからず。或る時は此の中の三千大千世界に佛なし、一佛國より一佛國に至りて、初めて成佛して、未だ法輪を轉ぜざる者を求覓す。何となれば梵天王の法は、常に應に諸佛の轉法輪を勸請すべきが故なり。

【論】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、(五一)一生補處にして、般若波羅蜜を多く行じ、方便力を以て、初禪、乃至第四禪に入り、慈心、乃至捨に入り、空處、乃至非有想非無想處に入り、四念處、乃至八聖道分を修し、空三昧、無相無作三昧に入り、禪に隨って生ぜず、生じて佛前に在りて梵行を修し、若くは兜率天上に生じ、其の壽の終るに隨って、善根を具足し、正念を失せずして、無數百千億萬の諸天、圍遶し恭敬し、來りて此の間に生じて、阿耨多羅三藐三菩提を得。

【問】問うて曰く、(五二)是の(五三)一生の菩薩は十住地に在りて、已に諸の功德を具足せり。今何を以てか諸行を修習するや。答へて曰く、心未だ涅槃に入らざれば、要らず所行あり。謂ゆる四禪、乃至三三昧なり、復次に、是の菩薩は、天人の中に於て、人法の修行を行じて、道を求むることを示す。復次に、是の菩薩は十住地に在りと雖も、猶ほ煩惱の習の在る有り。又諸法に於いて猶ほ知らざる所あり、是の故に修行す。

復次に、是の菩薩は、深行を行ずと雖も、三十七品、三解脫門等は、猶ほ未だ證を取らず。今證を爲すが故に、更に諸行を修す。復次に、是れ大菩薩なりと雖も、佛よりは猶ほ小なり。譬へば大火聚は照らす所ありと雖も、日に於ては則ち現ぜざるが如し。放鉢經の中に彌勒菩薩の、文殊尸利に語るが如し、「如し我、後身に復た佛と作らば、如恆河沙等の文殊尸利も、我が足を擧げ、足を下す事を知らざらん」と。是を以ての故に、十住に在りと雖も、猶ほ應に修行すべし。

【五一】縮藏には、一を三に作れり。

【五二】第二十二問、一生の菩薩は、十住地に在りて、已に諸の功德を具足せり。然るに今諸行を修習するは何如なるか。

【五三】縮藏には、一を三に作れり以下同じ。

問うて曰く、（五四）一生の菩薩は何を以てか廣く衆生を度せずして、而も要ず佛前に生ずるや。答へて曰く、菩薩に於いて度する所已に多し、今成佛せんと欲するに垂んとして應に佛前に在るべし。何となれば但衆生を度して、成佛を得るのみに非ず、諸佛の深法は、應當に聽聞すべきが故なり。

問うて曰く、（五五）若し佛事を諮問するが爲の故に佛前に在らば、何を以ての故に、釋迦文佛は菩薩と作りし時、迦葉佛の前に在りて惡口毀呰し給ひしや。答へて曰く、是の事は先に已に說けり。法身の菩薩は、種種に身を變化して、以て衆生を度し、或る時は人法を行じて、飢渇、寒熱、老病、憎愛、瞋喜、讃歎、呵罵等あり。諸の重罪を除けば、餘の者を皆行ず。是の釋迦文菩薩は、爾の時迦葉佛の弟として（五六）鬱多羅と名く。兄は智慧熟して多語を好まず、弟は智慧未だ備らざるが故に、多く論議を好む。時人弟を謂つて勝れたりと爲す。兄は後に出家して、佛道を成ずることを得、號して迦葉と名く。弟は閻浮提の王、（五七）訖梨枳の師と爲り、五百の弟子あり、婆羅門の書教を以て、諸の婆羅門に授く。諸の婆羅門等は、佛法を好まず。爾の時、一の陶師あり、（五八）難陀婆羅と名く、迦葉佛の五戒の弟子にして、三道を得、王師の鬱多羅と善友たり。其の心善にして、淨信なるを以ての故なり。爾の時に鬱多羅は、金車に乘り、四の白馬に駕し、弟子と倶に城門を出づるに、難提婆羅

【五四】第二三問、一生の菩薩が衆生を度せずして、佛前に生ずるは何故なるか。

【五五】第二四問、若し佛事を諮問するが爲に佛前にあらば、釋尊が菩薩たりし時、迦葉佛の前にて惡口毀呰せしは何故なるか。

【五六】Uttara（ウッタラ）

【五七】Kṛita?（クリータ）

【五八】Nanda-upananda（ナンダ ウパナンダ）

は路に於いて、鬱多羅に相逢ふ。問うて言く、「何の所よりか來る」と。答へて言く、「汝が兄は阿耨多羅三藐三菩提を得たり、我は供養して還れり。汝は共に行きて、佛を覲見すべきが故に、來りて相迎へたり」と。鬱多羅は是の念を作さく、「若し我、徑に佛所に到らば、我が諸の弟子は、當に疑惟を生ずべし。汝に本論議して、智慧極に勝れたり。今往いて供養するは、將に是れ親屬を愛するなり。故に必らず我に隨はざらん」と、其佛を見たてまつるの因緣を破せんことを恐るるが故に、諸法實相の智中に住し、無上方便の慧に入りて、衆の弟子を度するが故に、口に惡言を出だすらく、「此の禿頭の人、何ぞ能く菩提道を得ん」と。爾の時に難提婆羅善友は、瞋るが如き狀を爲し、頭を捉へ、挽いて言く、「汝、止まることを得ざれ」と。鬱多羅は弟子に語りて言く、「其の事是の如し、吾れ止むることを得ず」と。即時に師徒倶に行いて佛に詣り、佛の光相を見たてまつりて、心即ち清淨なり。前に佛足を禮し、一面に在りて坐す。佛、爲に意に隨って法を說きたまふに、鬱多羅は無量の陀羅尼門、諸の三昧門を得たり。「又」皆五百の弟子を開いて、還た阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたまふ。鬱多羅は座より起ちて、佛に白して言さく、「願はくは、佛よ、我が出家して比丘と作ることを聽したまへ」と。佛の言はく、「善く來れり」と。即ち沙門と成す。是の方便を以ての故に、現じて惡言を出だすも、是れ實に非ず。虛空は破すべく、水は火と作すべく、火は水と作すべくとも、一生の菩薩は、凡人の中に於いて、瞋心を得がたし、何に況んや佛に於いてをや。

問うて曰く、(五九)若し爾らば佛は何を以てか第八罪報を受けて、六年苦行し給ひしや。答へて曰く、(六〇)小乘法と大乘法と異なれり。若し異なると無くんば、大小あるべからず、小乘の法中には法身の菩薩祕奧の深法、無量不可思議の神力を說かず、多くは結使を斷じて直に涅槃の法を取ることを說けり。復次に、若し佛、是の第八罪報を受けたまはずんば、諸天、神仙、龍鬼、諸の長壽の者あり。此の惡業ありて、而も罪報を受けざるを見て、業報の因緣なしと爲すと謂はん。是を以ての故に、惡業を作すことを現ずと雖も、亦た罪報を受く。

又、今世の因緣あり、諸の外道等は苦行に信著す。若し佛、六年苦行したまはずんば、則ち人信ぜず。是の王子は、樂に慣うて、苦行すること能はずと言はん。是を以ての故に、佛は六年苦行し給へり。外道の苦行する者あり。或は三月、半歲、一歲にして、能く六年「の間」、日に一麻一米を食する者なし。諸の外道は謂はく、「此は苦行の極たり。是の人にして、若し道なくんば、眞に道なからん」と。是に於いて信受して皆正道に入れり。是の二因緣を以ての故に、六年苦行し給ひしも、實の罪に非ざるなり。何となれば諸佛は、一切の不善を斷じ、一切の善法を成就したまふが故に、佛にして、若し實に罪報を受けたまはば、一切の善法を成じて、一切の不善法を斷じたまふと言ふことを得ざればなり。

【五九】第二五問、若し爾らば、佛が六年苦行し給ひしは何故なるか。

【六〇】大小兩乘の相異の一。

復次に、小乘法の中には、佛、小心の衆生の爲の故に說きたまへり。「三生の菩薩は猶ほ惡口して佛を毀るも、一生の菩薩は、尙ほ小兒を罵らず、云何が實に佛を毀りたてまつらんや。皆これ方便にして衆生の爲の故なり。何を以てか之を知る。是の釋迦文佛は、毘婆尸佛の時、大婆羅門と作り、佛、衆僧の食することを見て、是の言を發すらく、「是の如き人輩は應に馬麥を食すべし」と。是の罪に因るが故に、黑繩等の地獄に墮して、無量世の苦を受け已りて、餘罪の因緣「を以て」佛道を成ずと雖も、而も三月馬麥を食せり。

又、聲聞法中に說く、「佛は三阿僧祇劫を過ぎて、常に男子と爲り、常に貴處に生じ、常に諸根を失せず、常に宿命を識り、常に三惡道中に墮せず、毘婆尸佛より來、〔六一〕九十一劫「の間」、汝が法の如くす。九十一劫中、惡道に墮すべからず、何に況んや末後の一劫をや。是を以ての故に、是は實に非ず、方便の故に〔六二〕二罪を說くことを知る。

問うて曰く、〔六三〕佛の二罪は、毘尼雜藏中の說なれば、是は信受すべし。三阿僧祇の後、百劫、惡道に墮せずとは、初阿僧祇より、亦た惡道に墮すべからず。若し墮せずんば、何を以てか但百劫と說くや。佛には是の說なし。但是れ阿毘曇鞞婆沙論議師の說なり。答へて曰く、阿毘曇は是れ佛說なり。汝聲聞の人は、阿毘曇の論議に隨つて、是を鞞婆沙と名く、錯あるべからず。又〔六四〕薄拘盧の如き

【六一】他本には、九十劫に作れり。

【六二】縮藏には、二罪の二字なし。

【六三】第二六問、佛の二罪は律藏中の說なるが故に信受すべきにあらずや。

【六四】Vakkula

は、一の(六五)訶梨勒果を以て、僧に施し、九十一劫の中に於て惡道に墮せず、何に況んや、菩薩は無量世より來、身を以て布施し、諸の功德を修するに、而も小罪の因緣を以て、地獄に墮在せんや。是の如き事は、鞞婆沙に錯るべからず、是を以ての故に小乘の人は菩薩の方便を知らず。

復次に、汝は鞞婆沙の錯らざるを聽す。佛は自ら菩薩の本起を說きたまへり。菩薩は初生の時、行くこと七步にして、口に自ら說きて言はく、「我が生ずる所以の者は、衆生を度せんが爲の故なり」と。言ひ已りて默然し、乳を哺むこと三年、行かず語らず。漸次に長大して、行き語ること法の如し。一切の嬰孩は、小時にして、未だ行き語ると能はず。漸次に長大して、能く人法を具す。今云何が菩薩は、初生に能く行き、能く語り、後に便ち語るべきこと能はざるや。是は方便力の故なることを知る。若し是の方便を受けば、一切の佛語は、皆通ずることを得。若し受けずんば、一實一虛なり。是の如き種種の因緣〔を以て〕、衆生を度するが爲の故に、惡口を現行することを知る。

問うて曰く、(六六)一生の菩薩は、何を以てか但兜率天上に生じて、餘處に生ぜざるや。答へて曰く、若し他方の世界より來る者あれば、諸の長壽の天、龍、鬼神は、其の來處を求めて知ること能はず、則ち疑心を生じ、謂つて幻化と爲さん。若し人中に在りて死し、人中に生じ、然る後に佛と作らば、人は輕慢を起こし、天は則ち法を信ぜざらん。應に天來りて、人を化すべく、人、天を化すべからず、

【六五】 Haritaki

【六六】 第二七問、一生の菩薩が兜率天に生じて、餘處に生ぜざる理由如何。

是の故に天上より來りて生ず。則ち是れ天より人と爲れば、人則ち敬信す。無色界中には形なく、法を說くことを得ざるが故に、中に在りて生ぜず。色界中には色身ありて、爲に法を說くべしと雖も、而も深く禪味に著して、大に衆生を利益すること能はざるが故に、是の故に中に在りて生ぜず。下の三の欲天は、深厚なる結使、麤心錯亂し、上の二天は結使既に厚く、心濡れて利ならず。兜率天上は結使薄く、心濡れ、利にして、常に是れ菩薩の住處なり。譬へば太子の將に王位に登らんとするや、先づ靜室に於いて七日齋潔し、然る後に正殿に登りて王位を受くるが如し。

補處の菩薩も亦た是の如く、兜率天上は、齋處の如し。彼の末後に於いて天樂を受け、壽終りて後に來り下り、末後に人樂を受けて、便ち【七七】阿毘三佛を成じ、無量百千萬億の諸天圍遶して是の間に來り生ず。菩薩は先づ常に無始の生死の中に於いて、天上人間に往反せしも、今是の末後の天身は、復た更に來りて、天に生ぜざるを以て、是の故に咸く皆侍送するなり。菩薩は彼に於いて壽盡き、當に下りて佛と作るに、諸天の壽盡きる者あり、盡きざる者は、願を作して下生し、菩薩の【七八】檀越と爲れり。

復次に、諸天の下る者は、常に菩薩を侍衛せんと欲す。百億の魔怨あり、來りて菩薩を惱亂せんことを恐るればなり。此の菩薩は人中に生じて、老病死を厭ひ、出家して阿耨多羅三藐三菩提を得ることは、菩薩本起經中に說くが如し。

【七七】 Abhisaṃ-buddha

【七八】 檀越とは、施主をいふ、越は施の功德をなして已が貧窮の海を越ゆる義なり。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六神通を得、欲界、色界、無色界に生ぜず、一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養し恭敬し、尊重し讃歎す。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、遊戲神通（を以て）一佛國より一佛國に至るに、至る所、到る處に聲聞辟支佛乘なく、乃至二乘の名も無し。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、遊戲神通（を以て）一佛國より一佛國に至り、至る所、到る處は、其の壽無量なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、遊戲神通を以て一國土より一國土に至るに、至る所、到る處は、佛法僧なき處にして、佛法僧の功德を讃ずる有りて、諸の衆生等は、佛法の名、僧の名を聞くが故に、此に於いて命終して諸佛の前に生ず。

【論】釋して曰く、（六九）菩薩に二種あり、一には生身の菩薩、二には法身の菩薩なり。一は結使を斷じ、二は結使を斷ぜず。法身の菩薩は、結使を斷じて、六神通を得。生身の菩薩は、結使を斷ぜず。或は欲を離れて五神通を得。六神通を得る者は、三界に生ぜず、諸の世界に遊びて、十方の諸佛を供養したてまつる。遊戲神通の者は、十方世界に到りて、衆生を度し、七寶を雨ふらす。至る所の世界は皆一乘清淨にして、壽は無量阿僧祇劫なり。

問うて曰く、（七〇）菩薩の法は應に衆生を度すべし、何を以てか但清淨無量壽佛の世界の中にのみ至るや。答へて曰く、（七一）菩薩に二種あり。一には慈悲心ありて多く衆生の爲にし、二には多く諸佛の功德を集む。樂んで多く諸佛の功德を集むる者は、一乘清淨の無量壽の世界に至り、好みて多く衆生

【六九】二種の菩薩――生身と法身との相異。

【七〇】第二八問、菩薩は廣く衆生を度するを以て業とす、然るを但清淨無量壽佛の世界の中にのみ至るは何故なるか。

【七一】二種の菩薩――(一)慈悲度生、(二)集佛功德。

の爲にする者は、佛法の樂なき處に至る。三寶の音を讃歎することは、後章に說くが如し。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初發意の時に初禪、乃至第四禪を得、四無量心を得、四無色定を得、四念處、乃至十八不共法を作す、是の菩薩は欲界、色界、無色界中に生ぜず、常に生ずれば、衆生を益するの處に有り。

論 釋して曰く、此の菩薩は、或は無佛世界に生じ、或は有佛世界に生ず。世界は不淨にして、三惡道ありて貧窮下劣なり。或は淸淨世界に生ず。[或は]無佛世界に至り、十善道、四禪、乃至四無色定を以て、衆生を利益し、三寶に信向せしめ、五戒及び出家戒を稱說して、禪定の智慧功德を得せしむ。不淸淨の世界に二種あり。現に佛の在すと、及び佛の滅度の後と有り。佛の滅度の後に、或る時は出家し、或時は在家にして、財施法施を以て、種種に衆生を利益し、若くは佛の在世に、種種の因緣を作り。衆生を引導して、佛の所に至らしむ。淸淨世界は、衆生未だ功德を具せざる者には、其をして滿足せしむ、是を所生の處に在りて衆生を利益すと名く。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初發意の時、六波羅蜜[多]を行じ、菩薩位に上りて、阿鞞跋致地を得。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初發心の時、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得、便ち法輪を轉じて、無量阿僧祇の衆生の爲めに、益利を作し已りて、無餘涅槃に入る。是の佛の般涅槃の後に、佛法は、若くは一劫に住し、若くは一劫を減ず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初發意

の時、般若波羅蜜〔多〕と相應し、無數百千億の菩薩の與に、一佛國より一佛國に至りて、佛世界を淨めたてまつる。

論 釋して曰く、三種の菩薩あり。利根〔の者は〕心堅く、未だ發心せざる前に、久しく諸の無量の福德智慧を來集す。是の人は佛に遇ひたてまつりて、是の大乘の法を聞き、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、卽時に六波羅蜜〔多〕を行じて、菩薩位に入り、阿毘跋致地を得。何となれば先に無量の福德を集め、利根にして心堅く、佛に從つて法を聞けばなり。譬へば遠く行くに、或は羊に乘つて去るもの有り。或は馬に乘つて去るもの有り、或は神通を以て去る者あらんに、羊に乘る者は、久久しうして乃ち到り、馬に乘る者は差つて速に、神通に乘る者は、意を發す頃に便ち到るが如し。是の如く言ふことを得ざれ、「意を發す間に云何が到ることを得ん」と。神通の相は爾にして疑を生ずるべからず。菩薩も亦た是の如く、阿耨多羅三藐三菩提を發すとき、卽ち菩薩の位に入る。菩薩あり、初めて意を發すに、初は心好しと雖も、後に諸惡を雜へ、時時に念を生ずらく、「我は佛道を求め、諸の功德を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す」と。是の人は久久しうして、無量阿僧祇劫に、或は至り、或は至らず、先世の福德の因緣薄く、而も復た鈍根にして、心堅固ならざればなり。羊に乘る者の如し。人あり、前世に少しく福德ありて利根なり。發心して漸漸に六波羅蜜〔多〕を行じ、若くは三、若くは十、若くは百阿僧祇劫に、阿耨多羅三藐三菩提を得。馬に乘る者の如く、必ず到る所あり。第三に神通に乘る者は、上に說くが如し。是の三種の發心は、一には罪多くして福少く、二には福多くして罪

少く、三には但清淨の福德を行ず。清淨に二種あり。一には初發心の時に卽ち菩薩道を得、二には少く住して、十方の諸佛を供養し、菩薩道に通達して菩薩位に入る。卽ち是れ阿鞞跋致地なり。阿鞞跋致地の菩薩の義は、先に說くが如し。次に後の菩薩は、大に世間を厭ひ、世世より已來、常に眞實を好みて、欺誑を惡む。是の菩薩も亦た利根、堅心にして、久しく無量の福德、智慧を集め、初發心の時に、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得、卽ち法輪を轉じて、無量の衆生を度し、無餘涅槃に入る。法の住すること、若くは一劫、若くは一劫を減じ、化佛を留めて衆生を度す。〔七二〕佛に二種の神通力あり。一には現在時、二には滅後なり。劫の義は上に說くが如し。劫中に度する所の衆生も、亦復た少なからず。次に後の菩薩も、亦た利根にして、心堅く、久しく福德を集め、發心して卽ち般若波羅蜜〔多〕と相應し、六神通を得て無量の衆生と共に、十方の清淨世界を觀じ、而して自ら其の國を莊嚴す。〔七三〕阿彌陀佛は先世の時、法藏比丘と作りしに、佛は將ゐ導き、遍ねく十方に至りて、清淨の國を示し、淨妙の國を撰擇して、以て自ら其の國を莊嚴せしめたまひしが如し。

〔七二〕佛に二種の神通力あり——(一)現在時、(二)滅後。

〔七三〕阿彌陀佛は、先世に於いて法藏比丘なりき。

卷の第三十九

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、四禪、四無量心、四無色定を得、其の中に遊戲して初禪に入り、初禪より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて乃至四禪に入る。四禪より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて虚空處に入り、虚空處より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて、乃至非有想非無想處に入り、非有想非無想處より起ちて滅盡定に入る。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以て超越定に入る。

【論】問うて曰く、〔一〕若し凡夫の人は、能く滅盡定に入らず、云何が菩薩は、初禪より起ちて、滅盡定に入るや。答へて曰く、阿毘曇鞞婆沙中の小乘には、是の如く說けり、佛の三藏の說にあらず。又この菩薩聖人すら、尙ほ及ばず、何に況んや、當に是れ凡夫なるをや。譬へば六牙の白象は、毒箭を被むると雖も、猶ほ怨賊を憐愍するが如し。是の如きの慈悲心は、阿羅漢に無き所なり。畜生の中にてすら猶尙是の如し、何に況んや人身と作りて、欲を離れ、禪に入りて、而も滅盡定を得ざらんや。

問うて曰く、〔二〕若し菩薩の滅盡定を得ることは爾るべし。〔三〕超越定の法は、二を過ぐること能はず、

【一】第一問、菩薩の初禪より起ちて滅盡定に入る理由如何。

【二】第二問、菩薩が方便もて超越定に入る理由如何。

【三】超越定とは、佛及び深位の菩薩の出入する三昧なり。凡そ禪定は四禪四無色及び滅盡定と深淺次第して出入共に此の次第を追ふを常とす。然るに此次第を要せず散心より直に滅盡定にも入り、滅盡定より直ちに散心に出づることを得るなり。

若し初禪より起ちて、乃至滅盡定に入ると言ふは、是の法あること無し。答へて曰く、餘人にも、定法ありと雖も、力少なきが故に、遠く超ゆること能はず。菩薩は、無量の福德智慧力もて、深く禪定に入り、心も亦著せざるが故に、能く遠く超ゆ。譬へば人中の力士の踔は、三四丈に過ぎず、若し天中の力士は、復限數なきが如し。小乘法中の一に超ゆる者は、是れ定法なり。菩薩は禪定力大にして、心に著する所なきが故に、遠近意に隨ふ。

問うて曰く、㊃若し爾らば超越定は是れ大にして、次第定は大と爲すべからず。答へて曰く、二は俱に大と爲す。何となれば初禪より起ちて、二禪に至り、更に餘なく二念を以て、入ることを得るを以てなり。乃至滅盡定も皆爾なり。超越とは、初禪より起ちて第三禪に入るも、亦餘心をして雜らしめず、乃至滅盡定に「入り」、逆順皆爾なり。有人の言く、「超越定は勝れたり、何となれば俱に餘心を雜ふること無く、而も能く超越すればなり。譬へば槃馬の廻轉の意に隨ふが如し」と。

【四】第三問、若し爾らば超越定は大にして、次第定は小なるか。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜〈多〉を行じて四念處乃至十八不共法を修し、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を取らず。方便力を以て衆生の爲の故に、八聖道分より起ち、是の八道を以て須陀洹果乃至辟支佛道を得せしむ。佛、舍利弗に告げたまはく、一切の阿羅漢・辟支佛果・及び智は是れ菩薩摩訶薩の無生法忍なり。舍利弗よ、當に知る

べし、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、(五)阿鞞跋致地中に在りて住す

論 問うて曰く、(六)何を以てか、是の菩薩の六波羅蜜「多」を行ずることを説かずして、而も但だ四念處を得ることを説くや。答へて曰く、若くは説き、若くは説かず。當に知るべし、是の菩薩は皆六波羅蜜「多」を行じ、三十七品に於て、或は行じ、或は行ぜず。聲聞辟支佛の道を證せざる者は、大慈大悲ありて、深く方便力に入る等は、先に説くが如し。

問うて曰く、(七)自ら諸の(八)道果を得ず、云何が能く以て人を化するや。答へて曰く、佛は自ら因縁を説き給ふ。所謂聲聞、辟支佛の果、及び智は皆是れ菩薩の(九)法忍なり。但だ諸の道果、名字果及び智を受けず、皆(一〇)無生法忍中に入ると。復次に、唯證のみを取らず、餘の者をも皆行じて、菩薩道を得るが故に、名けて阿鞞跋致地と爲す。

【五】阿鞞跋致(Avaivartika)は譯して不退位、又は不退轉といふ。

【六】第四問、菩薩の六度を行ずることを説かずして、但だ四念處を得ることを説く理由如何。

【七】第五問、自ら道果を得ずして、如何にしてか能く他を教化することを得んや。

【八】道果とは、道は菩提、果は涅槃なり、涅槃は菩提の道によつて證せらるるものなれば果といふ。

【九】法忍とは、忍は忍許の義にて今まで信じ難かりし理を信受して惑出でざるに至れるを忍といふ。即ち所觀の法に施して忍許するなり。

【一〇】無生法忍とは、大乘菩薩は、初地の見道に於て無生の法理に安住して心を動ぜざるを云ふ。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜〔多〕に住して、兜率天道を淨む、當に知るべし、是は賢劫中の菩薩なることを。

【論】釋して曰く、菩薩に各各の道、各各の行、各各の願あり。是の菩薩は、業因緣を修して、兜率天上に生じ、菩薩の會中に入りて、次第に佛と作る。是の如き相は、當に知るべし、是れ賢劫中の菩薩なることを。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、四禪乃至十八不共法を修し、未だ四諦を證せず。當に知るべし、是の菩薩は一生補處なり。

【論】問うて曰く、〔二〕是の一生補處の菩薩は、應に兜率天に生ずべし。云何が四禪等を得と說くや。答へて曰く、是の菩薩は兜率天上に生じ、欲を離れて四禪等を得。

復次に、是の補處の菩薩は欲を離れてより來、久しく佛法を具足し、方便力を以て、補處の法に隨つて兜率天に生ず、未だ四諦を證せざる者は故らに留めて證せず、若し證を取る者は辟支佛と成り、佛と成らんと欲するが故に證せず。

【二】第六問、應に兜率天に生ずべき一生補處の菩薩にして、四禪等を得るといふ理由如何。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、無量阿僧祇劫に修行して、阿耨多羅三藐三菩提を得。

【論】釋して曰く、是の菩薩は善根を種ゑて阿耨多羅三藐三菩提を求むと雖も、鈍根雜行を以ての故

に久しうして乃ち之を得、深く善根を種うるを以ての故に必ず得。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜〔多〕に住し、常に勤めて精進して、衆生を利益し、無益の事を說かず。

【論】釋して曰く、是の菩薩は先づ惡口あるが故に菩薩心を發し、願つて言く、「我永く口の四過を離れて是の道を（三）行はん」と。

復次に、此の菩薩は、是の般若波羅蜜「多」の中に、諸法は定相あると無く、著すべからず、說くべからざるの相を知るが故に、是の如く、能く利益する者は皆是れ佛法なり、若し利益すること能はずんば、種種に語を好むと雖も、是れ佛法にあらずと知る。譬へば種種の好藥も、病を破する能はずんば、名けて藥と爲さず、趣ち土泥等も、能く病を差すを得ば、是を名けて藥と爲すが如し。是を以ての故に、其の謬錯を恐れて無益の事を說かず。

【二】他本には行の字を得に作れり。

【三】上中下の不善道とは、地獄道と餓鬼道と畜生道とをいふ。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜〔多〕を行じ、常に勤めて精進して、衆生を利益し、一佛國より一佛國に至り、衆生の三惡道を斷ず。

【論】釋して曰く、是の菩薩は六神通に住して十方世界に到り、（三）上中下三種の不善道を遮す。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜（多）に住し、檀を以て首と爲し、一切衆生を安樂にし、飮食を須ふれば飮食を與へ、衣服・臥具・瓔珞・華香・房舍・燈燭・其の須ふる所に隨つて皆之を給與す。

【論】釋して曰く、菩薩に二種あり。一には能く衆生をして苦を離れしめ、二には能く樂を與ふ。復二種あり。一には三惡道の衆生を憐愍し、二には人を憐愍す。是の菩薩は衆生に樂を與へ、人を憐愍するが故に、須ふる所に隨つて皆之を與ふ。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜（多）を行ずるとき、身を變ずること佛の如くし、地獄の中の衆生の爲に說法し、畜生餓鬼の中の衆生の爲に說法す。

【論】問うて曰く、〔一四〕是の菩薩は何を以ての故に變じて佛身と作るや、佛を尊重せざるに似たり。答へて曰く、衆生は佛身を見て度を得る者あり、或は轉輪聖王等の餘身を見て度を得る者あり。是を以ての故に身を變じて佛と作る。復次に、世間は、佛の名字を是れ大悲、是れ世尊と稱す。若し佛身を以て地獄に入れば、則ち閻羅王、諸の鬼神も遮礙せず、是れ我が尊ぶ所の者は師なり、云何が遮すべけんや。問うて曰く、〔一五〕若し地獄の中には火燒きて常に苦痛あり、心常に散亂して法を受くるを得ず、云何が化すべきや。答へて曰く、是の菩薩は不可思議神通力を以て鑊を破り、火を滅し、獄卒を禁制し、

【一四】第七問、菩薩が佛身と變する理由如何。

【一五】第八問、身痛心亂せる地獄の衆生を如何に化度すや。

光を放ちて之を照せば衆生の心樂しむ。乃ち爲に法を說くに、聞いて則ち受持す。

問うて曰く、〔二六〕若し爾らば地獄の衆生には道を得る者ありや不や。答へて曰く、道を得ずと雖も得道の善根因緣を種う。何となれば重罪を以ての故に道を得べからず、畜生道中に當に分別すべし。或は得る者あり、或は得ざる者あり。〔二七〕阿那婆達多龍王、〔二八〕娑竭龍王等の如きは菩薩道を得、鬼神道中にも、夜叉、蜜迹金剛、鬼子母等の如き見道を得るあり、是れ大菩薩なり。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜（多）を行ずる時、身を變じて佛の如くし、遍ねく十方の恆河沙等の如き、諸佛の世界に至り、衆生の爲に說法し、亦た諸佛に供養し奉り、及び佛世界を淨め、諸佛の說法を聞き、十方淨妙の佛國の相を觀採して、以て自ら殊勝の世界を起す、其の中の菩薩摩訶薩は皆是れ一生補處なり。

論 釋して曰く、是の菩薩は遍ねく六道の爲に說法し。佛身を以て十方衆生の爲に說法す。若し衆生、弟子の敎を聞かば信受する能はざるも、若し佛獨尊自在者の說法を聞かば其の語を信受せん。是の菩薩は二事の因緣の故に諸佛を供養し奉り、世界を莊嚴す。世界を莊嚴するの法を聞き、十方の佛國に到りて淸淨世界の相を取り、行業の因緣轉た復殊勝にして、光明も亦多し。何となれば此の國中は皆〔二九〕一生補處の菩薩なればなり。

〔二六〕第九問、地獄の衆生中に道を得るものありや如何。

〔二七〕Anavataptanāgarāja アナワタプタナーガラージャ

〔二八〕Sāgaranāgarāja サーガラナーガラージャ

〔二九〕一生補處は、初地菩薩の位に、初めて淨菩提心を得、此の一實より無量の三昧總持門を出生し、乃至第十地に至

問うて曰く、云。若し先に已に兜率天上の一生補處の菩薩を説けり、今云何が、他方世界の菩薩は皆一生補處なりと説くや。答へて曰く、兜率天上の一生補處は是れ三千世界の常法なり、餘處は不定なり。所謂第一清淨の者は身を轉じて佛道を成ずるが故なり。

り、第十一地即ち佛地の法ありて轉生し以て佛處を補ふ。

【二】第一〇問、他方世界の菩薩を皆一生補處なりと説く理由如何。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜（多）を行ずる時、三十二相を成就して諸根淨利なり、諸根淨利なるが故に衆人愛敬し、愛敬を以ての故に漸く三乘の法を以て之を度脱す。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、應に身清淨口清淨を學すべし。

論 釋して曰く、是の菩薩は衆生をして眼に其身を見て、得度せしめんと欲するが故に、三十二相を以て身を莊嚴す。諸根淨利なりとは、眼等の諸根明利にして餘人に出過し、信慧根、諸の心數根等利淨第一にして、見る者は其の希有を歎じ、我に此の事なしといひ、是の菩薩を愛敬して、其の語を信受し、世世に道法を具足し、三乘道を以て涅槃に入る。是の三十二相、眼等の諸根は皆身口の業の清淨なるより得。是を以ての故に佛は、菩薩は應に身口の業を淨むべしと説き給へり。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜(多)を行じて諸根淨なることを得、是の淨根を以て、而も自ら高ぶらず、亦た他をも下しまず。

論 釋して曰く、是の菩薩は常に深く淨く、六波羅蜜「多」を行ずるが故に、眼等の諸根淨利なることを得て人皆愛敬す。(三)慧等の諸心數法の根、淨利にして比なし、「そは」衆生を度せんが爲の故なり。世間の常法は、若し殊異を得れば心則ち自ら高ぶり、諸餘の人を輕んじて是の念を作す、「汝には此の事なく、我獨り此あり」と。是の因緣を以ての故に還つて佛道を失す。經中に說くが如くんば、菩薩は餘の菩薩を輕んじ、念念一劫に佛道と遠ざかり、爾所の劫を經て更に佛道を修すと。是を以ての故に自ら高ぶらず、亦他をも下しまず。

【三】慧とは、事理を分別し決定して、疑念を斷じ、又は事理に通達する心的作用なり。而して慧根とは、五根(信・進・念・定・慧)の一にして、能く衆生を諦觀し、道を生ずる作用あるをいふ。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初發心住・檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)より乃ち阿鞞跋致地まで終に惡道に墮せず。

論 釋して曰く、是の菩薩は初より已來、惡道を怖畏し、作す所の功德を墜墮せざらんことを願ふ。乃至阿鞞跋致地までとは、未だ到らざる中間に惡道に、墮せんとを畏るるを以ての故に願を作すなり。菩薩は是の念を作す、「若し我三惡道に墮せば自ら度する能はず、何ぞ能く人を度せん。又

三惡道の苦惱を受くる時は、瞋惱を以ての故に、結使增長し、還つて惡業を起こして、復苦報を受く。是の如くにして無窮ならば、何の時か當に佛道を修行することを得べき」と。

問うて曰く、「〔三〕若し持戒の果報は惡道に墮せずんば、何を以てか復布施を說くや。」答へて曰く、「持戒は是れ惡道に墮せず、根本の布施も亦能く墮せず。復次に、菩薩の持戒は能く惡道中に墮せずと雖も、人中に生じて貧窮にして自ら利すること能はず、又人を益せず、是を以ての故に布施を行ず、餘の波羅蜜「多」も各その事あり。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初發心より乃ち阿鞞跋致地まで常に十善行を捨てず。

【釋】釋して曰く、佛は戒を持つが故に惡道に墮せず、布施は隨逐すと說きたまふ。今云何が尸羅波羅蜜「多」より乃ち阿鞞跋致地に至るまでを行ぜんかを知らず、是の故に復常に十善を行ずと說き給ふ。

復次に、先に菩薩の持戒牢固ならざれば、布施「を以て」扶助す「と說き」、今は但だ持戒牢固にして十善を捨てざれば三惡道に墮せずと說きたまふ。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、檀波羅蜜「多」、尸羅波羅蜜「多」中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦た財物

【三】第一問、若し持戒によりて惡道に墮せざるの果報あらば、何故に布施を說くや。

を以て衆生に布施す。

【論】釋して曰く、是の檀「那」と尸「羅」の波羅蜜「多」の因緣の故に、轉輪聖王と作り、尸羅波羅蜜「多」を行ずるが故に、能く衆生をして十善を信受せしめ、檀「那」波羅蜜「多」を行ずるが故に、財寶を以て衆生に給施するも亦盡くべからず。

問うて曰く、【三】一切の菩薩は皆是の二波羅蜜「多」を行じて轉輪聖王と作るや不や。答へて曰く、必ずしも然らざるなり。何となれば此の品中に「說くが」如くんば、諸の菩薩は種種の法を以て佛道に入る。菩薩あり、轉輪聖王の儀法を聞いて此處に住りて能く衆生を利益するが故に、是の願を作す。或は菩薩あり、轉輪聖王の因緣を種ゑ、願を作さずと雖も亦轉輪聖王の報を得、自ら二波羅蜜「多」を行ずるが故に轉輪聖王と作り、亦一切衆生をして十善道を行ぜしめ、亦自ら布施を行ず。聞く者疑を生ずらく、「一世に作すとや爲ん、世世に作すとや爲ん」と。是を以ての故に、

【三】第一二問、一切の菩薩は、是の布施持戒の二を行じて轉輪聖王となるや如何。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、檀「那」波羅蜜「多」、尸羅波羅蜜「多」に住し、無量千萬世に轉輪聖王と作り、無量百千の諸佛に値遇して、供養恭敬尊重讚歎したてまつる。

【論】釋して曰く、若し菩薩は轉輪聖王と作り大に衆生を益することを知れば、便ち轉輪聖王と作

り、若し自ら餘身は益すること大なりと知れば、亦餘身と作る。復次に、世間の法を以て、大に佛を供養したてまつらんと欲するが故に、轉輪聖王と作る。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり。常に衆生の爲に法を以て照明し、亦以て自ら照し、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで終に照明を離れず。舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩は佛法の中に於て已に尊重を得。舍利弗よ、是を以ての故に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、身口意の不淨なるを妄起せしめず。

【論】釋して曰く、上の菩薩は檀〔那〕波羅蜜〔多〕を行じて轉輪聖王と作り。是の菩薩は但だ諸經を分別し、諸法を誦讀、憶念、思惟、分別して以て佛道を求め、是の智慧の光明を以て自ら利益し、亦能く衆生を利益す。人の闇道中に燈を然せば亦よく自らを益し、亦よく人を益するが如し。終に離れずとは、是の因緣の故に終に智慧の光明を離れず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。

復次に、是の菩薩は淸淨に法施し、名利・供養・恭敬を求めず、弟子を貪らず、智慧を恃まず、亦自ら高ぶり餘人を輕んぜず、亦譏刺せず、但だ十方の諸佛を念じ、慈心を以て衆生を念ず。我も亦是の如く佛道を學し、法を說き、依止する所なく、適、著する所なく、但だ衆生の爲に諸法實相を知らしめん。是の如く淸淨に法を說き、世世に智慧の光明を失はず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。已に尊重を得とは、上の諸の菩薩の、能く是の如くなる者は、諸の衆生に於て、皆尊重を爲すなり。身口

意の不淨なるを妄起せしめずとは、能く清淨の法施を以てする者は身口意の惡業を雜起すべからず。何となれば若し身口意の惡を起さば、聞く者、或は信受せず。若し意業不淨なれば智慧明かならず、智慧明かならざれば、善く菩薩道を行ずること能はざればなり。

復次に、但だ此の一菩薩のみにあらず、上來の菩薩の能く此の法を行ずる者は皆佛の教を尊重すと名く。若し菩薩にして菩薩道を行ぜんと欲せば皆罪行を雜ふべからず。一切の惡罪業を妄起せしめず、雜行の者は行道に於て則ち難く、疾かに佛道を成ずること能はず、罪業の因緣は諸の福德を壞するが故なり。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、云何が、菩薩の身業不淨、口業不淨、意業不淨なるか。

【三】第一三問、智慧第一の舍利弗にして、身口意の不淨業云何を尋ぬる理由如何。

【論】問うて曰く、(三)舍利弗は智慧第一なり、何を以ての故に身口意の惡業を識らざるや。答へて曰く、舍利弗は聲聞法中に於ては則ち知れり、菩薩の事は異なるが故に知らざるなり。說くが如くんば、若し菩薩にして聲聞辟支佛心を生ずれば是を菩薩の破戒と爲す。是を以ての故に舍利弗の疑へるは何者か是れ菩薩の罪にして、「何者か」罪に非ざるかを知らざるなり。

復次に、舍利弗は身の三不善道、口の四不善道、意の三不善道を知り、是を身口意の罪と爲す。此

の中に佛答へ給はく、「若し菩薩、身口意の相を取れば、是は則ち菩薩の身口意の罪と爲す」と。是の如き等の因緣の故に舍利弗は問へるなり。

【經】佛、舍利弗に告げ給はく、若し菩薩摩訶薩は是の念を作す、「是の身、是の口、是の意は是の如く相を取りて緣と作す」と。舍利弗よ、是を菩薩の身口意の罪と名く。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行ずる時、身を得ず、口を得ず、意を得ず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜（多）を行ずる時、若し身を得、口を得、意を得て是を用ゐなば、身口意を得るが故に能く慳心・犯戒心・瞋心・懈怠心・亂心・癡心を生ず。當に知るべし、是の菩薩は六波羅蜜（多）を行ずる時、能く身口意の麤業を除かず。

【論】釋して曰く、佛、舍利弗に示し給はく、「法空の中に菩薩は是の三業を見ず、是を無罪と爲す。若し是の三業を見ば是を罪と爲す」と。聲聞法中にては十不善道、是を罪業と爲し、摩訶衍中には身口意の所作ありと見るも是を罪と爲す。何となれば作あり見あらんに、作者見者は、皆是れ虛誑なればなり。麤人には則ち麤罪あり、細人には則ち細罪あり。欲界を離るる時の如きは〔二五〕五欲、〔二六〕五蓋を惡罪と爲し、初禪には善の覺觀を攝して無罪と爲す。初禪を離れて二禪に入る時は、覺觀を罪と爲す。二禪に攝する所の義には意を無罪と爲す、乃至非有想非無想處も亦

【二五】五欲とは、財と色と食と名と睡とをいふ。
【二六】五蓋とは、五法ありて能く心性を蓋覆して善法を生ぜざらしむ。一に貪欲蓋、五欲の境に執著し以て心性を蓋ふもの、二に瞋恚蓋、違情の境に於て忿怒を懷き以て心性を蓋ふもの。三に睡眠蓋、心昏く身重くして其用を爲さず、以て心性を蓋ふもの。四に掉悔蓋、心の躁動するを掉といひ、所作の事に於て心に憂惱するを悔といひ、以て心性を蓋ふもの。五に疑蓋、法に於て猶豫して決斷なく、以て心性を蓋ふもの。

是の如し。諸法實相中に入れば一切の諸觀、諸見、諸法は皆名けて罪と爲す。小乘の人は三惡道を畏るるが故に十不善業を以て罪と爲し、大乘の人は一切の能く著心を生じて相を取るの法の三解脫門と相違する者を以て名けて罪と爲す。是の事の異なるを以ての故に名けて大乘と爲す。若し是の三業あることを見るは惡を起さずと雖も、亦牢固と名けず。是の身口意、是の三業の根本を見ざる是を牢固と爲す。是の菩薩は法は空なるが故に是の三事を見ず。是の三事を用ふれば慳貪相、犯戒相、瞋相、懈怠相、散亂相、愚癡相を起すも、因無きが故に果も亦無きなり。樹無ければ則ち蔭無きが如し。若し能く是の如く觀ずれば則ち能く身口意の麤業を除く。

問うて曰く、（二七）先には罪業と說けり、今、何を以ての故に麤業と言ふや。

【二七】第一四問、罪業を麤業と名くる理由如何。

答へて曰く、麤業と罪業とは異なること無し、罪は即ち是れ麤にして、名けて細と爲さず。

復次に、聲聞の人は、身口の不善業を以て名けて麤と爲し、意の不善業を名けて細と爲し、瞋恚邪見等の諸の結使を名けて麤罪と爲し、愛慢等の結使を名けて細罪と爲し、三惡覺、所謂欲覺、瞋覺、惱覺を名けて麤と爲し、親里覺、國土覺、不死覺を名けて細と爲し、但善覺を名けて微細と爲すも、摩訶衍中に於ては盡く皆麤と爲す。是を以ての故に此を麤罪と說く。

經 舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、菩薩摩訶薩は云何が身口意の麤業を除くや。佛、舍利弗に告げ給はく、若し菩薩摩訶

薩身を得ず、口を得ず、意を得ずんば、是の如き菩薩摩訶薩は能く身口意の麤業を除く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は初發意より十善道を行じて聲聞心を生ぜず、辟支佛心を生ぜず、是の如く菩薩摩訶薩は能く身口意の麤業を除く。

【論】問うて曰く。（二八）何等か身口意の細業と相異する者を麤と爲すや。答ふ、向に說く所の者の如きは是なり。

復次に、凡夫人の業は聲聞の業に於て麤と爲し、聲聞の業は大乘に於て麤と爲す。

復次に、垢業を麤と爲し、垢に非ざる業を細と爲す。能く苦受の因緣を生ずる業を麤と爲し、苦受の因緣を生ぜざる業を細と爲す。有覺有觀の業を麤と爲し、無覺無觀の業を細と爲す。復次に、我乃至知者見者を見るを麤と爲し、若し我乃至知者見者を見ず、但だ三業の處、五衆・十二入・十八界を見るを細と爲す。

復次に、見る所ある者を名けて麤と爲し、見る所なき者を名けて細と爲す。是を以ての故に、佛舍利弗に告げ給はく、「若し菩薩、身口意を得ざれば是の時則ち三麤業を除く」と。復次に、初發意に畢竟空中に住するに一切法は不可得なり。而も常に十善道を行じて、聲聞辟支佛心を起さず、相を取らざる心を以て一切諸の善根、皆阿耨多羅三藐三菩提に迴向す。是を菩薩は身口意業の麤罪を除くと名け、「また」名けて清淨と爲す。

【二八】第一五問、身口意の細業と異なるものを麤となすとは何の謂ひぞや。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり。般若波羅蜜（多）を行じ、佛道を淨むる時に、檀（那）波羅蜜（多）・尸羅波羅蜜（多）・羼提波羅蜜（多）・毘梨耶波羅蜜（多）・禪波羅蜜（多）を行じて、是の菩薩摩訶薩は身口意の麤業を除く。舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の佛道なると。佛、舍利弗に告げ給はく、佛道とは菩薩摩訶薩の身を得ず、口を得ず、意を得ず、檀（那）波羅蜜（多）を得ず、乃至般若波羅蜜（多）を得ず、聲聞辟支佛を得ず、菩薩を得ず、佛を得ざるなり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の佛道と名く。所謂一切諸法は不可得なるが故なり。

【釋】釋して曰く。是の菩薩は、六波羅蜜（多）の總相に依りて、佛道を淨む。

問うて曰く、〔三九〕舍利弗は、佛に從つて、三惡三麤を除くことを聞けり、卽ち是れ佛道を淨むるなり。今何を以てか更に問ふや。答へて曰く、先には三業の清淨の相を說き、今は一切法の清淨の相を說く。先には略說し、今は別相を說く。先には但だ三業を得ざる〔を說き〕、今は六波羅蜜（多）、諸の賢聖、菩薩及び佛を得ざる、是を佛道を淨むと名く。〔四〇〕一切法は皆不可得なるが故に、身を得ず乃至般若波羅蜜（多）を得ざる、是を法空と名け、聲聞乃至佛を得ざる是を衆生空と名く。菩薩は是の二空の中に住し、漸漸に一切不可得空を得。不可得空は卽ち是れ諸法實相なり、是の不可得空の義は先に十八空の中に說くが如し。

〔三九〕第一六問、舍利弗が重ねて佛道を問へる理由如何。
〔四〇〕法空と、衆生空との義解。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、六波羅蜜（多）を行ずる時、能く壞する者なし。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の六波羅蜜（多）を行ずる時、能く壞する者なきや」と。佛、舍利弗に告げ給はく、「若し菩薩摩訶薩は六波羅蜜

〔多〕を行ずる時、色乃至識有るを念ぜず、眼乃至意有るを念ぜず、色乃至法有るを念ぜず、眼界乃至法界有るを念ぜず、四念處乃至八聖道分有るを念ぜず、檀波羅蜜〔多〕乃至般若波羅蜜〔多〕有ることを念ぜず、十力乃至十八不共法有ることを念ぜず、須陀洹果乃至阿羅漢果有るを念ぜず、辟支佛乃至阿耨多羅三藐三菩提有るを念ぜず、舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の如く行じ、六波羅蜜〔多〕を行じ增益するとき能く壞する者なし」と。

【論】釋して曰く、佛は舍利弗の爲に、種種に諸の菩薩を分別し、次に爲に、菩薩ありて、發心の時より、能く壞する者あること無きを說き給へば、舍利弗は、驚喜して諸の菩薩を恭敬せり。是の故に問ふ、「菩薩は結使未だ斷ぜず、未だ實法に於て證を作さざるに、何の因緣の故に破壞すべからざるか」と。佛答へ給はく、若し菩薩は色あることを念ぜず、乃至阿耨多羅三藐三菩提あるを念ぜず、是の法空を得るが故に亦衆生空を得、若し是の法空觀は空なる者も亦空なり。是の無礙般若波羅蜜〔多〕の中に住すれば、能く壞する者あること無し。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜〔多〕の中に住して智慧を具足し、是の智慧を以て常に惡道に墮せず、弊惡を生ぜず、人中に貧窮人と作らず、受くる所の身體は、天人阿修羅の爲に憎惡せられず。

【論】釋して曰く、此の菩薩は先世より來智慧を愛樂し、一切の經書を學し、觀察し思惟して諸法を聽採し、自ら智力を以て一切法中の實相を推求し、是の一切法の實相を得るが故に諸佛の爲に深心に愛念せられ、是の無量の智慧福德の因緣の故に身心を具足して常に富樂を受くるも諸の不可なし。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の智慧なる。佛、舍利弗に告げ給はく、菩薩摩訶薩は是の智慧の成就せるを用つて、十方恒河沙等の如き諸佛を見奉り、法を聞き、僧を見、亦嚴淨の佛土を見る。菩薩摩訶薩は是の智慧を用て佛想を作さず、菩薩想を作さず、聲聞辟支佛想を作さず、我想を作さず、佛國想を作さず。是の智慧を用つて檀〔那〕波羅蜜〔多〕を行ずるも亦檀〔那〕波羅蜜〔多〕を得ず、乃至般若波羅蜜〔多〕を行ずるも亦般若波羅蜜〔多〕を得ず、四念處を行ずるも亦四念處を得ず、乃至十八不共法を行ずるも亦十八不共法を得ざるなり。舍利弗よ、是れを菩薩摩訶薩の智慧と名く。是の智慧を用ふれば能く一切法を具足するも、亦一切法を見ず。

【論】釋して曰く、是の中に佛は二種の智慧を說き給ふ。一には破壞の諸法を分別して而も相を取らず、二には不著の心にして相を取らず、十方の諸佛を見奉りて法を聽く。

問うて曰く、〔三〕云何が檀〔那〕波羅蜜〔多〕を行じて、而も檀〔那〕を得ざるや。

答へて曰く、不得の檀〔那〕の中には、若くは一、若くは異、若くは實、若くは空なり。是の檀〔那〕は和合の因緣より生じ、是の檀〔那〕の中に於て衆生をして富樂を得せしめ、及び佛道を勸助す、是を以ての故に檀〔那〕を行ずるも亦檀〔那〕を得ず。得ざるの義は上に說くが如し。乃至、十八不共法も亦是の如し。是を菩薩の智慧は、能く一切法を具足して、而も諸法を得ずと名く。

【三】第一七問、布施波羅蜜多を行じて、而も布施を得ずといふ理由如何。

【經】舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、五眼を淨む。〔五眼とは肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼なりと。〕舍利

弗、佛に白して言さく、世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の肉眼は淨なりやと。佛、舍利弗に告げたまはく、有る菩薩は肉眼〔を以て〕百由旬を見、有る菩薩は肉眼〔を以て〕二百由旬を見、有る菩薩は肉眼〔を以て〕一閻浮提を見、有る菩薩は肉眼〔を以て〕二天下、三天下、四天下を見、有る菩薩は肉眼〔を以て〕小千世界を見、有る菩薩は肉眼〔を以て〕中千世界を見、ある菩薩は肉眼〔を以て〕三千大千世界を見る。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の肉眼淨と爲す。

【論】問うて曰く、(三二)佛は何を以てか般若波羅蜜〔多〕を行じて、五眼を生ずることを說かず、而も五眼を淨むることを說き給ふや。答へて曰く、菩薩は先に肉眼あり、亦四眼の分あるも、諸罪結使を以て覆ふが故に淸淨ならず、鏡性には照明あるも垢の故に見えず、若し垢を除けば則ち照明は本の如くなるが如し。菩薩は六波羅蜜〔多〕を行じて諸の垢法を滅するが故に眼淸淨なることを得。肉眼は業因緣の故に淸淨なり。天眼は禪定及び業因緣の故に淸淨なり。餘の三眼は無量の智慧福德を修する因緣の故に淸淨なること最大なり。菩薩の肉眼は最も勝れて三千大千世界を見る。

問うて曰く、(三三)若し三千大千世界の中には、百億の須彌山・諸山・鐵圍・陵埠・樹木等、是れ障礙を事とす。云何が遍ねく見るを得ん。若し能く見るを得ば、何ぞ天眼を用ゐん、若し見る能はずんば、此の中に云何が三千大千世界を見ると說くや。答へて曰く、障礙を以ての故に見ず。若し障礙なければ三

【三二】第一八問、佛は何故に五眼を生ずることを說かずして、五眼を淨むることを說き給ひしや。

【三三】第一九問、三千大千世界中には百億の障礙ありて遍く見ることを妨ぐ、若し能く見ることを得ば天眼の必要なく、若し見ること能はずんば何故に三千大千世界を見ると說くや。

千世界を見ること掌を觀るが如きと異なること無きとを得ん。

復次に、有人の言く、菩薩の天眼に二種あり、一には定禪力より得、二には先世の行業の果報として得。業報は天眼を生じて常に肉眼の中に在り。是の故に三千世界に有る所の物は、礙を爲すこと能はず、天眼に因つて障を開き、肉眼〔を以て〕見ることを得。是の故に肉眼〔を以て見ることを〕得るを果報生の天眼と名け、常に現に前に在り、心を攝することを得ず。

問うて曰く、〔三〕佛を世尊と爲し、力者周遍す。何を以てか、但だ一の三千大千世界を見るのみにして、多くを見ること能はざるや。答へて曰く、若し肉眼にして、能く三千大千世界に過ぎて、復見る所あらば、何ぞ天眼を用ゐん。肉眼は及ぶ能はざるを以ての故に天眼を修學す。

復次に、三千大千世界は劫初に一時に生じ、劫盡くるとき一時に滅す。世界の外の無央數由旬は皆是れ虚空なり。空中には常に風あり。肉眼と風とは相違す。相違するを以ての故に、異なる世界を過見するを得ること能はず。或は菩薩あり、三千世界の境上に住し、其の道數を計りて、亦適に他方の近き世界を見るべし。

問うて曰く、〔三〕菩薩及び佛は何を以てか、無量清淨の福德を集めて、肉眼をして遠く見る所あらしめざるや。答へて曰く、是の肉眼の因緣は虚誑にして淨ならず、天眼の因緣は清淨なり。若し天眼なく

【三】第二〇問、佛は世尊たり、力の周遍せざる所なしといふ。然らば何故に一の三千大千世界をのみ見て、餘地の三千大千世界を見ること能はざるや。

【三】第二一問、佛菩薩は何故に肉眼をして遠く見せしめざるや。

んば當に肉眼を修して強ひて遠く見せしむべし。

復次に、經中に說くが如くば、極めて遠きは三千世界を見るなり。佛法は不可思議にして經法甚だ多く、或は能く遠く見る。但この中には小しく遠く佛道を見るを說かず。菩薩は二千の中世界を見る。清淨の業因緣を種うる能はざるが故に、小にして復如かざる者は小千世界を見、復如かざる者は四天下・一須彌山・一日月處を見、又三天下・二天下・一天下・千由旬乃至百由旬を見る。是を最小の肉眼の淨なるものと名く。

問うて曰く、〔三六〕何を以てか九十、八十等の由旬を說いて以て小と爲さざるや。答へて曰く、轉輪聖王の見る所は餘人に過ぎたり。又人は先世に然燈等の因緣の故に、堅固の眼根を得て能く遠く見る所あり。遠しと雖も終に百由旬を見ると能はず、是の故に菩薩の小なる者は百由旬を見る。

問うて曰く、〔三七〕日月は上に在りて地を去ること四萬二千由旬、人皆能く見る、何を以てか百由旬を見ること能はざらん。百由旬を見ることは何ぞ稱するに足らんや。答へて曰く、日月は遠しと雖も自ら光明あり、還つて其の形を照らし、人は之れを見ることを得るも餘色は然らず。又日月は遠きが故に、見ると雖も而も顚倒せり。何となれば日月は方に圓きこと五百由旬なるに、而も今見る所は扁の如きに過ぎず、大なるを而も小と見るは顚倒にして實に非ず、菩薩の肉眼は則ち然らず。

【三六】第二二問、九十又は八十等の由旬を小となさざる理由如何。

【三七】第二三問、日月は地を去ること四萬二千由旬、而も人みな能く彼等を見る。今それ百由旬を見ること能はずとは如何なる理由なるか。

問うて曰く、（三八）菩薩に既に肉眼を得て、能く何事をか見るや。答へて曰く、可見の色を見る、色の義は色聚中に廣く說けり。

論 舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の天眼は淨なりや。佛、舍利弗に告げ給はく、菩薩摩訶薩の天眼は四天王の見る所、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天の見る所、梵天王の見る所、乃至阿迦膩吒天の見る所を見、菩薩の天眼の見る所の者は四天王乃至阿迦膩吒天の知らず、見ざる所なり。舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩の天眼は十方の恒河沙等の如き、諸佛の世界の中の衆生の、此に死し彼に生ずるを見る。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の天眼は淨なりと爲す。

釋 釋して曰く、（三九）菩薩の天眼に二種あり、一には果報得、二には修得なり。果報得は、常に肉眼と合して用ゐ、唯夜闇には、天眼のみ獨り用ふ。諸人は果報の天眼を得て四天下を見、欲界の諸天は下を見て上を見ず、菩薩所得の果報の天眼は三千大千世界を見る。禪定〔を修し〕欲を離れて〔得る所〕の天眼の見る所は先に十力の天眼明中に說くが如し。菩薩は是の天眼を用ゐて十方の恆河沙等の如き世界中の衆生の生死・善惡・好醜及び善惡業の因緣を見て障礙せらるること無し。一切皆見、四天王天乃至阿迦膩吒天の見る所、又能く之に過ぐ。是の諸天の菩薩は、天眼の見る所を知ること能はず。何となれば是の菩薩は三界を出でて（四〇）法性生身を得、菩薩の十力を得るが故なり。是の如き等の因緣〔を以て〕菩薩の

【三八】第二四問、菩薩の肉眼なもて見るものは何物なるか。
【三九】菩薩に二種の天眼あり。
【四〇】法性生身。法性の理體を證得する佛の眞身なり、三身の中の法身報身中に攝む。

天眼は淨なり。餘の菩薩の天眼の論議は菩薩の五神通を讃ずる中に說くが如し。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の慧眼は淨なるや。佛、舍利弗に告げたまはく、慧眼の菩薩は是の念を作さず、「法あり、若くは有爲、若くは無爲、若くは世間、若くは出世間、若くは有漏、若くは無漏なり」と。是慧眼の菩薩は法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無し。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の慧眼は淨なりと爲す。

【論】釋して曰く、肉眼は障外の事を見ること能はず、又遠く見ること能はず、是の故に天眼を求む。天眼は復能く見ると雖も、亦是れ虛誑にして、一異の相を見、男女の相を取り、樹木等の諸物の相を取り、衆物和合の虛誑の法を見る。是を以ての故に慧眼を求むるに、【四一】慧眼の中には、是の如き過なし。

問うて曰く、【四二】若し爾らば何等か是れ慧眼の相なるや。答へて曰く、有人は言ふ、八聖道の中に、正しく是の慧眼の相を見、能く【四三】五受

【四一】慧眼。慧よく觀照するが故に眼と名く、諸法皆空の眞理を照す空慧の異名なり。

【四二】第二五問、慧眼の相とは何ぞや。

【四三】五受衆は、新譯にては五受蘊といふ。受とは、心識が所對の境、卽ち對象を領納する作用にて、廣義に於ける感覺なり。之を差別して五種となす。

(一)憂受、意識の領納なり。己の意に適せざるものに對し、分別して憂惱するをいふ。(二)喜受、これ又意識の領納なり、己の意に適するものに對し、分別して喜悅するをいふ。(三)苦受、觸覺等の五感覺の領納なり。己の意に適せざるものに對し、無分別に苦痛を感ずるをいふ。(四)樂受、觸覺等の五感覺の領

衆の實相を見る、諸の顚倒を破するが故なりと。有人の言く、能く涅槃の慧を緣ずるを名けて慧眼と爲す。所緣は破壞すべからざるが故に、是の智慧は虛誑に非ずと、有人の言く、三解脫門相應の慧、是を慧眼と名く。何となれば是の慧は能く涅槃門を開くが故なりと。有人の言く、智慧現前して能く實際を觀じ、了了に深く入り、通達して悉く知る、是を慧眼と名くと。有人の言く、能く法性に通達し、直に過ぎて礙なしと。有人の言く、定心にして諸法の相を知る。是の如きを慧眼と名くと。有人の言く、法空是を慧眼と名くと。有人の言く、不可得空中には亦法空も無し、是を慧眼と名くと。有人の言く、十八空は皆是れ慧眼なりと。有人の言く、癡と慧は一に非ず異に非ず、世間の法は出世間に異ならず、出世間の法は世間に異ならず、世間の法は即ち是れ出世間、出世間の法は即ち是れ世間なり。何となれば異は不可得なればなり。諸觀は諸の心行を滅し、轉た還た共滅する所なく、一切の語言世間の法相は涅槃の如くにして異ならず、能く是の智慧を得る是を慧眼と名く。

復次に、此の中に佛自ら慧眼を說き給はく、菩薩は一切法中に有爲、若くは無爲、若くは世間、若くは出世間、若くは有漏、若くは無漏等を念せず、是を慧眼と名くと。若し菩薩は有爲·世間·有漏を見れば即ち有見の中に墮し、若し無爲、出世間、無漏を見れば、即ち無見の中に墮す。是の有無の二

納なり。己の意に適するものに對し、無分別に快樂を感ずるをいふ。

(五) 捨受、六識共通の領納なり。

不違不順の境、即ち意に適するにも非ず適せざるにも非ざる者に對し、苦痛も感ぜず、快樂をも感ぜざるをいふ。

見を捨して、以て戲論せず、中道に於いて慧を行ずる、是を慧眼と名く。是の慧眼を得れば法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無し。何となれば是の慧眼を得れば邪曲を破すればなり。諸法の無明・諸法の總相・別相も各各是の如し。

問って曰く、(四四)阿羅漢辟支佛も亦慧眼を得。何を以てか法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無しと說かざるや。答へて曰く、(四五)慧眼に二種あり、一には總相、二には別相なり。聲聞辟支佛は、諸法の總相を見る、所謂無常・苦・空等なり。佛は、總相と別相の慧を以て、諸法を觀じ給ふ。聲聞辟支佛は、慧眼ありと雖も、量あり、限あり。

復次に、聲聞辟支佛の慧眼は諸法實相を見ると雖も、因緣少なきが故に慧眼も亦少なく、遍ねく法性を照らすこと能はず。譬へば燈油の炷は淨しと雖も、小なるが故に廣く照らすこと能はざるが如し。諸佛の慧眼は、諸法實相を照らして、其の邊底を盡くす。是を以ての故に、法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無し。譬へば劫盡の火は三千世界を燒くに、明にして照らさざるもの無きが如し。復次に、聲聞辟支佛の慧眼にして、法として知らざる者なくんば、一切智人と何等の異あらんや。菩薩は世世に、福德智慧を集めて苦行す、何ぞ施用せられん。

【四四】第二六問、阿羅漢及び辟支佛にも亦慧眼あり、彼等を說いて、法として見聞識知せざるなしといはざるは何故ぞや。

【四五】二種の慧眼——(一)總相、(二)別相。二乘は總相を見、佛は總別二相の慧を以て、諸法を觀す。

問うて曰く、(四六)佛は佛眼を用つて、法として知り給はざるなし、是れ慧眼に非ず、今云何が慧眼は、法として知らざる無しと言ふや。答へて曰く、慧眼は、成佛の時、變じて佛眼と名く。無明等の諸の煩惱、及び習滅するが故に、一切法中に皆悉く明了なればなり。佛眼の中に說くが如く、法として見聞知識せざること無し。是を以ての故に肉眼、天眼、慧眼、法眼は、成佛の時、其の本名を失して、但だ佛眼と名く。譬へば閻浮提の四大河は、大海中に入れば、則ち其の本名を失するが如し。何となれば肉眼は諸の煩惱、有漏業より生ずるが故に、虛誑にして實ならず、但だ佛眼には誑法なし。天眼も亦禪定に從ひ、因緣和合して生ずるが故に、虛誑にして、實の如く事を見ること能はず。慧眼、法眼は、煩惱の習未だ盡きざるが故に、畢竟清淨ならざるが故に捨つ。佛眼の中には、謬錯あると無く、其の邊極を盡くす、是を以ての故に、阿羅漢辟支佛の慧眼は、畢竟清淨なること能はざるなり。故に法として見ざること無きこと能はず。

問うて曰く、(四七)佛は現に果報を得て、肉眼もて能く色を見給へり、是の事云何。答へて曰く、肉眼は眼識を生ずと雖も、而も佛は其の用に隨はず、以て實と爲し給はず、皆自在神通中に說くが如し。佛、阿難に告げ給はく、見る所の好色中に、厭惡心を生じ、眼に惡色を見るも、不厭惡心を生じ、或時は色を見て、汙穢、不汙穢を生ぜず、但だ捨心を生ず。是の如くなれば、則ち肉眼も施す所の用な

【四六】第二七問、佛の一切法を知り給ふは佛眼なり。今何を以てか慧眼は一切法を知らざるなしと云ふや。

【四七】第二八問、佛は肉眼もて能く果報を見給ふ理由如何。

しと。

復次に、有人の言く、「聖道を得る時は、(四八)五情清淨にして、本に異なる」と。復次に、諸法の畢竟空、及び諸法の通達無礙、是の二を總じて慧眼と爲す。

【四八】五情とは、眼耳鼻舌身の五根なり。根よく情識を生ずるが故に五情といふ。

卷の第四十

往生品第四の下を釋す。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の法眼は淨なりや、佛、舍利弗に告げたまはく、菩薩摩訶薩は法眼を以て知るなり、是の人は隨信行なり、是の人は隨法行なり、是の人は無相行なり、是の人は空解脫門を行じ、是の人は無相解脫門を行ず。是の人は無作解脫門を行じて五根を得、五根を得るが故に無間三昧を得。無間三昧を得るが故に解脫智を得、解脫智を得るが故に常に三結、有身見、疑、戒取を斷ず。是の人は名けて須陀洹と爲す。是の人は思惟道を得て婬恚癡を薄くし、當に斯陀含を得べく、思惟道を增進し、婬恚を斷じて當に阿那含を得べく、思惟道を增進し、色染、無色染、無明、慢掉を斷じて阿羅漢を得。是の人は空、無相、無作の解脫門を行じて五根を得、五根を得るが故に無間三昧を得。無間三昧を得るが故に解脫智を得、解脫智を得るが故に所有の集法は皆な是れ滅法なることを知りて辟支佛と作ると、是を菩薩摩訶薩の法眼は淨なりと爲す。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は知るなり、是の菩薩は初發意に檀波羅蜜〔多〕を行じ乃至般若波羅蜜〔多〕を行ず。信根、精進根、善根を成就し、純ら厚く方便力を用ふるが故に、衆生の爲に身を受けて若くは刹利の大姓に生じ、若くは婆羅門の大姓に生じ、若くは居士の大家に生じ、若くは四天王天處乃至他化自在天處に生ず。是の菩薩は其の中に於て住し、衆生を成就して其の樂ふ所に隨って皆之を給施し、亦た佛の世界を淨め、諸佛に値遇したてまつりて供養、恭敬、尊重、讚歎し、

及び阿耨多羅三藐三菩提に至りて、亦た聲聞・辟支佛地に墮せず、是れ菩薩摩訶薩の法眼は淨なりと爲す。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に於て退くと知り、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に於て退かずと知り、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の記を受くと知り、是の菩薩は未だ阿耨多羅三藐三菩提の記を受けずと知り、是の菩薩は阿鞞跋致地に到ると知り、是の菩薩は未だ阿鞞跋致地に到らずと知り、是の菩薩は神通を具足せりと知り、是の菩薩は未だ神通を具足せずと知り、是の菩薩は已に神通を具足して飛んで十方の恒河沙等の如き世界に到り、諸佛を見たてまつりて供養、恭敬、尊重、讚歎すと知り、是の菩薩は未だ神通を得ず、當に神通を得べしと知り。是の菩薩は當に佛世界を淨むべし、〔若くは〕佛世界を淨めず〔と知り〕、是の菩薩は、衆生を成就す、〔若くは〕未だ衆生を成就せず〔と知り〕、是の菩薩は諸佛の爲に稱譽せらる、〔若くは〕稱譽せられず〔と知り〕、是の菩薩は諸佛に親近す、〔若くは〕佛に親近せず〔と知り〕、是の菩薩は壽命量あり、〔若くは〕壽命無量なり〔と知り〕、是の菩薩は佛を得る時比丘衆に量あり、〔若くは〕比丘衆無量なり〔と知り〕、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時菩薩を以て僧と爲す、〔若くは〕菩薩を以て僧と爲さず〔と知り〕、是の菩薩は當に苦行難行を修すべし、〔若くは〕苦行難行を修せず〔と知り〕、是の菩薩は一生補處なり、〔若くは〕未だ一生に補處ならずと知り、是の菩薩は最後身を受く、〔若しくは〕未だ最後身を受けずと知り、是の菩薩は能く道場に坐す、〔若くは〕道場に坐すること能はず〔と知り〕、是の菩薩には魔あり、〔若くは〕魔なし〔と知る〕。是の如く、舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩の法眼は淨なりと爲す。

【論】釋して曰く、菩薩摩訶薩は、初發心の時、肉眼を以て、世界の衆生の諸の苦患を受くるを見、心に慈愍を生じ、諸の禪定を學し、五通を修得し、天眼を以て、遍ねく六道中の衆生の、種種なる身

心の苦を受くるを見て、益益憐愍を加ふるが故に、故らに慧眼を求めて、以て之を救濟せんとし、是の慧眼を得已りて、衆生の心相の種種不同なるを見、云何が衆生をして、是の實法を得せしめんと。故らに〔一〕法眼を求めて衆生を引導し、法中に入らしむるが故に法眼と名く。

所謂是の人は〔二〕隨信行なり、是の人は隨法行なりとは、初め無漏道に入るに鈍根なる者を隨信行と名く。是の人は初め信力に依るが故に道を得、名けて隨信行と爲す。利根なる者を隨法行と名く、是の人は諸法を分別するが故に道を得、是を隨法行と名く。是の二人は、十五心中には、亦た名けて〔三〕無相行と爲し。是を過ぎて已往は、或は須陀洹と名け、或は斯陀含と名け、或は阿那含と名く。十五心中に疾速にして、人の能く其の相を取る者なし。故に無相と名く。有人は無始世界より來、性常に質直にして、實事を樂する者、有人は好みて捨離を行ずる者、有人は世世常に善寂を好む者あり。實を好む者は、空解脱門を用つて道を得、諸實中の空を以て第一と爲すが故なり。捨を行ずることを好む者は、無作解脱門を行じて道を得。善寂を好む者は、無相解脱門を行じて道を得。

問うて曰く、〔四〕何を以てか五根を得と説くや。答へて曰く、有人の言く、一切聖道を名けて五根成

【一】法眼とは、五眼の一、分明に衆生の差別の法を觀察することなり。

【二】隨信行と隨法行、聲聞乘の見道位に於て、鈍根は他の言教を信ずるによつて隨つて修行するを隨信行といひ、利根は自ら法を思惟して行を成するを隨法行といふ。

【三】無相行とは、四諦の行相を別觀せず、唯空觀を以て無間刹那相續して、三界の見惑を斷ずるをいふ。これを以て見道の位となす。

【四】第一問、五根を得とは何を意味するか。

と爲す。五根［によりて］成立するが故に。八根は皆これ善なりと雖も、而も三無漏根は別異あること無し。是を以ての故に但だ五根を說く。果を取る時、相應の三昧を無間三昧と名く。是の三昧を得已りて解脫智を得、是の解脫智を以て三結を斷じ果證を得。有衆見とは五受衆中に於て我若くは我所を生ず。疑とは三寶、四諦中に於ても信せざるなり。齋戒取とは九十六種の外道法中には是の法を取りて苦の解脫を得んことを望む。

問うて曰く、（五）見諦に斷ずる所は十結にして、須陀洹果を得。何を以てか但だ三を說いて七を說かざるや。答へて曰く、若し有衆見を說き已れば一切の見結を說く。經に、有衆見を六十二見の根本と爲すが故に、若し人我に著し、復た我を思惟して、是を常と爲し、［或は］是を無常と爲すと說くが如し。若し無常と謂はば斷滅の中に墮して而も邪見を生じ、罪福あること無し。若し常と爲すと謂には、常見の中に墮して、而も齋戒取を生じ道を得んことを計望し、或は後世の福德を修す。此の二事を得んことを樂欲するが故に、戒を取り、苦樂の因緣を求むるが故に、天の所作と謂ひ、更に見取を生ず。若し有衆見を說けば則ち是の二見を攝す。邊見と邪見なり。若し齋戒取を說けば、已に見取を說く。餘の四結は、未だ根本を拔かざるが故に是を說かず。十結は、三界四諦所斷に於いて、分別するに八十八あり。須陀洹乃至辟支佛なり。聲聞辟支佛道を分別するとは、先に說くが如し。（六）菩

【五】第二問、見諦の所斷は十結なり、然るに但三を說いて七を說かざるは何故なるか。

【六】菩薩の二種の法眼。

薩の法眼に二種あり、一には分別して、聲聞辟支佛の方便得道門を知り、二には菩薩の方便得道門を知る。聲聞辟支佛は、先に已に處處に說けり。今は當に菩薩法を分別すべし。若し菩薩は是の菩薩の深く六波羅蜜［多］を行じて、諸の煩惱を薄くすることを知るが故に、(七)信根と精進根を用ゐ、及び方便して、衆生を度せんが爲の故に身を受く。是の菩薩は、生死の肉身にして、未だ法性・神通・法身を得ず。是を以ての故に三根を說かず。未だ欲を離れざるが故に、今世に布施の功德、信根、精進根を行じ、後世に刹［帝］利の大姓乃至他化自在天に生ず、先づ因を知つて後に果を知るなり。

復次に、是の菩薩の不退なる者は、先に說くが如し、不退轉の相も、亦た後の阿鞞跋致品中に說くが如し。此と相違するを名けて退と爲す。(八)不退の菩薩に二種あり、一には(九)受記するもの、二には未だ記を受ざるものなり。首楞嚴三昧の四種の受記中に說くが如し。神通を具足すとは、十方恆河沙世界の中に於て一時に能く無量の身を變化し、諸佛を供養したてまつりて法を聽き、說法して衆生を度す。是等は佛を除いては、能く及ぶ者なし。是を末後身の菩薩と爲し、此と相違する者を［神通］を具足せずと名く。

復次に、各各自地中に、少くる所なきを名けて、具足と爲し、各各の地中に、未だ成就せざるは、

【七】精進根とは、勇猛に善法を修するをいふ。卽ち餘念なく、道德的生活の向上を謀ることなり。之を或は勤根ともいふ。

【八】二種の不退の菩薩。

【九】受記とは、又記別といふ。佛より當來必當作佛の證明を受くるをいふ。

是れ不具足なり。〔一〇〕神通を得るに二種あり。有用の者と不用の者となり。未だ神通を得ずとは、菩薩あり、新發意の故に未だ神通を得ず。或は未だ欲を離れざるが故に、懈怠の心の故に、餘法を行ずるが故に、是を未だ得ずと爲し、上と相違する。是を得と爲す。佛世界を淨むると佛世界を淨めざるとは、先に説くが如し。〔一一〕衆生を成就する者に二種あり、先ず自ら功徳を成じ、然る後に衆生を度する者あり。先ず〔一二〕衆生を成就し、後に自ら功徳を成ずる者あり。寶華佛の如きは、涅槃せんと欲する時、二菩薩の心を觀ずらく、「所謂る彌勒、釋迦文〔二〕菩薩〔の中〕、彌勒菩薩は、自らの功徳を成就し、弟子未だ成就せず。釋迦文菩薩は、弟子を成就して、自身未だ成就せず。多人を成ずることは難く、自らを成ずることは則ち易し」と。是の念を作し已りて、雪山の谷の寶窟の中に入り、身より光明を放ち給へり。是の時。釋迦文菩薩は、佛を見たてまつり、其の心清淨に、一足もて立つこと、七日七夜にして、一偈を以て佛を讃じたてまつれり。是の因緣を以ての故に、九劫を超越しぬ。是の如き等は、衆生を成就すると、衆生を成就せざる者とを知るなり。諸佛の稱譽は先に説くが如し。此と相違するを名けて、稱譽せずと爲す。諸佛に親近する、無量の壽命の、無量の比丘僧衆の菩薩は、佛と爲つて苦行を修せず、初品は未だ説かざるが如し。一生補處とは、或は相を以て知る者あり。阿私陀仙人の如きは、其の身相を觀じて、今世の成佛を知れり、或者

【一〇】有神通の二種——有用と不用と。
【一一】二種の成就衆生者。
【一二】未だ衆生を成就せずとは、衆生の利益功徳を謀つて、之を成辨するをいふ。

婆羅門は、乳糜を見て、今日成佛する者の、應に食すべきを知り、遍吉菩薩、觀世音菩薩、文殊師利菩薩等の如きは、是の菩薩の、諸佛の相の如くなるを見て、當に成佛すべきを知る。是の如き等は道場に坐する者なり。有る菩薩は、菩薩の行處を見るに、地下に金剛地ありて、是の菩薩を持す。又天龍鬼神の種種の供養を持し、具に送りて、道場に至るを見る。是の如き等は道場に坐することを知る。魔ありとは、宿世に他の行道、及び種種の佛道を求むる因緣を遮し、慈を行ずることを喜ばず、空等の餘法を行ずることを好む。是の如き等の因緣もて、宿世に他の行道を破するを以ての故に魔ありて破壞す。

問うて曰く、（二三）云何が末後身の菩薩は、惡業報を受け、魔來りて壞を爲すか。答へて曰く、菩薩は、種種の門を以て、佛道に入る。或は、（二四）悲門より、或は精進（二五）智慧門より、佛道に入る。是の菩薩は、精進智慧門を行じて、悲心を行ぜず、好く精進智慧を行ずるが故なり。譬へば貴人の、種種の好衣ありと雖も、或る時は一を著して、餘を著せざるが如し。菩薩も亦た是の如く、種種の行を修して、以て佛道を求め、或は精進智慧の道を行じて、慈悲心を息む。行道を破する者は、增上慢の故なり。諸の長壽の天、龍、鬼神の方便を識らざる者は、惡行の因緣を

【二三】第三問、云何が末後身の菩薩は、惡業報を受け、魔來りて壞を爲すか。

【二四】悲門とは、諸佛菩薩の利他の德なり。大悲の故に、永く衆生を度して、涅槃に住せざるをいふ。

【二五】智慧門とは、諸佛菩薩の自利の德なり。大智の故に、自ら惑業を斷じて、生死に住せざるをいふ。前の悲門と共に、一具不離の德と稱せらる。或は此の智慧門を略して、單に智門ともいふ。

作し、若し報を受けざるを見て、斷滅の見を生ず。是の故に佛は現に報を受けたまへり。是の故に罪の因緣なしと雖も、實の魔來るは、方便力を以ての故に、魔あるを現ずるなり。是の如き等の一切の聲聞、辟支佛、菩薩の種種の方便門は、衆生をして道に入らしむ。是を（二六）法眼淨と名く。

經 舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の佛眼は淨なりや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩あり、佛道を求むるの心、次第に如金剛三昧に入りて、一切種智を得。爾の時、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を成就す。是の菩薩摩訶薩は、一切種智を用つて、一切法の中に、法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無し。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の、阿耨多羅三藐三菩提を得る時の、佛眼淨なりと爲す。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、五眼を得んと欲せば、當に六波羅蜜〔多〕を學すべし。何となれば、舍利弗よ、是の六波羅蜜〔多〕の中には、一切善法、若くは聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法を攝すればなり。舍利弗よ、若し實語あり、能く一切善法を攝するは、般若波羅蜜〔多〕是なり。舍利弗よ、般若波羅蜜〔多〕は、能く五眼を生ず。菩薩の五眼を學する者は、阿耨多羅三藐三菩提を得。

【二六】法眼淨とは、分明に眞諦を見るをいふ。大小二乘に通ず。小乘は初果に四諦の理を見るをいひ、大乘は初地に無生法忍を得るをいふ。

【二七】佛眼の義解。

論 釋して曰く、（二七）菩薩は十地の中に住して、六波羅蜜〔多〕、乃至一切種智を具足す。菩薩は如金剛三昧に入りて、諸の煩惱の習を破し、即時に諸佛の無礙解脫を得て、即ち佛眼を生ず。所謂る、一

切種智、十力、四無所畏、四無礙智、乃至大慈大悲等の諸の功德、是を佛眼と名く。

問うて曰く、(一八)智慧は物を見る。是れ眼の相なり。云何が大慈悲等を名けて、眼と爲すや。答へて曰く、諸の功德は、皆慧眼と相應するが故に、通じて名けて眼と爲す。

復次に、(一九)慈悲心に三種あり、衆生緣と、法緣と、無緣となり。凡夫人は衆生緣なり。聲聞、辟支佛及び菩薩は、初は衆生緣にして、後は法緣なり。諸佛は、善く畢竟空を修行するが故に、名けて無緣と爲す。是の故に慈悲をも亦た佛眼と名く。

已に佛眼を說けり。今、佛眼の所用を說かん。是の眼は、法として見ざる[なく]、聞かざる[なく]、知らざる[なく]、識らざる無し。

復次に、有人の謂はく、「十住の菩薩と佛とは、差別あること無し。遍吉文殊師利、觀世音等の如きは、佛の十力の功德を具足し、而も佛と作らず、[そは]廣く衆生を度するが爲の故なり。是の故に疑を生ず」と。是を以ての故に佛眼の相は十方の衆生、及び諸法の中に、見ざること無く、聞かざること無しと說く。是の諸の菩薩は、餘の菩薩より大なりと雖も、佛に比すれば遍ねく知ること能はず、月の光明は大なりと雖も、日に於ては則ち現せざるが如し。

問うて曰く、(二〇)眼は見相と爲す、云何が聞を說くや。答へて曰く、衆生の智慧は、(二一)六情生じて

【一八】第四問、大慈悲等を名けて、眼と爲す理由如何。

【一九】三種の慈悲心。

【二〇】第五問、眼は見るを以て特性とす、今それ何故に佛眼もて、聞かざるなしと說くか。

【二一】六情とは、眼耳鼻舌身意の六根をいひ、六塵とは、其の對象、即ち色、聲、香、味、觸、法をいふ。

六塵を知る。人は謂ふ、「佛は聞かざる所あり。外「道」經書の中に、或は聞かざる所ありと言ふが如し」と。是の故に佛の智慧は、聞かざる所なく、又耳識の因緣は、智慧を生じ、智慧の知る所は、法として聞かざるなし」と言ふ。

問うて曰く、[三]何を以ての故に三識の知る所を合して一と爲すや。三識の知る所は、別して三と爲す。眼を名けて、見と爲し、耳を名けて、聞と爲し、意の知るを、名けて識と爲し、鼻舌身識を、名けて覺と爲す。答へて曰く、是の三識は助道の法多し、是の故に別して說く、餘の三識は爾らず、是の故に合說す。是の三識は但世間の事を知る、是の故に合して一と爲す。餘の三は亦た世間を知り、亦た出世間を知る、是の故に別說す。

【三】第六問、三識の知る所を合して、眼識の一に攝する理由如何。

復次に、是の三識は、但無記法を緣じ、餘の三識は、或は善を緣じ、或は不善を緣じ、或は無記を緣ず。復次に、是の三識は能く、三乘の因緣を生ず。眼に佛及び佛弟子を見、耳に法を聞き、心に籌量し正憶念するが如し。是の如き等の種種の差別あり。是を以ての故に、六識の知る所の事を分ちて四分と爲す。一切種智とは、人の眼の如きは、近を見て遠を見ず、外を見て內を見ず、麤を見て細を見ず、東を見て西を見ず、此を見て彼は見ず、和合を見て散を見ず、生ずる時を見て滅する時を見ず、肉眼もて見るも天眼もて見ず。眼根は成就すれども、未だ欲を離れざる凡夫の人なるが故に天眼なし。天眼もて見るも慧眼もて見ず。凡夫の人は、天眼神通のみを得るが故

に、慧眼なし。慧眼もて見るも、法眼もて見ず。未だ欲を離れざる聲聞の聖人は、種種に衆生を度するの道を知らざるが故に法眼なし。法眼もて見るも、佛眼もて見ず。菩薩は道種智を得て、種種に衆生を度するの道を知るも。未だ成佛せざるが故に、佛眼なきなり。

復次に、肉眼・天眼もて見るも、慧眼・法眼・佛眼もて見ず。凡夫の人は、眼根成就し、天眼神通を得るのみなるが故に、慧眼・法眼・佛眼なし。肉眼・慧眼もて見るも、法眼・佛眼もて見ず　眼根成就せる聲聞の聖人は、種種に衆生を度するの道を知らざるが故に、法眼なく、聲聞の人なるが故に佛眼なし。肉眼・法眼もて見るも、佛眼もて見ず、初めて無生忍を得て、未だ法性生身を受けざる菩薩は、道種智を得れども、未だ成佛せざるが故に、佛眼なきなり。天眼・慧眼もて見るも、法眼・佛眼もて見ず。欲を離れたる聲聞の聖人は、天眼・神通を得れども、菩薩に非ざるが故に道種智なく。道種智なきが故に、法眼なく、聲聞の人なるが故に佛眼なし。天眼・法眼もて見るも、佛眼もて見ず。菩薩は神通を得て、種種に衆生を度する道を知れども、未だ成佛せざるが故に、佛眼なし。慧眼・法眼もて見るも、佛眼もて見ず。菩薩は無生法忍を得、無生法忍を得已りて、能く一切衆生の得道の因縁を觀じ、種種の道を以て、之を度脱するも、未だ成佛せざるが故に、佛眼なきなり。

復次に、肉眼・天眼・慧眼もて見るも、法眼・佛眼もて見ず、眼根成就せる聲聞の聖人は、天眼・神通を得れども、道種智なきが故に、法眼なく、聲聞の人なる故に。佛眼なし。天眼・慧眼・法眼もて見るも、

佛眼もて見ず。法性正身の菩薩は、六神通を具し、種種の道を以て、衆生を度すれども、未だ成佛せざるが故に、佛眼なきなり。

復次に、肉眼・天眼・慧眼・法眼もて見るも、佛眼もて見ず。初めて無生法忍を得たる菩薩は、未だ肉身を捨てず、菩薩の神通、無生法忍を得て、道種智を具足すれども、未だ成佛せざるが故に、佛眼なきなり。是の如き等は、法として見聞覺識せざること無しと名けず、若し佛眼を以て諸法を觀する、是を見ざる所なく、聞かざる所なく、覺せざる所なく、識らざる所なしと名く。五眼を義に隨つて分別することも、亦た是の如し。〔三〕三乘等の諸の善法、是の五眼の因緣たる諸の善法は、六波羅蜜「多」に攝し、是の六波羅蜜「多」は、般若波羅蜜「多」を本と爲す。是を以ての故に般若波羅蜜「多」は、能く五眼を生ずと說く。菩薩は漸漸に、是の五眼を學し、久しからずして、當に佛と作るべし。

【三】三乘とは、言ふまでもなく、聲聞乘と、緣覺乘と、菩薩乘となり。然るに宋本には、三業に作れり。若し三業ならば、身と口と意との行爲を意味するなり。

經　舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜「多」を行ずる時、神通波羅蜜「多」を修し、是の神通波羅蜜「多」を以て、種種なる神通の事を受け、能く大地を動かし、一身を變じて無數の身と爲し、無數の身を還た一身と爲し、隱顯自在にして、山壁樹木皆過ぐるに、無礙なること、空中を行くが如く、水を履むこと、地の如く、虛空を凌ぐこと、鳥の如く、地中に出沒すること

水に出入するが如く、身より煙炎を出だすこと、大火聚の如く、身中より水を出だすこと、雪山の水流の如くす。日月の大德威力の當り難きを、而も能く摩捫し、乃ち梵天に至るまで身自在を得るも、亦た是の如意神通に著せざるなり。神通の事及び己身は皆不可得なり。自性空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故に是の念を作さず、「我は如意神通を得たり。薩婆若心たるを除く」と。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行ずる時如意神通智證を得、是の菩薩は天耳の淨くして人耳に過ぐるを以て、二種の聲、天聲と人聲を聞くも、亦た是の天耳神通に著せず、天耳と聲と及び己身は皆な不可得なり。自性空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生の故に、是の念を作さず、「我是の天耳ありと。薩婆若心たるを除く」と。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、天耳神通智證を得。是の菩薩は如實に他の衆生の心を知る。若くは欲心は、如實に欲心と知り、離欲心は、如實に離欲心と知る。瞋心は、如實に、瞋心と知り、離瞋心は、如實に、離瞋心と知り、癡心は、如實に癡心と知り、離癡心は、如實に離癡心と知り、渇愛心は、如實に渇愛心と知り、無渇愛心は、如實に無渇愛心と知り、有受心は、如實に有受心と知り、無受心は、如實に無受心と知り、攝心は、如實に攝心と知り、散心は、如實に散心と知り、小心は、如實に小心と知り、大心は、如實に大心と知り、定心は、如實に定心と知り、亂心は、如實に亂心と知り、解脫心は、如實に解脫心と知り、不解脫心は、如實に不解脫心と知り、有上心は、如實に有上心と知り、無上心は、如實に無上心と知り、亦た是の心に著せず。何となれば、是の心は心相に非ず、不可思議なるが故に、自性は空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故なり。（依りて）是の念を作さず、我他心智證を得たりと、薩婆若心たるを除く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行ずる時、他心神通智證を得。是の菩薩は宿命智證通を以て一心より乃ち百心に至るまでを念じ、一日より乃ち百日に至るまでを念じ、一月より乃ち百月に至るまでを念じ、一歳より乃ち百歳に至るまでを念じ、一劫より乃ち百劫に至り、無數百劫、無數千劫、無數百千

劫より乃ち無數百千萬億劫世に至るまでを念じ、設し我は是の處、是の如きの性、是の如きの名字にして、是の如きの生、是の如きの食、是の如きの久住、是の如きの壽限なりし、（亦は）是の如く長壽なりし、是の如く苦樂を受けたり、我は是の中に死して、彼處に生じ、彼處に死して、是の處に生ぜりと。相あり、因緣あり（しことを知り）、亦た是の宿命神通にも著せず、宿命神通の事及び已身は皆な不可得なり。自性は空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故なり。（依りて）是の念を作さず、我は是の宿命神通ありと、薩婆若心たるを除く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行ずる時、宿命神通智證を得、是の菩薩は天眼を以て衆生の死時、生時、端正、醜陋、惡處、好處、若くは大、若くは小を知り、（また）衆生は業因緣に隨ふことを知る、（乃ち）是の諸の衆生は身の惡業を成就し、口の惡業を成就し、意の惡業を成就するが故に聖人を誹毀し、邪見の因緣を受くるが故に身壞して惡道に墮し、地獄の中に生ず。（また）是の諸の衆生は身の善業を成就し、口の善業を成就し、意の善業を成就して聖人を誹毀せず、正見の因緣を受くるが故に命終りて善道に入り天上に生ず、亦た是の天眼通にも著せず、天眼通の事及び已身は、皆な不可得なり。自性は空なるが故に、自性は離るるが故に、自性は無性なるが故なり。（依りて）是の念を作さず、我は是の天眼神通ありと、薩婆若心たるを除く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行ずる時、天眼神通智證を得。亦十方如恆河沙等の世界の中の衆生の生死より乃至天に生ずるを見る、上の四神通も亦是の如し。是の菩薩摩訶薩の漏盡神通は漏盡神通を得と雖も聲聞辟支佛地に墮せず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで亦た異法に依らず、亦是の漏盡神通に著せず、何となれば漏盡神通の事及び已身は皆な不可得なり。自性空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故なり。（依りて）是の念を作さず、我は漏盡神通を得たりと。薩婆若心たるを除く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずる時、漏盡神通智證を得。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行ずる時、神通波羅蜜（多）を具足し、神通波羅蜜（多）を具足し已りて

阿耨多羅三藐三菩提を増益す。

論 釋して曰く、(二四)大海の中に、種種の寶珠ありて、能く毒を殺すあり、能く鬼を遮するあり、能く病を破するあり、能く寒熱飢渇を除くあり、能く人の願ふ所に隨つて、皆能く與ふる者あるが如し。［大海の中に］是の如き等の、無量無數の寶珠あり。大乘の海中にも、亦た是の如く、種種の菩薩の寶ありて、菩薩の能く(二五)三惡道を破するあり、能く(二六)三善門を開くあり、能く(二七)五眼を生ずるあり、能く神通波羅蜜［多］を修行するあり。是の故に諸の菩薩は、能く奇特希有の事を爲す。所謂(二八)空相を多く、地相を少なく取れば、則ち能く意に隨ひて地を動かし、一身を能く多とし、多身を能く一とす。虚空の中には、常に微塵ありて中に滿つ。是の人は欲を離れ、福德の因縁あるが故に、諸の微塵を集めて、以て諸身の爲に、皆相似ならしむ。有人の言く、諸の非人は、是の離欲の菩薩を恭敬し、其の身中に入り、其の意の欲する所に隨つて變化し、則ち皆能く化すと。轉輪聖王は未だ欲を離れざるも、少しく福德の因縁あるが故に、諸の鬼人すら、尚ほ其の使と爲る、何に況んや欲を離れ、無量心を行ずる人をや。

【二四】大海の中に種種の寶あるが如く、大乘の海中にも亦菩薩の種種の寶あり。

【二五】三惡道とは、地獄道と、餓鬼道と畜生道となり。

【二六】三善門とは、修羅道と、人間道と、天上道とをいふ。

【二七】五眼とは、(一)肉眼。肉身所有の眼。(二)天眼。色界の天人所有の眼。(三)慧眼。二乘の人の眞空無相の理を照見する智慧。(四)法眼。菩薩が衆生濟度のために、一切の法門を照見する智慧。(五)佛眼。佛陀の身中前の四眼を具備せるものをいふ。

【二八】空の字は、宋本、明本、及び南藏倶に、水の字に作れり。

復次に、是の心相は、住する處あること無く、若くは内、若くは外、若くは大、若くは小なり。禪定の力を以ての故に、其の心調柔にして、疾く諸身に遍ねく、還つて復亦た速なり。譬へば千頭の龍の眼耳各二千あり、及び千の口あるが如く、心は一時に用ふ、龍は是れ麤身なるすら尙ほ爾なり、何に況んや菩薩をや。有人の言く、〔二九〕坐禪の人の事は、所有の勢力不可思議なり。故に一身を無量身と爲し、無量身を一身と爲す。〔三〇〕石壁に無礙なる者は、石壁に虚空の相を取り、微塵開闢して、橛を土に入るるが如し。〔三一〕水を履む者は、地相を取ること多きが故に、水を履むこと地の如し。水相を取ること多きが故に地に入ること水の如く、火相を取ること多きが故に、身より煙炎を出だす、日月を捫摸する者は、神通不可思議の力の故に、手をして日月に及ばしむ、火定に入るが故に、月を冷やかならしむる能はず、水定に入るが故に、日を熱からしむる能はず。

問うて曰く、〔三二〕是の神通力、乃至四禪の中、此にには何を以てか、但梵世に至りて、身自在を得と言ふや。答へて曰く、此に先に已に說けり。梵は是れ初門なるが故に、梵世と言へば、則ち一切の色界を說く、又世人は、皆梵王を貴びて、以て世界の主と爲すが故に、又是の菩薩は、欲界の散亂心に於いて、其の自在を現ずることを欲せず、是の故に乃至離欲の人の中に能く所作あり。是の如く神通の

〔二九〕一身を變じて、無量の身となす所以。
〔三〇〕石壁に虚空の相を取るが故に、石壁に無礙なり。
〔三一〕地相を取ること多きが故に、水を履むこと地の如し。
〔三二〕第七問、但梵世に至りて、身に自在を得といふ理由如何。

相は、無量無數なれども、解し易きが爲の故に、少しく譬喩を説く。(三三)諸の外道は、此の神通に於て、二事の錯あり。一には吾我の心を起し、我能く是の事を起すと〔信じ〕、而して憍慢を生ず。二には是の神通に著す。譬へば、貧人の寶に著するが如し。是を以ての故に、外道の神通は、聖人の神通に及ばず。菩薩は是の神通力に於て、一切法は、自性不生なりと知るが故に著せず、但一切種智を念ず。〔そは〕衆生を度せんが爲の故なり。餘の五神通も、亦是の如し。其の法の分別の如きは、先づ其の相を説きて後皆空を説く。六神通の餘の義は、讃菩薩品中には五神通の義を説くが如し。是の六神通は、廣く衆生を利益するを以ての故に、具足することを得と説く。是の如き神通は、阿耨多羅三藐三菩提を増益す。

【三三】外道は、神通に關して、二事の錯誤あり、而して外道の神通は、聖人のそれに及ばず。

經 舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜(多)を行ずる時、檀波羅蜜(多)に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして堅心を生ぜざるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜(多)を行ずる時、尸羅波羅蜜(多)に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして罪、不罪に著せざるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜(多)を行ずる時、羼提波羅蜜(多)に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして瞋らざるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜(多)を行ずる時、毘梨耶波羅蜜(多)に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして、身心は精進し、懈怠せざるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜(多)を行ずる時、禪波羅蜜(多)に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして不亂不味なるが故なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜(多)を行ずる時、般若波羅蜜(多)に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして癡心を生ぜざるが故な

り、是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜［多］を行ずる時、六波羅蜜［多］に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空なるが故に、不來不去なるが故に、不施不受なるが故に、非戒非犯なるが故に、非忍非亂なるが故に、不精不怠なるが故に、不定不亂なるが故に、不智不愚なるが故なり。爾時に菩薩摩訶薩は布施と不布施、持戒と破戒、忍辱と瞋恚、精進と懈怠、定心と亂心、智慧と愚癡とを分別せず、貢高輕慢と恭敬とを分別せず、何となれば、舍利弗よ、無生法中には毀を受くる者あること無く、譽を受くる者あること無く、輕慢恭敬を受くる者あること無ければなり。舍利弗よ菩薩摩訶薩は般若波羅蜜［多］を行じて、是の如き諸の功德を得、聲聞辟支佛の得ると有る無き所なり。是の功德を具足し、衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得。

論 釋して曰く、是の菩薩は、初發意に般若波羅蜜［多］を行じ、漸く餘の功德を行ず。所謂、檀波羅蜜［多］等なり。菩薩は檀波羅蜜［多］に住して薩婆若の道を修治し、一切法の空を觀じて、慳貪の心を生ぜず、是の二事を以ての故に、薩婆若の道を開く。何となれば畢竟空の中には、慳貪あること無く、慳貪の根本を斷ずるが故に、檀波羅蜜［多］を具足し、檀波羅蜜［多］を具足するが故に、般若波羅蜜［多］を莊嚴す。乃至般若波羅蜜［多］は、畢竟空なるが故に、常に癡心を生ぜざるなり。所以は何んとなれば、佛自ら說きたまはく、「一切法は不來不去なり。［それは］無施無受なるが故なり、不智不愚なるが故なり」と。

問うて曰く、(三四)若し能く是の如く觀じて六波羅蜜［多］を行ぜば、何等の利益を得るや。答へて曰く、

【三四】第八問、若し能く是の如く觀じて、六度を行ぜば、何等の利益をか得る。

此の中に佛自ら說きたまはく、「是の菩薩は施與する所あり、[若くは]施與する所なきとを念せず、若し施あることを念ずれば、【三五】虛妄の法中に入り。又布施に著して心に憍慢を生ず。若し施す所なきを念ずれば、即ち邪見の中に墮す」と。是の布施の論議は。是れ佛法の中の初門なり。云何が無乃至不念、有癡、有慧と言はん。是の人は、金剛山の如し。四面より風起るも、動せしむること能はず。是の菩薩は、爾の時、若し罵詈讃歎ありとも、心に異なること有ること無し。何となれば此の中に、佛は自ら說きたまはく、「無生法中には、罵る者あること無く、害する者なく、恭敬する者なし」と。【三六】聲聞、辟支佛は。害を加ふる者あらんに、深く慈悲心あること能はず、若くは默然し、若くは遠離す。菩薩は則ち然らず。能く深く慈心を加へ、之を愛すること子の如く、方便して之を度す。是の故に一切の聲聞、辟支佛に勝りて、而して能く一切衆生を敎化し、忍辱慈悲の方便深きが故に、願に隨つて業の因緣を淸淨にするが故に、能く佛世界を淨め、是の法を具足するが故に、久しからずして、當に一切種智を得べし。

【三五】宋、元、明、三本倶に、虛妄を虛誑に作れり。

【三六】二乘は加害の人を忍び、慈心あること能はず、菩薩は深く慈心を加へ、之を愛すること子の如し。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜[多]を行する時、一切衆生の中に等心を生じ、一切衆生の中に等心を生じ已りて一切諸法の等を得、一切諸法の等を得已りて一切衆生を諸法等の中に立つ。是の菩薩摩訶薩は現世に十方諸佛の爲に念

せられ、亦た一切の菩薩、一切の聲聞辟支佛の爲に念ぜらる。是の菩薩は、所生の處に至りて、常に終に不淨の色を見ず、乃至亦不善の法を行ぜざるなり。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を離せざるなり。

論 釋して曰く、佛若し廣く、諸の菩薩の相を說きたまはば、則ち劫を窮むるも盡きざらん。今佛は此の品の末に、略して其の相を說きたまふ。是の相は、是れ諸の菩薩の通行する所と爲すに足る。所謂、〔三七〕大慈悲の故に、初めて一切衆生を度せんとの心を發すが故に、諸佛の等心を學して衆生を觀るが故に、一切の法は自性空なるが故に、是の如き等の因緣の故に、一切衆生の中に於て、等心を生じ、是の等心を得已りて、一切諸法の等を得るなり。〔三八〕一切法の等とは、先に衆生の等、法の等の義を說くが如し。今當に更に說くべし。〔三九〕四生の衆生は慈愍し、一心に利益を欲するを衆生の等と名け、四念處にも、亦た身を見ざるを名けて法の等と爲す。四正勤、諸の四法も亦た是の如し。

復次に、五道中の衆生を念ずるに、皆無常。老、病、死に沒す。是を衆生の等と名く。是の信等の五根を行じ、若し五神通を以て、一心に是の衆生を度せんと欲する、是を法の等と名く。

復次に、衆生の中に、忍辱、慈悲等の福を行ずれば、功德無量なり。功德無量なるが故に、心柔輭に、心柔輭なるが故に、疾かに禪定を得、禪定を修するが故に、心如意調柔に、心如意調柔なるが故

〔三七〕菩薩の等心を得る所以。
〔三八〕一切法の等の義解。
〔三九〕四生とは、卵生と、胎生と、濕生と、化生となり。

に、世間の長短、男女、白黒等を破して、一相の法に入る、所謂無相なり。是法の等を得已りて、一切衆生をして、是の法の等を得せしむ。是の菩薩は、是の二の等を得て、無量の福德、智慧を成就するが故に、現世の果報を得、諸佛の爲に念ぜられ、餘人に念ぜらる。愛著して念を生ずる者は、皆これ虚妄なり。唯諸佛の念のみ是を實の念と爲す。［そは］愛著せざればなり。是の人は、諸佛すら尙ほ念じたまふ、何に況んや、聲聞、辟支佛、菩薩をや。聲聞、辟支佛の結を斷ぜる者すら、猶尙愛念す、何に況んや凡夫の未だ欲を離れざる者をや。菩薩は、福德の因緣より生ずるを以ての故に、是の如き等の無量の今世の果報あり、［及び］後世の所生の處には、眼に終に惡色を見ざるなり。（四〇）惡色とは、所謂、能く苦受を生ずる聲・香・味・觸・法、乃至能く憂心を生ずる者なり。六欲天の六情、所對の淨妙の五欲の如きは、意に隨つて歡喜す。衆生の少福德を種ゑて、天上に生ずるすら是の如し。何に況んや菩薩は福德、實智慧、無量無邊にして、十方の諸佛、諸餘の賢聖の爲に念ぜらるるをや。

【四〇】 惡色の義解。

【經】 是の般若波羅蜜（多）品を說きたまふ時、三百の比丘、座より起ちて著くる所の衣を以て佛に上り。阿耨多羅三藐三菩提心を發す。佛は爾の時に微笑し、種種の色の光を口中より出だしたまふに、慧命阿難は座より起ち、衣服を整へ、合掌し、右の膝を地に著けて、佛に白して言さく、「佛は何の因緣ありてか微笑したまふや」と。佛、阿難に告げたまはく、「是の三百の

比丘は是より已後、六十一劫に當に佛と作るべく、皆號して大相と名けん。是の三百の比丘は此の事を見て當に阿閦佛の世界に生ずべし。及び六萬の欲天子は、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、彌勒佛の法中に於いて出家し佛道を行ぜん」と。是の時、佛の威神力の故に此の間の四部の衆は、十方に面あたり各千佛を見たてまつる。是の十方世界は嚴淨にして此の娑婆世界の及ばざる所なり。爾の時に十千人は願を作さく、「我等は淨願行を修し、淨願行の故に當に彼の佛の世界に生ずべし」と。爾の時に佛は是の善男子の深心なることを知りたまひて、復た微笑して種種の色の光を口中より出だしたまふ。阿難は衣服を整へ合掌して、佛に白さく、「佛は何の因緣ありてか微笑したまふや」と。佛、阿難に告げ給はく、「汝は是の十千人を見るや不や」と、阿難の言く、「見る」と。佛の言はく、「是の十千人は此に於いて壽終り、當に彼の世界に生ずべし。終に諸佛を離れたてまつらず、後に當に佛と作るべく、皆な莊嚴王と號せん」と。

■ 問うて曰く、〔四一〕佛の〔四二〕結戒の如くんば、比丘の三衣は當に少くべからず。是の諸の比丘は、何を以てか尸羅波羅蜜「多」を破りて、檀波羅蜜「多」を作すや。答へて曰く、

〔四三〕有人は言ふ、「佛は十二歲を過ぎて、然る後に、結戒したまへり。是の比丘の衣を施す時は、未だ結戒したまはざりき」と。有人の言く、「是の比丘は、淨く衣を施すの心生ずるありて、當に受くべし。是を以ての故に難せり」と。有人の言く、「是の諸の比丘は、多知多識にして、即ち能く更に事を得て

【四一】第九問、比丘の三衣を少くは佛の禁ずる所、今それ是の諸の比丘等の、持戒を破りて、布施を行ずるは何故なるか。

【四二】結戒とは、戒律を結成して、設行することなり。

【四三】比丘の衣を脱して、佛を供養せるは、破戒にあらず。

宿を經ず」と。

復次に、有人の言く、「是の諸の比丘は、佛、諸の菩薩は、檀波羅蜜〔多〕を行じて、諸の功德の力勢無量なるが故に、般若波羅蜜〔多〕と相應することを得と說きたまふを聞き、心大に勇躍して、卽ち衣を以て施し、復た他念なし、故に破戒にあらず」と。

復次に、諸の比丘は、佛法は畢竟空にして著する所なく、法愛を斷ず、世諦の爲の故に結戒して、第一義には非ずと知る。是の比丘は、佛に從つて第一義、及び布施等の、六波羅蜜〔多〕を聞き、諸の菩薩の、種種の大威力を以て、衆生を愍念するとを聞けども、諸の煩惱の爲に覆はれて、是の菩薩の功德を得ること能はず、是の故に大悲心を生じて、衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の意を發す。是を以ての故に衣を以て布施せり。若し人、貪欲、瞋恚、怖畏、邪見を以て、恭敬せず、心に佛語を輕んじて、而も持せざる、是を名けて破戒と爲す。是の諸の比丘は、都べて此の心なし、是の故に破戒の罪なし。

問うて曰く、〔四四〕佛は何を以てか微笑し給ひしや。答へて曰く、〔四五〕笑に種種あり。有人は妓樂の事を見て笑ひ、有人は內に瞋恚を懷いて笑ひ、有人は憍慢の故に笑ひ、有人は、物を輕んずるが故に笑ひ、有人は事を辨じて喜ぶが故に笑ひ、有人は作すべからざるを而も作すを見るが故に笑ひ、有人は〔四六〕詐

〔四四〕第一〇問、佛の微笑し給ひし理由如何。
〔四五〕笑の種種。
〔四六〕內心、詐作の念を有しながら、表面他の善美を稱揚すること。

を懷きて善を揭ぐるが故に笑ひ、有人は、〔四七〕希有の事を見るが故に笑ふ。佛は今比丘の一の袈裟を以て施し、〔四八〕未來世の中に佛道を成辨するを見て、是を希有と爲す。是を以ての故に笑ひ給へり。

問うて曰く、〔四九〕阿難は何を以てか、常に佛の比丘笑ひたまふを問ひたてまつり、而して餘の比丘は問はざるや。答へて曰く、是の諸の比丘は、佛に親近したてまつらず。又〔五〇〕敬難の心多きが故に、敢へて自ら問はず。阿難は善く人の相を知り、諸の比丘の意を知り、又佛の笑ひたまふを見て疑ふが故に、是の念を作さく、「佛は「世に」〔五一〕衆生相なく、〔五二〕法相あること無く。三界は夢の如く、幻の如しと知りたまふ。今何事ありてか、能く佛をして笑はしめたてまつるや。佛は須彌山王、大地、大海の如し、小因緣を以ての故に、動じたまはず」と。是を以ての故に笑の因緣を問ひたてまつれり。

佛、阿難に告げたまはく、「業因緣の果報は、相續して不可思議なり。〔五三〕是の三百の比丘は、却つ

【四七】希有とは、奇特といふほどの意なり。

【四八】將來、佛果を窮め、佛教的理想を實現するをいふ。

【四九】第一問、阿難のみ獨り、佛の微笑し給へる理由を問へるは何故なるか。

【五〇】敬難とは、尊敬し、難ばかるの意なり。

【五一】衆生相とは、諸の生物の各自の特性といふほどの意。蓋し一切の生物は、原因と條件、即ち因と緣との和合によりて、暫く一定の形相を顯現せるものに外ならず、隨つて生物構成の原因と條件とが、離散すれば、何等固有の永久不變の特性として、認むべきもののなきが故に、「衆生相なし」といふなり。

【五二】法相とは、諸の非情物との特性をいふ。即ち衆生相に對する語なり。

【五三】佛、三百の比丘に授記し給ふ。

て後、六十一劫にして、當に佛と作ることを得べく、號して大相と名けん」と。六十一劫の中、是の人は利根にして、佛の說法に値ひたてまつり、般若波羅蜜「多」と相應するが故に、是の諸人は疾かに佛と作ることを得。是の諸の比丘は、未だ天眼を得ざるが故に、自ら疑つて、何處に生ずるといふことを知らず。恐らくは諸の功德を集むることを得ること能はず、道に至ることを得ざらん。是の故に佛は、是の身を捨てて、當に〔五〕阿閦佛の世界に生ずべしと言ふ。六萬の欲天子は、必ず是れ宿世に、福德の因緣を共にするが故に、三百の比丘と俱に、阿耨多羅三藐三菩提心を發さん。是れ彌勒の度すべき所なり。是の故に佛は、彌勒の時に當に出家すべしと記し給へり。今佛は、諸の比丘の阿閦の世界に生ぜんことを記したまふが故に、諸人は咸な諸佛の清淨世界を見んと欲す。是の故に佛は大衆をして、面たり各千佛を見せしめたまふ。是の四衆は、是の清淨莊嚴の佛世界を見、諸佛の身の須彌山より大なる者を見、一生補處の菩薩の大衆「ありて」圍繞したてまつり、梵音は無量無邊の世界に徹するを以て、各自ら其の身を鄙薄にし、衆生を憐愍するが故に、無量の佛法を求むるが爲に、願を作さく、「彼の佛の世界に生ぜん」と。淸淨世界は、行願の中に說くが如く、笑の因緣は先に說くが如し。是の十千人は、此に於て壽終り、當に彼の國に生ずべし。彼の國に生ずる、行業の因緣を具足するに隨ふが

〔五〕阿閦佛（Akṣobhya）は、譯して、無動、不動、無瞋恚といふ。往昔、此を去る東方、千佛刹、阿比羅提國に出現せし大日如來の所に於いて發願し、修行の後、東方にて成佛せり。其の國を善快と名く。今現に其の土に於いて說法し給ふといふ。

故に、此の間に深厚無量の福德を集むるが故に、終に諸佛を離れたてまつらず、諸の莊嚴せる佛世界を見て、發心するが故に、普莊嚴王佛と號す。

歎度品第五を釋す。

經 爾の時に慧命舍利弗、慧命目揵連、慧命須菩提、慧命摩訶迦葉、是の如き等の衆多の知識の比丘、及び諸の菩薩摩訶薩、諸の優婆塞優婆夷は座より起ちて合掌し、佛に白して言さく、世尊よ、摩訶波羅蜜(多)は、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり、尊波羅蜜(多)、第一波羅蜜(多)、勝波羅蜜(多)、妙波羅蜜(多)、無上波羅蜜(多)、無等波羅蜜(多)、無等等波羅蜜(多)、如虛空波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。世尊よ、自相空波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり、世尊よ、自性空波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり、諸法空波羅蜜(多)、無法有法空波羅蜜(多)、開一切功德波羅蜜(多)、成就一切功德波羅蜜(多)、不可壞波羅蜜(多)は是れ諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。

諸の菩薩摩訶薩は是の般若波羅蜜(多)の無等等の布施を行じ、無等等の檀波羅蜜(多)を具足し、無等等の身を得、無等等の法を得、所謂る、阿耨多羅三藐三菩提なり。尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毘梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)もまた是の如し。世尊も本亦復た此の般若波羅蜜(多)を行じ、無等等の六波羅蜜(多)を具足し、無等等の法を得、無等等の色、無等等の受、想、行、識を得、佛には無等等の法輪を轉じたまふ。過去の佛も亦た是の如く、此の般若波羅蜜(多)を行じ、無等等の布施を具足したまひ、乃至無等等の法輪を轉じたまへり。未來世の佛も、亦た此の般若波羅蜜(多)を行じて、當に無等等の布施を作したまふべく、乃至當に無等等の法輪を轉じたまふべきなり。是を以ての故に、世尊よ、

菩薩摩訶薩にして、一切法の彼岸に渡らんと欲せば、當に般若波羅蜜（多）を習行すべし。唯、世尊よ、是の般若波羅蜜（多）を行ずる菩薩摩訶薩をば、一切世間の天及び人、阿修羅は應當に禮敬供養すべしと。佛、衆の弟子及び諸の菩薩摩訶薩に告げたまはく、是の如し、是の如し、諸の善男子よ。般若波羅蜜（多）を行ずる者をば、一切世間の天及び人、阿修羅は、應當に禮敬供養すべし。何となれば、菩薩の來るに因るが故に、人道、天道、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、轉輪聖王、四天王天、乃至阿迦尼吒天を出生し、須陀洹乃至、阿羅漢、辟支佛、諸佛を出生し、菩薩の來るに因るが故に、世間に便ち、飲食、衣服、臥具、房舍、燈燭、摩尼、眞珠、毗瑠璃、珊瑚、金銀等の諸の寶物ありて生ずるなり。舍利弗よ、世間の所有の樂具、若くは人中の、若くは天上の、若くは離欲樂の、是の一切の樂具は皆な菩薩に由りて有り。何となれば舍利弗よ、菩薩摩訶薩は菩薩道を行ずる時、六波羅蜜（多）に住して自ら布施を行じ、亦た布施を以て衆生を成就し、乃至自ら般若波羅蜜（多）を行じ、亦た般若波羅蜜（多）を以て衆生を成就するなり。舍利弗よ、是の故に菩薩摩訶薩は、一切衆生を安樂にせんが爲の故に世に出現すと。

論 問うて曰く、(五五)五千の比丘中には上に千餘の上座あり。所謂(五六)漚樓頻螺迦葉等なり。何を以てか止だ此の四人の名のみを説くや。答へて曰く、是四比丘は、是れ現世の無量の福田にして、舍利弗は、是れ佛の右面の弟子、目揵連は、是れ佛の左面の弟子、須菩提は、(五七)無諍定を修し、(五八)空行

【五五】第一二問、五千人の比丘中、但この四人の名のみを説ける理由如何。
【五六】〔Uruvilva-kāśyapa〕ウルギルワーカーシヤパ
【五七】無諍定とは、空理に安住して他と諍はざる禪定なり。
【五八】空行とは、空法を修する行なり。空法に大小深淺あり、以て大乘小乘、菩薩聲聞の別をなす。

第一にして、摩訶迦葉は〔五九〕十二頭陀を行ずること第一なり。世尊は衣を施し、坐を分ち、常に深心に衆生を憐愍したまへり。佛在世の時、若し人あり、今世の果報を求めんと欲する者は是の四人を供養すれば、輙ち願の如くなることを得。是の故に是の多知多識の比丘、及び四衆は、般若波羅蜜〔多〕を讃ず。

問うて曰く。〔六〇〕是の阿羅漢は、最後身にして所作已に辦せり。何を以てか復た、般若波羅蜜〔多〕を讃歎するや。答へて曰く。人は皆、阿羅漢は無漏道を得と知り、菩薩は智慧大なりと雖も、結使未だ斷ぜざるを以ての故に貴ばず、又た阿羅漢は、慈悲心あり、佛を助けて、化を揚ぐるを以ての故に、之を以て證と爲す。佛道は世間の中に於て、最も大なり。是の般若は能く

【五九】**十二頭陀**。頭陀（Dhūta）は、譯して、抖擻、抖擻、洮汰、浣洗などといふ、衣食住に對する三種の貪著を抖擻ふ行法なり。之に十二あり、故に十二頭陀といふ。
(一)に納衣、又糞掃衣といふ、人の委棄せる糞掃に均しきものを縫納して衣となすなり。
(二)に三衣、又、但三衣といふ、ただ僧伽梨、欝多羅、安陀會の三衣を著して餘の長衣を用ゐざるなり。已上の二種は衣服に關す。
(三)に乞食、又常乞食といふ、自ら行て食を乞ひ敢て他の招待及び僧中の食を受けざるなり。
(四)に不作餘食、午前中但一度の正食をなして更に二度以上の正食をなさざるなり、二度以上の正食を餘食といふ。小食をなすはこの限にあらず、餅菓粥等な小食といふ。
(五)に一坐食、又一食といふ、午前中一度の正食をなす外更に小食なも作さざるなり。
(六)に一揣食、又節量食といふ、一と丸めの食を鉢中に受けて便ち止め、多く受けざるなり。たとひ一食なるも多く食すれば害あるを以て食量を節するなり。已上四種は食料に關す。
(七)に阿蘭若處、遠離處又は空閑處と譯す。人家を遠離する空閑の處に住するなり。
(八)に塚間坐、墳墓の處に住するなり。
(九)に樹下坐、樹下に住するなり。
(十)に露地坐、樹下猶庇蔭あり、去て露天の地に住するなり
(十一)に隨坐、草地あるに隨つて住するなり。必ずしも樹下露地ならず。

此の事を與ふるが故に、名けて大波羅蜜「多」と爲し、一切法の中にて、智慧第一なるが故に、尊波羅蜜「多」と言ひ、能く正しく五度を導くが故に、第一波羅蜜「多」と名け、五度は及ばざるが故に、名げて勝波羅蜜「多」と爲し、五情の如きは、意の能く自を利し、人を利するに及ばざるが故に、名けて妙波羅蜜「多」と爲す。一切法の中に過ぐる者あると無きが故に、無上波羅蜜「多」と名け、法として同じき者あると無きが故に、無等波羅蜜「多」と名け、諸佛を〔六二〕無等等と名け、般若波羅蜜「多」より生ずるが故に、無等等波羅蜜「多」と名け、是の般若波羅蜜「多」は、畢竟清淨にして、戲論を以て、破壞すべからざるが故に、如虛空波羅蜜「多」と名く。般若波羅蜜「多」の中には、一切法の自相は、不可得なるが故に、名けて自相空波羅蜜「多」と爲し、此の波羅蜜「多」の中には、一切法は自性空なるが故に、諸法は因緣和合の生にして、自性あること無きが故に、名けて自性空波羅蜜「多」と爲し、諸法の中には、自法あると無きが故に、名けて諸法空波羅蜜「多」と爲す。此の衆生空と、法空とを以ての故に、諸法を破して所有なからしめ、無所有も亦た無所有なり、是を無法有法空波羅蜜「多」と名く　菩薩は是の般若波羅蜜「多」を行じて、功德として而も攝せざる者あること無し。日の出づる時は、華の敷かざる無きが如きが故に、開一切

(三)に常坐不臥、常に趺坐して横臥せざるなり。已上六種は住處に屬す。頭陀の行法經論の所說[illegible]頗同じからず。

【六〇】第一三問、所作已に辨ぜる阿羅漢にして、智度を讃ずる理由如何。

【六二】無等等(アサマサマ Asamasama)は、佛道、又は佛の尊號なり。佛道は一切に超絕して、等しきものなきが故に、無等といひ、唯佛と佛と等しきが故に、等といふ。

功德波羅蜜「多」と名け、是の菩薩の心中に、般若波羅蜜「多」の日出づれば、一切諸の功德を成就して皆清淨の般若波羅蜜「多」ならしむ、是れ一切善法の本なり。是の故に名けて、成就一切功德波羅蜜「多」と爲し、世間に法として、能く傾動する者あること無きが故に、不可壞波羅蜜「多」と名く。是れ諸の阿羅漢の讃歎する因緣なり。所謂三世の佛は、皆般若波羅蜜「多」より生じたまふ。所謂無比の布施乃至無比の智慧は、世間の中に等しき者あること無きが故に、無比と言ひ、是の六波羅蜜「多」は畢竟清淨にして、失あること無きが故に、名けて無比と爲す。無比は即ち是れ無等等なり。

復次に、無等等とは諸佛を無等と名け、諸佛と等しきが故に名けて無等等と爲す。

問うて曰く、〔六三〕三世諸佛の中に、已に釋迦文佛あり、何を以てか別に說くや。答へて曰く、今座上の衆は、皆釋迦文佛に由りて得度し、恩を感ずること重きが故に、別に說くなり。舍利佛の說けるが如し、「我が師出でたまはずんば、我等は永く盲冥たらん」と。諸の阿羅漢は、三世の諸佛の、皆般若波羅蜜「多」中より出でたまふを知る。是を以ての故に諸の阿羅漢は、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩にして、遍ねく一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を習ふべし」と說けり。阿羅漢の讃歎するや、菩薩に時に心に恭敬を生ず。是の故に禮敬供養と說く。天・人・阿修羅とは、三善道を說くなり。三惡道は、別に知る所なきが故に說かず。佛に羅漢の讃歎するを聞き已り

【六三】第一四問、三世諸佛の中に已に釋迦文佛あり、今それ之を別說す、理由如何。

たまひ、佛は印可して言はく、「是の如し、是の如し、應當に般若波羅蜜〔多〕を行ずる者を禮敬供養すべし」と。汝は一切智慧なしと雖も、而も說くこと、錯らざるが故に、重ねて、「是の如し、是の如し」と言へり。何となれば此の中に、佛は自ら說きたまはく、「菩薩に因るが故に人道、天道、乃至一切諸の菩薩を出生す、一切衆生を安樂にせんが爲の故なり」と。刹〔帝〕利の大姓、乃至（六三）阿迦膩吒を說き、須陀洹、乃至諸佛は、皆先に說くが如し。

問うて曰く。（六四）若し菩薩に因りて飲食等及び諸の寶物あらば、人は何ぞ力作して、生を求め、諸の辛苦を受けて乃ち得るや。答へて曰く餓鬼劫の時は、人は其の功力を設くと雖も、亦た得る所なし。〔そは〕衆生の罪重きを以ての故なり。菩薩は世世に、布施・持戒・善心を讃歎す。是の（六五）三福の因緣の故に、上中下あり。上なる者は

【六三】Akaniṣṭha は、譯して、色究竟天といふ。此の天は、色界十八天の最上にして、形體を有する天部の究竟なれば、又質礙究竟といふ。故に色究竟天とも、有頂天とも名く。之を超ゆれば、無色界の天、即ち心識のみありて、形體なき天部となる。

【六四】第一五問、若し菩薩によりて、飲食寶物あらば、人は勞力を費して、之を得る必要なきにらあずや。

【六五】三福に就ては、數種の異說あり。一に世福、父母に孝養し、師長に奉事し、十善戒を持す。二に戒福、三歸五戒乃至具足戒を持す。三に行福菩提心を發して、佛道を行ず。觀無量壽經に曰く、「彼の國に生ぜんと欲せば、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず。二には三歸具足衆戒を受持して、威儀を犯さず。三には菩提心を發して、深く因果を信じ、大乘を讀誦して、行者を勸進す」と。俱舍論八に曰く、一に施類福、布施を行ず。以て大富の果報を感ず。二に戒類福、性遮の二戒を持す。以て生天の福果を感ず。三に修類福、禪定を修し、以て解脫の福果を感ず」と。然るに今は、布施、持戒、善心を以て三福とせり。

念ずれば便即ち得、中なる者は、人中に尊重せられ、供養自ら至り、下なる者は、施の功力によりて乃ち得。是を以ての故に、菩薩に因りて得と說くことは、實にして虛ならず。樂の因緣は、甚だ多く稱げて計ふべからず、今佛は略して天樂、人樂、涅槃樂、皆菩薩に由りて得と說きたまへり。此の中に佛は自ら說きたまはく、「菩薩は、六波羅蜜「多」に住して、自ら布施を行じ、亦た衆生をして、布施を行ぜしむ。衆生は自ら布施を行ずと雖も、菩薩の教導なければ、則ち行ずること能はず」と。

問うて曰く、（六六）解脫の樂を除いて、此の「天樂、人樂の」二種の樂は、是れ衆生の結使を生ずる處にして、貪欲の因緣の故に惡を生ず。菩薩は何を以てか此の結使の因緣を教導するや。答へて曰く、（六七）菩薩には咎なし、何となれば、菩薩は慈悲淸淨心にして、衆生に樂の因緣を與へ、修福の事を教ふればなり。若し衆生、淸淨にして、福德を行ずると能はざる者あらんに、菩薩に於て何の咎かあらん。人の好心にして井を作り、盲人「その」中に墮ちて死せんに、作者に罪なきが如く、人の好食を設けて人に施し、量を知らざる者、多く食して患を致さんに、施す者に罪なきが如し。復次に、若し諸佛菩薩にして、衆生に福德を作すの因緣を教へずんば、則ち天なく、人なく、阿修羅なく、但だ三惡道を長じて、罪より出づることを得る者なけん。復次に、衆生は、樂の因緣の故に

【六六】第一六問、天樂と人樂とは、煩惱を生ずる處にして、貪欲これが爲に起る。今それ菩薩が煩惱の因緣を教導するは何故なるか。

【六七】衆生、世樂に貪著して、惡道に墮するも、菩薩には咎なし。

貪を生じ、貪の因緣の故に恚を生じ、恚の因緣の故に、苦を生じ、苦の因緣の故に罪を生ず。今衆生は、第五の罪の中より免れんと欲す。是の故に樂を與ふ。復次に、定んで樂の因緣は、貪欲を生ずるに非ず、或は正憶念の故に、樂を善福の因緣と爲し、邪憶念の故に貪欲を生ず。今正憶念の樂の爲の故に、福德の因緣を生ぜしむ。復次に、唯、佛一人のみ、錯なく、失なし。是の菩薩は、未だ佛道を成就せず、未だ佛眼を得ざるが故に、三種の樂を以ての故に、度すべき衆生を敎化す。諸佛は但だ解脱の樂を以て、衆生を敎化したまふ。

舌相品第六を釋す。

【經】爾の時、世尊は舌相を出だして遍ねく三千大千世界を覆ひ、其の舌相より無數無量の色を出だし、光明普ねく、十方如恒河沙等の諸佛の世界を照らし給ふ。是の時、東方の如恒河沙等の世界の中の無量無數の諸の菩薩は是の大光明を見て、各各其の佛に白して言さく、「世尊よ、是れ誰の力の故に是の大光明ありて普ねく諸の世界を照らすや」と。諸佛、諸の菩薩に告げて言はく、「諸の善男子よ、西方に世界ありて娑婆と名け、是の中に佛ありて釋迦牟尼と名く。是れ其の舌相より大光明を出だし、普ねく東方の如恒河沙等の諸佛の世界を照らす。南西北方、四維上下も亦復た是の如し。諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜〔多〕を說くが故なり」と。是の時、諸の菩薩に各其の佛に白して言さく、「我は往いて釋迦牟尼佛及び諸の菩薩摩訶薩に供養せんと欲し、幷に般若波羅蜜〔多〕を聽かんと欲す」と。諸佛、諸の菩薩に告げたまはく、「善男子よ、汝自ら時を知れり」と。是の時、諸の菩薩摩訶薩は諸の供養の具、無量の華蓋、幢幡、瓔珞、衆香、金銀、寶華を持し、娑婆世界に向

ひ、釋迦牟尼佛の所に詣る。爾の時に四天王の諸天より乃ち阿迦尼吒の諸天に至るまで各天上の天香、末香、澤香、天樹香、葉香、天の種種の蓮華の青赤紅白なるを持して釋迦牟尼佛の所に向ふ。是の諸の菩薩摩訶薩及び諸天の散ずる所の諸華は、三千大千世界の虚空中に於いて化して四柱の大臺と成り、種種の異色は莊嚴分明なり。是の時、釋迦牟尼佛の衆中に盲なる十萬億人あり、皆な座より起ち、掌を合せて佛に白して言さく、「世尊よ、我等は未來世中に於いても亦た當にか、是の如きの法を得べし、今釋迦牟尼佛の弟子、侍從、大衆の説法の如きも、亦た爾なり」と。是の時、佛は善男子の至心に一切諸法の不生、不滅、不出、不作に於いて是の法忍を得ることを知り、佛は便ち微笑し、種種の色の光を口中より出だしたまふ。阿難は佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に微笑したまふや」と。佛、阿難に告げたまはく、「是の衆中の十萬億人は諸法中に於て無生〔法〕忍を得たり、是諸人は未來世に於て、六十八億劫を過ぎて、當に佛と作るべく、劫を華積と名け、佛をみな覺華と號せん」と。

【六八】第一七問、重ねて舌相を出す理由如何。

【六九】第一八問、須菩提に説かしめて、智慧第一の舍利弗に説かしめざる理由如何。

論 問うて曰く、(六八)初品の中に、佛は已に舌相を出だし給へり。今何を以てか重ねて出だしたまふや。答へて曰く、是の事は、一日一坐の説に非ず、前に舌相を出だすは、大會を和合し、一切衆生を度せんが爲に、舍利弗の問に佛の答へたまひしなり。今此は時を異にし、更に餘人の爲にす。須菩提は巧に空を説くが爲の故に、佛、命じて更に説かしむ。是の故に舌相より光明を出だしたまふ。問うて曰く、(六九)舍利弗は智慧第一なり、竟に何の少くる所ありてか、復須菩提に命じ給ひしや。答へて曰く、佛弟子は衆多なり、一人説き已れば、次に一人に命じたまふ。譬へば、王者は群臣衆多な

れば、次第に共に語るが如し。

問うて曰く、〔七〇〕若し爾らば、目連迦葉等甚だ多し、何を以てか次いで皆與に語らざるや。答へて曰く、此の經は智慧と名く、舍利弗は智慧第一なり、是の故に問ふ。須菩提は種種の因緣ありと雖も、二因緣大なるを以ての故なり。〔所謂〕、一には好んで無諍定を行じ、常に衆生を慈悲し、廣く衆生を度すること能はずと雖も、而も常に菩薩を助け、菩薩の事を以て、佛に問ひたてまつれり。二には好んで深く空法を行ず。〔而して〕是の般若の中には多く空法を說けり。是の故に〔七一〕須菩提をして、是の舌相の光明を說かしむ。諸の菩薩の來往の義、乃至華臺、供養の義は、先に說くが如し。爾の時、衆生は是の大神通力、所謂十方如恆河沙等の世界の中の諸佛を見、諸佛及び釋迦文佛は、無量の光明を出だしたまふを以ての故に、衆生は佛の神力を蒙りて、舌相の三千大千世界を覆ふを見、及び諸佛の大衆中にありて、法を說きたまふを聞見して、即ち無生法忍を得、是の願を作して言く、「我等も未來世の、神通變化も、亦た當に今佛の如くなるべし」と。佛は衆生の無生法忍を得たるを知るが故に、微笑したまへり。笑の義に佛の答へたまへるは、先に說くが如し。是の人は、六十八億劫を過ぎて佛と作るとは、是の人は、十方の諸の菩薩の、七寶の華を持し來りて、供養したてまつるに、遍じて七寶の華臺と成るを見、是を見已るに因りて、其の心清淨

〔七〇〕第一九問、佛が舍利弗、須菩提のみと語りて、目犍連、迦葉等の諸弟子と語らざる理由如何。

〔七一〕縮藏には「須菩提に、舌相の光明を說かんことを命ず」に作れり。

にして、無生法忍を得、是の故に佛と作る。時に劫を華積と名け、佛を皆覺華と號す。

卷の第四十一

三假品第七を釋す。

【經】爾の時、佛、慧命須菩提に告げたまはく、汝、當に諸の菩薩摩訶薩に般若波羅蜜〔多〕を敎ふること、諸の菩薩摩訶薩の成就すべき所の般若波羅蜜〔多〕の如くすべしと。卽時に諸の菩薩摩訶薩及び聲聞の大弟子、諸天等は是の念を作さく、慧命須菩提は自ら智慧力を以て當に諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜〔多〕を說くべきか、是れ佛力とやせんと。慧命須菩提は諸の菩薩摩訶薩、大弟子、諸天の心に念ずる所を知り、慧命舍利弗に語るらく、敢へて佛弟子の說く所の法、敎授する所は皆な是れ佛力なり。佛の說法したまふ所の法相に相違背せず。是の善男子は是の法を學し、此の法を證することを得。佛の說は燈の如し。舍利弗よ、一切の聲聞、辟支佛は實に力の能くすること無し。菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜〔多〕を說くと。

爾の時に慧命須菩提、佛に白して言さく、世尊の說きたまふ所の菩薩、菩薩の字は何等の法をか菩薩と名くるや。世尊よ、我等は是の法の菩薩と名くるを見ず。云何が菩薩に般若波羅蜜〔多〕を敎へんと。佛、須菩提に告げたまはく、般若波羅蜜〔多〕も亦た但名字のみ有り、名けて般若波羅蜜〔多〕と爲す。菩薩、菩薩の字も亦但名字のみ有り。是の名字は内に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提よ、譬へば、我名を說くは和合の故に有りて、是の我名は不生不滅にして但世間の名字を以ての故に說くが如く、衆生、壽命、生者、養育、衆數人、作者、使作者、起者、使起者、受者、使受者、知者、見者等は和合法の故に有り。是の諸の名は不生不滅にして、但世間の名字を以ての故に說くが如し。般若波羅蜜〔多〕、菩薩、菩薩の字も亦た是の如く、皆な和合の故に有り。是れ亦た不生不滅にして但世間の名字を以ての故に說く。須菩提よ、譬へば身

は和合の故に有り、是も亦た不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説くが如し。須菩提よ、譬へば色、受、想、行、識も亦た和合の故に有り、是も亦た不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説く。須菩提よ、般若波羅蜜（多）、菩薩、菩薩の字も亦是の如く、みな是れ和合の故に有り、是も亦た不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説く。須菩提よ、譬へば眼の如きは和合の故に有り、是も亦た不生不滅にして、但世間の名字を以ての故に説く。是の眼は内に在らず、外に在らず、中間に在らず、耳、鼻、舌、身意も和合の故に有り。是も亦た不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説く。色より乃ち法に至るも、亦た是の如し。眼界は和合の故に有り、是も亦た不生不滅にして、但世間の名字を以ての故に説く。乃ち意識界に至るも亦た是の如し。須菩提よ、般若波羅蜜（多）、菩薩、菩薩の字も亦た是の如く、皆な和合の故に有り、是も亦た不生不滅にして但名字を以ての故に説く。是の名字は内に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提よ、譬へば内身の如きは名けて頭と爲すも但名字のみ有り。頂、肩、臂、脊、肋、髀、膞、脚は是れ和合の故に有り、是の法及び名字も亦た不生不滅にして但名字を以ての故に説く。是の名字も亦た内に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提よ、般若波羅蜜（多）、菩薩、菩薩の字も亦た是の如く、皆な和合の故に有り、但名字を以ての故に説く。是も亦た不生不滅にして内に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提よ、譬へば外物、草木、枝葉、莖節の如く、是の如く一切は但名字を以ての故に説く。是の法及び名字も亦た不生不滅にして、内に非ず、外に非ず、中間に非ずして住す。須菩提よ、般若波羅蜜（多）、菩薩、菩薩の字も亦た是の如く、皆な和合の故に有り。是の法及び名字も亦た不生不滅にして、内にあらず、外にあらず、中間にあらずして住す。須菩提よ、譬へば過去の諸佛の名字の如きは和合の故に有り、是も亦た不生不滅にして但名字を以ての故に説く。是れも亦た内にあらず、外にあらず、中間にあらずして住す。般若波羅蜜（多）、菩薩、菩薩の字も亦た是の如し。須菩提よ、譬へば夢、響、影、幻、炎、佛の化（作したまふ）所はみな是れ和合の故に有り、但名字を以て説く。是の法及び名字

も不生不滅にして、内にあらず、外にあらず、中間にあらずして住す。般若波羅蜜〔多〕、菩薩、菩薩の字も亦た是の如し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜〔多〕を行じて名も假の施設なり、受も假の施設なり、法も假の施設なりと、是の如く應當に學すべし。

論 問うて曰く、〔一〕佛既に自ら説きたまはず、諸の菩薩摩訶薩は福德あり、智慧あり、利根にして、諸の聲聞に勝れたり。何を以ての故に、須菩提に命じて説かしめたまひしや。答へて曰く、先の舌相中に、已に二因緣あるが故に、須菩提をして説かしめたまへり〔と言へり〕。復次に、佛の威德を尊重し、畏敬する心の故に、敢へて佛に問ひたてまつらず、畏んで自ら盡くさず。

復次に、佛は、衆中の心に疑ふ所、衆人の佛を敬ひ難かるが故に、敢へて問を發せざるを知りたまへり。何となれば衆生は、佛身を見たてまつるに、〔高さ〕須彌山に過ぎ、舌は三千大千世界を覆ひ、身より種種無量の光明を出だしたまふ。是の時、衆會は心に皆驚怖し、敢へて問を發せず。各各自ら念ずらく、「我れ當に云何が佛より法を聞きたてまつらん」と。是を以ての故に佛は、須菩提に命じ、衆人の爲に法を説かしめて言はく、「汝が説く所の者は、皆是れ佛力なり」と。經の中に説くが如し。

復次に、〔二〕般若波羅蜜〔多〕に二種あり。一には聲聞、菩薩に共して合説し、二には但諸の法身の

【一】第一問、佛自ら説かず、菩薩の福德智慧は、聲聞に勝れたり、今それ聲聞の須菩提をして説かしむる理由如何。
【二】二種の智度。(一)聲聞と菩薩とに共通し。(二)但法身の菩薩のために説く。

菩薩の與めに說く。雜へて說くが爲の故に、須菩提を首と爲し、及び彌勒、舍利弗、釋提桓因に命じたまふ。爾の時、衆會は、佛の須菩提に命じて、說かしめたまふと聞いて、心皆驚疑す。須菩提は衆人の心を知り、舍利弗等に告げて言く、「一切の聲聞の說く所、知る所は、皆是れ佛力なり。我等當に佛の威神を承けて、衆人の爲に說くべし。譬へば（三）傳語の人の如し。何となれば佛の說きたまへる所の法の、法相と相違背せざればなり。是の弟子等は、是の法を學して證を作す。敢へて所說あるは皆是れ佛力なり。我等の所說は、卽ち是れ佛說なり。何となれば現に佛前に在りて說けばなり。我等は智慧の眼ありと雖も、佛法に値ひたてまつらずんば、則ち見る所なし。譬へば夜嶮道を行かんに、人の燈を執ること無ければ、必ず過ぐることを得ざるが如し。佛も亦た是の如く、若し智慧の燈を以て、我等を照らしたまはずんば、則ち見る所なけん」と。又舍利弗に告げていはく、「一切の聲聞、辟支佛は、實には力なきも、能く諸の菩薩の爲に般若波羅蜜「多」を說く、況んや我一人をや」と。何となれば菩薩の智慧は、甚深にして、問答玄遠なり。諸餘の淺近の法を、菩薩の邊に於いて、說くことすら、猶は難し、何に況んや深法をや。人の能く一斛の飯を食するありて、一斗を有する者より索め以て飢を除かんと欲せんに、是れ除くこと能はざるが如し。是を以ての故に聲聞辟支佛は、力なくして能く菩薩の爲に般若を說くと說く。須菩提は大明なり。菩薩も尊貴なれども、佛は亦た然も須菩提をして、實相の法中に於いて、說かんと欲せしめた

【三】須菩提は傳語の人の如く、佛は夜行の燈の如し。

まふべし。是の故に言はく、「一切法の中に、菩薩を求むるに不可得なり。菩薩不可得なるが故に、字も亦た不可得なり。菩薩の菩薩たる字は不可得なるが故に、般若波羅蜜「多」も亦た不可得なり。是の三事不可得なるが故に、我は云何が當に、菩薩に般若波羅蜜「多」を敎ふべき」と。

問うて曰く、(四)佛、須菩提に命じて、諸の菩薩の爲に、般若を說かしめ給ふに、而も須菩提は菩薩なしと言ひ、佛と相反せり。佛は何を以てか之に同じたまひしか。答へて曰く、(五)二種の說あり。一には著心の說、二には不著心の說なり。今須菩提は不著心を以て空を說くに、佛は之を訶したまはず。

復次に、須菩提は、常に空三昧を行じて、諸法の空を知るが故に、佛は須菩提に告げて、諸の菩薩の爲に、般若波羅蜜「多」を說かしめたまへり。而も菩薩は畢竟空なり。是の故に須菩提は驚いて言く、「云何が菩薩あらん」と。佛、卽ち述成したまはく、「菩薩は是の如く、發心してより已來、乃ち佛道に至るまで、皆畢竟空なるが故に不可得なり。若し是の如く敎ふるは、是れ卽ち菩薩に般若波羅蜜「多」を敎ふるなり」と。

復次に、(六)凡そ二法あり。一には名字、二には名字の義なり。火の能く炤らし、能く燒くは、是れ其の義なり。炤らすは、是れ造色、燒くは、是れ火大にして、是の二法の和合するを名けて火と爲

【四】第二問、佛、須菩提をして、菩薩の爲に說かしめ給ふに、彼は菩薩なしと謂つて、佛と相反せしは何故なるか。

【五】二種の說――(一)著心の說、(二)不著心の說。

【六】二法――(一)名字、(二)名字の義。

す。若し是の二法を離れて火あらば、更に應に第三の用あるべし。燒くことを除き、焰らすことを除いて、更に第三の業なし。是を以ての故に、二法の和合せるを假に名けて、火と爲すことを知る。是の火の名は、二法の內に在らず、何となれば是の法は二にして、火は是れ一なるを以てなり。一は二と爲らず、二は一と爲らず、義を以て二と名くるも、法は和合せず。何となれば若し二法合せば、火と說く時應に口を燒くべく、若し離るれば、火を索めて應に水を得べし。是の如き等の因緣〔を以て〕內に在らざることを知る。若し火は二法の外に在らば、火の名を聞いて、二法中に火想を生ずべからず。若し兩中間に在らば、則ち依止する處なし。一切有爲の法は、依止する處あるなし。若し兩中間に在らば、則ち知るべからず。是を以ての故に火は三處に在らず、但假名のみ有り。菩薩も亦た是の如く、二法の和合するを菩薩と名く。所謂名色なり。色と事は異なり、名と事は異なる。若し定んで菩薩あらば、應に更に第三の事あるべし。而も事あること無ければ、則ち假名は是れ菩薩なることを知る。菩薩の名も亦た是の如く、內に在らず、外に在らず、兩中間に在らず。是の中に、佛は譬喩を〔以て〕說きたまはく、「五衆和合するが故に、名けて我と爲すが如し。實我は不可得なり。衆生、乃至知者、見者は、皆是れ五衆の因緣の和合より假名の法を生ず。是の諸法は、實に不生不滅にして、世間は但名字を用ゐて說くのみ。菩薩の菩薩たる字、般若波羅蜜〔多〕も、亦た是の如く、皆是れ因緣和合の假名の法なり」と。是の中に、佛は更に譬喩を說き給へり。有人の言く、「但五衆和合して、衆生

あり、而も衆生は空にして、但五衆の法のみ有り」と。佛の言はく、「衆生は空なり、五衆も亦た和合するが故に、假に名字あり。十二處、十八界も亦た是の如し」と。

復次に、〔七〕菩薩に二種あり。一には坐禪、二には誦經なり、坐禪の者は、常に身を觀ずらく、「骨等の諸分和合するが故に、名けて身と爲す」と。卽ち所觀を以て、譬喩と爲して言く、「頭は、骨分の和合の故に、名けて頭と爲し、脚は、骨分の和合の故に、名けて脚と爲し、頭脚の骨等の和合の故に、名けて身と爲す。一一推尋するに、皆根本なし」と。何となれば此は是れ常に習ひ、常に觀ずるが故に、以て譬喩と爲せばなり。坐禪せざる者は、草木、枝葉、華實を以て喩と爲すなり。過去の諸佛の如きも、亦た但名字のみ有り、是の名字を用ゐて說くべし。十譬喩も亦た但名字のみ有り。菩薩の義も亦是の如し。十喩の義は先に說くが如し。菩薩は應に是の如く、〔八〕三種の波羅聶提を學すべし。〔いはゆる〕、五衆等の法は、是を法波羅聶提と名け、五衆の因緣和合するが故に、名けて衆生と爲し、諸骨和合するが故に、名けて頭骨と爲し、根莖枝葉和合するが故に、名けて樹と爲し、是を受波羅聶提と名け、是の名字を用ゐて、一一法の相を取り、是の二種を說く、是を名字波羅聶提と爲す。

復次に、衆の微塵の法和合するが故に、麤法生ずること有り、微塵和合するが故に、麤色あるが如し。是を法波羅聶提と名く。法に從つて法あるが故に、是の麤法和合して名字ありて生ず。能く焔ら

【七】二種の菩薩――(一)坐禪、(二)誦經。
【八】三種の波羅聶提――(一)法、(二)受、(三)名字。

すと、能く遠くと「を以て」、火の名字ありて生ずるが如し。名色あるが故に人と爲す、名色は是れ法、人は是れ假名なり。是を受波羅聶提と爲す。色を取り、名を取るが故に、名けて多く名字の邊を受くと爲す。更に名字あり、梁、椽、瓦等の名字の邊に、更に屋の名字ありて生ずるが如し。樹枝、樹葉の名字の邊に、樹の名ありて生ずるが如し。是を名字波羅聶提と爲す。行者は先づ名字波羅聶提を壞して、受波羅聶提に到り、次に受波羅聶提を破りて、法波羅聶提に到り、法波羅聶提を破して、諸法實相の中に到る。諸法實相は、即ち是れ諸法及び名字の空般若波羅蜜「多」なり。

經 復次に、舎利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜「多」を行ずる時、色の名字、是れ常なるを見ず、受想行識の名字、是れ常なるを見ず、色の名字、無常なるを見ず、受想行識の名字、無常なるを見ず。色の名字、樂なるを見ず、色の名字、苦なるを見ず、色の名字、我なるを見ず、色の名字、無我なるを見ず、色の名字、空なるを見ず、色の名字、無相なるを見ず、色の名字、無作なるを見ず、色の名字、寂滅なるを見ず、色の名字、垢なるを見ず、色の名字、淨なるを見ず、色の名字、生なるを見ず、色の名字、滅なるを見ず、色の名字、内なるを見ず、色の名字、外なるを見ず、色の名字、中間在なるを見ず。受、想、行、識も亦た是の如し。眼色、眼識、眼觸、眼觸因緣生の諸受、乃至意法、意識、意觸、意觸因緣生の諸受も、亦た是の如し。何となれば菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜「多」を行じて、般若波羅蜜「多」の字、菩薩、菩薩の字、有爲性の中にも亦た見ず、無爲性の中にも亦た見ざるを以てなり。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜「多」を行ずるに、是の中、戲論を作さず。是の菩薩は、般若波羅蜜「多」を行じ、不壞法の中に住し、四念處を修する時、般若波羅蜜「多」を見ず、般若波羅蜜「多」の字

を見ず、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず、乃至十八不共法を修する時、般若波羅蜜〔多〕を見ず、般若波羅蜜〔多〕の字を見ず、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず。菩薩摩訶薩は、是の如く、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、但だ諸法實相を知る。諸法實相とは、無垢無淨なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、當に是の知を作すべし、「名字は假の施設なり」と。假の名字を知り已りて、色に著せず、受想行識に著せず、眼乃至意に著せず、色乃至法に著せず、眼識に著せず、乃至意識に著せず。眼觸に著せず、乃至意觸に著せず。眼觸因緣生の受、若くは苦、若くは樂、若くは不苦不樂に著せず、乃至意觸因緣生の受、若くは苦、若くは樂、若くは不苦不樂に著せず。有爲性に著せず、法爲性に著せず、檀〔那〕波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、毘梨耶波羅蜜〔多〕、禪〔那〕波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕に著せず、三十二相に著せず、菩薩身に著せず、菩薩の肉眼に著せず、乃至佛眼に著せず、智波羅蜜〔多〕に著せず、神通波羅蜜〔多〕に著せず、內空に著せず、乃至無法有法空に著せず。成就衆生に著せず、淨佛世界に著せず、方便法に著せず。何となれば、是の諸法には、著する者なく、著する法なく、著する處なく、皆無なるが故なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、一切法に著せず、便ち檀〔那〕波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、毘梨耶波羅蜜〔多〕、禪〔那〕波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕を增益し、菩薩の位に入りて、阿鞞跋致地を得。菩薩の神通を具足し、一佛國に遊ぶより一佛國に至り、衆生を成就し、諸佛を恭敬、尊重、讚歎し、佛世界を淨むることを爲し、諸佛を見て供養したてまつり、供養の具、善根を成就するが故に、意に隨つて悉く得。亦た諸佛の說きたまふ所の法を聞き、聞き已りて乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至り、終に忘失せず。諸の陀羅尼門、諸の三昧門を得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、當に知るべし、諸法の名は假の施設なりと。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、色是れ菩薩なりや否や、受想行識是れ菩薩なりや否や。」「不なり、世尊よ。」「眼耳鼻舌身意は是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「色聲香味觸法は、是れ

菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「眼、乃至意識は是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「須菩提よ、汝が意に於いて如何、地種は是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「水火風空識種は、是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「須菩提、意に於いて如何。無明は、是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「乃至老死は是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ」「須菩提、意に於て如何ん、色を離るるは、是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「乃至老死を離るるは、是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「須菩提、汝が意に於て如何ん、色如の相、是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「乃至老死如の相は是れ菩薩なりや不や。」「不なり、世尊よ」。「色如の相を離れ、乃至老死如の相を離るる、是れ菩薩なりや不や。」「不なり世尊よ。」佛、須菩提に告げたまはく、「汝は何等の義を觀てか、色は菩薩に非ず、乃至老死は菩薩に非ず、色を離るるは菩薩にあらず、乃至老死を離るるは菩薩にあらず、色如の相は菩薩にあらず、乃至老死如の相は菩薩にあらず。色如の相を離るるは菩薩にあらず。乃至老死如の相を離るるは菩薩にあらずと言ふや」と。須菩提言さく、「世尊よ、衆生は畢竟不可得なり。何に況んや、當に是れ菩薩なるべけんや。色は不可得なり。何に況んや、色と、色を離るると、色如と色如を離るると是れ菩薩ならんや。乃至老死は不可得なり。何に況んや老死を離るると、老死如と老死如を離るると、是れ菩薩ならんや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「善い哉、善い哉、是の如し、須菩提よ、菩薩摩訶薩、衆生不可得なるが故に、般若波羅蜜多も不可得なり。當に是の學を作すべし。「須菩提よ意に於て云何ん、色は是れ菩薩の義なりや不や。」「不なり世尊よ。」「受想行識は是れ菩薩の義なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「須菩提よ意に於て云何ん、色の常、是れ菩薩の義なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の常、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「色の無常、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の無常、是れ菩薩の義なりや不や」。「不なり、世尊よ。」「色の樂、是れ菩薩の義なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の樂、是れ菩薩の義なりや否や。」「不なり、世尊よ。」「色の苦、

是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ」と。「受想行識の苦、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「色の我なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の我なる、是れ菩薩の義なりや不や。」「不なり、世尊よ。」「色の非我なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の非我なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「須菩提よ、意に於て云何。色の空なる、是れ菩薩の義なりや、不や」と。「不なり、世尊よ。」「受想行識の空なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ」と。「色の非空なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の非空なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「色の相、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の相、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「色の無相なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の無相なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「色の作なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の作なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「色の無作なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ。」「受想行識の無作なる、是れ菩薩の義なりや、不や。」「不なり、世尊よ」と。乃至老死も、亦た是の如し。佛、須菩提に告げたまはく、「汝は何等の義を觀てか、色は菩薩の義にあらず、受想行識は菩薩の義にあらず、乃至色受想行識の無作なるは、菩薩の義にあらず、乃至老死も亦た是の如しと言ふや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、色は畢竟不可得なり、何に況んや。色是れ菩薩の義ならんや。受想行識も亦た是の如し。世尊よ、色の常なるは、畢竟不可得なり、何に況んや、色の無常なる是れ菩薩の義ならんや。乃至識も亦た是の如し。世尊よ、色の樂なる、畢竟不可得なり。何に況んや、色の苦なる、是れ菩薩の義ならんや。乃至識も亦た是の如し。世尊よ、色の我なるは、畢竟不可得なり。何に況んや、色の非我なる、是れ菩薩の義ならんや。乃至識も亦た是の如し。世尊よ、色の有法なるは、畢竟不可得なり。何に況んや、色の空なる、是れ菩薩の義なることをや。乃至識も亦た是の

如し。世尊よ、色の相は、畢竟不可得なり。何に況んや、色の無相なる、是れ、菩薩の義ならんや。乃至、識、亦た是の如し。世尊よ、色の作なるは、畢竟不可得なり。何に況んや、色の無作なる、是れ、菩薩の義ならんや。乃至識も亦た是の如し」と。佛、須菩提に告げたまはく、「善い哉、善い哉、是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ずるに、色の義は、不可得なり。受想行識の義、乃至無作の義不可得なるは、當に是の般若波羅蜜（多）を學すと作すべし。

須菩提、汝は、「我れ是の法を見ざる（者）をば、菩薩と名く」と言へり。須菩提、諸法は諸法を見ず、諸法は法性を見ず、法性は諸法を見ず、法性は地種を見ず、地種は法性を見ず、乃至識種は法性を見ず、法性は識種を見ず、法性は眼色眼識の性を見ず、眼色眼識の性は法性を見ず、乃至法性は意法意識の性を見ず、意法意識の性は法性を見ず。須菩提よ、有爲性は無爲性を見ず、無爲性は有爲性を見ず。何となれば、有爲を離れては、無爲を說くべからず、無爲を離れては、有爲を說くべからざればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行じて、諸法に於いて見る所なし。是の時、驚かず、畏れず、怖かず、心亦た沒せず、悔いず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、色受想行識を見ざるが故に、眼乃至意を見ず、色乃至法を見ず、婬怒癡を見ず、無明乃至老死を見ず、我乃至知者、見者を見ず、欲界、色界、無色界を見ず、聲聞心、辟支佛心を見ず、菩薩を見ず、菩薩法を見ず、佛を見ず、佛法を見ず、佛道を見ざればなり。是の菩薩は、一切法を見ざるが故に驚かず、畏れず、怖かず、沒せず。悔いざるなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因緣の故に菩薩は、心、怖かず、沒せず、悔いざるや」と。佛、須菩薩に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の一切の心心數法は得べからず、見るべからず。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、心、沒せず、悔いざるなり」と。「世尊よ、云何が菩薩は、心、驚かず、畏れず、怖かざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の菩薩の意及び意界は、得べからず、見るべからず。是を以ての故に、驚かず、畏れず、怖かざるなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、一切法不可得なるが故に、應に般若波羅蜜（多）

を行ずべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、一切の行處に、般若波羅蜜「多」を得ず、菩薩の名を得ず、亦た菩薩の心を得ず、即ち是れ菩薩摩訶薩を敎ふるなり」と。

論 釋して曰く、九菩薩は、般若波羅蜜「多」を行じて、色法の名字を觀ずるに、常に非ず、無常に非ず、乃至有爲、無爲の性中に、菩薩の菩薩たる字あるを見ざるとは、先に說けるが如し。一切法中に、憶想分別を作さず、菩薩は不壞法の中に住して、六波羅蜜「多」、乃至十八不共法を行じ、一〇諸法實相の智慧を以て、諸法の中に於いて求むるに、一定の法を見ず。所謂般若波羅蜜「多」も、亦た般若波羅蜜「多」の名字を見ず、又菩薩及び菩薩の名字を見ず。是の智慧を用ふるが故に。無明等の諸の煩惱を破し、是の見ざるをも、亦た見ざる智慧を用ふるが故に、般若波羅蜜「多」。般若波羅蜜「多」の名字、菩薩、菩薩の名字に著することを破す。諸法實相は、清淨にして通達無礙なり。菩薩は是の如きの智慧を得て、若くは見、若くは聞き、若くは念ずるに、皆幻化の如し。若くは聞き、見、念ずることとは、皆是れ虛誑なり。是を以ての故に色等に著せず。是の無礙の智慧の中に住して、六波羅蜜「多」を增益し、菩薩の位に入りて、是の如き等の利益を得。是の一章には、佛自ら菩薩をして、是の如きの觀を作さしめたまひ、次後の章には、一八の、「佛は多く法空を說きたまふ」と謂ふが故に、須菩提に反問したまはく。「若し諸法は空ならずん

【九】五蘊等の実を說き、執著の念を捨つ。

【一〇】諸法實相とは、是れ究極の眞理に名くる語なり。或は眞如といひ、或は法性といひ、又は實際といふ、何れも同意義の語なり。

ば、頗る一法の定んで是れ菩薩なるものありや。不や。所謂色は是れ菩薩なりや、不や。乃至如は是れ菩薩なりや、不や」と。須菩提は是の念を作さく、「諸法和合するが故に、菩薩あり。我云何が、一法の定んで是れ菩薩なるものありと言はんや」と。是を以ての故に、「不なり、世尊よ」と言ふ。須菩提の、善く衆生の空を得るが故に、佛は、「善哉、善哉」と言へり。菩薩は、衆生の空にして、不可得なることを知るが故に、應に般若波羅蜜〔多〕を行ずべし。色は是れ菩薩の義、乃至無作、畢竟空も、亦是の如し。須菩提は、諸法の深空の中に入りて、疑はざるが故に、能く諸の菩薩を益するが故に、佛は讃じて、「善哉、善哉」と言へり。菩薩の法は、應に是の如く、一切法の〔二〕不可得空、般若波羅蜜〔多〕を學すべし。須菩提の說くが如くんば、「我は是の法を見ざる〔者〕をば、名けて菩薩と爲す」と。佛の言はく、「但菩薩のみ獨り見るべからざるにあらず。都て法の。法を見る者あるとなし。無性は無量にして、見るべからざればなり。是の故に諸法は法性を見ず。諸法は、因緣和合して生じ、自性あるとなく、畢竟空なるが故に、法性は諸法の色性を見ず、色性は法性を見ず、法性の色性乃至識性を見ざるとも、亦是の如し。五衆の性は、法性と同名なるが故に、名けて性と爲す。十二處、十八界、有爲法、無爲法も、亦是の如し。略して因緣を說く。〔三〕有爲の性

〔二〕不可得空。萬有の眞相は有にもあらず、又吾人の思惟するが如き空にもあらず、言語思慮を超絕せるものなり。之を假りに空と名けたるを不可得といふ。

〔三〕有爲、爲は造作の義、故に有爲とは、造作を有するなといふ。卽ち因緣所生の事物は、悉く有爲なり。能生の因緣は是れ所生の事物を造作するもの、所生の事物は、必ず此の因緣の造作を有すればなり。

を離れて【一三】無爲の性を說くことを得ず。無爲の性を離れて有爲の性を說くことを得ず。是の二法の中に、一切法を攝するが故に、是の菩薩は、一切法を見ずと雖も、亦た怖畏せず。何となれば見る所あり、見ざる所あれば、卽ち恐畏あり。若し都べて見る所なければ、卽ち畏るる所なければなり。所謂、「見る所とは」五衆乃至十八不共法なり」と。

問うて曰く、【一四】若し佛は已に恐畏せざるの因緣を說きたまへり。須菩提は何が故に重ねて問ひたてまつりしや。答へて曰く、須菩提、若し「法は都べて空にして所有なくんば、邪見に墮せんことを恐る。何となれば佛弟子は、正見を得るが故に、名けて行道の人と爲す。云何が都べて見るべからずと言はん」と謂はば、佛は、須菩提の意を知りたまふが故に、說いて言はく、「一切の心心數法は、不可得なり、見るべからざるが故に、畏るることなし」と。凡夫の人は、空中に入らんと欲して、心心數法に得べく、外法は、得べからずと見るが故に恐怖す。菩薩は、心心數法の虛妄にして實ならず、顚倒の果報にして、能く人に實非を示さず「と見るを」以ての故に恐怖せず。是の異義を以ての故に重ねて問へり。

問うて曰く、【一五】若し爾らば、何を以てか。復た第三の問あるや。答へて曰く、心心數法は、意識の

【一三】無爲とは、前の有爲の反對にて造作を有せざるをいふ。卽ち因緣によりて造作せざるの義なり。又生住異滅の四相の造作なきを無爲といふ。眞理の異名なり。これに三種六種の別あり。詳くは倶舍論、唯識論等を看るべし。

【一四】第三問。佛已に怖畏せざる因緣を說かば、須菩提は、何が故に重ねて問へるや。

【一五】第四問。若し爾らば、第三の問あるは何故なるか。

中に【一六】見るべし。意及び意識は、是れ心心數法の根本なり。何となれば意識の中に、多く分別するが故に、恐怖を生ず。五識は時頃の促すが故に、分別する所なし。怖畏の根本を破せんと欲す、是の故に重ねて問ふも咎なし。若し菩薩は、能く是の如く、般若波羅蜜「多」を行せば、四種の事、「即ち」菩薩、菩薩の字。般若波羅蜜「多」、般若波羅蜜「多」の字を見ずと雖も、能く三種の因緣「を以て」是れず。即ち是れ菩薩に般若波羅蜜「多」を敎ふるなり。若し但だ菩薩、般若波羅蜜「多」の相を了せば、是を般若波羅蜜「多」を行ずと爲す。十方より求めず、亦た與ふる者なく。亦た金銀寶物の如く。力「を以て」求めて得るにあらず。

【一七】勸學品第八を釋す。

【經】爾の時に、慧命舍利弗は、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、檀「那」波羅蜜「多」を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。尸羅波羅蜜「多」、羼提波羅蜜「多」、毘梨耶波羅蜜「多」、禪「那」波羅蜜「多」、般若波羅蜜「多」を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。菩薩摩訶薩は、色を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。乃至識を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。眼乃至意を知らんと欲し、色乃至法を知らんと欲し、眼識乃至意識を知らんと欲し、眼觸乃至意觸を知らんと欲し、眼觸因緣生の受、乃至意觸因緣生の受を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。婬、瞋、癡を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。菩薩摩訶薩は、身見、戒取、疑、婬欲、瞋恚、色愛、無色愛、掉慢、無明等の一切の結使、及び纒を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし。四縛、

【一六】宋・元・明三本倶に「心心數法意識中不可見」に作れり。

【一七】此の品の目的は、廣く三乘に般若の行を勸むるにあるが故に勸學品といふ。

四結、四顚倒を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。十善道を知らんと欲し、四禪を知らんと欲し、四無量心、四無色定、四念處、乃至十八不共法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。菩薩摩訶薩は、覺意三昧に入らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。六神通、九次第定、超越三昧に入らんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。師子遊戲三昧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。師子奮迅三昧を得んと欲し、一切陀羅尼門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。菩薩摩訶薩は、首楞嚴三昧、寶印三昧、妙月三昧、月幢相三昧、一切法印三昧、觀印三昧、畢法性三昧、畢住相三昧、如金剛三昧、入一切法門三昧、三昧王三昧、王印三昧、淨力三昧、高出三昧、畢入一切辯才三昧、入諸法名三昧、觀十方三昧、諸陀羅尼門印三昧、一切法不忘三昧、攝一切法聚印三昧、虛空住三昧、三分清淨三昧、不退神通三昧、出鉢三昧、諸三昧幢相三昧を得んと欲し、是の如き等の諸三昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩は、一切衆生の願を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と。

【一八】 第五問、初品中に已に、種々の所得あらんと欲せば、當に智度を學すべしと言ひ、今復た重說するは何故なるか。

■ 問うて曰く。(一八)初品中に、種種に得る所あらんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべしと言へり。今何を以てか重ねて說くや。答へて曰く。先には但是の諸の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を行ずべしと讃歎し、未だ般若波羅蜜〔多〕を說かず、今は已に般若波羅蜜〔多〕の味を聞けり。餘の功德、所謂六波羅蜜〔多〕等を得んと欲するに因りて、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

復次に、上には種種の因緣もて、諸法の空を說けり。人あり、「佛法は斷滅にして復作す所なし」と

謂はん。是の人の疑を斷せんが爲の故に、「布施等の種種の功德を得んと欲せば、常に般若波羅蜜[多]を行ずべし」と言ふ。若し般若波羅蜜[多]は、實に空にして、所有なく、斷滅せば、應に布施等の功德を行ずべしと說くべからず。有智の者の說にして、何に緣りてか初後相違せんや。復次に、前には廣說し、此には略說す。彼には是れ佛說、此は是れ須菩提の說なり。

復次に、般若波羅蜜[多]は、深妙なるが故に重ねて說くなり。譬へば德の美を讚ずるが故に「善哉、善哉」と言ふが如し。六波羅蜜[多]の義は、先に說くが如し。五衆を知る者は、無常、苦、空、總相、別相等を見る。[一九]六情、[二〇]六塵、[二一]六識、[二二]六觸、[二三]六受も亦た是の如し。一切世間の繫縛は、[二四]受を主と爲す。受を以て

【一九】六情
- 眼(Cakṣurindriya—視覺の器官)
- 耳(Śrotrendriya—聽覺の器官)
- 鼻(Ghrāṇendriya—嗅覺の器官)
- 舌(Jihvenpriya—味覺の器官)
- 身(Kāyendriya—觸覺の器官)
- 意(Manendriya—認識の器官)

【二〇】六塵
- 色(Rūpa—眼根の對象)
- 聲(Śabda—耳根の對象)
- 香(Gandha—鼻根の對象)
- 味(Rasa—舌根の對象)
- 觸(Sparśa—身根の對象)
- 法(Dharma—意根の對象)

【二一】六識
- 眼(Cakṣurvijñāna—視覺)
- 耳(Śrotravijñāna—聽覺)
- 鼻(Ghrāṇavijñāna—嗅覺)
- 舌(Jihvavijñāna—味覺)
- 身(Kāyavijñāna—觸覺)
- 意(Manovijñāna—認識)

【二二】六觸、觸とは、觸著又は觸對の義なり。(一)眼觸、世間の有ゆる色に觸對す。(二)耳觸、世間の有ゆる聲音に觸對す。(三)鼻觸、世間の有ゆる香に觸對す。(四)舌觸、世間の有ゆる

の故に、諸の結使を生ず。樂受は貪欲を生じ、苦受は瞋恚を生じ、不苦不樂受は愚癡を生じ、(三五)三毒は、諸の煩惱及び業因緣を起す。是を以ての故に、但受を說き、餘の心數法を說かず。〔餘の心數法とは〕所謂、(三六)想、(三七)憶念等なり。三毒、(三八)十結、諸の使纏乃至十八不共法は、先に說けるが如し。覺意三昧、超越三昧、師子遊戲三昧、是の菩薩の諸の三昧に、後に當に說くべし。一切衆生の願を滿さんと欲すとは、先に已に說けり。

【經】是の如き善根を見足して、常に惡趣に墮せざることを得んと欲し、卑賤の家に生ぜざるを得んと欲し、聲聞辟支佛地の中に住せざるを得んと欲し、菩薩の頂に墮せざるを得んと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。

味に觸對す。(五)身觸、男女の皮膚、上妙の衣服等に觸對す(六)意觸、世間の有ゆる事物に觸對す。

【三三】六受とは、六根卽ち六官の受領する六境——對象——のことなり。

【三四】受とは、感覺の義なり。

【三五】三毒とは、貪と、瞋と、癡と、卽ち三種の根本的煩惱をいふ。

【三六】想とは、心的作用の一にして、事物の相を心に浮べ、以て言語を起す因となるものを言ふ。

【三七】憶念とは、心的作用の一にして、所對の境を記憶して忘れざるをいふ。

【三八】十結とは、五下分結（欲界の煩惱）と五上分結（上二界の煩惱）とを合せる名稱なり。

五下分結
- (一)貪結——貪欲の煩惱。
- (二)瞋結——瞋恚の煩惱。
- (三)身見結——我見の煩惱。
- (四)戒取見——非理の邪戒を執する煩惱。
- (五)疑結——眞理を狐疑する煩惱。

五上分結
- (一)色愛結——色界の五妙欲に貪著する煩惱。
- (二)無色愛結——無色界の禪定の境界に貪著する煩惱。
- (三)掉結——二界の衆生の心念掉動し、禪定退失する煩惱。
- (四)慢結——二界の衆生、自を恃み他を凌ぐ憍慢の煩惱。
- (五)無明結——二界の衆生の癡闇の煩惱。

爾の時に、慧命舍利弗、須菩提に問ふ。「云何が菩薩摩訶薩の頂に墮すと爲すや」。須菩提言く、「舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩は、方便を以てせずして、六波羅蜜（多）を行じ、空、無相、無作三昧に入り、聲聞辟支佛地に墮せず、亦た菩薩位に入らざる、是を菩薩摩訶薩、法愛生ずるが故に、頂に墮すと名く」。舍利弗。須菩提に問ふ。「云何が菩薩の生と名くるや」。須菩提、舍利弗に答へて言く、「生を法愛と名く」。舍利弗言く、「何等か法愛なるや」。須菩提言く、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行じ、色は是れ空なりとの念著を受け、受想行識は是れ空受なりとの念著を受く。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の順道に法愛生ずと名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、色は是れ無相なりとの念著を受け。受想行識は是れ無相なりとの念著を受け、色は是れ無作受なりとの念著を受け、受想行識は是れ無作なりとの念著を受け、色は之れ寂滅なりとの念著を受け、受想行識は是れ寂滅なりとの念著を受け、色は是れ無常、乃至識は是れ無常、色は是れ苦、乃至識も（是れ苦なり）、色は是れ無我、乃至識も（是れ無我なり）との念著を受く。是を菩薩の順道に法愛生ずと爲す。是れ苦なり。應に知るべし、集應に斷すべし、盡應に證すべし、道應に修すべし、是は垢法なり、是は淨法なり、是は近づくべく、是は近づくべからず、是は菩薩の行ずべき所、是は菩薩の行ずべき所に非ず、是は菩薩の道、是は菩薩の道に非ず、是は菩薩の學、是は菩薩の學に非ず、是は菩薩の檀（那）波羅蜜（多）、乃至（菩薩の）般若波羅蜜（多）、是は菩薩の檀（那）波羅蜜（多）にあらず、乃至（菩薩の）般若波羅蜜（多）にあらず」。是は菩薩の方便なり、是は菩薩の方便に非ず、是は菩薩の熟なり、是は菩薩の熟に非ずと。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行じて、是の諸法に念著を受くべし、是を菩薩摩訶薩の順道に法愛生ずと爲す。

【二九】第六問、何等の善根によりて、人は惡道、貧賤に墮せず及び聲聞、辟支佛は頂に墮せざるか。

論

問うて曰く、（二九）何等の善根の故に、惡道、貧賤に墮せず、及び聲聞、辟支佛は、亦頂に墮せざ

るや、亦た〔菩薩の〕頂に墮せざるや。答へて曰く、有人は言ふ、「不貪の善根を行ずるが故に、愛等の諸結使衰薄にして、深く禪定に入り、不瞋の善根を行ずるが故に、瞋等の諸結使薄くして、深く慈悲心に入り、不癡の善根を行ずるが故に、無明等の諸結使薄くして、深く般若波羅蜜〔多〕に入る」と。是の如く。禪定・慈悲・般若波羅蜜〔多〕の力の故に。事として得ざるなし。何に況んや四事をや。

問うて曰く、〔三〇〕何を以てか四事の中、但だ〔菩薩の〕頂に墮することを問ふや。答へて曰く、三事は先に已に說けり。〔菩薩の〕頂に墮することは未だ說かざるが故に問へるなり。

問うて曰く、〔三一〕頂とは是れ法位なり、此の義は先に已に說けり。今何を以て重ねて說くや。答へて曰く、其の義を說くと雖も、名字は各異なれり。方便なくして、三解脫門に入り、及び方便ありて、〔三解脫門に入ることは〕先に已に說けり。〔三二〕法愛は、無生法忍の中に於いて、利益あること無きが故に、名けて生と曰ふ。譬へば多く食して、消〔化〕せざるに、若し療治せざれば、身に於いて患と爲るが如し。菩薩も亦た是の如く、初發心の時に、法食を貪愛し、所謂方便なくして、諸の善法を行じ、深心に無生法忍に繫著す。是を則ち生と爲し、病と爲す。法愛

〔三〇〕 第七問、四事の中、但頂に墮するを問ふ理由如何。

〔三一〕 第八問、頂の義を重說する理由如何。

〔三二〕 法愛、愛に三種あり、一に欲愛、凡夫の愛著なり。二に法愛、菩薩位以上の人の善法を愛樂するなり。此の法愛に又二種あり。一は小機の涅槃を愛するもの、又は菩薩の未だ法執を斷ぜずして、善を愛するもの、此の法愛は必らず斷ぜざる可らず。二は如來の大悲を法愛といふ。是れ無上の眞愛なり。

に著するを以ての故に、不生不滅に於いても亦た愛す。譬へば、必死の人の諸の藥を加ふと雖も、藥は反つて病と成るが如し。是の菩薩は、畢竟空、不生不滅、忍法中に於いて、愛著を生じ、反つて其の患を爲す。法愛は、人天の中に於いては、妙と爲すも、無生法忍に於いては、患を爲す。一切法の中に、諸觀の是非を憶想分別し、法に隨つて愛する、是を名けて生と爲し、諸法實相の水を盛るに任へず、生と相違する、是を菩薩の熟と名く。

問うて曰く、〔一〕是の一事は何を以ての故に名けて頂と爲し、名けて位と爲し、名けて不生と爲すや。答へて曰く、柔順忍と、無生忍との中間に於ける有らゆる法を名けて、頂と爲す。是の頂上に住して、直に佛道に趣き復た畏れ墮せざるなり。譬へば聲聞法の中の、煖と忍の中間を名けて、頂法と爲すが如し。

問うて曰く、〔二〕若し頂を得て墮せずんば、今云何が頂より墮すと言ふや。答へて曰く、近く得べきに垂んとして、而も失する者を名けて、墮すと爲す。頂を得る者は、智慧あり、安隱にして、則ち畏れ墮せず、譬へば山に上るに、既に頂に到ることを得れば、則ち畏れ墮せず、未だ到らざるの間は、傾き危く畏れ墮するが如し。頂の增長し、堅固なるを、名けて菩薩位と爲す。是の位の中に入れば、一切の結使、一切の魔民は、動搖すること能はず、亦た無生法忍と名く。何となれば生に異なるを以

〔一〕第九問、是の一事を頂、位、不生と爲す理由如何。

〔二〕第一〇問、若し頂を得て墮せずんば、云何が頂より墮すといふか。

てなり。愛等の結使の、諸の善法に雜はるを生と爲す。

復次に、諸法實相の智慧の火なきが故に、名けて生と爲し、諸法實相の智慧の火あるが故に、名けて熟と爲す。是の人は、能く諸法實相の智慧を信受するが故に、名けて熟と爲す。譬へば熟瓶は能く水を盛り受くるも、生瓶は、則ち爛壞するが如し。

復次に、生滅の智慧に依止するが故に、顚倒を離るることを得。生滅の智慧を離るるが故に、不生不滅なり。是を無生法と名く。能く信じ、能く受け、能く持するが故に、名けて忍と爲す。復次に、位とは、一切の無常等の諸の觀法を拔くが故に、名けて位と爲す。若し是の如くならざれば、是を順道に法愛生ずと爲す。

【經】舍利弗、須菩提に問ふ、「云何が菩薩摩訶薩の無生と名くるや」と。須菩提言く、「菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ずる時、内空中に外空を見ず、外空中に内空を見ず、外空中に内外空を見ず、内外空中に外空を見ず、内外空中に空空を見ず、空空中に内外空を見ず、空空中に大空を見ず、大空中に空空を見ず、大空中に第一義空を見ず、第一義空中に大空を見ず、第一義空中に有爲空を見ず、有爲空中に、第一義空を見ず、有爲空中に無爲空を見ず、無爲空中に有爲空を見ず、無爲空中に畢竟空を見ず、畢竟空中に無爲空を見ず、畢竟空中に無始空を見ず、無始空中に畢竟空を見ず、無始空中に散空を見ず、散空中に無始空を見ず、散空中に性空を見ず、性空中に散空を見ず、性空中に諸法空を見ず、諸法空中に性空を見ず、諸法空中に自相空を見ず、自相空中に諸法空を見ず、自相空中に不可得空を見ず、不可得空中に自相空を見ず、不可得空中に無法空

を見ず、無法空中に不可得空を見ず、無法空中に有法空を見ず、有法空中に無法空を見ず、有法空中に無法有法空を見ず、無法有法空中に有法空を見ず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行じて、菩薩の位に入ることを得。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を學せんと欲せば、應に是の如く學すべし。色受想行識を念ぜず、眼乃至意を念ぜず、色乃至法を念ぜず、檀〔那〕波羅蜜〔多〕、尸〔羅〕波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、毘梨耶波羅蜜〔多〕、禪〔那〕波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕、乃至十八不共法を念ぜず。是の如く。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行じて、是の心、念ずべからず、高うすべからず。無等等の心、念ずべからず、高うすべからず。大心、念ずべからず、高うすべからず。何となれば、是の心は心に非ず、心相は、常に淨きが故なり。」舍利弗、須菩提に語る、「云何が、心相は常に淨しと名くるや。」須菩提言く、「若し菩薩、是の心相を知れば、婬、怒、癡と合せず、離れず。諸纏流結等の諸の結使、一切の煩惱と合せず、離れず。聲聞辟支佛心と合せず、離れざるなり。舍利弗よ、是を菩薩の心相は、常に淨しと名く。」舍利弗、須菩提に語る、「是の無心の相に心ありや、不や。」須菩提、舍利弗に報じて言く、「無心の相中に心相あらば、無心の相は得べきや不や。」舍利弗言く、「得べからず。」須菩提言く、「若し得べからずんば、是の無心の相に心有りや、不や」と問ふべからず。」舍利弗復た問ふ、「何等か是れ無心の相なるや。」須菩提言く、「諸法壞せず分別せざる、是を無心の相と名く。」舍利弗、須菩提に問ふ、「但是の心のみ壞せず、分別せざるや。色も亦た壞せず分別せず、乃至佛道も亦た壞せず分別せざるや。」須菩提言く、「若し能く心相の壞せず、分別せざることを知れば、是の菩薩は亦た能く色乃至佛道の壞せず分別せざることを知らん。」爾の時に、慧命舍利弗、須菩提を讃すらく、「善い哉、善い哉、汝は眞に是れ佛子なり。佛口より生じ、法を見るより生じ、法化より生じ、法分を取り、財分を取らず、法中に自ら信じ、身に證を得。佛の說きたまふ所の如くんば、無諍三昧を得たる中にて、汝は最も第一なりと。實に佛の擧げたまふ所の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に是の如く、

般若波羅蜜〔多〕を學すべし。是の中亦た當に分別して知るべし。菩薩、汝が所說の如く行ずれば、則ち般若波羅蜜〔多〕を離れず。須菩提よ、善男子、善女人にして、聲聞地を學せんと欲するも、亦た當應に般若波羅蜜〔多〕を聞いて、持し、誦し、讀み、正憶念して、說の如く行ずべし。辟支佛地を學せんと欲するにも、亦當應に般若波羅蜜〔多〕を聞いて、持し、誦し、讀み、正憶念して、說の如く行ずべし。菩薩地を學せんと欲するにも、亦た當應に般若波羅蜜〔多〕を聞いて、持し、誦し、讀み、正憶念して、說の如く行ずべし。何となれば、是の般若波羅蜜〔多〕の中には、廣く三乘を說く。是の中の菩薩摩訶薩聲聞、辟支佛は、當に學すべければなり。

【論】釋して曰く、內空中に外空を見ず、外空中に內空を見ずとは、有人の言く、「外の四大は飲食して、其の身に入るが故に、名けて內と爲し、若し身死すれば還た外と爲る。一切法は、來去の相なきが故に、外空は內空中にあらず、餘の十七空も亦た是の如し。不生不滅にして、異相なく、來去なきが故に、各各の中に住せず。復次に、菩薩の位相は、一切の色を念じて、有と爲さず。乃至十八空も、亦た是を有なりと念せず。有と念せざるの義は先に說くが如し。

問うて曰く、（三五）菩提心と、無等等心と、大心とは、何の差別ありや。答へて曰く、（三六）菩薩は初發心に、無上道を緣じて、「我れ當に作佛すべし」と。是を菩提心と名く。（三七）無等等心は、名けて佛と爲す。何となれば一切の衆生、一切の法の與等なる者なければなり。是の菩提心は、佛と相似す。何となれば因、果に似たるが故に、是を無等等心と名く。是の心は、事として行せざること無く、恩惠を求

【三五】第一問、菩提心と、無等等心と、大心との相違差別如何。
【三六】菩提心の義解。
【三七】無等等心の義解。

めず、深固に決定す。

復次に、檀波羅蜜［多］、是を菩提心と名く。何となれば檀波羅蜜［多］の因緣の故に、大富を得て、乏少する所なく、尸羅波羅蜜［多］の因緣の故に、三惡道を出で、人天の中の尊貴に住し、二波羅蜜［多］の果報力の故に、安立して能く大事を成ず。是を菩提心と名く。羼提、毘梨耶波羅蜜［多］の相は衆生の中に於いて、奇特の事を現ず。所謂人來りて肉を割り、髓を出だすと、樹木を截るが如きも、而も怨害を念じ、血化して乳と爲る。是の心は、佛心の如きに似たり。十方の六道の中の、一一の衆生に於いて、皆深心を以て濟度す。又諸法の畢竟空なることを知るも、而も大悲を以て能く諸行を行ずる、是を奇特と爲す。譬へば人の空中に樹を種ゑんと欲せば、是を希有と爲すが如し。是の如き等の精進波羅蜜［多］の力勢は、無等と相似す、是を無等等と名く。〔八〕禪定に入りて、四無量心を行じ、十方に遍滿して、大悲の方便と合するが故に、一切衆生の苦を拔く。又諸法實相は、一切の觀を滅し、諸の語言斷えて、而も斷滅の中に墮せざる、是を大心と名く。

【八】大心の義解。

【九】再び前の三心を釋す。

復次に、〔九〕初發心を、菩提心と名け、六波羅蜜［多］を行ずるを、無等等心と名け、方便心中に入る、是を大心と名く。是の如き等の各の差別あり。

復次に、菩薩は、是の如き大智の心を得るも、亦心を高うせず。［そは］相常に清淨なるが故なり。

虚空の相は、常に清淨なるも、煙雲塵霧の假りに來るが故に、覆蔽して不淨なるが如し。心も亦た是の如く、常に自ら清淨なるも、無明等の諸の煩惱の客、來りて覆蔽するが故に、以て不淨と爲り、煩惱を除去すれば、本の如く清淨なり。行者の功は、夫れ微薄なり。此の清淨は、汝が所作にあらず、自ら高うすべからず、念ずべからず。何となれば畢竟空なればなり。

問うて曰く、【四〇】舍利弗は、心相の常に淨なることを知る、何を以ての故に問へるや。答へて曰く、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、深く入り、深く著するが故に、心は畢竟空にして、常に清淨なりと聞くと雖も、猶ほ憶想分別して、是の無心の相を取る。是れを以ての故に問へるなり。是の無心の相の心は、有と爲し無と爲す。若し有なれば、云何が無心の相と言はん。若し無ならば、何を以てか是の無等等心は當に佛道を成ずべしと讚歎せん。須菩提答へて曰く、「是の無心の相の中は、畢竟清淨にして、有無を得べからず、難ずべからず」と。舍利弗復た問ふ、「何等か是れ、無心の相なるや」と。須菩提答へて曰く、「畢竟空にして、一切の諸法は分別なし。是れを無心の相と名く」と。舍利弗復た問ふ、「但だ心相は、壞せず、分別せずんば、餘法も亦た是の如けん」と。須菩提答へて曰く、「諸法も亦た是の如し」と。若し爾らば、阿耨多羅三藐三菩提も、亦た虚空の如く、壞すること無く、分別すること無けん。諸の菩薩は、深く阿耨多羅三藐三菩提に著するが故に、是の念を作さく、「諸の凡夫の法

【四〇】第一二問。舍利佛は心相の常に淨なるを知れり、今又之を問へるは何故なるか。

は、虚誑と言ふべし。［そは］不眞實なるを以ての故なり。菩薩は漏未だ盡くさざるが故に、亦た不清淨と言ふべし。云何が阿耨多羅三藐三菩提も、亦復た虚誑ならん」と。是の時、心驚きて悦ばず。須菩提は、其の心を知り已りて、思惟し籌量すらく、「我れ今應に爲に實相の法を說くべきや、不や」と。思惟し已りて自ら念ずらく、「今佛前に在り、當に實相を以て答ふべし。若し我に失あらば、佛は自ら當に說きたまふべし」と。重ねて思惟し竟る、是を以ての故に說けり。「阿耨多羅三藐三菩提は、是れ第一なりと雖も、亦た虚誑法邊より生ずるが故に、亦た是れ空にして壞せず、分別せざるの相なり。是の故に行者は、當に阿耨多羅三藐三菩提の相に隨つて行ずべく、相を取り、自ら高うすべからず」と。爾の時に、舍利弗、須菩提を讃じて言はく、「善い哉、善い哉」と。佛は時に默然として、須菩提の答ふる所を聽きたまへり。亦た可し、舍利弗の歎ずる所、佛の口より生ずとは、有人の言はく、「婆羅門は、梵天王の口邊より生ずるが故に、〔四二〕四姓の衆生中に於いて、第一なり」と。是を以ての故に舍利弗は讃じて言く、「汝は眞に佛の口より生ず」と。何となれば法を見、法を知れるが故なり。〔四三〕未だ得道あらざる者は、佛に依るが故に供養を得。是を財分を取ると名く。又弊惡の子の、父の敎に隨はずして、但だ財分を取るが如し。〔四四〕法分を取るとは、諸の禪定、根力、覺道の種種の善法を取る、是を

【四二】四姓とは、印度社會に於ける階級の名、其の名稱左の如し。
(一)婆羅門(Brahman)
(二)刹帝利(Kṣatriya)
(三)毘舍(Vaiśya)
(四)首陀(Śūdra)

【四三】財分を取るの意義。

【四四】法分を取るの意義。

法分を取ると名く。(四四)四信を得るが故に、名けて法中に自ら信ずと爲す。諸の神通、滅盡定等を得て、身中に著くが故に、是れを(四五)身に證を得と名く。舍利弗は、智慧の中に於いて第一、目揵連は、神足第一、摩訶迦葉は、頭陀第一、須菩提は、無諍三昧の中にて第一を得るが如し。無諍定を得たる阿羅漢は、常に人心を觀じて、人をして諍を起さしめず、是の三昧は、根本四禪の中に攝し、亦た欲界の中に用ふ。

問うて曰く、(四六)般若波羅蜜「多」は是れ菩薩の事なり。何を以てか、三乘を得んと欲する者は、皆當に「般若波羅蜜多」を習學すべしと言ふや。答へて曰く、般若波羅蜜「多」の中に、諸法實相を說く、即ち是れ(四七)無餘涅槃なり。三乘の人は、皆無餘涅槃の爲の故に、精進して習行す。

復次に、般若の中には、種種の因緣により、空解脫門の義を說く。經中に說くが如くんば、若し空解脫門を離れては、道なく、涅槃なし。是を以ての故に、三乘の人は、皆應に般若を學すべし。復次に、舍利弗は、自ら因緣を說き、般若波羅蜜「多」の中に於いて、廣く三乘の相を說けり。是の中に三乘の人は、應に學を成ずべし。

【四四】**四信**に二種あり、(一)起信論に說けると(二)法華經に說けるとなり。前者にすれば、一に信根本、眞如の法は、諸佛の師とする所、衆行の源なるが故に、根本といふ。眞如の法を信樂するなり。二に信佛、佛の大功德を信樂するなり。三に信法、法の大利益を信樂するなり。四に信僧、僧の大行を信樂するなり。法華の分別功德品を看よ。

【四五】**身に證を得**とは、神通又は證悟を體得するをいふ。

【四六】第一三問、智度は是れ菩薩の事なり、今それ三乘を得んと欲する者は、當に智度を學すべしといふ理由如何。

【四七】**無餘涅槃**(Nirupadhiseṣa-nirvāṇa)

卷の第四十二

（二）集散品第九を釋す。

【經】爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、我は是の菩薩の般若波羅蜜（多）を行ずることを見ず、得ざるなり、當に何なる菩薩にか般若波羅蜜を說くべき。世尊よ、我は一切諸法の集散を得ず。若し我れ菩薩の爲に字を作りて、菩薩と言はば、或は當に悔ゆること有るべし。世尊よ、是の字は住せず、亦た住せざるにあらず。何となれば是の字は、所有なければなり。是を以ての故に是の字は住せず、亦た住せざるにあらず。世尊よ、我は色の集散、乃至識の集散を得ず。若し得べからずんば、云何が當に名字を作るべき。世尊よ、是の因緣を以ての故に、是の字は住せず、亦た住せざるにもあらず。何となれば是の字は、所有なければなり。世尊よ、我は亦た眼の集散、乃至意の集散を得ず。若し得べからずんば、云何が當に名字を作りて、是れ菩薩なりと言ふべき。世尊よ、是眼の名字、乃至意の名字は住せず、亦住せざるにあらず。何となれば是の名字は、所有なければなり。是を以ての故に、是の字は住せず、亦た住せざるにあらず。世尊よ、我は色の集散、乃至法の集散を得ず。若し得べからずんば、云何が當に名字を作りて、是れ菩薩なりと言ふべき。世尊よ、是の色の字、乃至法の字は住せず、亦た住せざるにあらず。何となれば是の字は、所有なければなり。是を以ての故に、是の字は住せず、亦た住せざるにあらず。眼界乃至意識界、眼觸乃至意觸、眼觸因緣生の受、乃至意觸因緣生の受も

【一】此の品の目的は法愛を除かんが爲に、集散なきを說くにあり。緣合して生ずるを集といひ、緣離れて滅するを散といふ。然るに生滅去來不可得なれば、集散も亦從つて不可得なるを力說す。これ此の品の眼目なり。

亦た是の如し。世尊よ、我は無明の集散を得ず、乃至老死の集散を得ず。世尊よ、我は無明盡の集散を得ず、乃至老死盡の集散を得ず。世尊よ、我は婬、怒、癡の集散を得ず、諸の邪見の集散も、皆亦た是の如し。世尊よ、我は六波羅蜜（多）の集散、四念處の集散、乃至、八聖道分の集散、空、無相、無作の集散、四禪、四無量心、四無色定の集散、念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念善、念入出息、念身、念死の集散を得ず。我は亦た佛の十力、乃至十八不共法の集散を得ず。

世尊よ、我れ若し六波羅蜜（多）、乃至十八不共法の集散を得ずんば、云何が當に字を作りて、是れ菩薩なりと言ふべき。世尊よ、是の字は住せず、亦住せざるにあらず。何となれば、是の字は、所有なければなり。是を以ての故に、是の字は住せず、亦住せざるにあらず。世尊よ、我は夢の如き、五陰の集散を得ず。我は響の如き、影の如き、炎の如き、化の如き、五陰の集散を得ざるも、亦た上に說くが如し。世尊よ、我は離の集散を見ず、我は寂滅、不生、不滅、不示、不垢、不淨の集散を得ず。世尊よ、我が如、法性、實際、法相、法位の集散を得ざるも、亦上に說くが如し。我は諸善不善法の集散を得ず、我は有爲無爲の法、有漏、無漏の法の集散、過去、未來、現在の法の集散、不過去、不未來、不現在法の集散を得ず。何等か是れ不過去、不未來、不現在なるや。所謂無爲法なり。世尊よ、我は亦た無爲法の集散を得ず。世尊よ、我は亦た佛の集散をも得ず。世尊よ、我は亦た十方如恆河沙等の世界の諸佛、及び菩薩、聲聞の僧の集散を得ず。世尊よ、若し我れ諸佛の集散を得ずんば、云何が菩薩摩訶薩に般若波羅蜜（多）を敎ふべきや。世尊よ、是の菩薩の字は住せず、亦た住せざるにあらず。何となれば、是の字は所有なければなり。是を以ての故に、是の字は住せず、亦た住せざるにあらず。世尊よ、我は是の諸法實相の集散を得ず。云何が、菩薩の與めに字を作りて、是は菩薩なりと云ふべけんや。世尊よ、是の諸法實相の名字は住せず、亦た住せざるにあらず。何となれば、是の名字は所有なければなり。是を以ての故に、是の名字は住せず、亦た住せざるにあらず。

〔二〕問うて曰く、〔三〕先の品中に已に菩薩は、菩薩の字を見ず、般若波羅蜜「多」は、一切諸法の内ならず、外ならず、中間ならざる等を說けり。今何を以てか重ねて說くや。答へて曰く、〔三〕四種の愛あり。欲愛、有愛、非有愛、法愛なり。欲愛は、見易く、其の過は不淨等なり。有愛は、不淨等なく、少しく遣り難し。非有愛は、有愛を破して、智慧に似たるが故に、遣り難し。法愛は、諸の善法を愛し、道者を利益す。法愛中の過難は、見難きが故に重ねて說くなり。譬へば、小草は功を加ふること少なくして、除き易く、大樹は、功重くして除き難きが如し。

復次に、上の法と此の法とは、同あり、異あり。彼は、「菩薩の字を見ず」と說くを聞けども、此の中には、「菩薩の字を覺せず得ず」と說く。覺せず、得ざるを以ての故に見ず。是は智慧力少なきが故に、見ざるにあらざるなり。

問うて曰く、〔四〕未だ般若波羅蜜「多」を行ぜざる時、菩薩ありと爲さんか、今何を以ての故に、菩薩の般若波羅蜜「多」を行ずるを見ずと言ふや。答へて曰く、無始より已來、衆生は不可得なり。般若波羅蜜「多」を行ずるが故に、不可得なるにあらず、但だ虛誑顚倒を以て、凡夫の人は、是の假名に隨ふが故に、謂つて有と爲す。今般若波羅蜜「多」を行じて、顚倒虛誑を滅し、

【二】第一問。先に已に、菩薩は菩薩の字を見ず、智度は一切諸法の内外にあらず、又中間にあらざる等を說けり。今それ重ねて之を說くは何故なるか。

【三】四種の愛――(一)欲愛、(二)有愛、(三)非有愛、(四)法愛

【四】第二問。未だ智度を行ぜざる時、菩薩ありとせんか、今それ菩薩の智度を行ずるを見ずといふ理由如何。

其の無を了知するに、(五)本有今無にあらず。本有今無なれば則ち斷滅に墮す。

復次に、須菩提は、心に妄語戒を破らんことを悔い畏る。何となれば佛法の中には、一切の諸法は決定して我なし。而も我は說いて、「菩薩あり、爲に般若波羅蜜〔多〕を說く」と言はば、則ち妄語の罪に墮すればなり。是の故に心悔ゆ。

復次に、心悔ゆるの因緣あり。一切法は、不可得空なるを以ての故に、皆空なり。(六)何となれば集まること無く、散ずること無ければなり。譬へば、眼と色との因緣もて、眼識を生ずるが如し。三事和合するが故に眼觸を生じ、眼觸の因緣の中に卽ち受、想、思等の心數法を生ず。是の中に邪憶念するが故に、諸の煩惱罪業を生じ、正憶念するが故に、諸の善法を生じ、善惡業〔を以て〕六道の果報を受け、是の身邊より、復善惡業を作る、是の如く展轉して無窮なる、是を名けて集と爲す。(七)餘情も亦是の如し。散ずとは、是の眼識等の諸法は、念念に滅するが故に、諸の因緣を離るるが故に、是の眼識等の法は生ずる時、來る處なし。田の上の穀を運びて、聚集を致すが如きにあらず。若し滅する時も、去る處なく、穀を散じて、民に與ふるが如きにあらず。是れ略して諸法の集散の相を說くと名くるなり。生ずる時は、從來する所なく、散ずる時は、從つて去る所なし。是の諸法は、皆幻化の如く、但だ眼を

【五】本有今無とは、本は實在にして、今は無なるをいふ。卽ち有なるものが、無となるなり。

【六】諸法は集まること無く、散ずること無し。

【七】餘情とは、眼根を除ける餘の耳、鼻、舌、身、意等の諸根をいふ。

誑惑するのみ。

問うて曰く、〔八〕若し爾らば、集散の相あり、須菩提は何を以てか、覺らず得ざるなりと言ふや。答へて曰く、來る處なきが故に、集は不可得なり、去る處なきが故に、散も不可得なり。

復次に、生ずること無きが故に、集まることは不可得なり。滅すること無なるが故に、散ずることは不可得なり。畢竟空なるが故に、集まることは不可得なり。業因緣は失せざるが故に、散ずることは不可得なり。

復次に、世間の滅諦を觀ずるが故に、集まることは不可得なり。世間の集諦を觀ずるが故に、散ずるとは不可得なり。是の如き等の義によりて、當に集散の不可得なることを知るべし。云何が當に菩薩の字を作るべき。若し強ひて其の名と爲すも、是の名は、亦た住することもなく、亦た住せざることも無し。

問うて曰く、〔九〕是の名字は、何を以ての故に住せざるや。答へて曰く、〔一〇〕名字は法中に在りて住す。[而るに]法は空なるが故に、名字は住處なし。〔一一〕車は、輪、輞、輻、轂等和合するが故に車の名あるが如し。若し是の和合を散ずれば、則ち車の名を失す。是の車の名は、輪等の中に住するにあらず、亦た輪等の中を離れて、住するにあらず。車の名字を、一異の中に求むるに、皆不可得なり。車の名を

【八】第三問、若し爾らば集散の相あり、須菩提か、覺せず得ずといふ理由如何。
【九】第四問、名字の住せざる理由如何。
【一〇】名字は法の中に住せず、亦住せざるにあらず。
【一一】五蘊の和合を車の構造に譬ふ、彌蘭陀王問經にも亦此の譬喩あり。

失するが故に、名字は住處なし。因緣の散ずる時すら尚ほ無し、何に況んや因緣の滅するをや。衆生も亦た是の如く、色等の五衆和合するが故に、衆生の名字あり。若し五衆離散すれば、〔二〕名字は住處なし。五衆の離散する時すら尚ほ無し、何に況んや、五衆無きをや。

問うて曰く、〔三〕若し散ずる時は、名字は不可得ならんも、和合して未だ散ぜざる時は、則ち名字あらん、何を以てか不可得と言ふや。答へて曰く、是の菩薩の名字は一にして、五衆には則ち五あり。一は五と作らず、五は一と作らず。若し五、一と作らば、五匹の物の如きは一匹の用を爲すことを得ず。若し一、五と作らば、一匹の物の如きは、五匹の用を爲すことを得ず。是を以ての故に、一の菩薩の字は、五衆中に住することを得ず。住せざるにあらずとは、若し名字の因緣和合すること無ければ、則ち世俗の語言、衆事は都べて滅し、世諦無きが故に、第一義諦も亦た無く、二諦無きが故に、諸法錯亂するなり。

復次に、若し因緣中に名字あらば、如し火と說けば則ち口を燒き、有と說けば則ち口を塞がん。若し名字は、法中に在らずんば、火と說くも、火想を生ずべからず、火を求めて、亦た水を得べし。久遠より已來、共に名字を傳ふるが故に、名に因りて則ち事を識る。是を以ての故に、名字の義は住するにあらず、住せざるにあらずと說く。

〔二〕縮藏には名の字なし。

〔三〕第五問、散する時は、名字は不可得ならんも、和合して未だ散ぜざる時は、則ち名字あらん。何故に之を不可得といふか。

復次に、是の中に、須菩提は自ら說けり、「因緣には、所有なきが故に、是の名字は住するにあらず、住せざるにあらず」と。菩薩の名字の如く、五衆、十二入、十八界等の諸法も、亦た是の如し。

問うて曰く、（一四）上來說くが如くんば、五衆、諸法の集散は不可得なり。今何を以てか復た五衆を說くや。答へて曰く、上には直に五衆を說けり、今五衆は、夢の如く、幻の如しと說けり。

復次に、有人の謂く、凡夫の人の五衆は、虛誑不實にして、夢の如く、聖人の五衆は、是れ虛誑にあらず。是を以ての故に、須菩提は夢の如く、幻の如くにして、同じく皆住せずと說けりと。

問うて曰く、（一五）十の譬喩の中何を以てか唯五事を說くや。答へて曰く、若し（一六）十事を說くも、〔我は〕在ること無し。但だ衆生の心に隨ふを以て、（一七）五喩を說けば、事を辨ずるが故に、盡く說かざるなり。或は五衆を以ての故に五喩を說く。餘法も亦是の如し。（一八）離に二種あり。一には身離、二には心離なり。身離とは、家、恩愛、世事等を捨てて、靜處に閑居す。心離とは、諸の結使に於て、悉く皆遠離するなり。復た二種の離あり。一

【一四】第六問、五蘊及び諸法の集散は不可得ならば、今復た五蘊を說くは何故なるか。

【一五】第七問、十の譬喩の中、但五事を說く理由如何。

【一六】十事とは、本論第六卷に諸法は、幻の如く、焔の如く、水中の月の如く、虛空の如く、響の如く、揵闥婆城の如く、夢の如く、影の如く、鏡中の像の如く、化の如しとの十種の譬喩をいふ。

【一七】五喩は、或は五事ともいふ。前の十喩の中、「夢の如く、響の如く、影の如く、焔の如く、化の如し」の五種の譬喩をいふ。

【一八】二種の離――(一)身離、(二)心離、或は(一)諸法は名字を離れ(二)諸法は各自相を離る。

には、諸法は名字を離れ、二には諸法は各各の自相を離る。此の中に說けるは、後の二種の離なり。何となれば此の中には、名字を破するが故に、餘處の自相を離すればなり。小乘の法中には、多く前の二離を說く。〔一九〕寂滅に亦た二種あり、一には淳善相にして惡事を寂滅し、二には涅槃の寂滅相の如し、世間の諸法を觀ずることも亦た是の如し。此の中には但だ後の寂滅のみを說けり。〔二〇〕不生にも亦二種あり。一には未來の無爲法を不生と名け、二には一切法は實に無生の相なり。生は不可得なればなり。此の中には但後の不生のみを說く。〔二一〕不滅に三種あり、智緣滅、非智緣滅、無常滅なり。此の中に無常滅を說き、此れと相違するが故に不滅と名く。示さずとは、一切の諸觀を滅して、語言の道斷ゆるが故に、法として示すべきこと無く、是の法は如なり。是の相は、若くは有。若くは無。若くは常、若くは無常等なり。不垢・不淨・如・法性・實際・法相・法位の義は、先に說くが如し。

問うて曰く、〔二二〕五衆の法には、集散あり。此れと相違するが故に、集まらず、散せずと言ふ。如・法性・實際等は、相違すると無きが故に、云何が集まらず、散せずと言はん。答へて曰く、行者は如・法性等を得るが故に、名けて集と爲し、失するが故に、名けて散と爲す。虛空の如きは、集なく散なしと雖も、戶牖を鑿つが故に、名けて集と爲し、塞ぐが故に、名けて散と爲す、善不善、乃至十方如恆

〔一九〕二種の寂滅——(一)淳善相にして惡事を寂滅し、(二)涅槃の寂滅の相の如し。

〔二〇〕二種の不生——(一)過去未來の無爲法、(二)一切法の無生の相。

〔二一〕三種の不滅——(一)智緣滅、(二)非智緣滅、(三)無常滅。

〔二二〕第八問、眞如法性を不集不散といふ理由如何。

河沙等の諸佛の義は、先に說くが如し。是の諸法及び佛の名字は、依止する所なきが故に、皆空にして住せず、住せざるにあらざるなり。

【經】世尊よ、諸法は因緣和合にして、假名の施設なり。謂ゆる菩薩の是の名字は、五陰の中に於て說くべからず、十二入、十八界、乃至十八不共法の中にも說くべからず、和合法の中に於ても亦た說くべからず。世尊よ、譬へば、夢は諸法の中に於いて說くべからず、響、影、炎、化は、諸法の中に於いて、亦た說くべからざるが如し。譬へば、虛空と名くるも、亦た諸法の中に說くべき無きが如し。世尊よ、地水火風の名も、法の中に說くべき無きが如く、戒、三昧、智慧、解脫、解脫知見の名も、亦た法の中に說くべき無し。須陀洹の名字、乃至阿羅漢、辟支佛の名字の如きも、亦法の中に說くべき無し。佛の名、法の名の如きも、亦法の中に說くべき無し。謂ゆる若くは善、若くは不善、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは我、若くは無我、若くは寂滅、若くは離、若くは有、若くは無なり。

世尊よ我れ、是の義を以ての故に、心に傷ゆ、一切諸法の集散の相は不可得なり。云何が菩薩の爲に字を作りて、是は菩薩なりと言はんや。世尊よ、是の字は住せず、亦た住せざるにあらず。何となれば是の字は、所有なければなり。是を以ての故に、是の字は住せず、亦た住せざるにあらず。若し菩薩摩訶薩、是の般若波羅蜜[を]ば是の如きの相、是の如きの義なりと說くことを作すを聞いて、心沒せず、悔いず、驚かず、畏れず、怖かずんば、當に知るべし、是の菩薩は、必ず阿鞞跋致性の中に住せん。[そは]不住の法に住するが故なり。

【論】釋して曰く、上來は住に非ず、不住にあらざる門を[以て]、菩薩の名字、及び諸法を破せり。

今は異門を以て、菩薩の名字を破す。法として説くべき無きを菩薩と爲す。何となれば、菩薩は是れ五衆にあらず、五衆は是れ菩薩にあらず、五衆の中に菩薩なく、菩薩の中に五衆なく、五衆は菩薩に屬せず、菩薩は五衆に屬せず、五衆を離れて菩薩なく、菩薩を離れて五衆なし。是の如く、菩薩の名字は不可得なり。當に是れ空なることを知るべし。乃至十八不共法も亦た是の如し。譬へば夢中に見る所は、皆是れ虚妄にして、説くべからざるが如し。此の夢中に定法の相あるとなし。所謂五衆、十二入、十八界は、但だ誑心のみ有り。餘の影、響、焰、化も、亦た是の如く、但耳目を誑はすと、虚空の如くにして、一切法の中に説くべからず、[そは]無相なるを以てなり。虚空と色と相違するが故に説いて名けて色と爲すとを得ず、色の盡くる處も、亦虚空にあらず、更に別法なきが故なり。若し入出を虚空の相と爲すと謂はば、是の事は然らず。是の身業は、虚空の相にあらず、若し無相なれば、則ち無法なり。是を以ての故に、虚空は但だ名字のみ有り。菩薩の名字も亦た是の如し。

問うて曰く、〔三〕夢、虚空等の如きは、但名字のみ有るべし。云何が地水火風の實法も、亦た但名字のみ有るや。答へて曰く、無智の人は、地等の諸物を謂つて、以て實と爲す。聖人は、慧眼[を以て]之を觀ずるに、皆是れ虚誑なり。〔四〕譬へば、小兒は鏡中の像を見て、以て實と爲し、歡喜して取らん

〔三〕第九問、夢、虚空等の但名字のみあるは、則ち可、云何ぞ、地水火風の現實の法を但名字のみありと言ふや。

〔四〕凡夫の四大を見るは、小兒の鏡像を見て、實となすが如く、聖人の之を見るは、大人の鏡像を見て、影となすが如し。

と欲し、翻つて眞實と爲し、大人は、之を但人の眼を誑惑すと觀ずるが如く、諸の凡夫の人は、微塵の和合して地を成すを見て、翻つて實の地と爲し、餘の天眼を有する者は、此の地を散じて、但微塵なりと見、慧眼[を有する者は]、分別して此の地を破散し、都て不可得[なりと見る]。復次に、初品の論中に、種種に身相を破し、身を破し、亦た地をも破するが如し。

復次に、若し地は是れ實ならば、云何が一切の火を觀る時、皆是れ火なるや。若し禪定を以て觀じて實と爲さば、佛は、一切法は空にして、虛妄と爲すと說きたまへり。[故に]但是の事は然らず、水火風も亦た是の如し。四大の如き、身の本と爲すものすら、尚ほ爾なり、何に況んや、身に作す所の、持戒等の諸業にして、而も空ならざらんや。戒等の如き、麤業すら尚ほ空なり。何に況んや禪定、智慧、解脫、解脫知見等にして、而も空ならざらんや。若し(三五)戒等の五衆すら空ならば、何に況んや是の因緣[を以て]得たる、諸の聖道の果にして、而も空ならざらんや。若し聖道の果すら空ならば、何に況んや、須陀洹の人乃至佛にして、而も空ならざらんや。是を以ての故に、菩薩の名字は、諸法乃至有無の法中に出づと雖も名けて常と爲さず、乃至名けて有無と爲さず、[そは]集散不可得なるが故なり。須菩提の空相を知ることは、是の如し。云何が說いて菩薩と名け、般若波羅蜜[多]を說くと爲さん。若し菩薩にして、是を聞いて驚かず畏れずんば、則ち是の阿鞞跋致の性中に住せん。不住の法にして、住する

【三五】戒等の五衆とは、戒、禪定、智慧、解脫、及び解脫知見をいふ。

が如くなるを以ての故なり。（三六）阿鞞跋致の性とは、是の菩薩は、未だ無生法忍を得ず、未だ諸佛より記を受けず、但福徳智慧力の故に、能く諸法の畢竟空を信樂す。是を阿鞞跋致の性中に住すと名く。〔そは〕阿鞞跋致の氣分を得るが故なり。小兒の貴姓の中に在りて生ぜんに、未だ事を成さずと雖も、貴姓を以ての故に、便ち貴きが如し。

【経】 復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、色の中に住すべからず、受想行識の中に住すべからず、眼耳鼻舌身意の中に住すべからず、色聲香味觸法の中に住すべからず、眼識乃至意識の中に住すべからず、眼觸乃至意觸の中に住すべからず。眼觸因縁生〔の〕受乃至意觸因縁生の受の中に住すべからず。地種、水火風空識種の中に住すべからず。無明乃至老死の中に住すべからず。何となれば、世尊よ、色の色たる相は空なり、受想行識の〔受想行〕識たる相は空なればなり。世尊よ、色は空なれば、名けて色と爲さず、空を離れても亦色なし。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識も、識は空なれば、名けて識と爲さず、空を離れても、亦た識なし。識は即ち是れ空、空は即ち是れ識なり。乃至老死の老死たる相は空なり。世尊よ、老死は空なれば、老死と名けず、空を離れても、亦た老死なし。老死は即ち是れ空、空は即ち是れ老死なり。世尊よ、是の因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、色の中に住すべからず、乃至老死の中にも、亦た住すべからず。

復次に、世尊よ。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、四念處の中に住すべからず、何となれば、世尊よ、四

【三六】 未だ無生法忍を得ず及諸佛より受記せられずと雖も而も能く信樂する位を、阿鞞跋致の性と名く。

念處の四念處たる相は空なればなり、世尊よ、四念處は空なれば、名けて四念處と爲さず、空を離れても亦た四念處なし。四念處は即ち是れ空、空は即ち是れ四念處なり。乃至十八不共法も亦た是の如し。世尊よ、是の因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、四念處乃至十八不共法の中にも住すべからず。

復次に。世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、檀〔那〕波羅蜜〔多〕の中に住すべからず、尸羅波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、毘〔梨耶〕波羅蜜〔多〕、禪〔那〕波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕の中に住すべからず。何となれば、檀〔那〕波〔羅〕蜜〔多〕の相は空なり。乃〔至〕般若波羅蜜〔多〕の般若波羅蜜〔多〕たる相も、空なるを以てなり。世尊よ、檀〔那〕波羅蜜〔多〕は空なれば、名けて檀〔那〕波〔羅〕蜜〔多〕と爲さず、空を離れても、亦た檀〔那〕波羅蜜〔多〕なし。檀〔那〕波羅蜜〔多〕は、即ち是れ空、空は即ち是れ檀〔那〕波羅蜜〔多〕なり。乃至般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如し。世尊よ、是の因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、應に六波羅蜜〔多〕の中に住すべからず。

【論】釋して曰く、上に須菩提は、讚嘆門を以て、般若を說けり。說かずと言ふと雖も、而も實に菩薩の爲に、般若波羅蜜〔多〕を說けり。今須菩提は、不住の門を以て、直に菩薩の爲に、般若波羅蜜〔多〕を說く。般若波羅蜜〔多〕に、種種の名字あり、觀、修、相應、合入、習住等なり。是れ皆般若波羅蜜〔多〕を修行すと名く。但だ種種の名字を說くに聞く者歡喜す。

復次に、小しく差別あるの行あり、聽聞、誦讀、書寫、正憶念と名け、思惟、籌量、分別、修習等乃至阿耨多羅三藐三菩提を說くを、總じて名けて行と爲す。是の[二七]行中に分別するが故に、初なる者を

【二七】行に就て、觀・習・合・相應乃至住・不住の差別あり。

觀と名く、初始て物を見るが如し、日日に漸く學する、是を習と名け、般若と相應する、是を合と名くべく、般若波羅蜜「多」に隨順するを相應と名け、般若波羅蜜「多」に通徹する是を名けて入と爲し、分別して相を取り、是の事あるを名けて念と爲し、常に行じて息まず、相似せしむる、是を名けて學と爲し。學し已り、巧に方便して、是非得失を觀知する、「是を」名けて思惟と爲し、禪定心を以て、共に行ずるを名けて修と爲し、是の般若波羅蜜「多」の道を得て失はざる、是を住と名け、住と相違するを不住と名く。

問うて曰く、(三八)先に諸法は空にして、卽ち是れ不住なりと說き、今何を以てか諸法の中に住すべからずと說くや。答へて曰く、先に說くと雖も、法に著する愛心は遣り難きが故に、今更に說くなり。

復次に、無相三昧あり、是の三昧に入れば、一切法に於て相を取らず、而して滅定に入らず。菩薩の智慧は、不可思議にして、一切の法相を取らずと雖も。而も能く道を行ず。鳥の虚空の中に於て、依る所なく。而も能く高く飛ぶが如し。菩薩も亦た是の如く、諸法の中に於て、住せずして而も能く菩薩の道を行ず。

問うて曰く、(三九)人心は緣を得て便ち起る。云何が菩薩は一切法に於て住せずして、而も滅定中に入らざるや。答へて曰く、須菩提は此の中に自ら說けり。「所謂色と色相とは、自ら空なり、色の空なる

【三八】第一〇問、先に諸法は空にして、不住なりと說き、今復た諸法の中に住すべからずと說くは何故なるか。

【三九】第一一問、人心は緣を得て起るを常とす。今それ菩薩が、一切法に住せずして、而も滅定中に入らざるは何故なるか。

を非色と稱すも、亦た空を離れずして色あり。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。是の義は第二品の中に已に說けり。乃至、六波羅蜜（多）の中に住すべからざるも、亦た是の如く、空なるを以ての故に、住する所なきなり。

[illegible] 復此に、世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、文字の中に住すべからず、一字門、二字門、是の如き種種の字門の中に住すべからず、何となれば諸字の諸字たる相は、空なるが故なり。上に說けるが如し。

復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、諸の神通の中に住すべからず、何となれば諸の神通の神通たる相は空なるを以てなり。神通は空なれば、名けて神通と爲さず、空を離れても、亦た神通なし。神通は即ち是れ空、空は即ち是れ神通なり。世尊よ、是の因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、諸の神通の中に住すべからず。

論 釋して曰く、（三〇）二種の菩薩あり。一には禪定を習ひ、二には學讀す。坐禪の者は神通を生じ、學讀の者は、文字を分別するとを知る、一字門とは（三一）一字一語にして、地を（三二）浮と名くるが如し。（三三）二字門とは、二字一語にして、水を（三四）闍藍と名くるが如し（三五）三字門とは水を（三六）波尼藍と名くるが如し。是の如き等、種種の字門あり。

【三〇】二種の菩薩——(一)習禪定(二)學讀。
【三一】一字門の義解。
【三二】浮（Bhū）
【三三】二字門の義解。
【三四】闍藍（Jala）
【三五】三字門の義解。
【三六】波尼藍（Pānīya）

復次に、菩薩は一字を聞いて、卽ち一切諸法の實相の中に入る。【三七】阿字を聞きて、卽ち諸法は本より已來、無生なるを知るが如き、是の如き等なり。【三八】頭佉を聞きて、一切法の中に苦相を生じ、卽時に大悲心を生ずるが如く、【三九】阿尼呲を聞きて、一切法の無常相を知り、卽時に道に入りて聖行するが如し。餘は文字陀羅尼の中に說くが如し。神通の義は、先に已に說けり。二事は畢竟空なるが故に、菩薩は中に於て住せざるなり。

【釋】復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、色、是れ無常に住すべからず。受想行識、是れ無常に住すべからず。何となれば無常の無常たる相は、空なるを以てなり。世尊よ、無常、空なれば、無常と名けず、空を離れてもまた無常なし。無常は卽ち是れ空、空は卽ち是れ無常なり。世尊よ、是の因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、色、是れ無常に住すべからず、受想行識、是れ無常に住すべからず、色、是れ苦に住すべからず。受想行識、是れ苦に住すべからず、色、是れ無我に住すべからず、受想行識、是れ無我に住すべからず、色、是れ空に住すべからず。受想行識、是れ空に住すべからず、色、是れ寂滅に住すべからず、受想行識、是れ寂滅に住すべからず、色是れ離に住すべからず。受想行識、是れ離に住すべからず、上に說くが如し。

【三七】阿字本不生、本不生とは本來本有にして、今始て生ずるに非ざる義なり。是れ阿字の實義なり、蓋し生ずるものには、必ず能生の因なかる可らず、能生の因あれば、是れ根本元初と言ふ可らず、今それ阿字は卽ち根元にして、更に能生の因なければ、最も此の不生の義を知るに便なり。故に阿字に寄せて、阿字の不生の如く、一切諸法の不生の義を知らしむるなり。之を阿字本不生と言ひ、是を觀ずるを阿字觀といふ。

【三八】Duhkha（ドッカ）は、苦の義。

【三九】Anitya（アニトヤ）は、無常の義。

復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、如の中に住すべからず。何となれば、如の如たる相は、空なるを以てなり。世尊よ、如相、空なれば如と名けず、空を離れても、亦た如なし。如は即ち是れ空、空は即ち是れ如なり。世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を行ぜんと欲せば、法性、法相、法位、實際に住すべからず。何となれば、實際の實際たる相は、空なるを以てなり。世尊よ、實際、空なれば、名けて實際と爲さず、空を離れても、亦た實際なし。實際は即ち是れ空、空は即ち是れ實際なり。

復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、一切の陀羅尼門の中に住すべからず、一切の三昧門の中に住すべからず。何となれば、陀羅尼門の陀羅尼門たる相は空なり、三昧門の三昧門たる相は、空なるを以てなり。世尊よ、陀羅尼（門）、三昧門、空なれば、名けて陀羅尼門、三昧門と爲さず。空を離れても、亦た陀羅尼門、三昧門なし。陀羅尼（門）、三昧門は即ち是れ空、空は即ち是れ陀羅尼（門）、三昧門なり。世尊よ、是の因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、如乃至陀羅尼（門）、三昧門の中に住すべからず。世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲し、方便なきが故に、吾我の心を以ての故に、色の中に於て住するが如きは、是の菩薩は、色に行を作す。吾我の心を以ての故に、受想行識の中に於て住せば、是の菩薩は、識に行を作す。若し菩薩、行を作す者は、般若波羅蜜（多）を受けず、亦般若波羅蜜（多）を具足せず、般若波羅蜜（多）を具足せざるが故に、薩婆若を成就するを得ること能はず。世尊よ、菩薩摩訶薩、是の如く、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲し、方便なきが故に、吾我の心を以て、十二入乃至陀羅尼門、三昧門の中に住す。是の菩薩は、十二入に（行を）作し、乃至陀羅尼（門）、三昧門に行を作す。若し菩薩、行を作す者は、般若波羅蜜（多）を受けず、亦般若波羅蜜（多）を具足せず。般若波羅蜜（多）を具足せざるが故に、薩婆若を成就するを得ること能はず。何となれば色は、是れ不受なり。受想行識も是れ不受なればなり。色、不受なれば則ち色にあらず、性空なればなり。

受想行識、不受なれば則ち（受想行）識にあらず、性空なればなり。十二入是れ不受なり、乃至陀羅尼（門）三昧門是れ不受なり。十二入、不受なれば、則ち十二入にあらず、乃至陀羅尼（門）、三昧門、不受なれば、卽ち陀羅尼（門）、三昧門にあらず。性空なればなり。般若波羅蜜（多）も亦不受なり、般若波羅蜜（多）、不受なれば則ち般若波羅蜜（多）にあらず。（そは）性空なればなり。是の如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲せば、應に諸法の性空を觀ずべし、是の如く觀ずれば、心行處なし。是を菩薩摩訶薩の不受三昧と名く、廣大の用、聲聞、辟支佛と共ならず、是の薩婆若の慧も亦不受なり、內空の故に外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空の故に。何となれば、是の薩婆若は、相行を以て得べからず、相行垢あればなり。何等か是れ垢相なる。色相乃至陀羅尼（門）、三昧門の相、是れを垢相と名く。是の相は若くは受け、若くは修して薩婆若を得べき者なり。

【四〇】第一二問、垢法の中に住すべからざるは則ち可、善、無記法の中に住すべからざる理由如何。

論 釋して曰く、無常等の聖行及び如・法性・實際、陀羅尼（門）、三昧門は先に已に說けり。

問うて曰く、(四一)垢法の中には住すべからず、罪を以ての故なり、善、無記法の中に何を以てか住すべからざるや。答へて曰く、是れ罪にあらずと雖も、而も罪を生ずる因緣なり。佛の此の中に說きたまへるが如し。「菩薩あり、吾我の心を以て、般若波羅蜜「多」を行ぜんに、色中に住して色に著す。是を色を生ずるが爲の故に諸業を作す。受想行識も亦た是の如し。五衆を起すが爲の故に行ずる、是を般若波羅蜜「多」を取らずと爲す。是の人は、「我は般若波羅蜜「多」を行ず」と云ふと雖も、是は世間の

行と爲す。般若波羅蜜[多]を具足せざるが故に、一切智に至ること能はず、乃至陀羅尼[門]、三昧門も、亦た是の如し」と。此の中に須菩提は自ら說けり。「内外に住せず、所謂る、色は是れ不受なり、若し色にして不受ならば、則ち色にあらず。性は常に空なるが故に」と。

問うて曰く、〔一〕是の色は無常、苦、空等の過罪の故に受けず。譬へば、熱せる金丸は金の貪ばるべきありと雖も、但熱せるを以ての故に、取るべからざるが如し。是の如きは何の咎かあらん。而も强ひて五衆の法を破するや。答へて曰く、〔二〕二種の著あり。一には欲に著し、二には見に著す。有人は、是の無常、苦等を觀じ、欲著を破して解脫を得、或は有人は、無常等を觀ずと雖も、猶ほ法に著して、見を生ず。是の人の爲の故に、色相の空を分別す。是の如くすれば則ち見著を離る。乃至、陀羅尼[門]、三昧門も、亦た是の如し。

問うて曰く、〔三〕聲聞辟支佛は、一切法を受けざるが故に、漏を盡くす。此の中に、云何が不受三昧は、二乘と共せずと說くや。答へて曰く、後に不受三昧ありと雖も、廣大の用あること無く、利ならず、深からず、亦た牢固ならざるなり。

復次に、聲聞辟支佛は、漏を盡くすの時、諸法を受けざることを得、菩薩は久しきより來、一切法の不受を知り、皆無餘涅槃の如く、畢竟空なり。是の故に、二乘と共ならずと說くなり。

【一】第一の問、是の色等は、無常、苦等の過罪の故に受けざれば、何の咎ありや。
【二】二種の著――(一)欲著、(二)見著。
【三】第二の問、二乘は漏を盡くせり。然るを不受三昧は、二乘と共せずといふ理由如何。

復次に、二乘は（四四）習氣あり、礙あり、障あるが故に、無受三昧ありと雖も、清淨ならず。摩訶迦葉の如きは、菩薩の伎樂を聞き、坐處に於て自ら安んずること能はず。諸の菩薩は問うて曰く、「汝は頭陀第一なり、何の故に、欲を起して、舞ふに似たるや」と。迦葉答へて曰く、「我は人天の五欲の中に於ては、永く離れて動ぜず。此は是れ大菩薩の福德業の因緣の變化の力なり。我は未だ忍ぶ能はず」と。須彌山の如きは、四面より風起るに皆能く堪忍するも、若し嵐風の至るに隨つては、自ら安んずること能はず。聲聞、辟支佛の習氣は、菩薩に於ては煩惱と爲す。

復次に、是の無受三昧は唯佛のみ遍ねく知りたまふ。菩薩は佛道を求むるが故に、遍ねきこと能はずと雖も、而も二乘より勝る。是を以ての故に、二乘と共ならずと說く。人は、是の不受三昧を貴重するを以て、而も著心を生ず。是の故に須菩提に說けり。「但是の三昧のみ、不受ならず。色乃至一切種智、皆不受なり」と。所以は何ん、須菩提は自ら因緣を說けり。「所謂、十八空の故に受けず」と。

問うて曰く、（四五）何を以ての故に、是の十八空を用つて、諸法は皆空なりと觀ずるや。答へて曰く、此の中に、須菩提は自ら因緣を說けり。「相を取りて著するが故に、諸の結使を生ず。相とは、色、

【四四】習氣。大乘にては、妄惑を三級に分つ。謂く、(一)現行——顯現行動する惑、(二)種子——迷惑を生ずる功能あるもの、草木の種子に於けるが如し、(三)習氣——迷惑、煩惱の餘性、已に煩惱の現行を制伏し、且つ種子を斷ずれ共、尚ほ其の餘氣即ち餘性ありて、[illegible]な現ずるを習氣といふ。

【四五】第一五問、十八空を用ゐて、諸法皆空なりと觀ずる理由如何。

乃至陀羅尼門、諸の三昧門の相にして、皆是れ頓信の根本なり。若し佛法の中には、乃ち三法の微相をも、取るべき者あることなし」と。

經　先尼梵志は、一切智中に於て、能く信を生ず、以何が故と爲すや。彼は諸法實相を信じて、分別し、稱量し、思惟し、思量するに、相法を以てせず、無相の法を以てせず。是の如く、先尼梵志は、相を取らず、諸行の中に住す。智慧の相を用つて、諸の法相に入り、色を受けず、受想行識を受けず。何となれば、諸法の自相は空なるが故に、受くることを得べからざればなり。是の先尼梵志は、內觀の故に、是の智慧を得るにあらず、外觀を以ての故に、是の智慧を得るにあらず、內外觀の故に、是の智慧を得るにあらず、また無智觀の故に、是の智慧を得るにあらず。何となれば、梵志は是の法と、智者と、智法と、智處とを見るが故なり。是の梵志は、內色の中に是の智慧を見るにあらず、內の受想行識の中に、是の智慧を見るにあらず。外色の中に是の智慧を見るにあらず。外の受想行識の中に、是の智慧を見るにあらず、內外色の中に是の智慧を見るにあらず。內外受想行識の中に是の智慧を見るにあらず。また色受想行識の中を離れて、是の智慧を見るにあらず。內外空なるが故なり。先尼梵志は、此の中に、心一切智を信解することを得たり。是を以ての故に、梵志は、諸法の實相を信ず。一切法は不可得なるが故に、是の如く信解し已らば、法として受くべき無し。諸法は相なく、憶念なきが故なり。是の梵志は、諸法に於て、また得る所なし。若くは取り、若くは捨つるに、取捨は不可得なればなり。是の梵志は、また智慧を念ぜず、諸法の相に憶念なきを以てなり。世尊よ、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多と名く。此彼岸は不度なるが故なり。是の菩薩の色受想行識は不受なり、一切法に不受なればなり。乃至諸の陀羅尼門、三昧門も亦た不受なり、一切

法は不受なればなり。是の菩薩は、是の中に於て、亦た涅槃を取らず、未だ四念處、乃至八聖道分を具足せず、未だ十力、乃至十八不共法を具足せず。何となれば、是の四念處は四念處にあらず、乃至、十八不共法は、十八不共法にあらず、是の諸法は法にあらず、亦た法にあらざるにあらず、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕と名く。色不受、乃至十八不共法も不受なるが故なり。

問 問うて曰く、〔四六〕是の中に何の因縁をもてか、先尼梵志を説くや。答へて曰く、此の經に、種種の因縁を以て、法空を説き、乃至微相だも取るべき無し。人心は疑ひ恠みて信ぜず、是の理は見難し、畢竟無相を以ての故なり。是の故に須菩提は引證せり。小乘中にすら尚ほ〔四七〕法空あり、何に況んや、大乘法を行ずる者にして、而も法空を信ぜざらんや。

復次に、〔四八〕刪若婆羅門の如きは、善く一切智人の相を知り、菩薩の乳糜を食するを見て、今日當に成佛すべしと知れり。先尼は是れ其の舅なり。耆年にして智徳あり、大名聞あり、出家して廣く一切の經書を讀み、心を修め、坐禪學道する時、智慧を求めんと欲するが故に、論議堂に往詣せり。諸の梵志の言はく、「六師は皆自ら一切智と稱す。〔四九〕不蘭迦葉は、大名聞あり、是れ大衆の師なり。其の弟子死するに、若くは小〔なるあり〕、若くは大〔なるあり〕、皆其の生處を説かず。餘の五師の弟子死するに、若くは小

【四六】第一六問、是の中に先尼梵志（Senika）を説く理由如何。

【四七】法空。色心——物質的、精神的——の諸法は、因縁の和合により生ぜられたるものにして、永久不變の實體あるにあらざれば、名けて法空といふ。我空又は人空に對する語なり。

【四八】Sañjñī Brahman ?

【四九】Pūrṇakāśyapa

[なるあり]、若くは大[なるあり]、皆其の生處を說かず。佛も亦た是れ大師にして大名聞あり。其の弟子死するに、小なる者は、其の生處を說き、大なる者は、其の生處を說かず」と。先尼は聞き已り、異時に佛の所に詣り、問訊し已りて一面に坐し、佛に問うて言く、「佛よ、當に問を聽したまへ」と。佛の言はく、「所問を恣にせよ」と。先尼言く、「昔我れ一時曾つて論堂に到りて、諸人と論議す。昔、聞く所は、具に向に佛の說きたまへるが如し。是の時、我は是の念を作せり、『佛法には、弟子の小なる者は更に生じ、大なる者は生ぜずと說く。何れをか定と爲さん』と。佛、先尼に告げたまはく、「我が法は甚深微妙にして解し難し。汝等に長夜に諸の異見、異欲、異法に著す。汝は我法に於いて、疾かに見ること能はず」と。先尼梵志、佛に白して言さく、「我れ心に佛を敬したてまつる。願はくは慈愍を加へ、爲に妙法を說き、我をして坐に於て、眼を得せしめ、空しく起たしめたまふことなかれ」と。佛、梵志に問ひたまはく、「汝が意に於て云何。汝は是の色を如去と見るや、不や。」答へて言く、「不なり。」「受想行識は、如去なりや、不や」と。答へて曰く、「不なり。」「色の中は、如去なりや、不や。」答へて曰く、「不なり。」「受想行識の中は、如去なりや、不や。」答へて言く、「不なり。」「色を離れて、如去なりや、不や」と。答へて曰く、「不なり。」「受想行識を離れて、如去なりや、不や」と。答へて言く、「不なり。」「汝は更に色なく、受想行識なくして、如去なる者を見るや不や。」答へて言く、「不なり。」「汝は種種の門に、如去を見ずんば、應に疑を生じて言はん。「佛法は

何れをか定と爲すや」と。答へて曰く、「不なり」。佛、先尼に告げたまはく、「若し我が弟子にして、了了に知らざれば、後生ありと說く。本來の我慢等の殘るものあるが故なり。若し我が弟子にして、了了に是の義を解知せば、其の生處を說かず。本來の我慢等の殘るものなきが故なり」。先尼は是を聞き已りて、卽時に道を得き。道を得已りて座より起ち、佛に白して言さく、「願くは出家することを得て、道の爲にせん」と。卽時に鬚髮自ら墮ち、便ち沙門と成り、久しからずして阿羅漢を得たり。佛に從へば、眼を得ること、虛しからざるが故なり。是の經に論議せる先尼の信は、佛、能く我をして、道を得せしめたまふと信ず。是れを初信と名く。然る後に、佛吾我を破して、本より已來、常に自ら無我なり、無我なるが故に、諸法は屬する所なく、「幻の如く、夢の如く、虛誑、不實、不可得なり〔と說きたまふを〕聞きて、是の信力を取得し、已にして諸法實相に入り、色は是れ如去、乃至識は是れ如去なるを受けざるなり。

問うて曰く、[五〇]梵志は何を以てか、佛に答へたてまつりて、皆不なりと言ふや。答へて曰く、梵志は本總相を我と爲す、佛は今一一別に問ひたまへり。是を以ての故に、佛に答へたてまつりて「不な」と言へり。

復た次に、梵志は、人の二種に我を說くを聞けり。或は、「五衆は卽ち是れ我なり」と說くあり。或

【五〇】第一七問、梵志が、佛の問に對して、皆「不な」を以て答へたる理由以何。

は、「五衆を離れて別に我あり」と說くあり。若し五衆にして、卽ち是れ我ならば、則ち別に我なし。何となれば、我は是れ一、衆は是れ五にして、一は五と作らず、五は一と作らざればなり。
復次に、五衆は無常生滅の相なり。五衆にして是れ我ならば、亦た應に生滅すべし。若し生滅せば則ち罪福を失す。是の五衆は、因緣の和合より生じて自在ならず。我、若し爾らば、我を用つて何か爲ん。それは自在ならざればなり。是の如き等の過罪の故に說いて、「色は如去、受想行識は如去」と言ふことを得ず。五衆を離れて、亦た應に我あるべからず、無相なればなり。若し受等を見て、是れ皆五衆の相なりと知らば、是れ我相にあらず、智者は云何が、五衆を離れて而も我ありと說かん。是を以ての故に、「不なり」と言へり。若し有が言はく、「別に更に我ありて五衆なし」と。是も亦た然らず。皆是れ顚倒妄見の分別なり。是の如き種種の因緣を以て、無我なることを知る。我は卽ち是れ如去、諸法も亦た爾り、皆同じく如去なり。主なきを以ての故に、法とし屬する所なし。
復次に、梵志は得道の智慧を推求し、四處に於て、之を求むるに、皆定相なし。謂ゆる自身の五衆を觀ずるを名けて內と爲し、外、他身を觀ずるを名けて外と爲し、彼此を名けて內外と爲す。是の三種の智慧は、道を得ず。智慧なきも亦道を得ず。復次に、內とは內の六入、外とは外の六入なり。
復次に、內を【五二】能觀の智慧に名け、外を【五三】所觀の處に名く。是の先尼は、諸觀、皆過罪あること

【五二】能觀の智慧とは、主觀の智なり。
【五三】所觀の處とは、客觀的對象の義なり。

を知る。何となれば、内の智慧力を以ての故に、外の諸法は是れ常なり、無常なり、有なり、無なり等と謂ふ。〔而も〕外法には、定相あるにあらず。若し定相あらば、則ち智は用なし。又此の智慧は、外法の因縁より生ず。〔而も〕外法の相は、不定なるが故に、智慧も亦た不定なり。稱は物の爲の故に、物は稱の爲の故にして、二事相待つが如し。若し物を離れては稱なく、稱を離れては物なし。無量數の智を得道と名け、方便して得るを、聖道の果を得と名く。

復次に、略して實智慧の義を說かば、所謂、內、五衆の中を見ず。外、五衆の中を見ず、亦內外、五衆の中を見ず、亦た五衆の中を離るるを見ず、是の智慧を見るを實と爲す。無常の智慧を以て、五衆の無常を觀ず。是の智慧は、因緣の和合に從ふが故に有り、實ならず。觀に著する者は邪見なり。著せざる者は道を得。若し無常の相にして、是れ實ならば、何故に著して而も道を得ざらん。是を以ての故に。一切の內外に、定んで智慧を見ず。若し是の無常等の觀を離れて道を得ば、一切の凡夫も亦た應に道を得べし。是を以ての故に、是の智慧を離るるも亦た所得なしと說く。

爾の時に。梵志は、是の智慧を以て、一切法の中に於て、心に遠離を得、智慧に於ても、亦た復た一切の我見等を遠離し、取相の邪見一切皆滅す。亦た無智に從つて得ず。爾の時に、梵志は歡喜して無量の法の性相を觀じ、佛を眞に大師と爲せり。捨てずとは、諸法の中に、皆助道の力あるが故なり。受けずとは。諸法實相は畢竟空にして所得なきが故に受けざるなり。

復次に、諸の結使煩惱は顛倒虚妄なるが故に捨つる所なし。但諸法の如實の相、無相、無憶念を知るが故に、是を菩薩の不受不捨の波羅蜜〔多〕と名け、名けて般若波羅蜜〔多〕と爲す。此〔岸より〕彼岸〔に〕度らざるが故に。世間は即ち是れ涅槃の相、涅槃の相は即ち是れ世間の相なり。一相は所謂る無相なり。若し是の如く知らば、應當に滅すべし、未だ諸の功德を具足せざるを以ての故に滅せざるなり。大慈悲の本願力の故に滅せざるなり。佛道を求むと雖も、此の法の中に於て、亦た好醜の相、及び受捨の相なし。是を以ての故に。法にあらず。亦た法にあらざるにあらず。是を菩薩の般若波羅蜜〔多〕は一切の相受けずと名く。

巻の第四十三

集散品第九の餘を釋す。

■復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、應に是の如く思惟すべし、何者か是れ般若波羅蜜〔多〕なる。何を以ての故に、般若波羅蜜〔多〕と名くるや。是れ誰の般若波羅蜜〔多〕なるや。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ぜば、是の如く念ず、「若し法にして、所有なく、不可得なれば、是れ般若波羅蜜〔多〕なり」と。爾の時に、舍利弗、須菩提に問ふ、「何等の法か、所有なく、不可得なるや」と。須菩提言く、「般若波羅蜜〔多〕は、是れ法にして、所有なく、不可得なり。禪〔那〕波羅蜜〔多〕、毘梨耶波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、檀〔那〕波羅蜜〔多〕は、是れ法にして、所有なく、不可得なり。內空の故に、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空の故なり。舍利弗よ、色法は所有なく、不可得なり。受想行識法も、所有なく不可得なり。內空は、法にして、所有なく、不可得なり、乃至無法有法空は、法にして、所有なく、不可得なり。舍利弗よ、四念處は、法にして、所有なく、不可得なり、乃至十八不共法は、所有なく、不可得なり。舍利弗よ、諸の神通法は、所有なく、不可得なり。如法は、所有なく、不可得なり。法性、法相、法住、法位、實際法は、所有なく、不可得なり。舍利弗よ、佛は所有なく、不可得なり。薩婆若は法にして、所有なく、不可得なり。一切種智は、法にして、所有なく、不可得なり、內空乃至無法有法空の故なり。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩、是の如く思惟し、是の如く觀ずる時は、心沒せず、悔いず、驚かず、畏れず、怖かず。當に知るべし、是の菩薩は、般若波羅蜜〔多〕の行を離れざることを」と。舍利

佛、須菩提に問ふ、「何の因縁の故に、常に菩薩は、般若波羅蜜〔多〕の行を離れざるを知るべきや」と。須菩提言く、「色は、色の性を離れ、受想行識は、〔受想行〕識の性を離れ。六波羅蜜〔多〕は、六波羅蜜〔多〕の性を離れ、乃至實際は、實際の性を離るればなり」と。舍利弗、復た須菩提に問ふ、「云何が是れ色の性なる、云何が是れ受想行識の性なる、云何が是れ乃至實際の性なる」と。須菩提言く、「所有なきは、是れ色の性なり。所有なきは、是れ受想行識の性なり。乃至所有なきは、是れ實際の性なり。舍利弗よ、是の因縁を以ての故に、當に知るべし、色は色の性を離れ、受想行識は、〔受想行〕識の性を離れ、乃至實際は、實際の性を離るるを。舍利弗よ、色は亦色相を離れ、受想行識は、〔受想行〕識の相を離れ、乃至、實際も亦實際の相を離れ、相も亦相を離れ、性も亦性を離る」と。舍利弗、須菩提に問ふ。「菩薩摩訶薩、若し是の如く學せば、薩婆若を成就することを得るや」と。須菩提言く、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩、是の如く學せば、薩婆若を成就することを得。何となれば、諸法は生ぜず、成就せざるが故なり」と。舍利弗、須菩提に問ふ、「何の因縁の故に、諸法は生ぜず、成就せざるや」と。須菩提言く、「色の色空たるは、是れ色の生、成就にして、不可得なり。受想行識の〔受想行〕識空たるは、是れ〔受想行〕識の生、成就にして、不可得なり。乃至、實際の實際空たるは、是れ實際の生、成就にして、不可得なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩に、是の如く學せば、漸く薩婆若に近づき、漸く身清淨、心清淨、相清淨を得ん。漸く身清淨、心清淨、相清淨を得るが故に、是の菩薩は染心を生ぜず、瞋心を生ぜず、癡心を生ぜず、憍慢心を生ぜず、慳貪心を生ぜず、邪見心を生ぜざるなり。是の菩薩は、染心を生ぜず、乃至邪見心を生ぜざるが故に、終に母人の腹中に生ぜずして、常に化生するを得て、一佛國より一佛國に至り、衆生を成就し、佛世界を淨め、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に諸佛を離れず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、當に是の般若波羅蜜〔多〕を行ずることを作すべく、當に是の般若波羅蜜〔多〕を學することを作すべし。

【論】問うて曰く、（一）上來、廣く般若波羅蜜［多］を說けり。今須菩提は何を以てか是の言を作すや。「菩薩摩訶薩は、應に是の如く、思惟すべし。何者か是れ、般若波羅蜜［多］なる」と。答へて曰く、須菩提は、上來、謙讓門を說き、次に不住門を說き、今は般若波羅蜜［多］の體を明す。（二）何等か是れ般若波羅蜜［多］なる。般若波羅蜜［多］とは、是れ一切諸法の實相にして、破すべからず、壞すべからず。若くは佛あり、若くは佛なくも、常住の諸の法相法位は、佛にあらず、辟支佛にあらず、菩薩にあらず、聲聞にあらず、天人の所作にあらず、何に況んや、其の餘の小なる衆生をや。

復次に、（三）常も是れ一邊、斷滅も是れ一邊なり、是の二邊を離れて、中道を行ずる、是を般若波羅蜜［多］と爲す。又復、常と無常、苦と樂、空と實、我と無我等も、亦是の如し。色法も是れ一邊、無色法も是れ一邊なり。可見法と不可見法、有對と無對、有爲と無爲、有漏と無漏、世間と出世間等の、諸の二法も、亦是の如し。

復次に、無明も是れ一邊、無明の盡くるも是れ一邊、乃至、老死も是れ一邊、老死の盡くるも是れ一邊、諸法の有も是れ一邊、諸法の無も是れ一邊なり。是の二邊を離れて、中道を行ずる、是を般若波羅蜜［多］と爲す。菩薩も是れ一邊、六波羅蜜［多］も是れ一邊、佛も是れ一邊、菩提も是れ一邊な

【一】第一問、須菩提は、上に已に廣く般若を說き、今また「菩薩は是の如く思惟すべし」と言へる理由如何。
【二】般若の體を明す。
【三】二邊を離れて、中道を行ずる、是を般若波羅蜜多と爲す。

り。是の二邊を離れて、中道を行ずる、是を般若波羅蜜「多」を爲す。略して内の六情を說くも、是れ一邊、外の六塵も、是れ一邊なり。是の二邊を離れて、中道を行ずる。是を般若波羅蜜「多」と名く。此の般若波羅蜜「多」も、是れ一邊、此の般若波羅蜜「多」にあらざるも、是れ一邊なり。是の二邊を離れて、中道を行ずる、是を般若波羅蜜「多」と名く。是の如き等の二門「を以て」、廣く無量の般若波羅蜜「多」の相を說く。

復次に、【四】有を離れ、無を離れ、非有非無を離れ、愚癡に墮せずして、能く善道を行ずる、是を般若波羅蜜「多」と爲す。是等の如き三門は、是れ般若波羅蜜「多」の相なり。

復次に、須菩提は、此の中に自ら說けり。「是の法は、所有なく、不可得なり」と。是の般若波羅蜜「多」は空なるが故に所有なく、常、無常等の諸觀を求覓するに、定相なきが故に不可得なり。

復次に、所有なしとは、此の中に、須菩提は自ら說けり。「般若波羅蜜「多」、乃至五波羅蜜「多」の法は所有なし。取るべからず、受くべからず、著すべからざるが故なり」と。

復次に、十八空の故に、是の六波羅蜜「多」は、所有なく、不可得なり。譬へば、大風の能く破壞し、諸の雲を散ずるが如く、亦大火の乾れたる草木を燒くが如く、金剛寶の大山を摧破するが如し。諸の空も亦是の如く、能く諸法を破す。【五】何を以ての故に、般若波羅蜜「多」と名くとは、般若に、

【四】有・無・非有非無等を離れて、善道を行ずる、是れ般若波羅蜜多の相なり。

【五】般若は一切の智慧の中にて最も第一たり。

一切智慧の中にて、最も第一たり、無上、無比、無等にして、更に勝者なく、窮盡して邊に到る。一切衆生の中にては、佛を第一と爲し、一切諸法の中にては、涅槃を第一と爲し、一切衆の中にては、比丘僧を第一と爲すが如し。

問うて曰く、〔六〕汝は先に、「諸法實相は是れ般若波羅蜜「多」なり。謂ゆる法位法住、佛あるも、佛なきも、常住にして、異ならず」と說けり。今何を以てか諸の智慧の中にて、般若波羅蜜「多」の第一なること、譬へば、諸法の中にて、涅槃を第一と爲すが如しと說くや。答へて曰く、世間の法は、或る時は因中に果を說き、或る時は果中に因を說くも咎なし。〔七〕人の日に數匹の布を食す「と言はんが」如きは、布は食すべからず、布の因緣より食を得るなり。是を因中に果を說くと名く。〔八〕好畫を見て、好手なりと言ふが如きは、是を果中に因を說くと名く。諸法實相に因りて、智慧を生ずとは、是れ即ち果中に因を說くなり。

復次に、是の菩薩は、不二入法門に入り、是の時、能く具に此の般若波羅蜜「多」を行じ、是は因、是は果、是は緣、是は智、是は內、是は外、是は此、是は彼なり等と分別せず。所謂る、一相無相なり。是を以ての故に難ずべからず。

復次に、〔九〕世間に三種の智慧あり。一には世俗の巧便、博識、文藝、仁智、禮敬等なり。二には離

〔六〕第二問、諸の知慧の中にて、般若を第一とする理由如何。
〔七〕因中に果を說く。
〔八〕果中に因を說く。
〔九〕三種の知慧——(一)世俗智(二)離生智、(三)出世間智。

生の智慧、謂ゆる欲界、乃至無所有處を離るるなり。三には出世間の智慧、謂ゆる我及び我所を離れ、諸漏盡きたる、聲聞、辟支佛の智慧なり。般若波羅蜜［多］を最も殊勝と爲す。［そは］畢竟清淨にして、著する所なきが故なり、一切衆生を饒益するが爲の故なり。聲聞辟支佛の智慧は、漏盡くすが故に、清淨なりと雖も、大慈悲なく、一切を饒益すること能はざるが故に如かず。何に況んや、世俗の罪垢あり、不淨なる欺誑の智慧をや。三種の智慧は、是の智慧に及ばざるが故に、名けて般若波羅蜜［多］と爲す。

復次に、是の智慧は、一切衆生を度するが爲の故に、佛道を得るが爲の故に、是の智慧相應の受想行識、及び智慧より起る身業、口業、及び生、作等の心不相應の諸行、是の諸法の和合を名けて、波羅蜜［多］と爲し、是の諸の波羅蜜［多］の中には、智慧多きが故に、名けて般若波羅蜜［多］と爲し、念、定等多きが故に、名けて禪［那］波羅蜜［多］と爲す。餘の波羅蜜［多］の義も亦是の如し。是の如き等の種種無量の因緣の故に、名けて般若波羅蜜［多］と爲す。〔一〇〕是れ誰の般若波羅蜜［多］なるやとは、第一義中には知者、見者、得者なく、一切法は我なく、我所の相なく、諸法は但空にして、因緣和合し、相續して生ず。若し爾らば、般若は當に誰にか屬すべき。〔一一〕佛法に二種あり。一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の爲の故に、般若波羅蜜［多］は、菩薩に屬す。凡夫の人の法には、種種の

【一〇】般若波羅蜜多は誰に屬するか。凡夫に屬するか、二乘に屬するか。

【一一】二種の佛法――（一）世諦、（二）第一義諦。

過罪ありて、清淨ならざるが故に、則ち凡夫に屬せず。般若波羅蜜「多」は、畢竟清淨にして、凡夫の樂はざる所なり、蠅の樂んで、不淨に處り、蓮華を好まざるが如し。凡夫は復慾を離ると雖も、吾我の心あり、離慾の法に著するが故に、般若波羅蜜「多」を樂はず。聲聞、辟支佛は、般若波羅蜜「多」を樂はんと欲すと雖も、深き慈悲なきが故に、大に世間を厭ひ、一心に涅槃に向ふ。是の故に具足して、般若波羅蜜「多」を得ること能はず。是の般若波羅蜜「多」は、菩薩の成佛する時は、轉じて一切種智と名く。是を以ての故に、般若は佛に屬せず、聲聞、辟支佛に屬せず、凡夫に屬せず、但菩薩に屬す。

問うて曰く、(三)此の經の中に常に、「五衆は前に在り、一切種智は後に在り」と說けり。今何を以てか、先づ六波羅蜜「多」を說くや。答へて曰く、舍利弗、須菩提に所有なきの義を問ふに、五衆は、種種の因緣觀もて、强ひて所有なからしむれば、解し難く、般若波羅蜜「多」は、卽ち是れ所有なければ、解し易し。譬へば、水中の月は、其の空なることを明らめ易く、天上の月は、無所有ならしめ難きが如し。五波羅蜜「多」は、般若波羅蜜「多」と同名同事なり。是の故に續いて五波羅蜜「多」を說き、然る後に、五衆乃至一切種智の所有なく、不可得なるを說く。菩薩は是の門に入りて、諸法實相を觀じ、恐れず、怖かずとは、當に知るべし、是の菩薩は般若波羅蜜「多」を離れざることを。離れずとは、常に般若波羅蜜「多」

【三】第三問、五蘊は前にあり、一切種智は後にありと說きながら、今先づ六度を說くは何故なるか。

を行じて、虛しからざれば、必ず果報あり。此の中に須菩提は自ら、「因緣を離れず」と說けり。謂ゆる色は色の性を離るれば、色の中に色の相なく、虛誑にして、所有なし。菩薩は、能く是の如く、離れざることを知る。實智慧乃至實際も、亦是の如し。菩薩は、能く是の無障礙の道を行じて、薩婆若に至ることを得。一切法は不生、不出の故なり。舍利弗、須菩提に問ふ。「云何が一切法は不生なりや」と。須菩提答ふらく、「色の色たる相は空なるが故に、色は生無く、成就無し。乃至實際も亦是の如し。若し菩薩、能く是の如く行ずれば、是れ清淨第一にして、無上無比なるが故に、漸く薩婆若に近づく。漸く薩婆若に近づくが故に、心に邪見、煩惱、戲論を生ぜず、卽時に心清淨なることを得。心清淨の果報の故に、身清淨なることを得。三十二相、八十隨形好もて、其の身を莊嚴し、三種の清淨を得るが故に、諸の虛誑、取相の法を破し、法性生身を受く。所謂、常に化生を得て、胞胎に處らざるなり。

問うて曰く、(三)若し力あれば、此の如く何ぞ化生を用つて、其の身に貪著し、而して涅槃を取らざるや。答へて曰く、二事の因緣あるが故なり。〔謂く〕、諸佛は、是の衆生の中の寶を以て、供養して厭くこと無からんと欲する故に本願ありて、衆生を度して、佛世界の未だ滿たざるを淨むるが故に。是の菩薩は、福德の方便力の故に、常に諸佛を離れざるなり。

【三】第四問、若し力あれば、化生を用つて、其の身に貪著し、涅槃を取らざるは何故なるか。

（二四）行相品第十を釋す

經 爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、方便なくして、般若波羅蜜〔多〕を行ぜんと欲せば、若くは色を行じて行相と爲し、若くは受想行識を行じて、行相と爲し、若くは色は是れ常なりと行ずるを、行相と爲し、若くは受想行識は是れ常なりと行ずるを、行相と爲し、若くは色は、是れ無常なりと行ずるを、行相と爲し、若くは受想行識は、是れ無常なりと行ずるを、行相と爲し、若くは色は是れ樂なりと、行ずるを行相と爲し、若くは受想行識は、是れ樂なりと行ずるを、行相と爲し、若くは色は、是れ苦なりと行ずるを、行相と爲し、若くは受想行識は、是れ苦なりと行ずるを行相と爲し、若くは色は是れ有なりと行ずるを、行相と爲し、若くは受想行識は、是れ有なりと行ずるを、行相と爲し、若くは色は、是れ行なりと行ずるを、行相と爲し、若くは受想行識は是れ空なりと行ずるを、行相と爲し、若くは色は是れ我なりと行ずるを行相と爲し、若くは受想行識は是れ我なりと行ずるを行相と爲し、若くは色は是れ無我なりと行ずるを行相と爲し、若くは受想行識は是れ無我なりと、行ずるを、行相と爲し、若くは色は是れ離なりと行ずるを行相と爲し、若くは受想行識は、是れ離なりと行ずるを、行相と爲し、若くは色は、是れ寂滅なりと行ずるを、行相と爲し、若くは受想行識は、是れ寂滅なりと、行ずるを行相と爲す。世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、方便なくして、四念處を行ずるを行相と爲し、乃至十八不共法を行ずるを行相と爲す。世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、是の念を作す、「我般若波羅蜜〔多〕を行ずるに、有所得の行も亦是れ行相なり」と。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、是の念を作す、「能く是の如く行ぜば、是の般若波羅蜜〔多〕を修行せりとするも、亦是れ行相なり」と。當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずるに方便なきことを。須菩提、舍利弗に語るらく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、

【二四】此の品に、無相門を以て、諸法を破するを眼目とし、方便なき觀行は、皆相に墮することを示す。

色に於いて、受念著有し、若しくは色の受念著有を色と爲すが故に行を爲し、若しくは色と爲すが故に行を作さば、生老病死、憂悲苦惱、及び後世の苦を離るることを得ず。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ずる時、方便なく、眼に於いて、受念著有し、乃至意、色乃至法、眼識界乃至意識界、眼觸乃至意觸、眼觸因緣生の受乃至意觸因緣の受、四念處、乃至十八不共法の受念著有を十八不共法と爲すが故に、行を作し、若しくは爲に行を作さば、是の菩薩は、生、老、病死、憂悲苦惱、及び後世の苦を離るることを得ること能はず。是の如き菩薩は、尚は聲聞、辟支佛地の證を得ること能はず。何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得んや。是の處あること無し。舍利弗よ、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずるに、方便なし」。舍利弗、須菩提に問ふ。「云何が當に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜（多）を行ずるに、方便ありと知るべきや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ぜんと欲する時、色を行ぜず、受想行識を行ぜず、色相を行ぜず、受想行識相を行ぜず、色受想行色は、常なりと行ぜず、色受想行識は、無常なりと行ぜず、色受想行識は、樂なりと行ぜず、色受想行識は、苦なりと行ぜず、色受想行識は、我なりと行ぜず、色受想行識は、無我なりと行ぜず、色受想行識は、空なりと行ぜず、色受想行識は、無相なりと行ぜず、色受想行識は、無作なりと行ぜず、色受想行識は、離なりと行ぜず、色受想行識は、寂滅なりと行ぜず。何となれば、舍利弗よ、是の色は空にして、色に非ずと爲し、空を離れて色なく、色を離れて空なく、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識は空にして、識に非ずと爲し、空を離れて、（受想行）識なく、（受想行）識を離れて空なく、空は即ち是れ識、識は即ち是れ空なり。乃至十八不共法は空にして、十八不共法に非ずと爲し、空を離れて十八不共法なく、十八不共法を離れて空なく、空は即ち十八不共法、十八不共法は即ち是れ空なればなり。是の如く、舍利弗よ、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜（多）を行ずるに方便あり。是の菩薩摩訶薩は、是の如く般若波羅蜜（多）を行じて、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行ずる時、

行も亦受けず、不行も亦受けず、行不行も亦受けず、非行非不行も亦受けず、不受も亦受けず。舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、何の因緣の故に受けざるや」と。須菩提言く、「是の般若波羅蜜〔多〕の自性は、不可得なるが故に、受けず。何となれば、所有の性無き、是れ般若波羅蜜〔多〕なればなり。舍利弗よ、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行ずるに、行も受けず、不行も亦受けず、行不行も亦受けず、非行非不行も亦受けず、不受も亦受けず。何となれば、一切の法は、性として所有なく、諸法の行に隨はず、諸法の相を受けざればなり。是を菩薩摩訶薩の、諸法無所受三昧と名く。廣大の用、聲聞辟支佛と共ならず。是の菩薩摩訶薩は、是の三昧を行じて離れずんば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

論 釋して曰く、(一五)前品には、空門を用つて、諸法を破し、此の品には、無相門を以て、諸法を破せんと欲す。若し菩薩、方便なくして、色を觀ずれば、則ち相中に墮し、相中に墮するが故に、般若波羅蜜〔多〕の行を失す。何となれば、一切法は、空なるを以ての故に、相として取るべき無ければなり。

問うて曰く、(一六)人は善惡の果報を知り、果報の相を取り已つて、善惡を分別し、善なる者を取り、惡なる者を捨つ、是の故に道を行ず。云何が諸法は無相の相なりと說くや。答へて曰く、相を取るとは、初學者の爲に說き、無相とは、道を行じて、解脫門に住する者の爲に說く。麤事を以て難を爲すべからず。今行者は、善の相を取りて、不善の相を破す。所謂男女等の相は、諸の煩惱の因緣を生

【一五】 無相門を以て諸法を破するなり。

【一六】 第五問、人は善惡の果報を知り、善を取り、惡を捨つ。然るを諸法は無相の相なりと言ふは何故なるか。

じ、後に無相の相を以て、善法の相を破す。若し不善を破して、而も善相を破せずんば、善は卽ち悲と爲らん。〔そは〕諸の著を生ずるが故なり。無相の相を以て善法を破し、無相も亦自ら破す。何となれば、無相は善法に攝する所なればなり。譬へば雹墮ちて穀を害せんに、雹も自ら消滅するが如し。

復次に、一切の法は、無相の相を實と爲す。譬へば身には不淨充滿し、九孔より常に流れて、淨相あること無きも、而も人は無明の故に、强ひて以て淨と爲し、煩惱を生じて、諸罪を作すが如く、小兒の不淨物の中に於て、淨相を取り、以て樂と爲すを、長者は之を觀て、而して笑ひ、虛妄と爲すことを知るが如し。是の如き等の種種の取相は、皆虛妄と爲す。〔一七〕頗梨珠の〔その〕前〔にある物〕の色に隨つて變じ、自ら定色なきが如し。諸法も亦是の如く、定相あること無く、心に隨つて異と爲り、若くは常、若くは無常等の相あり。亦瞋心を以て、此の人を見て弊と爲し、若し瞋心休息すれば、婬欲の心生じて、此の人を見て、還つて復好しと爲し、若し憍慢心生ずるを以て、此の人を見て以て卑賤と爲し、其の德あるを聞いて、還つて敬心を生ず。是等の如く、理ありて憎愛し、理なくして憎愛するは、皆是れ虛妄の憶想なり。若し虛妄の想を除けば、亦空相、無相の相、無作の相なし。〔そは〕破する所なければなり。是の色は種種の因緣の和合するに從つて有り。譬へば、水沫の如く、幻の如く、夢の如し。若し菩薩は色の中に於いて、一異の相を取れば、卽ち般若波羅蜜〔多〕を失す。色性は是れ無相の相なるが故なり。是の色相を受け已

【一七】頗梨珠に定色なきが如く諸法も亦是の如し。

つて、色を見るに、散壞磨滅す。是を無常と謂ふ。若し和合して少許の時住するを謂つて常と爲す。
（二八）常に二種あり。一には若くは住すること、百歳、千萬億歳、若くは一劫、若くは八萬劫にして、然る後に歸滅す。二には常住不壞の菩薩なり。若し邊邪滅するが故に、亦復眞實の常を觀ぜず、若し常を觀ずれば、是れ久しく住すと知るが故に、常は是れ眞實に非ず。若し邊邪滅せざれば、色を觀じて眞實の常と爲し、是の念を作さく、「草木は零落遷歸して土と爲る、但だ離合に時あり」と。是の故に是の菩薩は方便なしと說く。菩薩は或は色の無常を觀ず。（二九）無常に亦二種あり。一には、念念の滅なり、一切の有爲法は一念の住に過ぎず。二には、相續の法は壞するが故に、名けて無常と爲す。人命の盡くるが如く、火の草木を燒くが如く、水を煎ずれば、消盡するが如し。若し初發心の菩薩は、是の相續の斷を行ず、麤なる無常の心に厭ふが故なり。若し久行の菩薩は、能く諸法は、念念に生滅して、無常なりと觀ず。是の二菩薩は、皆相を取る中に墮す。何となれば是の色の常、無常の相の不可得なることは、先に說く如くなるを以てなり。受想行識も亦是の如く。苦樂、我、非我も、亦爾なり。

問うて曰く、（三〇）是の五衆は常、無常等の觀を作すべし。云何が五衆は、是れ寂滅遠離の相なりと言ふや。答へて曰く、行者は五衆の常、無常の相を見ざるが故に、是の五衆は自相を離るるを知る。

【二八】二種の常――(一)若くは住することと百歳乃至八萬劫、(二)常住不壞の菩薩。

【二九】二種の無常――(一)念念の滅、(二)相續の法壞。

【三〇】第六問。五衆は寂滅遠離の相なりといふ理由如何。

若し五衆の自相を離るることを知れば、即ち是れ寂滅にして涅槃の如し。

問うて曰く、〔二〕若し爾らば初より自ら無相なり。云何が說いて、方便なくして相中に墮すと言ふや。答へて曰はく、是の菩薩は、根鈍にして自覺せず、心、五衆の著を離れて、還た復遠離寂滅に著し、無相の中に於いて著を生ず。三十七品乃至十八不共法も、亦應に是の如く、義に隨つて分別すべし。若し菩薩、外の諸法は皆無相なりと觀じ、「我は能く是の觀を作す」と言はば、我心の殘あるを以ての故に、亦相中に墮す。若し菩薩は、能く此の著相の非道を離れて、眞淨無相の智慧を行じ、「能く是の如き內外清淨の行、是を般若波羅蜜（多）を作行すと爲す」と、是の念を作さば、是の人も、亦相中に墮するなり。何となれば、著すべからずして著し、取るべからずして取るが故なり。是の菩薩は名けて方便なしと名く、愛見に依止し、善法に著するが故に、是の菩薩は福德ありと雖も、亦老病死、憂悲苦惱、雜行の道を離るることを得ず。故に尚ほ小乘を得ること能はず、何に況んや大乘をや。上と相違するを名けて、方便ありと爲す。一切法に於いて受けず、著せず、諸法は、和合の因緣生にして、自性なきが故なり。

問うて曰く、〔三〕前には無受三昧を說き、此には不受三昧を說く。何等の異ありや。答へて曰く、前者は空の爲の故なり、是は無相の爲の故なり。遠離せずとは、常に行じて息せず、休せず、大悲心

【二】第七問、若し爾らば初より自ら無相なり。如何ぞ方便なくして、相中に墮すと言はん。

【三】第八問、無受三昧と不受三昧との相異如何。

を以ての故なり。疾かに佛道を得とは、是の三昧に入りて、障礙なきが故に、行ずる所の智慧は、佛と相似し、若くは無量阿僧祇劫に應に得べく、或時は一阿僧祇劫、百劫乃至六十一劫を超ゆ。弗沙佛の釋迦文佛を讃歎して、九劫を超越せしが如し。

經 舍利弗言く、「但是の三昧を離れずば、菩薩をして、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得せしむるや、更に餘の三昧ありや」。須菩提、舍利弗に語つて言く、「更に諸の三昧あり。菩薩摩訶薩、是を行ずれば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん」。舍利弗言く、「何等の三昧か、菩薩摩訶薩、是を行じて、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。須菩提言く、「諸の菩薩摩訶薩に、三昧あり、首楞嚴と名く。是の三昧を行ぜば、菩薩摩訶薩をして、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ。寶印三昧、師子遊戲三昧、妙月三昧、月幢相三昧、諸法印三昧、觀頂三昧、畢法性三昧、畢幢相三昧、金剛三昧、入法印三昧、三昧王安立三昧、王印三昧、放光三昧、力進三昧、出生三昧、必入辯才三昧、入名字三昧、觀方三昧、陀羅尼印三昧、不忘三昧、攝諸法海印三昧、遍覆虚空三昧、金剛輪三昧、寶斷三昧、普照三昧、不求三昧、無處住三昧、無心三昧、淨燈三昧、無邊明三昧、能作明三昧、普遍明三昧、堅淨諸三昧三昧、無垢明三昧、作樂三昧、電光三昧、無盡三昧、威德三昧、離盡三昧、不動三昧、莊嚴三昧、日光三昧、月淨三昧、淨明三昧、能作明三昧、作行三昧、知相三昧、如金剛三昧、心住三昧、遍照三昧安立三昧、寶頂三昧、妙法印三昧、法等三昧、生喜三昧、到法頂三昧、能散三昧、壞諸法處三昧、字等相三昧、離字三昧、斷緣三昧、不壞三昧、無種相三昧、無處行三昧、離闇三昧、無去三昧、不動三昧、度緣三昧、集諸功德三昧、住無心三昧、妙淨華三昧、覺意三昧、無量辯三昧、無等等三昧、度諸法三昧、分別諸法三昧、散疑三昧、無住處三昧、一相三昧、一性三昧、生行三昧、一行三昧、不一行三昧、妙行三昧、達一切有底散三昧、入言語三昧、離音聲字語三昧、然炬三昧、淨相三昧、

破相三昧、一切種妙足三昧、不喜苦樂三昧、不盡行三昧、多陀羅尼三昧、取諸邪正相三昧、滅憎愛三昧、逆順三昧、淨光三昧、堅固三昧、滿月淨光三昧、大莊嚴三昧、能照一切世三昧、等三昧、無諍行三昧、無住處樂三昧、如住定三昧、壞身衰三昧、壞語如虛空三昧、離著如虛空不染三昧と名くる有り。舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩は、是の諸の三昧を行ぜば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。復無量阿僧祇の三昧門、陀羅尼門あり。菩薩摩訶薩は、是の三昧門、陀羅尼門を學せば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。」慧命須菩提、佛の心に隨って言く、「當に知るべし。是の菩薩摩訶薩にして、是の三昧を行ずる者は、過去の佛の爲に授記せられ、今現在十方の諸佛も、亦是の菩薩に記を授く。是の菩薩は、是の諸の三昧を見ず、亦是の三昧を念ぜず『我れ當に是の三昧に入るべく、我れ今是の三昧に入り、我れ已に是の三昧に入れり』と念ぜず。是の菩薩摩訶薩は、都べて分別の念なきなり。」舍利弗、須菩提に問ふ。「菩薩摩訶薩は、是の諸の三昧に住して、已に過去の佛に從つて、記を授かりたるか」。須菩提答して言く、「不なり、舍利弗よ。何となれば、般若波羅蜜〈多〉は、諸の三昧に異ならず、諸の三昧は、般若波羅蜜〈多〉に異ならず。菩薩は、般若波羅蜜〈多〉に異ならず、般若波羅蜜〈多〉は、菩薩に異ならず、般若波羅蜜〈多〉は、即ち是れ三昧、三昧は、即ち是れ般若波羅蜜〈多〉、菩薩は、即ち是れ般若波羅蜜〈多〉及び三昧、般若波羅蜜〈多〉及び三昧と、即ち是れ菩薩なり。」舍利弗、須菩提に語るらく、「若し三昧は、菩薩に異ならず、菩薩は、三昧に異ならず、三昧は、即ち是れ菩薩、菩薩は、即ち是れ三昧ならば、菩薩は云何が、一切諸法は、三昧に等しと知るや」と。須菩提言く、「若し菩薩、是の三昧に入らば、是の時、是の念を作さず。『我は是の法を以て、是の三昧に入れり』と。是の因緣を以ての故に、舍利弗よ、是の菩薩は、諸の三昧に於いて、知らず、念ぜざるなり」と。舍利弗言く、「何を以ての故に、知らず、念ぜざるや。」須菩提言く、「諸の三昧は、所有なきが故に、是の菩薩は、知らず、念ぜざるなり。」爾の時に、佛讚じて言はく、「善い哉、善い哉、須菩提よ、我が說の如く、汝は無諍三昧を行ずること第一なり、此の義と相應せり。菩薩摩

訶薩は、應に是の如く、般若波羅蜜〔多〕を學すべし。禪〔那〕波羅蜜〔多〕、毗梨耶波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、檀〔那〕波羅蜜〔多〕、四念處、乃至十八不共法も、亦應に是の如く學すべし。」

【論】問うて曰く、〔三三〕佛の說き給ふが如くんば、涅槃は一道なり。所謂空、無相、無作なり。舍利弗は何を以てか、更に餘の三昧ありて、今菩薩をして疾かに佛を得せしむるや不やと問ふや。答へて曰く、未だ涅槃に近づかざる時は、多く餘道あり。涅槃に近づく時は、唯一道あるのみ。〔乃ち〕空、無相、無作なり。諸餘の三昧も、皆此の三解脫門に入る。譬へば大城に多くの諸門ありて、皆城に入ることを得るが如く、又衆川萬流は、皆海に歸するが如し。何等か餘の三昧なる。所謂、首楞嚴三昧等の諸の三昧なり。摩訶衍品の中に、佛、自ら說きたまはく、「深くして解し難き者あり」と。彼の中に當に說くべし。若し菩薩は、能く是の百八三昧等の諸の陀羅尼門を行せば、十方の諸佛は皆授記を與へたまふ。何となれば是の菩薩は、是の諸の三昧を得と雖も、實に諸の憶想、分別、我心なきが故に、亦是の念を作さず、「我れ當に是の三昧に〔三四〕入るべく、今入り、已に入れり。我れ當に是の三昧に住すべし。是れ我が三昧なり」と。是の心は、清淨微妙の法にして、著せざるを以ての故に、諸佛は授記したまふなり。

【三三】第九問、佛教徒の理想境たる涅槃は一道なり。今それ舍利弗が、餘の三昧ありて、菩薩をして疾かに佛を得せしむるや、不やと問へる理由如何。

【三四】當に入るべくは、未來を指し、今入りは、現在、已に入れりは、過去を指せり。

爾の時に、舍利弗は還た空の智慧を以て、須菩提を難じて言はく、「菩薩は、是の三昧に住し、是の三昧の相を取りて、授記を得るや」と。須菩提の言く、「不なり。何となれば、三事は異ならざるが故なり。［乃至］般若は三昧に異ならず。三昧は般若に異ならず。般若に、菩薩、三昧に異ならず。菩薩・三昧は般若に異ならず。般若、三昧は即ち是れ菩薩、菩薩は即ち是れ般若、三昧なり。般若、三昧・菩薩にして異ならば、諸佛は其に記を授けたまはんや不や。異なるが故に授記なし」と。舍利弗は復問へり、「若し爾らば、三昧及び一切法は、平等にして異ならずや」と。須菩提の言く、「諸の菩薩には、諸の法等三昧あり。是の三昧の中に入れば、諸法は異なること無し」と。

復次に、先に說けるが如く、諸の三昧に於いて、憶想分別を作さず、覺らず、知らず。諸の三昧の自性は所有なきが故に、菩薩は知らず、念せざるなり。佛は須菩提の自ら未だ是の三昧を得ずして、而も善く菩薩の微妙三昧陀羅尼を說き、般若波羅蜜［多］の中に、念せず著せざるを以て、是の故に讃じて言く、「善い哉、我れ、汝が無諍三昧を得ること第一にして、我が讃ずる所の如く、虛しからずと說かん」と。

經 舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の、是の如く學するを、般若波羅蜜［多］を學すと爲すや。」佛、舍利弗に告げ給はく、「菩薩摩訶薩の是の如く學するを、般若波羅蜜［多］を學すと爲す。是の法は不可得なるが故なり。乃至檀［那］波

羅蜜〔多〕を學するも、是の法は不可得なるが故なり。四念處、乃至十八不共法を學するも。是の法は不可得なるが故なり。」
舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の如く、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を學するも、是の法は不可得なりや。」佛の言はく、「是の如く、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を學せば、是の法は不可得なり。」舍利弗言く、「世尊よ、何等の法か不可得なりや。」佛の言はく、「我は不可得なり。乃至知者、見者も不可得なり。畢竟淨なるが故なり。五陰は不可得なり、十二入も不可得なり、十八界も不可得なり。〔そは〕畢竟淨なるが故なり。無明は不可得なり〔そは〕畢竟淨なるが故なり。乃至老死も不可得なり〔そは〕畢竟淨なるが故なり。苦諦は不可得なり、〔そは〕畢竟淨なるが故なり。集滅道諦は不可得なり、〔そは〕畢竟淨なるが故なり。欲界は不可得なり、〔そは〕畢竟淨なるが故なり。色界、無色界は、不可得なり。〔そは〕畢竟淨なるが故なり。四念處は不可得なり、〔そは〕畢竟淨なるが故なり。乃至十八不共法も不可得なり。〔そは〕畢竟淨なるが故なり。阿羅六波羅蜜〔多〕も不可得なり、〔そは〕畢竟淨なるが故なり。須陀洹も不可得なり〔そは畢竟淨なるが故なり。斯陀含阿那含、漢、辟支佛も不可得なり、〔そは〕畢竟淨なるが故なり。菩薩は不可得なり。〔そは〕畢竟淨なるが故なり。佛は不可得なりそは畢竟淨なるが故なり」。舍利弗、佛に白して言さく「世尊よ何等か是れ畢竟淨なるや。」佛の言はく、「出でず、生ぜず、得ること無く、作すこと無き、是を畢竟淨なりと名く。」
舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、若し是の如く學するを、何等の法を學すと爲すや。」佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、是の如く學せば諸法に於いて、學する所なし。何となれば、舍利弗よ、諸法の相は、凡夫所著の如くならざればなり。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、諸法實相は、云何が有なるや。」佛の言はく、「諸法は所有なし、是の如く有り、是の如く所有なし。是の事を知らざるを名けて無明と爲す。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か所有なく、是の事を知らざるを名けて、無明と爲すや。」佛、舍利弗に告げたまはく、「色受想行識は所有なし、內空、

乃至無法有法空の故に。內空、乃至十八不共法も所有なし。內空、乃至無法有法空の故に。是の中に、凡夫は無明の力を以て、渇愛するが故に、妄見分別して、是れ無明、是れ凡夫と説き、二邊の行に縛せらる。是の人は、諸法の所有なきことを知らず見ずして、憶想分別して色乃至十八不共法に著す。是の人は著するが故に。所有なきの法に於いて、而も顚倒の見を作す。是れ凡夫の知らず、見ざるなり。」「何等をか知らず見ざる。」「色を知らず見ず、乃至十八不共法も亦知らず、見ざるなり。是を以ての故に、凡夫の數に墮す。小兒の如し。是の人は出でず。」「何より出でざるや。」「欲界を出でず、色界を出でず、無色界を出でず。聲聞、辟支佛の法中より出でず。是の人も亦た信ぜず」。「何等をか信ぜざる。」「色の空なることを信ぜず、乃至十八不共法の空なることを信ぜざるなり。是の人は住せず。」「何等をか住せざる。」「檀〈那〉波羅蜜〈多〉に住せず、乃至般若波羅蜜〈多〉に住せず。阿毘跋致地に住せず、乃至十八不共法に住せざるなり。是の因縁を以ての故に、名けて凡夫と爲す。小兒の如し。亦名けて著する者と爲す」。「何等をか著と爲すや。」「色乃至識に著し、眼入乃至意入に著し、眼界乃至意識界に著し、婬怒癡に著し、諸の邪見に著し、四念處に著し。乃至佛道に著するなり。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、是の如き學を作すも、亦般若波羅蜜〈多〉を學せずんば、薩婆若を得ざるや。」佛、舍利弗に語り給はく、「菩薩摩訶薩に、是の如き學を作すも、亦般若波羅蜜〈多〉を學せずんば、薩婆若を得ず。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、亦般若波羅蜜〈多〉を學せざれば、薩婆若を得ざるや。」佛、舍利弗に告げ給はく、「菩薩摩訶薩は、方便なきが故に、想念分別して、般若波羅蜜〈多〉に著し、禪〈那〉波羅蜜〈多〉、毘梨耶波羅蜜〈多〉、羼提波羅蜜〈多〉、尸羅波羅蜜〈多〉、檀〈那〉波羅蜜〈多〉、乃至十八不共法、一切種智に著し、想念分別して著す。是の因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩は、是の如く學するも、亦般若波羅蜜〈多〉を學せずんば、薩婆若を得ず。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、是の如く學するも、般若波羅蜜〈多〉を學せずんば、薩婆若を得ざるや。」

佛、舍利弗に告げ給はく、「菩薩摩訶薩は、是の如く學するも、般若波羅蜜〔多〕を學せずんば、薩婆若を得ず。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、今云何が應に般若波羅蜜〔多〕を學し、薩婆若を得べきや。」佛、舍利弗に告げ給はく、「若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を學する時、般若波羅蜜〔多〕を見ず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、是の如く般若波羅蜜〔多〕を學せば、薩婆若を得ん。〔そは〕不可得なるを以ての故なり。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が不可得と名くるや。」佛の言はく、「諸法内空、乃至無法有法空なるが故なり。」

論 釋して言く。舍利弗は、上に問へり、「但無受三昧を以て疾かに佛を得。更に餘の三昧ありや」と。須菩提に說けり。「更に餘の三昧ありて。疾かに佛を得。是の菩薩は是の三昧を念せず、著せざれば、過去。現在の諸佛は授記したまふ」と。佛讃じて言はく、「善い哉、菩薩摩訶薩は、應に是の如く。般若波羅蜜〔多〕乃至一切の佛法を學すべし」と。是の時、舍利弗は是の念を作さく、「般若波羅蜜〔多〕は是れ空相なり。諸の三昧には種種の分別の相あり。云何が諸の三昧を學する、是を般若波羅蜜〔多〕を學すと爲すや」と。是の故に問ひたてまつりしに。佛、舍利弗に答へ給はく、「是の如く般若波羅蜜〔多〕を學するは。皆な不可得なるを以ての故なり。般若波羅蜜〔多〕の氣分の相は、皆諸の三昧の中に在るを以て、能く是の如く學す。是を般若波羅蜜〔多〕乃至十八不共法を學すと爲す」と。佛は卽ち之を可したまへり。舍利弗は復問ふ、「何等の法か不可得なるや」と。佛は此の中に自ら說きたまはく、「衆生は空なるが故に、畢竟淸淨なるが故に、我は不可得なり。乃至知者、見者、須陀洹乃至

佛も不可得なり。法は空なるが故に、畢竟清淨なるが故に、五衆は不可得なり、乃至十八不共法は不可得なり」と。畢竟清淨とは、不出、不生、不得、不作等なり。因は邊邊に起らざるが故に、名けて不出と爲し、緣は邊邊に起らざるが故に、名けて不生と爲す。定んで、生相は不可得なるが故に、名けて不出、不生と爲し、不出、不生の故に、不可得と名け、不可得なるが故に、無作、無起と名く。是の起作の法は、皆是れ虛誑なり。是の如きを離るるを、畢竟清淨と名く。舍利弗、佛に問ふ、「菩薩は能く是の如く、畢竟眞淨の道を行じて、何の法をか學すと爲し、何の法をか得ると爲すや」と。佛答へたまはく、「能く是の如く學するを、學する所なく、得る所なしと爲す」と。

問うて曰く、(二五)菩薩は是の畢竟空を用つて、六波羅蜜〔多〕、乃至十八不共法を學す。云何が法として、學すべきもの無しと言ふや。答へて曰く、此の中に、佛、自ら說きたまはく、「諸法は凡夫の著する所の如くならず。凡夫の人の心には、無明邪見等の結使ありて、聞く所、見る所、知る所、皆法相に異なり、乃至佛の說法を聞くも、聖道の中、果報の中に於いて、皆著して、道を染汙す」と。(二六)舍利弗、佛に白して言さく、「若し凡夫の人の見る所、皆是れ實ならずんば、今是の諸法は、云何が有なるや」と。佛の言はく、「諸法は所有なし。凡夫の人は所有なき處に於いて、亦以て有と爲す。何となれば、是の凡夫の人は、無明邪見を離るれ

【二五】第一〇問、菩薩は六度乃至十八不共法を學す、今何が故に、法として學する所なしと言ふか。

【二六】舍利弗と佛との、衆生の執著に關する問答。

ば、觀ずる所あること能はざればなり。是を以ての故に、所有なき「處」に著するが故に名けて無明と爲すと說く。譬へば、空拳を以て小兒を誑はすに、小兒は著するが故に、謂つて以て有と爲すが如し。舍利弗、佛に問ふ、「何等の法をか、所有なき「處」に著するが故に無明と名くるや」と。佛答へたまはく、「色、乃至十八不共法なり。是の中、無明の愛の故に、是れ明なり、是れ無明なりと憶想分別し、有邊、無邊に墮して、智慧の明を失す。智慧の明を失するが故に、色の畢竟空にして、所有なきの相を見ず知らず、自ら憶想分別を生じて、乃至識衆、十二入、十八界、十二因緣に著す。或は善法、所謂六波羅蜜「多」、乃至十八不共法を開くも、亦世間の法の如く、憶想分別して著す。聖法も亦是の如し。是を以ての故に、凡夫の數に墮すと名く。小兒の人「の爲」に輕笑せらるるが如く、(二七)「又」人の指を以て月を示すに、愚者は但指を看て、月を看ざるが如し。智者は輕笑して言く。「汝、何ぞ示す者の意を得ざる。指は月を知るの因緣たり。而も更に指を看て、月を知らず」と。諸佛、賢聖は、凡夫の人の爲に、法を說きたまふに、而も凡夫は音聲語言に著して、聖人の意を取らず、實義を得ず。實義を得ざるが故に、還つて實中に於いて著を生ず。佛は今說いて、「凡夫は失する所あるが故に三界を過ぐること能はず、亦二乘を離るること能はず」と言ふ。聖人の意を得ざるが故に、諸法の空を說くを聞いて而も信ぜず、信ぜざるが故に行ぜず、六波羅蜜「多」、乃至十八不共法に住せざるなり。是の如きの功德を失するを以ての故に、名けて

【二七】 月を示す指の譬。

見て、小兒と爲す。是の小兒は、五衆、十二入、十八界、三毒、諸の煩惱に著し、乃至六波羅蜜「多」、十八不共法、阿耨多羅三藐三菩提に皆著す。是の故に名けて著者と爲す。舍利弗問うて謂く、「若し菩薩の是の如く行せば、是を般若波羅蜜「多」を行せずと名く。般若波羅蜜「多」を行せざれば、薩婆若を得ざらん」と。佛、舍利弗を可して言はく、「是の如し、是の如し。即ち爲に因緣を說かん。所謂る新行の菩薩は、方便力なく、是の般若波羅蜜「多」を聞いて憶想し、分別し、尋求して取らんと欲し、是の念を作す、「我は世間の樂を捨つ。復た般若波羅蜜「多」を得ること能はずんば、是を兩失と爲す」と、專ら求めて得んと欲す。或は謂はく、「空を說くは、是れ般若波羅蜜「多」なり」と。或は、「空も亦空なりと說くは、是れ般若波羅蜜「多」なり」と。或は「諸法如實の相を說くは、是れ般若波羅蜜「多」なり」と。是の如く、六十二見、九十八使の煩惱心を用つて、是の般若波羅蜜「多」に著す、乃至一切種智も亦是の如し。是の著心を以て諸法を學すれば、薩婆若を得ること能はず。此と相違する者は、能く般若波羅蜜「多」を行じ、亦能く薩婆若を得。所謂る般若波羅蜜「多」を見ず、行者を見ず、緣法を見ず、見ざるをも亦見ざるなり」と。舍利弗更に見ざるの因緣を問ひたてまつるに、佛答へたまはく、「是の菩薩は十八空に入るが故に、見ざるなり。無智を以ての故に、見ざるにはあらず」と。

大正八年十月三日印刷
大正八年十月六日發行
昭和二年七月十五日再版發行
昭和四年九月十五日三版發行

著作權所有

國譯大藏經　論部第二卷

（岡山製本）
【非賣品】

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者　鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田（五三五番
　　　　（一八三八番
振替東京一八五七二番





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3761

國民文庫刊行會